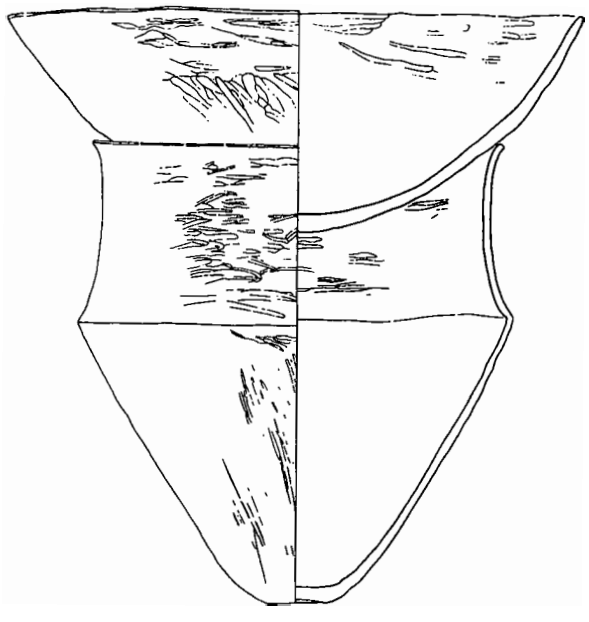
熊本県文化財調査報告　第２０５集

石の本遺跡群Ⅴ

第54回国民体育大会秋季主会場整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書



２００２

熊本県教育委員会

石の本遺跡群遠景

石の本遺跡群近景（H７年度調査区）

縄文時代後・晩期遺構検出状況（46・49区）

縄文時代後・晩期遺構検出状況（39・41・42区）

42－33号埋設土器復元（現場にて）

45－13号埋設土器復元（現場にて）

石の本遺跡群出土玉類 1

石の本遺跡群出土玉類 2

石の本遺跡群出土土偶

石の本遺跡群出土石刀

熊本県文化財調査報告　第２０５集

石の本遺跡群Ⅴ

第54回国民体育大会秋季主会場整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

２００２

熊本県教育委員会

序　文

熊本県教育委員会は、熊本県土木部の依頼により、平成６年度から平成９年度までの４年間を費やし、平成11年度に開催された「くまもと未来国体」主会場建設に伴う埋蔵文化財の発掘調査を実施してまいりました。

小山山周辺には、石原亀甲遺跡を初め、白川対岸にある梅ノ木遺跡、六地蔵遺跡等の集落遺跡が点在しており、多くの文化財が確認されています。

今回報告する石の本遺跡群では、旧石器時代から中世にかけての多くの遺構・遺物が発見されています。遺構・遺物の量が多いため、平成10年度からそれぞれの時代毎に報告書を刊行してきました。本書はその最後を飾るもので、縄文時代後・晩期の遺物・遺構についての報告となりました。

これらが、県民の文化財に対する理解とさらなる文化財保護への一助となることを期待いたします。

最後になりましたが、本調査を実施するにあたり、県土木部都市計画課、熊本土木事務所、国体推進局、並びにその他の関係者の方々には、文化財保護に対して多大なる御配慮を賜りました。ここに深い感謝の意を表します。

平成14年３月31日

熊本県教育長　田　中　力　男

例言

1　本書は、熊本県熊本市平山町字石の本等に所在している石の本遺跡群の調査報告書である。

2　遺跡名については、熊本市及び県の遺跡地図では「平山石の本遺跡」となっているが、実際は幾つかの字にまたがっており、また調査面積が広く複数の文化層が分散して存在し、ひとつの遺跡として捉え難いこと、調査開始当時から一貫して「石の本遺跡」という名称を用いており、大幅な名称の変更は混乱を招きかねないことから、本書では敢えて「石の本遺跡群」という名称を用いている。

3　調査は、第54回国民体育大会秋季主会場整備事業（熊本県民総合運動公園拡張整備）に伴う事前調査として、熊本県土木部の依頼を受けて熊本県教育庁文化課が実施したもので、平成６年度から平成９年度までの４年間を費やした。

4　調査期間が複数年にわたっているため、石の本遺跡群の調査報告書は、時代や調査区毎に分冊して刊行するものとする。ちなみに本書は縄文時代後・晩期について報告したものである。

5　本書の執筆は、第Ⅳ章を㈱ズコ
た。

6　測量図の一部は、㈱

7　本書で用いている調査区位置図は、熊本土木事務所から提供された平面図を加筆・転用した。

8　遺物の実測は、中村の他に原口美希、前田佳代子、田中智宏、梅田亜耶、堤英介、緒方智子、井上裕美、貞苅美津子、福島敬子、松本裕子、宮崎典子、山田友子、渡辺いわ子が行った。拓本は小山正子、木村雅子、金子美代子、貞苅が行った。また製図は梅田、井上、貞苅、福島、松本、河原京子、佐藤淳子、濱崎清子が行った。

9　遺構の写真撮影は各現場の調査員が行い、遺物の写真撮影は中村が行った。

10　本書の編集は、熊本県教育庁文化課で行い、中村が担当した。

11　本書に掲載した資料は、熊本県文化財収蔵庫で保管している。

凡例

1　調査区の割付けは、４級基準点を基に平面直角座標系の第Ⅱ系における座標値（Ｘ，Ｙ）＝（－18700，－19000）を起点とし、遺跡独自の座標値（石の本座標値）を設定して行っている。なお座標値（Ｘ，Ｙ）と石の本座標値（ｘ，ｙ）とは下記の計算式で変換される。

ｘ＝Ｘ＋18700　ｙ＝Ｙ＋19000

2　本書で使用している方位は、調査区位置図や測量図においては座標軸を基準とした北を指しており、遺構図の方位も同様である。

3　現地での住居址の実測は、20分の１の縮尺で行った。また報告書に掲載した住居址の実測図は80分の１、炉跡は40分の１に統一した。撹乱壙は１点破線で、トレンチ坑は２点破線で表現し、遺構ラインを撹乱壙やトレンチ坑が切っている場合は点線で表現した。また住居址内の焼土にはスクリーントーンを貼り、硬化面は太目の１点破線で表現した。なお埋設土器は10分の１、その他の遺構は80分の１にそれぞれ統一した。

4　遺物の実測は原寸で行い、報告書に掲載した実測図の縮尺は土器を４分の１、それ以外の遺物の縮尺は以下のとおりである。

石器（Ａ）	Ｓ＝１／１	石器（Ｂ）	Ｓ＝１／２	石器（Ｃ）	Ｓ＝１／３
石器（Ｄ）	Ｓ＝１／４	玉類	Ｓ＝１／１	土偶	Ｓ＝１／２

土・石製品　　S＝1／2

※石器（A）石鏃・楔形・使用痕・二次加工（4cm未満）

石器（B）異形石器・スクレイパー・石核・石錘・石匙・石刃・二次加工（4cm以上）・十字形石器

石器（C）石庖丁形・打製石斧（円盤形・分銅形含み）・磨製石斧・石錘・礫器・敲石・磨石・砥石・凹石・石刀

石器（D）台石・石皿

5　出土遺物については基本的に遺構の種類毎に番号をつけ、さらに包含層遺物でも番号を設定している。それらは巻末の出土遺物観察表の番号と一致している。

本文目次

口絵

序文

例言

凡例

第Ⅰ章　調査の契機と経過

第1節　調査に至る経緯・調査組織 …… 1

第2節　調査の経過 …… 2

第Ⅱ章　周辺の地理的・歴史的環境

第1節　地理的環境 …… 6

第2節　歴史的環境 …… 6

第Ⅲ章　調査の成果

第1節　遺跡概要 …… 13

第2節　遺構・遺物概要 …… 13

第3節　各調査区の成果 …… 15

1　10区

埋設土器遺構 …… 15

2　15区

竪穴住居址 …… 18

3　30区

(1) 竪穴住居址 …… 27

(2) その他 …… 35

4　31区

(1) 竪穴住居址 …… 37

(2) その他 …… 39

5　35区

竪穴住居址 …… 40

6　36区

竪穴住居址 …… 43

7　38区北

竪穴住居址 …… 47

8　38区南

竪穴住居址 …… 53

9　39区

(1) 竪穴住居址 …… 59

(2) 埋設土器遺構 …… 67

(3) その他 …… 68

10　40区

(1) 竪穴住居址 …… 73

(2) 埋設土器遺構 …… 73

11　41区

(1) 竪穴住居址 …… 77

(2) 埋設土器遺構 …… 82

12　42・43区
(1) 竪穴住居址 …… 88
(2) 埋設土器遺構 …… 125
(3) その他 …… 148
13　45区
(1) 竪穴住居址 …… 152
(2) 埋設土器遺構 …… 158
14　46区
(1) 竪穴住居址 …… 162
(2) 埋設土器遺構 …… 187
(3) その他 …… 192
15　47区
(1) 竪穴住居址 …… 193
(2) その他 …… 195
16　49区
(1) 竪穴住居址 …… 196
(2) 埋設土器遺構 …… 212
(3) その他 …… 216
第4節　出土遺物
1　土器 …… 217
2　石器 …… 219
3　その他 …… 228

第Ⅳ章　自然化学分析
第1節　縄文時代後・晩期
1　石の本遺跡群から出土した土器に残存する脂肪の分析 …… 237
2　石の本遺跡群の植物珪酸体分析 …… 249
3　石の本遺跡群における種実同定 …… 270
4　石の本遺跡群における放射性炭素年代測定 (1) …… 273
第2節　縄文時代早・前期
1　石の本遺跡群における樹種同定 …… 275
2　石の本遺跡群における放射性炭素年代測定 (2) …… 276

第Ⅴ章　総括
第1節　遺構
1　住居址 …… 279
2　埋設土器 …… 280
3　その他・集落 …… 281
第2節　出土遺物
1　土器 …… 281
2　石器 …… 282
3　その他 …… 283
第3節　環境 …… 284

遺構一覧表 …… 287
出土遺物観察表 …… 289
報告書抄録 …… 300
図版

挿図目次

第１図　周辺遺跡分布図 …… 8
第２図　調査区位置図及び割付け図 …… 14
第３図　10区遺構配置図 …… 16
第４図　10区基本層序図 …… 16
第５図　10－01号埋設土器実測図 …… 17
第６図　15区基本層序図 …… 18
第７図　15区遺構配置図 …… 19
第８図　15－01号住居址遺構実測図 …… 20
第９図　15－02号住居址遺構実測図 …… 20
第10図　15－01号住居址出土遺物実測図 …… 21
第11図　15－01・02号住居址出土遺物実測図 … 22
第12図　15－04号住居址遺構実測図 …… 23
第13図　15－04号住居址出土遺物実測図１ …… 23
第14図　15－04号住居址出土遺物実測図２ …… 24
第15図　15－05号住居址遺構実測図 …… 25
第16図　15－05号住居址出土遺物実測図 …… 26
第17図　30区基本層序図 …… 27
第18図　30・31区遺構配置図 …… 28
第19図　30－01号住居址遺構実測図 …… 29
第20図　30－02号住居址遺構実測図 …… 30
第21図　30－02号住居址出土遺物実測図 …… 30
第22図　30－03号住居址遺構実測図 …… 31
第23図　30－03号住居址出土遺物実測図１ …… 32
第24図　30－03号住居址出土遺物実測図２ …… 33
第25図　30－04号住居址遺構実測図 …… 34
第26図　30－04号住居址出土遺物実測図 …… 34
第27図　30－05号住居址遺構実測図 …… 35
第28図　30－05号住居址出土遺物実測図 …… 35
第29図　30－01号円形周溝遺構実測図 …… 36
第30図　30－01号円形周溝出土遺物実測図 …… 36
第31図　31区基本層序図 …… 37
第32図　31－05・09号住居址遺構実測図 …… 38
第33図　31－05号住居址出土遺物実測図 …… 38
第34図　31－01号円形周溝遺構実測図 …… 39
第35図　35区基本層序図 …… 40
第36図　35・36区遺構配置図 …… 41
第37図　35－01号住居址遺構実測図 …… 42
第38図　35－02号住居址遺構実測図 …… 42
第39図　36区基本層序図 …… 43
第40図　36－05号住居址遺構実測図 …… 44
第41図　36－05号住居址出土遺物実測図１ …… 44
第42図　36－05号住居址出土遺物実測図２ …… 45
第43図　36－05号住居址出土遺物実測図３ …… 46
第44図　38区北基本層序図 …… 47
第45図　38区北・南・39区遺構配置図 …… 48
第46図　38－01号住居址遺構実測図 …… 49
第47図　38－01号住居址出土遺物実測図 …… 49
第48図　38－02号住居址遺構実測図 …… 50
第49図　38－02号住居址出土遺物実測図１ …… 51
第50図　38－02号住居址出土遺物実測図２ …… 52
第51図　38区南基本層序図 …… 53
第52図　38－12号住居址遺構実測図 …… 55
第53図　38－13号住居址遺構実測図 …… 55
第54図　38－13号住居址出土遺物実測図 …… 56
第55図　38－14号住居址遺構実測図 …… 57
第56図　38－14号住居址出土遺物実測図 …… 57
第57図　38－16号住居址遺構実測図 …… 58
第58図　38－16号住居址出土遺物実測図 …… 58
第59図　39区基本層序図 …… 59
第60図　39－01号住居址遺構実測図 …… 60
第61図　39－01号住居址出土遺物実測図１ …… 61
第62図　39－01号住居址出土遺物実測図２ …… 62
第63図　39－01号住居址出土遺物実測図３ …… 63
第64図　39－01号住居址出土遺物実測図４ …… 64
第65図　39－02号住居址遺構実測図 …… 65
第66図　39－02号住居址出土遺物実測図 …… 65
第67図　39－06号住居址遺構実測図 …… 66
第68図　39－06号住居址出土遺物実測図 …… 66
第69図　39－23号住居址遺構実測図 …… 67
第70図　39－23号住居址出土遺物実測図 …… 67
第71図　39－09号埋設土器遺構実測図 …… 69
第72図　39－09号埋設土器出土遺物実測図 …… 69
第73図　39－12号埋設土器遺構実測図 …… 70
第74図　39－12号埋設土器出土遺物実測図 …… 71
第75図　39－08号円形周溝遺構実測図 …… 72
第76図　40区基本層序図 …… 73

第77図　40～43区遺構配置図 …… 74
第78図　40－01号住居址遺構実測図 …… 75
第79図　40－01号住居址出土遺物実測図 …… 75
第80図　40－03号埋設土器実測図 …… 76
第81図　41区基本層序図 …… 77
第82図　41－03号住居址遺構実測図 …… 78
第83図　41－03号住居址出土遺物実測図１ …… 79
第84図　41－03号住居址出土遺物実測図２ …… 80
第85図　41－03号住居址出土遺物実測図３ …… 81
第86図　41－04号住居址遺構実測図 …… 82
第87図　41－04号住居址出土遺物実測図 …… 83
第88図　41－02号埋設土器実測図 …… 84
第89図　41－05号埋設土器実測図 …… 86
第90図　41－06号埋設土器実測図 …… 87
第91図　42区基本層序図 …… 88
第92図　42－05号住居址遺構実測図 …… 89
第93図　42－05号住居址出土遺物実測図 …… 89
第94図　42－06号住居址遺構実測図 …… 90
第95図　42－06号住居址出土遺物実測図 …… 91
第96図　42－08号住居址遺構実測図 …… 92
第97図　42－08号住居址出土遺物実測図１ …… 92
第98図　42－08号住居址出土遺物実測図２ …… 93
第99図　42－08号住居址出土遺物実測図３ …… 94
第100図　42－12・14号住居址遺構実測図 …… 96
第101図　42－12号住居址出土遺物実測図１ …… 96
第102図　42－12号住居址出土遺物実測図２ …… 97
第103図　42－13号住居址遺構実測図 …… 98
第104図　42－13号住居址出土遺物実測図 …… 98
第105図　42－14号住居址出土遺物実測図 …… 99
第106図　42－25号住居址遺構実測図 …… 99
第107図　42－25号住居址出土遺物実測図 …… 100
第108図　42－27号住居址遺構実測図 …… 101
第109図　42－27号住居址出土遺物実測図１ …… 102
第110図　42－27号住居址出土遺物実測図２ …… 103
第111図　42－28号住居址遺構実測図 …… 104
第112図　42－28号住居址出土遺物実測図１ …… 104
第113図　42－28号住居址出土遺物実測図２ …… 105
第114図　42－30号住居址遺構実測図 …… 106
第115図　42－30号住居址出土遺物実測図１ …… 107
第116図　42－30号住居址出土遺物実測図２ …… 108
第117図　42－31号住居址遺構実測図 …… 109
第118図　42－31号住居址出土遺物実測図１ …… 110
第119図　42－31号住居址出土遺物実測図２ …… 111
第120図　42－32号住居址遺構実測図 …… 112
第121図　42－35号住居址遺構実測図 …… 112
第122図　42－32号住居址出土遺物実測図１ …… 113
第123図　42－32号住居址出土遺物実測図２ …… 114
第124図　42－35号住居址出土遺物実測図 …… 115
第125図　42－38号住居址遺構実測図 …… 116
第126図　42－38号住居址出土遺物実測図 …… 117
第127図　42－39号住居址遺構実測図 …… 119
第128図　42－39号住居址出土遺物実測図 …… 119
第129図　42－42号住居址遺構実測図 …… 120
第130図　42－42号住居址出土遺物実測図１ …… 120
第131図　42－42号住居址出土遺物実測図２ …… 121
第132図　42－51号住居址遺構実測図 …… 122
第133図　42－51号住居址出土遺物実測図 …… 123
第134図　42－54号住居址遺構実測図 …… 124
第135図　42－54号住居址出土遺物実測図 …… 124
第136図　42－01号埋設土器実測図 …… 126
第137図　42－02号埋設土器実測図 …… 127
第138図　42－03号埋設土器実測図 …… 129
第139図　42－04号埋設土器実測図 …… 131
第140図　42－16号埋設土器実測図 …… 132
第141図　42－17号埋設土器実測図 …… 133
第142図　42－18号埋設土器実測図 …… 134
第143図　42－19号埋設土器実測図 …… 135
第144図　42－20号埋設土器実測図 …… 137
第145図　42－21号埋設土器実測図 …… 139
第146図　42－22号埋設土器実測図 …… 140
第147図　42－26号埋設土器実測図 …… 141
第148図　42－29号埋設土器実測図 …… 143
第149図　42－33号埋設土器遺構実測図 …… 144
第150図　42－33号埋設土器出土遺物実測図 …… 145
第151図　42－34・43号埋設土器遺構実測図 …… 147
第152図　42－34・43号埋設土器出土遺物実測図… 148
第153図　42－57号埋設土器遺構実測図 …… 149
第154図　42－07号土壙遺構実測図 …… 149
第155図　42－47号円形周溝遺構実測図 …… 149
第156図　42－07号土壙出土遺物実測図１ …… 150

第157図　42－07号土壙出土遺物実測図２ …… 151
第158図　45区基本層序図 …… 152
第159図　45区遺構配置図 …… 153
第160図　45－05号住居址遺構実測図 …… 154
第161図　45－05号住居址出土遺物実測図 …… 154
第162図　45－07・09・10号住居址遺構実測図 … 156
第163図　45－09号住居址出土遺物実測図 …… 156
第164図　45－13号住居址遺構実測図 …… 157
第165図　45－13号住居址出土遺物実測図 …… 157
第166図　45－13号埋設土器遺構実測図 …… 158
第167図　45－13号埋設土器出土遺物実測図 …… 159
第168図　45－14号埋設土器遺構実測図 …… 160
第169図　45－14号埋設土器出土遺物実測図 …… 161
第170図　46区基本層序図 …… 162
第171図　46・47・49区遺構配置図 …… 163
第172図　46－02号住居址遺構実測図 …… 164
第173図　46－02号住居址出土遺物実測図 …… 165
第174図　46－03号住居址遺構実測図 …… 166
第175図　46－03号住居址出土遺物実測図 …… 166
第176図　46－04号住居址遺構実測図 …… 167
第177図　46－04号住居址出土遺物実測図 …… 167
第178図　46－06号住居址遺構実測図 …… 169
第179図　46－06号住居址出土遺物実測図 …… 169
第180図　46－07号住居址遺構実測図 …… 170
第181図　46－07号住居址出土遺物実測図 …… 170
第182図　46－08号住居址遺構実測図 …… 171
第183図　46－08号住居址出土遺物実測図 …… 172
第184図　46－09号住居址遺構実測図 …… 173
第185図　46－10号住居址遺構実測図 …… 173
第186図　46－09号住居址出土遺物実測図 …… 174
第187図　46－10号住居址出土遺物実測図 …… 175
第188図　46－11～13号住居址遺構実測図 …… 177
第189図　46－11号住居址出土遺物実測図 …… 178
第190図　46－12号住居址出土遺物実測図 …… 179
第191図　46－13号住居址出土遺物実測図 …… 180
第192図　46－18号住居址遺構実測図 …… 181
第193図　46－18号住居址出土遺物実測図１ …… 181
第194図　46－18号住居址出土遺物実測図２ …… 182
第195図　46－19号住居址遺構実測図 …… 183
第196図　46－19号住居址出土遺物実測図１ …… 184
第197図　46－19号住居址出土遺物実測図２ …… 185
第198図　46－20号住居址遺構実測図 …… 186
第199図　46－20号住居址出土遺物実測図 …… 186
第200図　46－03号埋設土器遺構実測図 …… 187
第201図　46－04号埋設土器実測図 …… 189
第202図　46－05号埋設土器実測図 …… 190
第203図　46－06号埋設土器実測図 …… 191
第204図　46－01号円形周溝遺構実測図 …… 192
第205図　47区基本層序図 …… 193
第206図　47－01・02号住居址遺構実測図 …… 194
第207図　47－01・02号住居址出土遺物実測図 … 194
第208図　47－06号円形周溝遺構実測図 …… 195
第209図　49区基本層序図 …… 196
第210図　49－01号住居址遺構実測図 …… 197
第211図　49－01号住居址出土遺物実測図 …… 197
第212図　49－05号住居址遺構実測図 …… 198
第213図　49－67号住居址遺構実測図 …… 199
第214図　49－67号住居址出土遺物実測図１ …… 199
第215図　49－67号住居址出土遺物実測図２ …… 200
第216図　49－68・69号住居址遺構実測図 …… 202
第217図　49－68号住居址出土遺物実測図１ …… 202
第218図　49－68号住居址出土遺物実測図２ …… 203
第219図　49－69号住居址出土遺物実測図 …… 204
第220図　49－77号住居址遺構実測図 …… 205
第221図　49－77号住居址出土遺物実測図 …… 206
第222図　49－81号住居址遺構実測図 …… 207
第223図　49－81号住居址出土遺物実測図 …… 207
第224図　49－82号住居址遺構実測図 …… 208
第225図　49－82号住居址出土遺物実測図 …… 209
第226図　49－83号住居址遺構実測図 …… 210
第227図　49－99号住居址遺構実測図 …… 210
第228図　49－83号住居址出土遺物実測図 …… 211
第229図　49－99号住居址出土遺物実測図 …… 212
第230図　49－52号埋設土器遺構実測図 …… 213
第231図　49－52号埋設土器出土遺物実測図 …… 214
第232図　49－84号埋設土器実測図 …… 215
第233図　49－66号円形周溝遺構実測図 …… 216
第234図　包含層出土遺物実測図１ …… 220
第235図　包含層出土遺物実測図２ …… 221
第236図　包含層出土遺物実測図３ …… 222

第237図　包含層出土遺物実測図４ …… 223
第238図　包含層出土遺物実測図５ …… 224
第239図　包含層出土遺物実測図６ …… 229
第240図　包含層出土遺物実測図７ …… 231
第241図　包含層出土遺物実測図８ …… 232
第242図　包含層出土遺物実測図９ …… 233
第243図　包含層出土遺物実測図10 …… 234
第244図　包含層出土遺物実測図11 …… 235
第245図　包含層出土遺物実測図12 …… 236
第246図　地形復元図（縄文後・晩期） …… 285
第247図　全体遺構配置図（縄文後・晩期） …… 286

図版目次

図版１　10区全景（東から）
図版２　15区全景（東から）
図版３　30区全景（東から）
図版４　31区全景（北から）
図版５　35区全景（南から）
図版６　36区全景（西から）
図版７　38区北住居址遠景（北から）
図版８　38区南全景（北西から）
図版９　39区全景（南から）
図版10　40区全景（南から）
図版11　45区全景（南から）
図版12　47区遺構確認（南から）
図版13　10－01号埋設土器（北から）
図版14　15－01号住居址（東から）
図版15　15－02号住居址（西から）
図版16　15－04号住居址（南東から）
図版17　15－05号住居址（西から）
図版18　30－01号住居址（東から）
図版19　30－02号住居址（東から）
図版20　30－03号住居址（東から）
図版21　30－04号住居址（東から）
図版22　30－05号住居址（東から）
図版23　30－01号円形周溝（東から）
図版24　31－05・09号住居址（南から）
図版25　31－01号円形周溝（北東から）
図版26　35－01号住居址（南から）
図版27　35－02号住居址（北から）
図版28　36－05号住居址（東から）
図版29　38－01号住居址（南から）
図版30　38－02号住居址（南から）
図版31　38－12号住居址（西から）
図版32　38－13号住居址（南から）
図版33　38－14号住居址（東から）
図版34　38－16号住居址（北から）
図版35　39－01号住居址（北から）
図版36　39－02号住居址（東から）
図版37　39－06号住居址（東から）
図版38　39－23号住居址（東から）
図版39　39－09号埋設土器（北から）
図版40　39－12号埋設土器（南から）
図版41　39－08号円形周溝（東から）
図版42　40－01号住居址（北から）
図版43　40－03号埋設土器（東から）
図版44　41－03号住居址（北から）
図版45　41－04号住居址（北から）
図版46　41－02号埋設土器（南から）
図版47　41－05号埋設土器（北東から）
図版48　41－06号埋設土器（南から）
図版49　42－05号住居址（南から）
図版50　42－06号住居址（東から）
図版51　42－08号住居址（南から）
図版52　42－12～14号住居址（西から）
図版53　42－25号住居址（北から）
図版54　42－27号住居址（北から）
図版55　42－28号住居址（南から）
図版56　42－30・35号住居址（東から）
図版57　42－31号住居址（東から）
図版58　42－32号住居址（北から）
図版59　42－38号住居址（北から）
図版60　42－42号住居址（東から）
図版61　42－51号住居址（東から）
図版62　42－54号住居址（西から）
図版63　42－01号埋設土器（南から）
図版64　42－02号埋設土器（北から）

図版65　42－03号埋設土器（東から）
図版66　42－04号埋設土器（南から）
図版67　42－16号埋設土器掘り方（南から）
図版68　42－17号埋設土器（南から）
図版69　42－18・19号埋設土器（東から）
図版70　42－20号埋設土器（西から）
図版71　42－21号埋設土器（西から）
図版72　42－22号埋設土器（西から）
図版73　42－26号埋設土器（西から）
図版74　42－29号埋設土器（南から）
図版75　42－33号埋設土器（北から）
図版76　42－34号埋設土器（南から）
図版77　42－43号埋設土器（東から）
図版78　42－57号埋設土器（東から）
図版79　42－07号土壙（南から）
図版80　42－47号円形周溝（南から）
図版81　45－05号住居址（南から）
図版82　45－07号住居址（南から）
図版83　45－09・10号住居址（南から）
図版84　45－13号住居址（南から）
図版85　45－13号埋設土器（西から）
図版86　45－14号埋設土器（西から）
図版87　46－02・03号住居址（東から）
図版88　46－04号住居址（東から）
図版89　46－06号住居址（南から）
図版90　46－07号住居址（南東から）
図版91　46－08号住居址（東から）
図版92　46－09号住居址（北から）
図版93　46－10号住居址（北東から）
図版94　46－11～13号住居址（南から）
図版95　46－18号住居址（南から）
図版96　46－19号住居址（南東から）
図版97　46－20号住居址（南から）
図版98　46－04号埋設土器（上から）
図版99　46－05号埋設土器（上から）
図版100　46－06号埋設土器（東から）
図版101　46－01号円形周溝（西から）
図版102　47－01・02号住居址（南西から）
図版103　49－05号住居址（南から）
図版104　49－67号住居址（南から）
図版105　49－68・69号住居址（南から）
図版106　49－81号住居址（南から）
図版107　49－77・82・83号住居址（南から）
図版108　49－99号住居址（南から）
図版109　49－52号埋設土器（東から）
図版110　49－84号埋設土器（南西から）
図版111　49－66号円形周溝（南東から）
図版112　15－04号住居址出土遺物１
図版113　15－04号住居址出土遺物２
図版114　30－03号住居址出土遺物１
図版115　30－03号住居址出土遺物２
図版116　36－05号住居址出土遺物１
図版117　36－05号住居址出土遺物２
図版118　36－05号住居址出土遺物３
図版119　38－02号住居址出土遺物
図版120　38－16号住居址出土遺物
図版121　39－01号住居址出土遺物１
図版122　39－01号住居址出土遺物２
図版123　39－01号住居址出土遺物３
図版124　41－03号住居址出土遺物１
図版125　41－03号住居址出土遺物２
図版126　41－03号住居址出土遺物３
図版127　41－03号住居址出土遺物４
図版128　42－08号住居址出土遺物１
図版129　42－08号住居址出土遺物２
図版130　42－32号住居址出土遺物
図版131　45－13号住居址出土遺物１
図版132　45－13号住居址出土遺物２
図版133　46－12号住居址出土遺物
図版134　46－19号住居址出土遺物１
図版135　46－19号住居址出土遺物２
図版136　46－19号住居址出土遺物３
図版137　49－67号住居址出土遺物
図版138　10－01号埋設土器出土遺物
図版139　39－09号埋設土器出土遺物
図版140　39－12号埋設土器出土遺物
図版141　40－03号埋設土器出土遺物
図版142　41－02号埋設土器出土遺物
図版143　41－05号埋設土器出土遺物
図版144　41－06号埋設土器出土遺物

図版145　42－01号埋設土器出土遺物
図版146　42－02号埋設土器出土遺物
図版147　42－03号埋設土器出土遺物
図版148　42－04号埋設土器出土遺物
図版149　42－16号埋設土器出土遺物
図版150　42－17号埋設土器出土遺物
図版151　42－18号埋設土器出土遺物
図版152　42－19号埋設土器出土遺物
図版153　42－20号埋設土器出土遺物
図版154　42－21号埋設土器出土遺物
図版155　42－22号埋設土器出土遺物
図版156　42－26号埋設土器出土遺物
図版157　42－29号埋設土器出土遺物
図版158　42－33号埋設土器出土遺物
図版159　42－34号埋設土器出土遺物
図版160　42－43号埋設土器出土遺物
図版161　45－13号埋設土器出土遺物
図版162　45－14号埋設土器出土遺物
図版163　46－04号埋設土器出土遺物
図版164　46－05号埋設土器出土遺物
図版165　46－06号埋設土器出土遺物
図版166　49－52号埋設土器出土遺物
図版167　49－84号埋設土器出土遺物
図版168　包含層出土遺物（注口土器）
図版169　包含層出土遺物（打製石斧１）
図版170　包含層出土遺物（打製石斧２）
図版171　包含層出土遺物（打製石斧３）
図版172　包含層出土遺物（磨製石斧）
図版173　包含層出土遺物（石鏃）
図版174　包含層出土遺物（石匙・スクレイパー）
図版175　包含層出土遺物（石錐・穂摘具・石鎌）
図版176　包含層出土遺物（十字形石器・石錘）
図版177　包含層出土遺物（砥石・軽石）
図版178　包含層出土遺物（異形石器）
図版179　包含層出土遺物（土製品１）
図版180　包含層出土遺物（土製品２）
図版181　包含層出土遺物（焼成粘土塊）

表目次

第１表　平成６年度調査行程 …… 3
第２表　平成７年度調査行程 …… 4
第３表　平成８年度調査行程 …… 5
第４表　整理作業行程 …… 5
第５表　周辺遺跡一覧 …… 9
第６表　遺構一覧表（竪穴住居址）…… 287
第７表　遺構一覧表（埋設土器）…… 288
第８表　遺構一覧表（その他の遺構）…… 288
第９表　土器観察表 …… 289
第10表　石器観察表 …… 293
第11表　その他の遺物観察表 …… 297
第12表　石の本遺跡群石器組成グラフ …… 299

第Ⅰ章　調査の契機と経過

第1節　調査に至る経緯・調査組織

調査に至る経緯については、既刊の「石の本遺跡群Ⅰ～Ⅳ」で触れているため、割愛する。

調査組織

※　調査主体・調査責任者・調査総括・調査担当については「石の本遺跡群Ⅰ～Ⅳ」で触れているため、割愛する。

報告書責任者	桑山　裕好	（文化課長）	平成8年
	豊田　貞二	（首席教育審議員・文化課長）	平成10・11年
	阪井　大文	（文化課長）	平成12・13年
報告書総括	丸山　秀人	（教育審議員・課長補佐）	平成8年
	松本　健郎	（課長補佐・文化財調査第1係長）	平成10年
	島津　義昭	（主幹・文化財調査第2係長）	平成8年
		（課長補佐）	平成11～13年
	江本　　直	（主幹・文化財調査第2係長）	平成11・12年
	木崎　康弘	（文化財調査第2係長）	平成13年
報告書担当	廣田　静学	（文化財保護主事）	平成8・10年
	池田　朋生	（主任学芸員）	平成8・10年
	中村　幸弘	（学芸員）	平成11～13年
	田中　智宏	（嘱託）	平成11年
	原口　美希	（嘱託）	平成12年
	前田佳代子	（嘱託）	平成12年
	梅田　亜耶	（嘱託）	平成12・13年
報告書事務	渕上　重喜	（教育審議員）	平成8年
	川上　康治	（課長補佐）	平成10～12年
	小田　信也	（課長補佐）	平成13年
	江尻　靖子	（総務係長）	平成8年
	小斎　久代	（総務係長）	平成10・11年
	中村　幸宏	（主幹・総務係長）	平成12・13年
	高宮　優美	（参事）	平成8年
	廣瀬　泰之	（参事）	平成11～13年
	岸本　誠司	（主事）	平成8年
	川口　久夫	（主事）	平成10・11年
	杉村　輝彦	（主事）	平成12・13年

専門調査員（敬称略、順不同）

賀川光夫（大分県考古学会会長）　三島　格（肥後考古学会長）　橘　昌信（別府大学文学部教授）　戸沢充則（明治大学文学部教授）　甲元眞之（熊本大学文学部教授）　松藤和人（同志社大学文学部助教授）　佐藤宏之（東京都埋蔵文化財センター主任研究員）　長谷義隆（熊本大学理学部助教授）

調査協力者（敬称略、順不同）

江坂輝彌（明治大学名誉教授）　坪井清足（財団法人大阪府文化財調査研究センター理事長）　渡辺誠（名古屋大学文学部教授）　安斎正人（東京大学助手）　小畑弘巳（熊本大学文学部助教授）　村上恭通（愛媛大学文学部助教授）　宮本一夫（九州大学助教授）　清田純一（城南町教育委員会）　鶴嶋俊彦　和田好史（人吉市教育委員会）　萩原博文（平戸市教育委員会）　高木恭二（宇土市教育委員会）　小南裕一（山口県埋蔵文化財センター）　大坪志子（熊本大学助手）　熊本大学文学部考古学研究室　愛媛大学文学部考古学研究室　福岡大学文学部考古学研究室　九州旧石器文化研究会　熊本市教育委員会文化財課　菊陽町教育委員会他

第２節　調査の経過

調査は平成６年４月から平成10年３月までの４年間を費やした。このうち本書で取り扱う縄文時代後・晩期に関わる期間は、平成６年４月から平成８年７月までのおよそ２年４ヶ月である。本書を始めとする石の本遺跡群の報告者が時代毎に報告しているため、これまで既刊の報告書に掲載されていない調査区も少なからず存在する。そのため調査期間が長期に及ぶものの、各年度における全調査区の調査経過を記することでこれに代えることとする。（第１～３表）

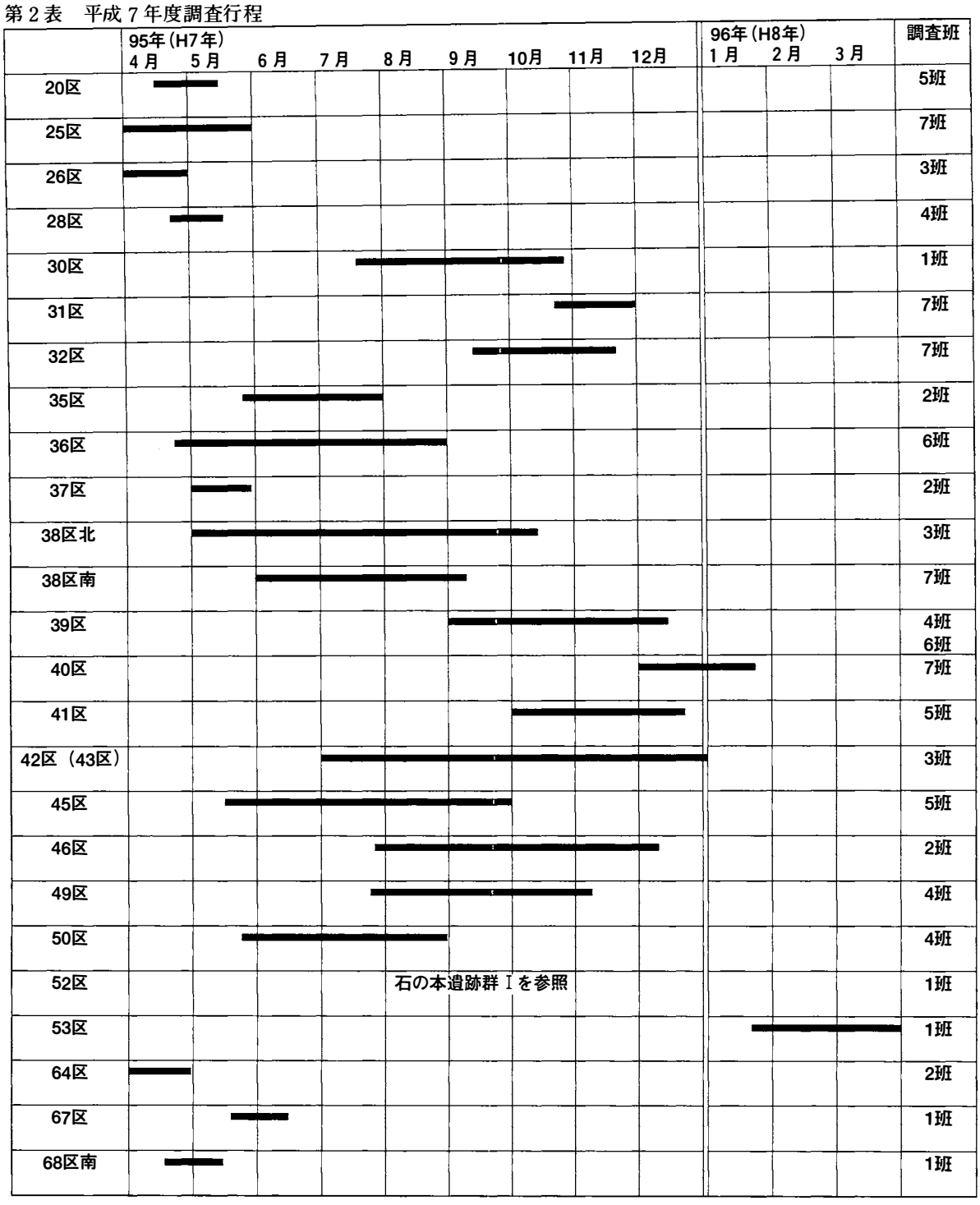
報告書作成は、平成８年度から遺物の水洗を現場事務所で始めたが、諸般の事情により、平成９年度は54・55区の調査と「石の本遺跡群Ⅱ」の整理作業に専念するため、整理作業を中止せざるを得なかった。その後平成10年度からは作業を再開している。そういった経緯があるため、平成８年度から平成13年度までの整理作業の経過は、平成９年度を除いた形で記しておく。（第４表）

第1表　平成6年度調査行程

	94年(H6年) 4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	95年(H7年) 1月	2月	3月	調査班
1区					石の本遺跡群Ⅰを参照								1班
2区													1班
3区													1班
4区													2班
5区													3班
8区													3班
9区													2班
10区													2班
11区													3班
12区													3班
13区													2班
14区													1班
15区													1班
16区													1班
17区(18・19区)													1班
17区西													2班
21区													2班
22区													4班
23区													4班
24区													4班

平成6年度調査班編成（敬称略、五十音順）
総轄　江本直
1班　廣田静学　矢野裕介
2班　青木勝士　宮崎敬士
3班　池田朋生　亀田学
4班　亀田学（後半3班から分離・独立）

第２表　平成７年度調査行程



平成7年度調査班編成（敬称略）

総轄　　江本直
１班　　廣田静学　阿南亨
２班　　青木勝士　帆足俊文
３班　　池田朋生　北原美和子
４班　　亀田学　荒木聖子　三好伴典
５班　　三木ますみ　宮崎敬士
６班　　中村幸弘　矢野裕介
７班　　坂田和弘　池本利直　山田大輔

第3表　平成8年度調査行程

	96年(H8年) 4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	97年(H9年) 1月	2月	3月	調査班
47区													※
54区					石の本遺跡群Ⅰ・Ⅳを参照								※
55区					石の本遺跡群Ⅰ・Ⅳを参照								※
56区													※

※　平成8年度からは調査班が1つになったため、省略した。
調査班　　坂田和弘　廣田静学　池田朋生　中村幸弘　小谷桂一郎

第4表　整理作業行程

	96年(H8年) 4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	97年(H9年) 1月	2月	3月	担当
水洗・注記													廣田 池田
接合													廣田 池田
図面整理													池田

	98年(H10年) 4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	99年(H11年) 1月	2月	3月	担当
遺物選別													廣田 池田
図面整理													廣田

	99年(H11年) 4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	2000年(H12年) 1月	2月	3月	担当
接合													中村
図面整理													中村

	2000年(H12年) 4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	2001年(H13年) 1月	2月	3月	担当
実測													中村
トレース													中村
写真撮影													中村
表作成 ・図面整理													中村

	2001年(H13年) 4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	2002年(H14年) 1月	2月	3月	担当
トレース ・版下作成													中村
実測													中村
写真撮影													中村
文章執筆													中村

第Ⅱ章　周辺の地理的・歴史的環境

第 1 節　地理的環境

石の本遺跡群の地理的環境については、既刊の「石の本遺跡群Ⅰ～Ⅳ」で詳細が記されているため、それらを参照されたい。

第 2 節　歴史的環境

石の本遺跡群の立地する白川中流域、及びそれを含む熊本平野とその縁辺部における縄文時代後期後半から晩期前半の様相は、これまで断片的な資料が多かったが、近年の事例の増加によって徐々に明らかになってきている。従来熊本地方の土は当該時期の遺構検出には不向きなため、なかなか住居址等の生活址を検出できずにいた。しかし遺構埋土中に含まれる焼土粒や遺物の広がり、床面に残されたわずかに硬化した面の検出等をもって遺構認定することで、生活址の検出は十分可能となった。さらに近年の開発に伴う緊急発掘調査が増加したことも事例の増加に繋がっている。

周辺の縄文時代の遺跡は、第 1 図及び第 5 表に示した通りであるが、その多くは散発的に遺物が確認されている包蔵地であり、生活址を伴い、尚且つ縄文時代後・晩期に属する遺跡は全体の 1 割程に過ぎない。しかしこれらの中には、熊本の縄文時代研究史に欠くことのできない重要な遺跡も少なくない。それでは、時期毎に各遺跡の概要に触れておく。

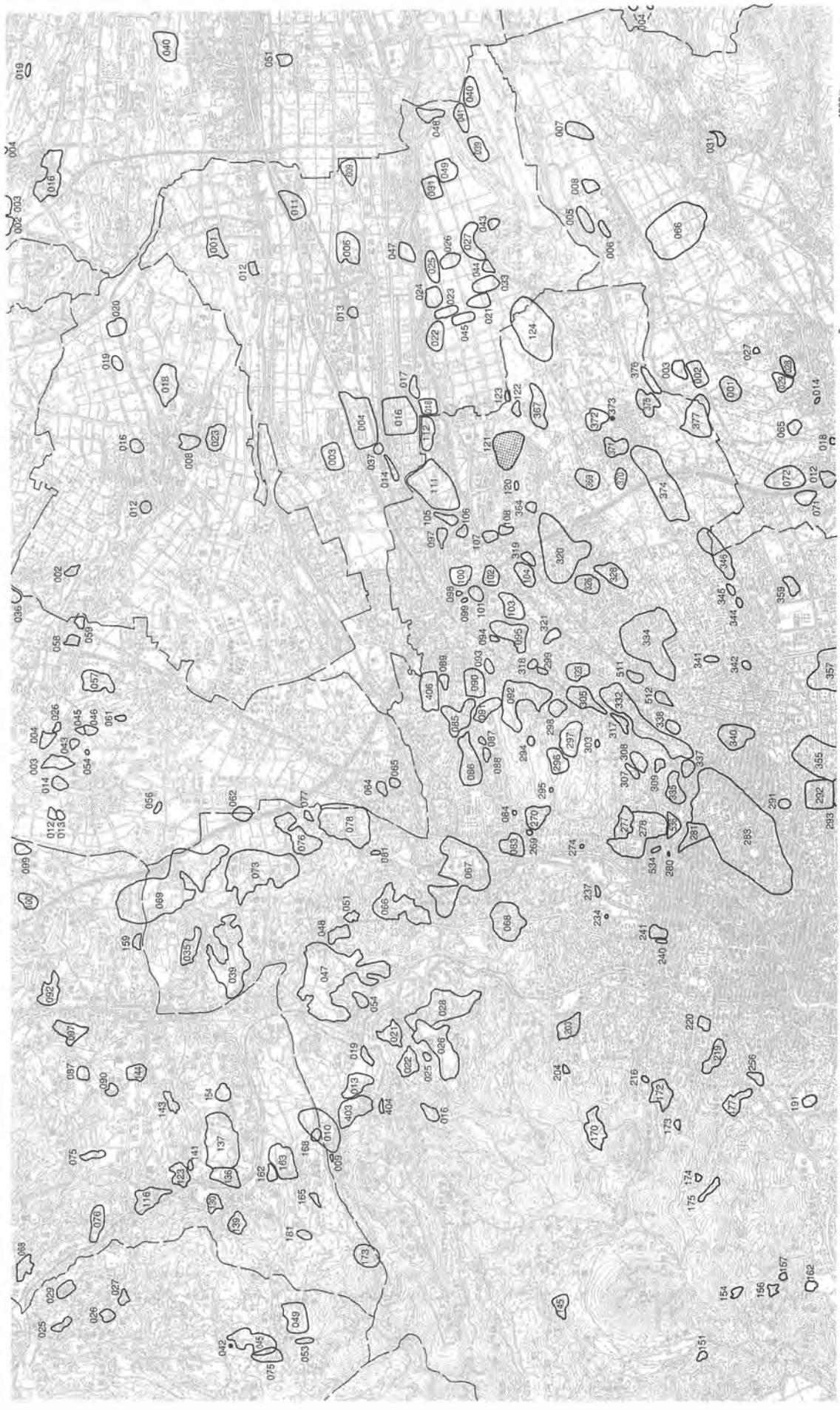
磨消縄文土器様式の後半に位置付けられる遺跡としては、菊池郡大津町杉水所在のワクド石遺跡、熊本市四方寄町所在の四方寄遺跡等がある。ワクド石遺跡は岨川下流域の台地上に立地し、太郎迫式から三万田式、御領式段階の竪穴住居址が検出され、天城式段階の埋設土器遺構も 3 基見つかっている。住居址の炉跡からはイネの植物珪酸体（プラント・オパール）が検出されており、籾痕のある浅鉢も採集されている。また四方寄遺跡では土層断面で竪穴住居址が 2 軒確認されている他、太郎迫式から三万田式、御領式土器が出土している。他にも熊本市太郎迫町所在の太郎迫遺跡では、西平式と太郎迫式段階の竪穴住居址が検出されている。ただ遺構の見つかった遺跡は少数であり、包含層遺物が散発的に出土している遺跡が多い。

黒色磨研土器様式の前半に位置付けられる遺跡としては、菊池郡菊陽町辛川所在の上中原遺跡、熊本市錦ヶ丘所在の鳥井原遺跡、同市水源所在の水源地遺跡、同市上南部町村下所在の上南部遺跡、同市鶴羽田町所在の鶴羽田遺跡、同市万楽寺町所在の山海道遺跡等がある。上中原遺跡は白川左岸の白水台地から白川に向かう緩斜面上に立地し、三万田式から鳥井原式、御領式段階の竪穴住居址が 2 軒検出されている。また鳥井原式段階の埋設土器も 1 基見つかっている。鳥井原遺跡は台地上に立地し、遺構は確認されなかったが、鳥井原式を中心に三万田式、御領式土器等の比較的良好な資料が出土している。三万田式と御領式の中間に位置する鳥井原式の標識遺跡でもある。水源地遺跡は庄口川に面した台地端に立地し、周溝墓内から竪穴住居址 1 軒とそれに伴う遺物が見つかっている。鳥井原式段階から御領段階の遺構と考えられる。上南部遺跡は白川中流域の段丘上に立地し、 5 軒の竪穴住居址と 7 軒の擬似住居址、埋設土器17基等が検出されている。

御領式から天城式段階の遺構・遺物が中心で鳥井原式以前や黒川式以降の遺物も少量認められる。また大量の土偶も出土しており、西日本有数の規模を誇る。鶴羽田遺跡は坪井川沿いの台地上に立地し、御領式段階から天城式段階の竪穴住居址13軒、土壙10基等が検出され、土偶や石棒と言った特殊遺物も出土している。このように当該時期になると熊本市内域を中心に遺跡数が急増してくるが、こうした現象は天城式段階まで続くことになる。

黒色磨研土器様式の後半に位置付けられる遺跡としては、熊本市貢町字馬場所在の五丁中原遺跡、同市太郎迫町所在の太郎迫遺跡、同市健軍本町所在の健軍上ノ原遺跡、健軍神社遺跡、上益城郡益城町古閑所在の古閑遺跡、古閑北遺跡等がある。五丁中原遺跡は井芹川沿いの台地上に立地し、鳥井原式段階の竪穴住居址１軒と天城式段階から晩期の竪穴住居址４軒の他埋設土器１基が検出されている。太郎迫遺跡は前述したように西平式と太郎迫段階の竪穴住居址が検出されているが、主に検出されたのは天城式段階のものである。遺構数こそ多くないが、出土した遺物数は膨大な数量に上り、本来の遺構数の多さを窺わせるものである。健軍上ノ原遺跡と健軍神社遺跡は前述した鳥井原遺跡と共に「健軍神社周辺遺跡群」として一括されている。庄口川上流部の台地上に立地し、上ノ原遺跡は御領式から天城式段階の竪穴住居址１軒と埋設土器１基、神社遺跡は天城式段階の埋設土器１基が検出されている。古閑遺跡は赤井川の支流木山川の北側に位置する低丘陵上に立地し、天城式から古閑式段階の竪穴住居址が検出されているらしいが、報告書には掲載されていない。天城式土器に後続する古閑式土器の標識遺跡でもある。古閑北遺跡はその古閑遺跡の北に位置する遺跡で、天城式段階から晩期前半期の竪穴住居址17軒、天城式段階の埋設土器２基が検出されている。また当該時期のものとされる円形周溝遺構９基も確認されている。

以上、縄文時代後期中葉から晩期初頭までの周辺地域の遺跡の変遷を述べてみた。立地的には河川沿いの丘陵上が最も多く、集落を形成している遺跡はほとんどこうした立地である。河川沿いの丘陵上という立地条件は、水はけが良く、竪穴住居址の建築には適していたと考えられる。また周囲には山林が広がり、狩猟や採集といった生計の営みには事欠かなかったであろうし、比較的河川の近くに位置するため、水産物の獲得や給水も容易であり、集落を営むには都合の良い立地条件であったと推測される。縄文時代後期後葉から後期末まで、つまり三万田式から天城式段階までは、遺構を伴う大小さまざまな遺跡が各地域で見られるが、晩期初頭、つまり古閑式段階になると、その数はやや減少傾向にある。それも天城式段階から継続して営まれている遺跡がほとんどで、古閑式段階から新たに発生する遺跡は現時点ではほとんど見られない。これをもって古閑式段階以降の縄文集落の急激な衰退とするのは早計であるが、この時期に何らの画期を見出すことができるのかもしれない。



第１図　周辺遺跡分布図

第5表　周辺遺跡一覧

熊本県（43）玉名郡玉東町（364）

No.	遺跡名	所在地	時代	種別	旧遺跡名	備考
025	陣林	二俣　陣林	縄文～古代	包蔵		
026	堂の元	二俣　堂の元	縄文～古代	包蔵		
027	京塚	二俣　京塚	縄文～古代	包蔵		
029	辻	二俣　辻	縄文後晩期	包蔵		
042	立岩石器製作	原倉　立岩屋敷	縄文	生産		石斧・剥片多数
045	東山西	原倉　荒平	縄文～弥生	包蔵		縄文後晩期御領式、弥生
049	東山	原倉　荒強当	縄文	包蔵		縄文後期の土器・石器包含
053	大谷石器製作	原倉　大谷	縄文	生産		安山岩石器多量出土
075	六本楠	原倉	縄文	包蔵		

熊本県（43）鹿本郡植木町（385）

No.	遺跡名	所在地	時代	種別	旧遺跡名	備考
068	田原一の坂	豊岡　西原・岡林	縄文	包蔵		縄文土器
075	外土井	宮迫　外土井	縄文	包蔵		
076	中久保	豊岡　橋木	縄文・弥生	包蔵		
087	古閑	鞍掛　古閑屋敷・辻畑	縄文～中世	包蔵		
090	蹴舫原	鞍掛　蹴舫原	縄文～古代	包蔵		
092	馬場	岩野　馬場	縄文～中世	包蔵		馬場小路、三重土塁
097	一ツ木	山本　一木	縄文	包蔵		
099	白石	有泉　白石	縄文～古代	包蔵		
100	小畑	有泉　小畑	縄文～古代	包蔵		
116	埋原	轟　埋原屋敷	縄文～中世	包蔵		
123	辻畑	轟　辻畑	縄文	包蔵		縄文土器
130	生野	円台寺　生野原	縄文	包蔵		
136	河原立	円台寺　河原立	縄文・弥生	包蔵		縄文・弥生、扶人石斧
137	ヲスギ	滴水　ヲｽｷﾞほか	縄文・弥生他	包蔵		縄文晩期・弥生・須恵器
139	円台寺	円台寺　本村	縄文～中世	包蔵		
141	内目	轟　ヲスギ	縄文	包蔵		
143	滴水館	滴水　東屋敷・原口	縄文～中世	包蔵		
144	二葉パン工場	舞尾　西原・前畑	縄文・弥生	包蔵		縄文後期・弥生後期・晩期
154	荻迫	荻迫　表畑・萩原ほか	縄文他	包蔵		縄文後期土師器片・須恵器・石鏃・石斧
159	植木草場	広住　向原ほか	縄文～中世	包蔵		
162	木留	木留　北中原	縄文～古代	包蔵		
163	笹尾A	木留　笹尾	縄文	包蔵		縄文早期後期晩期土器・石器
165	笹尾B	木留　笹尾	弥生・縄文	包蔵		集落、縄文早期土器・石斧・石棒、甕棺
168	山海道	辺田野　山海道	縄文	集落		縄文後・晩期土器
173	山口迫	木留　山口迫	縄文～中世	包蔵		
181	茶山	木留　楳山	縄文～古代	包蔵		

熊本県（43）菊池郡西合志町（407）

No.	遺跡名	所在地	時代	種別	旧遺跡名	備考
003	沖田	野々島　沖田	縄文他	包蔵		丸木舟、御領式・野辺田式・土師器・石器
004	黒松岡原	合生　黒松	縄文	集落		表面に土器細片散布・石斧出土
012	アミダメ	野々島　古閑・前田	縄文～古代	包蔵		
013	延寿寺	野々島　古閑	縄文～古代	包蔵		
014	巡畑	野々島　巡畑	縄文～古代	包蔵		
026	中尾	野々島 天神島・中尾原	縄文～古墳	包蔵		縄文・弥生・古墳期土器片
036	高木原	合生　高木	縄文～奈良	包蔵		縄文後期、奈良時代、出土品大皿
043	八反畑	野々島　八反畑	縄文～弥生	包蔵		縄文～弥生土器、中央小校庭
045	枇杷田	野々島　中原・枇杷田	縄文	包蔵		縄文早期
046	西合志中学校敷地	野々島　東原	縄文・古墳	包蔵		御領式土器・古式勾玉・野辺田式・須恵器
054	二子山石器製作	野々島　天神免	縄文	生産		石器各種・原石
056	丸の内	野々島　丸の内	縄文	包蔵		
057	笹山	御代志（通称大池）	縄文	包蔵		縄文条痕文土器・石匙出土
058	小合志原	合生 辻久保・小合志原	縄文	集落		縄文後期
059	辻久保	合生　辻久保	縄文	包蔵		縄文後期
061	中野	野々島　中野	縄文	包蔵		
062	木原野A・B	野々島　木原野	縄文	包蔵		石鏃
064	梨の木	須屋　梨の木	縄文	包蔵		
065	向島	須屋　向島	縄文	包蔵		

熊本県（43）菊池郡大津町（403）

No.	遺跡名	所在地	時代	種別	旧遺跡名	備考
002	ワクド石	杉水　西の原、西ノ尾	縄文	集落		籾痕ある御領式土器
003	塔の本	杉水　塔の本	縄文	包蔵		押型文
004	今村	杉水　今村	縄文	包蔵		西平式（御手洗B）・野辺田式土器
016	杉水上ノ原矢鋒	杉水　上ノ原・矢鋒	縄文・弥生	埋葬		甕棺墓、支石墓、縄文、弥生土器・土師・須恵
019	一尾劒1地点	矢護川　一尾劒	縄文	包蔵		
040	八窪	大津　八窪	縄文～古代	集落		
051	大津	大津　大津	縄文	包蔵		大石鏃・石槍・土師片少数、大津高校グラウンド

熊本県（43）菊池郡合志町（405）

No.	遺跡名	所在地	時代	種別	旧遺跡名	備考
002	中林	栄（通称中林）	縄文	包蔵		御領式土器
008	野付	福原　野付	縄文他	包蔵		押型文、黒髪式甕棺
012	小園	豊岡　小園	縄文～弥生	包蔵		御領式、石器・弥生土器
016	御手洗	幾久富　御手洗	縄文他	包蔵		縄文後期・土師器・御手洗式
018	桑鶴	竹迫　福原	縄文・弥生	包蔵		昭50年圃場整備、盛土で残す
019	八久保	竹迫（通称八久保）	縄文	包蔵		阿高式・御領式
020	竹迫宇土	竹迫　宇土	縄文	包蔵		三万田式
023	御領	竹迫　福原	縄文他	包蔵		土偶・御領式土器

熊本県（43）菊池郡菊陽町（404）

No.	遺跡名	所在地	時代	種別	旧遺跡名	備考
001	原水大人足	原水　大人足	縄文～古代	包蔵		
003	上沖野	原水　上沖野	縄文	包蔵		
004	駄飼代	津久礼　駄飼代	縄文	包蔵		

006	久保田中原	久保田　中原	縄文・弥生	包蔵		
009	楠ノ木	久保田　楠ノ木	縄文・古代	集落		越　白磁
011	南方上	原水　南方下	縄文～中世	包蔵		
012	柳水	原水　柳水	縄文～中世	包蔵		
013	原水南上原	原水　上原	縄文～中世	包蔵		
014	今石	津久礼　今石	縄文～中世	包蔵		
016	津久礼六地蔵	津久礼　梅木	縄文・弥生	石造		
017	井口下鶴	辛川　下鶴	縄文・弥生	包蔵		
018	久保	辛川　久保	縄文・弥生	包蔵		
021	上山立窯	辛川　上山立窯	縄文	包蔵		
022	中屋敷	辛川　中屋敷	縄文	包蔵		
023	東弁指	辛川　東弁指	縄文	包蔵		
024	池ノ窯	辛川　池ノ窯	縄文	包蔵		
025	辛川東原	辛川　東原ほか	縄文・古墳	包蔵		
026	曲手中原	曲手　中原	縄文～古代	包蔵		
027	狸坂ＡＢＣ	曲手　部田	縄文	包蔵		縄文後期遺物散布
031	六地蔵	馬場楠	縄文	集落		
033	塚原	辛川　塚原	縄文～古墳	包蔵		
037	広街道	津久礼	縄文早期	包蔵		
039	豊秋	戸次	縄文	包蔵		
040	坂の下		縄文～中世	包蔵		
041	中原	戸次	縄文	包蔵		
043	山ノ上	戸次	縄文	包蔵		
044	部田	曲手　部田	縄文	包蔵		縄文後期
045	上中原	辛川	縄文	集落		縄文後期
047	西鶴	曲手	縄文・弥生	包蔵		
048	年の神	戸次	縄文	包蔵		
049	水溜	戸次	縄文	包蔵		

熊本県（43）阿蘇郡西原村（432）

No.	遺跡名	所在地	時代	種別	旧遺跡名	備考
004	秋田上原	河原　秋田原	縄文～中世	包蔵		

熊本県（43）熊本市（201）

No.	遺跡名	所在地	時代	種別	旧遺跡名	備考
009	万楽寺貝塚	万楽寺町乙笹尾	縄文	貝塚	向山古墳	
010	山海道	万楽寺町字甲笹尾	旧石器・縄文	集落	山海道追い分石	剥片尖頭器（黒曜石）、土偶、縄文後晩期土器
013	太郎迫	太郎迫町字大原など	縄文	集落	万楽寺遺跡	住居跡、埋ガメ、土偶、磨製石斧、打製石斧 石刀、剥片石器
016	馳門	立福寺町小原	縄文～中世	包蔵		
019	妙見遺跡群	立福寺町今餉	縄文・中世	包蔵	妙見遺跡・妙見城跡	後晩期土器（太郎迫式・御領式・晩期中葉）
021	川東遺跡群	和泉町幡宮	縄文・弥生	包蔵	川東遺跡・庄遺跡・川東神社遺跡・三宝塚板碑	川東縄文後晩、庄弥生、板碑（大永３年銘）
022	皮籠石	和泉町川東	縄文～中世	包蔵		
025	中尾	花園４丁目	縄文	包蔵		後期中葉末の太郎迫式の口縁部破片
026	桑鶴遺跡群	和泉町桑鶴	縄文～中世	包蔵	桑鶴Ａ遺跡・桑鶴Ｂ遺跡・迫畑古墳・大塚原古墳 徳正寺板碑	板碑（天文２年銘）
028	五丁中原遺跡群	貫町字馬場・三つ塚	旧石器～弥生	集落	五丁中原遺跡・赤水Ａ遺跡・赤水Ｂ遺跡	弥生後期環壕集落調査、縄文晩期住居跡 調査、巴形銅器
035	宝出原	改寄町	縄文～中世	包蔵		
039	小糸山遺跡群	小糸山町居屋敷	縄文～中世	包蔵	小糸山遺跡・小糸山居館跡・小糸山迫分石・寄鶴官軍墓地	縄文後期土器、剣目圧痕土器など 西南戦争官軍墓地
047	硯川遺跡群	硯川・下硯川町	縄文～平安	包蔵	北部中学校遺跡・田畑遺跡・田端窯跡・十三部塚板碑	板碑（大永4年銘）、窯跡（平安期？）2基以上
048	四方寄	四方寄町	縄文	集落	村上屋敷板碑	縄文後晩大集落、調査あり
051	四方寄御馬下	四方寄町御馬下	縄文	包蔵		
054	柚ノ木	硯川町市迫	縄文・古墳	包蔵	柚ノ木箱式石棺群	縄文後期土器、石棺数基
066	飛田遺跡群	飛田町塔の木など	縄文～古墳	包蔵	飛田塔の木遺跡・飛田上ノ原遺跡・飛田葉山塚古墳	葉山古墳調査報告書あり
067	清水町遺跡群	清水町山室など	縄文～古墳	包蔵	楢山Ａ～Ｃ遺跡・山室Ａ遺跡・山室打出（山室地頭） 屋敷遺跡・八景水谷遺跡・八景水谷甕棺群 ・山室東屋敷阿弥陀堂碁碑	楢山甕棺群、山室甕棺・土師器 八景水谷縄文前後晩・甕棺
068	徳王	徳王町ほか	縄文～平安	包蔵	徳王寺跡・徳王寺跡板碑	縄文後期、弥生内行花文鏡出土
069	立石遺跡群	改寄町	縄文～平安	包蔵	立石駅衙参考地・伝郡界榎立石	
073	大鳥居遺跡群	大鳥居町	縄文～中世	包蔵	大鳥居遺跡・井出原禅房参考地	
076	梶尾古閑原・古屋敷	梶尾町古閑原など	縄文～中世	包蔵	梶尾谷山お茶屋跡	
077	梶尾立野	梶尾町立野	縄文～中世	包蔵		
078	鶴羽田(鶴ノ原・垣ノ外)	鶴羽田町	縄文～古墳	集落		縄文後晩期土器、先端を失った銅戈出土
081	山際畑	鶴羽田町	縄文～中世	包蔵		
083	亀井遺跡群	清水町亀井	縄文～中世	包蔵	亀井遺跡・亀井城跡・亀井金剛院跡・亀井松山墓地 亀井薬師堂前板碑	城は現光照寺内、板碑天文２年銘
084	万石昭和団地前	清水町万石	縄文～中世	包蔵		
085	檜木	清水町檜の木	縄文・弥生	包蔵		縄文早・前・後・晩、甕棺群
086	岩倉山中腹	清水町兎谷	縄文～中世	包蔵		
087	岩倉山山頂	清水町兎谷	縄文～中世	包蔵		
088	岩倉山	清水町兎谷	旧石器～中世	包蔵		
089	楠	龍田町	縄文～中世	包蔵		
090	堂ノ前遺跡群	清水町檜木・堂の前	旧石器～中世	包蔵	堂の前遺跡・一丁畑遺跡	
091	庵ノ前	清水町兎谷	旧石器・縄文	包蔵		早期住居跡３基、県報告書あり
092	迫ノ上遺跡群	龍田町御内など	縄文～平安	包蔵	迫ノ上甕棺群・緑が丘遺跡・緑ヶ山ノ神遺跡 堂ノ前屋敷窯跡・長運寺窯跡	堂の前窯跡は平安期か？
093	春町鶴	清水町檜木一町鶴	縄文～中世	包蔵		
094	吉ノ平	龍田町上立田	縄文～中世	包蔵		
095	竹ノ後・芭蕉遺跡群	龍田町上立田竹の後	縄文～平安	集落	竹ノ後遺跡・竹ノ後甕棺群・芭蕉遺跡	竹の後縄文後期土器・合口甕棺・土偶
097	弓削前畑	龍田町弓削小坂屋敷	縄文～中世	包蔵		
098	弓削平ノ下Ａ	龍田町弓削平の下	縄文～中世	包蔵		
099	弓削平ノ下Ｂ	龍田町弓削平の下	縄文～中世	包蔵		
100	吉原	吉原町殿田	縄文～平安	包蔵		縄文後晩期（南福寺・中津）、弥生後期 奈良平安在銘土器
101	片彦瀬	龍田町弓削片彦瀬	縄文	包蔵		

102	北上遺跡群	石原町平	縄文・古代	包蔵	北上遺跡・北上Ｂ遺跡	縄文晩期土器、布目瓦
103	上南部	上南部町村下	縄文	集落		縄文前期・後期・晩期・後晩期集落 発掘調査、市報告書あり
104	供合松ノ上	上南部町	縄文～中世	包蔵		
105	法王鶴	龍田町	縄文・弥生	包蔵		
106	石原町	石原町	縄文～中世	包蔵		
107	石原瀬々井	石原町瀬々井	縄文	包蔵		縄文晩期
108	神園桜井	長嶺町	縄文～中世	包蔵		
111	託麻弓削遺跡群	弓削町	縄文	包蔵	弓削上古閑遺跡・弓削宮原遺跡	縄文前期・後期・晩期
112	鹿帰瀬	鹿帰瀬町西原	縄文・弥生	包蔵	鹿帰瀬河原遺跡	県調査あり
120	小山上の山	小山町	縄文～中世	包蔵		
121	平山石ノ本	平山町	旧石器・縄文	集落		国体会場、県調査報告書あり
122	御船塚山	平山町	縄文～古代	包蔵		
123	御船塚東	平山町	縄文～古代	包蔵		
124	中原道明	小山町	縄文	包蔵		縄文早期、後晩期
138	奥山	松尾町平山		包蔵		
145	嫩城山遺跡群	河内町岳	縄文・中世	包蔵	嫩城山城跡、城山東麓遺跡	城跡東麓の縄文式土器散布地
151	神田原	松尾町平山	縄文～中世	包蔵		
154	上松尾古閑・外平	松尾町上松尾	縄文～中世	包蔵		
156	上松尾塔ノ本	松尾町上松尾城山	縄文～中世	包蔵		
157	中津倉	松尾町上松尾城山	縄文～中世	包蔵		
162	川戸貝塚	松尾町中松尾	縄文	貝塚		早・前・中・後期
170	馬ノ水	花園町	縄文・弥生	包蔵		縄文晩期、弥生櫛描波状文・重弧文
172	島嶋	島嶋町島嶋紙屋	縄文	包蔵		石斧
173	荒尾南	島嶋町	縄文～中世	包蔵		
174	西大谷	谷尾嶋町	縄文～中世	包蔵		
175	西谷院平	谷尾嶋町	縄文～中世	包蔵		
177	野添平	池上町野添平	縄文～中世	包蔵		県では野添遺跡
191	清水原	池上町	縄文～中世	包蔵		
203	柿原遺跡群	花園町柿原字柿原	縄文～中世	包蔵	柿原城跡・柿原甕棺群遺跡・柿原城の原六地蔵	柿原城鹿子木寂心居城
204	柿原馬の木	花園町	縄文～中世	包蔵		
216	小山田	島嶋町	縄文～中世	包蔵		
219	千原台遺跡群	島嶋町３丁目ほか	縄文～平安	包蔵	千原台遺跡・城西小学校敷地内遺跡・消防学校遺跡 ・放牛の墓	
220	迎田	島嶋町	縄文～平安	包蔵		
234	舟場	清水町津浦	縄文～中世	包蔵		
237	打越貝塚	清水町打越	縄文	貝塚		北久根山式
240	京町２丁目	京町２丁目	縄文～近世	包蔵		
241	伝大道寺遺跡群	京町２丁目	縄文～近世	包蔵		伝大道寺跡を含む
256	戸坂御田尻	戸坂町	縄文～中世	包蔵		
269	古閑前	清水町亀井	縄文～中世	包蔵		旧石器
270	清水町谷口	清水町万石	旧石器～平安	包蔵	万石遺跡	県調査あり
274	室園	清水町室園	縄文～中世	包蔵		
277	小峰	黒髪町小峰	縄文～平安	包蔵	金光山無相寺跡	
278	黒髪町遺跡群	黒髪町坪井	縄文～中世	包蔵	黒髪町遺跡(済々黌高校敷地)・九州女学院遺跡 ・坪井古屋敷出土の甕棺	一帯に甕棺墓群
280	子飼	子飼町	縄文～中世	包蔵		
281	大江白川	大江１丁目	縄文～平安	包蔵	旧往生院跡・善行寺の板碑・放牛地蔵	甕棺
283	大江遺跡群	大江３丁目	縄文～明治	包蔵	大江遺跡・大江哲葉遺跡・大江東原遺跡・白川中学校 校庭遺跡・渡鹿旧電電波高校遺跡・熊高敷地遺跡 ・熊高通り遺跡・杉ノ本遺跡・託麻郡家推定地・渡鹿廃寺 ・熊本英学校跡・遵設会館遺跡他	
291	西水前寺町	水前寺１丁目	縄文～中世	包蔵	縄文阿高系	
292	国分寺跡	出水１丁目	縄文～中世	包蔵	七重塔心礎石・宮園遺跡・労働金庫遺跡	県・市による多数の調査あり
293	江津湖遺跡群	神水町、画図町ほか	縄文～中世	集落	上江津大曲遺跡・堀内邸石造遺物・神水若宮・神祇寺跡 ・弁天石古屋敷遺跡・水源地遺跡	水源地　御領式土器伴う住居１
294	天拝山	清水町檜木	旧石器～弥生	包蔵		石槍、須玖式甕棺群
295	万石乗越	清水町万石	縄文～古代	包蔵		
296	万石茶山	清水町万石	縄文・弥生	包蔵		夜臼式土器
297	秣野	龍田町上立田	縄文～平安	包蔵		
298	陳内上ノ園遺跡群	龍田町上立田	縄文～古墳	包蔵	上ノ園Ａ・Ｂ遺跡・竜田陳内館跡	御手洗A式、押型文、須玖式甕棺、方形周溝墓
299	三の宮（牧園宮脇）	龍田町上立田	縄文	包蔵		
303	宇留毛浦山市営墓地	黒髪町７丁目	縄文～平安	墓地		
305	竜田陳内遺跡群	龍田町陳内	旧石器～中世	包蔵	竜田陳内遺跡・陳内宮の前遺跡	曽畑式土器、県報告書あり
307	カブト山	黒髪町宇留毛字甲山	縄文	包蔵		早期、轟B、北久根山、黒川、山の寺
308	宇留毛Ａ	黒髪町６丁目	縄文	包蔵		
309	宇留毛Ｂ	黒髪町６丁目	縄文～平安	包蔵		
317	竜田口	龍田町女瀬、黒髪７丁目	縄文～平安	包蔵		
318	堂前畠	龍田町	縄文～平安	包蔵		
319	神園	長嶺町上西原	縄文～平安	包蔵		
320	長嶺遺跡群	長嶺町	縄文～平安	包蔵	長嶺遺跡・中山叶遺跡・中山五輪塔遺跡（若殿塚遺跡） ・馬場居屋敷遺跡・長嶺南遺跡・坂田長者屋敷跡 ・長嶺石神碑・坂田家墓地	石神碑天文18年銘
321	王田	上南部町王田	縄文～平安	包蔵		黒髪式合口甕棺
323	下南部	下南部町下山	縄文～古墳	包蔵		須玖式甕棺
326	南小迫	御領町	縄文～平安	包蔵		
328	八反田遺跡群	長嶺町八反田	縄文・中世	包蔵	殿山古墳参考地	縄文後晩期、土偶
332	新南部遺跡群	新南部町	旧石器～平安	集落	新南部A～D遺跡・北久根山遺跡・西谷遺跡・小関原遺跡 ・小関小松山甕棺遺跡・新南部三石遺跡	県北バイパス調査、市マンション調査 田辺昭三調査などあり
334	乾原・迎八反田	長嶺町乾原・迎八反田	縄文～平安	集落	乾原迎・八反田遺跡・田の迎遺跡	乾原縄文後晩期中心、迎八反田縄文早期中心
335	渡鹿遺跡群	渡鹿５丁目	縄文・弥生	包蔵	渡鹿貝塚・北原甕棺遺跡	渡鹿貝塚阿高・鐘ヶ崎式、北原須玖式甕棺 板碑釈迦像天文16年銘
337	辻	渡鹿７丁目	縄文～平安	包蔵		縄文後晩期、へら描き土器・黒曜土器
338	新南部西原	新南部町	縄文～平安	集落	保田窪地蔵碑	
340	帯山遺跡群	帯山１丁目	縄文～平安	包蔵	帯山遺跡・保田窪遺跡	布目瓦、曽畑、阿高、竹崎

341	保田窪東一本松		縄文～平安	包蔵		
342	三郎塚	健軍町	縄文～平安	包蔵		
344	新外Ａ	健軍町小峰	縄文	包蔵		
345	新外Ｂ	健軍町小峰	縄文～平安	包蔵		
346	小嶺	健軍町小峰	縄文～平安	包蔵		
355	神水	神水本町・出水２丁目	縄文～平安	包蔵		県・市調査、報告書あり
357	健軍神社周辺遺跡群	健軍２丁目	旧石器～中世	集落 包蔵	健軍神社境内遺跡・上ノ原遺跡・鳥井原遺跡・ﾐﾖｳｹﾞﾝｼﾞ屋敷下遺跡・真光寺板碑・健軍堂坂地蔵・観音堂五輪塔・健軍神社遺跡・健軍町北原遺跡・健軍新外遺跡	上の原縄文後期炭化米出土、市報告書あり
359	佐土原	健軍町佐土原	縄文～平安	包蔵		
364	中山	小山町	縄文～平安	包蔵		
367	御船塚	小山町御船塚	縄文・中世	包蔵		
369	上黒迫	戸島町	縄文・中世	包蔵		二岡中学校校庭
370	戸島京塚	戸島町	縄文～中世	包蔵		
371	戸島北向（戸島西）	戸島町	縄文・中世	包蔵	札の辻遺跡・戸島香福寺跡・戸島神社境内古塔碑群	
372	戸島東	戸島町日向	縄文	包蔵		
373	戸島経塚跡	戸島町日向	縄文・中世	包蔵		経塚一字一石埋納
374	葉山遺跡群	戸島町葉山	旧石器・縄文	包蔵	葉山遺跡・葉山Ｂ遺跡・日向下六地蔵	
375	戸島桑鶴	戸島町	縄文～平安	包蔵		
376	下佐土原	戸島町	縄文～平安	包蔵		
377	日向桟敷尾	戸島町日向	縄文	包蔵	日向遺跡	
403	万楽寺出口	太郎迫町	縄文～弥生	包蔵	万楽寺追分石	県調査あり
404	春山	太郎迫町	縄文～弥生	包蔵		早期土器・弥生壺棺
406	麻生田	麻生田町	縄文～平安	包蔵		
511	市営託麻団地	新南部託麻団地	縄文	包蔵		押型文、御領式
512	西原	新南部	縄文	包蔵		押型文
534	七軒町	七軒町	縄文～中世	包蔵		
536	上河原	黒髪町	縄文～古代	包蔵		

熊本県（43）上益城郡益城町（443）

No.	遺跡名	所在地	時代	種別	旧遺跡名	備考
001	小久保	上小久保　下小久保	縄文～中世	包蔵		
002	宮園Ｂ	木山　遠見塚ほか	縄文・弥生	包蔵		縄文～、弥生中期土器
003	遠見塚	木山　遠見塚	縄文～古代	包蔵		
005	上面ノ平	田原　上面ノ平	縄文～中世	包蔵		
006	上石岸原	田原　上石岸原	縄文～中世	包蔵		
007	高遊	小谷　高遊	縄文～中世	包蔵		
008	中石岸原	小谷　中石岸原	縄文～古墳	包蔵		縄文・弥生・古墳
012	古閑	古閑　宅地	縄文・弥生	集落		縄文・弥生、土師器外の遺物包含
014	駿河原	馬水　駿河原	縄文・弥生	包蔵		
018	惣領	惣領　高木	縄文～古代	包蔵		
027	下辻	木山　下辻	縄文～中世	包蔵		
028	辻	宮原　辻	縄文～中世	包蔵		
029	宗曽利	安永　宗曽利	縄文～中世	包蔵		
031	上陳古墳	上陳　辻	縄文	包蔵		箱式石棺、縄文土器
065	大辻	馬水　大辻	縄文～平安	包蔵		
066	寺中	寺中	縄文～平安	包蔵		
071	梨木	広崎　梨木	縄文～弥生	包蔵		
072	古閑北	古閑　崎久保・根道	縄文～弥生	集落		

参考文献

『熊本市東部地区文化財調査報告書』　熊本市教育委員会 1971年
『菊陽町史』 菊陽町史編纂室 1995年
『益城町史 通史編』　益城町史編纂委員会 1988年
『合志町史』 合志町史編纂委員会 1988年
『新熊本市史 通史編第一巻 自然 原始・古代』 新熊本市史編纂委員会 1998年
『新熊本市史 史料編第一巻 考古資料』 新熊本市史編纂委員会 1996年
『ワクド石遺跡』　熊本県教育委員会　1994年
『上中原遺跡』　菊陽町教育委員会　1998年
『鳥井原遺跡発掘調査報告書』　熊本市教育委員会　1977年
『上南部遺跡発掘調査報告書』　熊本市教育委員会　1981年
『鶴羽田遺跡』　熊本県教育委員会　1998年
『太郎迫遺跡・妙見遺跡』　熊本県教育委員会　1999年
『熊本市健軍町上ノ原遺跡調査報告書』　熊本市教育委員会　1971年
『古保山・古閑・天城』　熊本県教育委員会　1980年
『古閑北・梨木遺跡』　熊本県教育委員会　1999年
『古閑北遺跡』　熊本県教育委員会　1999年
『九州の縄文住居』第10回九州縄文研究会　福岡大会発表資料　九州縄文研究会　2000年

第Ⅲ章　調査の成果

第1節　遺跡概要

石の本遺跡群は、総面積10万㎡を越える遺跡群である。そのため各調査区によって地形が起伏に富んでいる。(第 2 図) 全体的には北から南に向かって緩やかに傾斜しており、遺跡群の中心を通るように舌状に伸びた丘陵が張り出しており、20区の南側にある頂から急激に傾斜している。その丘陵を挟むように47区付近から南東に伸びる谷と31区付近から南に伸びる谷があり、 5 区付近で合流している。また 3 区方面から伸びる谷も同じ地点で合流しており、最高部と最低部の比高差は20m余りに及ぶ。なお、小山山斜面上に位置する52～56区を含めると比高差は30mとなるが、これらの調査区では縄文時代後・晩期の遺構は確認されていないため、今回の報告から除外している。

このように各調査区で立地が異なるわけだが、各時代でもその立地が異なる。本書で報告する縄文時代後・晩期の遺跡は、北側に広がる舌状に伸びた丘陵上及びその周縁に集中している。また丘陵の東側を走る谷部を挟んだ地域にも数は少ないが分布している。この他遺跡群全域にわたって、当該時期のものとおぼしき土器片や石器等が散在しているが、その大半は北側からの流れ込みによる包含層遺物である。したがって当時の生活址が確認されたのは、上記の 2 箇所のみとなる。

具体的な調査区名を挙げると、北側の丘陵周縁では30・31・35・36・38～43・45～47・49区が該当する。一方、谷部の反対側では10・15区が挙げられるが、前述したように質・量ともに北側の丘陵周縁のそれには及ばない。その他周辺の調査区にも遺跡が広がっていた可能性は高いが、造成等で削平されており、調査時点では確認できなかった。

なお、調査方法、基本層序については、石の本遺跡群Ⅰ～Ⅳで触れているため、本書では省略するが、各調査区で層位の認識や土層の堆積状況が微妙に異なるため、参考までに各調査区の説明の際に層序図を掲載している。各層位の説明は省略しているが、基本的に生活面の検出は、Ⅱ層（黒ボク土）からⅢ層（アカホヤの二次堆積土）にかけての漸移層に集中している。また、本来Ⅱ層の下層から検出すべき遺構をより確実に捉えるため、敢えてⅢ層まで掘り下げて検出する調査区も珍しくなかった。

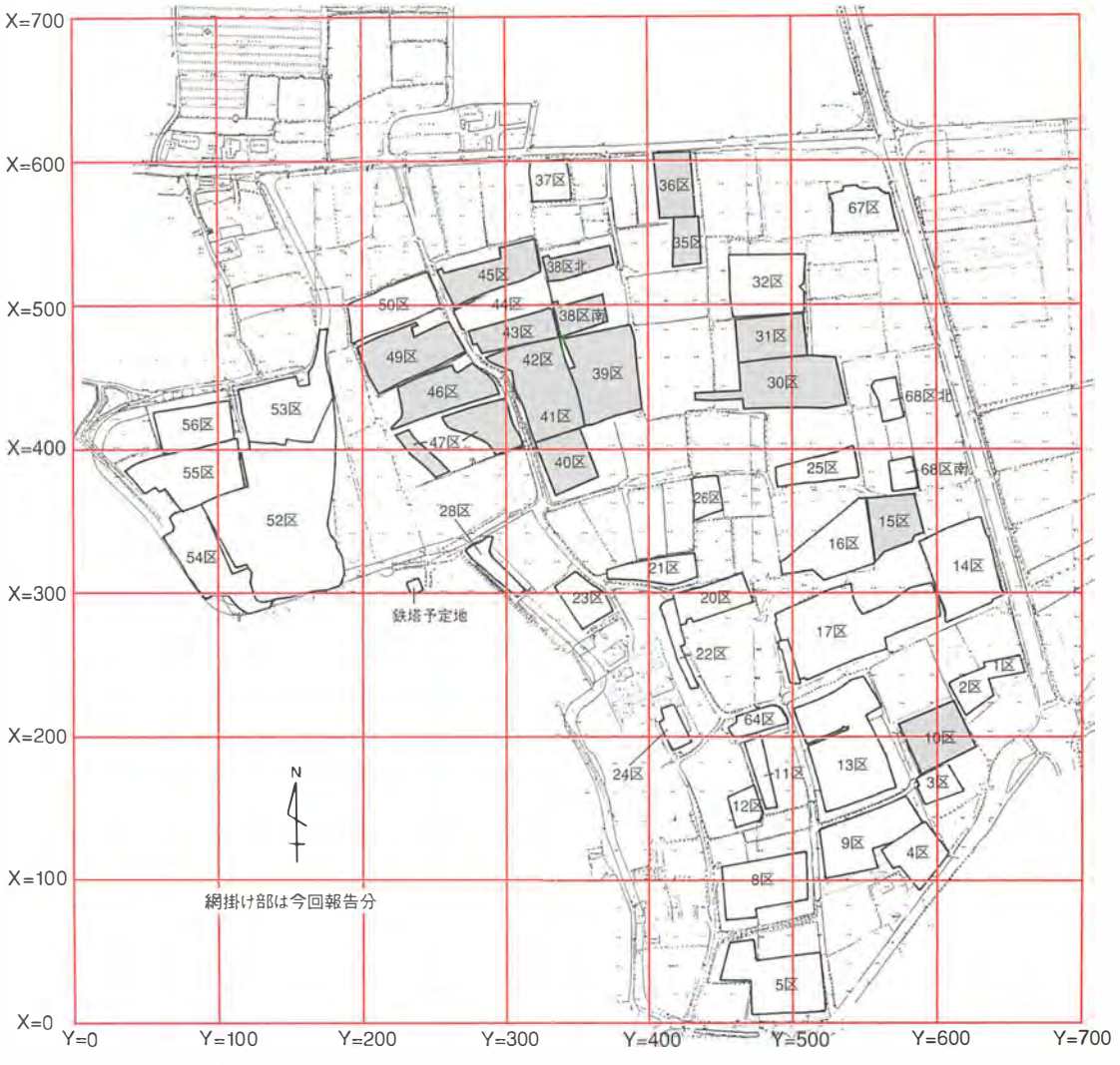
第2節　遺構・遺物概要

石の本遺跡群で検出された縄文後・晩期のものと考えられる主な遺構は、竪穴住居址76軒、埋設土器遺構32基である。円形周溝遺構も 7 基確認されたが、当該時期と断定し難い面もあり、はっきりしない。また土壙も多数検出されたが円形周溝遺構同様、時期比定が困難なものが多い。そこで、今回報告するのは比較的時期比定しやすい竪穴住居址と埋設土器遺構、そして参考資料として円形周溝と一部の土壙に限定する。遺構の分布は遺跡の北側、とりわけ42区、46区を中心とした地域に特に集中している。

調査終了時、網コンテナで1500箱を超える遺物が出土している。出土遺物としては、縄文土器、石器を中心に土偶、玉類、石刀、その他土製品、石製品、焼成粘土塊が挙げられる。

時期的には縄文時代後期後半から晩期初頭、土器様式でいうと磨消縄文土器様式から黒色磨研土器様式までで、黒色磨研土器様式のものが圧倒的に多い。その中でも所謂、天城式段階のものが目立ち、本遺跡の最盛期ではなかったかと推測される。

それでは、調査区毎にその概要を報告していくことにする。なお、遺構及び一部を除いた個々の出土遺物の説明は、巻末の観察表を参照されたい。（第６～11表）



第２図　調査区位置図及び割付け図　S：1/5000

第３節　各調査区の成果

1　　10区

【概要】（第３・４図・図版１）

石の本遺跡群の南東部に位置する調査区である。南北に走る谷部と南西に走る谷部の合流点付近に立地しており、調査区全体が南又は南西方向に向かって緩やかに傾斜している。標高78ｍから79mにかけて位置している。田畑等の造成による削平のためか、表土掘削時には既にかなり整地されており、本来の地形をほとんど留めてはいなかった。

遺構の分布は希薄であり、当該時期の遺構としては、わずかに埋設土器遺構が１基検出されたのみである。遺構検出面はⅢ層であるが、前述したように少なからず削平されているため、本来の検出面とは言い難い面もある。また遺物の出土量も多くないうえ、そのほとんどが包含層遺物である。

埋設土器遺構

10－01号埋設土器

【遺構・埋土】（第５図・図版13）

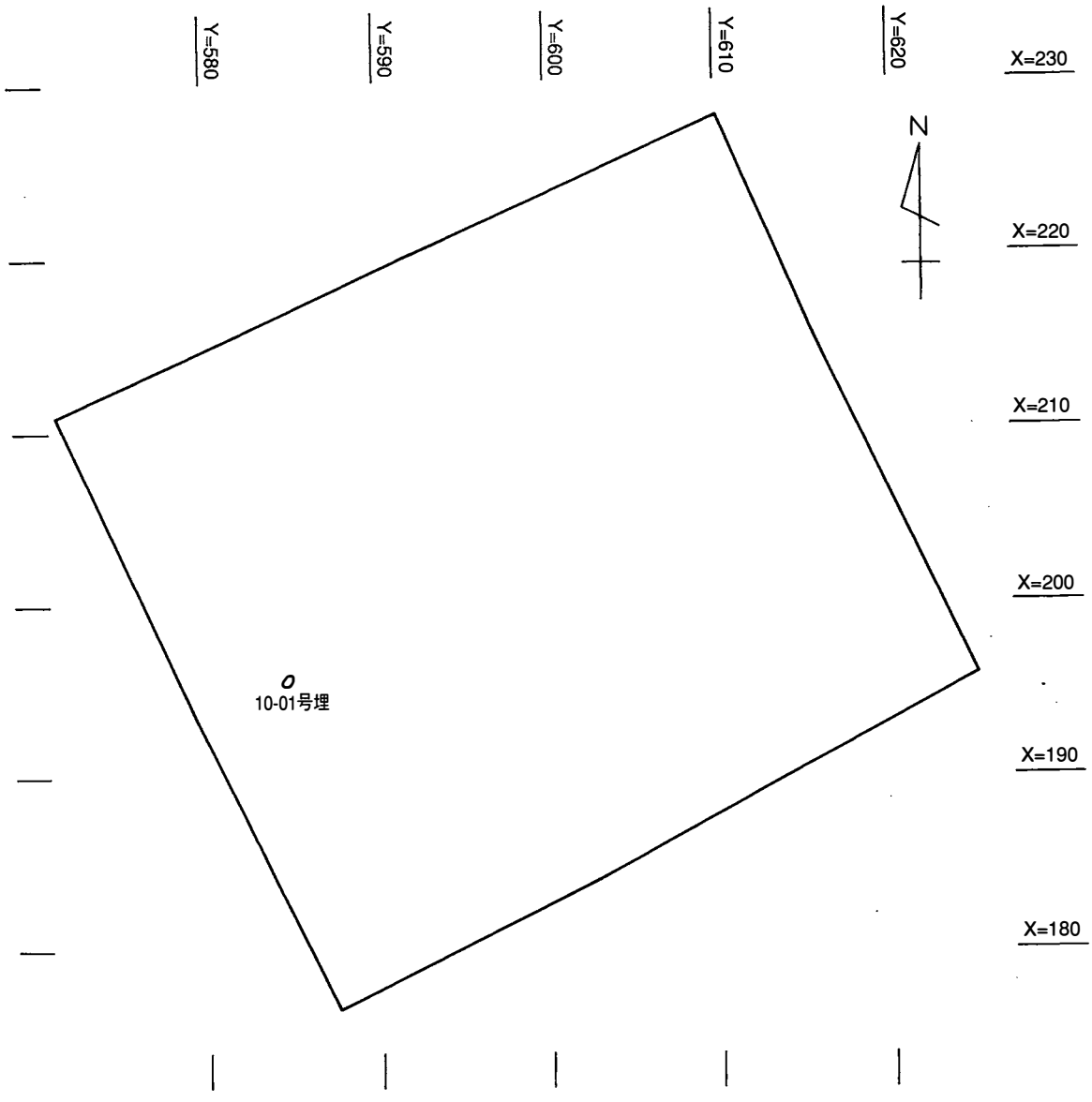
調査区の西側に位置する。上面は削平を受けていたが、掘り方を有する埋設土器遺構である。掘り方は南北に伸びる楕円形を呈する。規模は長径が74cm、短径が49cmを測り、遺構検出面から最深部までの深さは40cmである。掘り方内には合せ口状に深鉢と浅鉢がセットで検出された。浅鉢はやや深鉢より東側にずれているが、深鉢に伴うと考えられる。主体となる深鉢は、口縁を上にほぼ垂直に据えられていた。土器片の散逸は少なく、埋設当時の姿を留めていると考えられる。周囲には本埋設土器遺構に伴うような遺構は検出されなかった。

埋設土器遺構の埋土は、深鉢内の埋土と掘り方内の埋土に分けられる。深鉢内の埋土は、粘質を持ちしまりの強い褐色シルト（埋土１層）と粘質をあまり持たずしまりのない黒褐色シルト（埋土２層）、埋土２層より粘質、しまりのあるもの（埋土３層）の３層に分けられる。また掘り方内の埋土は、粘質を持ちしまりのやや強い灰褐色シルト（埋土４層）のみである。深鉢内の埋土は、概ね後世の流入土で、掘り方内の埋土は１層のみであることから、一気に埋納されたと考えられる。

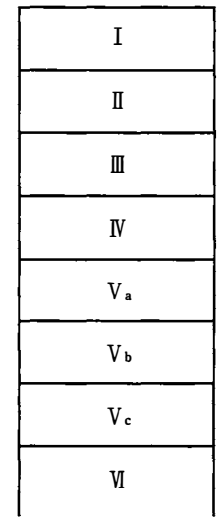
なお、埋土中から脂肪酸が検出されているが、詳細は「第Ⅳ章　自然化学分析」の項に譲る。

【遺物】（第５図・図版138）

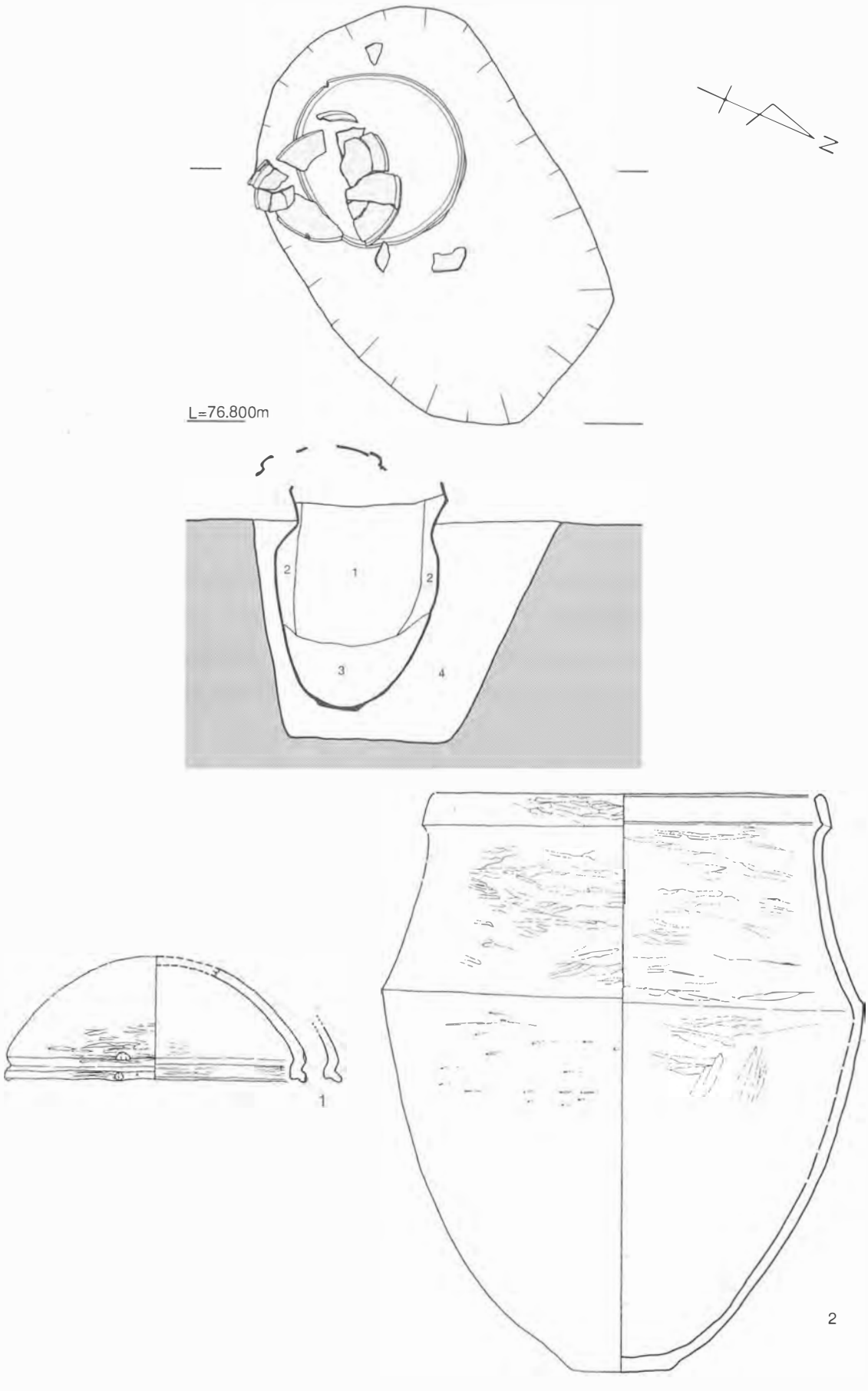
１は口縁の一部と底部を欠損した浅鉢である。内外面ともミガキが施してあるが、口縁から胴部の上の方は横ミガキ、それ以下は縦又は斜めミガキである。口縁帯はほとんど退化しており、沈線は見られないがわずかに山形突起が認められる。また口縁と肩部に凹点が施されている。２は深鉢である。口縁部は約１／３欠損しているが、その他はよく残っている。器面は横ナデや横ミガキによって仕上げられており、胴部外面にはヘラナデが施されている。底部は、わずかに突出しており、一応平底を呈している。



第3図　10区遺構配置図　S：1/400



第4図　10区基本層序図



第５図　10－01号埋設土器実測図

2　　15区

【概要】（第6・7図・図版2）

石の本遺跡群の東側に位置する調査区である。調査区の西側を走る谷に面しており、北東から南西に向かって傾斜している。標高82.6ｍから83.6ｍにかけて位置している。表土掘削時には、北東部はかなり削平されており、下層のローム層が部分的に露出していた。

遺構は南側に集中しており、竪穴住居址が4軒検出されている。3軒は近接し、残り1軒はやや距離を置く。遺構検出面はⅢ層上面である。出土遺物は縄文土器、石器が主で、遺構内外を問わず比較的まとまった量が出土している。土器は深鉢、浅鉢の他に注口土器とおぼしき破片が少数認められる。石器は打製石斧、磨製石斧、磨石といった当該時期に特徴的なものが多い。

竪穴住居址

15－01号住居址

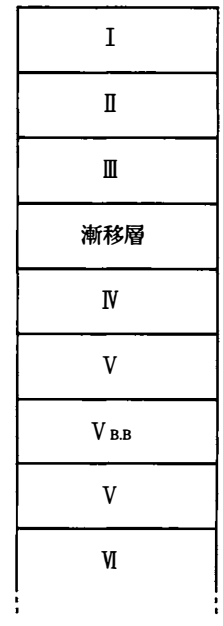
【遺構・埋土】（第8図・図版14）

調査区の南側に位置し、南に傾斜した斜面上に造られている。楕円気味の円形の平面プランを呈し、長径は6.3ｍ、短径は5.2ｍを測る。遺構検出面から床面までの深さは最大22cmである。多数のピットを検出したが、柱穴は計15個確認された。中央には80×50cmの炉跡が1基検出された他、北側壁際に80×58cmの貯蔵穴とおぼしきピットが検出された。また床面には硬化面は確認されなかった。住居址の南側には15－02号住居址があるが、両者の新旧関係は土層断面等から15－02号の方が古いと考えられる。

住居址の埋土は、粘質をあまり持たずしまりのない暗褐色土（埋土1層）と、粘質を持ちしまりのある黒褐色土（埋土2層）の2層に分層される。特に埋土2層には焼土・炭化物を含んでいる。

【遺物】（第10・11図）

本住居址からは、土器と石器が出土している。土器は小破片のみであるため、図示していない。石器は打製石斧、石庖丁形石器、敲石・磨石、二次加工のある剥片等が出ており、それらの中から幾つか選んで図示している。

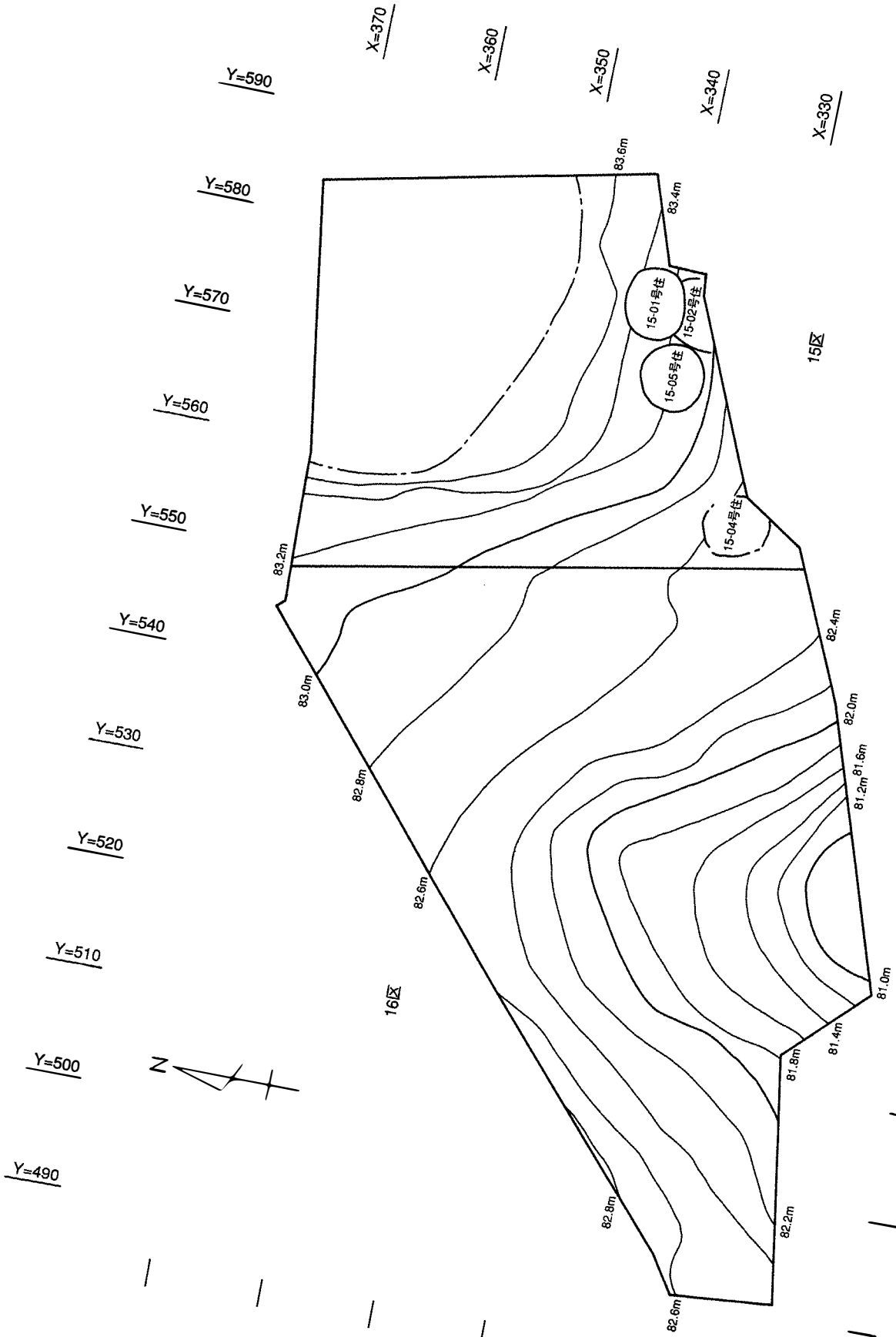


第6図　15区基本層序図

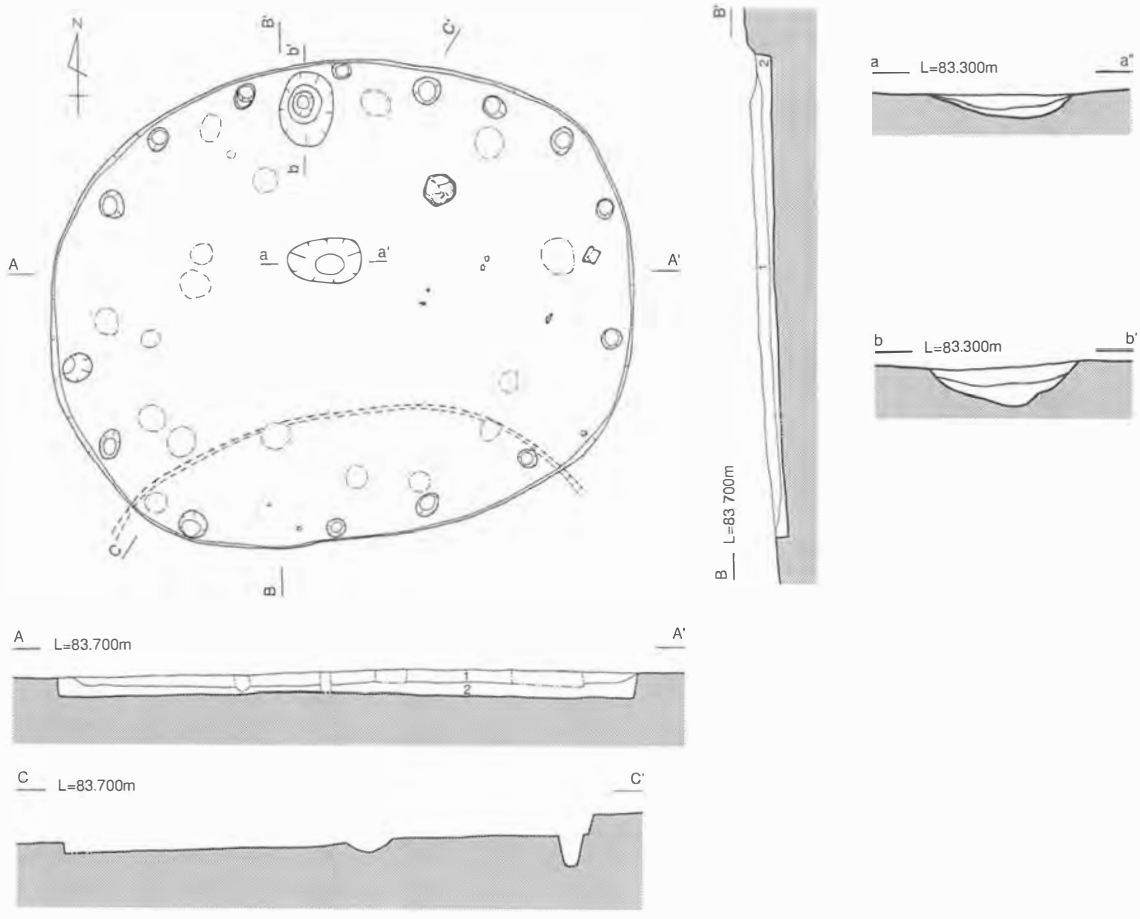
15－02号住居址

【遺構・埋土】（第9図・図版15）

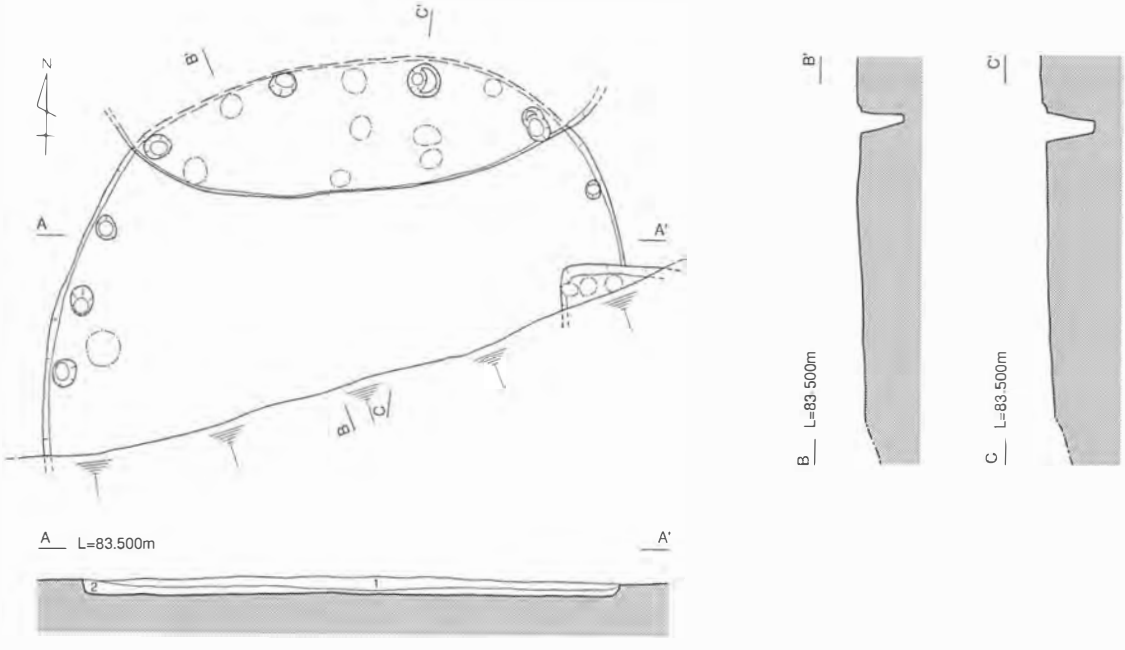
調査区の南端に位置し、半分近く調査区外に伸びている。そのため平面プランははっきりしないが、残存状況からして円形を呈していたと考えられる。長径は6.6ｍ、短径は3.5ｍ以上を測る。遺構検出面から床面までの深さは15cmである。柱穴は確認されたもので8個を数える。炉跡は確認されず、硬化面も見られなかった。前述したように15－01号住居址に切られており、比較的遺構の残存状況の良好な本調査区において最も残存状況の悪い遺構と言える。



第7図　15区遺構配置図　S：1/500

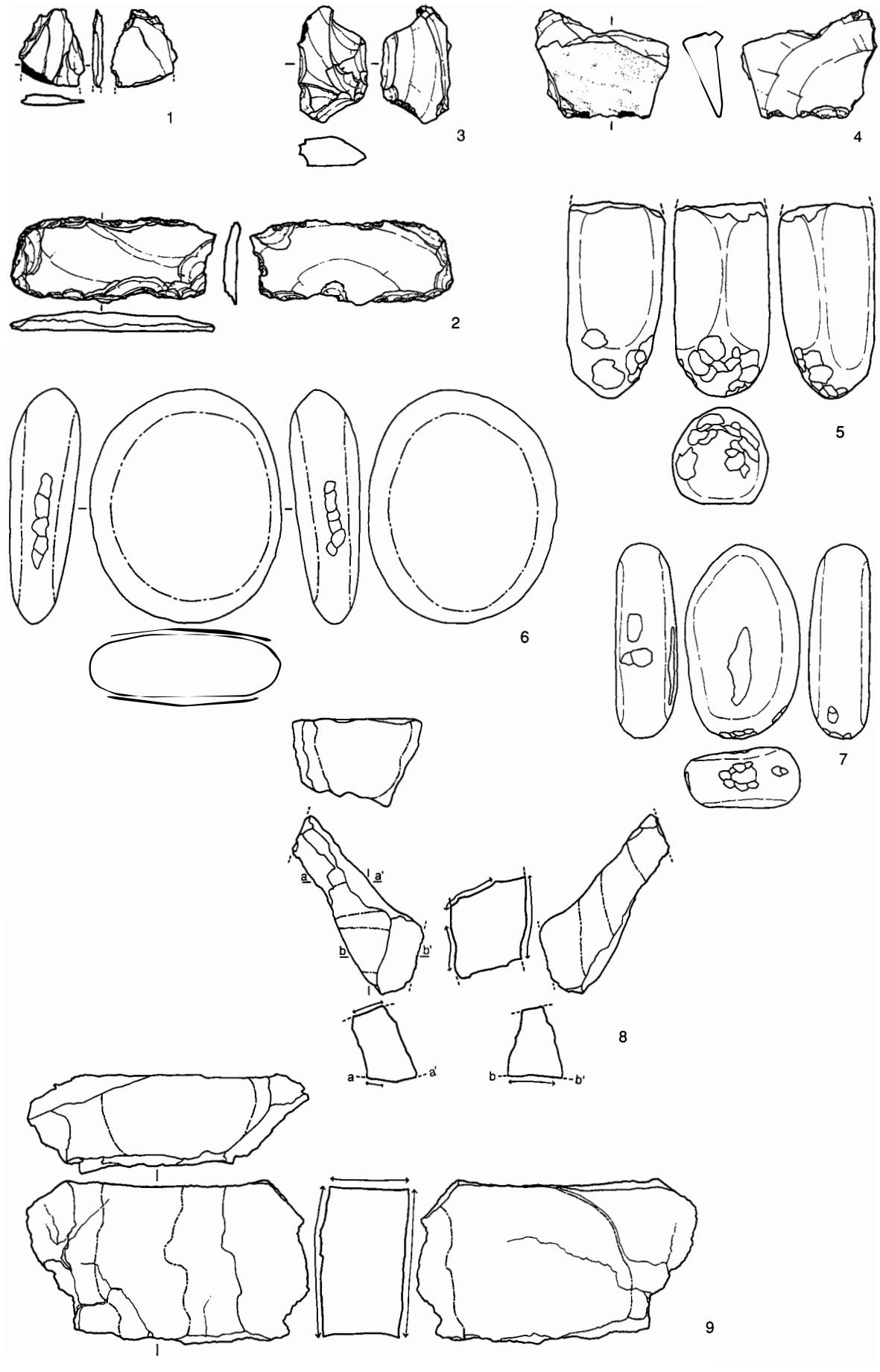


第８図　15－01号住居址遺構実測図



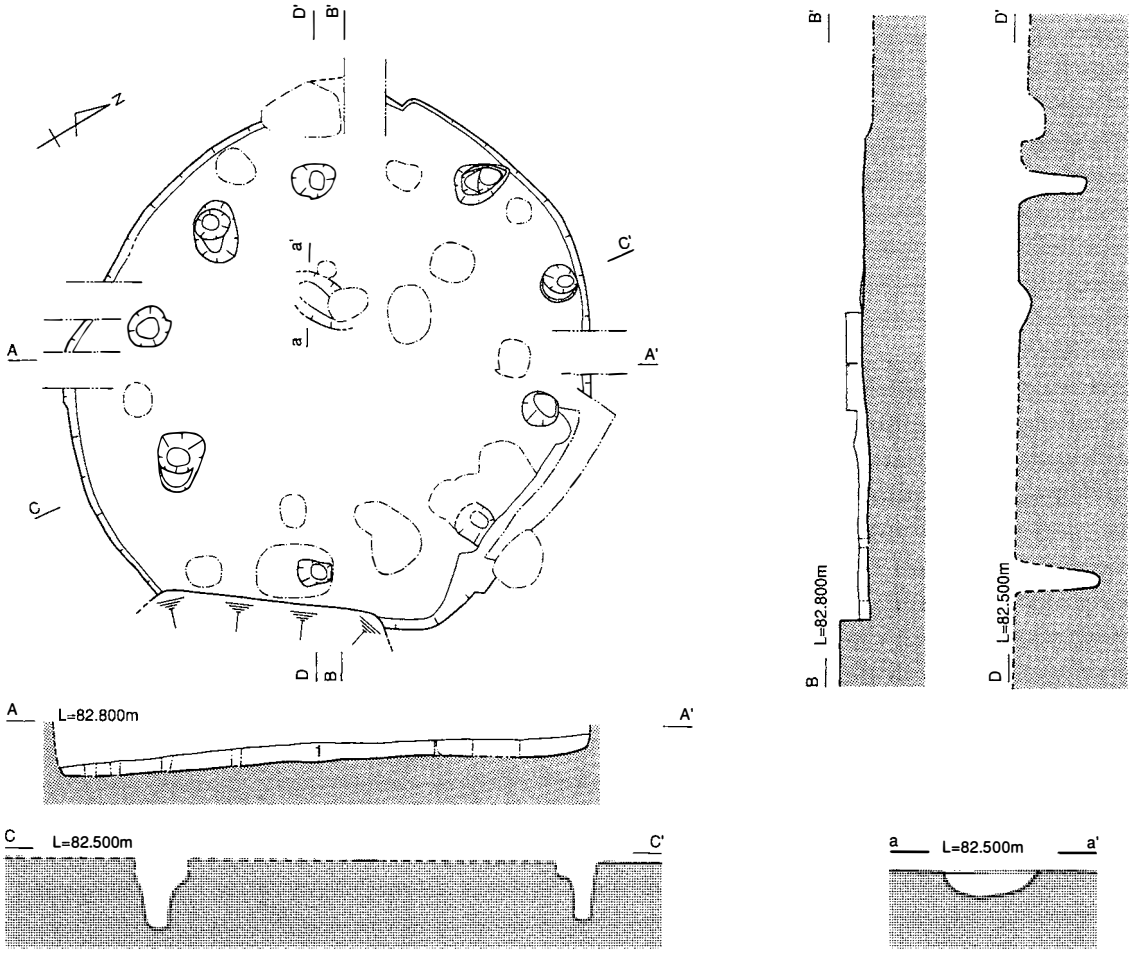
第９図　15－02号住居址遺構実測図

住居址の埋土は、15－01号住居址と同様に２層に分けられ、土質もほぼ同様の内容である。

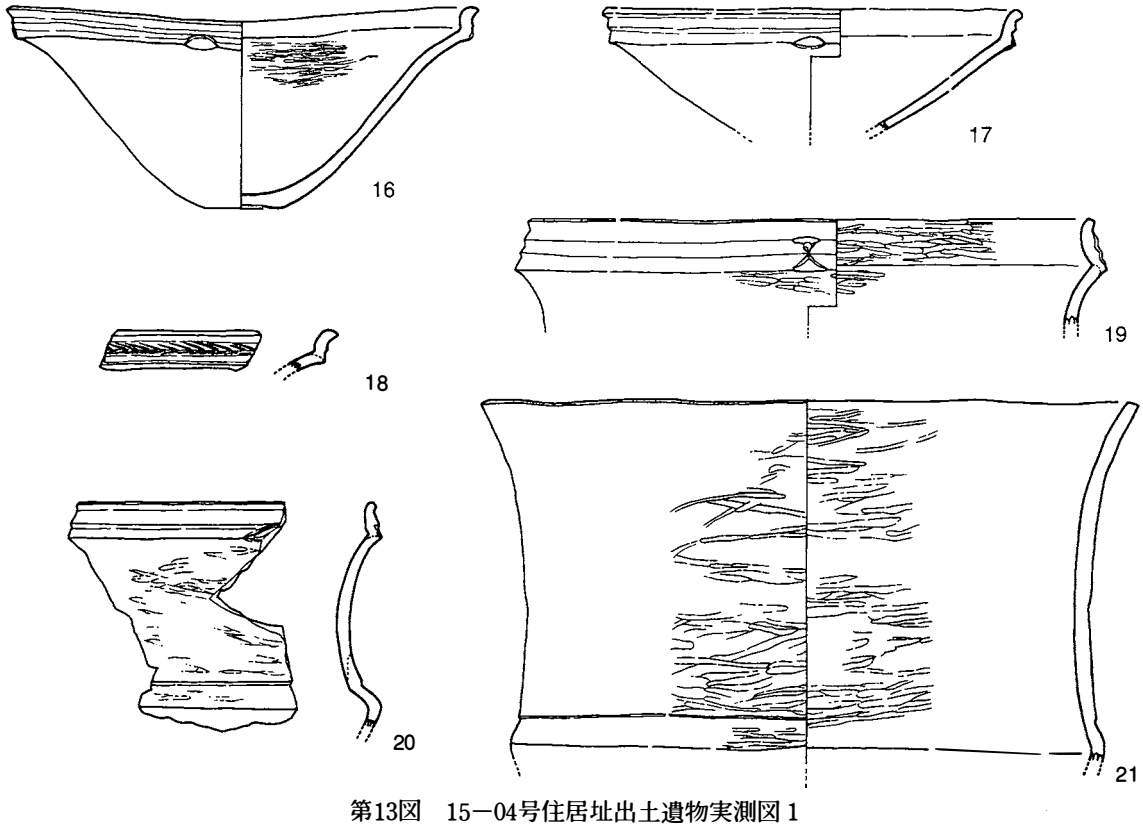


第10図　15−01号住居址出土遺物実測図

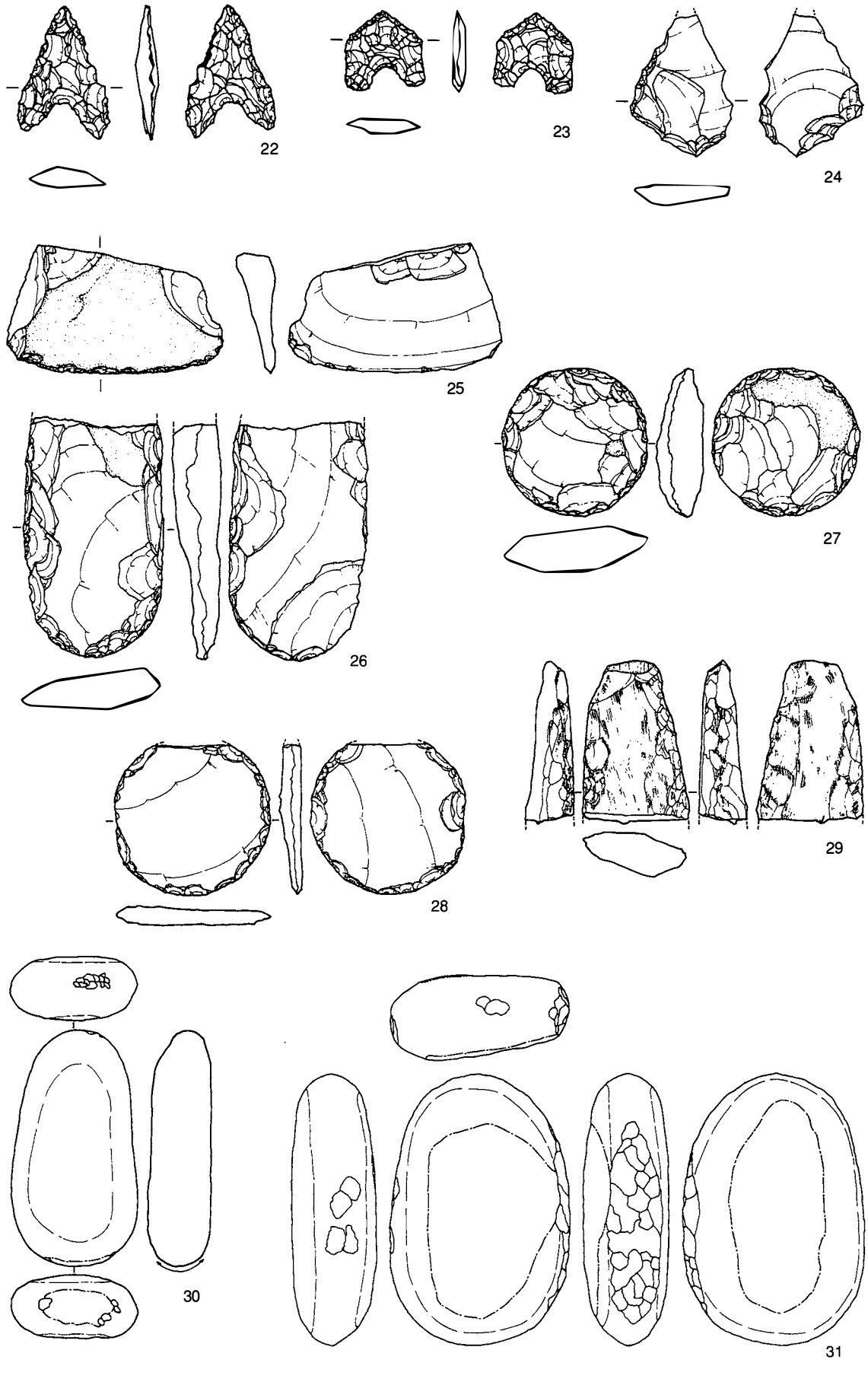
第11図　15−01・02号住居址出土遺物実測図



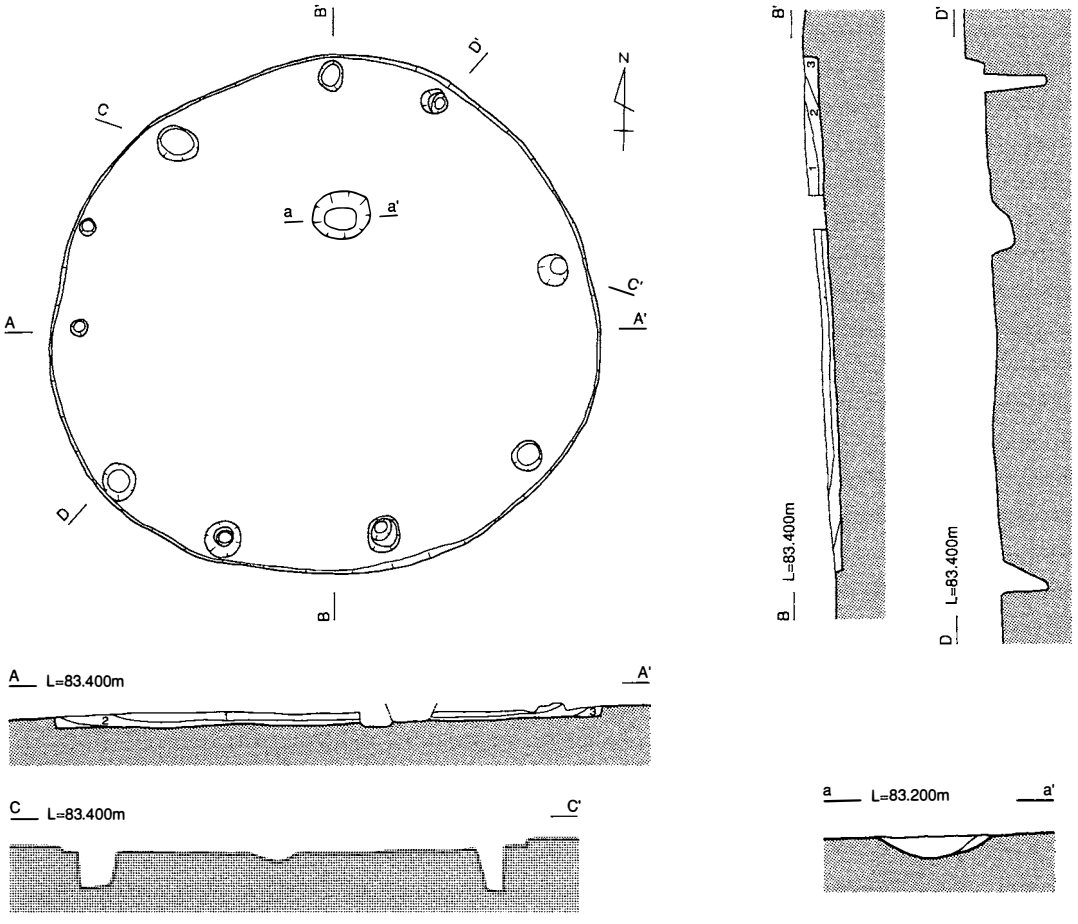
第12図　15－04号住居址遺構実測図



第13図　15－04号住居址出土遺物実測図１



第14図　15－04号住居址出土遺物実測図２



第15図　15－05号住居址遺構実測図

【遺物】（第11図）

本住居址からは、土器と石器が出土している。土器は破片であるが、実測可能な 5 点を図示している。石器は剥片と礫であるため、図示していない。

15－04号住居址

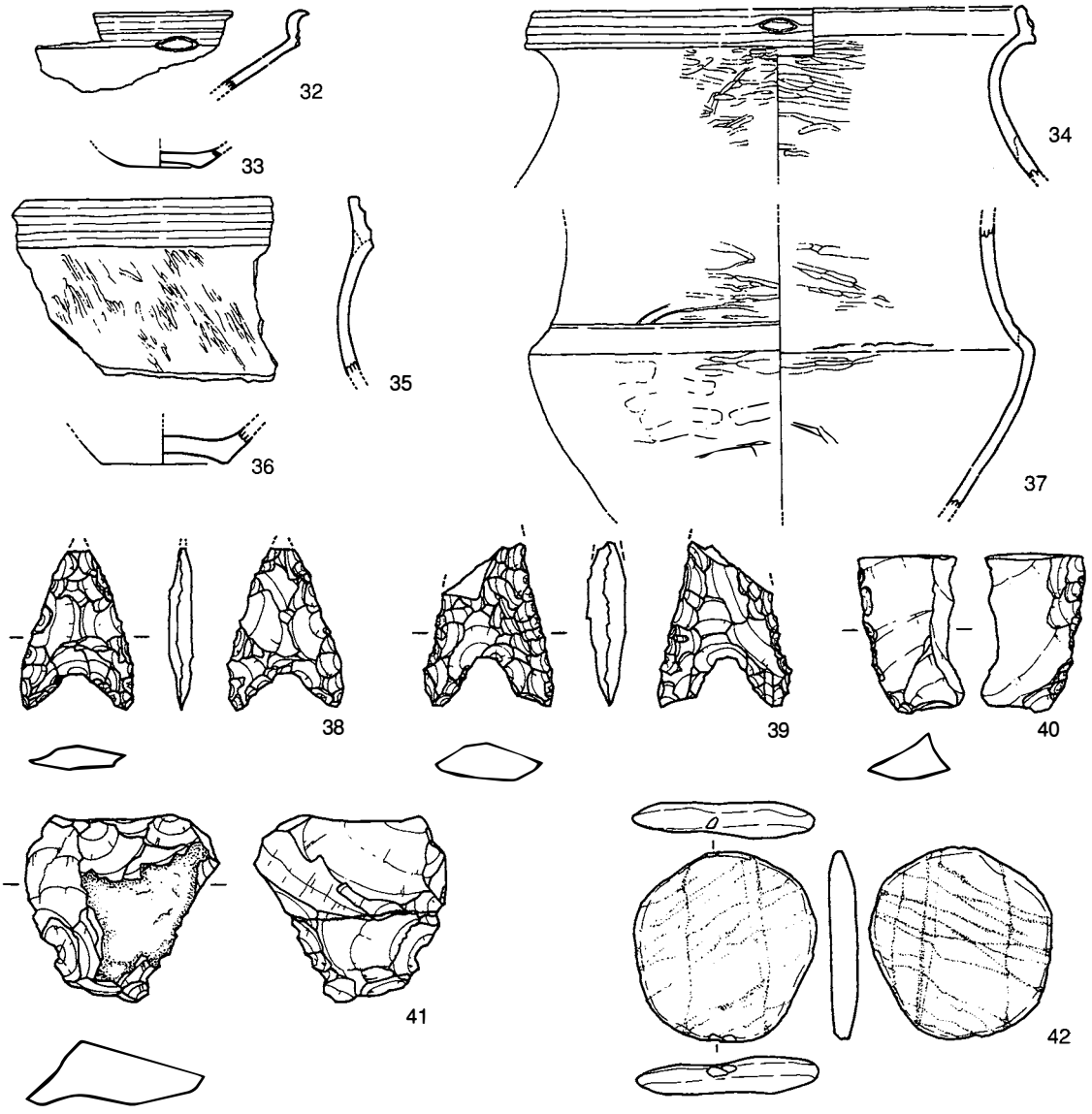
【遺構・埋土】（第12図・図版16）

調査区南側に位置し、南西側に傾斜した斜面上に造られている。15－01号や15－02号等の一群からやや西に離れている。平面プランは円形を呈し、長径は5.9ｍ、短径は5.5ｍを測る。遺構検出面から床面までの深さは20cmである。柱穴は 9 個確認された。中央に炉跡とおぼしき焼土の落ち込みが検出され、65×45cmを測るが未検出の部分もあり、本来はさらに大きいと考えられる。硬化面はなく、複数のピットが確認された。

住居址の埋土は 1 層で、褐色の粒子を含んだ暗褐色土（埋土 1 層）であった。

【遺物】（第13・14図・図版112・113）

本住居址からは、土器と石器が出土している。土器は破片であるが、比較的全体の形状が明らかなものも含んでいる。 6 点を実測した。石器は打製石斧、磨製石斧、石鏃、敲石・磨石、二次加工のある剥片等が出ており、それらの中から幾つか選んで図示している。



第16図　15－05号住居址出土遺物実測図

15－05号住居址

【遺構・埋土】（第15図・図版17）

調査区南側に位置し、15－01号や15－02号住居址に近接するように造られている。平面プランは円形を呈し、長径は5.7ｍ、短径は5.5ｍを測る。遺構検出面から床面までに深さは20cmである。柱穴は10個確認され、ほぼ均等に壁際に並んでいる。中央よりやや北寄りの場所に60×50cmの炉跡が１基検出され、焼土が堆積している。硬化面やその他のピットは検出されなかった。

住居址の埋土は３層に分かれ、いずれも暗褐色を基調とする。粘質を持たずしまりのない、焼土含みのもの（埋土１層）、やや粘質を持ちしまりのある、焼土を多く含むもの（埋土２層）と土質は埋土２層に近いが焼土を含まないもの（埋土３層）に分けられるが、埋土３層は壁際に三角堆積したものである。

【遺物】（第16図）

本住居址からは、土器と石器が出土している。土器は破片のみであるが、反転復元可能な資料も含んでいる。６点を図示している。石器は石鏃、石錘、二次加工のある剥片、剥片が出ており、それらの中から幾つか選んで図示している。

3　30区

【概要】（第17・18図・図版３）

石の本遺跡群の北東側に位置する東西に長い調査区である。南側中央部に向かってすり鉢状に傾斜している。遺跡群の中央を通る丘陵の東縁にあたり、標高84.8ｍから86.8ｍにかけて位置している。造成等によってかなり整地されており、特に北側は近隣の調査区との間に１m近く段差が生じている。

遺構としては、竪穴住居址５軒の他に円形周溝遺構１基が検出されている。竪穴住居址は近接しているが、北側の３軒は上面を削平され、床面のみの検出となった。住居址からやや東側のところに円形周溝がある。どちらも遺構検出面はⅢ層である。出土遺物は縄文土器、石器の他に勾玉、管玉、石刀、土偶等が出土しており、包含層遺物が卓越している。土器は深鉢、浅鉢が主であるが小形の浅鉢やミニチュア土器も少数認められる。石器は打製石斧、磨石がやや多く、磨製石斧、石鏃、二次加工のある剥片等が見られる。勾玉、管玉、石刀、土偶はほとんど包含層出土であるが、出土数自体少なく、当時の精神文化を考える上で重要な意味を持つと言える。特に石刀は本遺跡群唯一の出土であり、本調査区で出土した意味は大きい。

（１）　竪穴住居址

30－01号住居址

【遺構・埋土】（第19図・図版18）

調査区中央に位置し、中央を通る谷部の傾斜に沿うように造られている。上部をかなり削平されており、平面プランは定かではないが、柱穴の配置から円形の可能性が高い。径は６～6.5ｍと推定されるがはっきりしない。柱穴は４個確認された。またすべての柱穴内には柱痕が見られた。壁際には支柱穴と見られるピットが９個確認された。炉跡は中央付近に１基検出されており、85×65cmを測る。その周囲には約4.7×3.7ｍにわたって硬化面が確認されている。住居址に伴う硬化面は、本遺跡群においてあまり確認されていないため、貴重な事例と言える。

住居址の埋土については、削平により埋土が消失しており、確認できなかった。

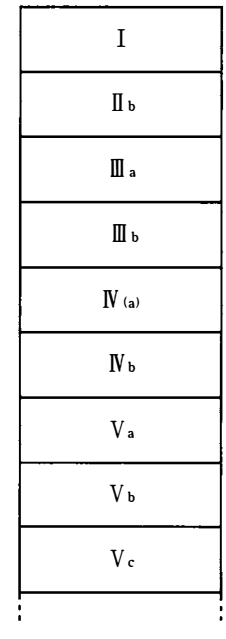
【遺物】

本住居址からは、縄文土器片と剥片が出土している。しかし土器片は、浅鉢の小破片であり図示できなかった。

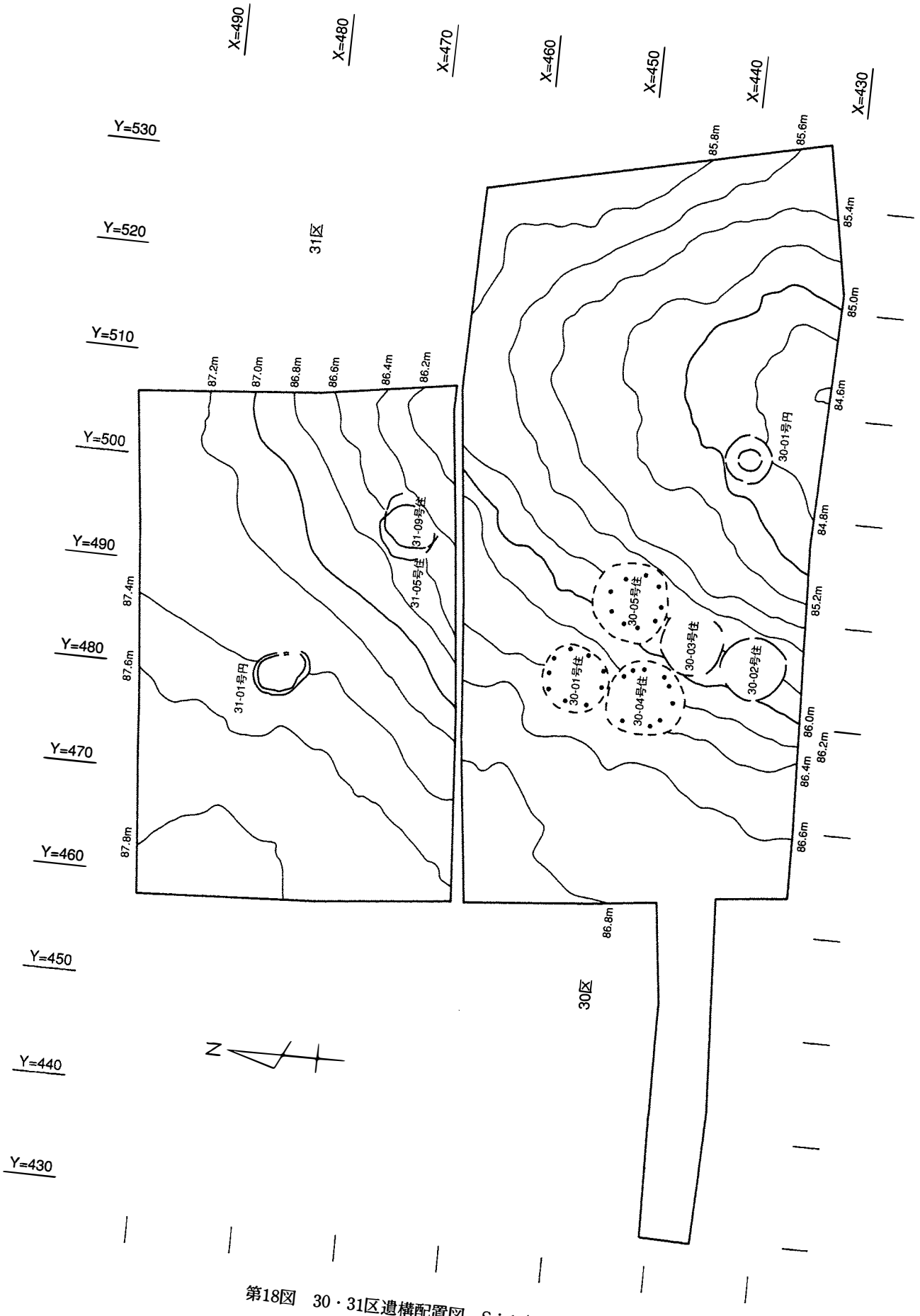
30－02号住居址

【遺構・埋土】（第20図・図版19）

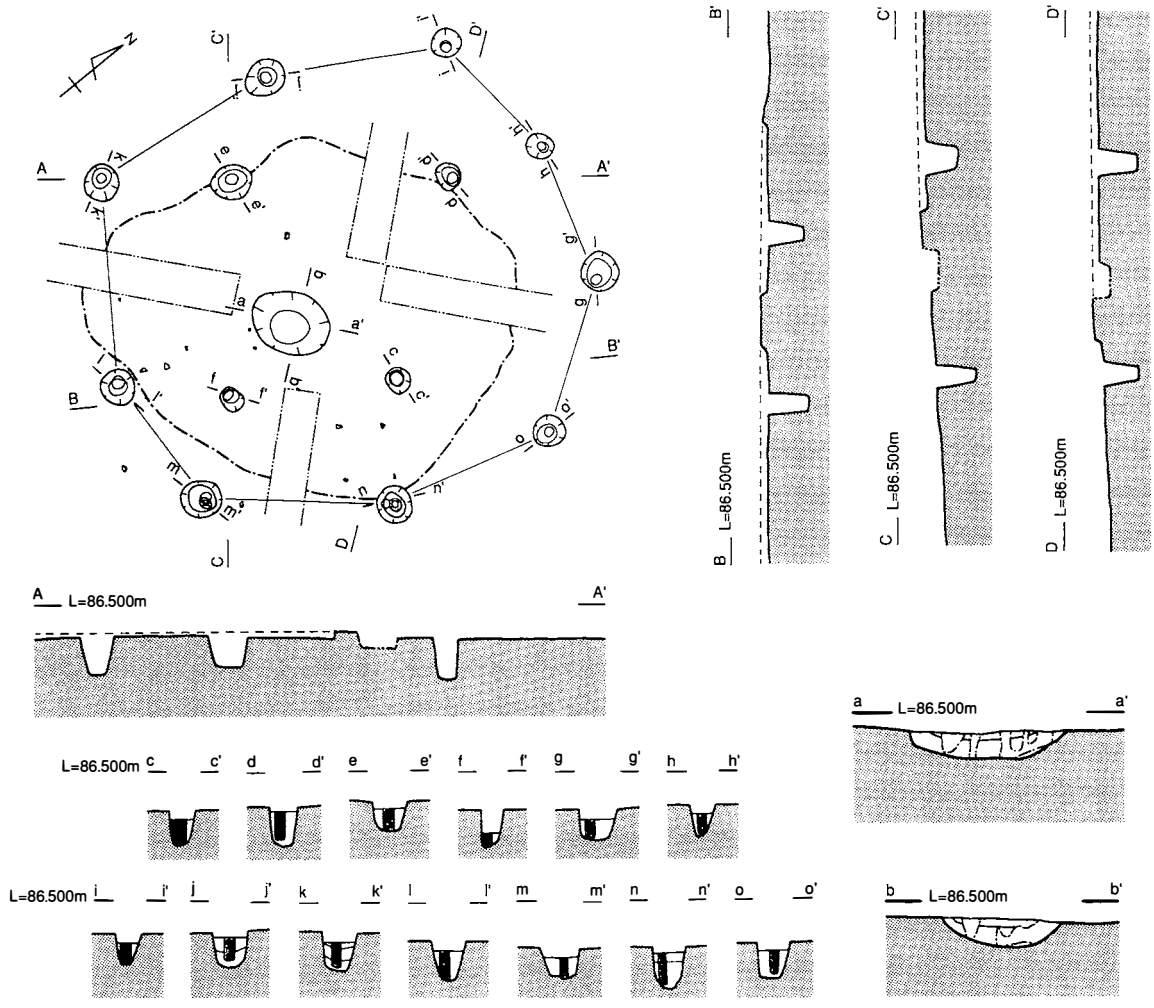
調査区南端に位置し、地形的には30－01号住居址と同様に谷部の傾斜に沿うように造られている。上部は削平されているが平面プランは円形を呈しており、長径は6.2ｍ、短径は6.0ｍを測る。遺構検出面から床面までの深さは10cmであるが、削平を受けているので本来はもっと深かったと考えられる。柱穴は10個確認された。北東の壁際には



第17図　30区基本層序図



第18図　30・31区遺構配置図　S：1/500



第19図　30－01号住居址遺構実測図

80×68cmの炉跡が 1 基検出されている。他に幾つかピットらしきものを検出したが、その用途を確認するには至らなかった。また硬化面は確認されなかった。

住居址の埋土は、削平を受けているためか、粘質をあまり持たずしまりのない暗褐色土しか確認されなかった。

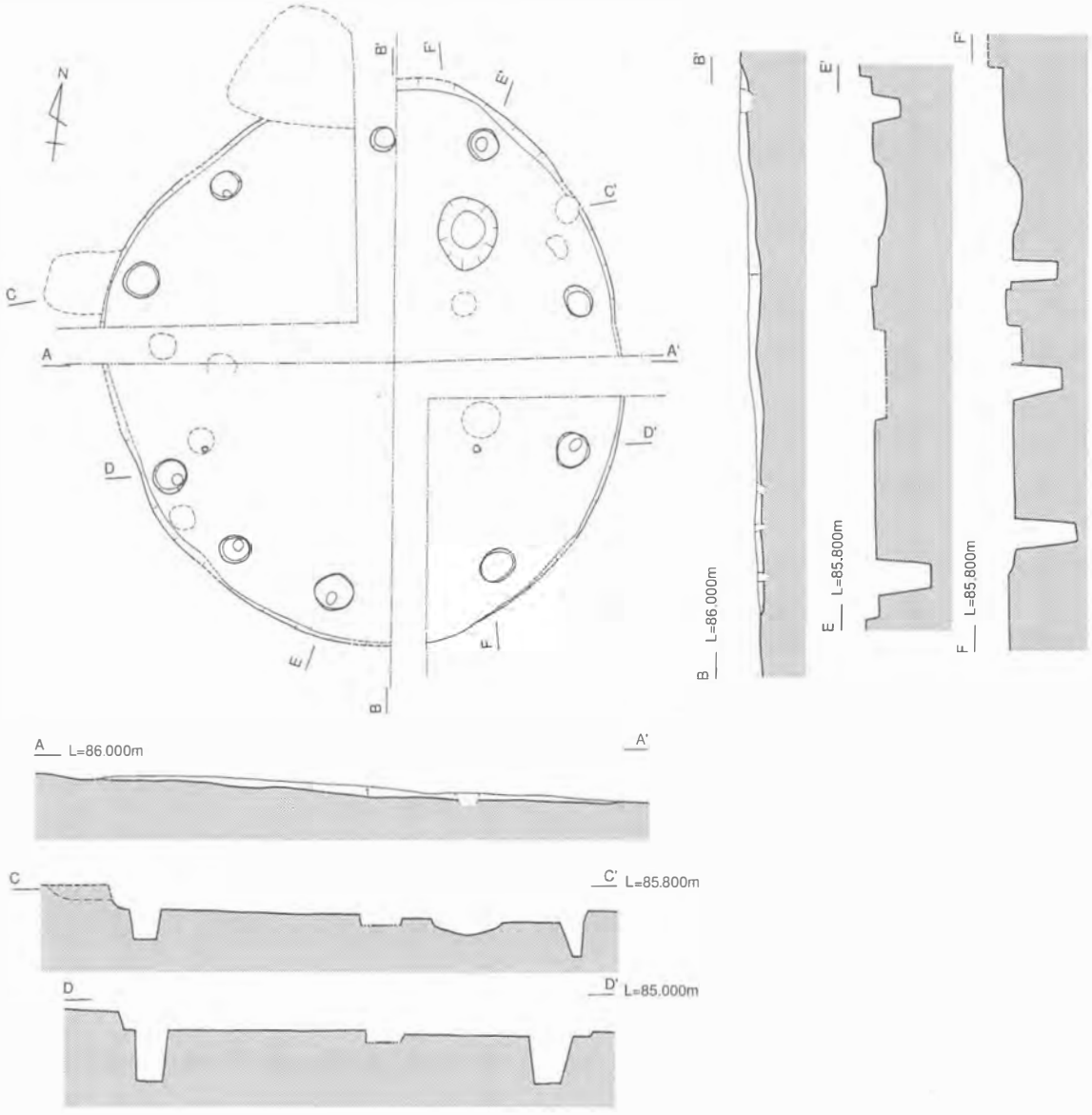
【遺物】（第21図）

本住居址からは、縄文土器と石器が出土している。縄文土器は少量しかないうえに、小破片が多く深鉢の底部 1 点のみ図示している。石器は打製石斧、敲石・磨石、二次加工のある剥片、剥片が出ており、それらの中から幾つか選んで図示している。

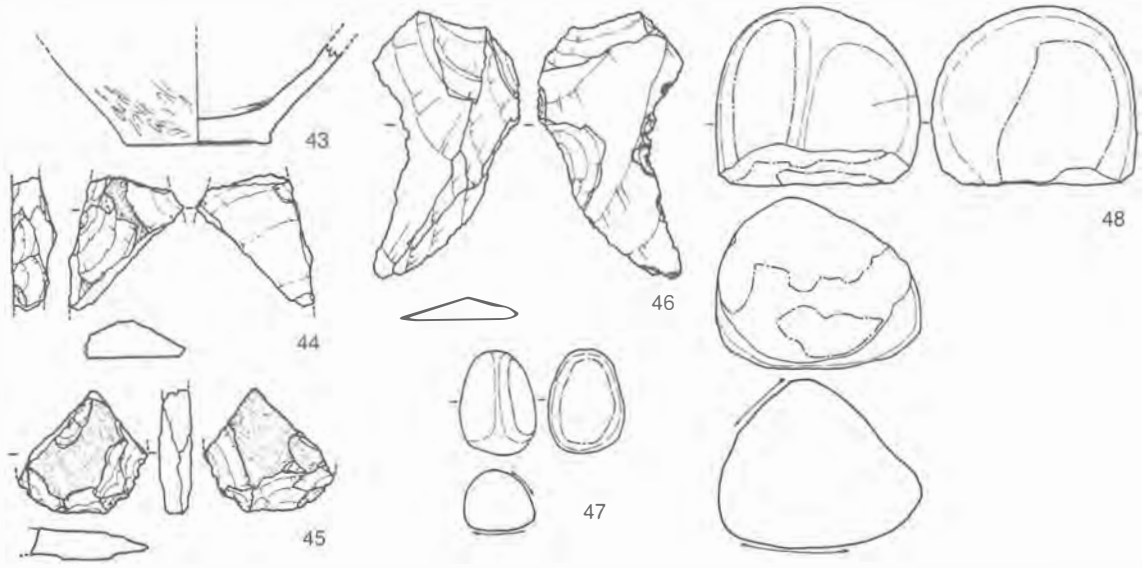
30－03号住居址

【遺構・埋土】（第22図・図版20）

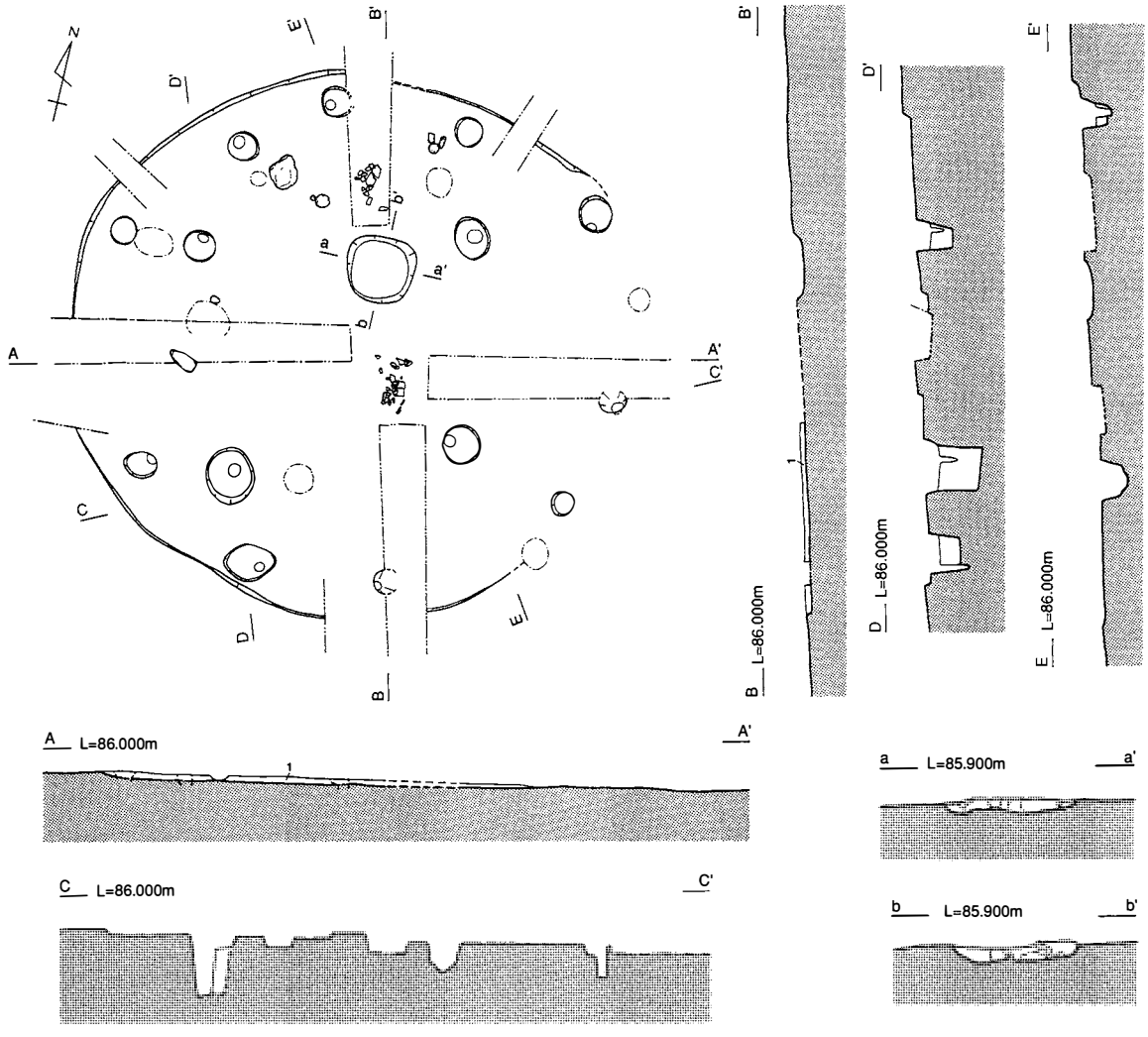
30－02号住居址の北に位置し、上部は削平されて東側の壁面を消失している。平面プランは円形を呈していたと推測される。規模も残存状況から長径は5.8ｍ以上、短径は5.8ｍを測る。遺構検出面から床面までの深さは10cmであるが、30－02号住居址と同様に本来の深さではない。柱穴は 4 個確認された。また柱穴のなか



第20図　30－02号住居址遺構実測図



第21図　30－02号住居址出土遺物実測図



第22図　30－03号住居址遺構実測図

には柱痕を残すものもあった。壁際には30－01号同様、支柱穴と見られるピットが10個確認された。中央よりやや北寄りの場所に80×70cmの炉跡が１基検出され、焼土が堆積している。硬化面は確認されなかった。住居址の埋土は、30－02号住居址同様１層のみで、粘質をあまり持たずしまりのない、焼土を含む暗褐色土である。

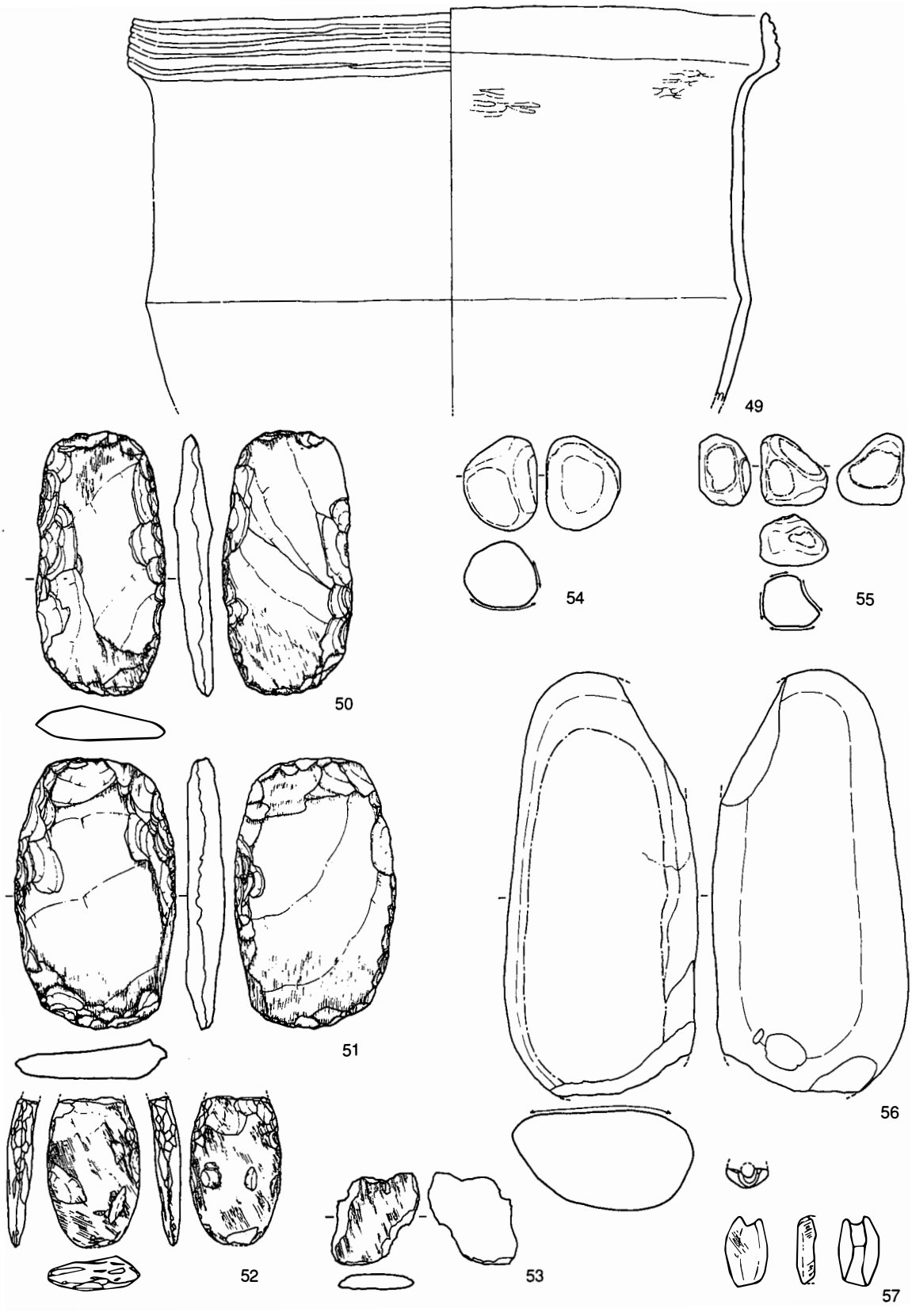
【遺物】（第23・24図・図版114・115）

本住居址からは、縄文土器と石器、そして管玉が出土している。縄文土器は破片が多い中で、残りの良い深鉢を１点図示している。石器は打製石斧、磨製石斧、石鏃、敲石・磨石、石皿が出ており、それらの中から幾つか選んで図示している。管玉は１点のみの出土である。

30－04号住居址

【遺構・埋土】（第25図・図版21）

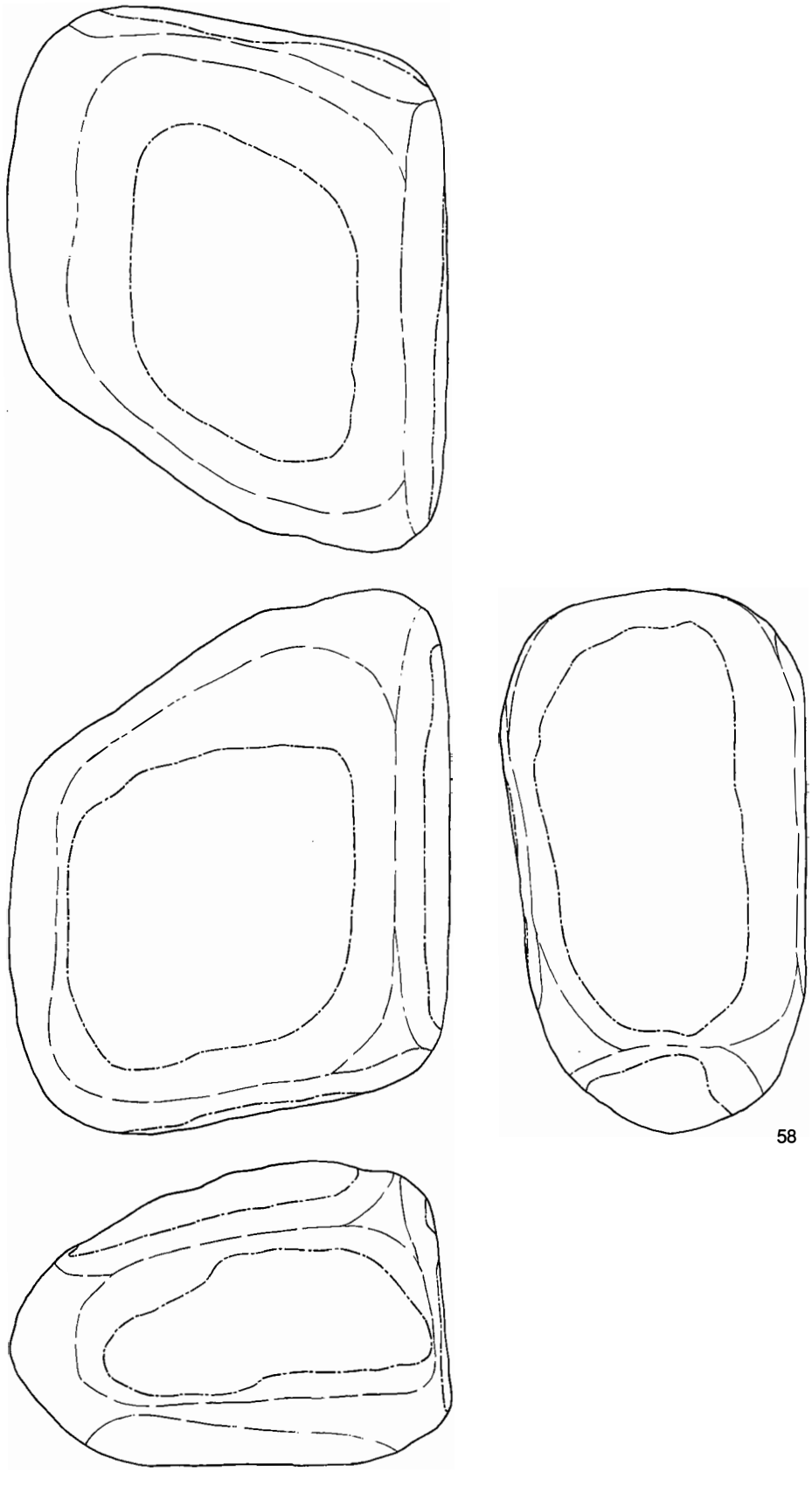
30－01号住居址と30－03号住居址の間に位置し、上部を削平されて壁面が消失している。平面プランははっきりしないが、柱穴の配置から円形の可能性が高い。径は６～７mと推定されるがはっきりしない。柱穴は９個確認されているが、周辺には複数のピットがあり、住居址に伴う可能性もある。炉跡はないが、中心部に約



第23図　30－03号住居址出土遺物実測図１

3.0×2.4ｍの範囲で硬化面を確認した。

住居址の埋土については、削平により埋土が消失しており確認できなかった。



第24図　30－03号住居址出土遺物実測図２

【遺物】（第26図）

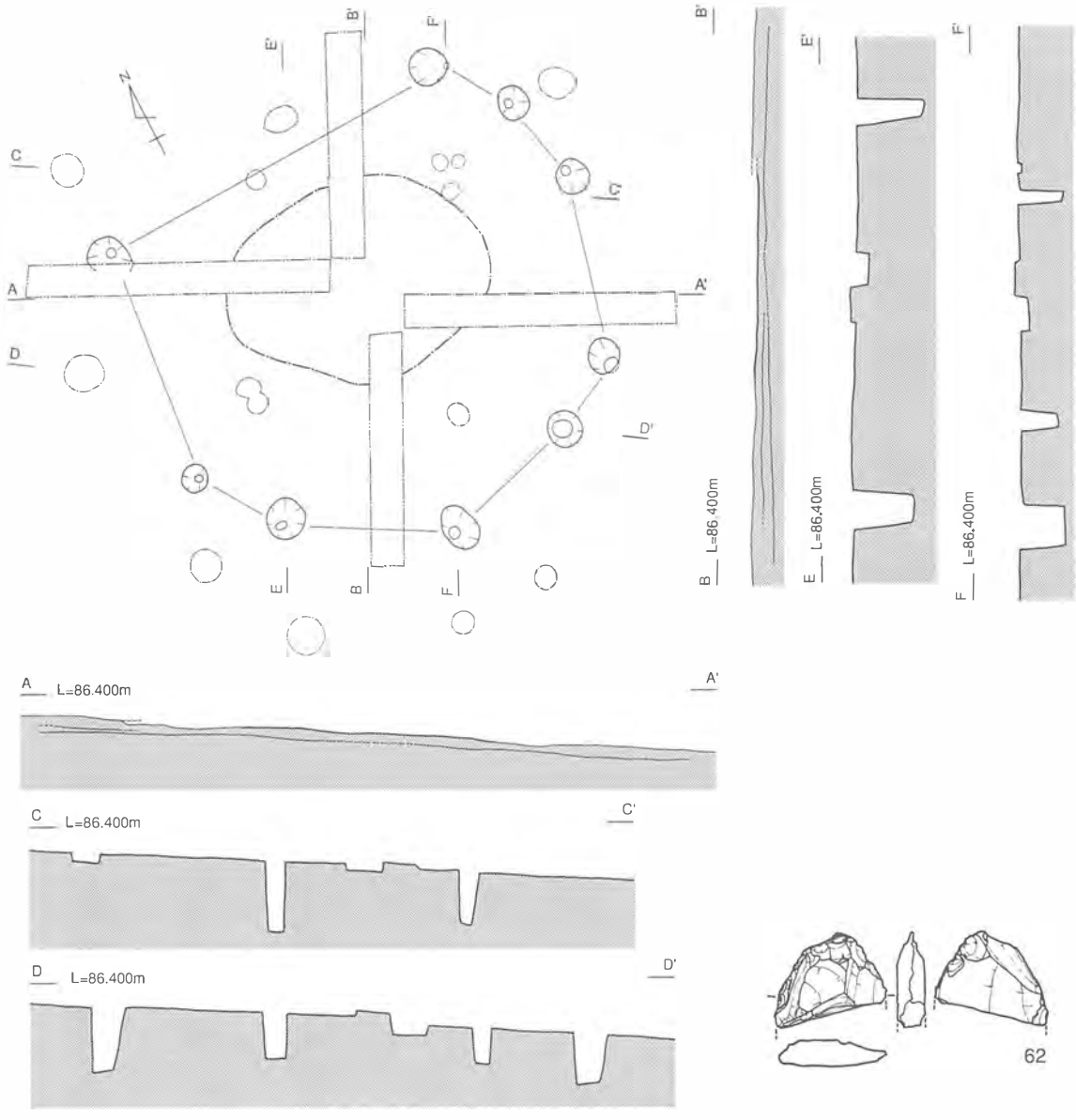
本住居址からは、縄文土器と石器が出土している。縄文土器は破片のみで浅鉢１点、深鉢１点を図示して

いる。石器は打製石斧、石鏃、敲石・磨石、剥片が出土しており、剥片以外を図示している。

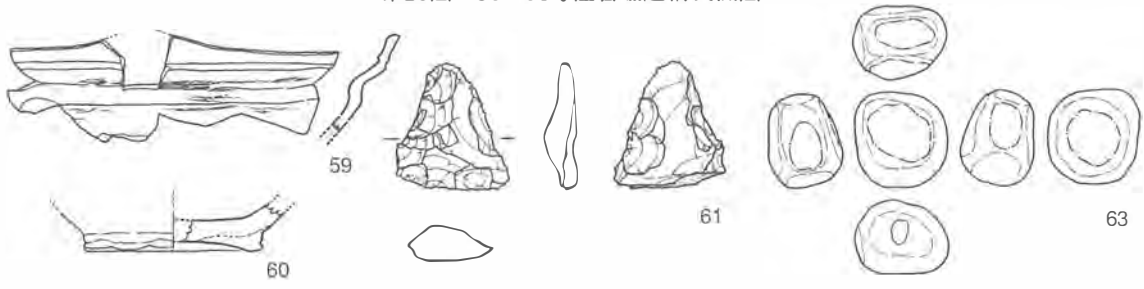
30－05号住居址

【遺構・埋土】（第27図・図版22）

住居址群の中で最も東側に位置する。30－01号、30－04号住居址同様、床面しか残っていないが柱穴の配置から、平面プランは円形と推測される。柱穴は９個確認された。また柱痕も確認されたが、断面での図示



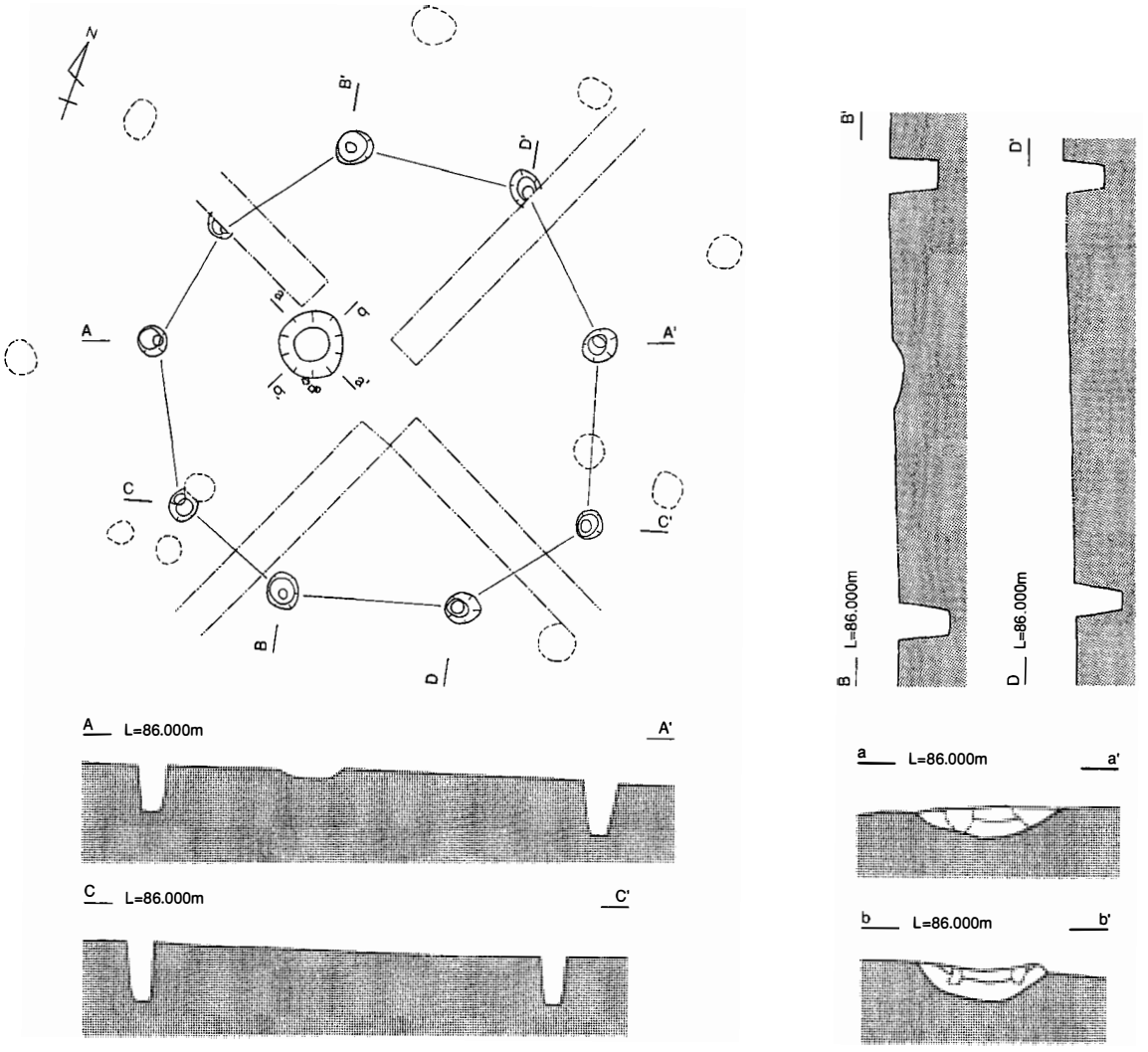
第25図　30－04号住居址遺構実測図



第26図　30－04号住居址出土遺物実測図

が困難であったため平面図のみ掲載した。中央よりやや西寄りの場所に70×70cmの炉跡が１基検出され、焼土が堆積している。硬化面は確認されなかった。

住居址の埋土については、削平により埋土が消失しており確認できなかった。



第27図　30－05号住居址遺構実測図

第28図　30－05号住居址出土遺物実測図

【遺物】（第28図）

本住居址からは、縄文土器が出土している。破片しかないものの、浅鉢を１点図示しておく。

（２）　その他

30－01号円形周溝

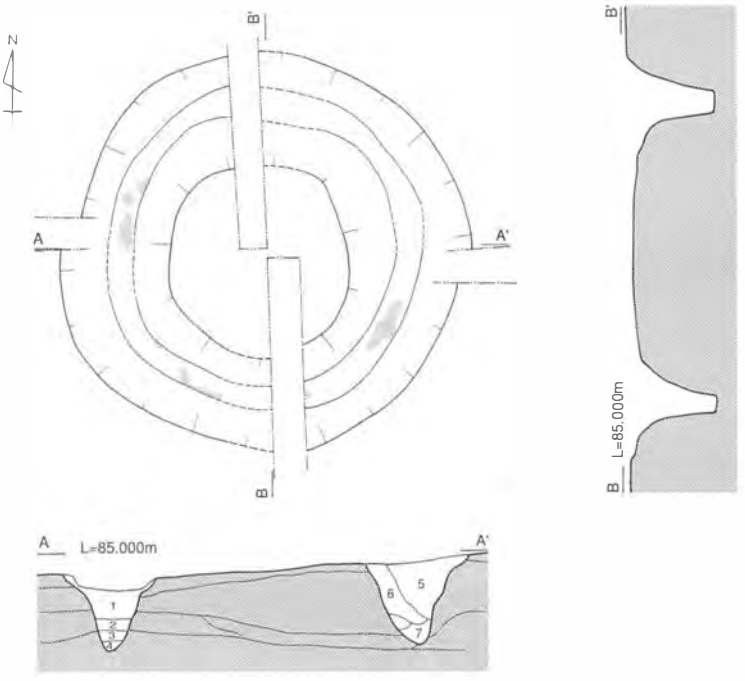
【遺構・埋土】（第29図・図版23）

調査区南側に位置する。平面プランは円形を呈する。長径は4.6m、短径は4.4mを測り、周溝の幅は1.2ｍ、遺構検出面から最深部までの深さは90cmである。周溝内には所々に焼土が堆積し、うち数箇所には集中して焼土が堆積している。周囲には本円形周溝に伴うような遺構は確認されなかった。

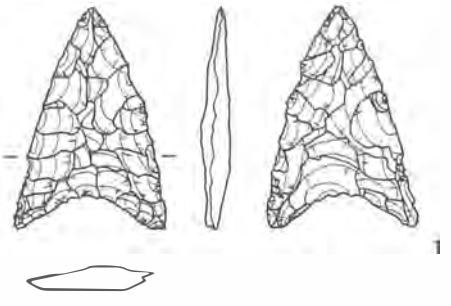
円形周溝遺構の埋土は、それぞれ３～４層に分けられる。南側の層位は、暗褐色を基調とし、それぞれ粘質を持ちしまりのあまりないもの（埋土１・３・４層）と粘質を持ちしまりのあるもの（埋土２層）に分けられる。埋土２・３層に焼土が集中している。北側の層位は、黒褐色土と暗褐色土を基調とし、粘質を持ちやしまりのある黒褐色土（埋土５層）、粘質を持ちしまりのあまりない暗褐色土（埋土６・７層）に分けられる。埋土６・７層は、アカホヤを含むもの（埋土７層）とそうでないもの（埋土６層）で区別される。焼土はほとんど含まず、わずかに埋土７層に見られるだけである。層位的にみて埋土１層と６層、埋土４層と７層は、同時期のものと考えられる。しかし埋土５層に対応する層が南側にはなく、他の層が堆積した後、流入したものであろう。

【遺物】（第30図）

埋土中より縄文土器片と石鏃が出土している。ここでは石鏃を図示しておく。



第29図　30－01号円形周溝遺構実測図



第30図　30－01号円形周溝出土遺物実測図

4　31区

【概要】（第18・31図・図版４）

石の本遺跡群の北東側に位置する調査区である。30区の真北に接しており、立地や状況は30区とほぼ同じであるが、30区が南側中央部に向かってすり鉢状に傾斜しているのに対し、31区は北西から南東に向かって傾斜している。標高86ｍから88ｍにかけて位置している。30区以上に削平が進んでいる。

遺構としては、竪穴住居址２軒と円形周溝遺構１基が検出されている。他にも土壙や溝が検出されているが当該時期のものとは言い難く、ここで扱う遺構は上記の３基のみである。住居址は南側に集中し、そこから北西に15ｍ程離れた場所に円形周溝がある。いずれも少なからず削平されている。遺構検出面はⅢｃ層であるが、本来はもっと上のⅢｂ層ではないかと考えられる。出土遺物は縄文土器、石器であるが、遺物の出土量そのものが少なく、小破片が大半である。

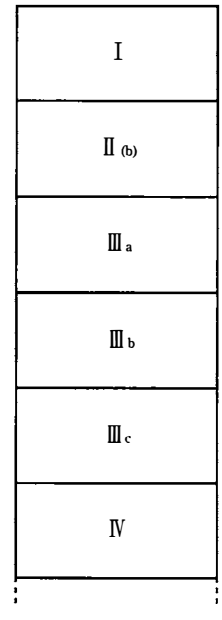
（１）　竪穴住居址

31－05号住居址

【遺構・埋土】（第32図・図版24）

調査区南側に位置し、谷部の西斜面に沿うように造られている。上部を削平されているが、平面プランは円形を呈する。長径は5.4ｍ、短径は5.2ｍを測る。遺構検出面から床面までの深さは16cmであるが、削平を受けているので本来はもっと深かったと考えられる。ピットを複数検出したが、すべて柱穴とは認識できなかった。炉跡は中央付近に１基検出されており、120×68cmを測る。ただし、焼土が集中しているのは中心部の80×68cmの範囲内であり、本来炉跡と呼称されるのはこの部分のみと考えられる。硬化面は確認されなかった。なお、本住居址は後述する31－09号住居址と切り合っており、その新旧関係は31－09号の方が古いと考えられる。

住居址の埋土は、２層に分けられる。軟質で焼土をわずかに含む黒褐色土（埋土１層）と埋土１層よりややしまりがある暗褐色土（埋土２層）であるが、埋土２層は床面に張り付くように薄く堆積しており、埋土のほとんどは埋土１層で占められる。



第31図　31区基本層序図

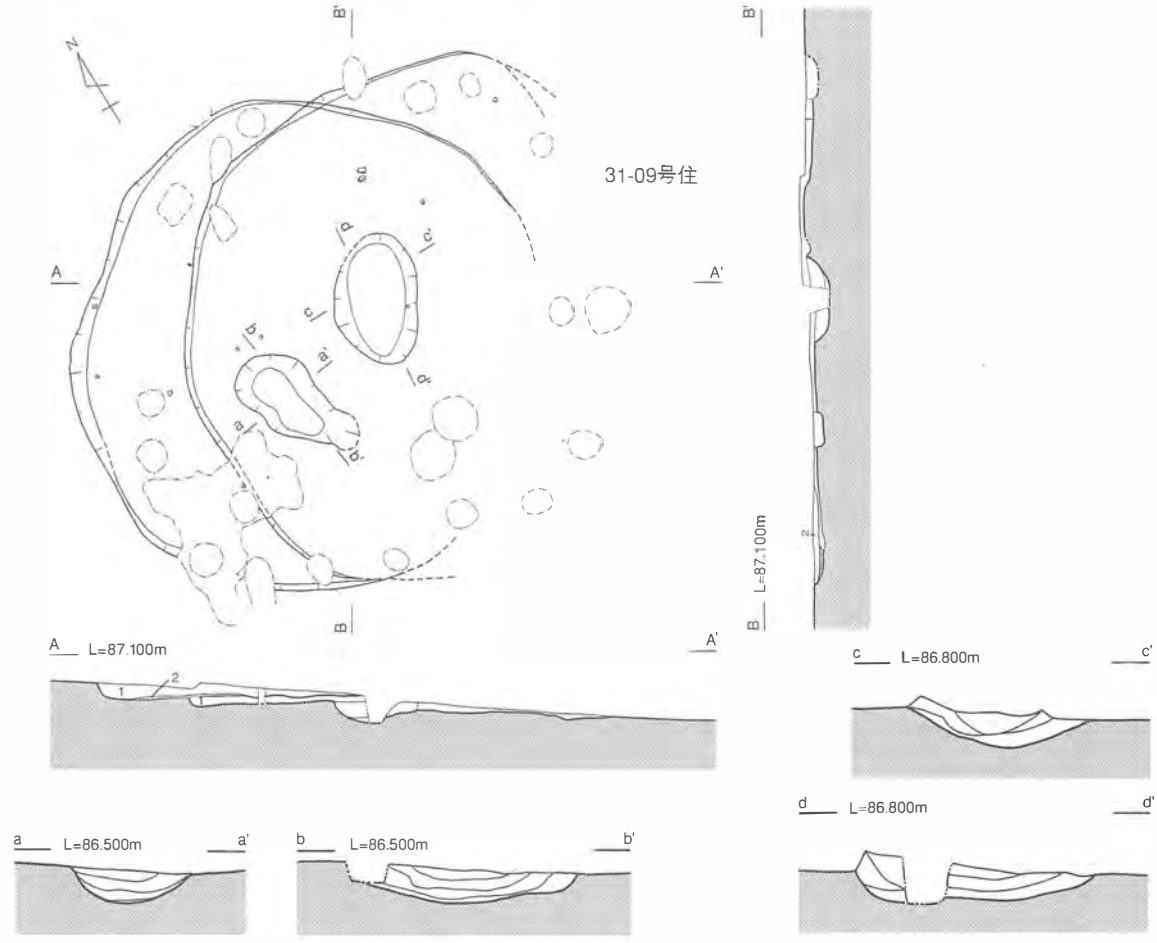
【遺物】（第33図）

本住居址からは、土器と石器が出土している。土器は小破片のため、図示していない。石器は打製石斧が２点出土している。２点とも欠損品であるが、図示しておく。

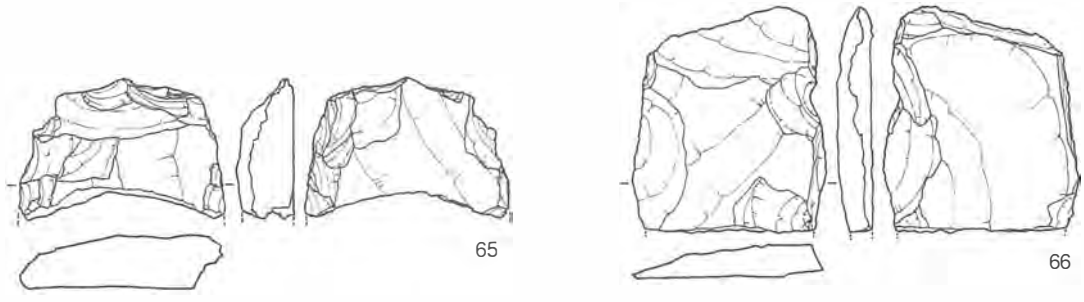
31－09号住居址

【遺構・埋土】（第32図・図版24）

31－05号住居址と切り合っており、立地等は31－05号住居址と同様である。削平のため半分程消失しているが、残存状況から平面プランは円形を呈していたと考えられる。長径は5.8ｍ、短径は2.5m以上を



第32図　31－05・09号住居址遺構実測図



第33図　31－05号住居址出土遺物実測図

測る。本住居址は31－05号住居址検出後に見つかったため、遺構検出面から床面までの深さは10cmと浅い。31－05号住居址同様、柱穴は確認できなかった。炉跡は中央付近に１基検出されており、140×90cmを測る。硬化面は確認されなかった。本遺構は、残存状況が悪く、31－05号住居址との新旧関係や遺構の認定等に不確定な要素が多いものの、ここでは住居址として報告しておく。

住居址の埋土は１層のみで、ややしまりのある焼土を含む暗褐色土である。床面に近い埋土はやや硬化していた。

【遺物】

本住居址からは、遺構に伴うような遺物は出土していない。

（2）　その他

31－01号円形周溝

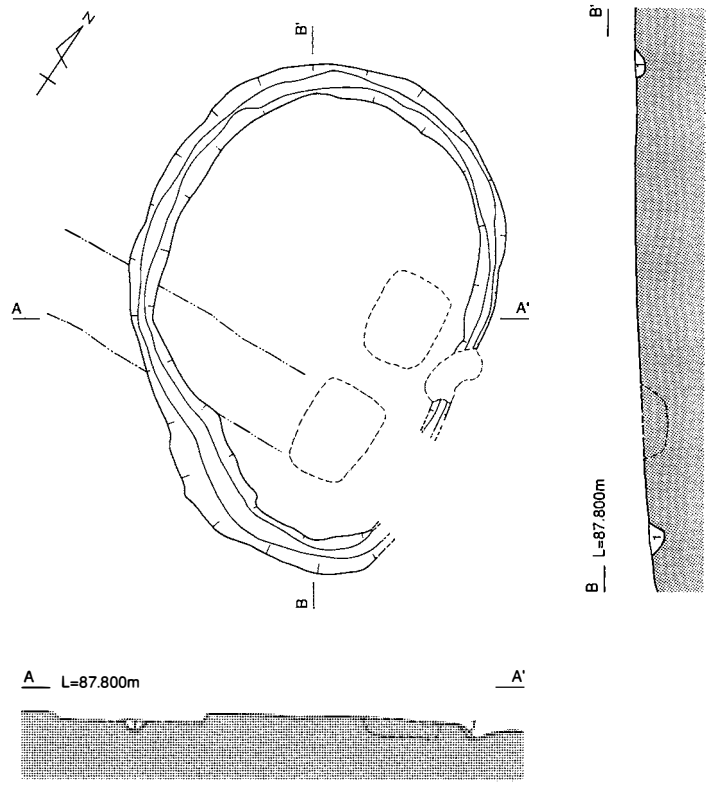
【遺構・埋土】（第34図・図版25）

調査区中央に位置する。上面を削平されていたが、平面プランは楕円形を呈する。これは、本遺跡群で検出された円形周溝遺構の中では唯一の例である。長径は5.3ｍ、短径は3.9mを測り、周溝の幅は0.3m、遺構検出面から最深部までの深さは20cmである。上面を削平されているためか、他の円形周溝遺構に比べて周溝の深さはやや浅い。周囲には本円形周溝に伴うような遺構は確認されなかった。

円形周溝遺構の埋土は、１層のみ確認された。しまりのある暗褐色土で、細かい茶褐色の斑点を含む。

【遺物】

遺構内からは、遺物は出土しなかった。



第34図　31－01号円形周溝遺構実測図

5　35区

【概要】（第35・36図・図版5）

石の本遺跡群の北側に位置するやや南北に長い調査区である。当該時期の遺構が多く分布する丘陵の東縁に立地し、東側には遺跡群を縦断する谷が走っている。調査区は北西から南東に向かって緩やかに傾斜している。標高90.6ｍから91.2mにかけて位置している。造成等で削平され、表土掘削時には平らに整地されていた。真北にある36区との間に段差があるのはそのせいである。

遺構としては、竪穴住居址2軒が検出されている。調査区の東から南側に分布しているが、全体的に残存状況は悪く、かろうじて壁面を検出した程度である。遺構検出面はⅢａ層であるが、Ⅲａ層そのものが削平されているため、本来の検出面はもう少し上ではないかと考えられる。出土遺物は縄文土器、石器であるが、遺物の出土量そのものが少なく、小破片が主である。

竪穴住居址

35－01号住居址

【遺構・埋土】（第37図・図版26）

調査区南側に位置している。調査区全体がかなり削平されているが、平面プランは円形を呈し、長径5.9ｍ、短径5.5ｍを測る。遺構検出面から床面までの深さは最大20cmである。柱穴は6個確認された。中央に炉跡が1基検出されたが、半分近く削平されていた。残存状況から径は100cm程ではないかと推測される。硬化面やその他のピットは検出されなかった。

住居址の埋土は、図中にはないが3層に分けられる。粘質を持たずしまりのない灰黒色土（埋土1層）と粘質を持たずあまりしまりのない暗黄褐色土（埋土2層）、粘質をやや持ちしまりのある黄褐色土（埋土3層）であるが、撹乱が多く、残りはあまり良好ではない。

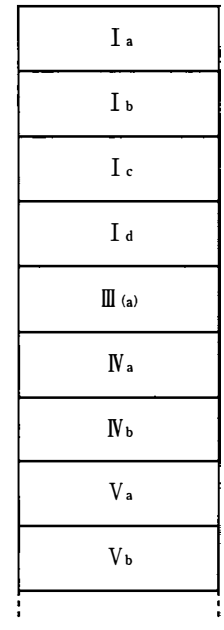
【遺物】

本住居址からは、遺構に伴うような遺物は出土していない。

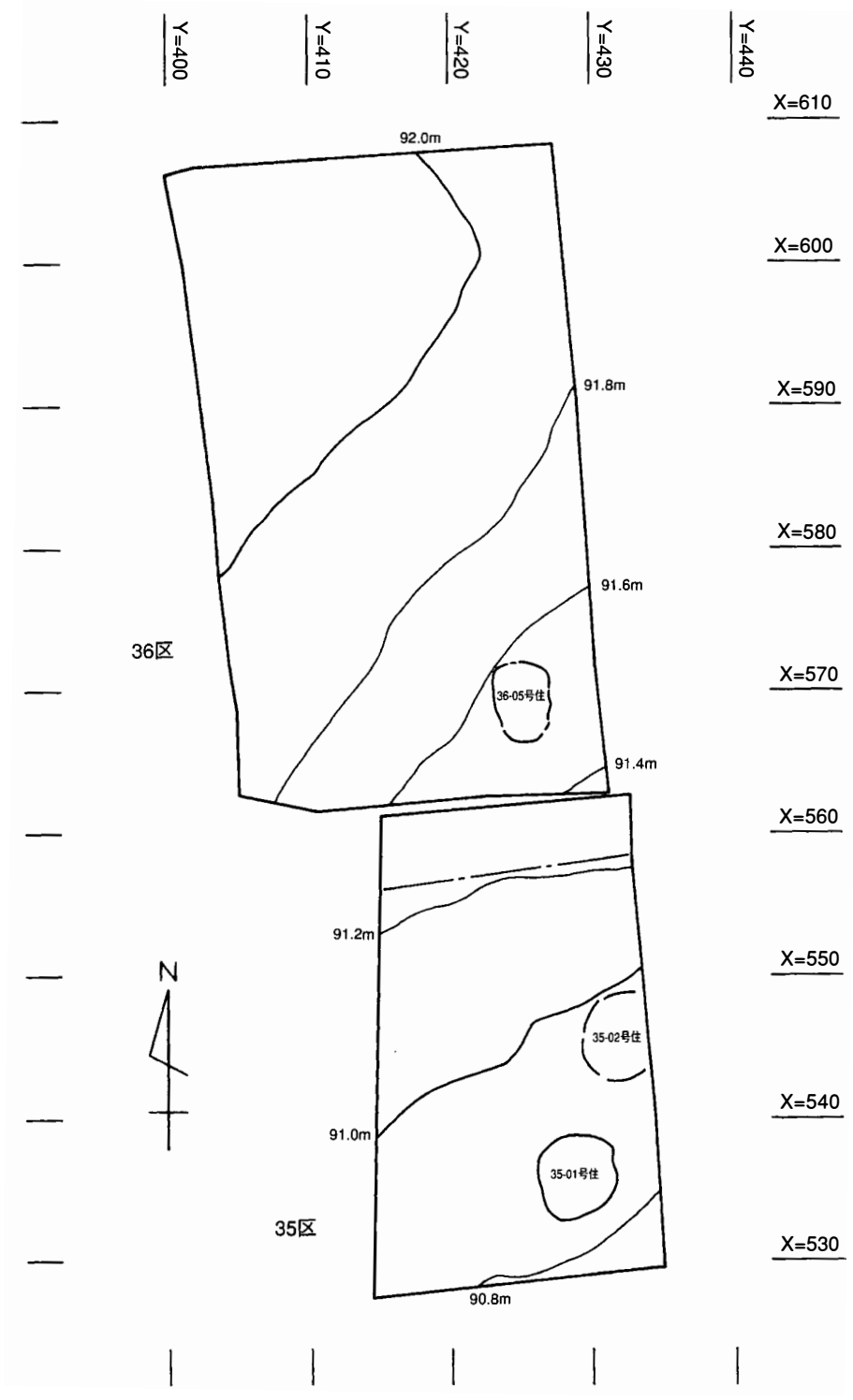
35－02号住居址

【遺構・埋土】（第38図・図版27）

調査区東側に位置し、35－01号住居址の北側にある。約1／3が後世の撹乱と調査区外のため検出されなかったものの、平面プランは円形を呈していたと考えられる。長径は6.0ｍ、短径は4.1ｍ以上を測る。遺構検出面から床面までの深さは、最大10cmである。柱穴は、3個確認されたが削平・未検出の部分にもあった可能性もある。中央よりやや東寄りの場所に炉跡とおぼしき掘り込みがあるが、後世の撹乱によりその詳細は不明である。硬化面やその他のピットは確認されなかった。なお中央よりやや北西寄りの場所に円礫が幾つかまとまって検出された。当初、石囲い炉ではないかと考えたが、精査の結果、本遺



第35図　35区基本層序図



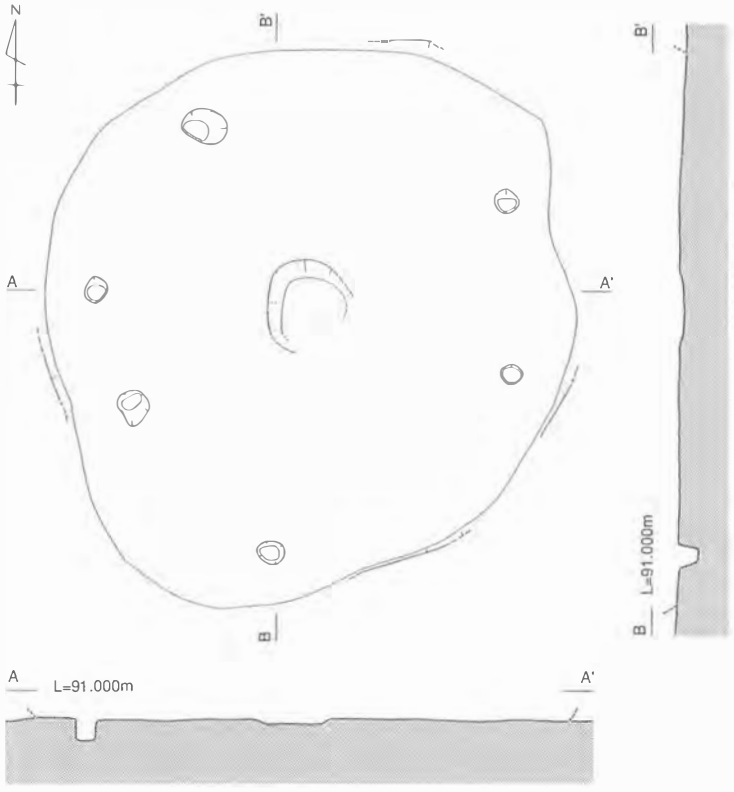
第36図　35・36区遺構配置図　S：1/500

構とは無関係であることが判明した。

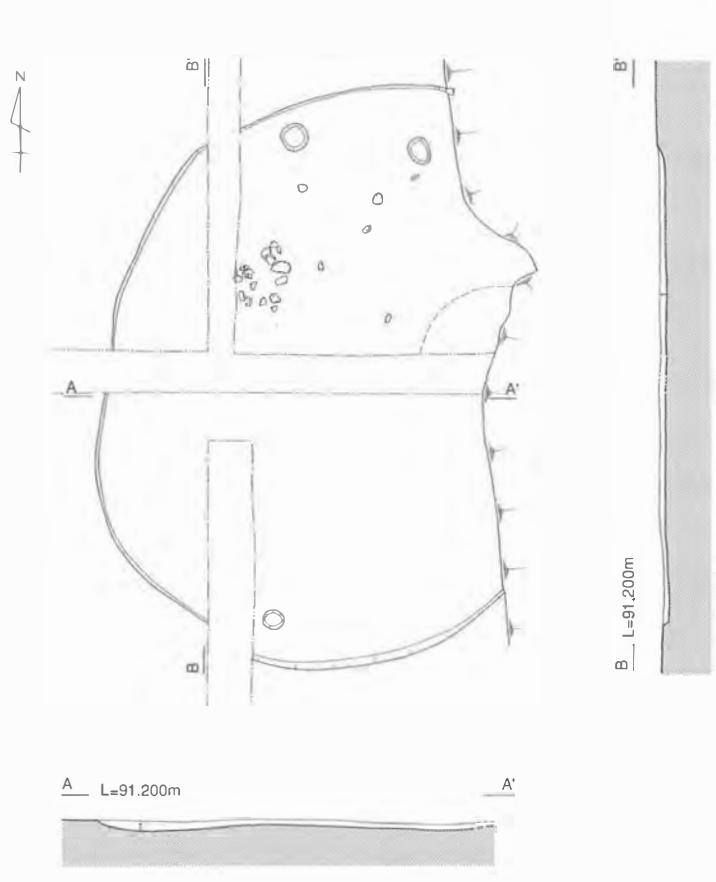
住居址の埋土は、1層のみ確認した。土質は35−01号住居址の埋土1層と同様である。

【遺物】

本住居址からは、遺構に伴うような遺物は出土していない。



第37図　35－01号住居址遺構実測図



第38図　35－02号住居址遺構実測図

6　36区

【概要】（第36・39図・図版６）

石の本遺跡群の北側に位置する南北に長い調査区である。35区の真北に接しており、立地や状況は35区とほぼ同じである。標高91.4ｍから92ｍにかけて位置している。35区同様、旧地形の傾斜を無視して削平、整地されているためか、調査区北西部には下層にあるニガ土が顔を覗かせている。

遺構としては、竪穴住居址１軒が検出されている。当初、他にも住居址があるのではないかと考え、精査してみたが、検出できたのは上記の１軒のみである。遺構は調査区の南側に分布しているが、これは北に行くにしたがって下層が露出していることも要因の一つと考えられる。遺構検出面はⅢ層上層である。出土遺物は縄文土器、　石器の他に土偶、焼成粘土塊等も出土している。遺構内遺物よりも包含層遺物の方が卓越している。土器は深鉢、浅鉢の他、鉢も出土しており、残存状況も比較的良好なものがある。石器は打製石斧、石鏃、敲石・磨石、二次加工のある剥片がやや多く、磨製石斧、石匙、石皿、砥石等が見られる。また土偶は、本遺跡群内で最も多く出土している。特に土偶の破片の接合例は、本遺跡群で唯一の事例であり、本調査区の性格を考える上で重要な資料となる。

竪穴住居址

36－05号住居址

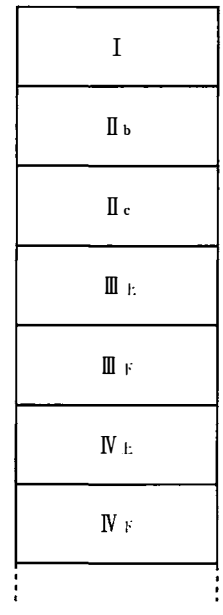
【遺構・埋土】（第40図・図版28）

調査区南側に位置し、南東方向に傾斜する斜面上に造られている。上面は削平されているが、平面プランは楕円形を呈している。長径は5.8ｍ、短径は4.0ｍを測る。遺構検出面から床面までの深さは15cmである。柱穴は、掘り込みが浅いものの少なくとも６個を確認しているが、他にも複数のピットを検出しており、本来柱穴として掘られていた可能性がある。中央には径60cm程の焼土の集中箇所が確認されたが、明確な掘り込みは見られず、炉跡としてよいか疑問である。硬化面は確認されなかった。

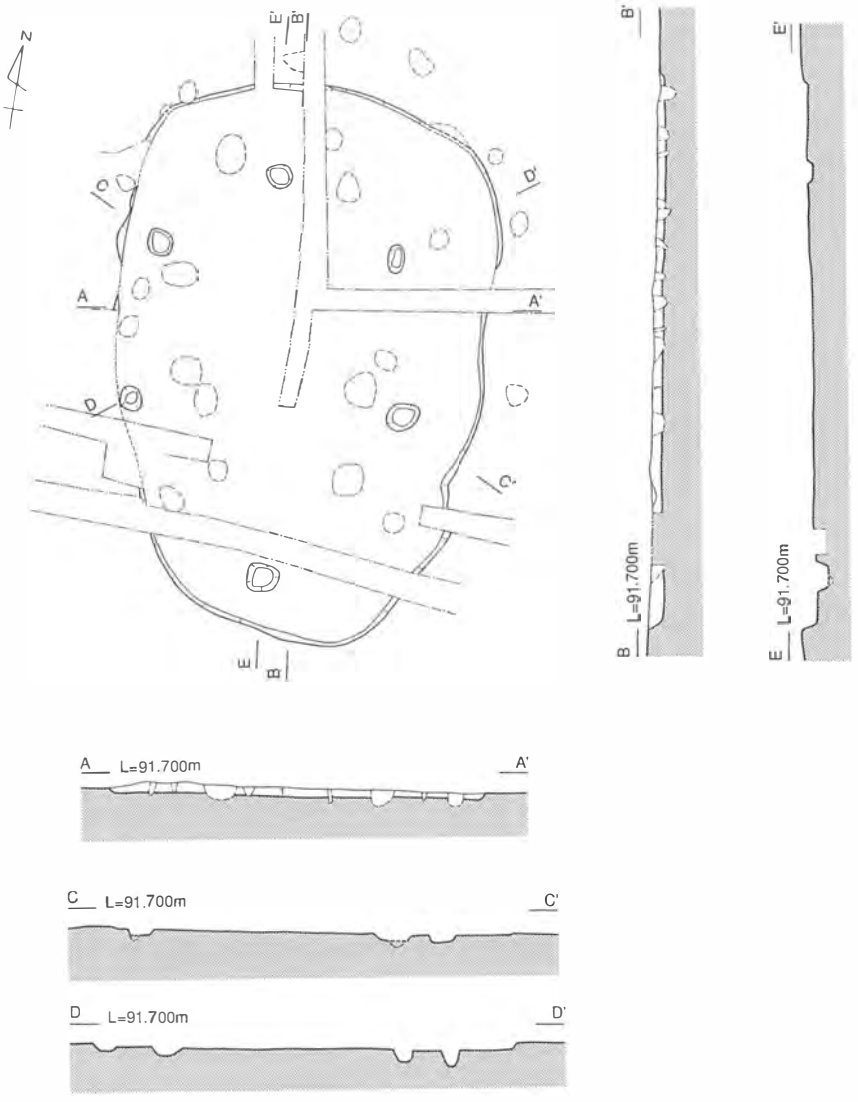
住居址の埋土は、粘質のあまりなく、しまりもあまりない焼土混じりの暗褐色土が確認されたのみである。

【遺物】（第41～43図・図版116～118）

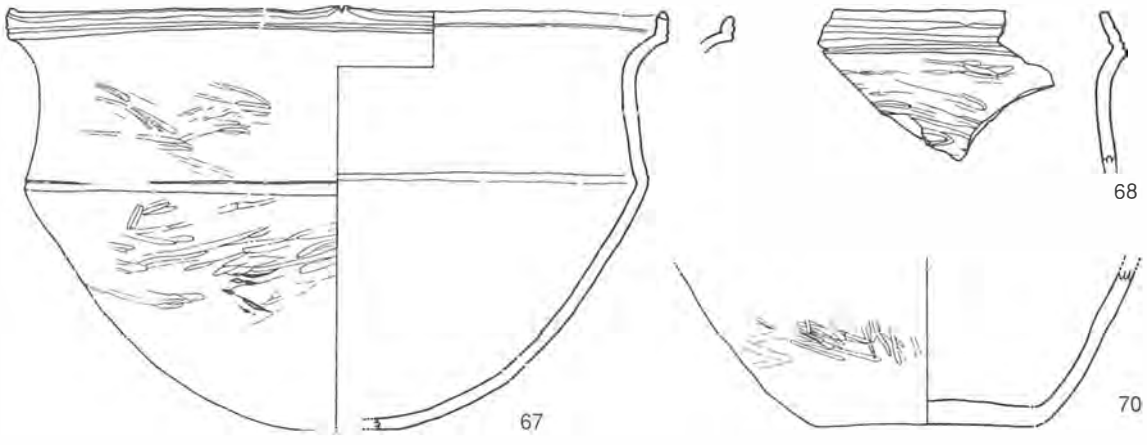
本住居址からは、土器と石器が出土している。土器は破片が多い中で、残りの良い浅鉢を含む４点を図示している。石器は打製石斧、敲石・磨石、石皿、砥石等が出ており、それらの中から幾つか選んで図示している。



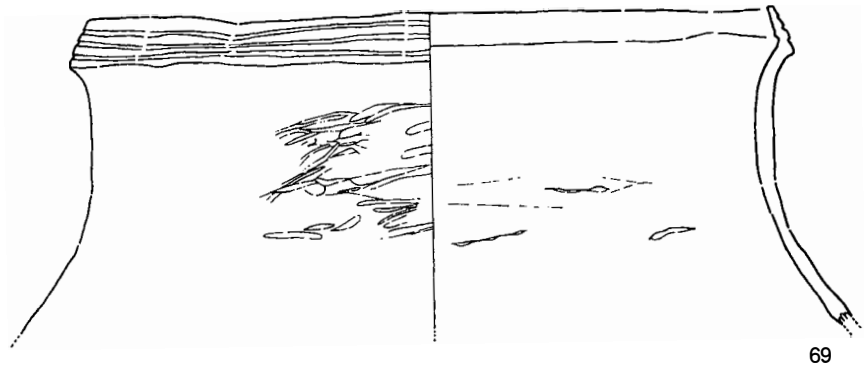
第39図　36区基本層序図

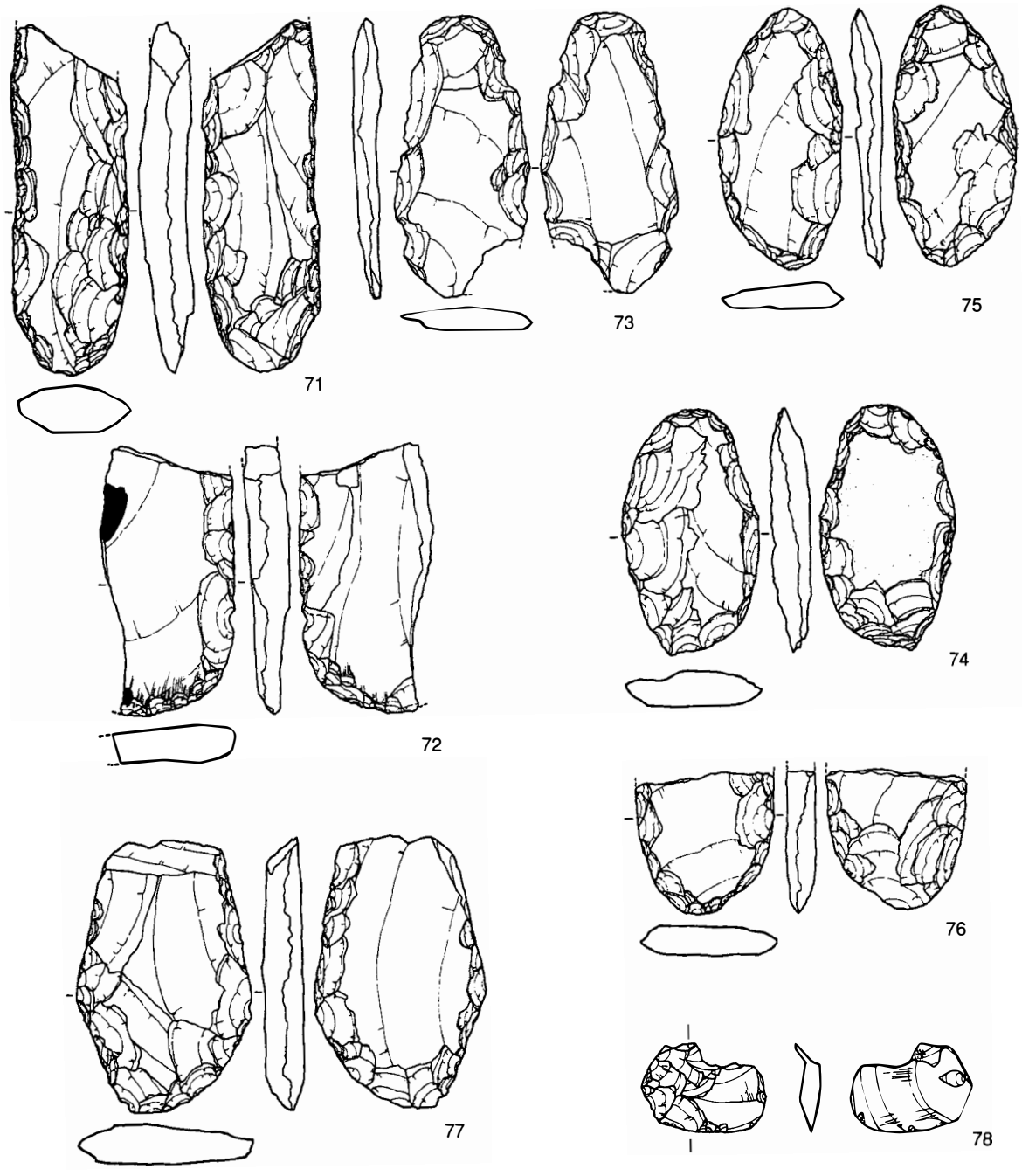


第40図　36－05号住居址遺構実測図

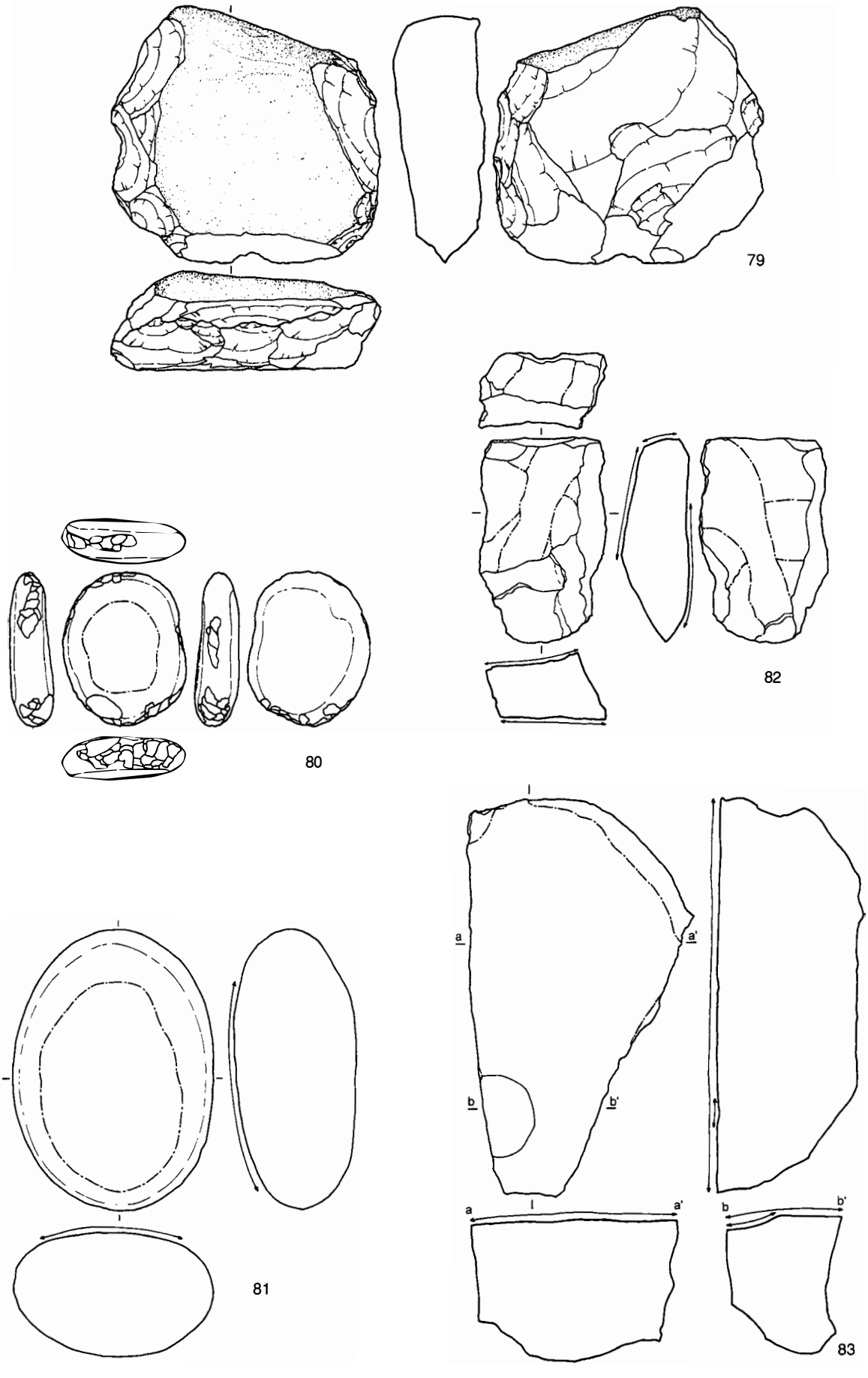


第41図　36－05号住居址出土遺物実測図１





第42図　36－05号住居址出土遺物実測図２



第43図　36－05号住居址出土遺物実測図３

7　38区北

【概要】（第44・45図・図版７）

石の本遺跡群の北側に位置する東西に長い調査区である。北西から南東に向かって緩やかに傾斜している。丘陵上に立地しており、本来はさらに北側に向かって高くなっていたと考えられるが、造成等で削平され、表土掘削時には平らに整地されていた。北西部では一部下の層が露出している。標高91.2ｍから92mにかけて位置している。

遺構としては、竪穴住居址２軒が検出されている。調査区の南側に近接して分布しているが、36区と同様に比較的削平されていない部分から見つかっている。遺構検出面はⅢ層である。出土遺物は縄文土器、石器が出土している。削平のためか、遺物の出土量自体が少ない。縄文土器は深鉢、浅鉢がほとんどで、破片が多いものの、中には残りの良い資料も混じっている。石器は打製石斧、石鏃、敲石・磨石、二次加工のある剥片が多く、磨製石斧、石皿等も見られる。

なお、「38」を冠する調査区は本調査区の他にも、後述する「38区南」と言う調査区がある。本来なら両区を統一して掲載するべきなのかもしれないが、時期的に隔たりがあるため別々に報告した方が良いと判断し、そのまま掲載している。ただ、遺構名については、38区としてある程度統一した名称にしている。

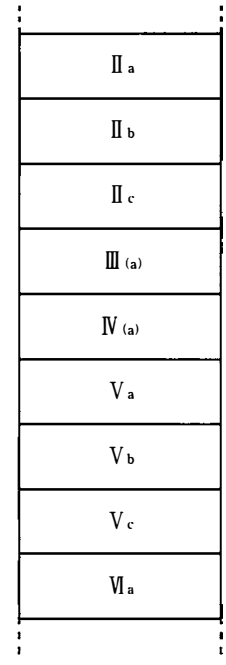
竪穴住居址

38－01号住居址

【遺構・埋土】（第46図・図版29）

調査区南側に位置する。南側は調査区外にあるため平面プランははっきりしないが、残存状況からして円形を呈していたと推測される。長径は5.3ｍ、短径は3.8ｍ以上を測る。遺構検出面から床面までの深さは30cmである。柱穴は住居址全体を検出していないものの、調査時点で４個を確認した。柱穴内には柱痕が見られた。中央よりやや西寄りの場所に100×90cmの炉跡が検出された。床面には硬化面は確認されなかった。

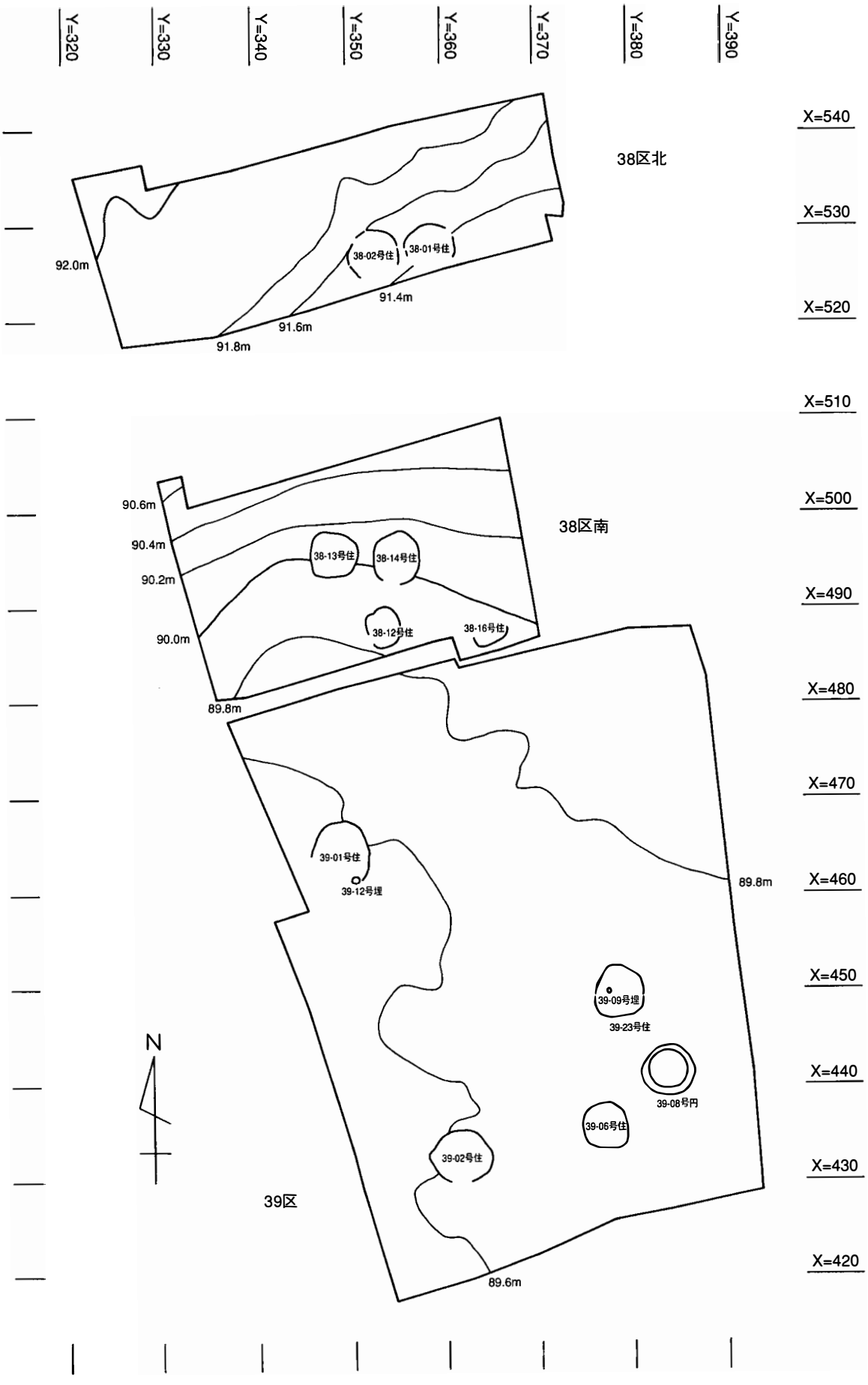
住居址の埋土は、基本的に１層のみである。Ⅱc層よりややしまりがあり焼土、炭化物を多量に含む明灰褐色土（埋土１層）であるが、壁面付近にⅢ層に似たしまりのある灰褐色土（埋土２層）が三角堆積している。



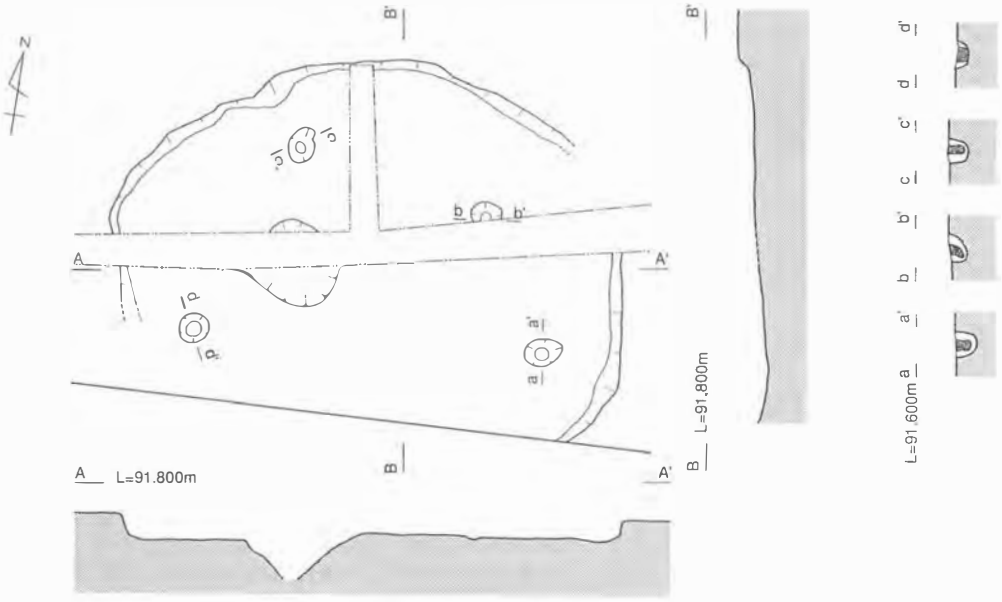
第44図　38区北基本層序図

【遺物】（第47図）

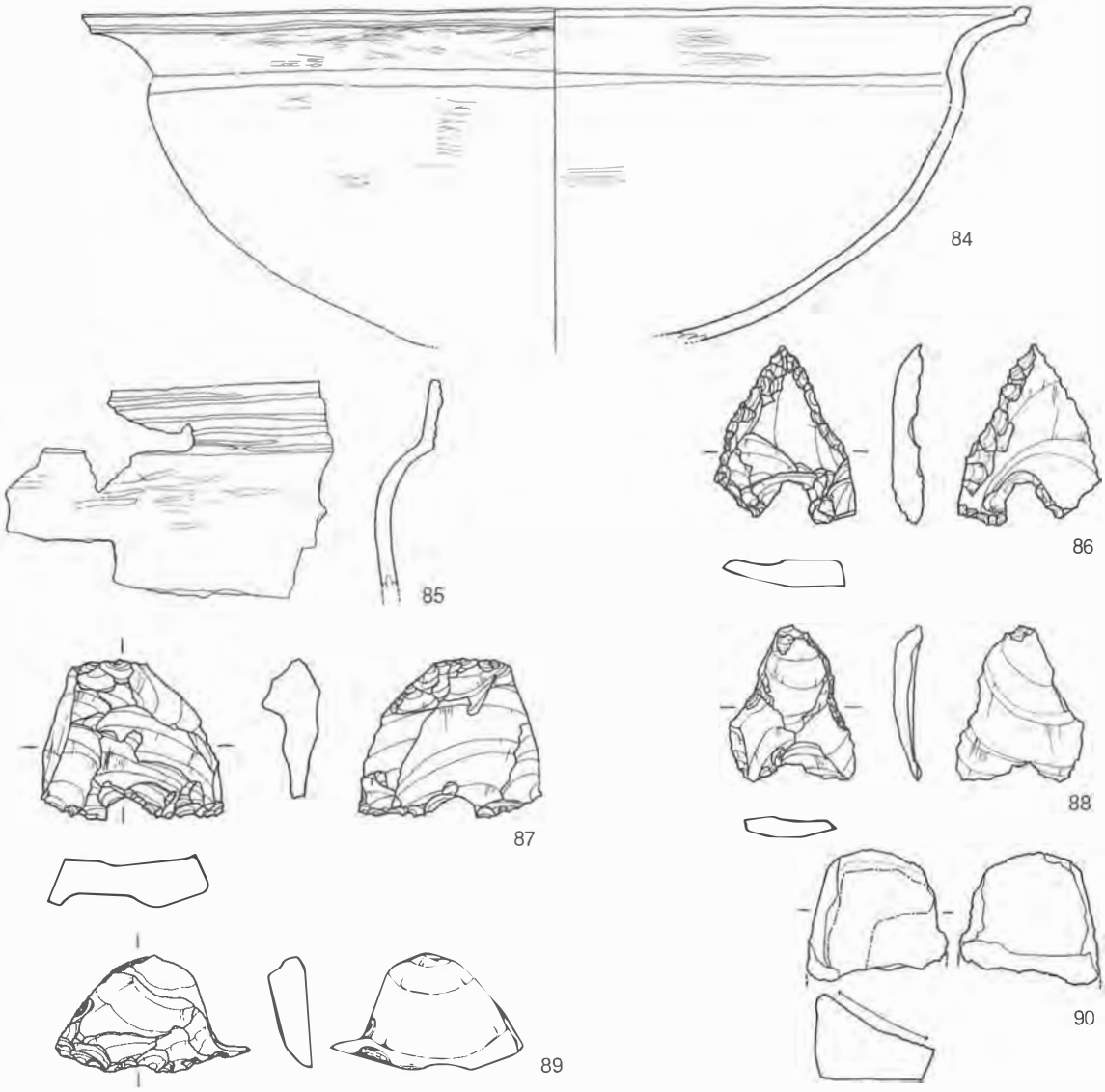
本住居址からは、縄文土器と石器が出土している。縄文土器は破片が多い中で、残りの良い浅鉢と深鉢の破片を図示している。石器は石鏃、楔形石器、敲石・磨石、砥石、二次加工のある剥片等が出ており、それらの中から幾つか選んで図示している。



第45図　38区北・南・39区遺構配置図　S：1/600



第46図　38－01号住居址遺構実測図



第47図　38－01号住居址出土遺物実測図

38－02号住居址

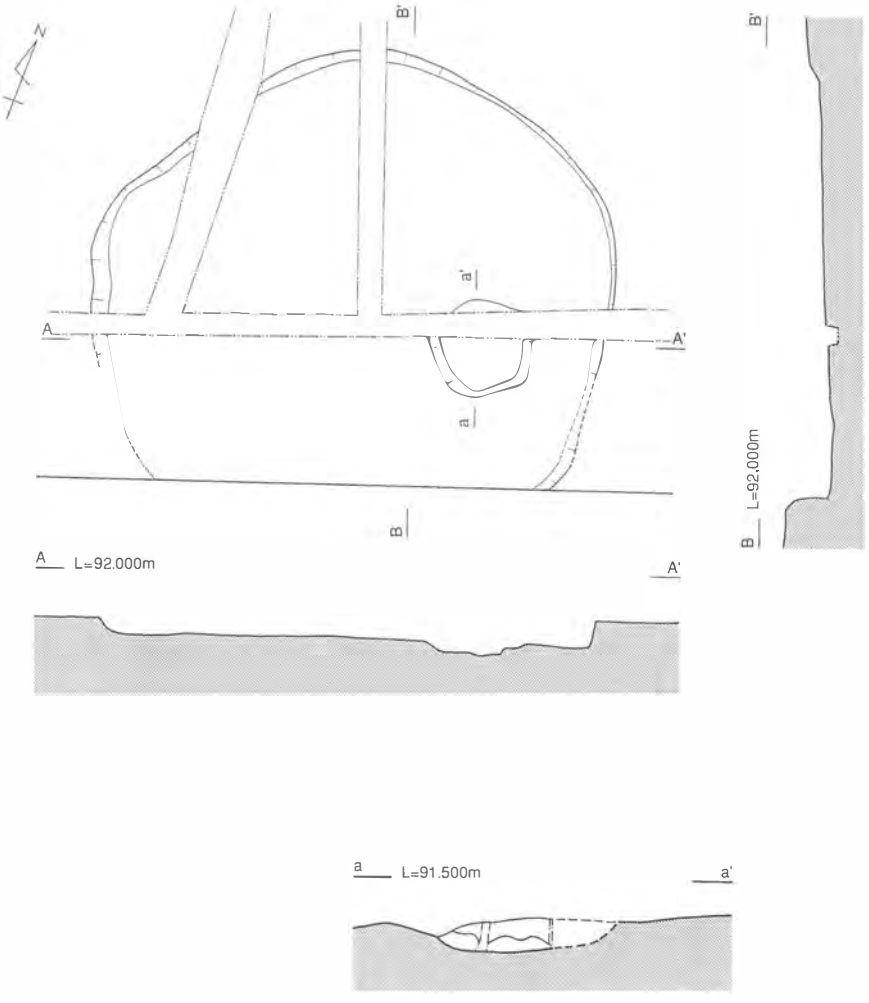
【遺構・埋土】（第48図・図版30）

38－01号住居址の西側に位置する。38－01号住居址同様、南側は調査区外にあるため平面プランははっきりしないが、残存状況からして同じく円形を呈していたと推測される。長径は5.5ｍ、短径は4.5ｍ以上を測る。遺構検出面から床面までの深さは25cmである。柱穴は確認されなかった。中央よりやや東寄りの場所に105×100cmの炉跡が検出された。床面には硬化面は確認されなかった。

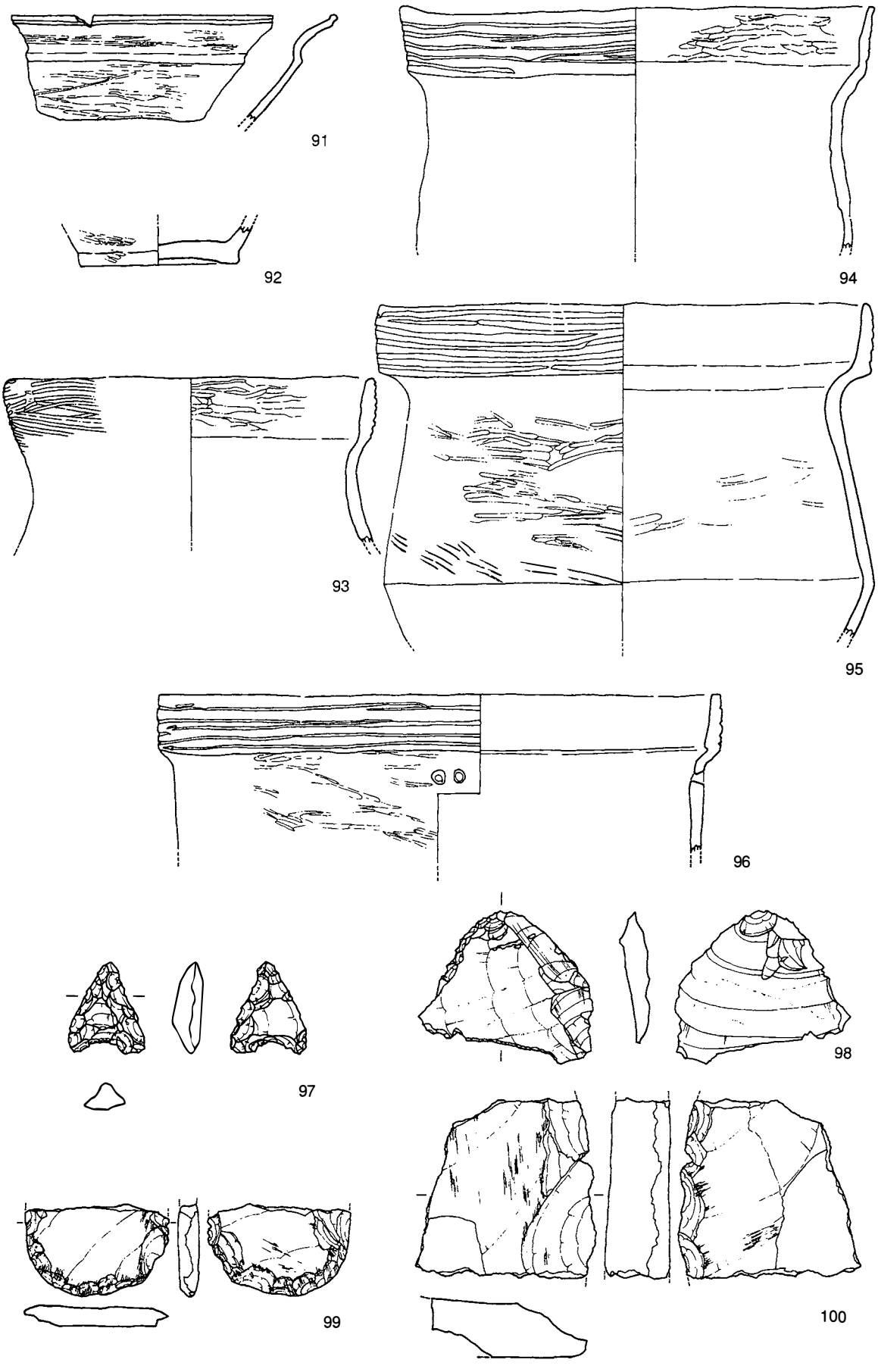
住居址の埋土は、38－01号住居址と同様に２層に分けられる。Ⅱｃ層よりややしまりがあり焼土、炭化物を多量に含む明灰褐色土（埋土１層）と、Ⅲ層に似たしまりのある灰褐色土（埋土２層）である。

【遺物】（第49・50図・図版119）

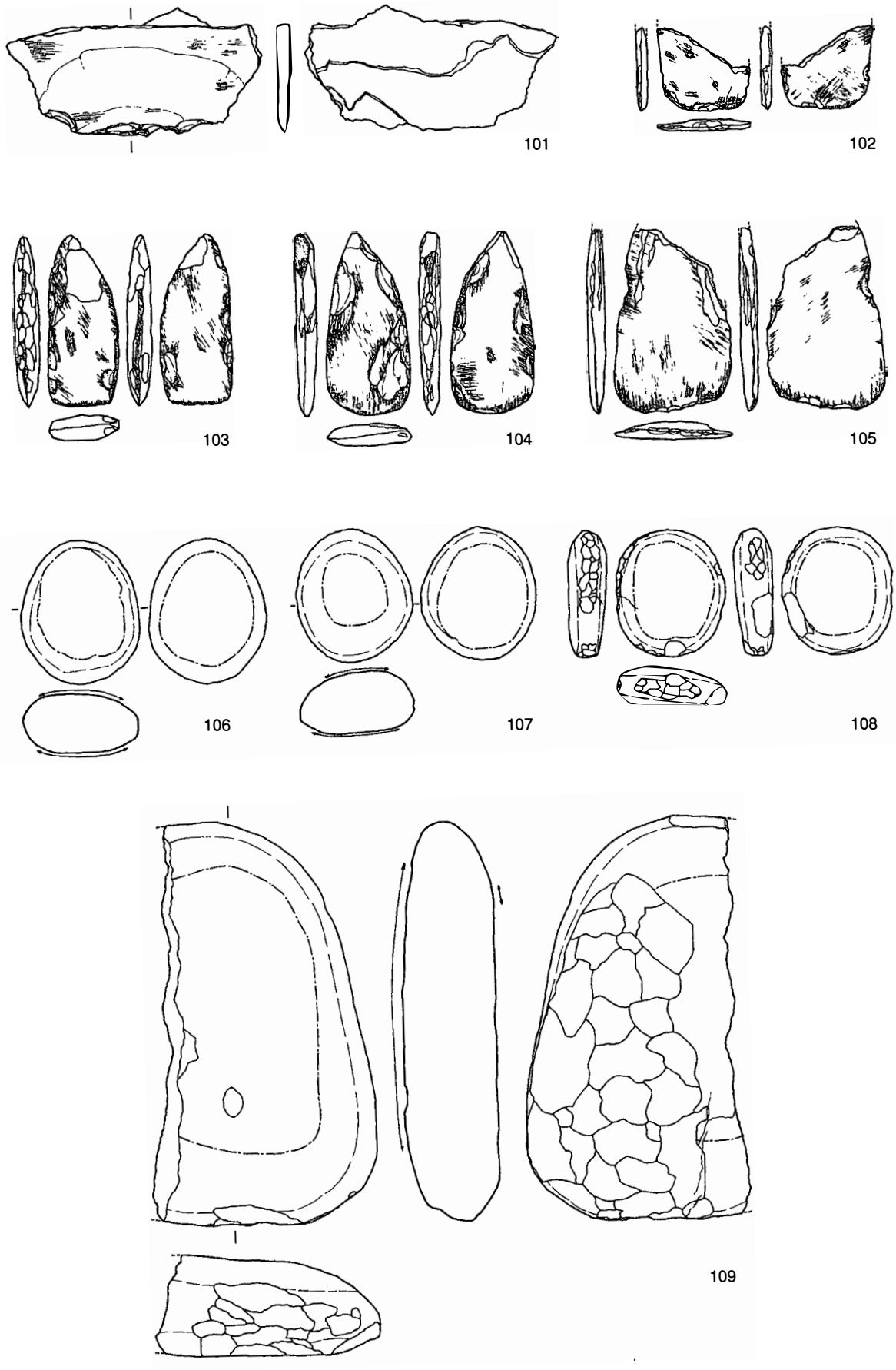
本住居址からは、縄文土器と石器が出土している。縄文土器は深鉢と浅鉢の破片が主であるが、深鉢は反転復元できる資料を中心に５点、浅鉢は破片を１点図示している。石器は打製石斧、磨製石斧、石鏃、敲石・磨石、二次加工のある剥片、使用痕のある剥片、石皿等が出ており、それらの中から幾つか選んで図示している。



第48図　38－02号住居址遺構実測図



第49図　38－02号住居址出土遺物実測図１



第50図　38－02号住居址出土遺物実測図２

8　38区南

【概要】（第45・51図・図版８）

石の本遺跡群の北側に位置する東西にやや長い調査区である。前述した38区北の南側にあるが、２つの調査区は10m程離れている。南から北に向かって、ややすり鉢状に緩やかに傾斜している。立地的には38区北と同様である。標高89.8mから90.4ｍにかけて位置している。38区北に比べ、削平の度合いは小さい。

遺構としては、竪穴住居址４軒が検出されている。他にも土壙や溝が検出されているが当該時期のものとは言い難く、ここで扱う遺構は上記の４軒のみである。調査区の中央に３軒、東南端に１軒分布しており、南側の住居址は溝等で削平されており、残存状況は良くない。遺構検出面はⅢA層である。出土遺物は縄文土器、石器が主で、粘土紐状の土製品も１点出土している。縄文土器は浅鉢、深鉢がほとんどでその多くは破片資料であるが、中には残りの良い資料も混じっている。石器は石鏃、敲石・磨石、二次加工のある剥片がやや多く、打製石斧、磨製石斧、石錘、石皿等も見られる。

なお、遺構名については、前述したように同じ38区である38区北とある程度の統一性を持たせるため、遺構番号の10の位に「１」をつけることにしている（例　38－12号）。

竪穴住居址

38－12号住居址

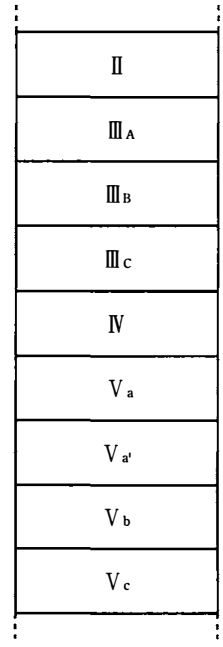
【遺構・埋土】（第52図・図版31）

調査区南側に位置する。南側を後世の溝によって消失しているが、残存状況から平面プランは円形を呈していたと推測される。長径は4.0ｍ、短径は3.5ｍを測り、本遺跡群で見つかった当該時期の住居址としては規模が小さい。遺構検出面から床面までの深さは12cmである。柱穴は１個確認されたが、削平を受けている部分にもあった可能性がある。炉跡はなかったが、柱穴同様に削平を受けているかもしれない。硬化面は確認されなかった。

住居址の埋土は、１層のみで粘質を持たずしまりのない暗褐色土である。上面もかなり削平されており、本来もう少し堆積していたと推測される。

【遺物】

本住居址からは、土器が出土している。しかし土器といっても小片であり、図示するには至らなかった。



第51図　38区南基本層序図

38－13号住居址

【遺構・埋土】（第53図・図版32）

調査区中央に位置する。平面プランはやや不整形ながら円形を呈している。長径は5.0ｍ、短径は4.5ｍを測る。遺構検出面から床面までの深さは12cmである。ピットは複数確認されており、そのなかで柱穴と認定したのは３個のみであったが、本当に柱穴かどうか疑問も残

る。中央には90×80cmの炉跡とおぼしき焼土の落ち込みが検出された。また硬化面は確認されなかった。

住居址の埋土は、38－12号住居址同様 1 層のみである。粘質を持たず、あまりしまりのない焼土混じりの暗褐色土である。

【遺物】（第54図）

本住居址からは、縄文土器と石器が出土している。縄文土器は破片のみであるが、深鉢を 2 点図示している。石器は石鏃、石鎌、二次加工のある剥片、敲石・磨石が出ており、それらの中から幾つか選んで図示している。

38－14号住居址

【遺構・埋土】（第55図・図版33）

調査区中央、38－13号住居址の東側に位置する。南側を一部土壙によって切られているが、平面プランはやや不整形ながら円形を呈している。長径は5.5ｍ、短径は4.8ｍを測る。遺構検出面から床面までの深さは12cmである。ピットを 2 、 3 個検出したが柱穴と言えるものはなかった。中央には145×130cmの炉跡とおぼしき焼土の落ち込みが検出された。硬化面は確認されなかった。

住居址の埋土は、38－12号住居址や38－13号住居址と同じような埋土で、焼土混じりの土である。

【遺物】（第56図）

本住居址からは、縄文土器と石器が出土している。縄文土器は破片のみであるが、深鉢を 2 点図示している。石器は打製石斧、敲石・磨石等が出ており、それらの中から幾つか選んで図示している。

38－16号住居址

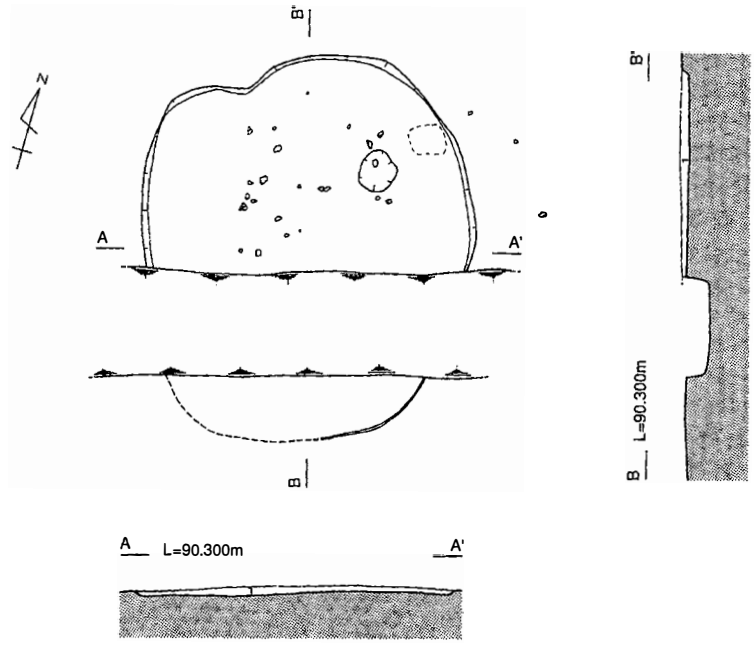
【遺構・埋土】（第57図・図版34）

調査区南端に位置する。調査区を部分的に拡張して検出した。全体の約 2 ／ 3 を削平され、全体の形状は明らかでないが、残存状況から平面プランは円形の可能性がある。残存部の長辺は3.6ｍ、短辺は1.3ｍで当然、本来はそれ以上の長さがあったと考えられる。遺構検出面から床面までの深さは10cmである。残存部からはピットはもとより柱穴らしき遺構は確認されなかった。38－12号住居址を切っている溝の南側に焼土の落ち込みを検出したが、範囲が不明瞭であった。硬化面は確認されなかった。

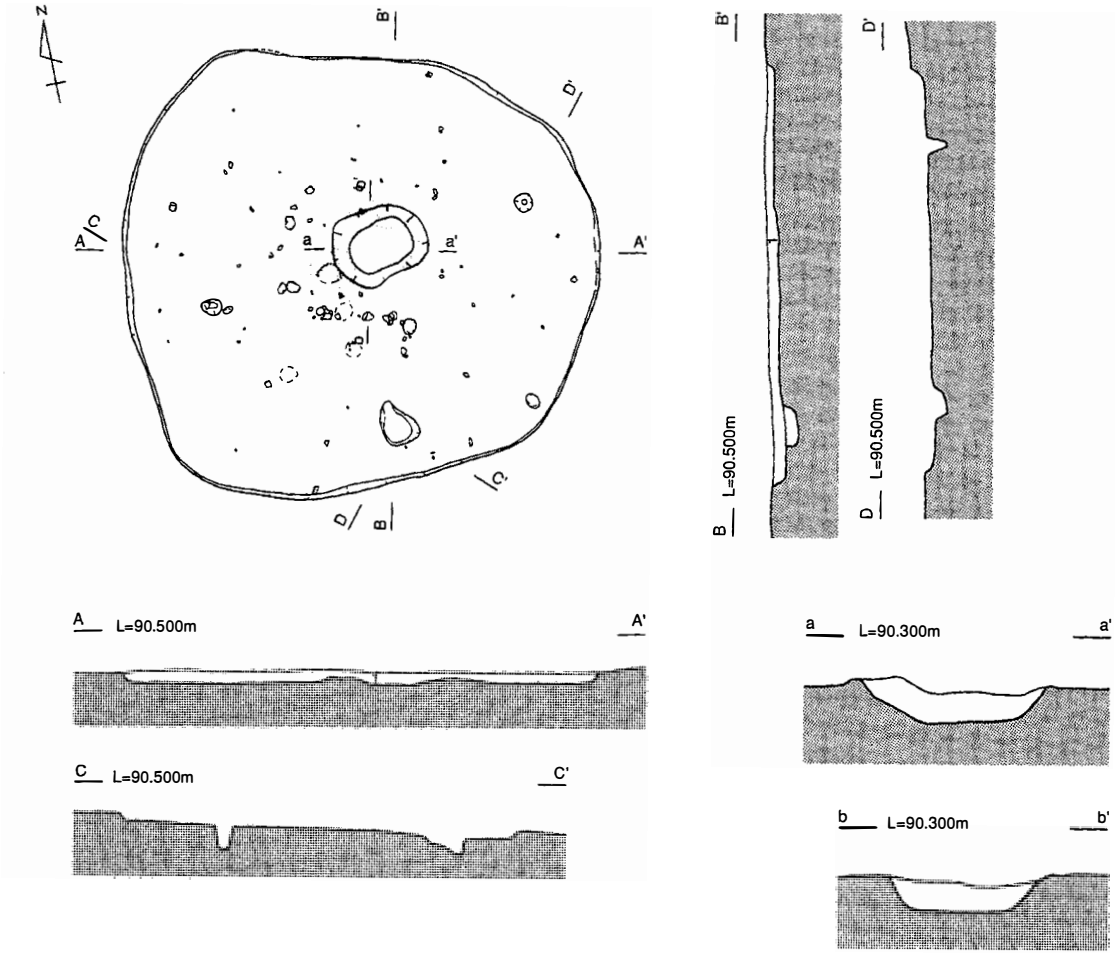
住居址の埋土は、しまりのない暗黄褐色土（埋土 1 層）としまりのある埋土 1 層よりやや明るい暗黄褐色土（埋土 2 層）の 2 層に分層される。

【遺物】（第58図・図版120）

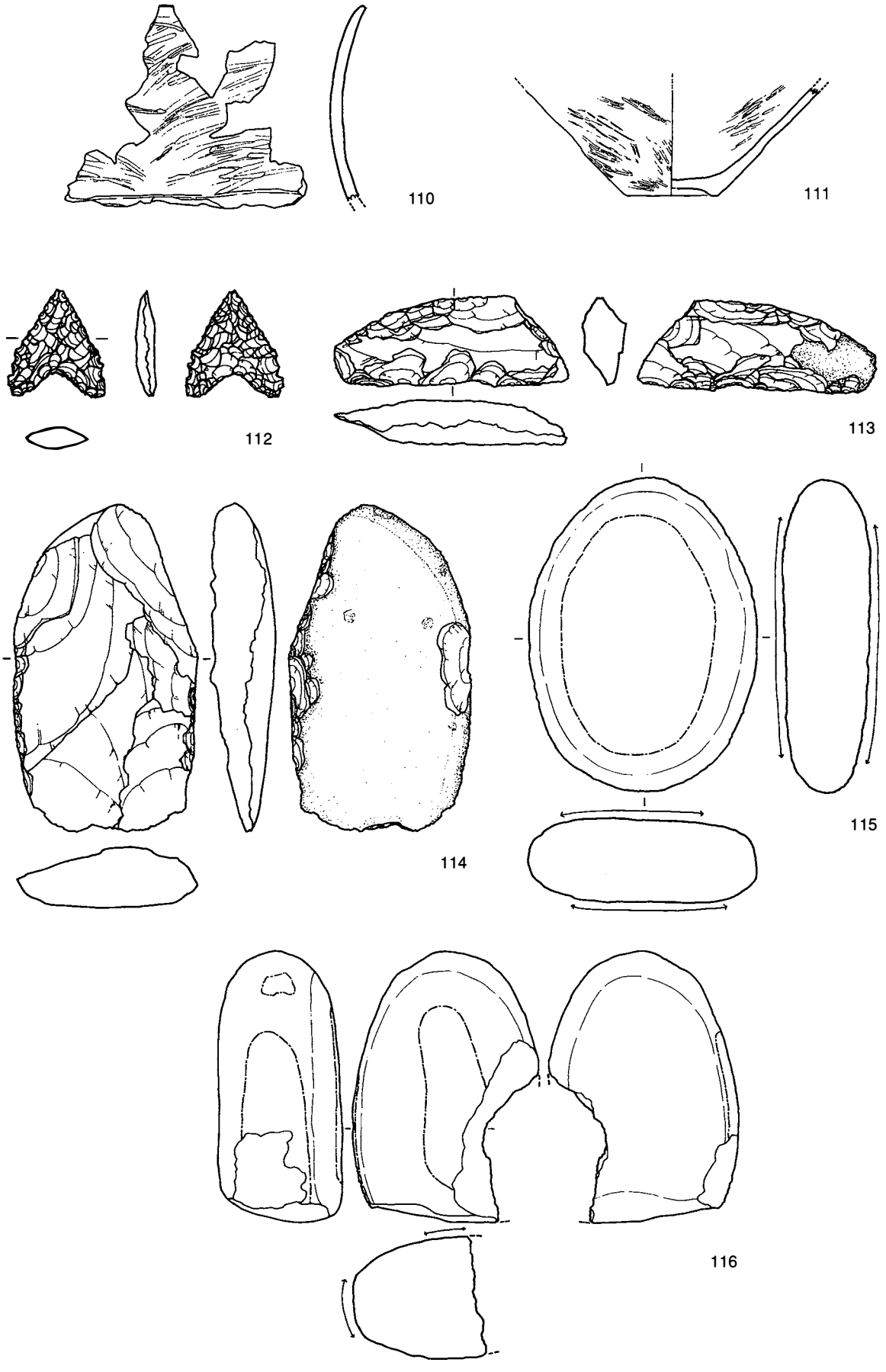
本住居址からは、縄文土器と石器が出土している。縄文土器は破片が多い中で、深鉢は反転復元できる資料を中心に 2 点、浅鉢は破片を 2 点図示している。石器は敲石・磨石が 1 点出土しているが、図化には至らなかった。



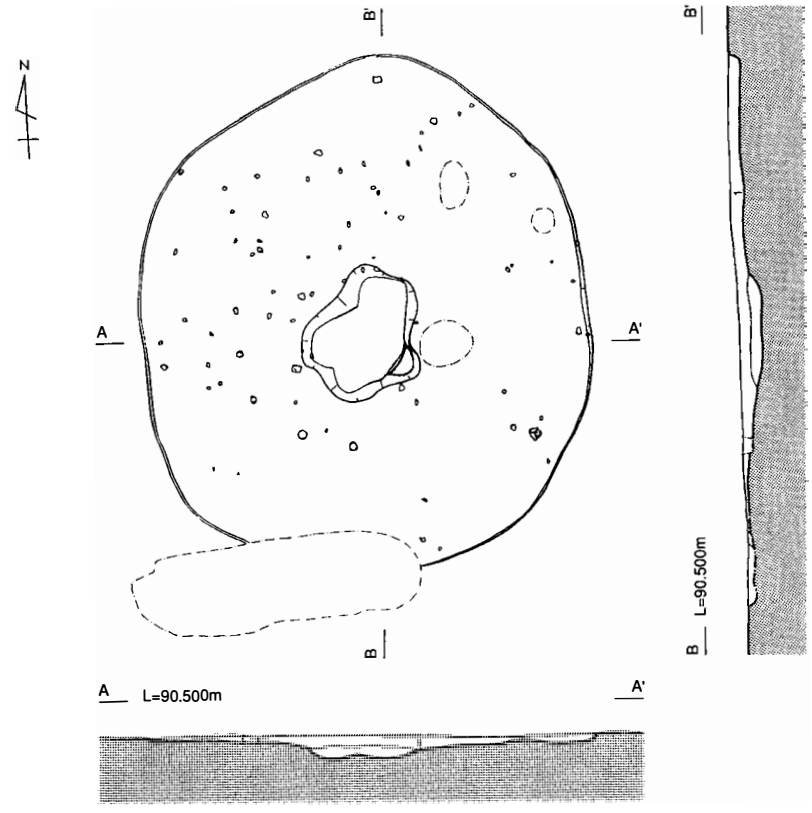
第52図　38－12号住居址遺構実測図



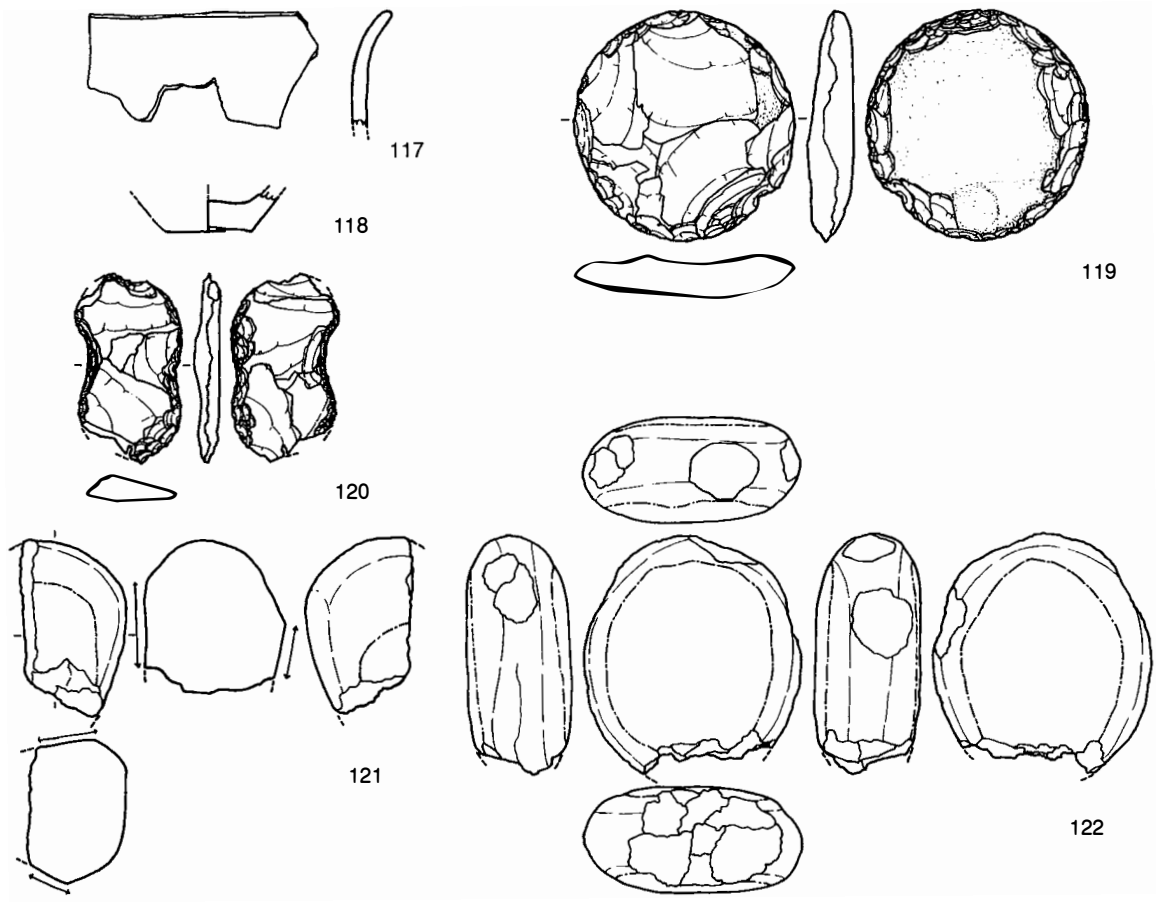
第53図　38－13号住居址遺構実測図



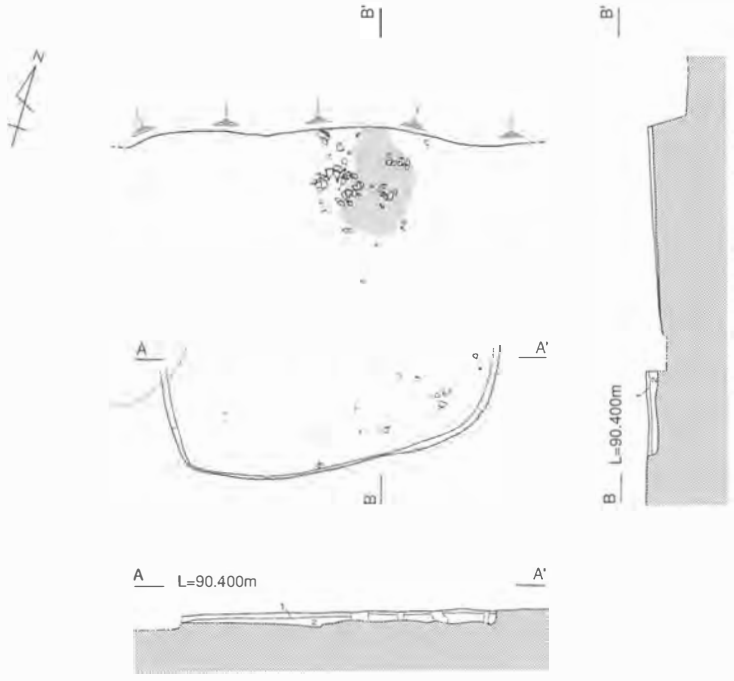
第54図　38－13号住居址出土遺物実測図



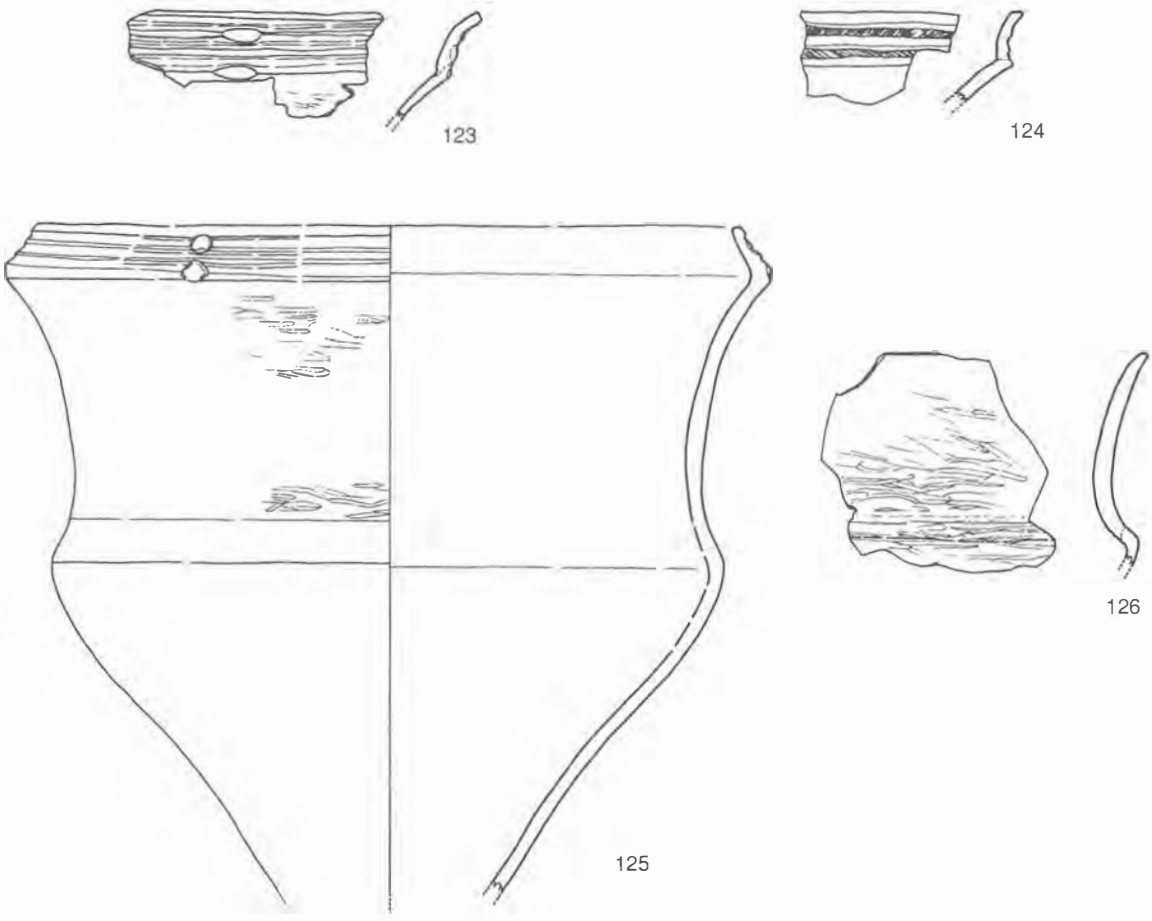
第55図　38－14号住居址遺構実測図



第56図　38－14号住居址出土遺物実測図



第57図　38－16号住居址遺構実測図



第58図　38－16号住居址出土遺物実測図

9　39区

【概要】（第45・59図・図版９）

石の本遺跡群の中央よりやや北側に位置する調査区である。東から西に向かってわずかに傾斜している。地形図で見ると調査区西側の中央部に向かって、わずかにすり鉢状に傾斜しているようだが、ほとんど平坦であり、そういった印象はあまり受けない。丘陵上の平坦部に立地しており、造成以前から比較的平坦であったと考えられる。標高89.6ｍから89.8ｍにかけて位置している。

遺構としては竪穴住居址４軒、埋設土器遺構２基の他に円形周溝遺構１基が検出されている。竪穴住居址は南側に比較的多く分布している。一方、埋設土器遺構は調査区中央と北側の竪穴住居址内に分布している。住居に伴っている掘り方を有する合せ口の埋設土器は、本遺跡群でもあまり例がないため、埋設土器のあり方を考えるうえで重要な事例と言える。遺構検出面はⅢａ層である。出土遺物は縄文土器、石器の他に玉類、土製品、焼成粘土塊が出土している。縄文土器は深鉢、浅鉢の他に鉢があり、遺構内遺物の中には残りの良い資料が比較的多く見られる。石器は打製石斧、石鏃、二次加工のある剥片、敲石・磨石が多く、磨製石斧、石匙、楔形石器、石錘、石皿等も見られる。玉類は小玉、丸玉があり、石製と土製がある。土製品は円盤形土製品が出ている。

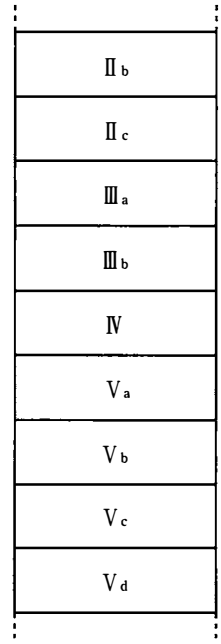
（１）　竪穴住居址

39－01号住居址

【遺構・埋土】（第60図・図版35）

調査区西側に位置する。南から西側にかけて住居の壁面を後世の土壙に削平されているが、平面プランは円形を呈していたと推測される。長径は6.5ｍ、短径は6.1ｍを測る。遺構検出面から床面まで15cmである。柱穴は８個確認された。この他中央に２個ピットを検出したが、柱穴に伴うかどうかは疑問である。炉跡とおぼしき焼土の落ち込みは確認されなかった。また硬化面も確認されなかった。なお、住居址の南端には埋設土器（39－12号埋設土器）が埋められており、遺構の切り合い関係から39－12号埋設土器は本住居址に伴うと考えられる。

住居址の埋土は、しまりのない暗褐色土（埋土１層）と粘質を持ちしまりのある暗褐色土（埋土２層）の２層に分層できる。埋土１層と２層は、色調では同じ埋土であるが、埋土２層の方が粘質を持ち、しまっている。



第59図　39区基本層序図

【遺物】（第61～64図・図版121～123）

本住居址からは、縄文土器と石器の他に焼成粘土塊が出土している。遺物量としては、かなりまとまって出土しており、遺構内の一括資料として扱える。縄文土器は残りの良い資料を中心に図示している。石器は打製石斧、石鏃、石匙、石庖丁形石器、二次加工のある剥片、敲石・磨石、石皿等が出ており、それらの中から幾つか選んで図示している。焼成粘土塊は５点出土しているが、図示していない。

39－02号住居址

【遺構・埋土】（第65図・図版36）

調査区の南側に位置する。南側を樹痕によって一部削平されているが、東西方向に伸びる楕円形を呈する。長径は6.6ｍ、短径は5.3ｍを測る。遺構検出面から床面までの深さは20cmである。柱穴は３個確認しているが、部分的に削平されているのでもっと多かった可能性もある。柱穴はおそらく主柱穴であろう。中央には径100cm程の炉跡が確認された。また硬化面は確認されなかった。

住居址の埋土は、橙色粒子を含む褐色シルト（埋土１層）と橙色粒子を含む暗褐色粘質土（埋土２層）の２層に分層される。埋土１層は非常に薄く、上面は削平されたと考えられる。

【遺物】（第66図）

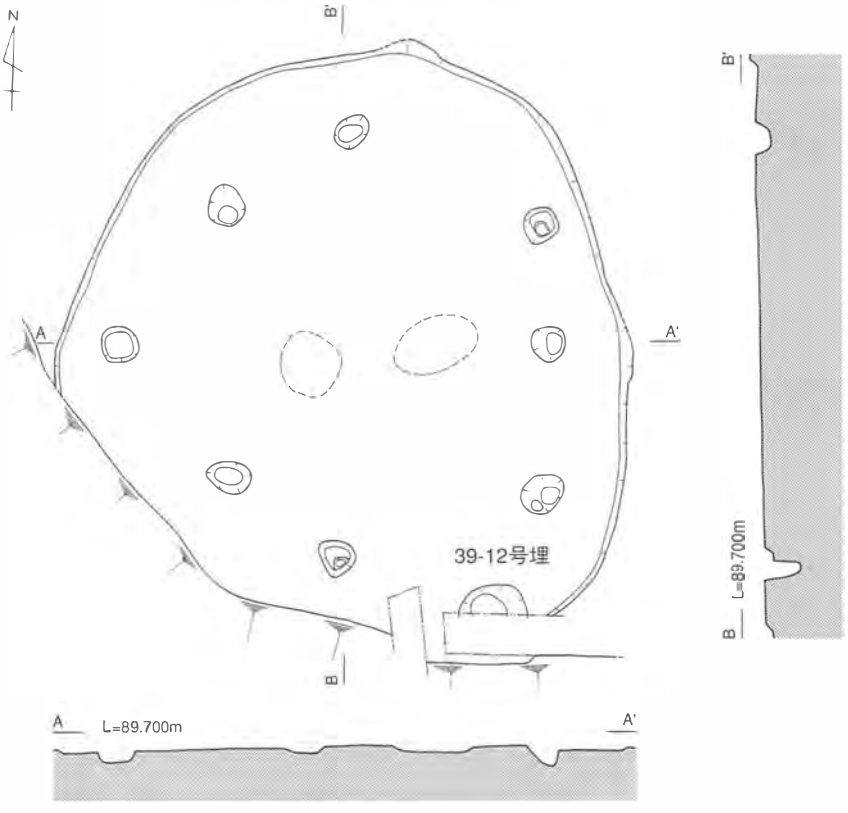
本住居址からは、縄文土器と石器が出土している。共に出土量が少なく、縄文土器は浅鉢の破片を２点のみ図示している。石器は石鏃、石匙丁形石器、敲石・磨石が出ており、それらの中から幾つか選んで図示している。

39－06号住居址

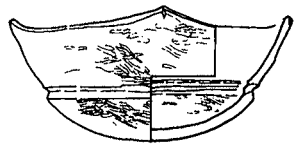
【遺構・埋土】（第67図・図版37）

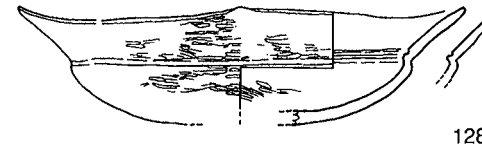
調査区の南側に位置し、39－02号住居址の東側に近接するように造られている。平面プランは円形を呈している。長径は5.1ｍ、短径は4.7mを測る。遺構検出面から床面までの深さは20cmである。柱穴は６個確認した。炉跡、硬化面は調査時には確認されなかった。

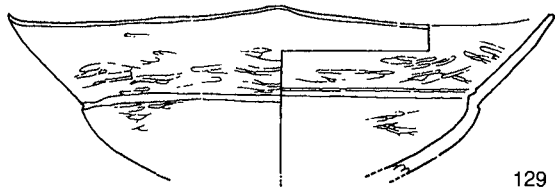
住居址の埋土は、１層のみで黒褐色シルト混じりの明褐色シルトである。

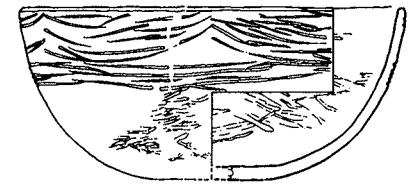


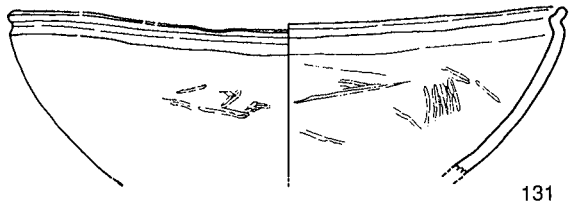
第60図　39－01号住居址遺構実測図

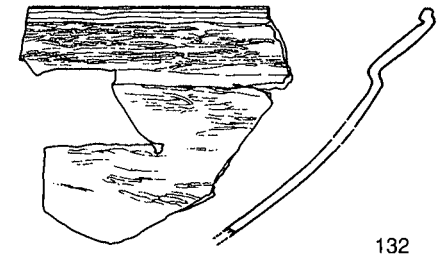

127

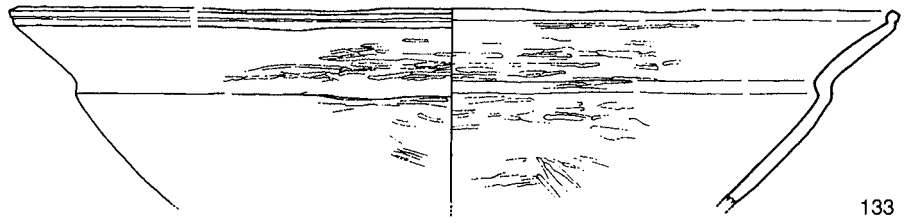

128

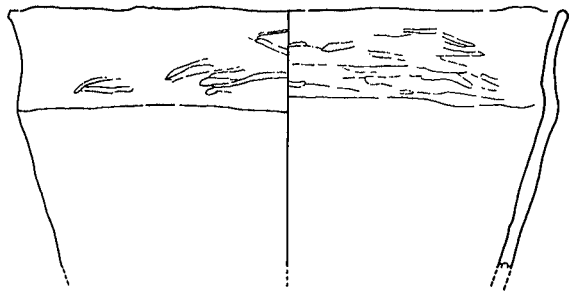

129

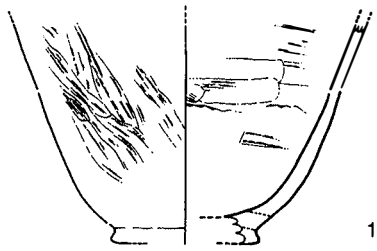

130

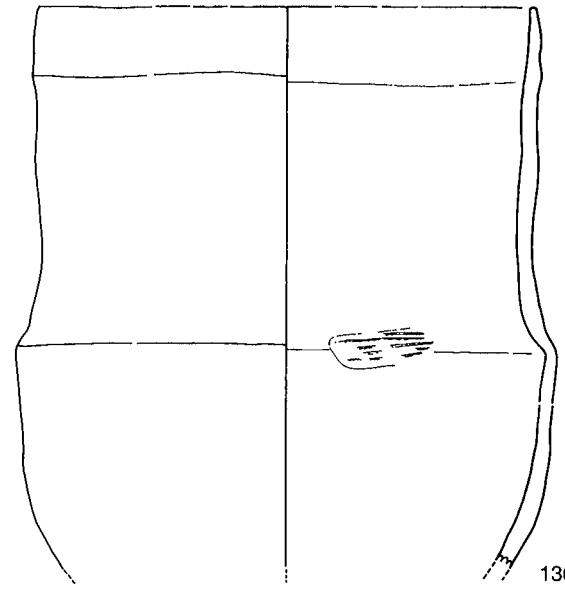

131


132

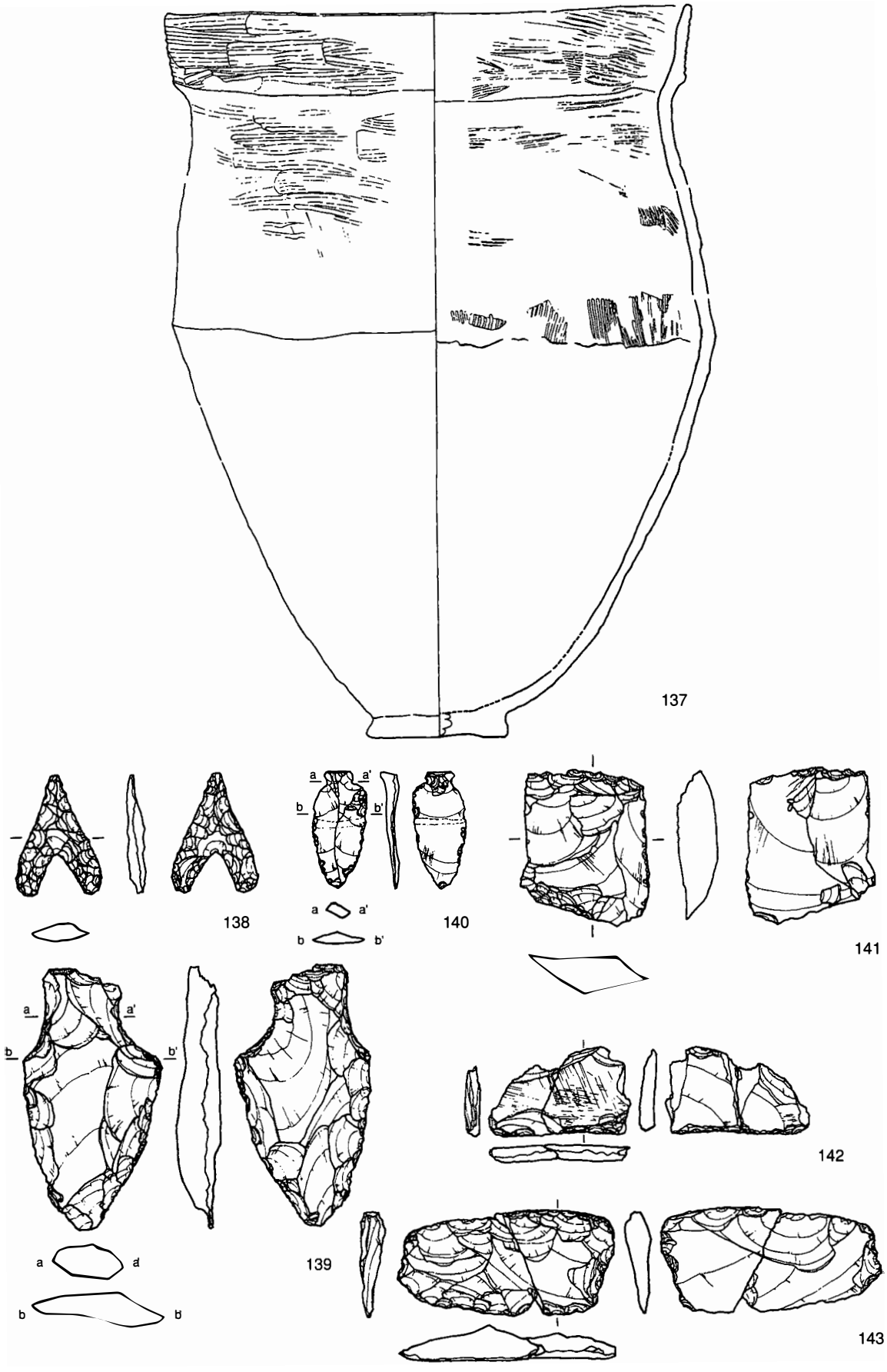

133


134

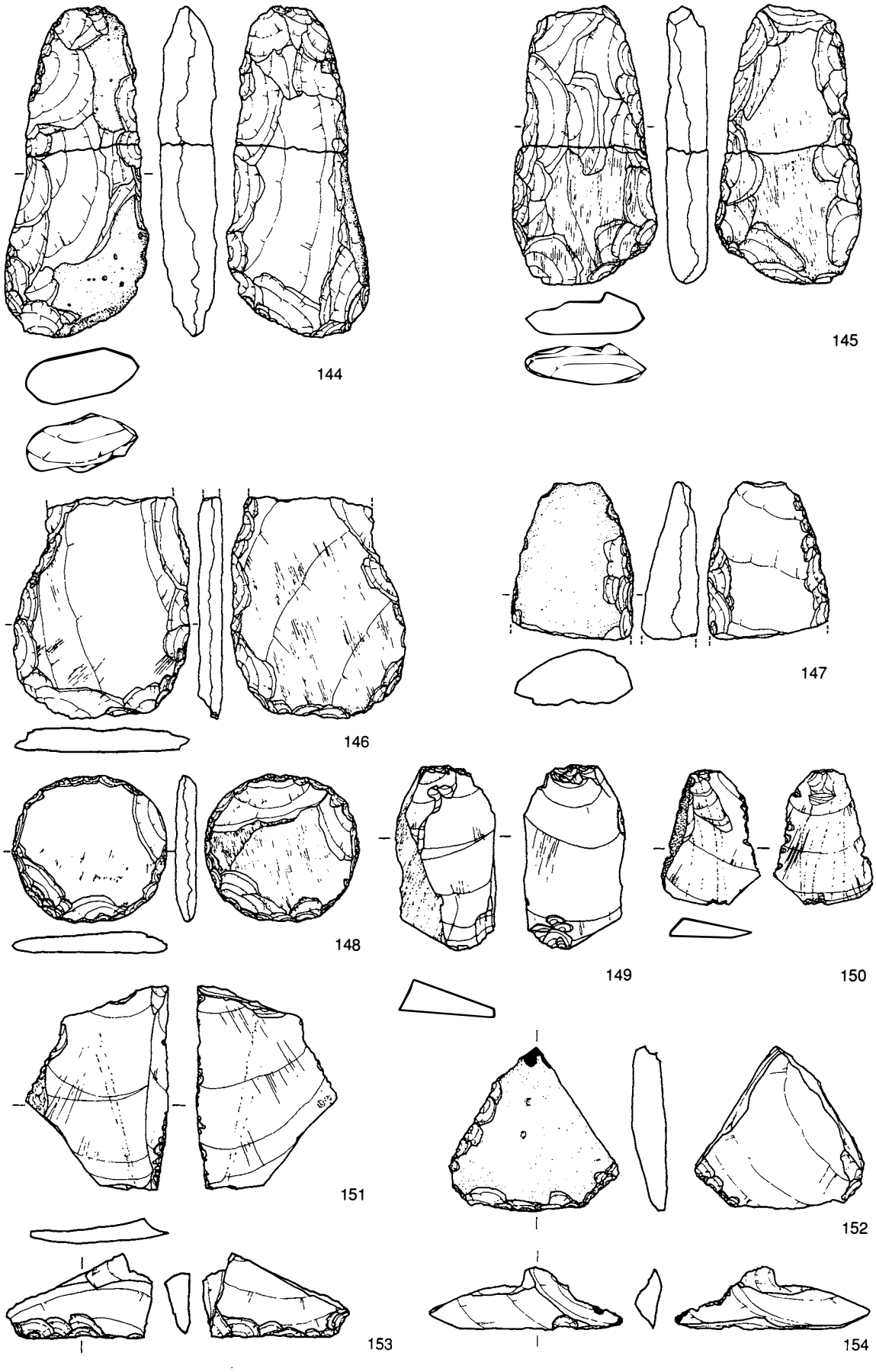

135


136

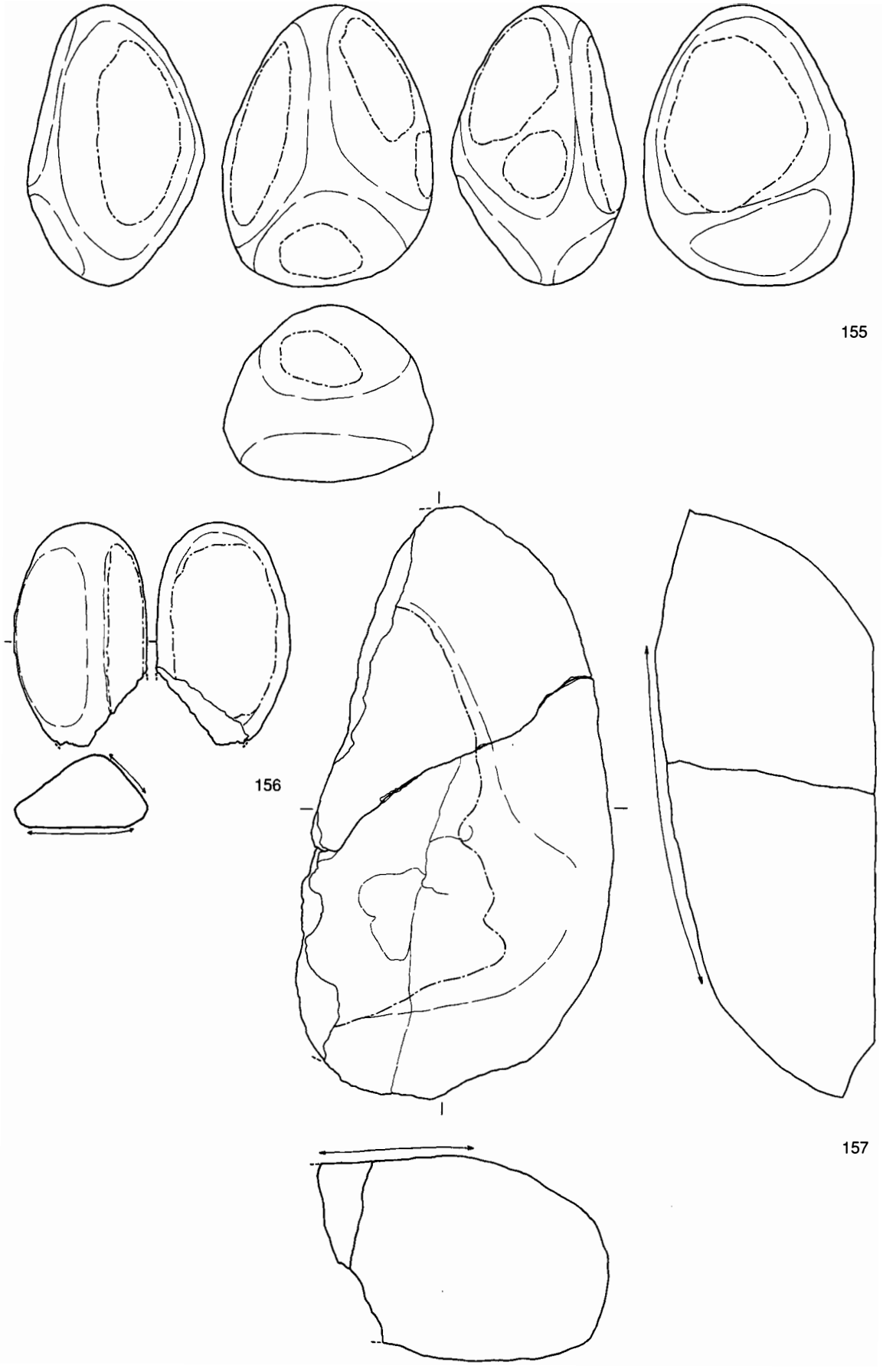
第61図　39－01号住居址出土遺物実測図１



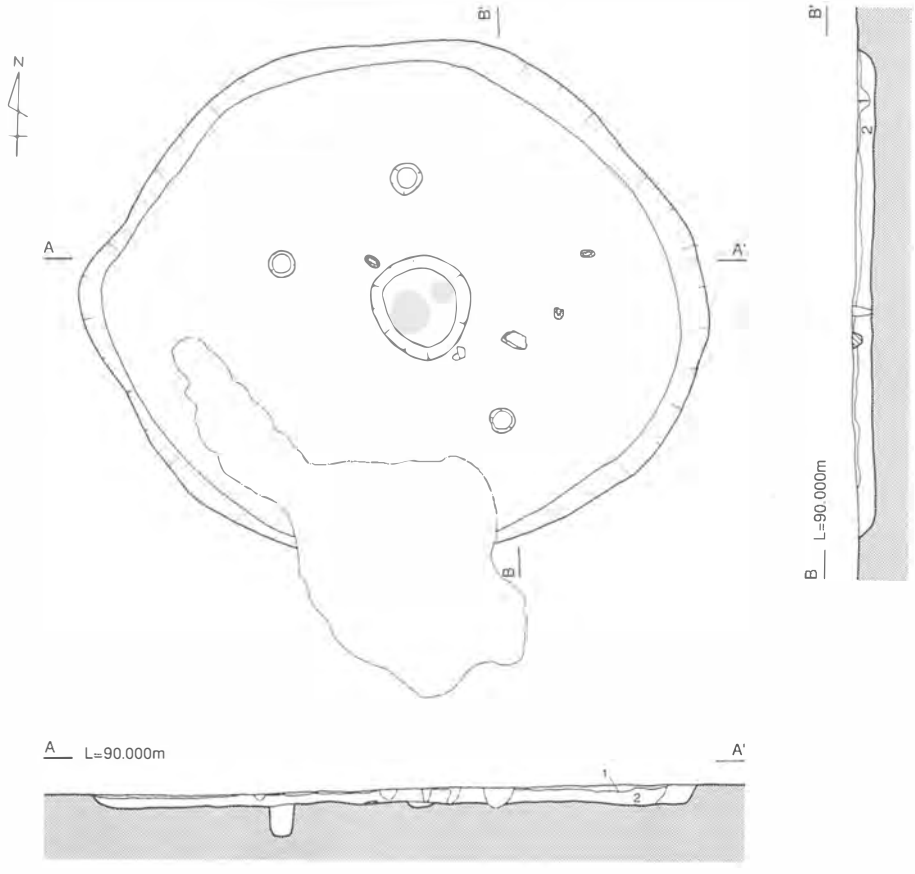
第62図　39－01号住居址出土遺物実測図2



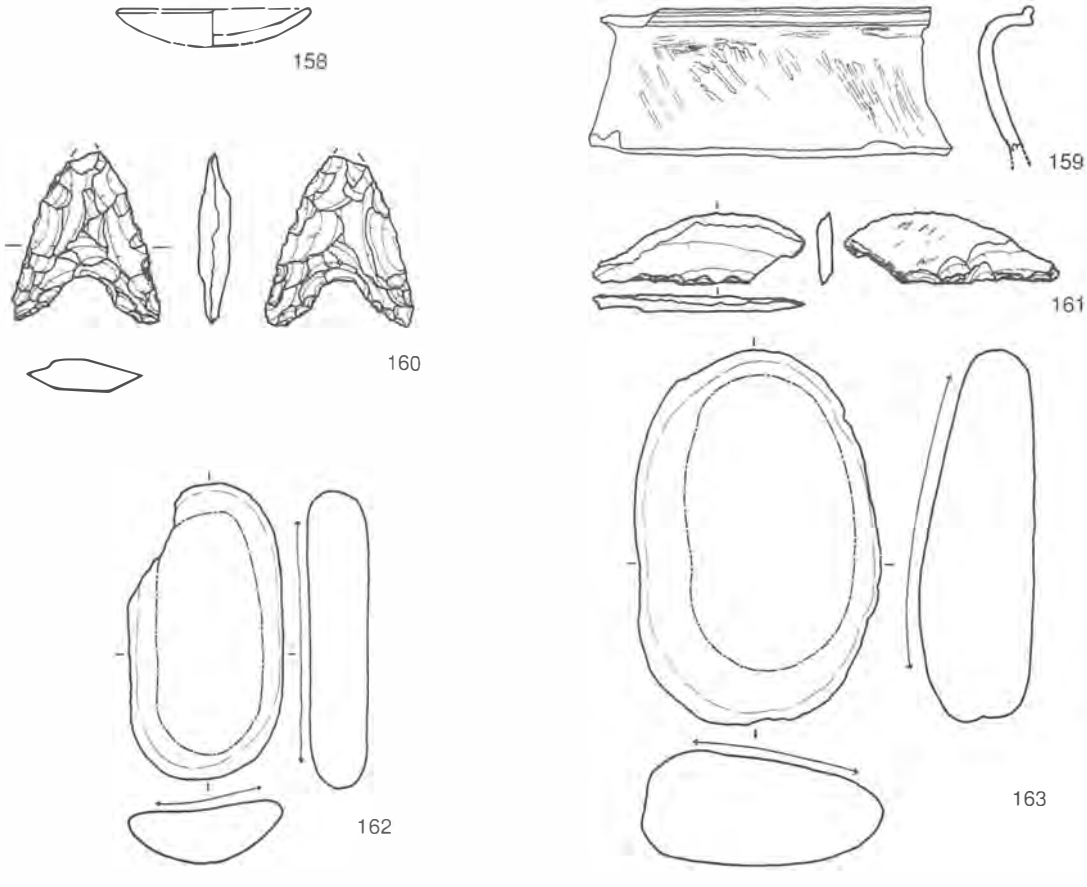
第63図　39－01号住居址出土遺物実測図３



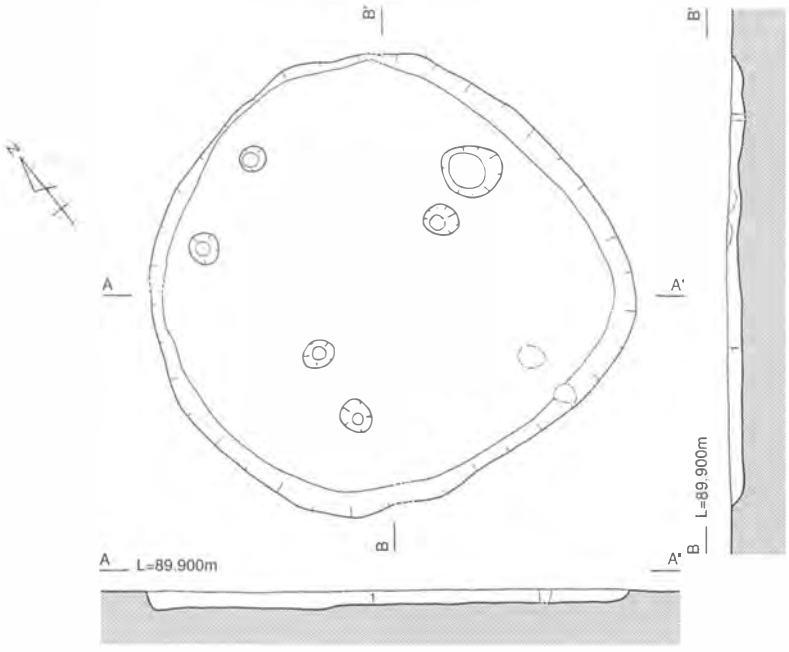
第64図　39－01号住居址出土遺物実測図 4



第65図　39－02号住居址遺構実測図



第66図　39－02号住居址出土遺物実測図



第67図　39－06号住居址遺構実測図

第68図　39－06号住居址出土遺物実測図

【遺物】（第68図）

本住居址からは、縄文土器と石器が出土している。ただし、ほとんど皆無と言っても差し支えない程度の量である。浅鉢の破片が１点と石鏃１点を図示しておく。

39－23号住居址

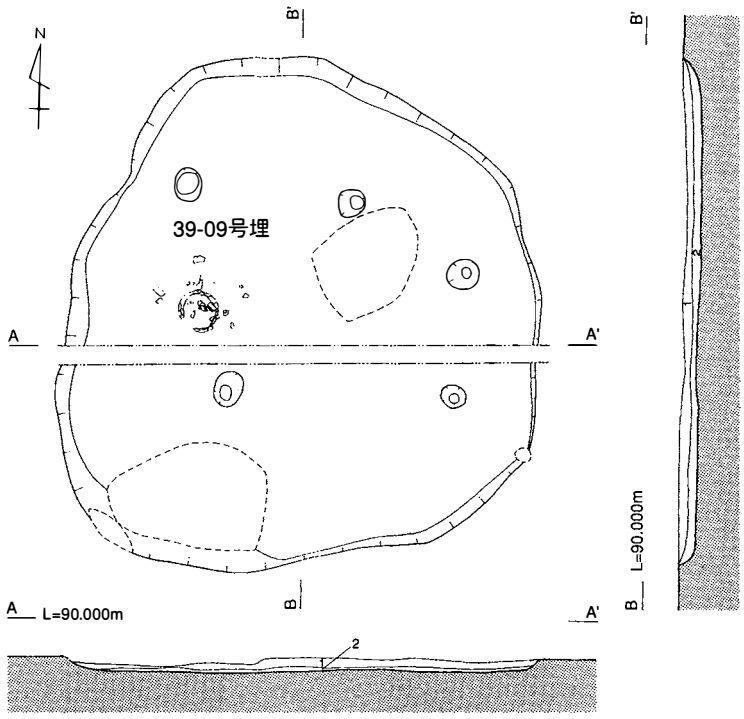
【遺構・埋土】（第69図・図版38）

調査区の東側に位置する。住居址南西部に撹乱壙があるものの、平面プランはやや不整形な円形を呈している。長径は5.2ｍ、短径は5.0ｍを測る。遺構検出面から床面までの深さは20cmである。複数のピットを確認し、柱穴は５個確認された。また炉跡、硬化面についても確認されなかった。なお、住居址内の中央よりやや西寄りの地点に埋設土器（39－09号埋設土器）が検出されたが、掘り方はなく、床面と埋設土器の底部のレヴェルがほぼ一致しており、住居址に伴うと推測される。

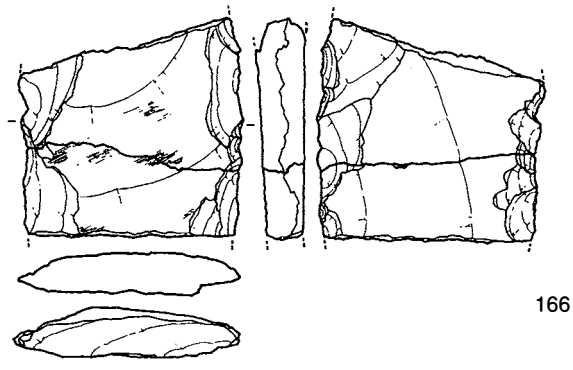
住居址の埋土は、黒褐色シルト混じりの褐色シルト（埋土１層）とやや粘質を持ち、橙色の粒子を含む黒褐色シルト（埋土２層）の２層に分層される。

【遺物】（第70図）

本住居址からは、縄文土器と石器が出土している。39－06号同様、出土量は少なく、打製石斧を１点図示できるのみである。



第69図　39－23号住居址遺構実測図



第70図　39－23号住居址出土遺物実測図

（2）　埋設土器遺構

39－09号埋設土器

【遺構・埋土】（第71図・図版39）

調査区の東側に位置する。39－23号住居址内にあり、掘り方は検出されなかった。深鉢の胴部以下を打ち欠いた状態で検出された。口縁を上にほぼ垂直に据えられていた。多少土器片が散逸していたが、比較的良く埋設当時の姿を留めていた。39－23号住居址の項で述べたように、床面と埋設土器の底部のレヴェルがほぼ一致していたことから、本埋設土器は住居址に伴うものと推測される。

【遺物】（第72図・図版139）

3 は胴部以下を欠損した深鉢である。外面は横ミガキを施してあるが、内面は口縁に横ミガキの後横ナデを施している。口縁帯には 4 条の沈線が巡り、頸部はやや外湾しながら立ち上がっている。胴部以下を完全に欠損しているが、本遺跡群ではこうした埋設土器が数基確認されている。詳細は第Ⅴ章に譲るが、他の埋設土器とはその機能や役割が異なるのかもしれない。

39－12号埋設土器

【遺構・埋土】（第73図・図版40）

調査区の西側に位置する。39－01号住居址内の南端にあり、掘り方を持つ埋設土器遺構である。掘り方の平面プランは不整形な円形を呈する。長径は70cm、短径は65cmを測り、遺構検出面から最深部までの深さは30cmである。掘り方内には、合せ口状に深鉢と浅鉢がセットで埋設されていた。検出時、浅鉢は深鉢内に破損した状態で落ち込んでいた。主体となる深鉢は、口縁を上にほぼ垂直に据えられていた。浅鉢は半分以上欠損していたが、深鉢は土器片の散逸は少なく、埋設当時の姿を留めていると考えられる。39－01号住居址の項で述べたように埋土の切り合いから、本埋設土器は住居址に伴うものと推測される。

埋設土器遺構の埋土は、住居址の埋土が流入しているが、深鉢内の埋土と掘り方内の埋土に分けられる。深鉢内の埋土は、住居址の埋土（埋土１層）と粘質をあまり持たずしまりのない黄褐色土（埋土２層）、やや粘質を持つ暗黄褐色土（埋土３層）の３層に分けられる。また掘り方内の埋土は、しまりのない黄褐色砂質土（埋土４層）のみである。埋土の状況から住居が営まれていた当時、埋設土器の口縁は床面の上に出ていたことになる。

【遺物】（第74図・図版140）

４は全体の約２／３欠損した浅鉢で、底部は小片と化しており復元不可能である。内外面ともミガキが施されており、精製土器であることが分かる。口縁帯はかなり退化しており、かろうじて１条の沈線が確認されるのみである。頸部から胴部にかけても直線的で、各部位の区別がつきにくくなっている。５はほぼ完形の深鉢である。口縁帯には沈線の代わりに二枚貝条痕が施されており、口縁帯はラッパ状に開いている。最終器面調整には一応ミガキが施されているものの、粗雑なミガキであり、貝殻条痕がミガキの隙間から確認できる。頸部から胴部、底部にかけてはほとんど直線的で、底部は円盤貼り付けである。全体的に造りはしっかりしているが、口縁から胴部にかけて歪んでいる。

（３）　その他

39－08号円形周溝

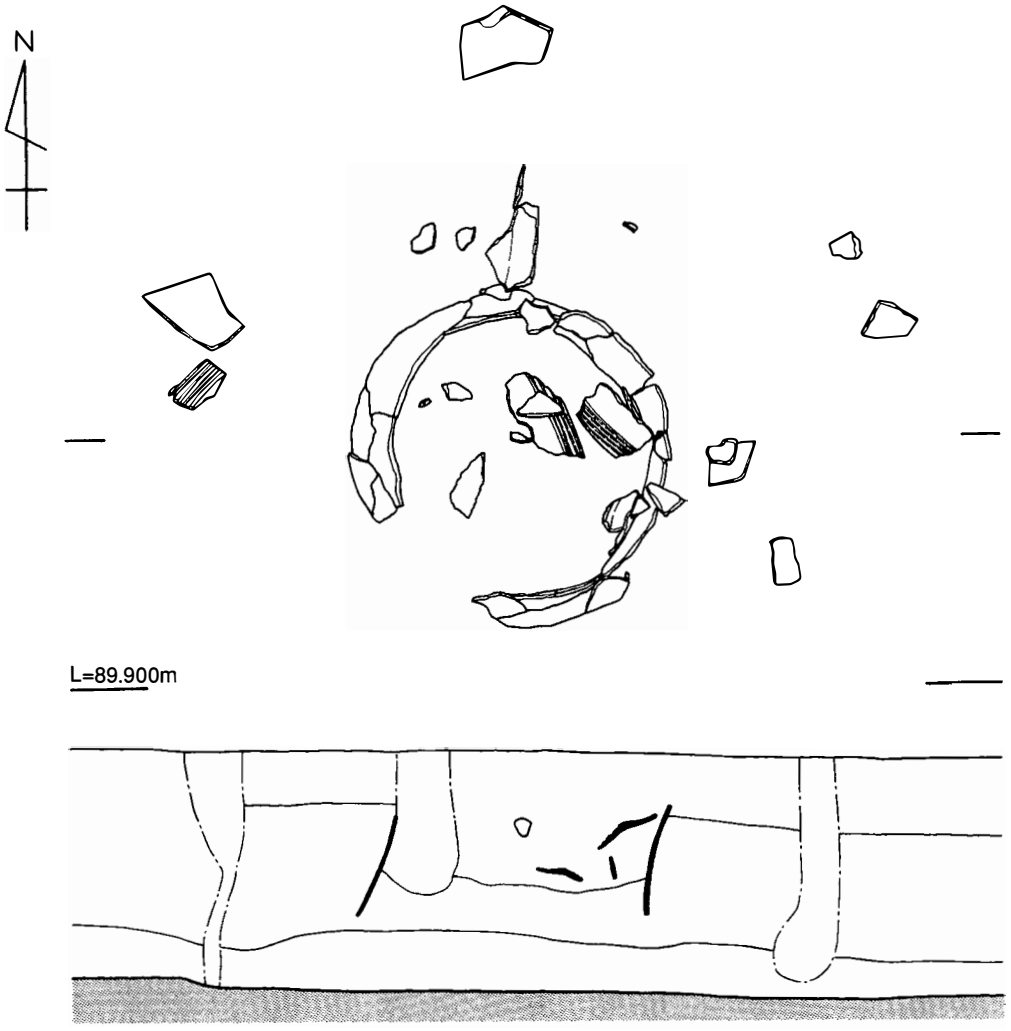
【遺構・埋土】（第75図・図版41）

調査区南側に位置する。平面プランは円形を呈する。長径は5.6ｍ、短径は4.2ｍを測り、周溝の幅は0.8m、遺構検出面から最深部までの深さは40cmである。周溝の内側には、２個のピットが確認されたが、どのような形でこれらのピットが伴うのか不明である。この他に、周囲には本円形周溝に伴うような遺構は確認されなった。

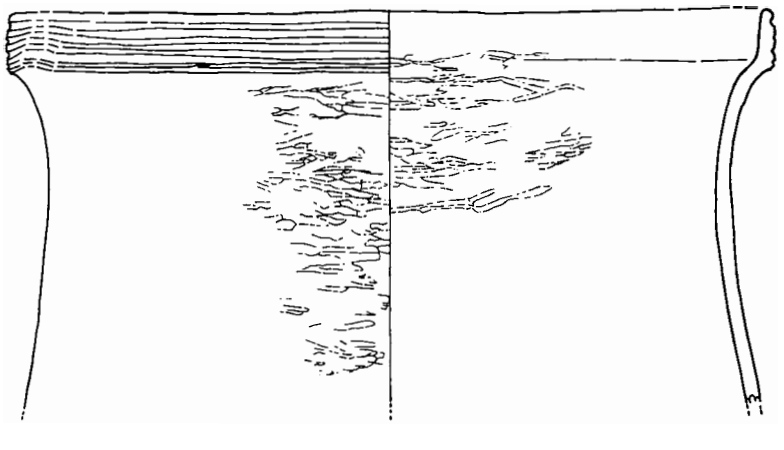
円形周溝遺構の埋土は、３層に分けられる。暗褐色シルト（埋土１層）と橙色土混じりの黒褐色粘質土（埋土２層）、橙色土混じりの暗黒褐色粘質土（埋土３層）の３つであるが、部分的に樹痕が入り込んでいる箇所がある。

【遺物】

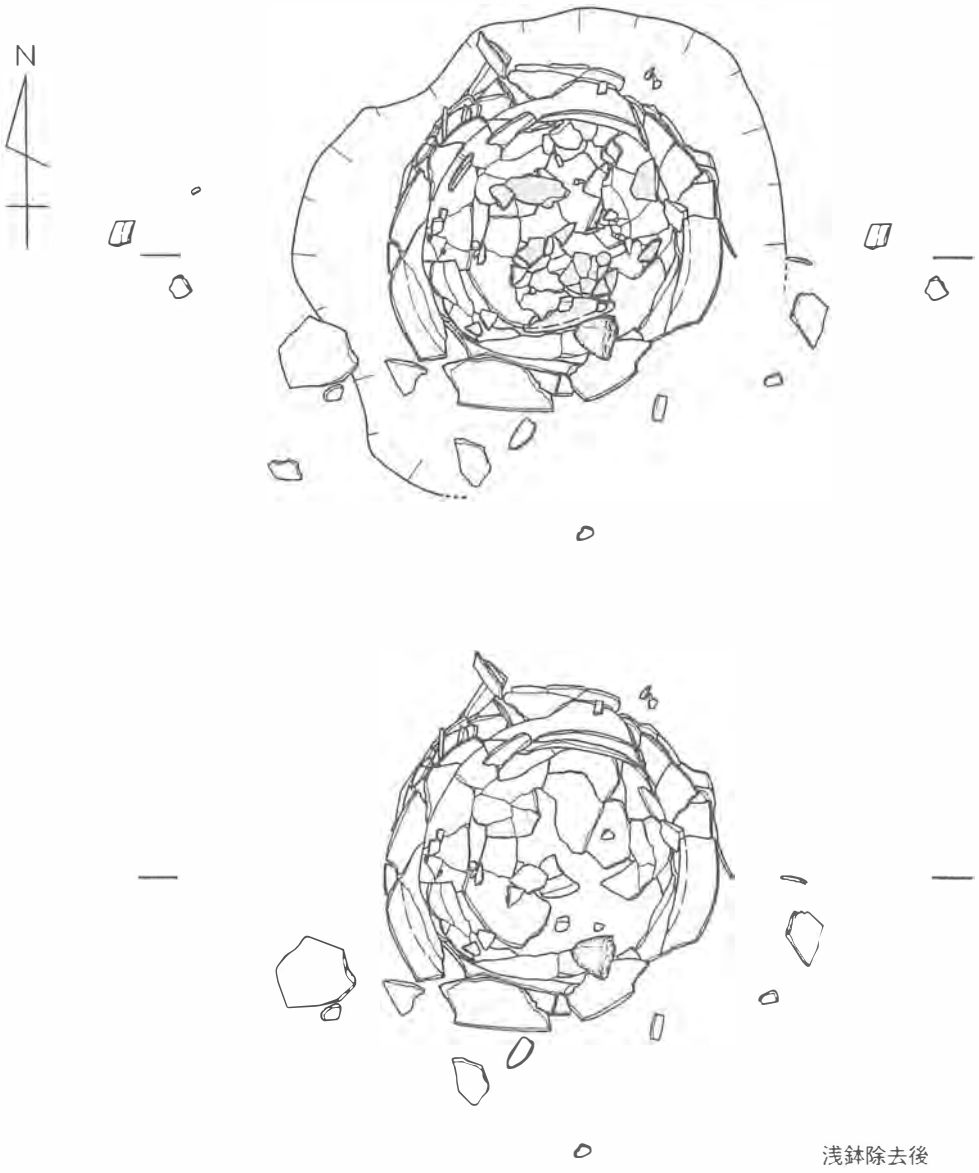
本円形周溝遺構からは、縄文土器片が出土しているが、小片のため図示していない。



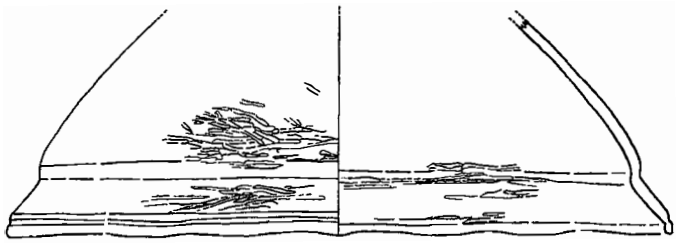
第71図　39－09号埋設土器遺構実測図



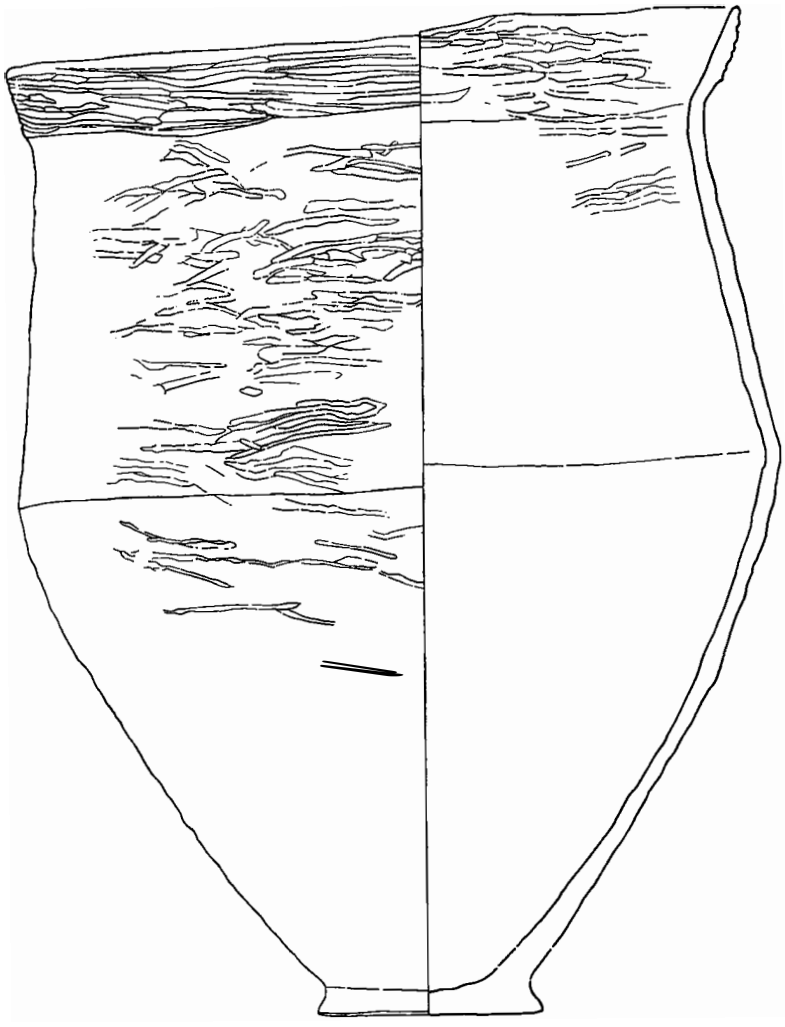
第72図　39－09号埋設土器出土遺物実測図



第73図　39－12号埋設土器遺構実測図

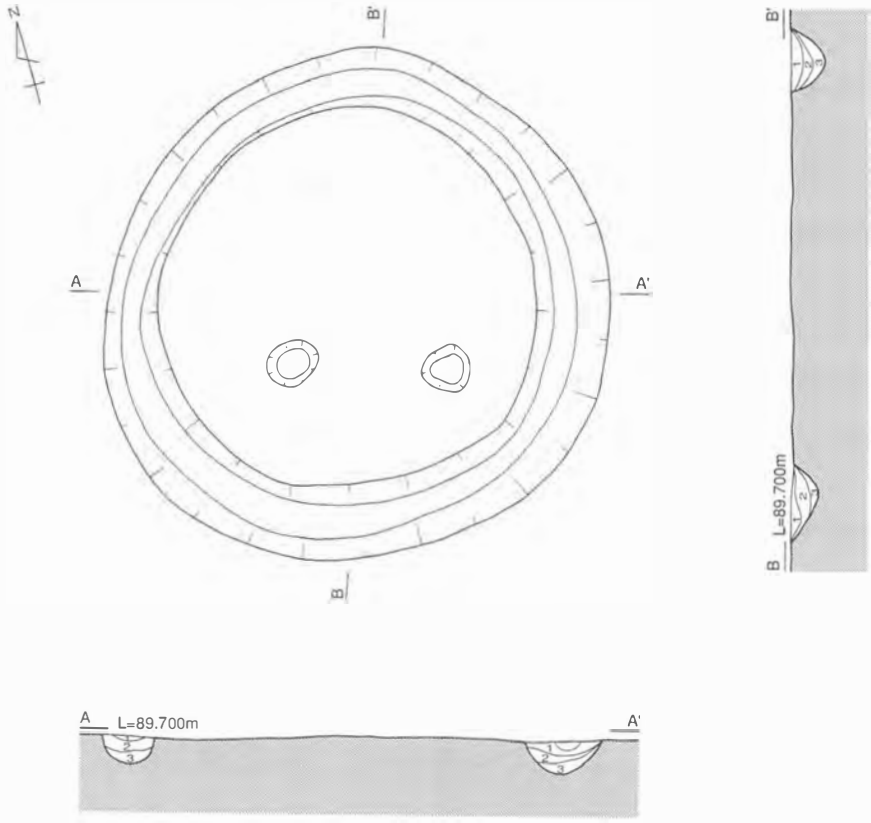


4



5

第74図　39－12号埋設土器出土遺物実測図



第75図　39－08号円形周溝遺構実測図

10　40区

【概要】（第76・77図・図版10）

石の本遺跡群の中央よりやや北側に位置する調査区である。39区の南西に近接しているためか、立地は39区とよく似ている。ただ39区以上に上面を削平されており、より平坦な印象を受ける。本調査区以南にはしばらく調査区がなく、当該時期における本遺跡群の中心地域の南限と言える。なお、本調査区から南東方向には、遺跡群の中心を通る丘陵の先端部がある。

遺構としては、竪穴住居址１軒、埋設土器遺構１基が検出されている。前述したように、上面を削平されていることも遺構数が少ない要因と考えられる。竪穴住居址と埋設土器遺構は10ｍ程離れている。竪穴住居址は床面のみの検出であるが、埋設土器遺構はほぼ完形を保っており、小型の浅鉢を伴うものである。遺構検出面はⅢ層である。なお同じⅢ層から集石遺構も１基確認されており、屋外炉の可能性もあるが、不明な点もあるので本書では掲載していない。出土遺物は縄文土器、石器の他土偶、土器片錘が出土している。縄文土器は破片がほとんどであるが比較的残りの良い深鉢が１点ある。石器は打製石斧、石鏃、二次加工のある剥片、敲石・磨石、石皿が多く、磨製石斧、石庖丁形石器、石錘等も見られる。

（１）　竪穴住居址

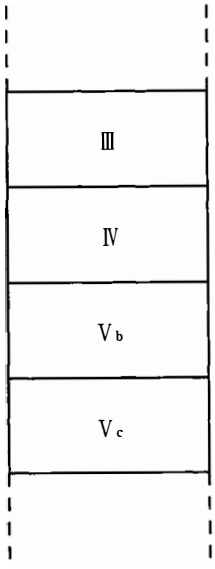
40－01号住居址

【遺構・埋土】（第78図・図版42）

調査区の東側に位置し、壁面をすべて削平され、平面プランは不明である。当然規模も不明だが、遺物が炉跡を中心に４～５ｍの範囲で散乱しており、住居址の規模もこの範疇に収まると考えられる。柱穴は確認されなかった。前述したように中心部に100×80cmの炉跡とおぼしき焼土の落ち込みが検出された。炉跡を中心に2.7×1.7ｍの範囲で硬化面が確認された。住居址と認定するにはやや疑問があるものの、一応ここでは本遺構を住居址として報告しておく。

【遺物】（第79図）

本住居址からは、縄文土器と石器が出土している。いずれも破片が主で出土量も多くないが、縄文土器は浅鉢１点と深鉢１点、石器は二次加工のある剥片を１点図示しておく。



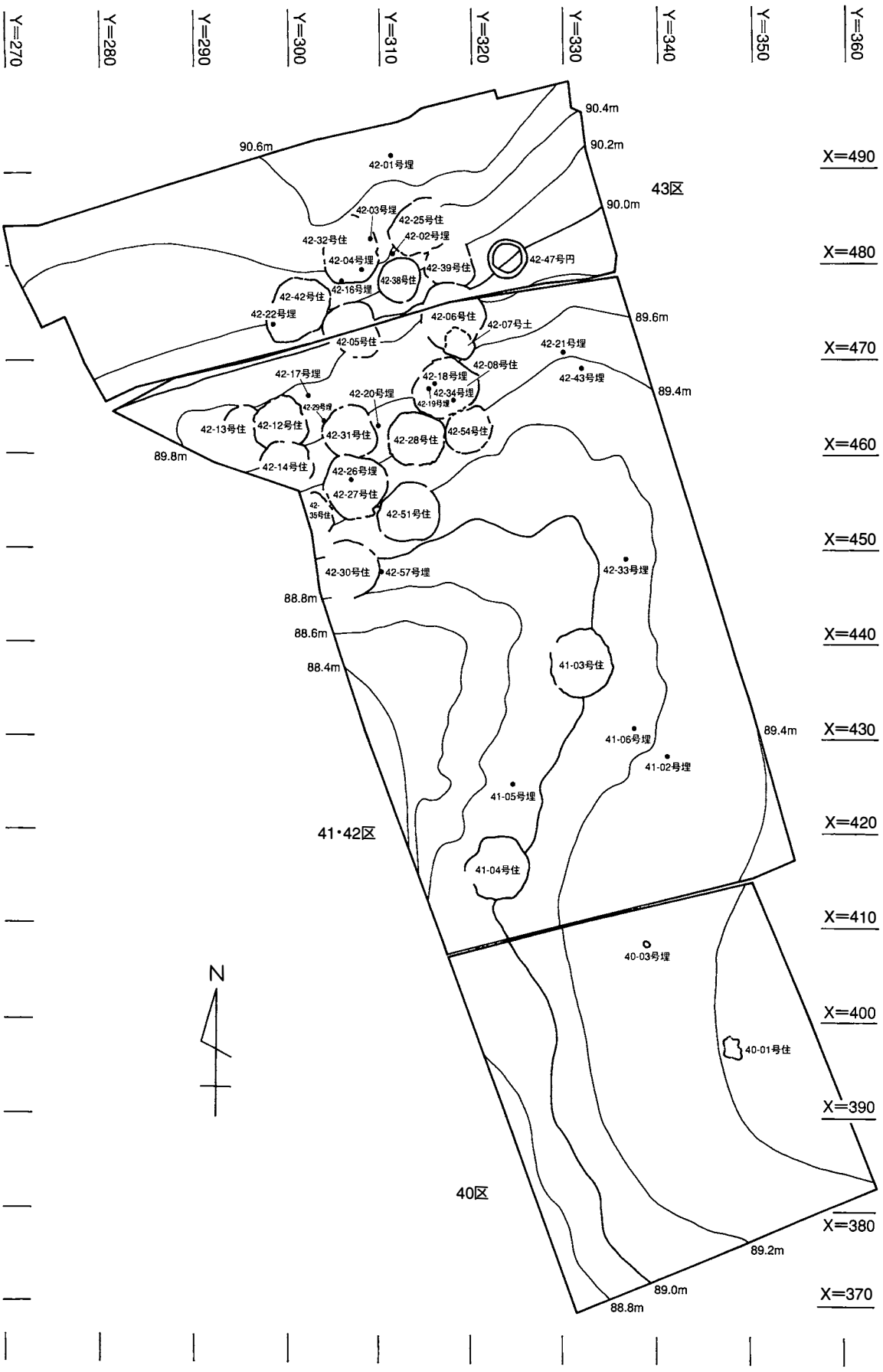
第76図　40区基本層序図

（２）　埋設土器遺構

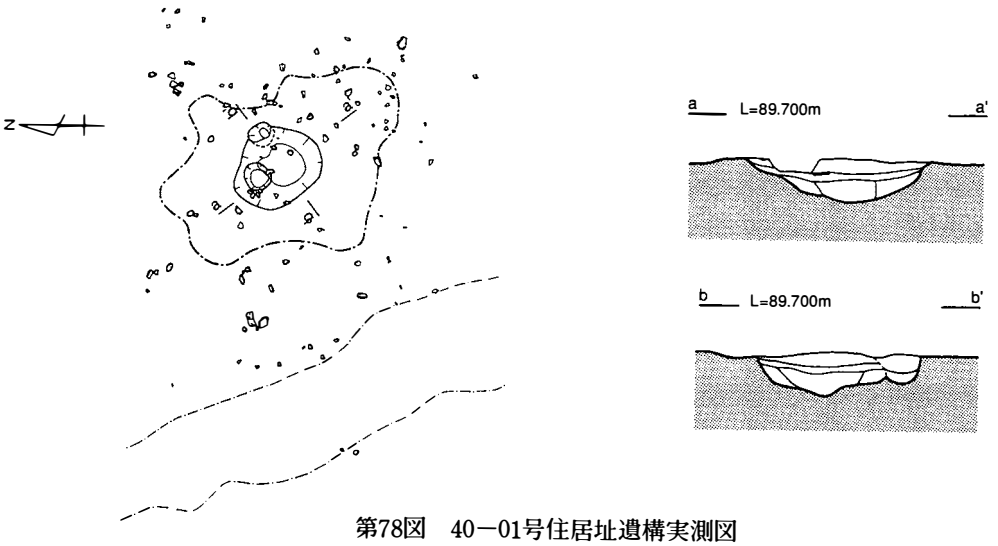
40－03号埋設土器

【遺構・埋土】（第80図・図版43）

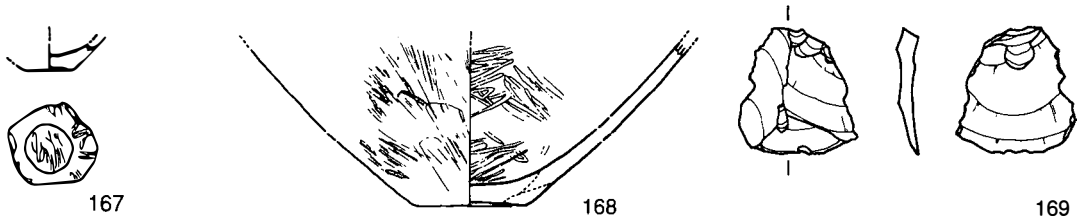
調査区の北側に位置する。上面は多少削平されているが、掘り方を持つ埋設土器遺構である。掘り方はやや不整形な円形を呈する。長径は72cm、短径は60cmで遺構検出面から最深部までの深さは34cmである。掘り方内には、深鉢の他に浅鉢がセットで検出された。検出時、



第77図　40～43区遺構配置図　S：1/600



第78図　40－01号住居址遺構実測図



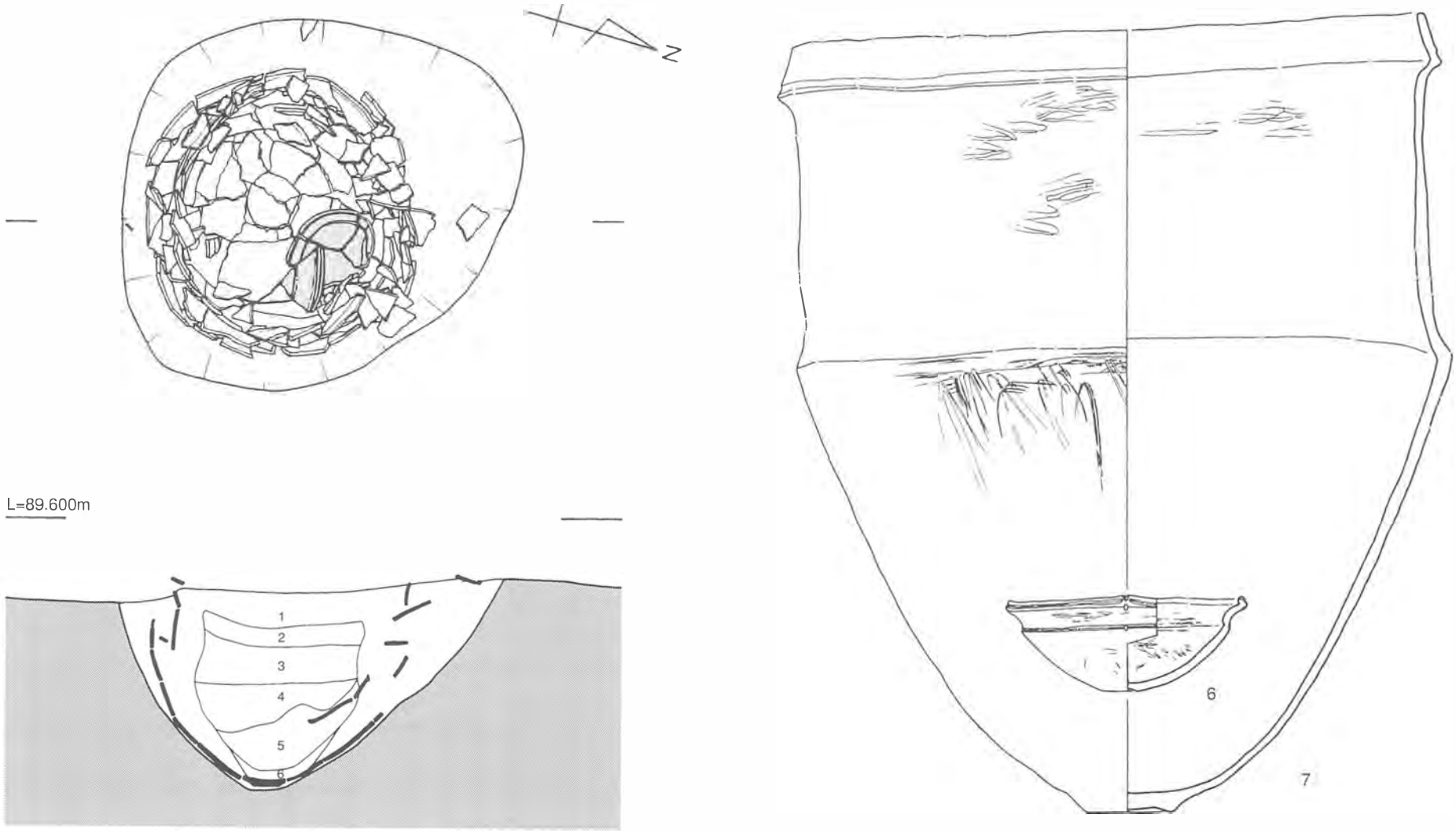
第79図　40－01号住居址出土遺物実測図

浅鉢は深鉢内に据えられた状態で見つかっている。主体となる深鉢は、口縁を上にほぼ垂直に据えられていた。浅鉢、深鉢共に残りは良く、埋設当時の姿を留めていると考えられる。周囲には伴うような遺構は確認されなかった。

埋設土器の埋土は、深鉢内の埋土と深鉢と掘り方内の埋土に分けられる。軟らかい暗黄褐色土（埋土１層）が深鉢と掘り方を覆うように堆積している。その下に深鉢の埋土として、埋土１層よりややしまりがあり明るめの暗黄褐色土（埋土２層）、埋土２層よりしまりがあり明るめの暗黄褐色土（埋土３層）、粘質を持ちしまりのある明褐色土（埋土４層）、埋土４層よりさらにしまりのある明褐色土（埋土５層）、そして底部には粘質をあまり持たずしまりの弱い暗褐色土（埋土６層）がある。埋土１層は埋土２～６層を覆うように堆積しているように見えるが、実際は深鉢の内と外で分層される可能性もある。

【遺物】（第80図・図版141）

6 はほぼ完形の浅鉢である。小型の精製浅鉢で器面は黒く焼き上げられ、内外面は丁寧に磨かれている。口縁帯には山形突起がついているが形骸化しており、ほとんど段差はない。また凹点が口縁に２点、肩部に１点施されており、底部は上げ底になっている。完形に近い浅鉢は意外と少なく、浅鉢の形態を把握するために欠かせない資料である。**7** は口縁の１／２と胴部の一部を欠損した深鉢である。かなり大型で供伴する浅鉢がゆとりを持って出し入れできるほどである。頸部以上は横ミガキを基調としているが、胴部はヘラナデや横ナデ等が施されている。底部は高台状の上げ底でわずかに抉れている。全体的に長胴気味で、胴部下半は上部の重量のせいか、やや下膨れ気味である。口縁帯には１条の沈線が施されている。通常、沈線が１条のみというのはあり得ないため、他に数条巡らすつもりだったのか、あるいはナデ消されているのかどちらかだと考えられる。



第80図　40－03号埋設土器実測図

11　41区

【概要】（第77・81図）

石の本遺跡群の中央よりやや北側に位置する調査区である。北東から南西に向かってわずかに傾斜している。40区の北側に近接しており、40区程ではないがやや平坦な感がある。本調査区以降、後述する調査区は、遺跡群の中央を通る丘陵上からその西縁にかけて立地しており、今後立地については省略していく。標高88.6ｍから89.2ｍにかけて位置している。

遺構としては、竪穴住居址２軒、埋設土器遺構３基が検出されている。遺構の分布は、竪穴住居址が南北にそれぞれ偏っており、その間に埋設土器遺構が点在している。遺構検出面はⅢ層である。出土遺物は縄文土器、石器の他に玉類、土偶、その他土製品が出土している。縄文土器は深鉢、浅鉢の他に鉢や注口土器がある。遺構内遺物の中には残りの良い資料が比較的多く見られる。注口土器は注口部のみであるが、注口土器自体、本遺跡群の出土例が少ないため注口部とはいえ、その重要性は高い。石器は打製石斧、石鏃、敲石・磨石が多く、磨製石斧、二次加工のある剥片がそれに次いで多く、その他石匙、楔形石器、石皿、砥石等も見られる。

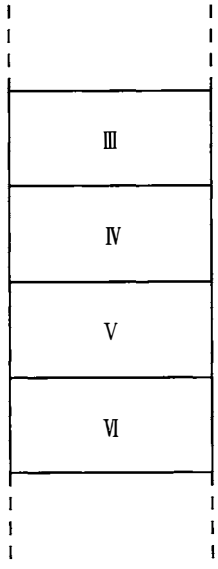
（１）　竪穴住居址

41－03号住居址

【遺構・埋土】（第82図・図版44）

調査区北東部に位置する。平面プランは円形を呈する。長径は7.2ｍ、短径は6.3ｍを測る。遺構検出面から床面までの深さは20cmである。柱穴は計17個確認されたが、柱穴とその他の住居址に伴うピットとの区別は難しい。中央より南東寄りの場所に70×60cmの炉跡が１基検出された。南西の壁際付近や炉跡の周囲で部分的に硬化面が確認された。また住居址の中央には2.1×1.85ｍの土壙状の落ち込みが検出された。

住居址の埋土は、３層に分層される。粘質をあまり持たずしまりのない褐色シルト（埋土１層）と、粘質を持ちしまりのある暗褐色シルト（埋土２層）、埋土２層に比べて粘質を持ちしまりのある暗褐色シルト（埋土３層）であるが、埋土２層は北西と南東側で厚く堆積している感がある。また埋土１層には多量の土器片が混じっていた。



第81図　41区基本層序図

【遺物】（第83～85図・図版124～127）

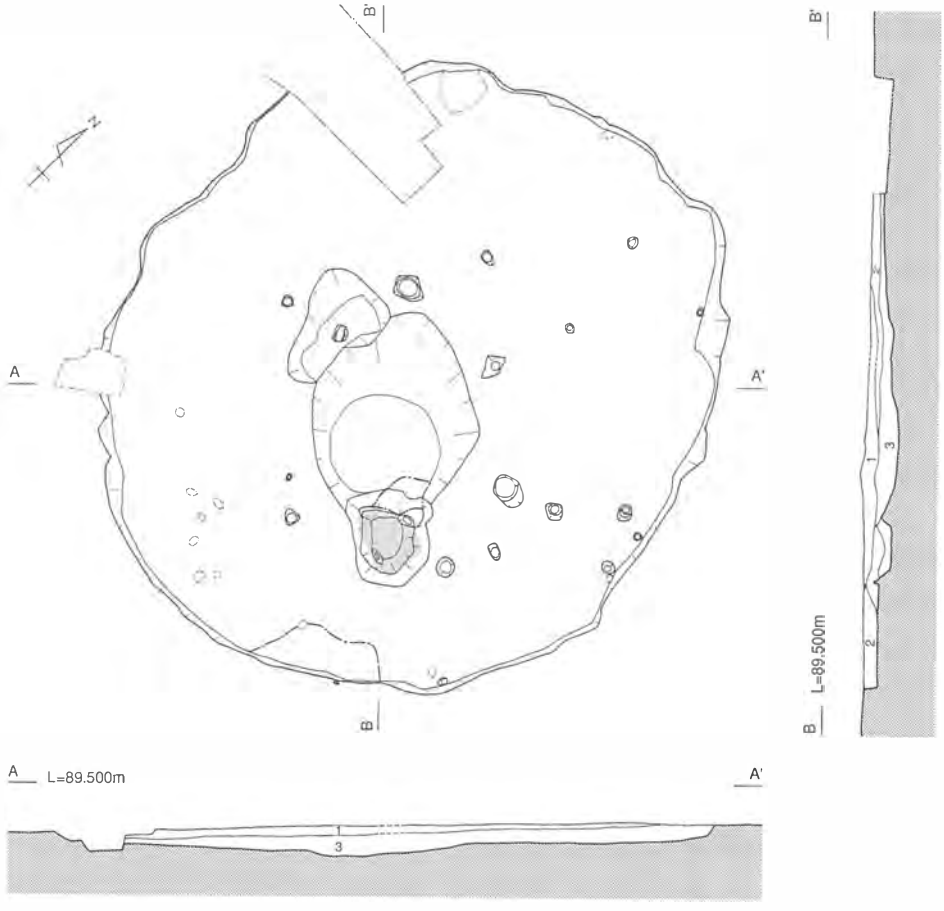
本住居址からは、縄文土器と石器が出土している。縄文土器、特に粗製の深鉢が多く出土している。全体の形状が復元できるものが多く、遺構内の一括資料として扱えそうである。深鉢の他浅鉢や鉢もあるが、破片資料のみである。これらの深鉢を中心に図示している。石器は打製石斧、石鏃、二次加工のある剥片、敲石・磨石、石皿等が出ており、それらの中から幾つか選んで図示している。

41－04号住居址

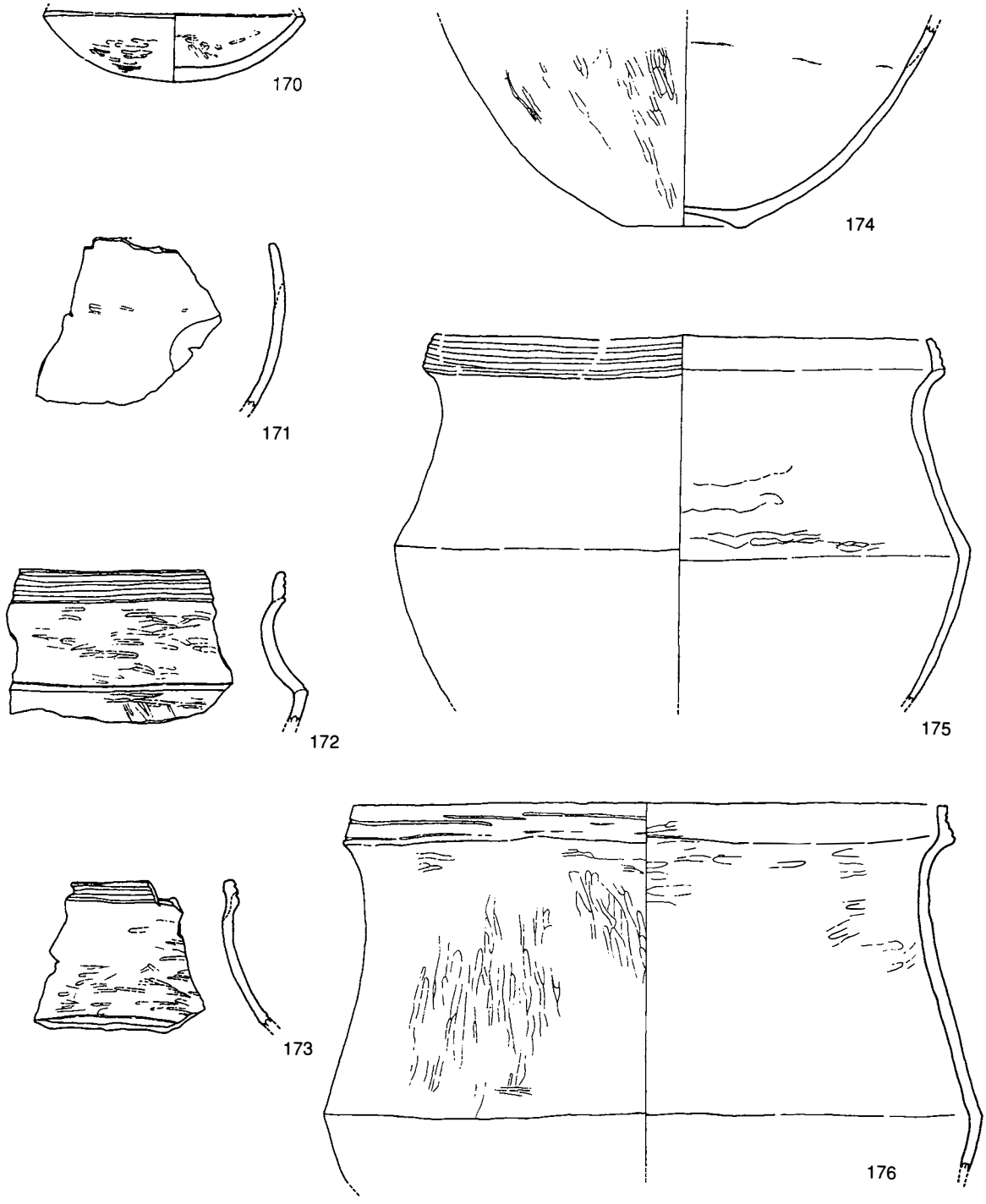
【遺構・埋土】（第86図・図版45）

調査区の南西側に位置する。平面プランはやや不整形ながら円形を呈する。長径は6.7ｍ、短径は6.0ｍを測る。遺構検出面から床面までの深さは最大40cmである。柱穴は計15個確認されたが41－03号同様、柱穴とその他の住居址に伴うピットとの区別は難しい。炉跡は見当たらず、硬化面も確認されなかった。西側を除き、壁面に沿うように溝状の落ち込みが見られ、中央には大きな土壙が検出され、その中心にはもう一つ土壙が検出された。

住居址の埋土は、基本的に７～10層に分層される。粘質をあまり持たずしまりのやや弱い、焼土を多く含む褐色シルト（埋土１層）と埋土１層の土質で焼土を少量含む褐色シルト（埋土２層）は分層しているが、同一層と考えられる。その下には粘質をあまり持たずしまりの強い、焼土・炭化物をわずかに含む褐色シルト（埋土３層）があり、住居址内に広く堆積する。それ以下の埋土は、床面や壁面付近に部分的に堆積するもので、粘質をあまり持たずしまりの弱い暗褐色シルト（埋土４層）、埋土３層よりやや明るい褐色シルト（埋土５層）、埋土４層と同質であるがしまりの強い暗褐色シルト（埋土６層）は主に壁面付近で確認されている。また粘質を持ちしまりの強い暗褐色シルト（埋土７層）は中央の土壙を中心に床面から壁面にかけて堆積している。粘質を持ちしまりのある暗褐色シルト（埋土８層）と粘質をあまり持たずしまりの強い暗褐色シルト（埋土９層）は埋土７層に連続して堆積しており、特に埋土９層は埋土７層とほぼ同質と考えられる。なお粘質を持ちしまりの強い黄褐色シルト（埋土10層）はⅤ・Ⅵ層相当土を含んでおり、風倒木の可能性があるので図示していない。



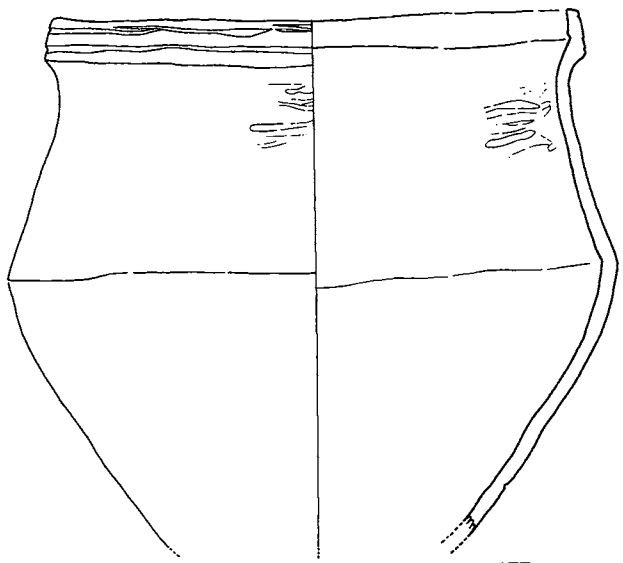
第82図　41－03号住居址遺構実測図

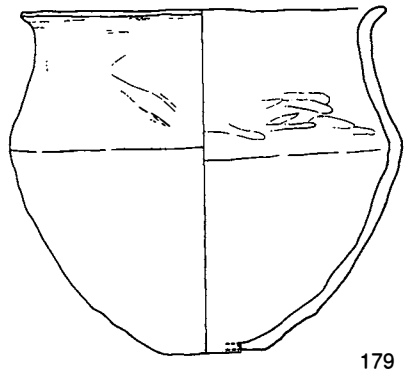


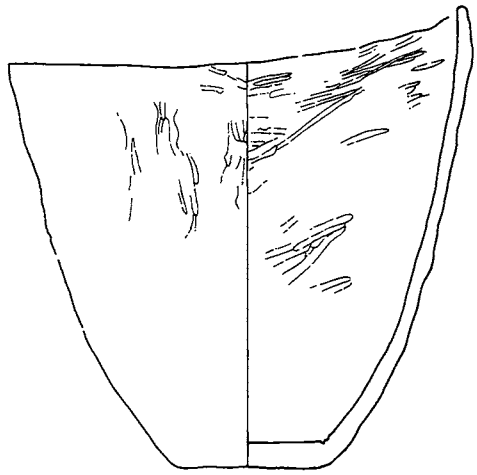
第83図　41－03号住居址出土遺物実測図１

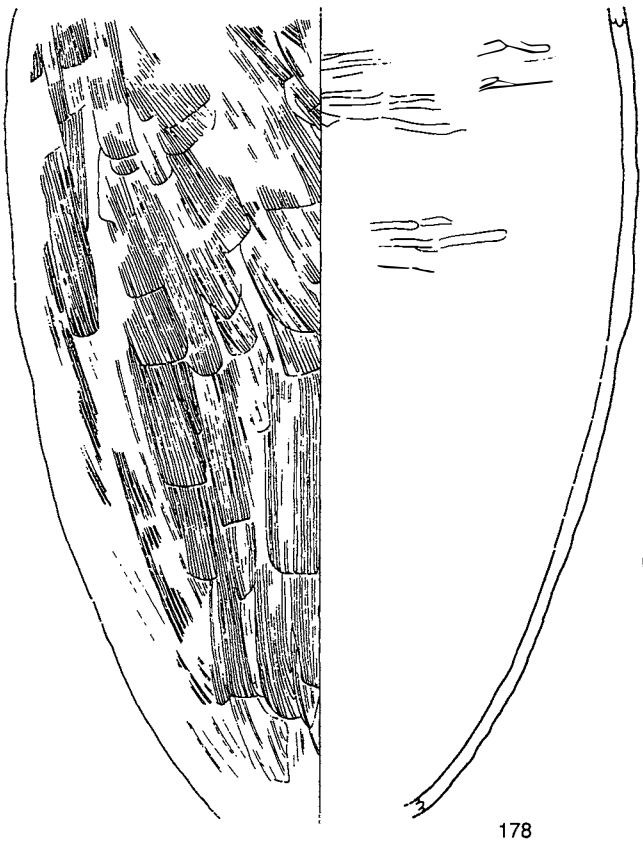
【遺物】（第87図）

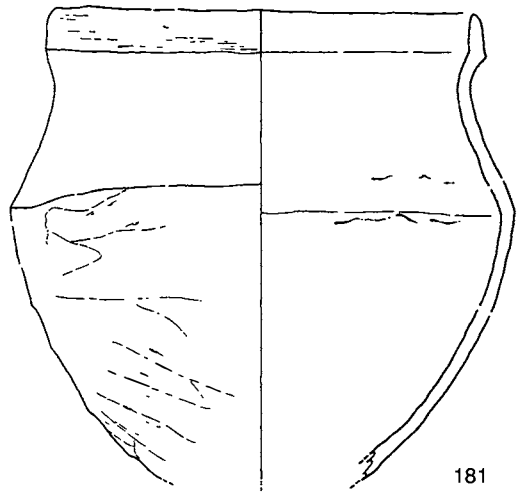
本住居址からは、縄文土器と石器が出土している。41－03号住居址に比べ、出土量が少なく、残りも良くない。縄文土器は深鉢、浅鉢の他小型の土器らしきものも出ている。破片資料が大半であるが、比較的残りの良い浅鉢と深鉢が１点ずつあり、それらを中心に図示している。石器は打製石斧、石鏃、石匙、二次加工のある剥片、敲石・磨石等が出ており、それらの中から幾つか選んで図示している。



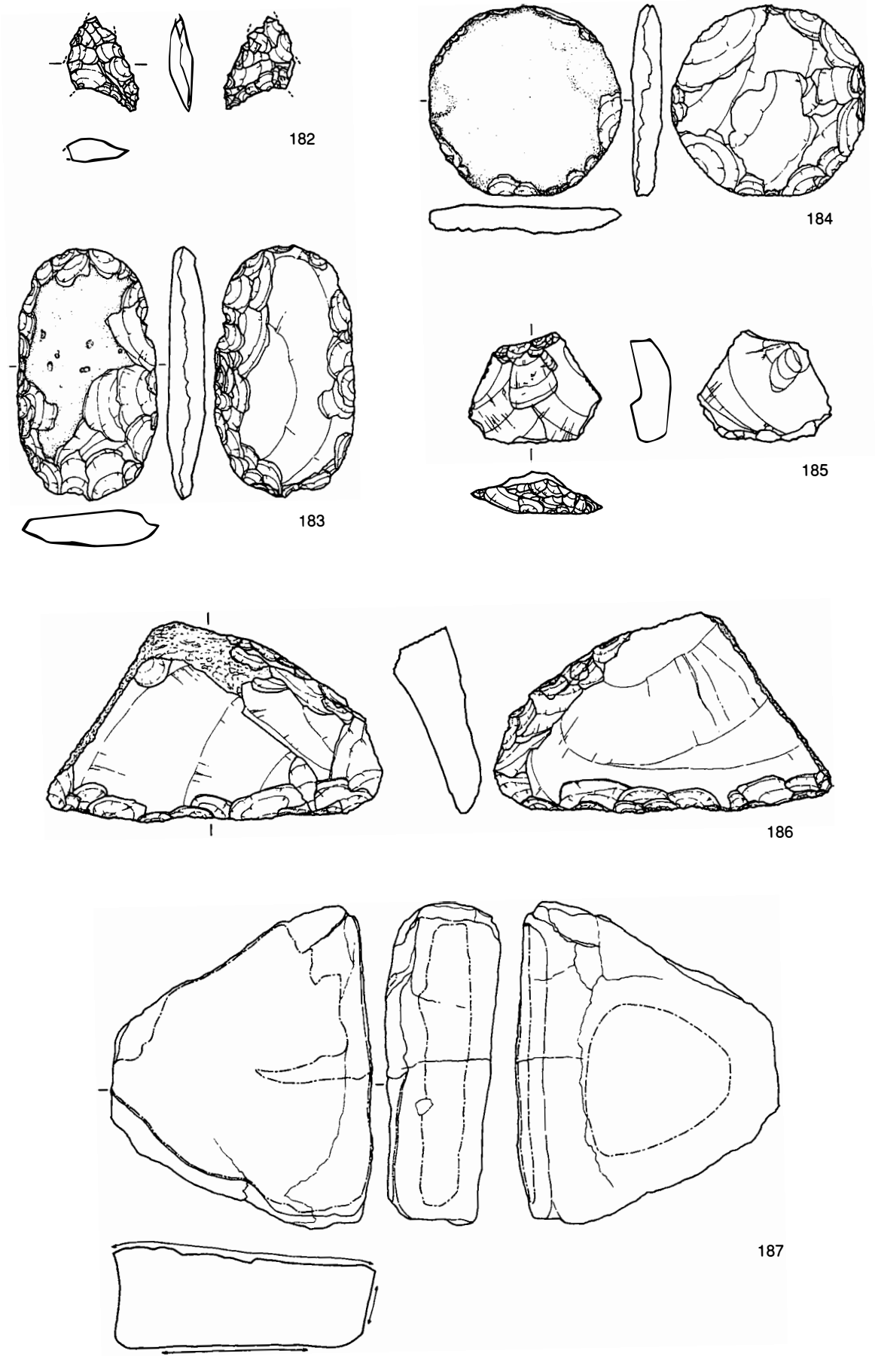








第84図　41－03号住居址出土遺物実測図２



第85図　41－03号住居址出土遺物実測図３

（2）　埋設土器遺構

41－02号埋設土器

【遺構・埋土】（第88図・図版46）

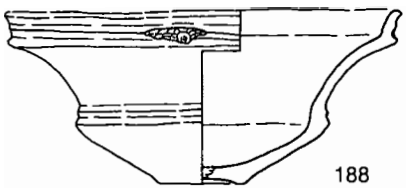
調査区東側に位置する。遺構検出時に掘りすぎたため、上部をやや削平されたが掘り方を持つ埋設土器遺構である。掘り方は後世の撹乱等で削平されているが、円形を呈すると考えられる。検出時の規模は、長径が35cm以上、短径が45cmを測り、遺構検出面から最深部までの深さは17cmである。掘り方内には、深鉢が上半分を破損した状態で検出された。浅鉢等伴う遺物は見つからなかった。残存状況から、埋設当時は口縁を上にして垂直に据えられていたと考えられる。周囲に本埋設土器に伴うような遺構は検出されなかった。

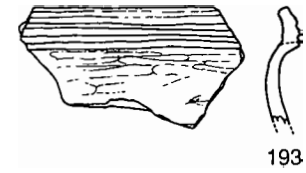
埋設土器遺構の埋土は、3層に分けられる。掘り方と深鉢内に流入したやや黄色い暗褐色土（埋土1層）と深鉢内に堆積した埋土1層より粘質、しまりのある暗褐色土（埋土2層）、掘り方の底に堆積したあまりしまりのない暗褐色土（埋土3層）である。

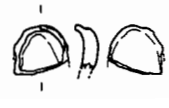
【遺物】（第88図・図版142）

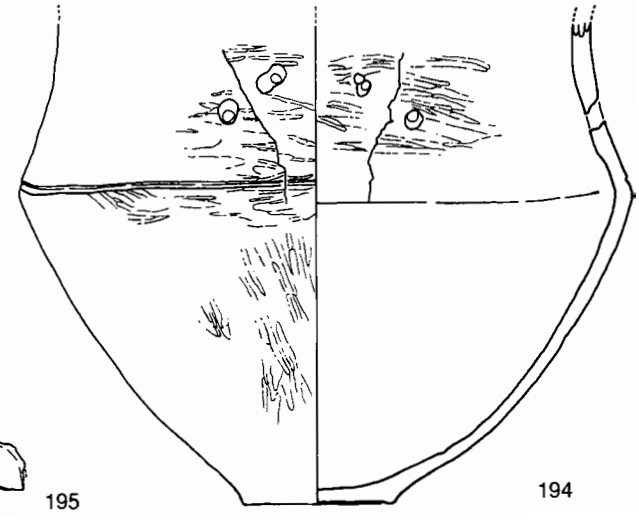
8は口縁部1／3とその他を部分的に欠損した深鉢である。埋設土器遺構に用いられた深鉢では珍しく口縁帯を持たない。器面調整はナデ調整が主に用いられ、ミガキは皆無である。胴部にはナデの前にヘラナデを施している。器形もややいびつであり、典型的な粗製深鉢の特徴を備えていると言えよう。全体的なプロポーションとしては胴部がやや長胴化しており、やや新しい様相も見られるが、肩部には界線を巡らし、底部は一応上げ底気味に仕上げる等、それなりに古い様相を呈している。

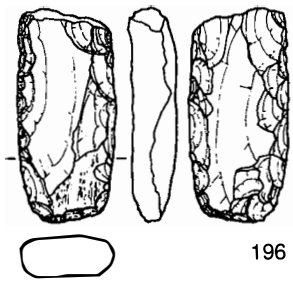
第86図　41－04号住居址遺構実測図

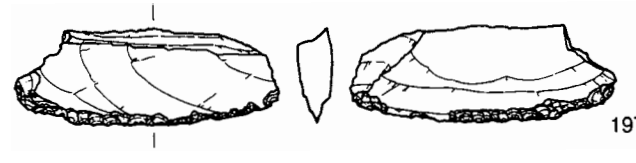


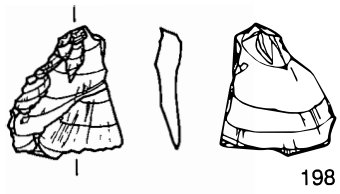


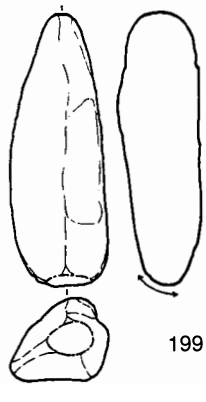


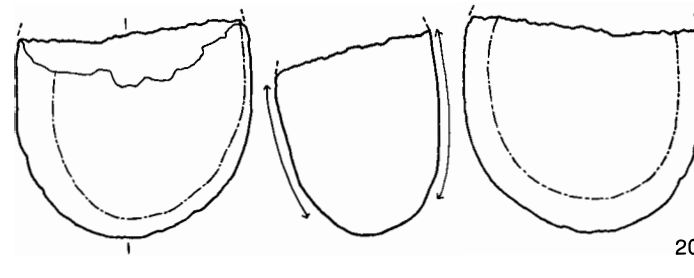




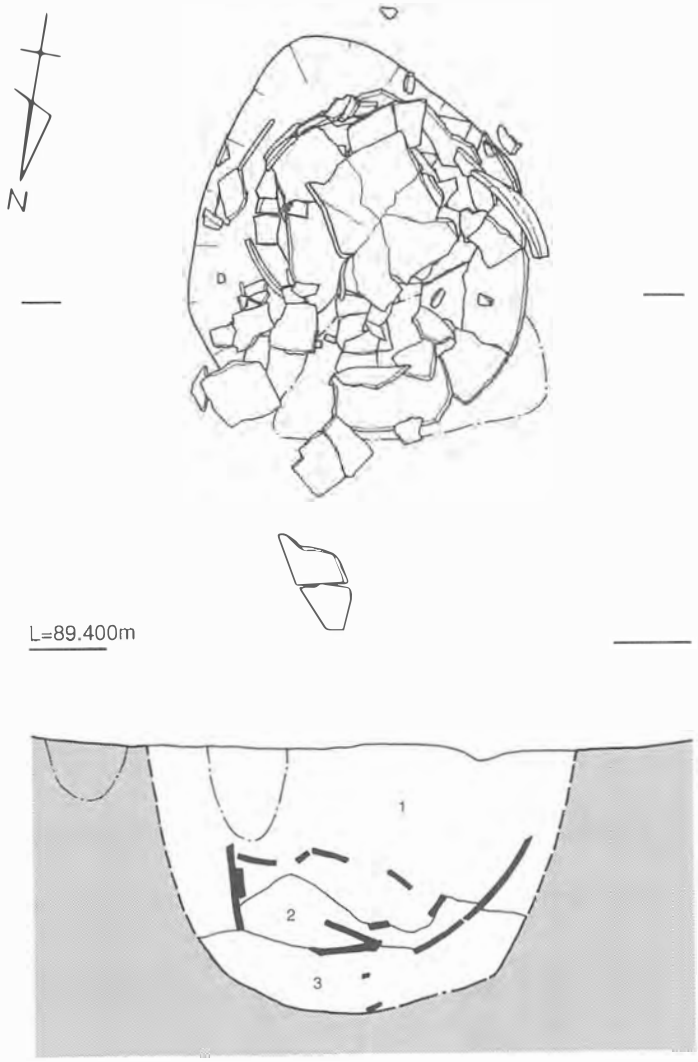


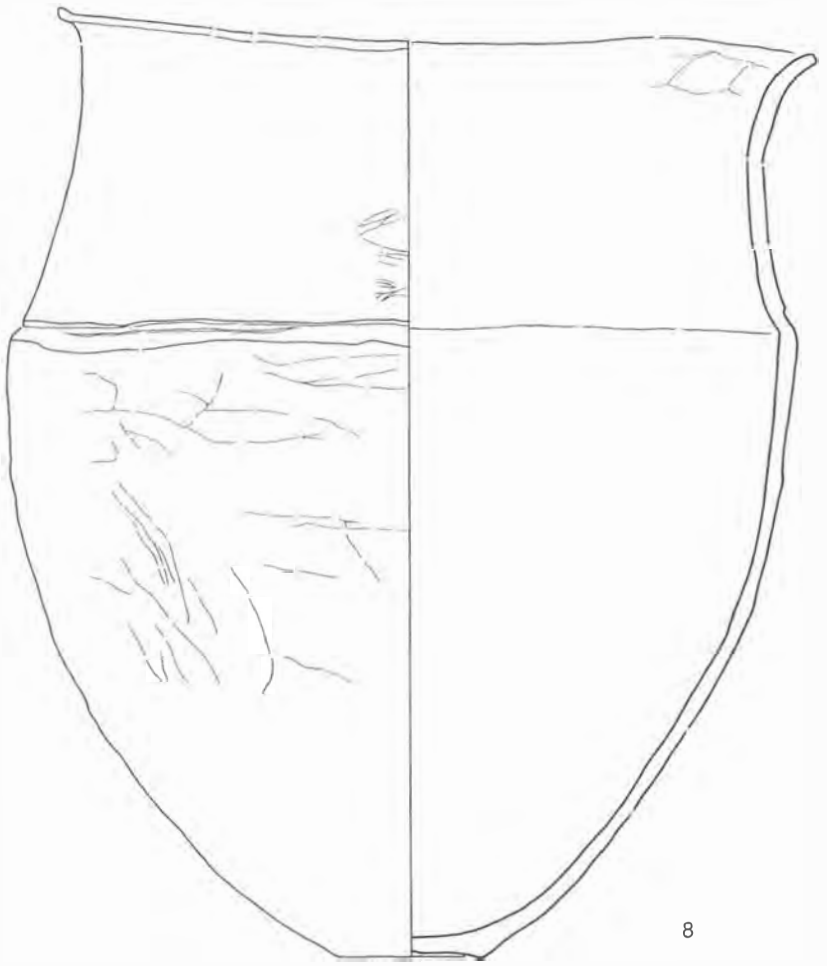






第87図　41－04号住居址出土遺物実測図





第88図　41－02号埋設土器実測図

41－05号埋設土器

【遺構・埋土】（第89図・図版47）

調査区中央よりやや西側に位置する。西側を一部削平されているが、掘り方を持つ埋設土器遺構である。掘り方は削平されているが、やや不整形な円形を呈する。長径は58cm以上、短径は61cmを測り、遺構検出面から最深部までの深さは53cmである。掘り方内には深鉢が口縁を上にして、垂直に据えられていた。胴部が土圧によって多少変形していたが、遺物の散逸は少なく、埋設当時の姿を留めていると考えられる。

埋設土器遺構の埋土は、深鉢内の埋土と掘り方内の埋土に分けられる。深鉢内の埋土は、現代の流入土（埋土１・２層）の下に暗褐色を基調としつつ、より粘質・しまりのあるもの（埋土３層）とそうでないもの（埋土４層）が堆積する。土圧で割れた際の流入土（埋土５層）は、粘質をあまり持たずしまりのあまりない黒褐色シルトである。また掘り方内の埋土は、若干の焼土を含む暗褐色シルト（埋土６層）のみである。

【遺物】（第89図・図版143）

9 は口縁部から頸部にかけての１／２とその他を部分的に欠損した深鉢である。器面調整は横ミガキ又はミガキが主で、大型の深鉢でありながら精錬された印象が強い。口縁帯には３～４条の沈線が巡り、頸部は弓形に外湾し、肩部はやや強く張り出し、胴部はやや丸みを帯びながら底部へと伸びている。底部は上げ底で、半球状を呈する。このようにやや古い様相を呈してはいるが、全体のプロポーションとしてはやや丸みがあり、新しい要素も持っている。

41－06号埋設土器

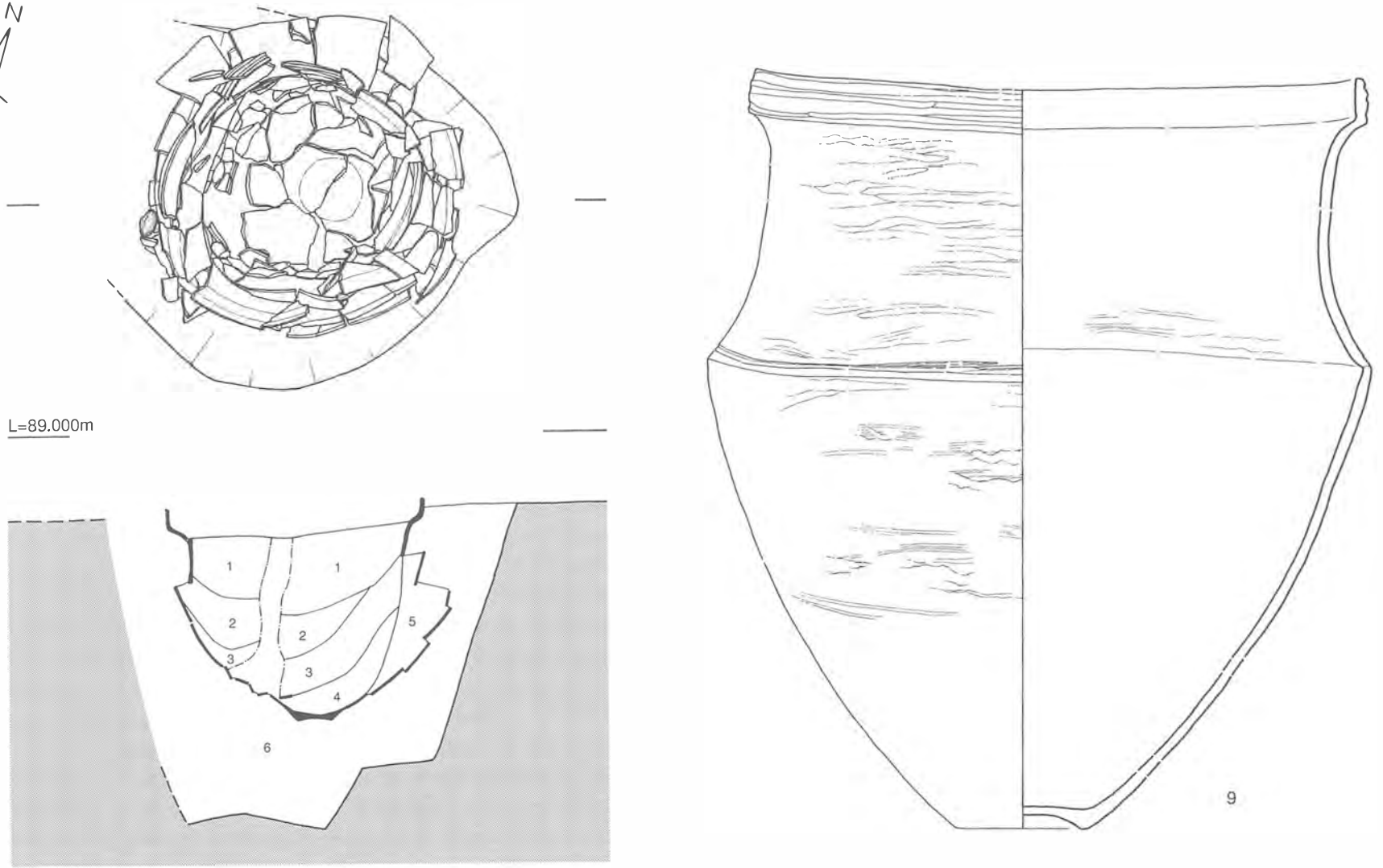
【遺構・埋土】（第90図・図版48）

調査区東側、41－02号埋設土器の北側に位置する。掘り方を持つ埋設土器遺構である。掘り方は、南側が土圧によって多少変形していたが、円形を呈する。長径は50cm、短径は45cmを測り、遺構検出面から最深部までの深さは30cmである。掘り方内には、深鉢が上半分を破損した状態で検出された。残存状況から、埋設当時は口縁を上にして垂直に据えられていたと考えられる。周囲に本埋設土器に伴うような遺構は検出されなかった。

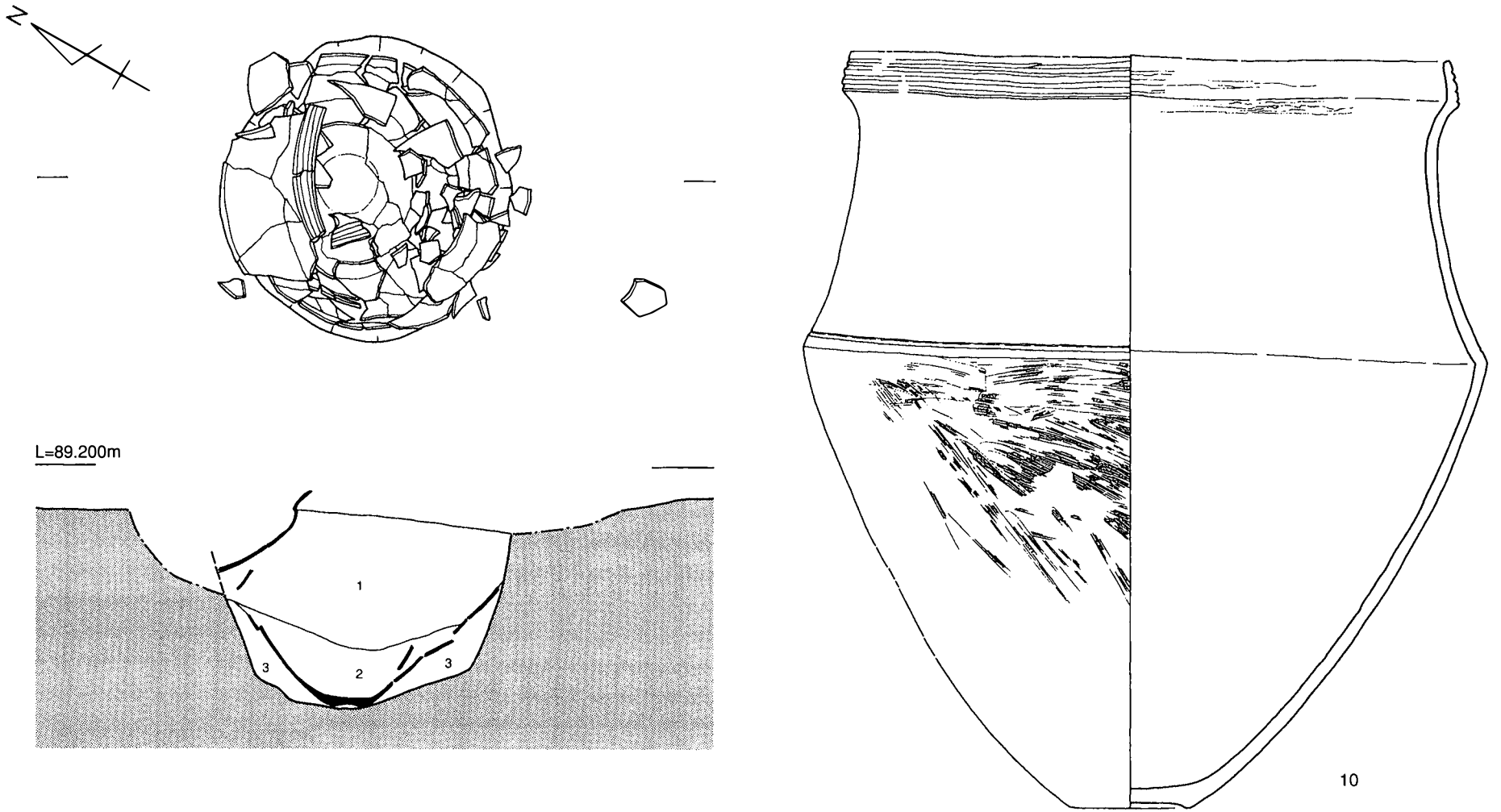
埋設土器遺構の埋土は、深鉢内の埋土と掘り方内の埋土に分けられる。深鉢内の埋土は、粘質を持ち、ややしまりのある明褐色シルト（埋土１層）と粘質をあまり持たず、しまりのある暗褐色シルト（埋土２層）であるが、埋土１層はⅢ層の流入土であろう。掘り方内の埋土は、粘質をあまり持たず、ややしまりのある暗褐色シルト（埋土３層）である。

【遺物】（第90図・図版144）

10はほぼ完形の深鉢である。器面調整は主に横ミガキ又は横ナデで、大型の深鉢でありながら精錬された印象が強い。胴部外側にはヘラナデが施されており、やや粗雑な感もあるが器面は凹凸も少なく、良く整えられている。口縁帯には４条の沈線が巡り、頸部はやや弓形に外湾し、肩部はやや強く張り出し、胴部はやや丸みを帯びながら底部へと伸びている。底部は上げ底気味である。



第89図　41－05号埋設土器実測図



第90図　41－06号埋設土器実測図

12　42・43区

【概要】（第77・91図）

石の本遺跡群の中央よりやや北側に位置する調査区である。北東から南西に向かって傾斜しており、北に行くにしたがって傾斜がきつくなっている。標高88.6ｍから90.6ｍにかけて位置している。43区は、北半分が廃棄物の投棄等で撹乱が激しく、調査できる状態ではなかったことと、遺構の連続性から42区と同時に調査した方が効率的であることから、42区と併せて報告している。

遺構としては、竪穴住居址18軒、埋設土器遺構17基の他に円形周溝遺構１基、土壙多数が検出されている。遺構が最も集中している調査区であり、当該時期の遺跡の中心部と言える。遺構の分布としては、42区と43区でそれぞれ遺構の集中域が確認されている。遺構検出面はⅡc層からⅢ層にかけてである。出土遺物は縄文土器、石器の他に玉類、土偶、その他土製品が出土している。遺構内外を問わず大量に出土しており、質量とも本遺跡群内では群を抜いている。縄文土器は深鉢、浅鉢の他に鉢や注口土器がある。遺構内遺物は、本来もっと復元できる遺物があったと考えられるが、整理作業の都合上、復元途中で終わった遺物が多かったため、破片資料が大半を占める結果となった。また包含層遺物ながら、注口土器が１点出土している。注口部が欠損しているものの、注口から胴部の形態が分かる資料は本遺跡群唯一のものである。石器は打製石斧、磨製石斧、敲石・磨石、二次加工のある剥片が多く、石鏃、石皿がそれに次いで多く、その他石匙、石錘、石庖丁形石器、砥石等も見られる。玉類は勾玉、管玉、丸玉があり、石製と土製がある。土偶は１点のみだが、土製品は形状不明なものが多い。また焼成粘土塊の出土も確認されている。

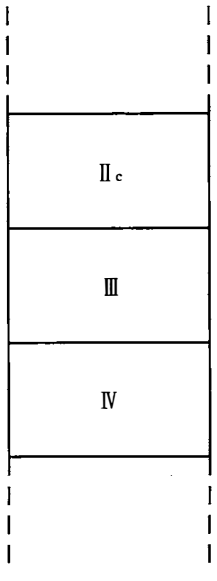
（1）　竪穴住居址

42－05号住居址

【遺構・埋土】（第92図・図版49）

42区と43区の間の中央に位置する。中央と南端を後世の溝によって削平されているが、平面プランは円形を呈する。長径は5.6m、短径は5.4ｍを測り、遺構検出面から床面までの深さは30cmである。柱穴は計６個確認されたが撹乱されている箇所があり、本来はもっと多かったと考えられる。中央よりやや東寄りの場所に炉跡とおぼしき焼土の落ち込みが１基検出された。溝によって削平されているが、径は80～100cm程であろう。この他に住居址に伴う遺構は検出されなかった。硬化面は確認されなかった。

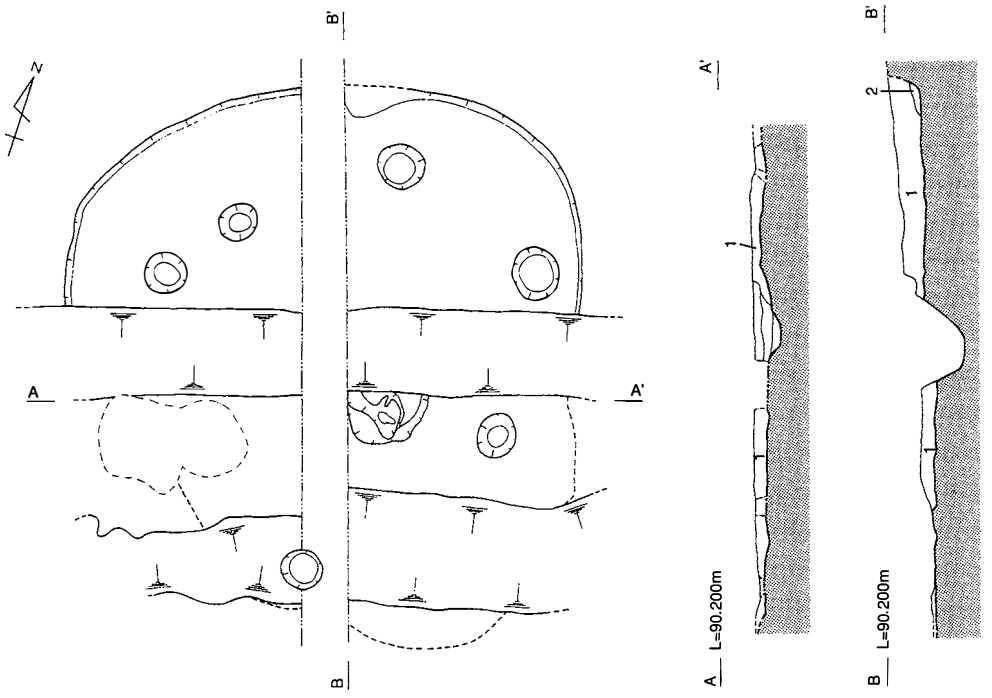
住居址の埋土は、２層に分けられる。焼土・Ⅲ層相当土を含む褐色土（埋土１層）とⅣ層に類似した暗褐色土（埋土２層）である。埋土の大半を占めるのは埋土１層で、埋土２層は壁際に三角堆積するだけである。



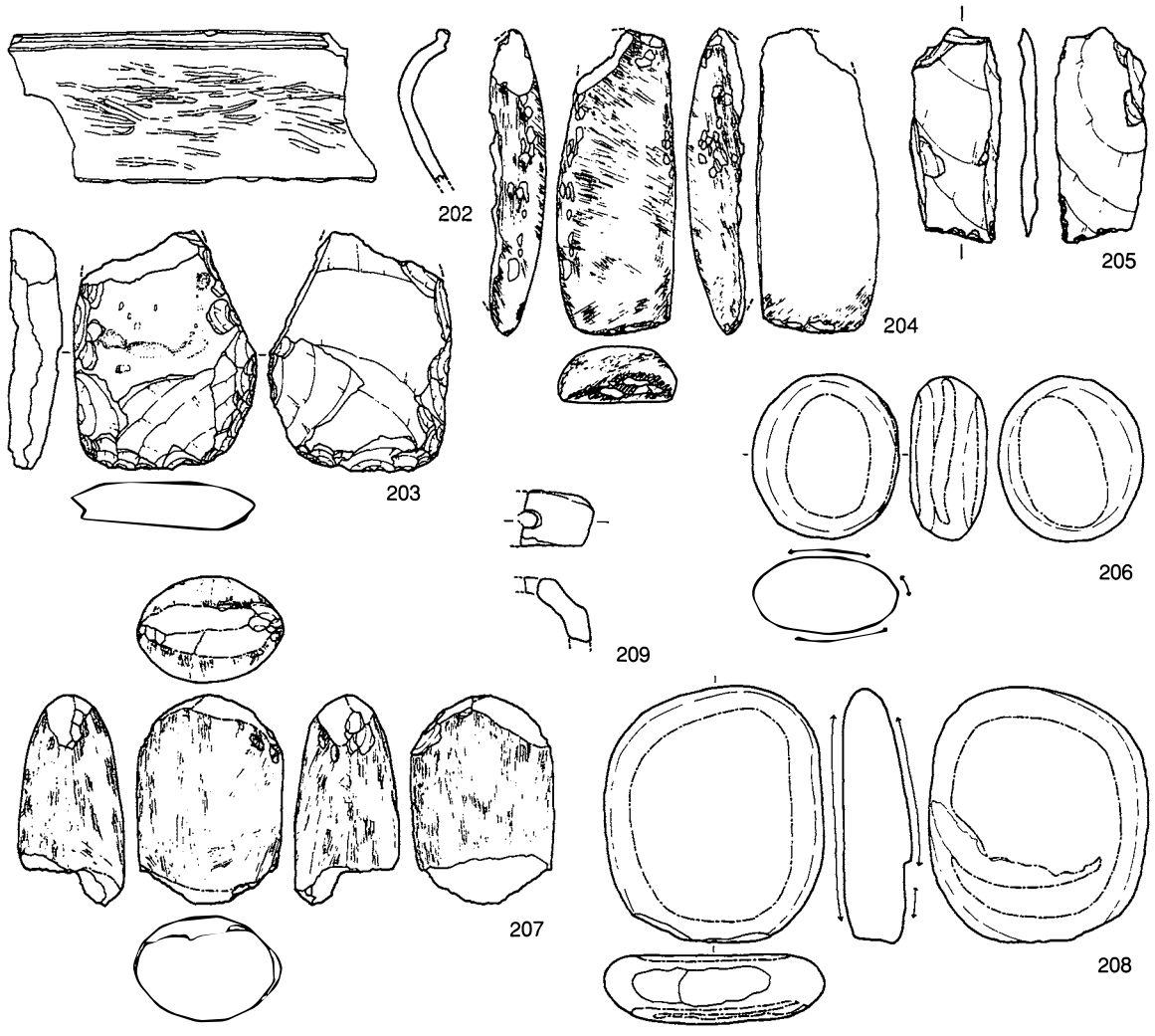
第91図　42区基本層序図

【遺物】（第93図）

本住居址からは、縄文土器と石器の他に土製品と焼成粘土塊が出土している。縄文土器は破片のみで、良好な資料はほとんど見られない。



第92図　42－05号住居址遺構実測図



第93図　42－05号住居址出土遺物実測図

わずかに浅鉢を１点図示している。石器は打製石斧、磨製石斧、二次加工のある剥片、敲石・磨石が出ており、それらの中から幾つか選んで図示している。土製品は１点出土したものを図示している。

42－06号住居址

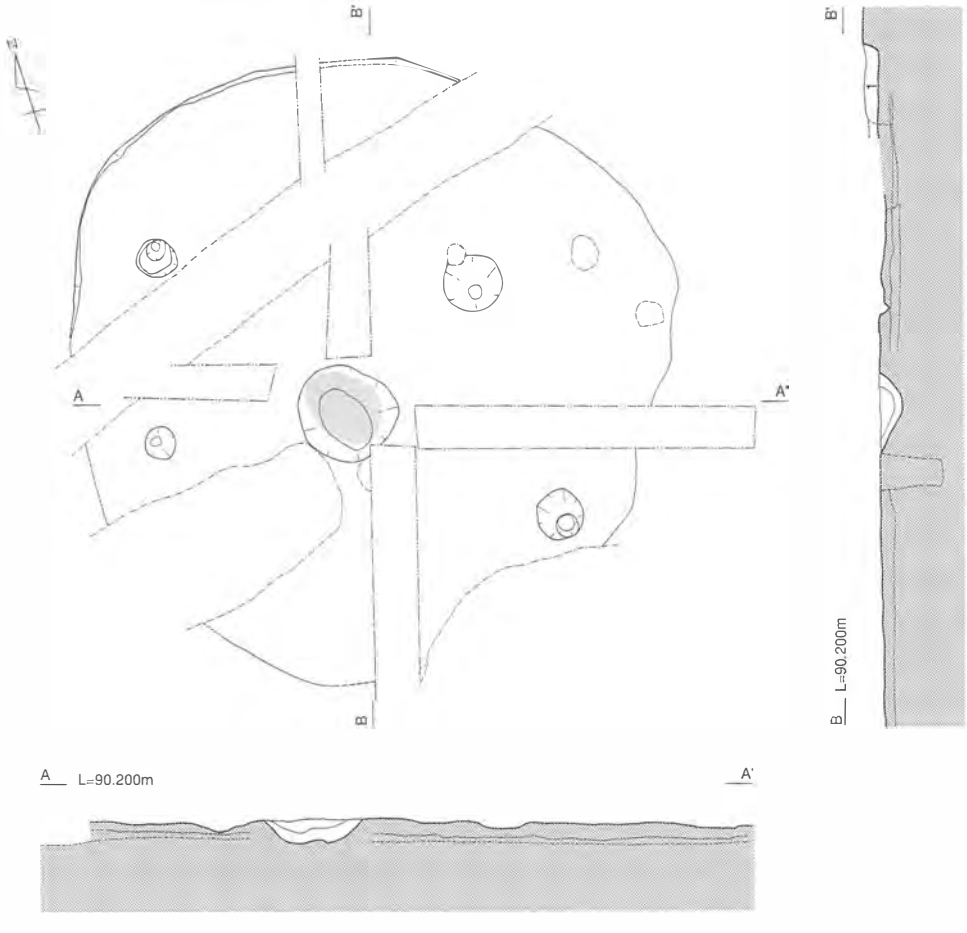
【遺構・埋土】（第94図・図版50）

42区と43区の間の中央に位置する。42－05号の東側にある。上面をかなり削平されたうえ、中央と南端を後世の溝と別の土壙によって削平されているが、平面プランは円形を呈する。径は6.8mを測り、遺構検出面から床面までの深さは20cmである。柱穴は確認されているもので４個を数え、削平されていることを考慮するなら本来はもっと多かったと考えられる。中央には径110cm程の炉跡が１基検出された。この他に住居址に伴う遺構は検出されなかった。硬化面は確認されなかった。

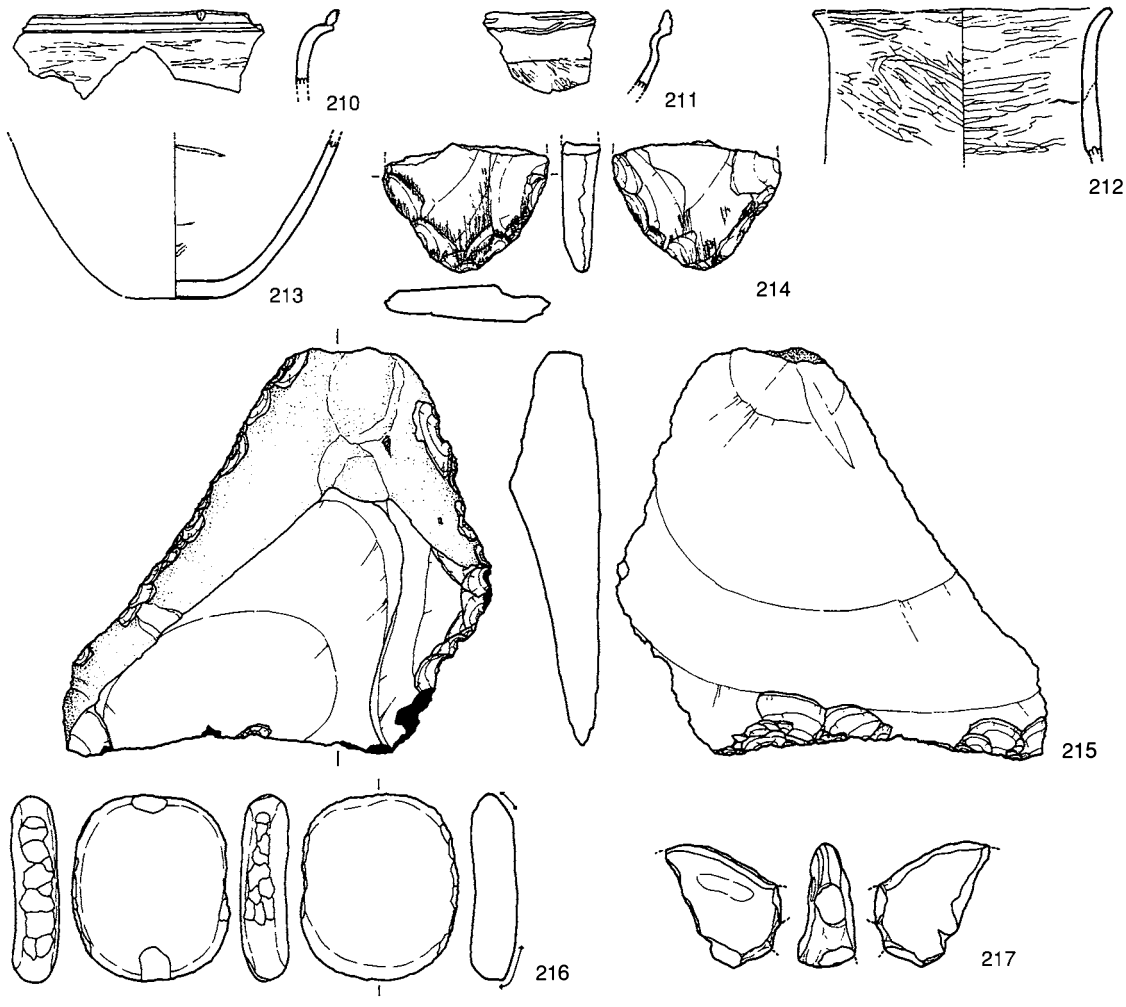
住居址の埋土は、粘質を持たずしまりのない明褐色土の１層のみであった。

【遺物】（第95図）

本住居址からは、縄文土器と石器の他に土偶が出土している。遺物の出土量自体多くなく、破片資料が主である。縄文土器は破片のみであるが、深鉢１点、浅鉢２点、鉢１点を図示している。石器は打製石斧、石錘、石刃、石皿等が出ており、それらの中から３点を図示している。土偶は１点のみだが図示している。



第94図　42－06号住居址遺構実測図



第95図　42－06号住居址出土遺物実測図

42－08号住居址

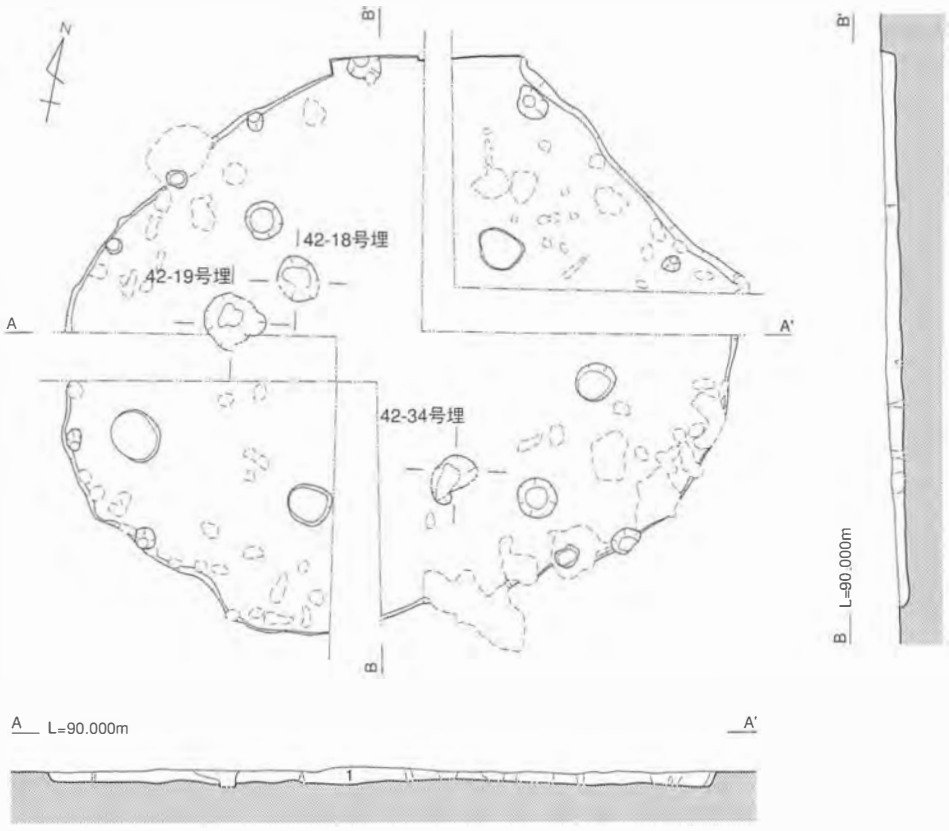
【遺構・埋土】（第96図・図版51）

42区北側に位置する。42－06号の南側にある。北東部を別の土壙によって削平されているが、平面プランはやや楕円気味の円形を呈する。長径は7.1ｍ、短径は5.8mを測り、遺構検出面から床面までの深さは15cmである。柱穴は計 6 個確認された。また壁際には計10個支柱穴が確認された。他にも幾つかピットが検出されたが、柱穴や支柱穴の可能性もある。炉跡は検出されなかった。住居址内には計 3 基の埋設土器（42－18号・19号・34号埋設土器）が確認されているが、いずれも住居址の埋土に掘り込んで埋納されており、伴うものではない。

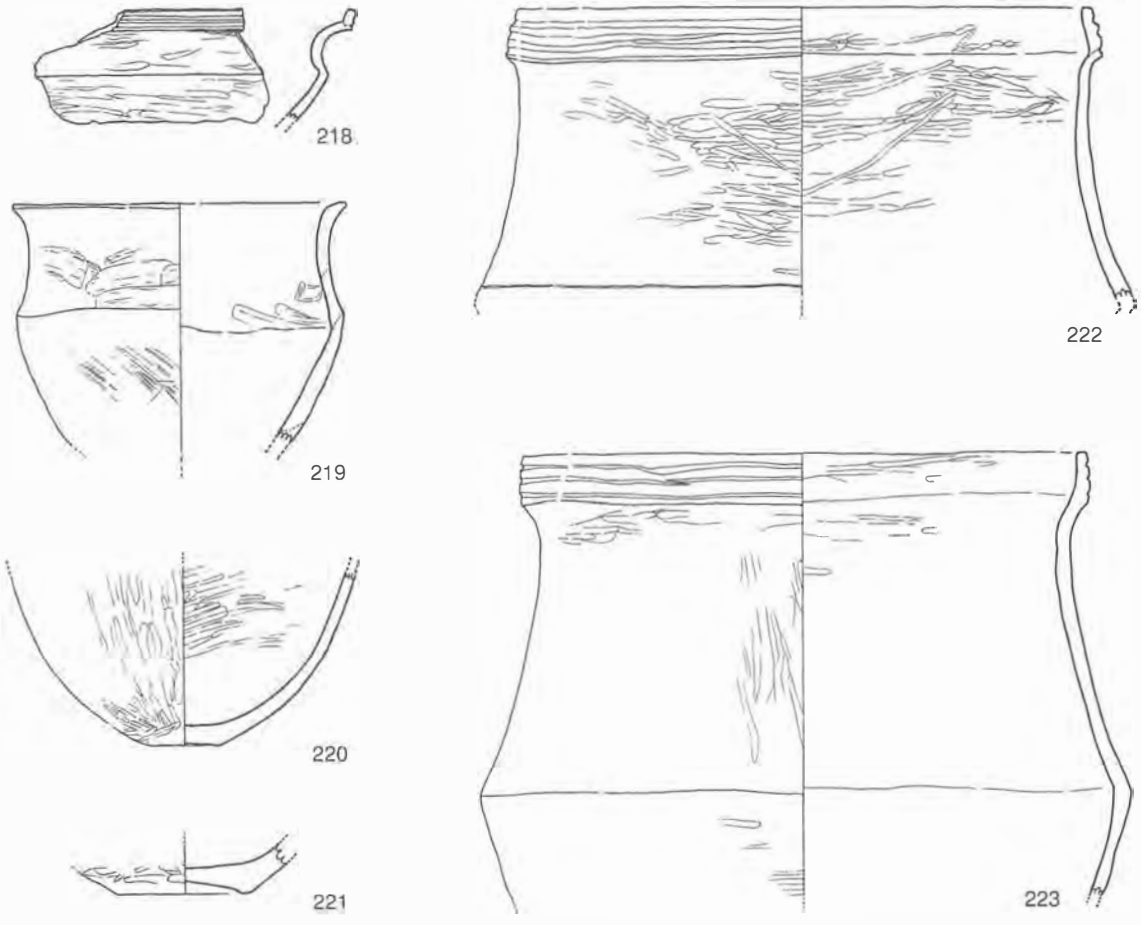
住居址の埋土は、ややしまりのないにぶい黄褐色土の 1 層のみであった。わずかに焼土を含み、土器片を多く含む。

【遺物】（第97～99図・図版128・129）

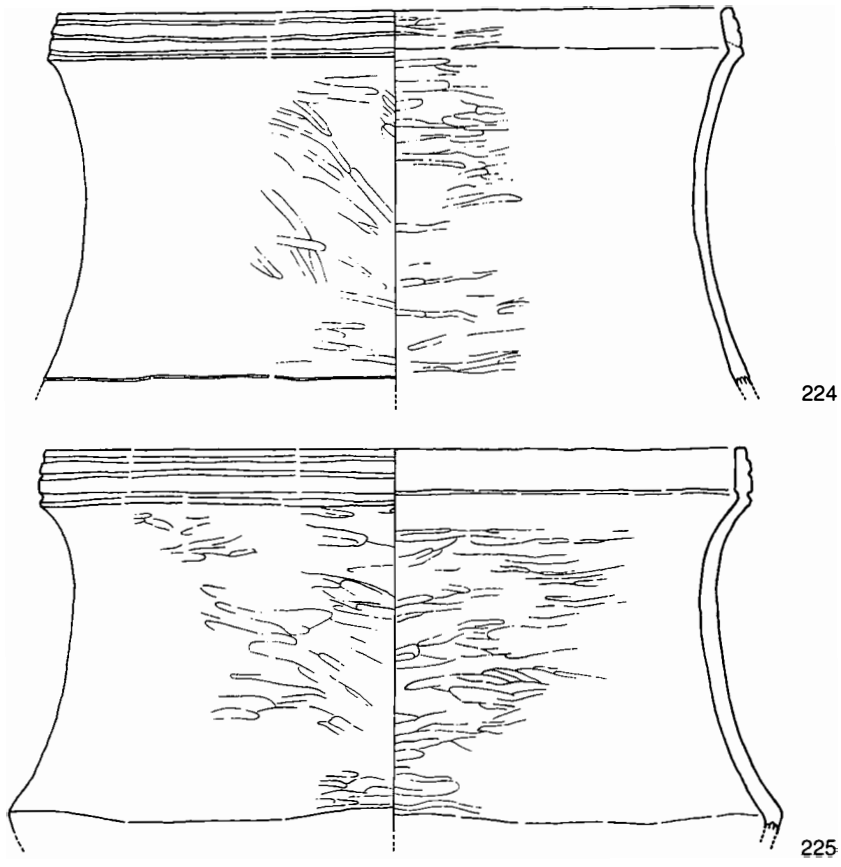
本住居址からは、縄文土器と石器の他に玉類、土製品、焼成粘土塊が出土している。遺物の出土量は比較的まとまっている。縄文土器は破片ながら深鉢、鉢、浅鉢があり、それらの中から浅鉢 1 点、鉢 2 点、深鉢 5 点を図示している。石器は打製石斧、磨製石斧、石錘、二次加工のある剥片、使用痕のある剥片、敲石・磨石、石皿等が出ており、それらの中から幾つか選んで図示している。玉類は 2 点、土製品は 1 点出土しているが3点とも図示している。焼成粘土塊について今回は図示していない。



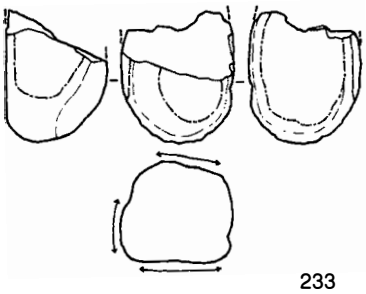
第96図　42－08号住居址遺構実測図



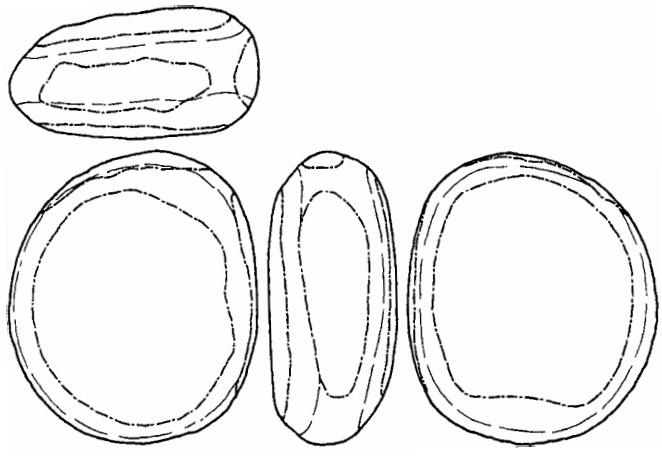
第97図　42－08号住居址出土遺物実測図１



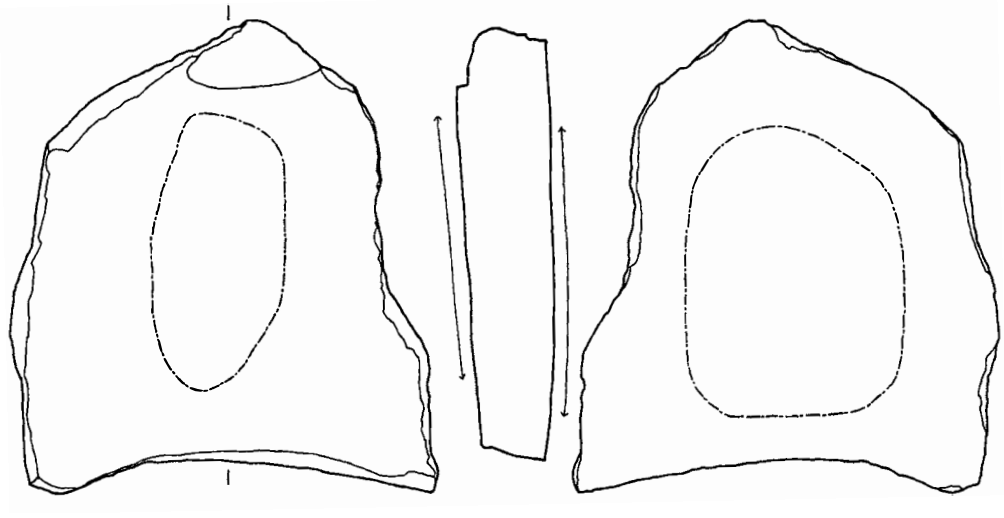
第98図　42－08号住居址出土遺物実測図２



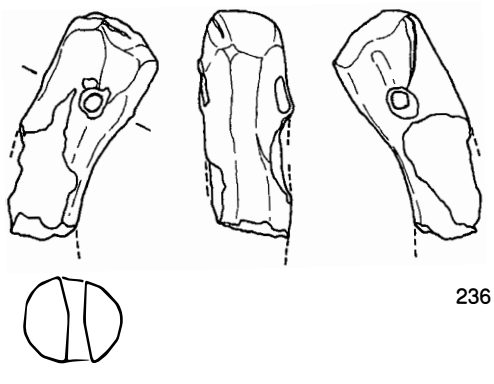
233



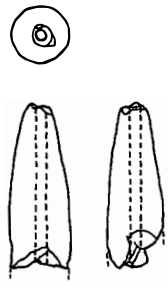
234



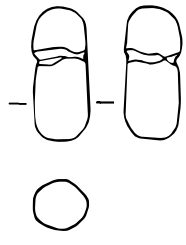
235



236



237



238

第99図　42－08号住居址出土遺物実測図3

42－12号住居址

【遺構・埋土】（第100図・図版52）

42区西側に位置する。42－14号住居址によって南側を削平されているが平面プランは円形を呈する。長径は4.6ｍ以上、短径は5.5mを測り、遺構検出面から床面までの深さは15cmである。柱穴は計 3 個確認されたが削平された箇所にもあった可能性はある。東側の壁際には130×70cmの炉跡とおぼしき焼土の落ち込みが検出された。本住居址は42－13号、42－14号住居址と切り合い関係にあり、新旧関係は古い順に42－13号住居址、42－12号住居址、46－14号住居址と考えられる。

住居址の埋土は、焼土を僅かに含む褐色土の 1 層のみである。

【遺物】（第101・102図）

本住居址からは、縄文土器と石器の他に土製品と焼成粘土塊が出土している。出土量はそれほど多くはなく、破片資料ばかりである。縄文土器は、これらの中から深鉢 2 点、浅鉢 2 点を図示している。石器は打製石斧、磨製石斧、石鏃、石匙、石錘、敲石・磨石、砥石等が出ている。それらの中から幾つか選んで図示している。土製品と焼成粘土塊について今回は図示していない。

42－13号住居址

【遺構・埋土】（第103図・図版52）

42区西端に位置する。他の住居址やトレンチ坑によって東西を削平され、さらに南側は調査区外のため未検出という状態で、平面プランの確認は困難であるが、残存部から推測すると円形又は楕円形を呈していたと考えられる。その規模もはっきりしないが、遺構検出面から床面までの深さは15cmである。柱穴は計 3 個確認されたが、削平部分が大きく本来もっと多かったと考えられる。炉跡は検出されなかった。その他住居址に伴う遺構も見つからなかった。42－12号、42－14号住居址と切り合い関係にあるが、本住居址が最も古いと考えられる。

住居址の埋土は、基本的に42－12号のものと同質である。ただ本住居址の埋土には暗褐色土が混じっており、42－12号の埋土と区別できる。

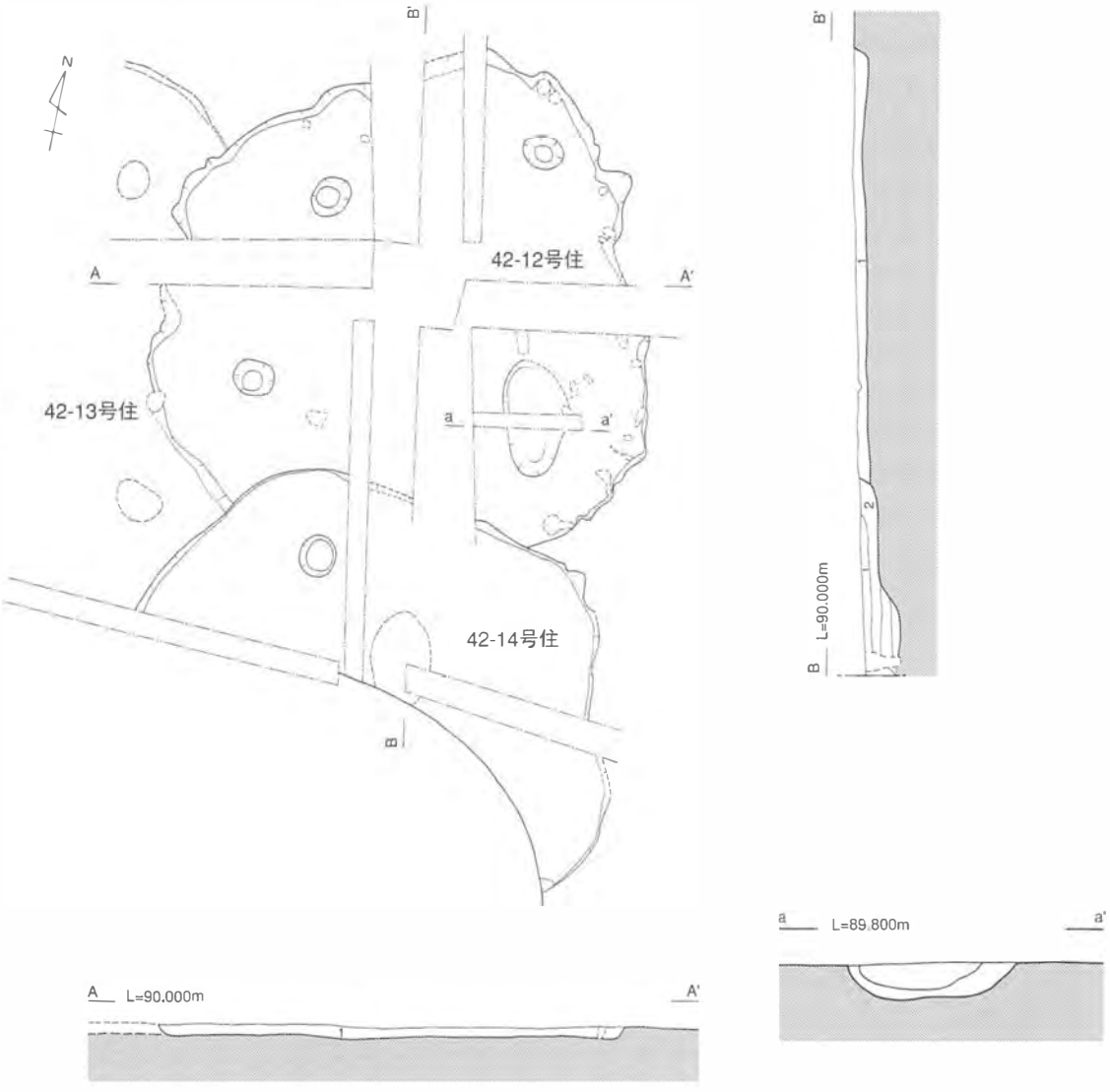
【遺物】（第104図）

本住居址からは、縄文土器と石器の他に焼成粘土塊が出土している。削平のせいか、遺物の出土量は少ない。縄文土器は小破片のみだが、浅鉢 1 点、深鉢 2 点を図示しておく。石器は打製石斧、石匙、敲石・磨石、凹石、砥石が出ており、その中から 5 点を図示している。焼成粘土塊について今回は図示していない。

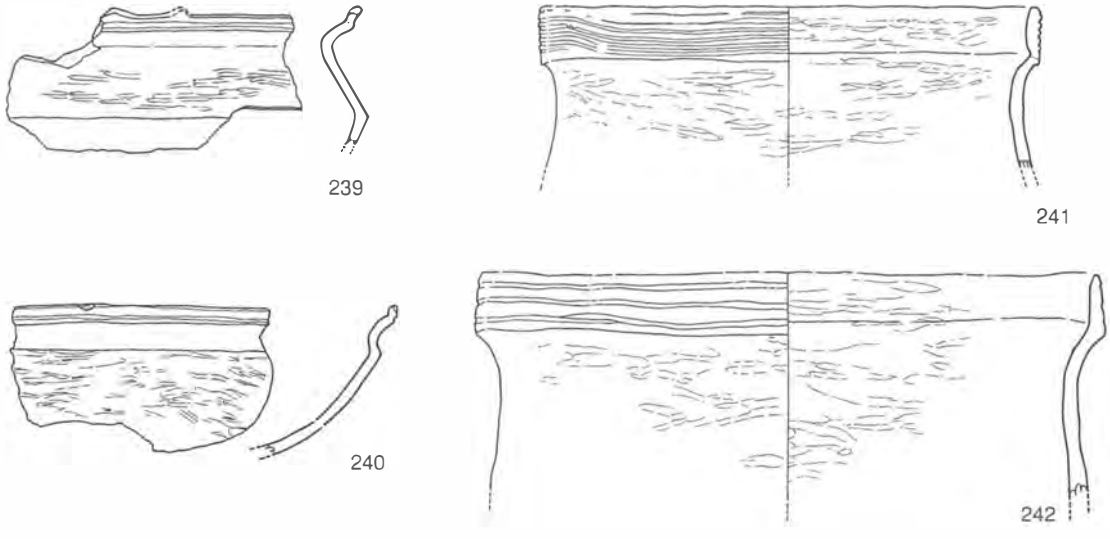
42－14号住居址

【遺構・埋土】（第100図・図版52）

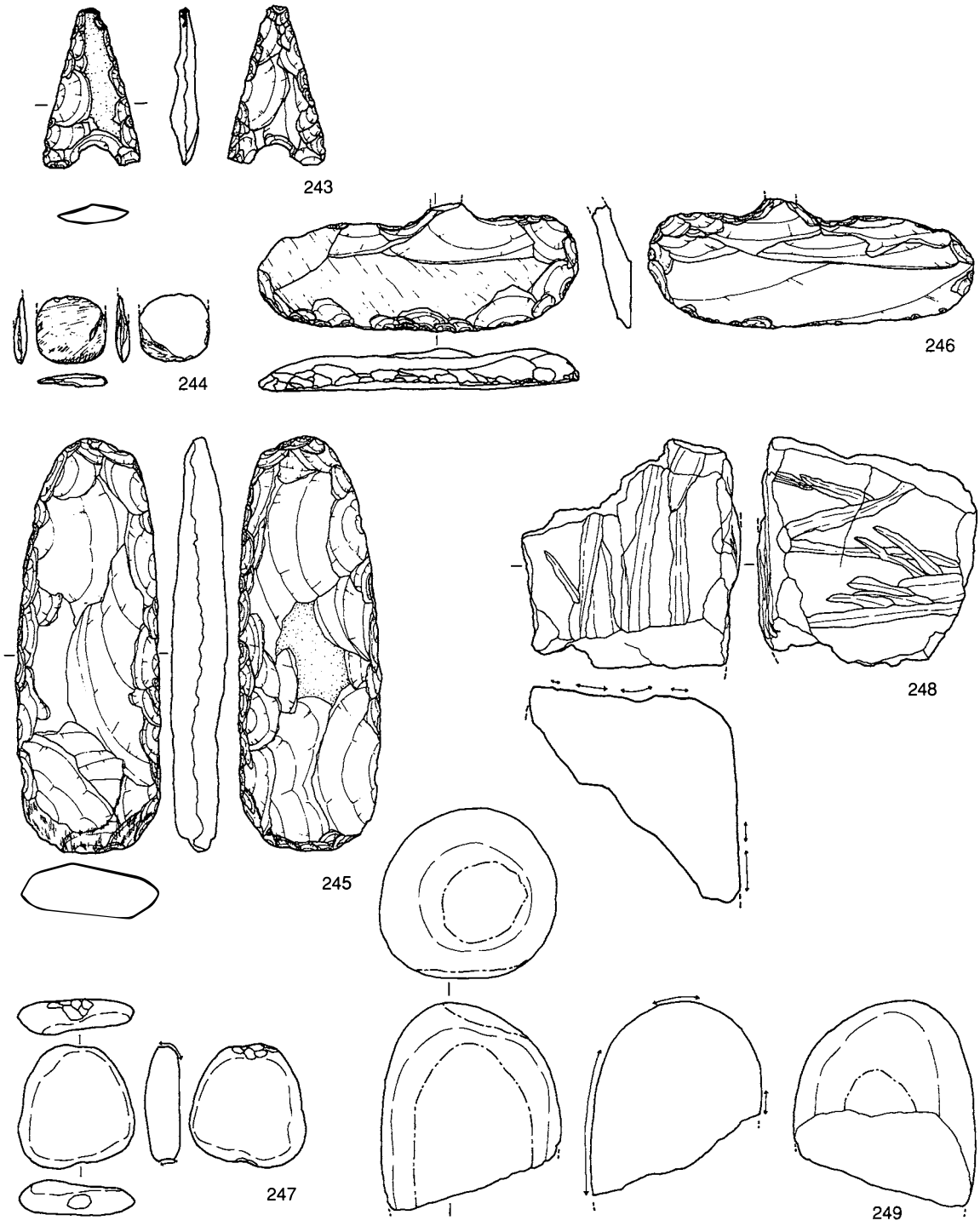
42区西端に位置する。南側の約半分が調査区外にあって未検出のため、平面プランははっきりしないが、円形を呈すると考えられる。長径は5.6m、短径は2.8m以上を測るが、未確認の部分が大きいので長・短径の区別は絶対的なものではない。遺構検出面から床面までの深さは20cmである。柱穴は 1 個確認されたが、本来もっと多かったと考えられる。中央には100×60cmの炉跡とおぼしき焼土の落ち込みが 1 基検出された。南端が調査区外にかかっているため、長径は若干伸びる。この他に本住居址に伴うような遺構は確認できなか



第100図　42－12・14号住居址遺構実測図



第101図　42－12号住居址出土遺物実測図１



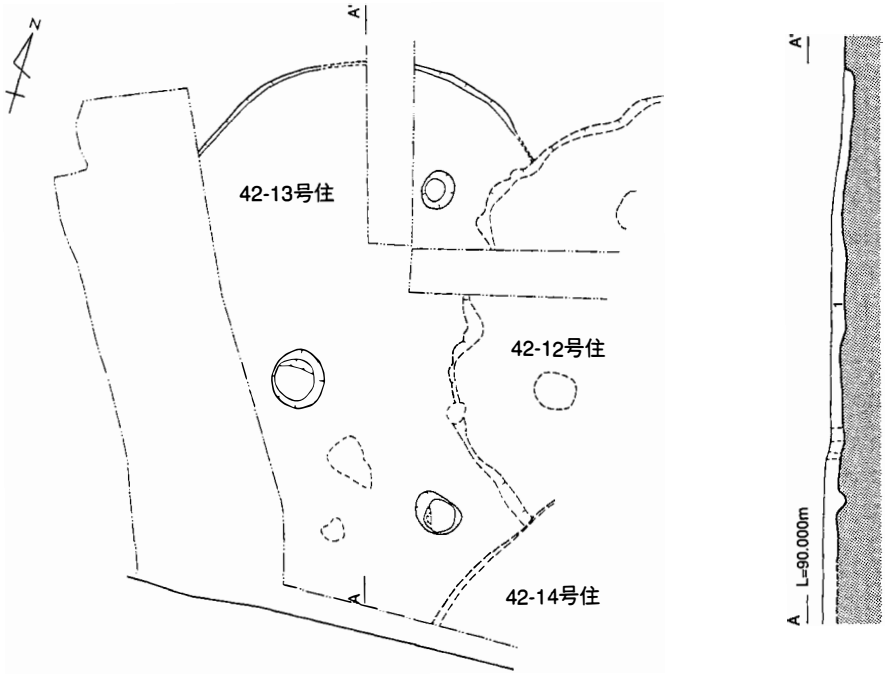
第102図　42－12号住居址出土遺物実測図２

った。

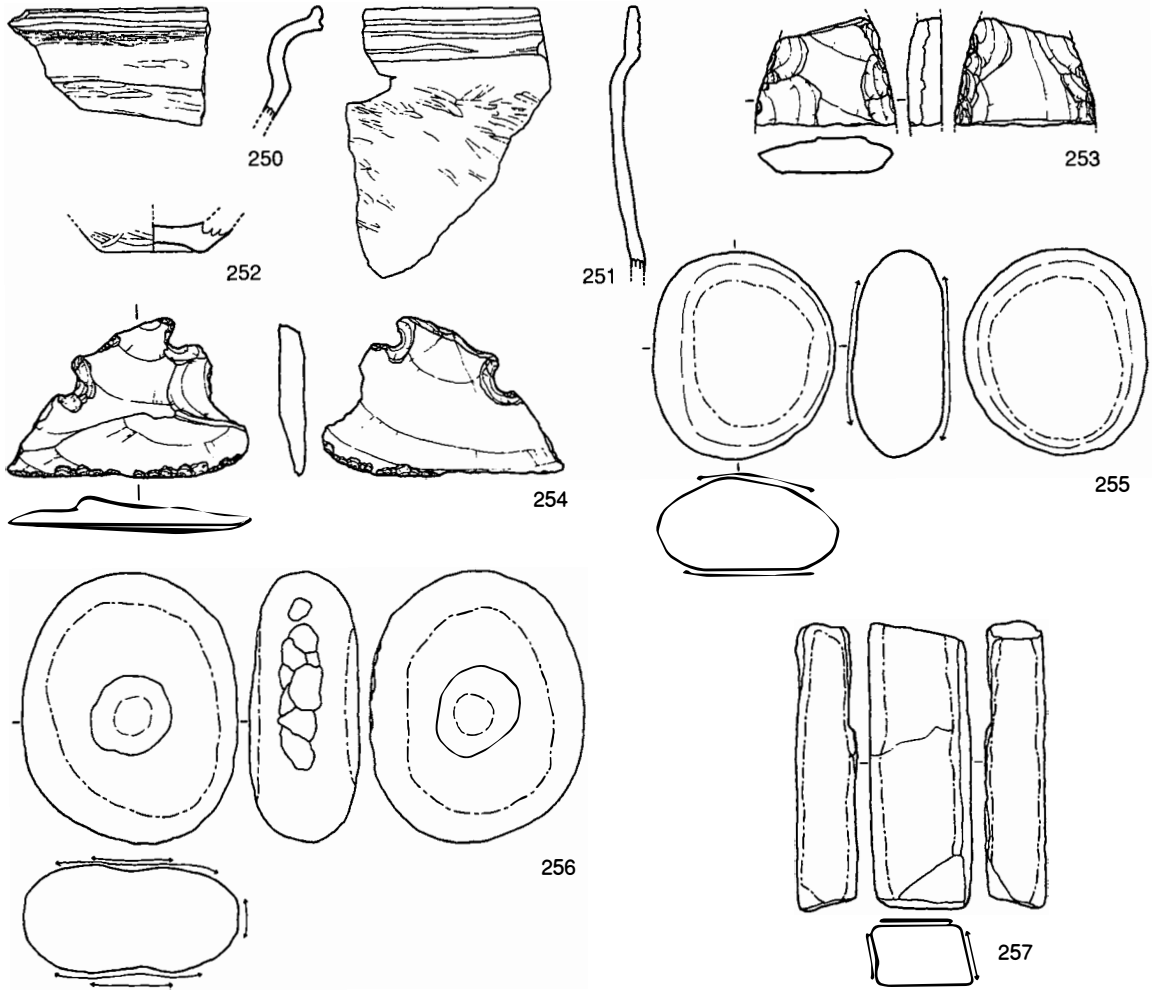
住居址の埋土は、２層に分けられる。Ⅱc層に相当する暗灰褐色土（埋土１層）とⅢ層に相当する褐色土（埋土２層）である。

【遺物】（第105図）

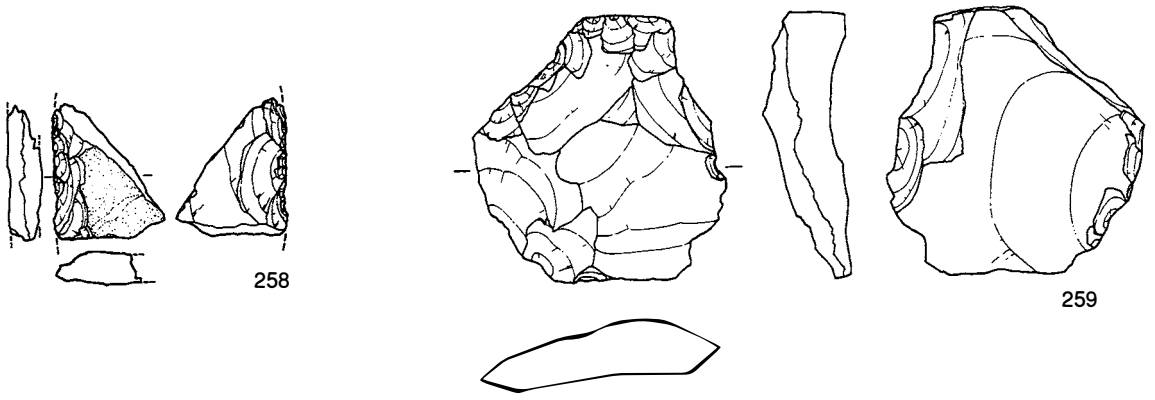
本住居址からは、石器が出土している。縄文土器はほとんど出土しておらず、皆無に等しい。石器も打製石斧、石鏃、剥片のみで、剥片以外を図示している。42－13号住居址以上に遺物が見られない。



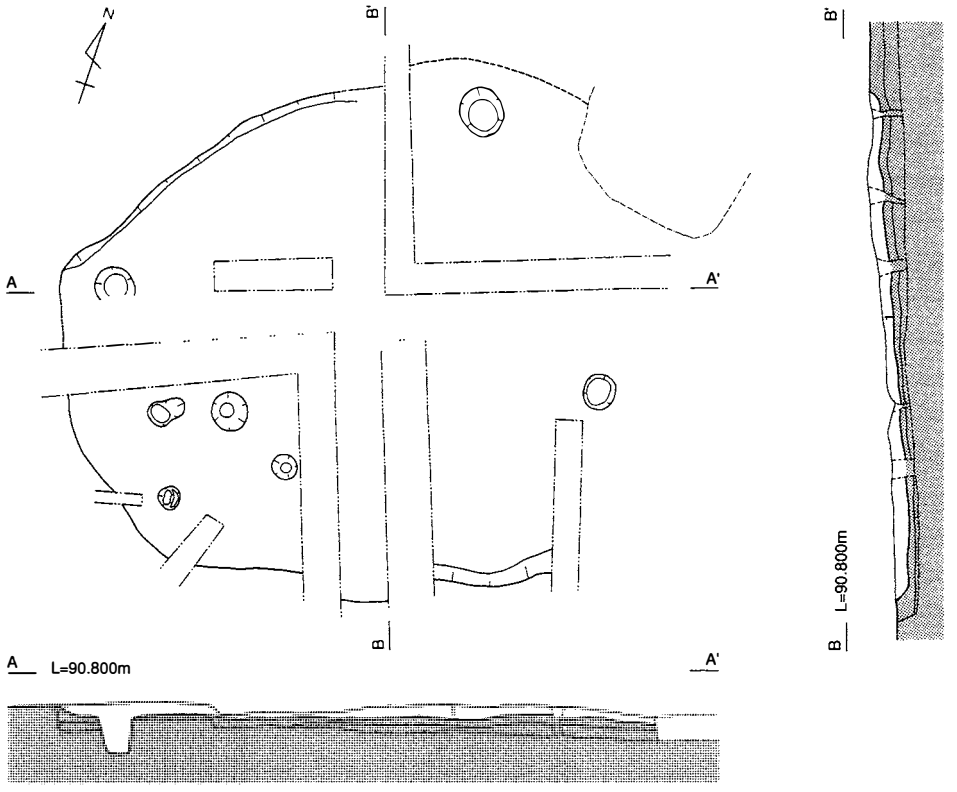
第103図　42－13号住居址遺構実測図



第104図　42－13号住居址出土遺物実測図



第105図　42－14号住居址出土遺物実測図



第106図　42－25号住居址遺構実測図

42－25号住居址

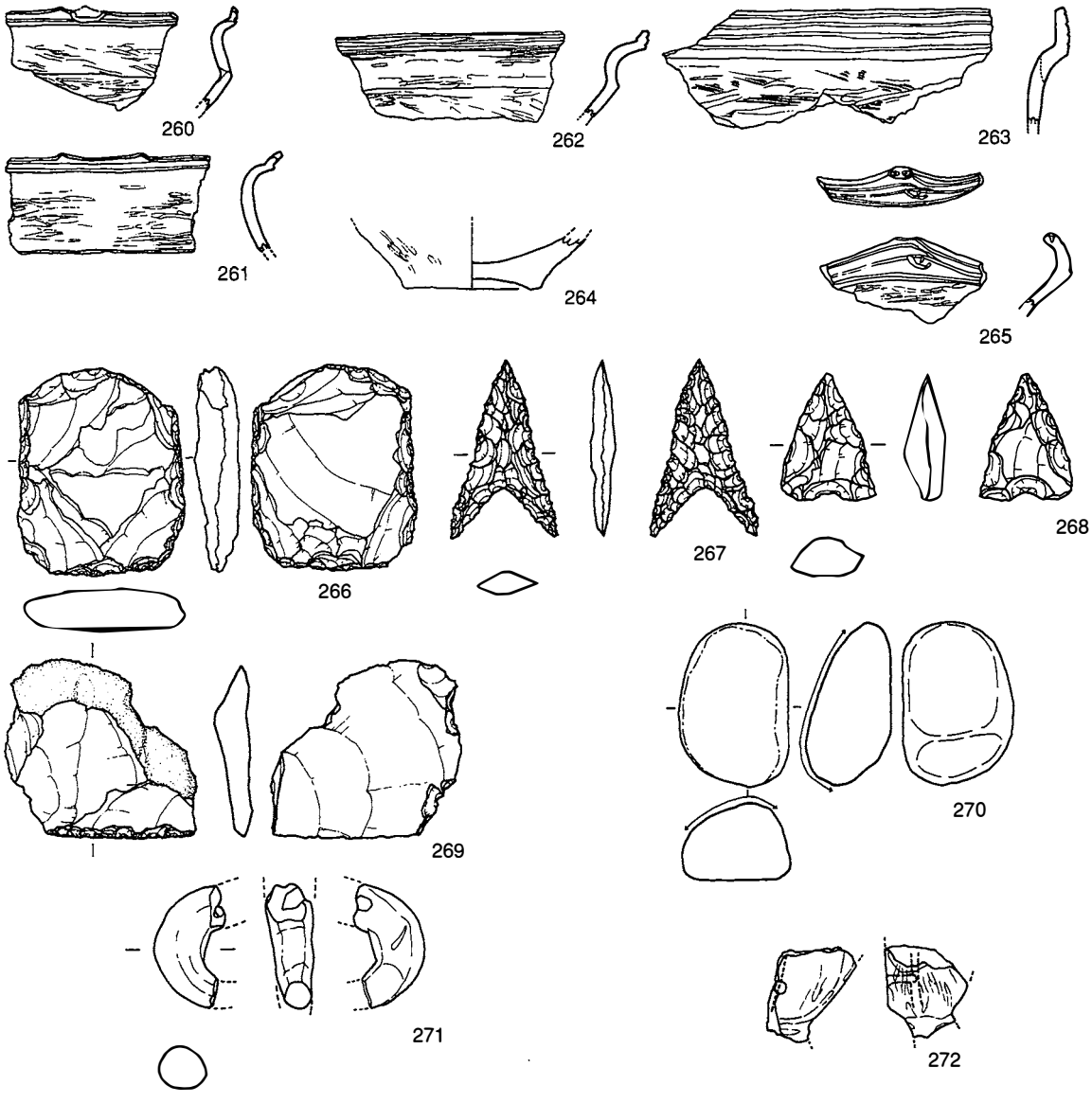
【遺構・埋土】（第106図・図版53）

43区東側に位置する。東端を撹乱によって削平されているうえ、上部もかなり削平されているが平面プランは楕円形を呈すると考えられる。長径は6.4m以上、短径は5.3mを測り、遺構検出面から床面までの深さは12cmである。柱穴は竪穴内にそれらしきピットを幾つか確認したが、本住居址に伴うものかどうかはっきりしない。他の住居址に伴った可能性もある。炉跡は検出されなかった。

住居址の埋土は、焼土を含んだ褐色土の１層のみであった。

【遺物】（第107図）

本住居址からは、縄文土器と石器の他に土偶、玉類、焼成粘土塊が出土している。縄文土器は破片のみで深鉢、浅鉢が見られる。その中から浅鉢3点、深鉢3点の計6点を図示している。この中には当該時期のものではない深鉢（**265**）があるが、参考資料として特別に図示している。石器は打製石斧、石鏃、スクレイパー、二次加工のある剥片、敲石・磨石が出ているが、その中から幾つか選んで図示している。土偶、玉類は破片で、それぞれ1点ずつ出土しているが、2点とも図示している。焼成粘土塊について今回は図示していない。



第107図　42－25号住居址出土遺物実測図

42－27号住居址

【遺構・埋土】（第108図・図版54）

42区西側に位置する。平面プランは円形を呈する。長径は6.9m、短径は6.8mを測り、遺構検出面から床面までの深さは15cmである。柱穴は計 4 個確認された。他にも竪穴内には複数のピットらしきものが点在するものの、柱穴と呼べるものは他にない。炉跡は検出されなかった。中央付近で埋設土器（42－26号埋設土器）が確認されているが、いずれも住居址の埋土に掘り込んで埋納されており、伴うものではない。また本住居址は42－31号住居址と切り合い関係にあるが、その新旧関係は42－31号の方が古いと考えられる。

住居址の埋土は、ややしまりのある黄褐色土の 1 層のみであった。

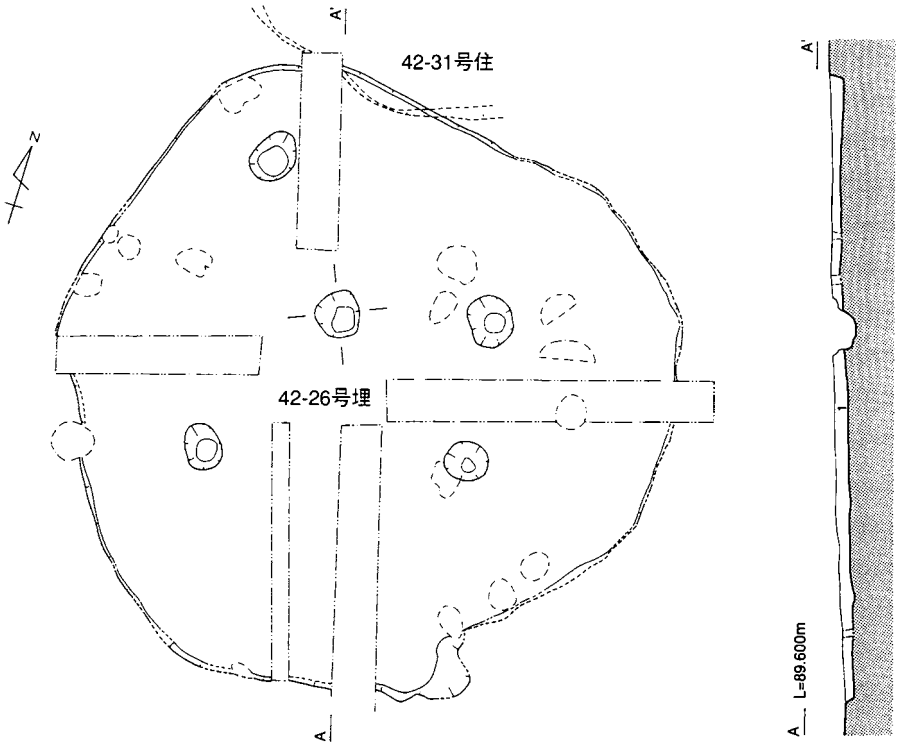
【遺物】（第109・110図）

本住居址からは、縄文土器と石器の他に玉類、焼成粘土塊が出土している。比較的まとまった量の出土が確認されている。縄文土器は深鉢、鉢、浅鉢が見られ、破片がほとんどであるが反転復元できるものもある。その中から浅鉢 2 点、鉢 2 点、深鉢 4 点の計 8 点を図示している。石器は打製石斧、磨製石斧、石鏃、石錘、二次加工のある剥片、敲石・磨石、砥石が出ているが、それらの中から幾つか選んで図示している。玉類は 1 点のみの出土であるが、図示している。焼成粘土塊は今回図示していない。

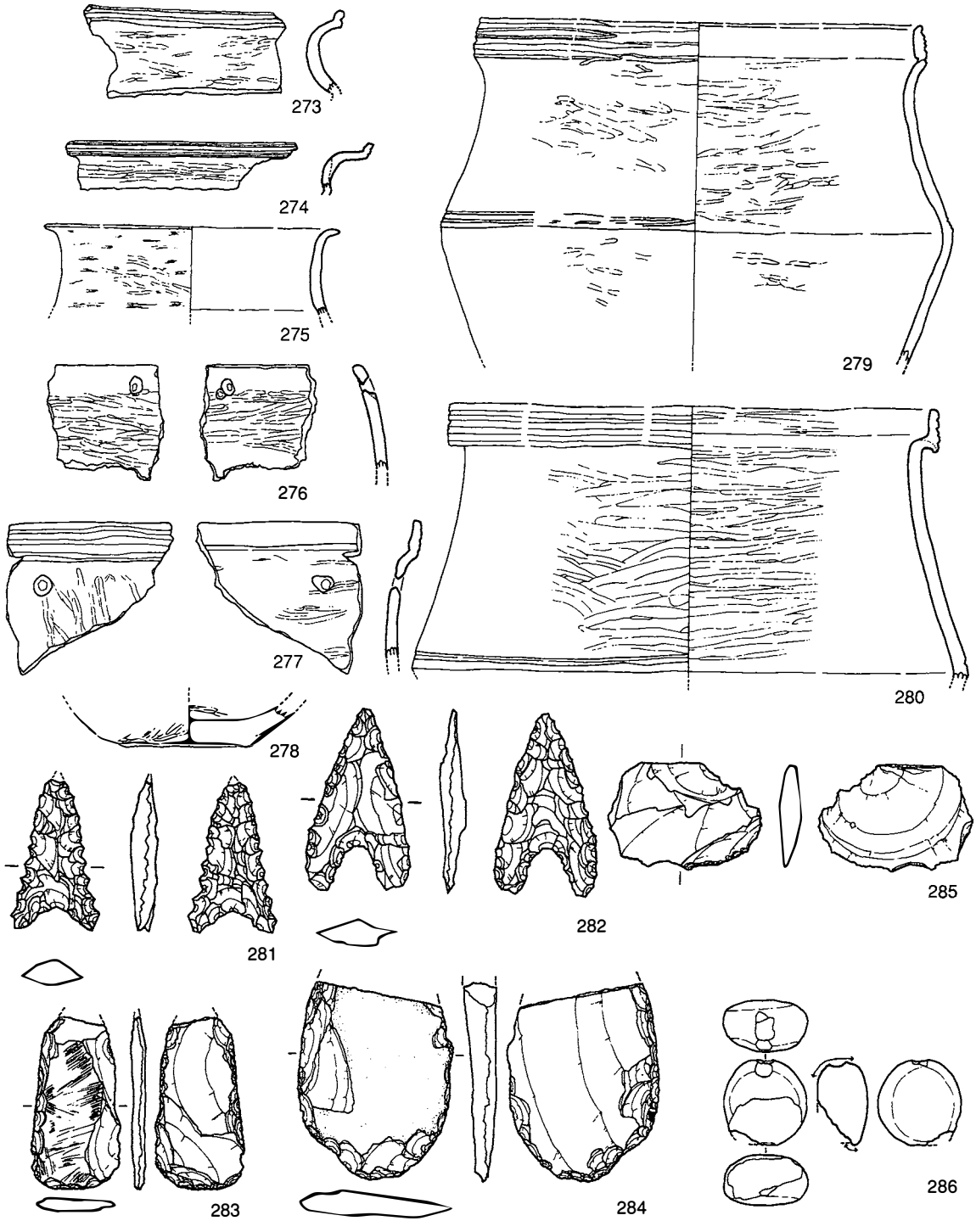
42－28号住居址

【遺構・埋土】（第111図・図版55）

42区中央に位置する。42－08号の南西側にある。上面は削平されている箇所もあるが、平面プランは円形を呈する。長径は6.0m、短径は5.4mを測り、遺構検出面から床面までの深さは20cmである。柱穴は 6 個確認されたが、南東側の壁際にあるピットも柱穴として考えるなら 7 個となる。ただ他の遺構に伴う可能性もあ



第108図　42－27号住居址遺構実測図



第109図　42－27号住居址出土遺物実測図１

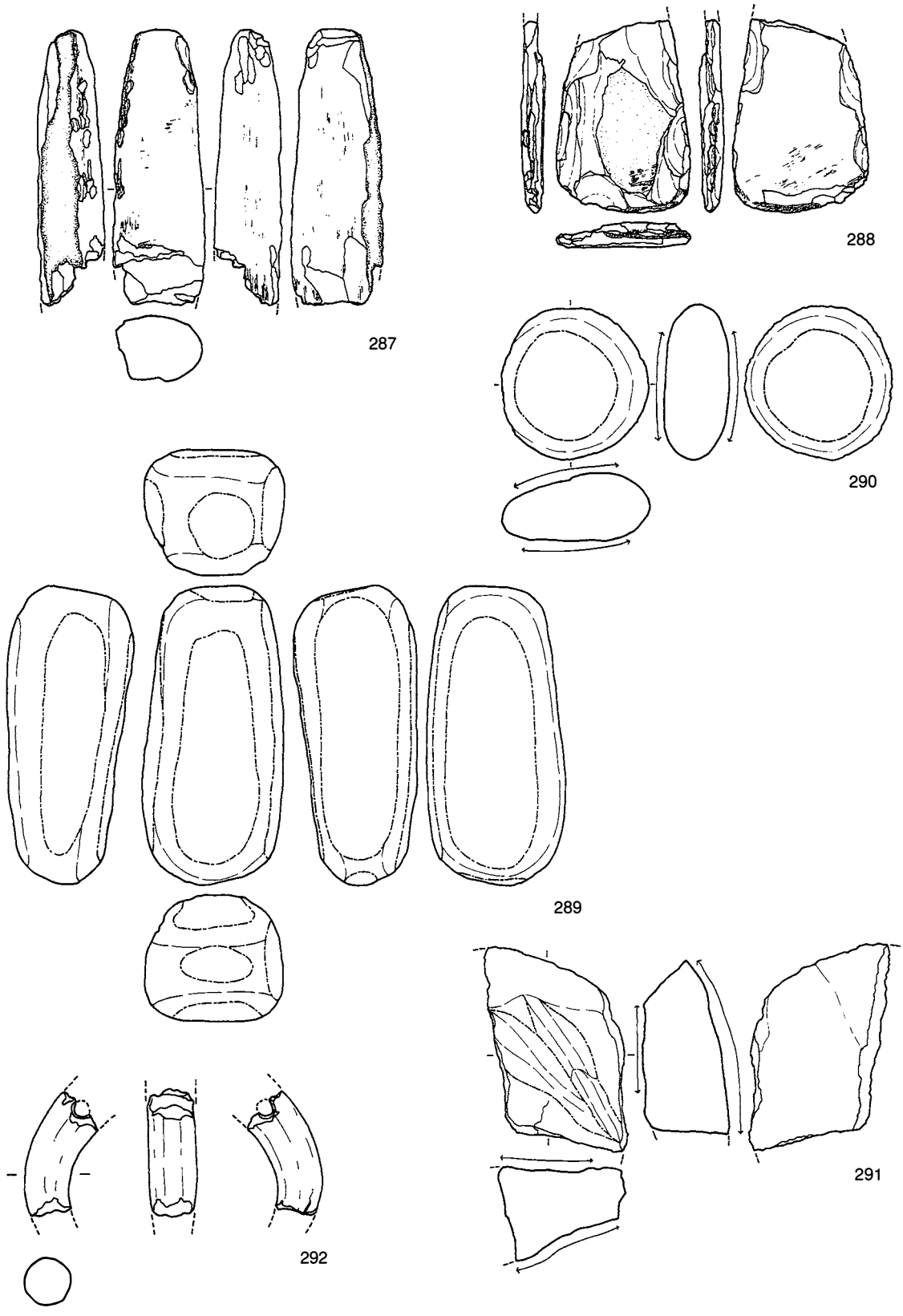
り、ここでは６個としておく。炉跡は検出されず、硬化面等も確認されなかった。

住居址の埋土は、どちらも褐色を基調としているが、緻密でしまりのない土（埋土１層）と埋土１層に比べ粒子の粗く、わずかに黄橙色土を含みしまりのある土（埋土２層）の２層に分けられる。

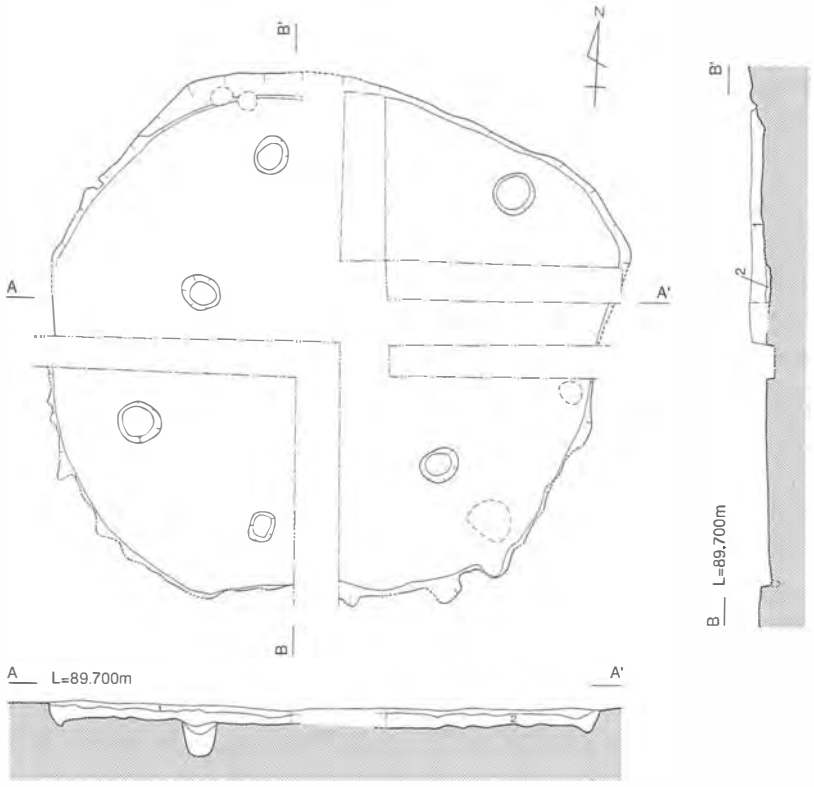
【遺物】（第112・113図）

本住居址からは、縄文土器と石器の他に焼成粘土塊が出土している。縄文土器は破片資料が大半であるが、反転復元できるものも幾つか見られる。深鉢、浅鉢があるが、器種がはっきりしないものもある。その中か

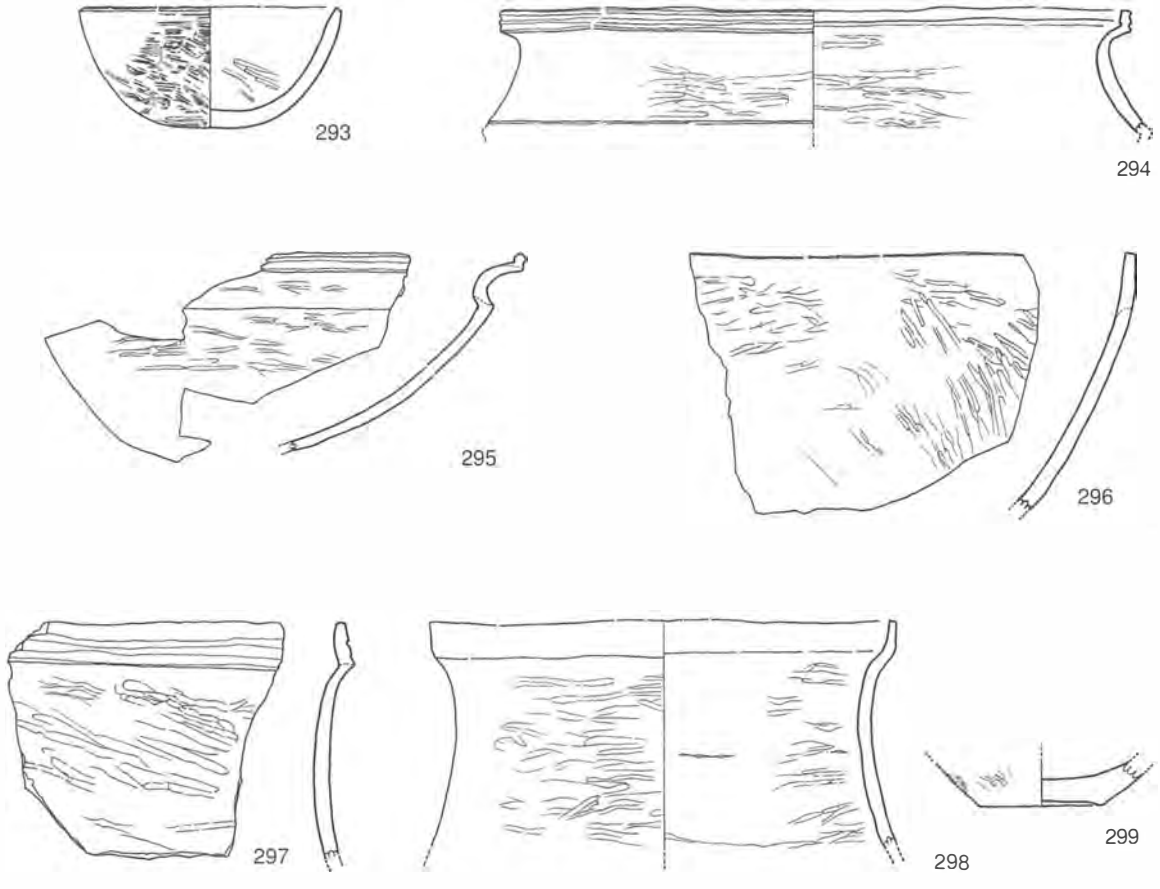
ら浅鉢 3 点、深鉢 5 点の計 8 点を図示している。石器は打製石斧、磨製石斧、石鏃、スクレイパー、二次加工のある剥片、敲石・磨石、石皿が出ているが、それらの中から幾つか選んで図示している。焼成粘土塊は今回図示していない。



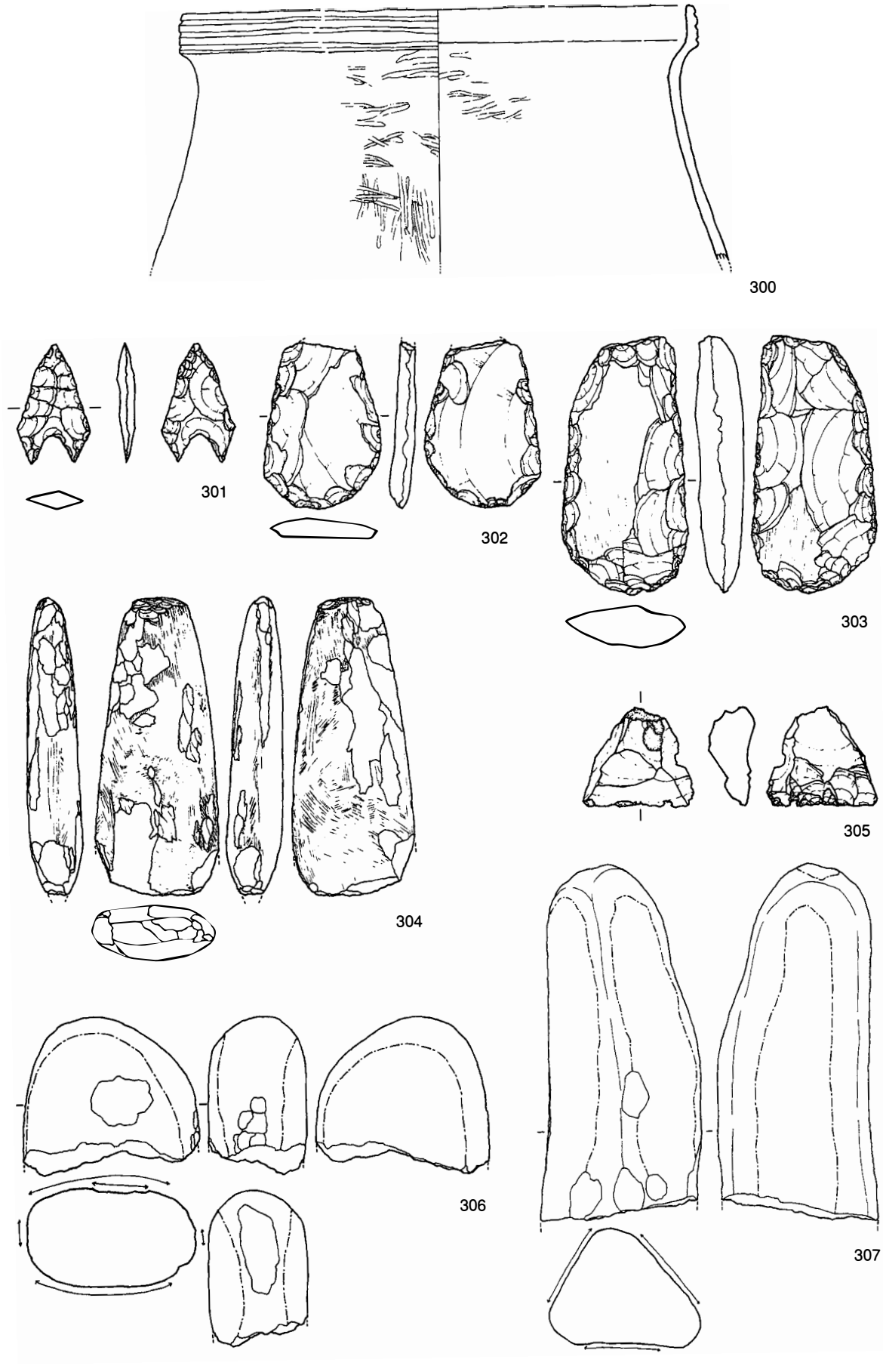
第110図　42－27号住居址出土遺物実測図 2



第111図　42－28号住居址遺構実測図



第112図　42－28号住居址出土遺物実測図１



第113図　42－28号住居址出土遺物実測図２

42－30号住居址

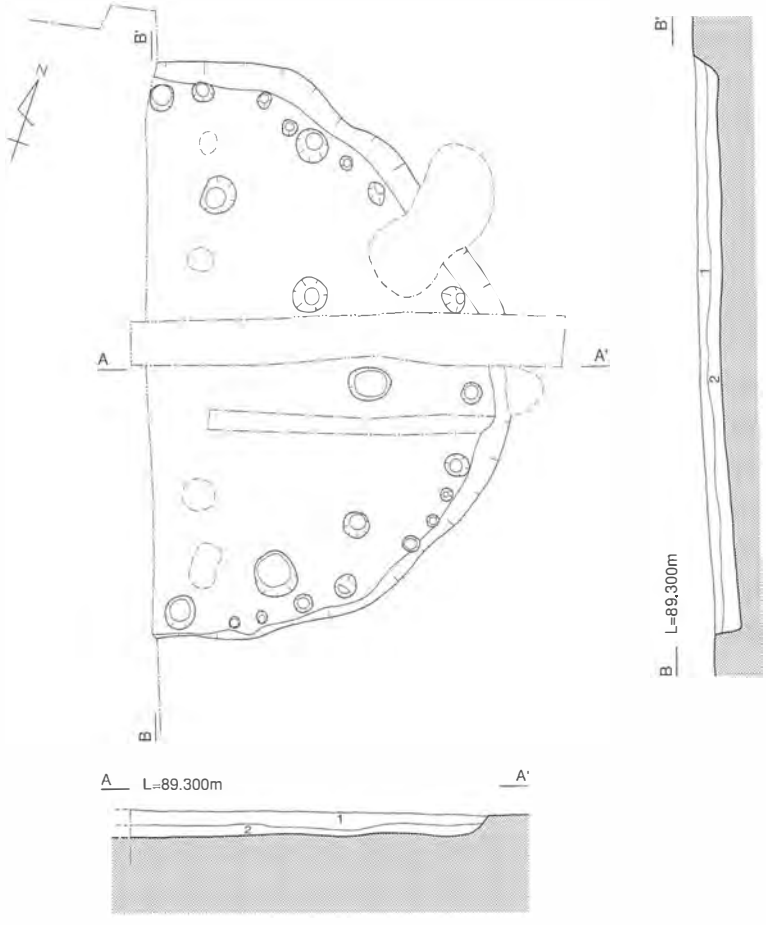
【遺構・埋土】（第114図・図版56）

42区西側に位置する。42区の住居址の中で最も南に位置する住居址である。西半分を削平されて、平面プランの確認は困難であるが、残存部から推測すると円形又は楕円形を呈していたと考えられる。長、短径ははっきりしないが南北径は6.0m、東西径は3.8ｍ以上を測り、遺構検出面から床面までの深さは26cmである。柱穴は５個確認されたが、削平されていることから本来もっと多かったと考えられる。また壁際には計18個の支柱穴が確認された。炉跡は検出されなかったが、削平部分にあった可能性もある。

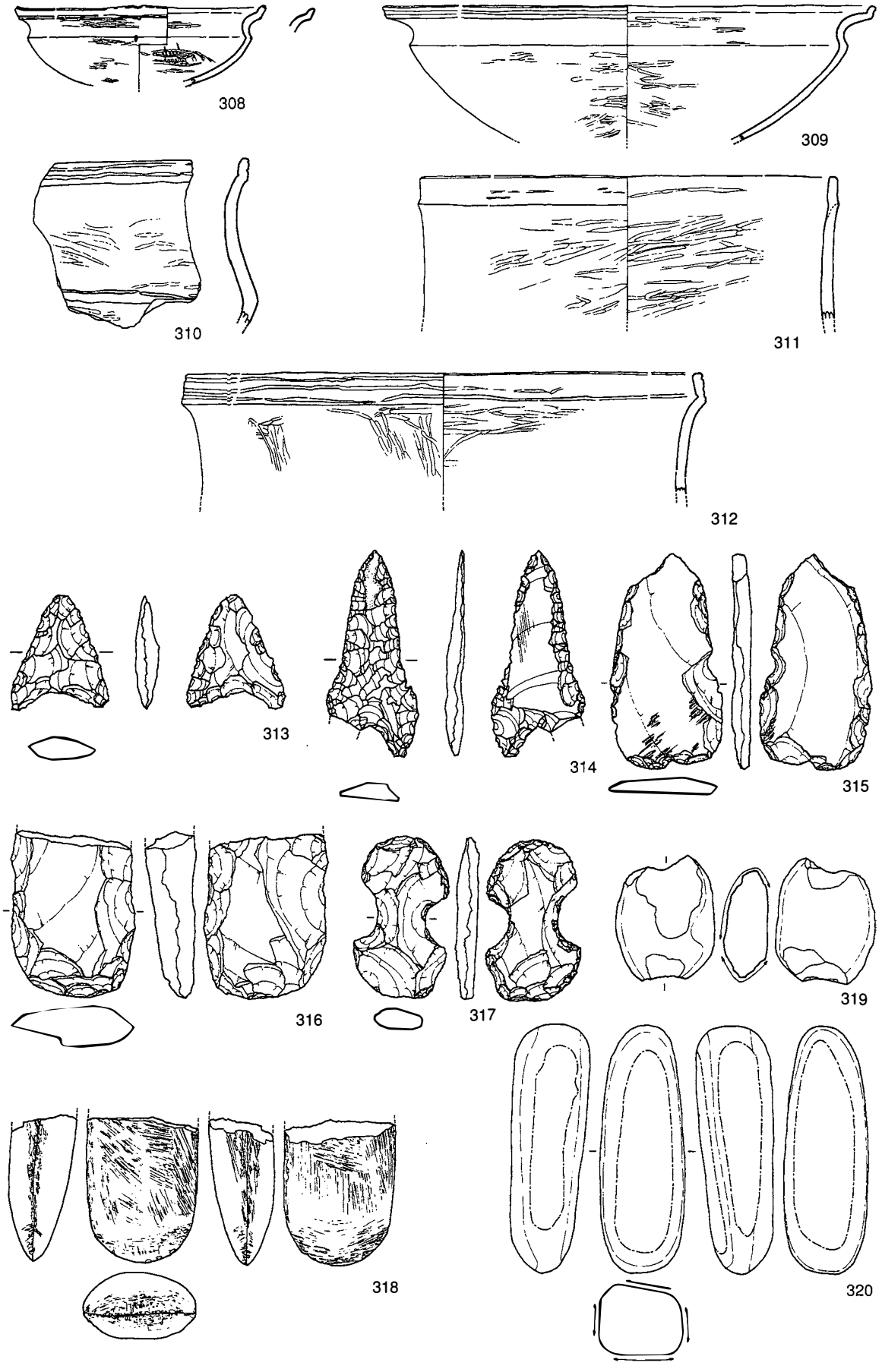
住居址の埋土は、２層に分けられる。焼土混じりのやや粘質を持つ暗灰褐色土（埋土１層）と焼土、炭化物混じりの砂質土気味の褐色土（埋土２層）である。

【遺物】（第115・116図）

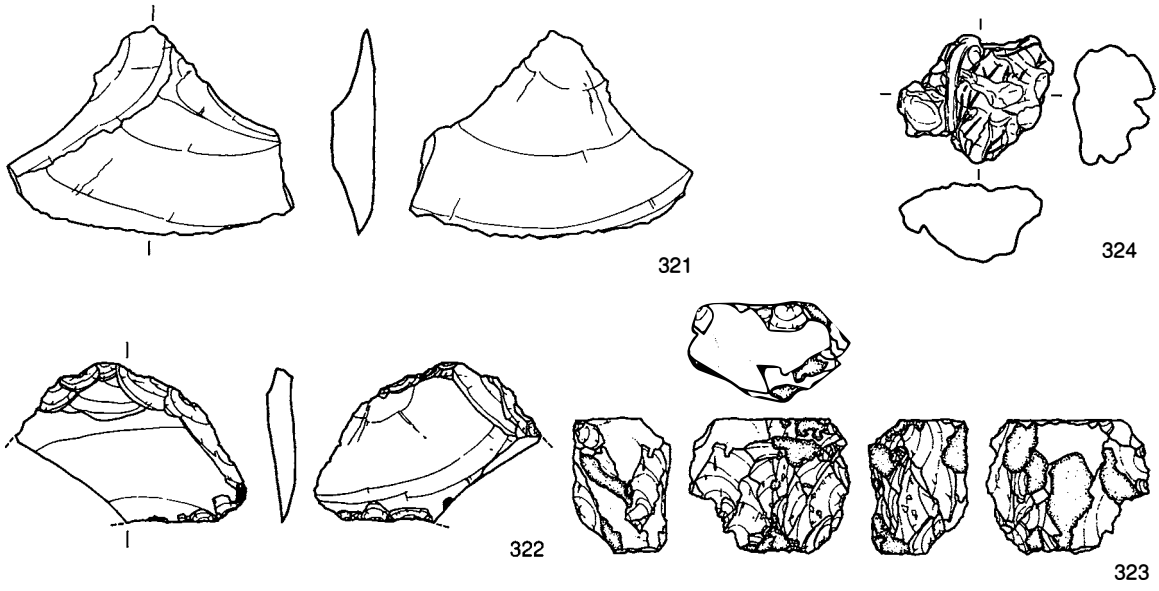
本住居址からは、縄文土器と石器の他に焼成粘土塊が出土している。縄文土器は深鉢、鉢、浅鉢が見られ、幾つか反転復元できる資料もあるが、多くは破片資料である。その中
点を図示している。石器は打製石斧、磨製石斧、石鏃、石錘、二次加工のある剥片、敲石・磨石、石核等が出ているが、それらの中から幾つか選んで図示している。焼成粘土塊は特徴のある１点を図示している。



第114図　42－30号住居址遺構実測図



第115図　42－30号住居址出土遺物実測図１



第116図　42－30号住居址出土遺物実測図2

42－31号住居址

【遺構・埋土】（第117図・図版57）

42区西側に位置する。南端を42－27号住居址によって削平されているが、平面プランはやや不整形な円形を呈する。長径は5.6ｍ、短径は5.3ｍを測り、遺構検出面から床面までの深さは14cmである。柱穴は計4個確認された。中央よりやや北寄りの場所に110×90cmの炉跡とおぼしき焼土の落ち込みが1基検出された。炉跡であるとすれば地床炉と考えられる。竪穴内には他にも幾つかピットを検出したが、本住居址に伴うものではない。

住居址の埋土は、焼土混じりの褐色土の1層のみである。Ⅲ層相当土である。

【遺物】（第118・119図）

本住居址からは、縄文土器と石器の他に焼成粘土塊が出土している。縄文土器は深鉢、浅鉢が出ており、破片資料が多い中で、反転復元できるものもある。その中から浅鉢3点、深鉢5点の計8点を図示している。石器は打製石斧、磨製石斧、石錘、二次加工のある剥片、敲石・磨石、砥石等が出ているが、それらの中から幾つか選んで図示している。焼成粘土塊は今回図示していない。

42－32号住居址

【遺構・埋土】（第120図・図版58）

43区中央に位置する。42－38号住居址に接するように造られている。北側を後世の撹乱によって削平されているが、平面プランは楕円気味の円形を呈する。長径は7.0ｍ、短径は5.9ｍを測り、遺構検出面から床面までの深さは15cmである。柱穴は計4個確認されたが、削平されている箇所もあり、本来もっと多かった可能性もある。中央よりやや北寄りの場所に120×110cmの炉跡が1基検出された。住居址内には計3基の埋設土器（42－03号・04号・16号埋設土器）が確認されているが、いずれも住居址の埋土に掘り込んで埋納されており、伴うものではない。

【遺物】（第122・123図・図版130）

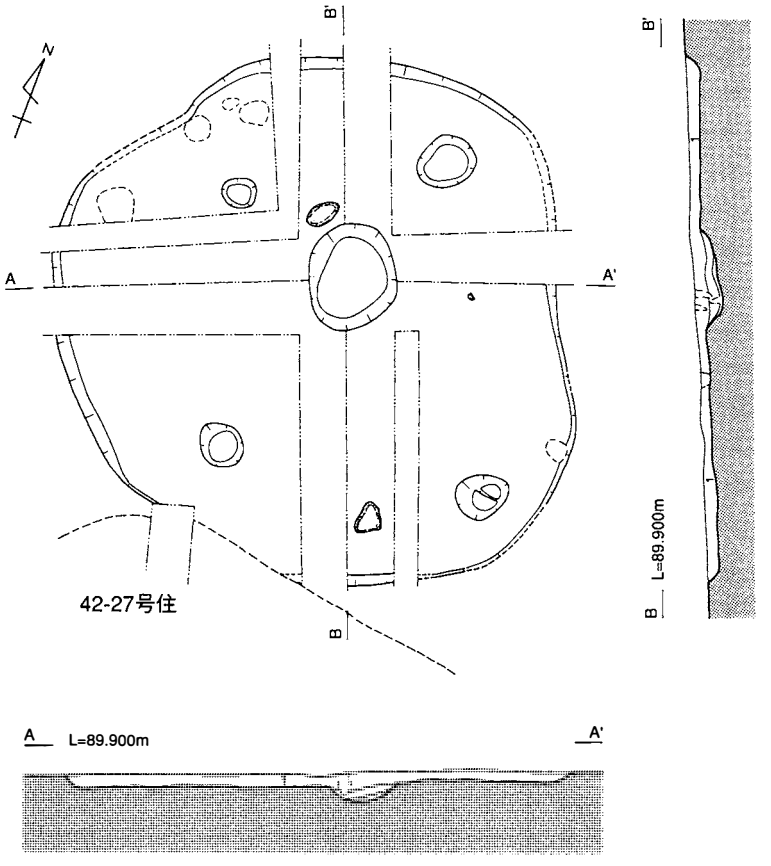
本住居址からは、縄文土器と石器の他に土製品が出土している。縄文土器は深鉢、鉢、浅鉢があるが、出土量は多くない。反転復元できるものもあるが、やはり破片資料が多い。その中から浅鉢、鉢、深鉢とも 1 点ずつの計 3 点を図示している。石器は打製石斧、磨製石斧、石鏃、二次加工もある剥片、敲石・磨石、石皿等が出ているが、それらの中から幾つか選んで図示している。土製品は 2 点出ているが、 2 点とも図示している。

42－35号住居址

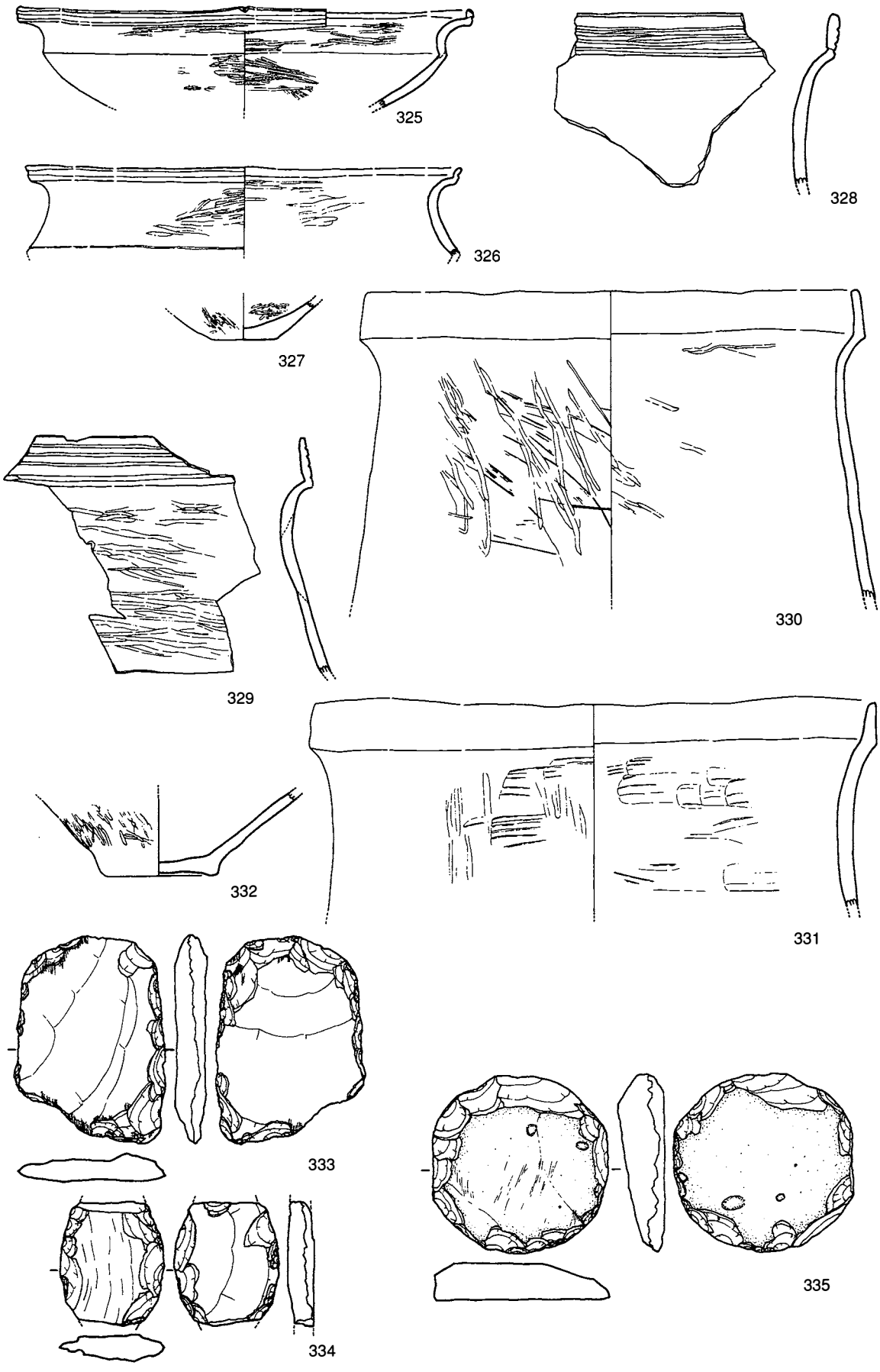
【遺構・埋土】（第121図・図版56）

42区西端に位置する。遺構の大半が調査区外に伸びており、平面プランの確定は困難である。ただ残存部から推測すると円形又は楕円形を呈するようにも見える。長径は4.6ｍ、短径は1.5m以上を測るが、残存状況が悪いため本来の規模を表した数値とは考えにくい。遺構検出面から床面までの深さは14cmである。柱穴は1個確認したが、半分しか検出できず本当に柱穴か疑問も残る。炉跡やその他の遺構は確認されなかった。

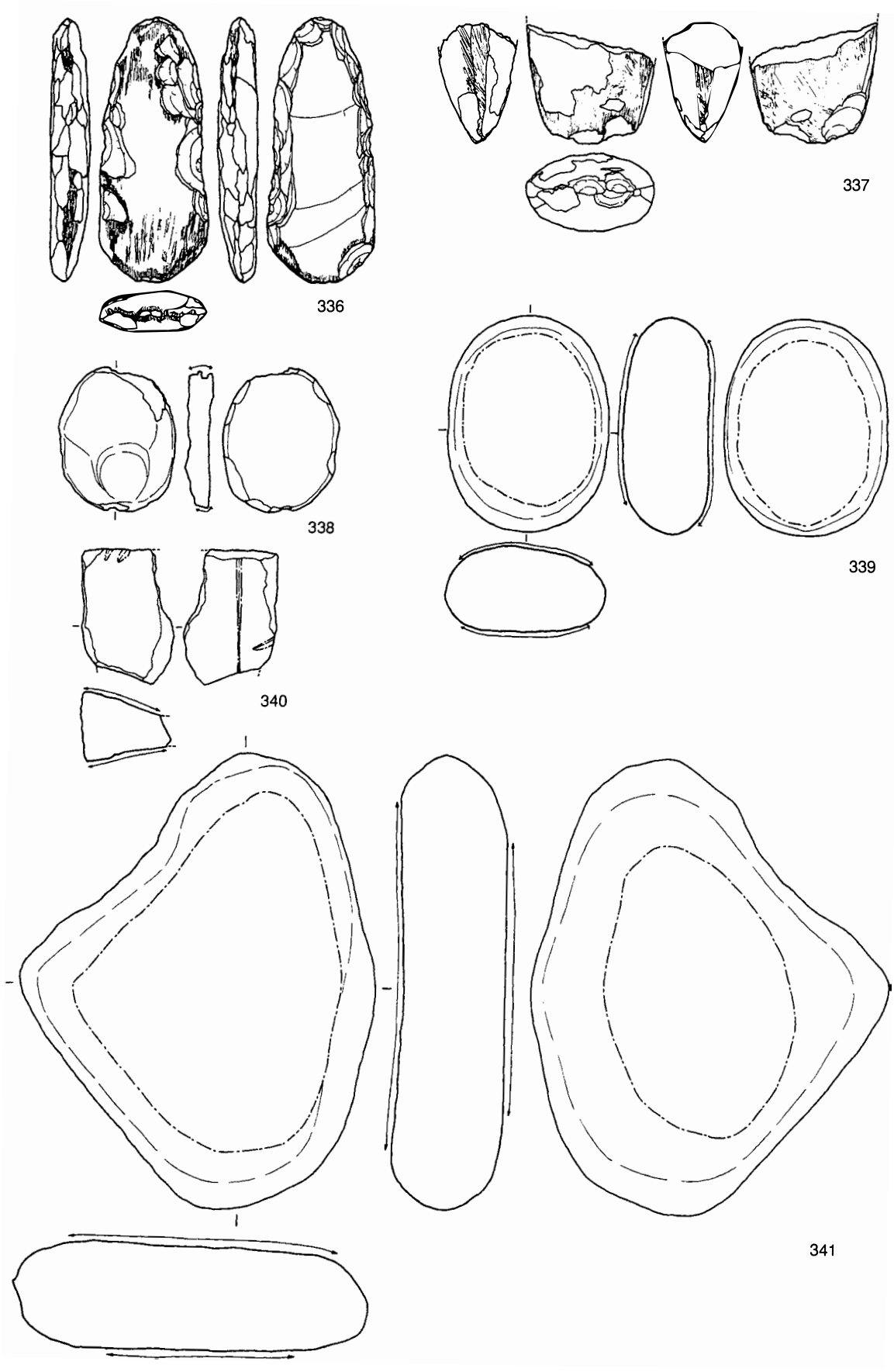
住居址の埋土は、 3 層に分けられる。 3 層とも暗褐色を基調とするが、粒子が粗くしまりのあるもの（埋土 1 層）と焼土、炭化物混じりのさらにしまりのあるもの（埋土 2 層）、そして炭化物がわずかに混じるしまりのあるもの（埋土 3 層）である。埋土 3 層は壁際に三角堆積しており、主な埋土は埋土 1 層と 2 層である。



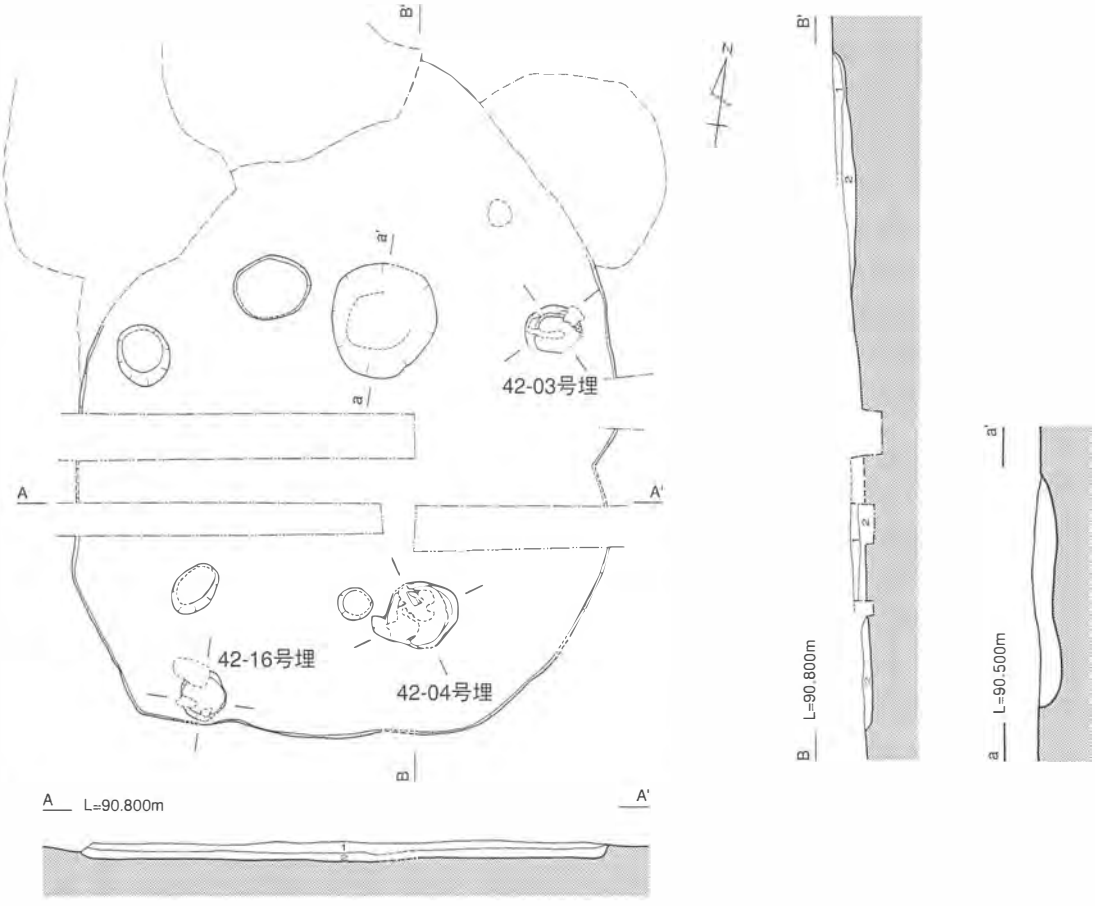
第117図　42－31号住居址遺構実測図



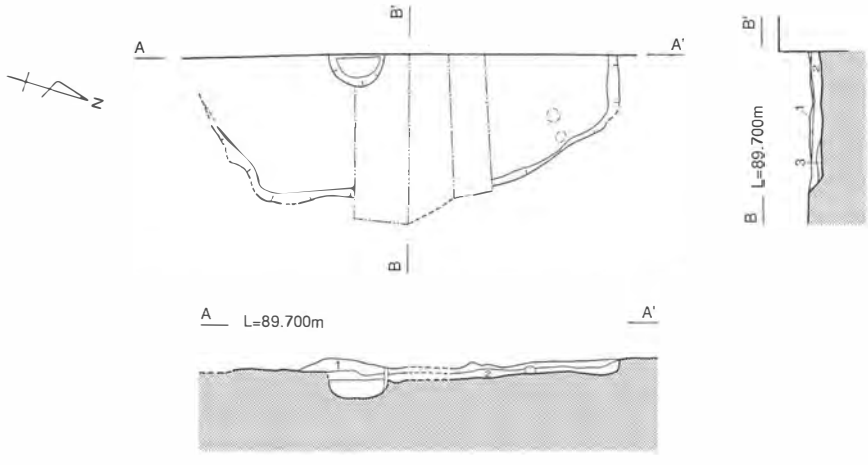
第118図　42－31号住居址出土遺物実測図1



第119図　42－31号住居址出土遺物実測図２



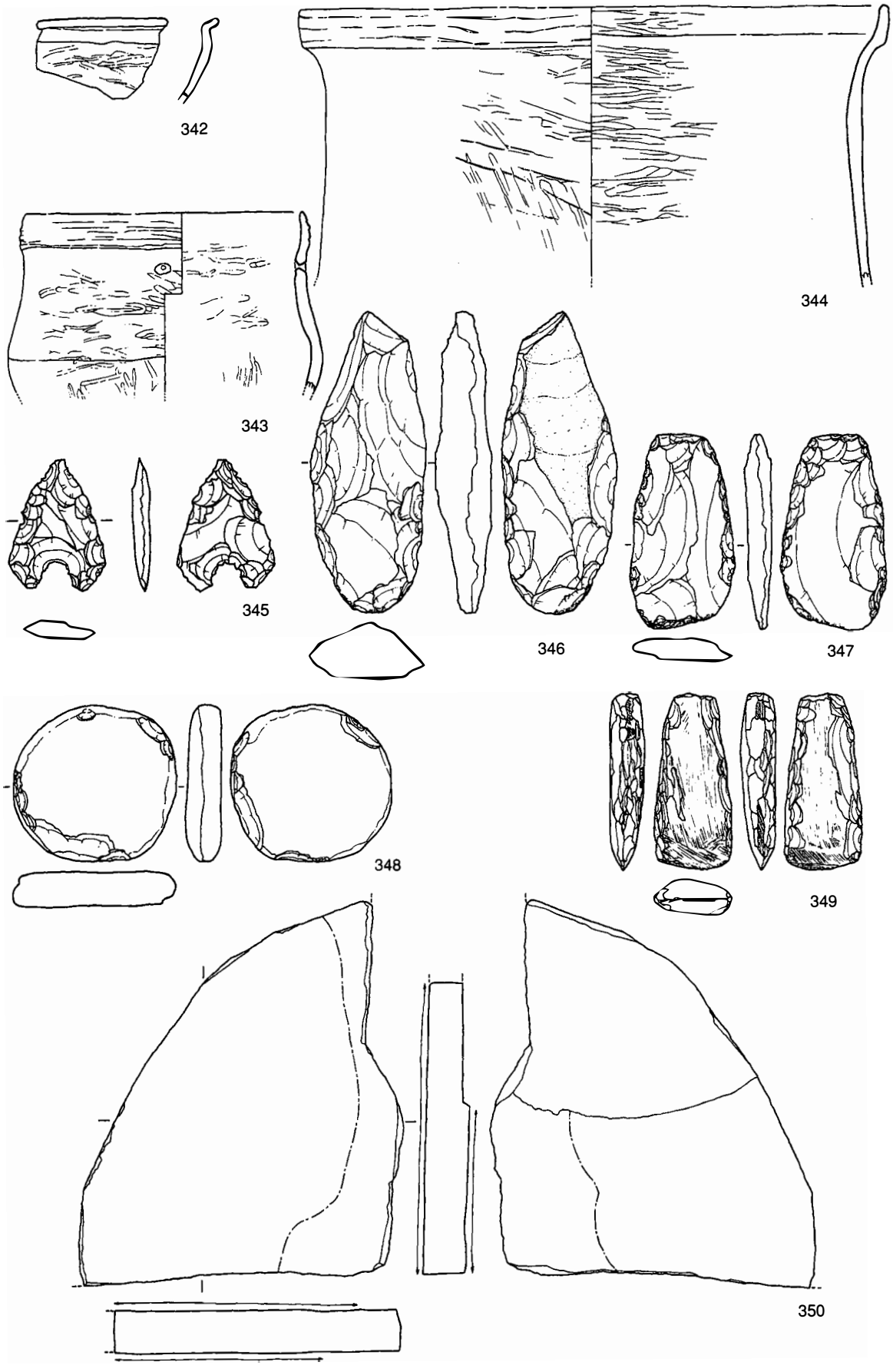
第120図　42－32号住居址遺構実測図



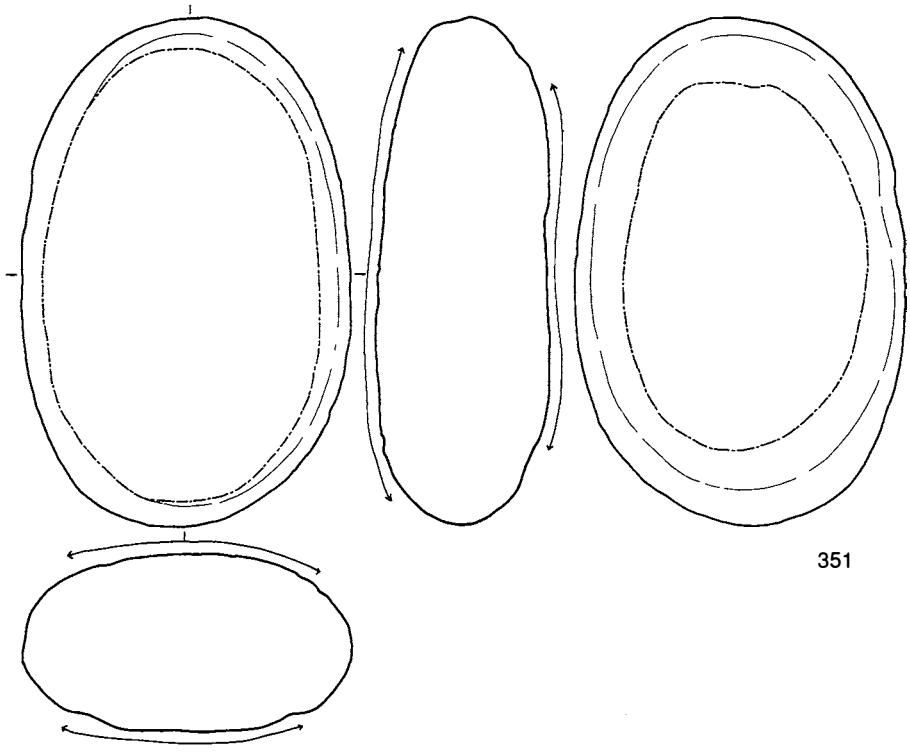
第121図　42－35号住居址遺構実測図

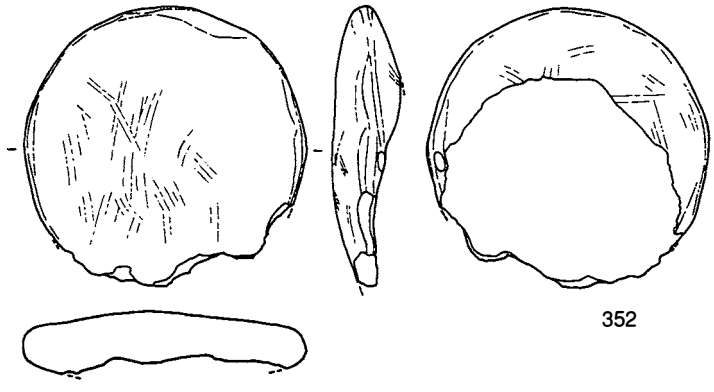
【遺物】（第124図）

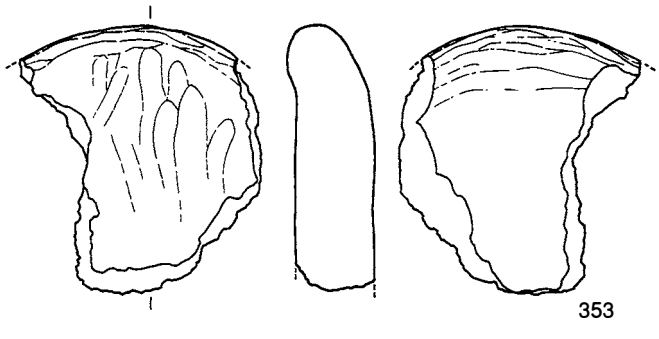
本住居址からは、縄文土器と石器が出土している。住居址そのものが半分も検出されていないためか、遺物の出土量はあまり多くない。縄文土器は深鉢、浅鉢が出ているが、図示できたのは深鉢３点のみである。石器は打製石斧、磨製石斧、石錘、敲石・磨石、石皿等が出ているが、それらの中から幾つか選んで図示している。



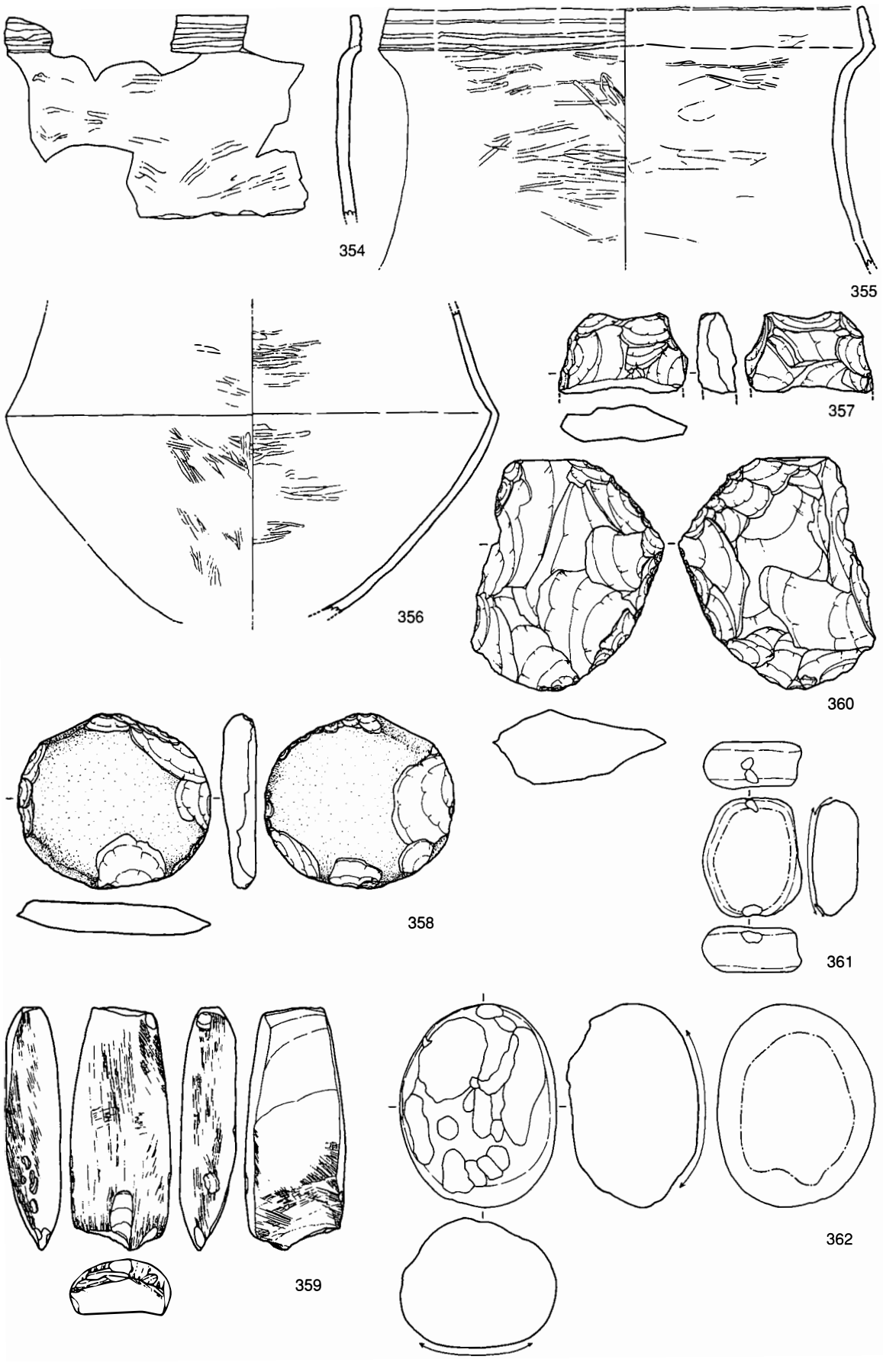
第122図　42－32号住居址出土遺物実測図１







第123図　42－32号住居址出土遺物実測図2



第124図　42－35号住居址出土遺物実測図

42－38号住居址

【遺構・埋土】（第125図・図版59）

43区南側に位置する。42－25号住居址と42－32号住居址の南側にある。上面を削平されているが、平面プランは円形を呈する。長径は4.8m以上、短径は4.5mを測り、遺構検出面から床面までの深さは12cmである。柱穴は計９個確認したが、うち８個

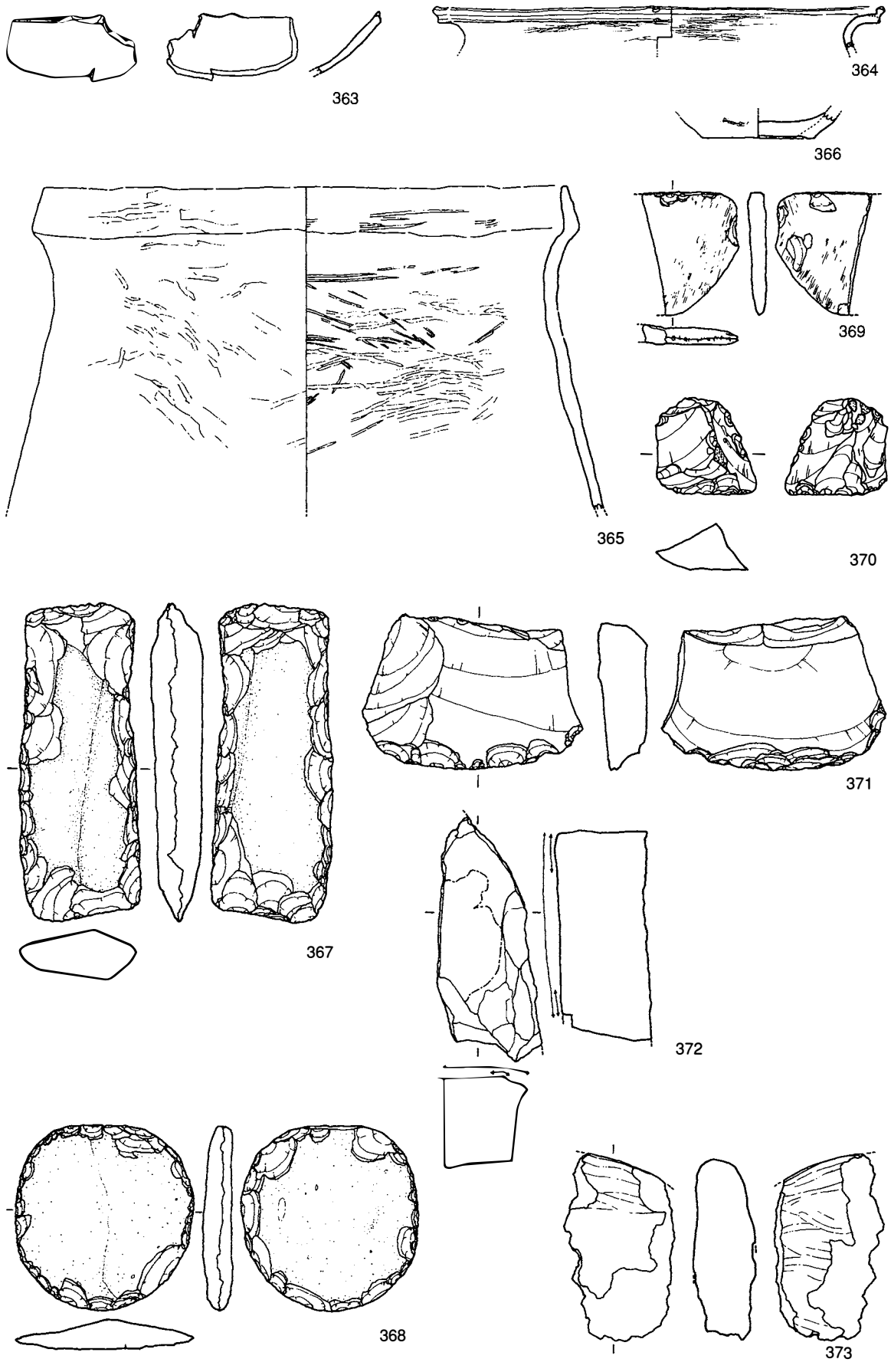
建て替えを行なったことも考えられる。炉跡やその他の遺構は確認されなかった。

住居址の埋土は、粘質をあまり持たずしまりのない明黄褐色土の１層のみである。焼土を含み最下層が硬化しており、それが床面と考えられる。

【遺物】（第126図）

本住居址からは、縄文土器と石器の他に土製品が出土している。遺物の出土量はそれほど多くない。縄文土器は深鉢、浅鉢が出ており、その中から浅鉢２点、深鉢２点の計４点を図示している。石器は打製石斧、二次加工のある剥片、敲石・磨石、石皿等が出ており、それらの中から幾つか選んで図示している。土製品は１点のみ出土しているが、図示している。

第125図　42－38号住居址遺構実測図



第126図　42－38号住居址出土遺物実測図

42－39号住居址

【遺構・埋土】（第127図）

43区南側に位置する。42－06号・25号・38号住居址に囲まれるように造られている。南北を42－06号、42－25号住居址によって削平されているが、平面プランは円形を呈すると考えられる。長径は4.0ｍ以上、短径は4.8ｍを測り、遺構検出面から床面までの深さは12cmである。柱穴は計 6 個確認されたが、削平されているため、本来はもっと多かったと考えらえる。いずれも対になっているようにも見え、別の遺構に伴う可能性もある。または建て替えを行なったことも考えられる。炉跡やその他の遺構は確認されなかった。前述したように本住居址は42－06号、42－25号住居址と切り合い関係にあるが、その新旧関係は本住居址の方が他の２住居址より古いと考えらえる。

住居址の埋土は、 2 層に分けられる。しまりのない暗褐色土（埋土 1 層）と粘性、しまりの強い暗黄褐色土（埋土２層）である。

【遺物】（第128図）

本住居址からは、縄文土器、石器の他に玉類、焼成粘土塊が出土している。縄文土器は破片のみの出土で、深鉢、鉢、浅鉢の他小型の土器（ミニチュア土器か）がある。図示できたのは鉢 1 点、小型の土器 1 点、深鉢 3 点の計 5 点である。石器は打製石斧、磨製石斧、石錘、二次加工のある剥片、石皿等が出ているが、それらの中から幾つか選んで図示している。玉類は 1 点のみ出土しており、その 1 点を図示している。焼成粘土塊は今回図示していない。

42－42号住居址

【遺構・埋土】（第129図・図版60）

43区南側に位置する。42－05号住居址の北西側に接するように造られている。西側から南側にかけて少なからず削平されているが、平面プランは円形を呈すると考えられる。長径は6.0ｍ、短径は5.8ｍを測り、遺構検出面から床面までの深さは15cmである。柱穴は計 8 個確認されたが、うち 2 個は対になっているようにも見える。中央よりやや西寄りの場所に100×90cmの炉跡が 1 基検出された。住居址内には埋設土器（42－22号埋設土器）があるが、住居址の埋土に掘り込んで埋納されており、伴うものではない。

住居址の埋土は、黄褐色シルトの１層のみである。

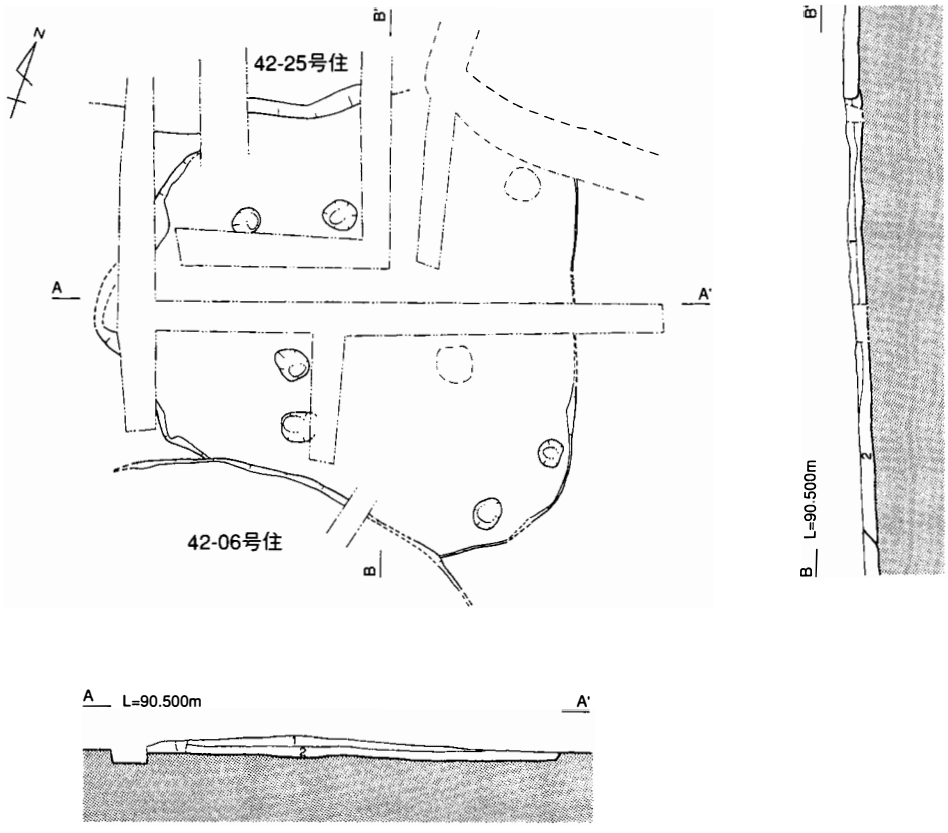
【遺物】（第130・131図）

本住居址からは、縄文土器と石器の他に焼成粘土塊が出土している。遺物の出土量は多くない。縄文土器は破片のみで、深鉢、浅鉢がある。その中から浅鉢 3 点、深鉢 2 点の計 5 点を図示している。石器は打製石斧、石鏃、石錘、二次加工のある剥片、使用痕のある剥片、敲石・磨石、砥石等が出ており、それらの中から幾つか選んで図示している。焼成粘土塊は今回図示していない。

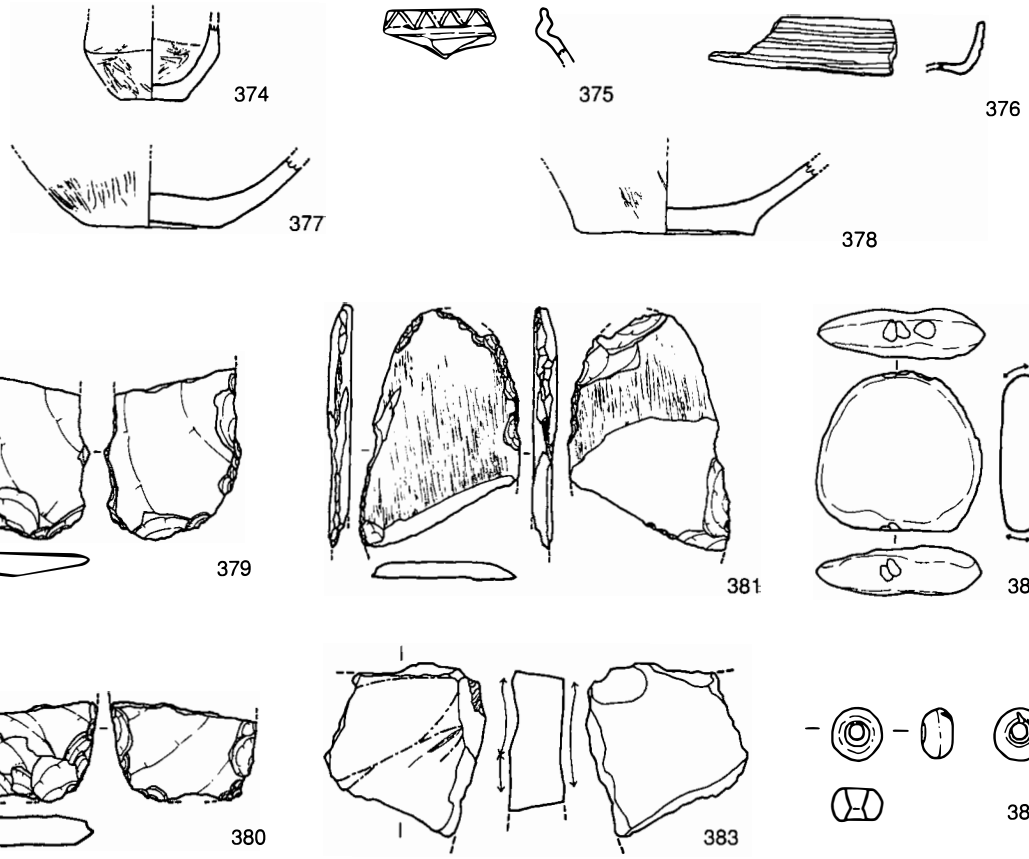
42－51号住居址

【遺構・埋土】（第132図・図版61）

42区西側に位置する。42－27号、42－28号住居址に接するように造られている。平面プランはやや不整形な円形を呈する。長径は6.7ｍ、短径は5.9mを測り、遺構検出面から床面までの深さは10cmである。柱穴は計



第127図　42－39号住居址遺構実測図

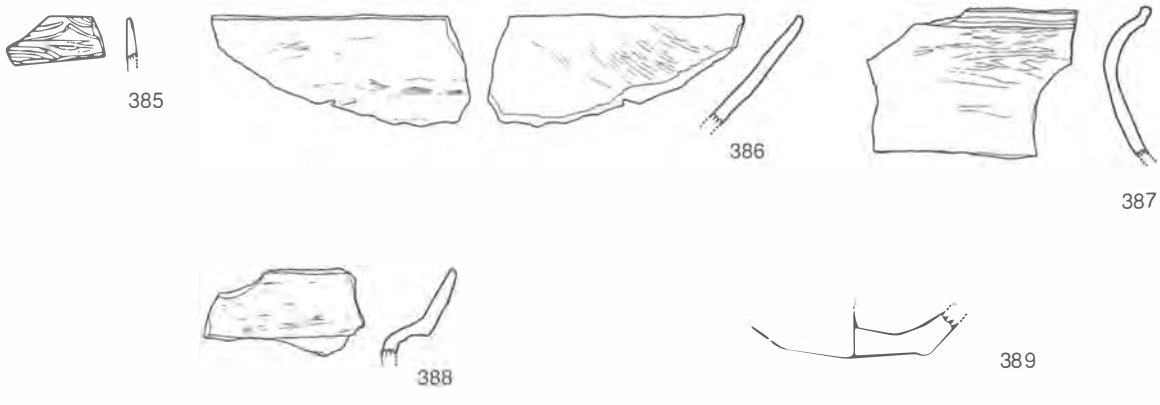


第128図　42－39号住居址出土遺物実測図

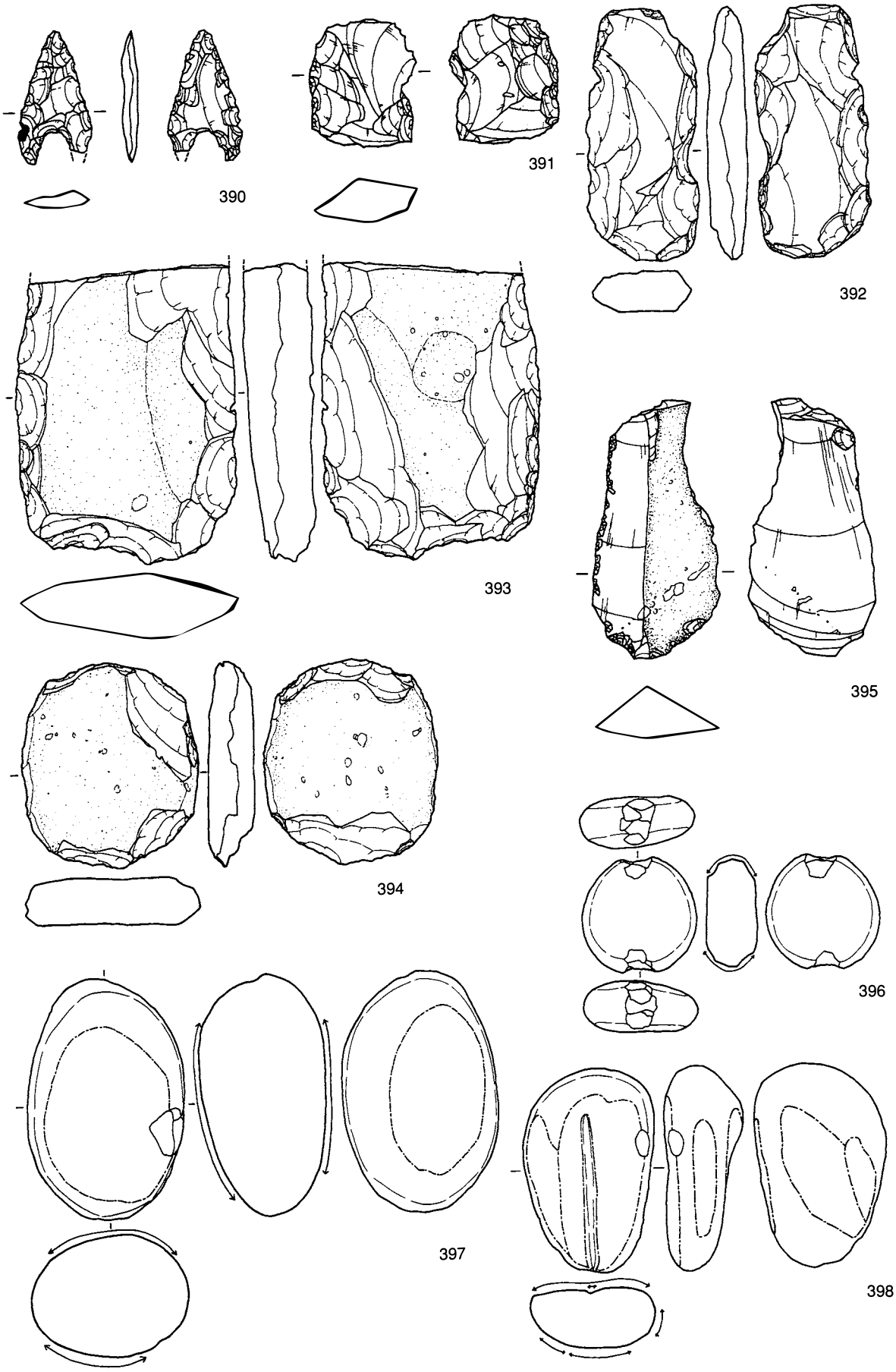
12個確認され、いずれも近接する柱穴と対になっており、別の遺構に伴う可能性もある。または建て替えを行なったことも考えられる。東側の壁際には径が120cmの炉跡が1基検出された。掘り方の中には焼土が集中しており、地床炉と考えられる。この他住居址に伴うような遺構は確認されなかった。

住居址の埋土は、ややしまりのある暗褐色土の1層のみである。焼土や炭化物が混じっている。

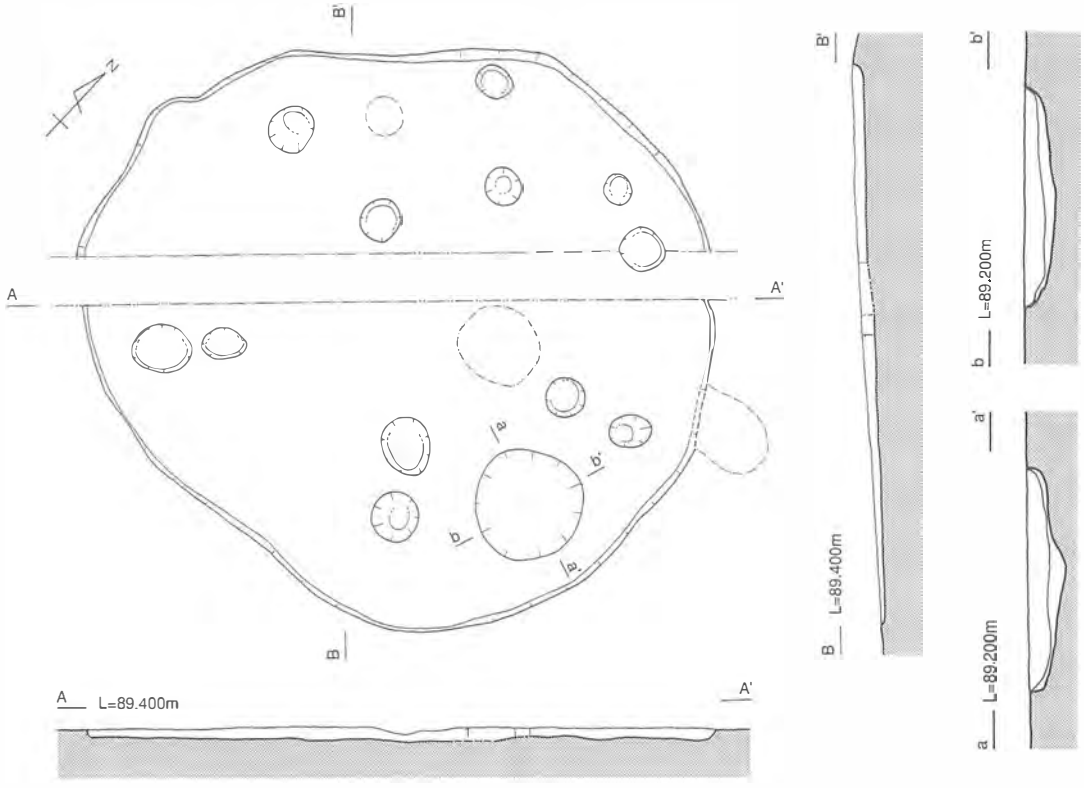
第129図　42－42号住居址遺構実測図



第130図　42－42号住居址出土遺物実測図1



第131図　42－42号住居址出土遺物実測図２



第132図　42－51号住居址遺構実測図

【遺物】（第133図）

本住居址からは、縄文土器と石器の他に焼成粘土塊が出土している。遺物の出土量はそれほど多くない。縄文土器は破片資料のみであるが、その中から深鉢３点を図示している。石器は打製石斧、磨製石斧、石鏃、石匙、石錘、二次加工のある剥片、敲石・磨石等が出ており、それらの中から幾つか選んで図示している。焼成粘土塊は今回図示していない。

42－54号住居址

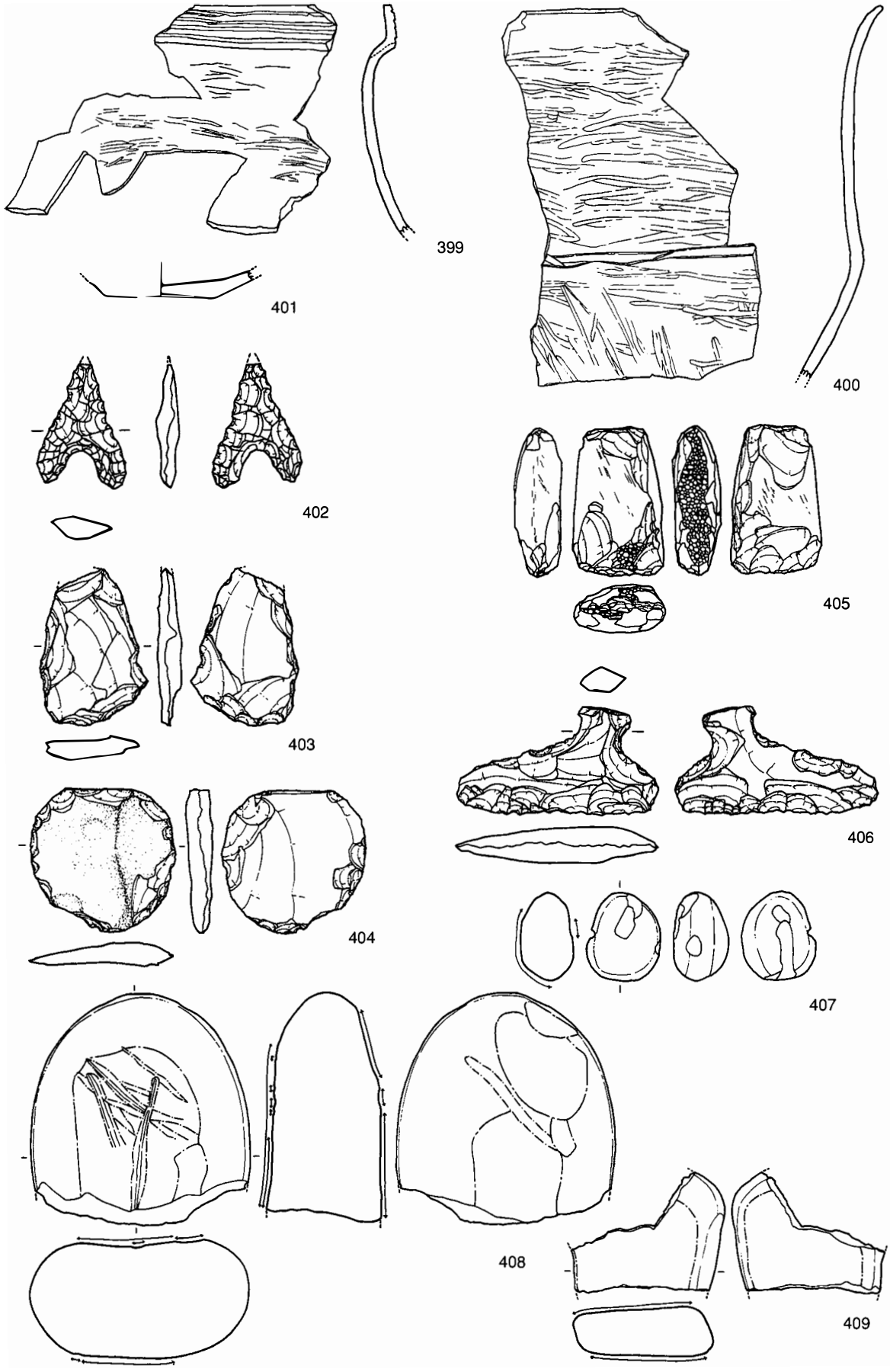
【遺構・埋土】（第134図・図版62）

42区中央に位置する。42－08号住居址の南側、42－28号住居址の東側に造られている。平面プランはやや不整形な円形を呈する。長径は5.1m、短径は4.6mを測り、遺構検出面から床面までの深さは12cmである。柱穴は計７個確認され、うち４個はそれぞれ対になっている。他の住居址同様、別の遺構に伴う可能性もある。または建て替えを行なったことも考えられる。竪穴内には炉跡やその他の遺構は確認されなかった。

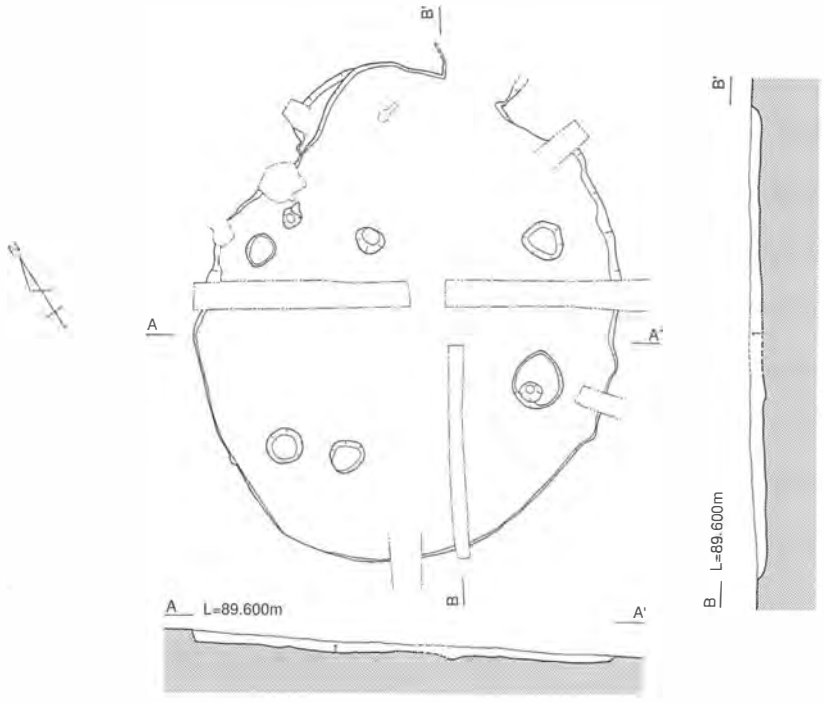
住居址の埋土は、焼土混じりの褐色土の１層のみである。この埋土はⅢ層に相当するものである。

【遺物】（第135図）

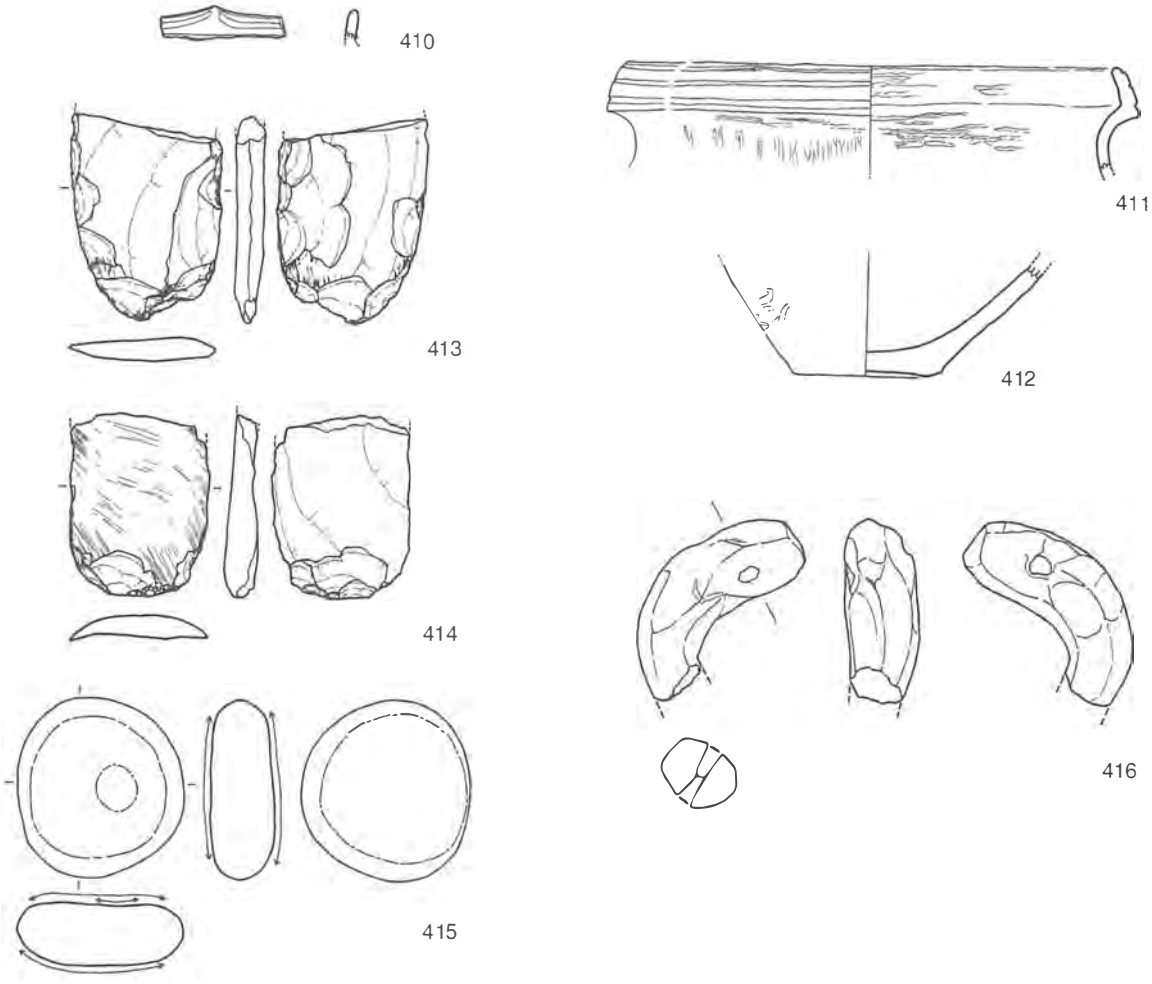
本住居址からは、縄文土器と石器の他に玉類が出土している。遺物の出土量は少ない。縄文土器は破片資料が大半であるが、わずかに反転復元できるものもある。その中から浅鉢１点、深鉢２点を図示している。石器は打製石斧、二次加工のある剥片、敲石・磨石等が出ているが、その中から幾つか選んで図示している。玉類は１点のみ出土しており、その１点を図示しておく。



第133図　42－51号住居址出土遺物実測図



第134図　42－54号住居址遺構実測図



第135図　42－54号住居址出土遺物実測図

（2）　埋設土器遺構

42－01号埋設土器

【遺構・埋土】（第136図・図版63）

43区北側に位置する。周囲はかなり削平されているが掘り方を持つ埋設土器遺構である。掘り方の平面プランは南側を削平されているのではっきりしないが、残存部から円形を呈していたと考えられる。長径は45cm以上、短径は45cmを測り、遺構検出面から最深部までの深さは20cmである。掘り方内には、合せ口状に深鉢と浅鉢がセットで埋設されていた。主体となる深鉢は、口縁を上にほぼ垂直に据えられていた。浅鉢は破損して深鉢の外側に落ち込んでいた。浅鉢は削平によって半分以上欠損していたが、深鉢は比較的土器片の散逸は少なく、埋設当時の姿を留めていると考えられる。

埋設土器遺構の埋土は、深鉢内の埋土と掘り方内の埋土に分けられる。深鉢内の埋土は、粒子の粗くしまりのある暗褐色土（埋土 1 層）と埋土 1 層より粒子の細かくしまりのある黒褐色土（埋土 2 層）に分けられる。掘り方内の埋土は、あまりしまりのない暗褐色土（埋土 3 層）のみである。埋土 1 ・ 2 層には焼土をわずかに含んでいる。

【遺物】（第136図・図版145）

11は口縁部から頸部の一部と胴部の 1 ／ 2 、底部を欠損した浅鉢である。器面調整は横ミガキと斜めミガキで、肩部以上と胴部でそれぞれ調整方法が異なる。口縁帯には山形突起と凹点があるが、いずれもかなり退化しており、沈線も 1 条しか巡っていない。頸部から胴部へのカーブも緩やかなもので、底部は欠けているが形態的には鉢に近いものと推測される。12は底部がやや欠損しているものの、それ以外はほぼ完形の深鉢である。器面調整は横ミガキと縦ミガキで胴部外面には縦ミガキの前に貝殻条痕が施されている。口縁帯はほぼ直立しており、 3 〜 4 条の沈線を巡らすが横ミガキによって消えかかっている。頸部から肩部の張り出しは非常に緩やかで、胴部の張り出しも緩やかなものである。底部はほとんど平底に近く、わずかに抉れているようにも見える。

42－02号埋設土器

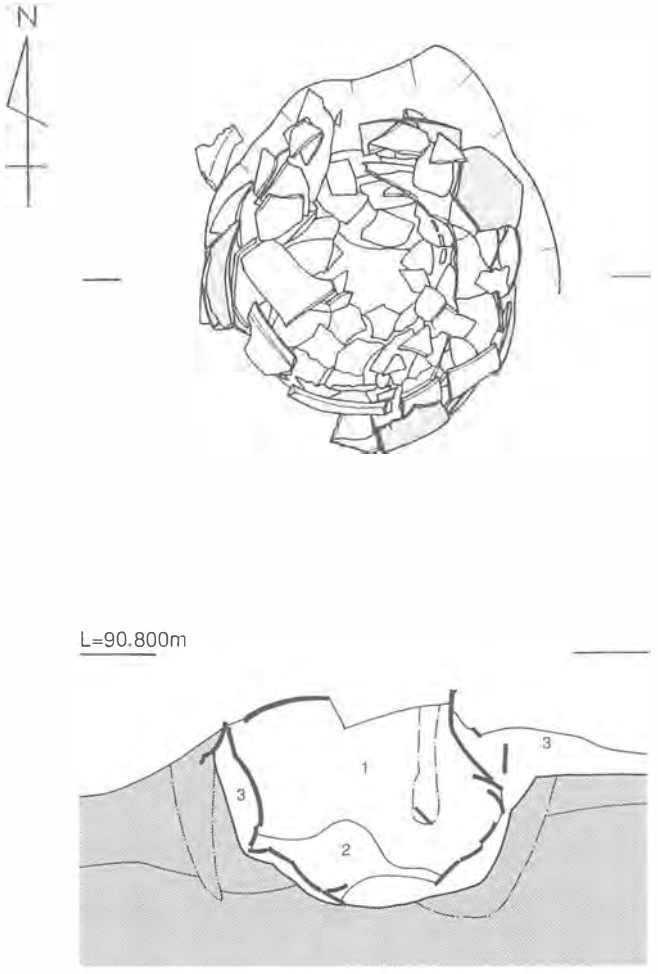
【遺構・埋土】（第137図・図版64）

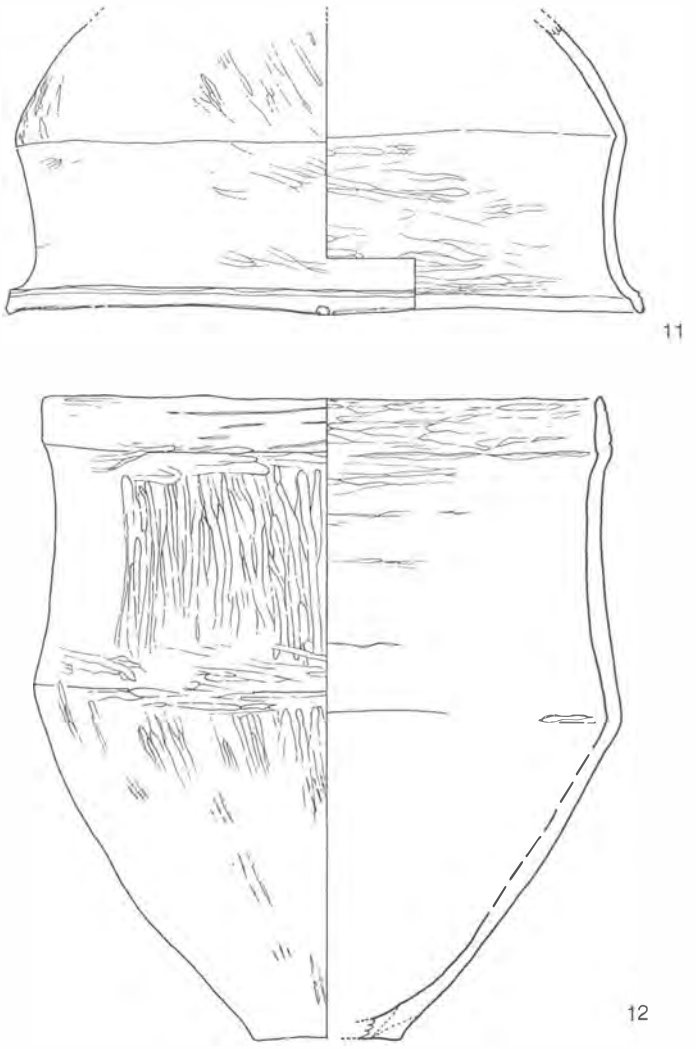
43区南側に位置する。42－25号・32号・38号住居址に挟まれるように造られている。掘り方を持つ埋設土器遺構であるが、全体的にかなり削平されており、そのため掘り方の平面プランもはっきりしない。敢えて推定するなら円形と考えられる。その規模も径が50cm程、遺構検出面から最深部までの深さは 5 〜10cmと土壙というより窪みの様な印象さえ受ける。掘り方内には浅鉢が 1 個埋設されていた。浅鉢は口縁を下に据えられていたと考えられるが、削平のためはっきりしない。掘り方の東側に向かって土器片が広がっていたが、別個体であるため、本埋設土器遺構に伴うかどうか不明である。また土器片に混じって礫も見られるが、土器片同様、伴うかどうか不明である。

埋設土器遺構の埋土は、そのほとんどが後世の撹乱によって削平されているが、鉢内の埋土と掘り方内の埋土に分けられる。どちらも暗褐色を基調としているが、掘り方内の埋土はしまっており（埋土 1 層）、鉢内の埋土はややしまりがない（埋土 2 層）。

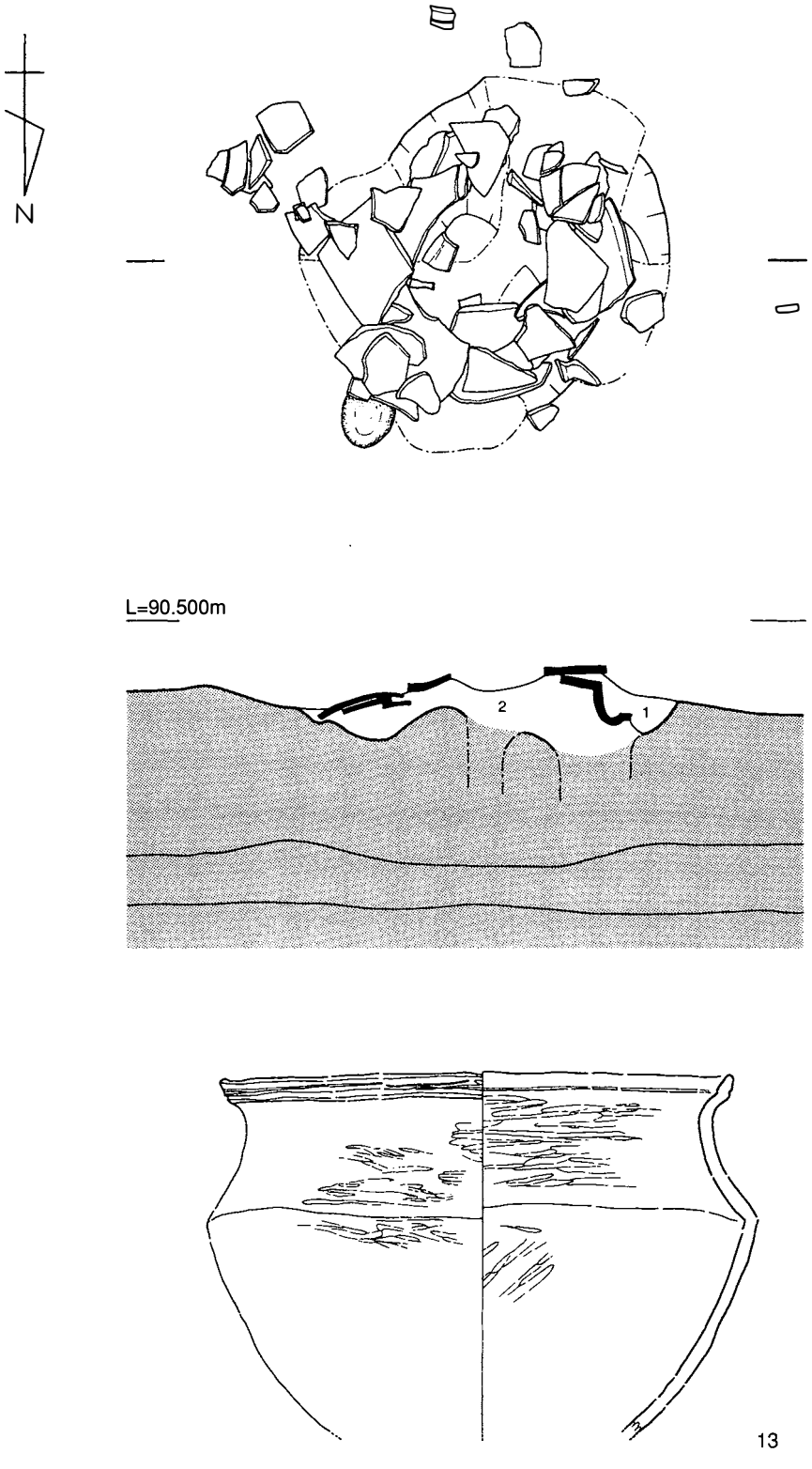
【遺物】（第137図・図版146）

13は口縁部の一部と胴部の 1 ／ 2 、底部を欠損した浅鉢である。器面調整は主に横ミガキであるが、胴部





第136図　42—01号埋設土器実測図



第137図　42－02号埋設土器実測図

外面には横ミガキの前にヘラナデを施している。口縁帯にはわずかに山形突起があるが、凹点は施されていない。また口縁帯はやや外反し、沈線が 2 条巡っている。頸部はやや弓形に外湾しながら肩部へ続き、胴部は丸みを持っている。口径に比べ器高が高く、器形的には鉢に近いが一応浅鉢の部類に入れておく。

42－03号埋設土器

【遺構・埋土】（第138図・図版65）

43区中央に位置する。42－32号住居址内の北側にあり、掘り方を持つ埋設土器遺構である。42－02号埋設土器同様、かなり削平されている。掘り方も半分程しか検出できなかったが、残存状況から平面プランは円形を呈していたと考えられる。その規模も不確定な部分もあるが、長径は60cm、短径は50cm以上を測り、遺構検出面から最深部までの深さは15cmである。掘り方内には深鉢が１個埋設されていた。深鉢は口縁を下にして据えられていた。掘り方内は深鉢に沿ってやや落ち込んでおり、より安定させるために掘り込んだ可能性もある。深鉢は胴部以下を欠損しており、半截された形となっていた。本埋設土器は前述したように42－32号住居址内にあるが、伴うものではない。

埋設土器遺構の埋土は、そのほとんどが後世の撹乱によって削平されているが、かろうじて２層に分けられる。しまりのあまりない暗褐色土（埋土１層）と焼土・炭化物混じりでしまりのある暗褐色土（埋土２層）であるが、同じ暗褐色土でも埋土２層の方が明るめである。また埋土２層は42－32号住居址の埋土の可能性もある。

【遺物】（第138図・図版147）

14は口縁部と頸部の一部と肩部以下を欠損した深鉢である。口縁部には横ナデ、頸部にはヘラナデの後ミガキを施している。口縁帯はやや外反し、６～８条の沈線が巡っている。沈線は多条化しているものの、まだ貝殻条痕を用いてはいない。頸部は直線的で口縁付近には補修孔が穿たれている。補修孔ならば対になっているはずだが、欠損しており１個しかない。

42－04号埋設土器

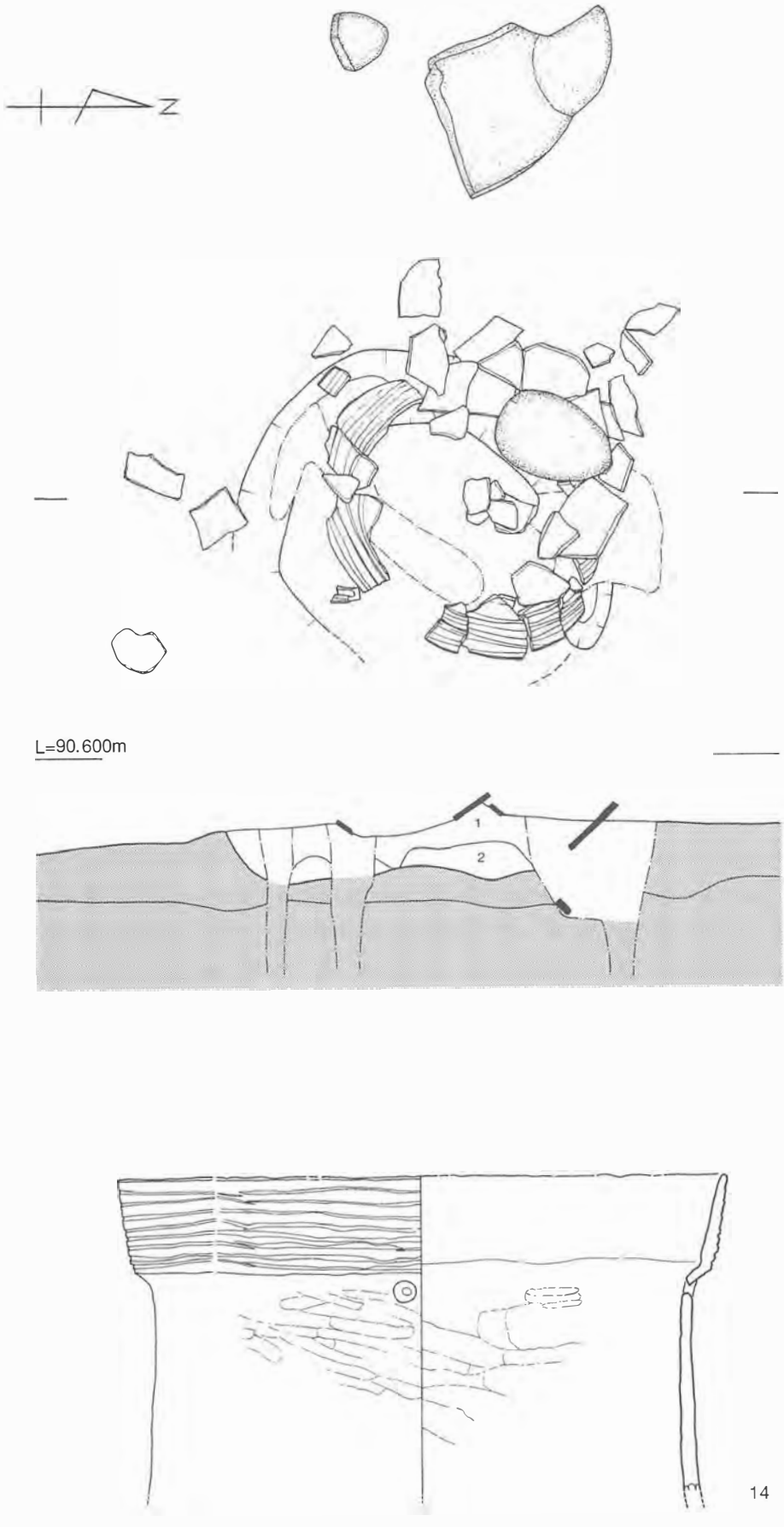
【遺構・埋土】（第139図・図版66）

43区南側に位置する。42－32号住居址内の南側にあり、掘り方を持つ埋設土器遺構である。42－03号埋設土器ほどではないが、上部を削平されている。掘り方の平面プランは不整形な円形を呈する。長径は80cm以上、短径は70cmを測り、遺構検出面から最深部までの深さは10cm以上である。掘り方内には深鉢が１個埋設されていた。深鉢は口縁を上にして据えられていた。掘り方内は深鉢に沿ってやや落ち込んでおり、より安定させるために掘り込んだ可能性もある。深鉢は口縁帯と胴部以下を欠損しており、半截された形となっていた。本埋設土器は前述したように42－32号住居址内にあるが、42－03号埋設土器同様、伴うものではない。

埋設土器遺構の埋土は、２層に分けられる。どちらも暗黒褐色を基調としているが、きめが細かくあまりしまりのないもの（埋土１層）としまりのあるもの（埋土２層）に分けられる。

【遺物】（第139図・図版148）

15は口縁部と頸部の一部、胴部以下を欠損した深鉢である。器面調整は横ミガキである。口縁部と胴部以下が欠損しているため、全体のプロポーションが明らかでないが、頸部は口縁付近で強く外反している。界線は施されておらず、肩部はやや張り出しているようだが、胴部がほとんどないためはっきりしない。



第138図　42－03号埋設土器実測図

42－16号埋設土器

【遺構・埋土】（第140図・図版67）

43区南側に位置する。42－32号住居址内の南西端にあり、掘り方を持つ埋設土器遺構である。42－03号・04号埋設土器同様、上部を削平されている。掘り方の平面プランは円形を呈する。径は50cm程で遺構検出面から最深部までの深さは20cm以上である。掘り方内には深鉢が１個埋設されていた。深鉢は口縁を上にして据えられていた。深鉢は胴部以下を欠損しており、半截された形となっていた。本埋設土器は前述したように42－32号住居址内にあるが、42－03号・04号埋設土器同様、伴うものではない。

42－16号埋設土器遺構の埋土は、２層に分けられる。どちらも暗褐色を基調としているが、しまりのないもの（埋土１層）としまりのあるもの（埋土２層）で区分できる。埋土２層は深鉢内にのみ堆積しているが、埋土１層は深鉢内だけでなく掘り方内にも堆積している。

【遺物】（第140図・図版149）

16は口縁部から頸部の１／３と肩部以下を欠損した深鉢である。器面調整は横ミガキが主で頸部内面はヘラナデのみである。口縁帯はほぼ直立しており、６条の沈線が巡っている。頸部はやや弓形に外湾しているが、下に行くに従って直線的になっている。

42－17号埋設土器

【遺構・埋土】（第141図・図版68）

42区北側に位置する。上部を削平されており、本来の形状をどの程度留めているか不明だが、一応掘り方を持つ埋設土器遺構である。掘り方の平面プランは不整形な円形を呈する。長径は55cm、短径は45cmを測り、遺構検出面から最深部までの深さは、12cm以上である。掘り方内には深鉢が１個埋設されていた。深鉢は口縁を下にして据えられていた。深鉢は胴部以下をほとんど欠損しており、一見半截されているようにも見えるが、あくまで削平によるものである。掘り方の西側の肩部付近から、円礫が深鉢を支えるような形で見つかっている。本埋設土器に伴うものかどうかは、上部を削平されていることを考えると疑問も残る。また周囲からは台石や焼土の分布も確認されており、本埋設土器が住居址内にあった可能性も否定できない。

埋設土器遺構の埋土は、そのほとんどが後世の撹乱によって削平されているが、深鉢内の埋土と掘り方内の埋土に分けられる。どちらも黒褐色を基調としているが、掘り方内の埋土はしまっており（埋土１層）、深鉢内の埋土はややしまりがない（埋土２層）。

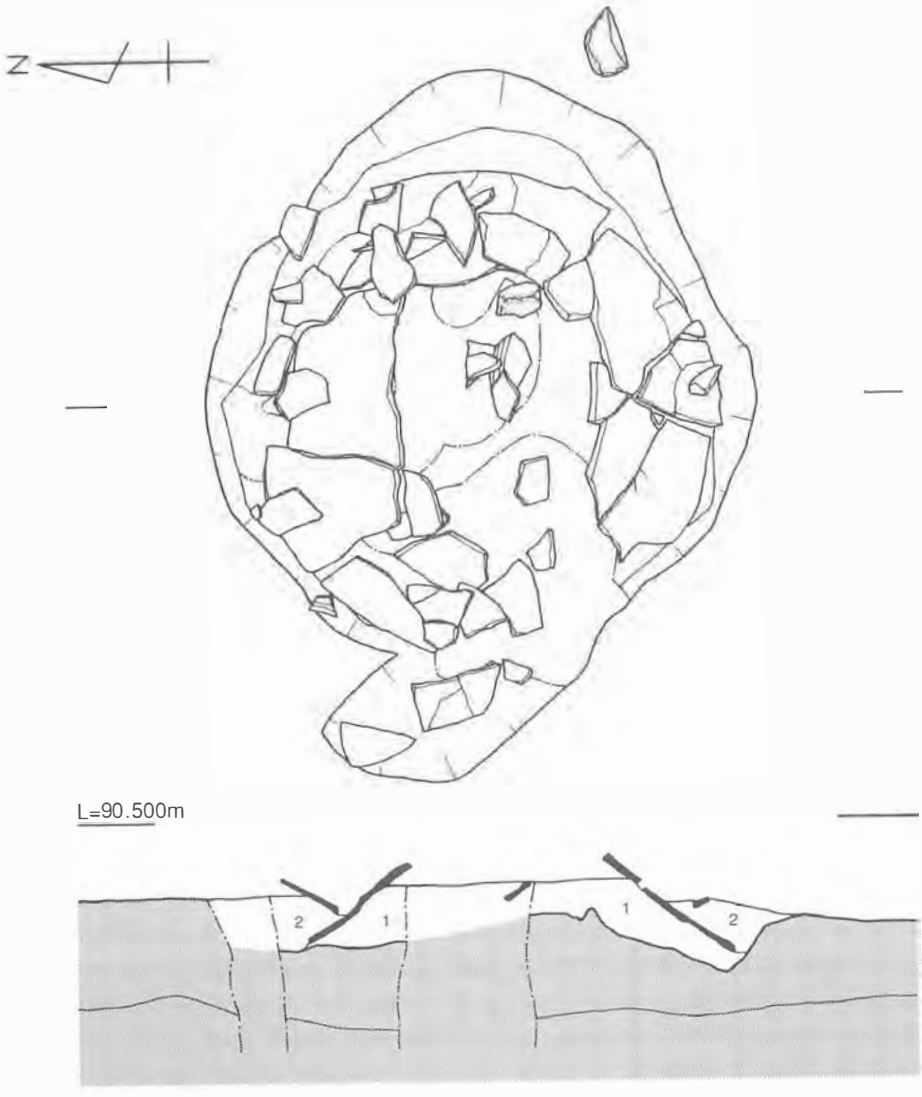
【遺物】（第141図・図版150）

17は口縁部から頸部の一部と胴部以下の大半を欠損した深鉢である。器面調整は外面では貝殻条痕とミガキ、内面では横ミガキである。口縁帯は直立気味に立ち上がり、口縁帯の沈線は貝殻条痕によって表現されている。頸部は緩やかに外湾しており、胴部の形態ははっきりしないが残存部から推測すると、緩やかに張り出しながら底部に繋がると考えられる。

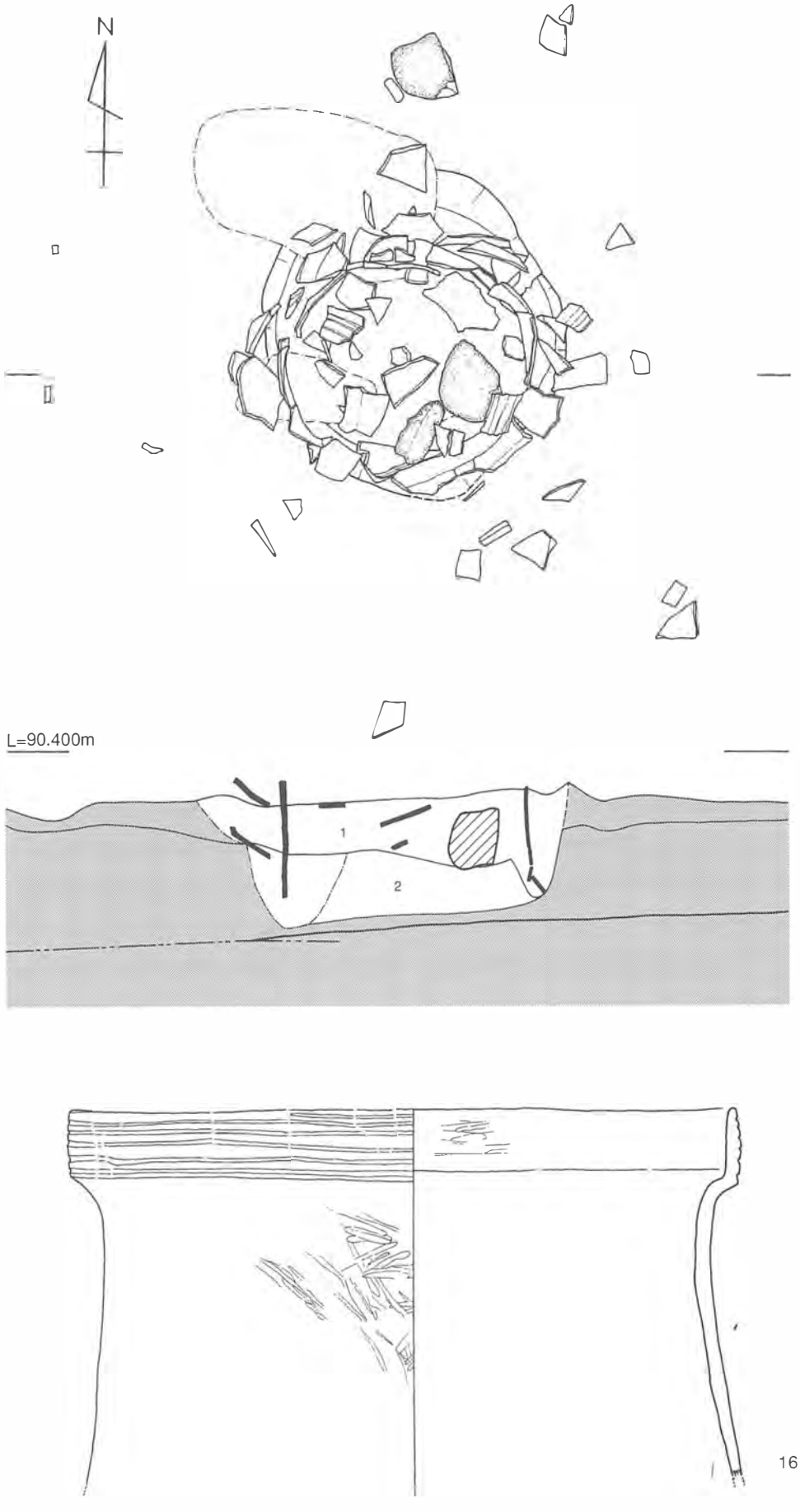
42－18号埋設土器

【遺構・埋土】（第142図・図版69）

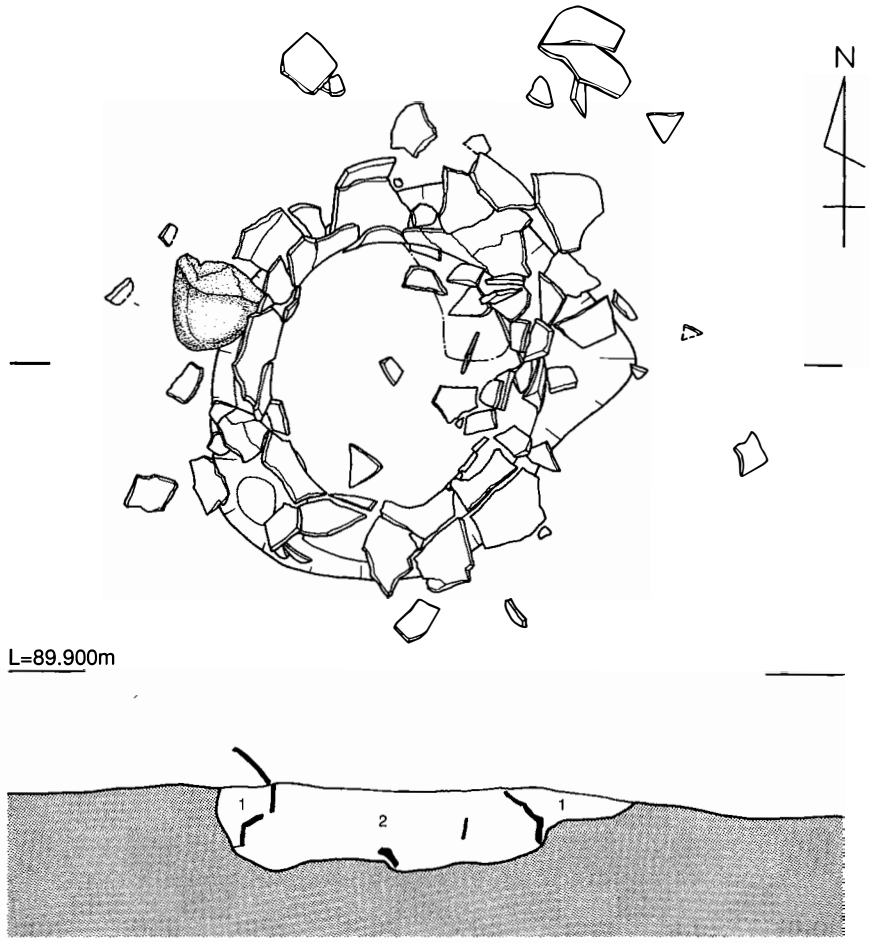
42区北側に位置する。42－08号住居址内の西側にあり、後述する42－19号埋設土器の東側に近接している。

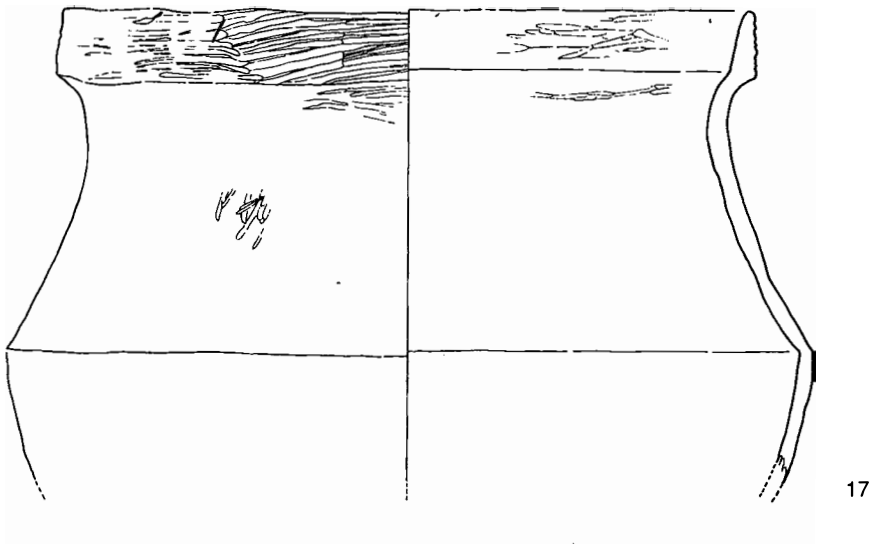


第139図　42－04号埋設土器実測図



第140図　42－16号埋設土器実測図

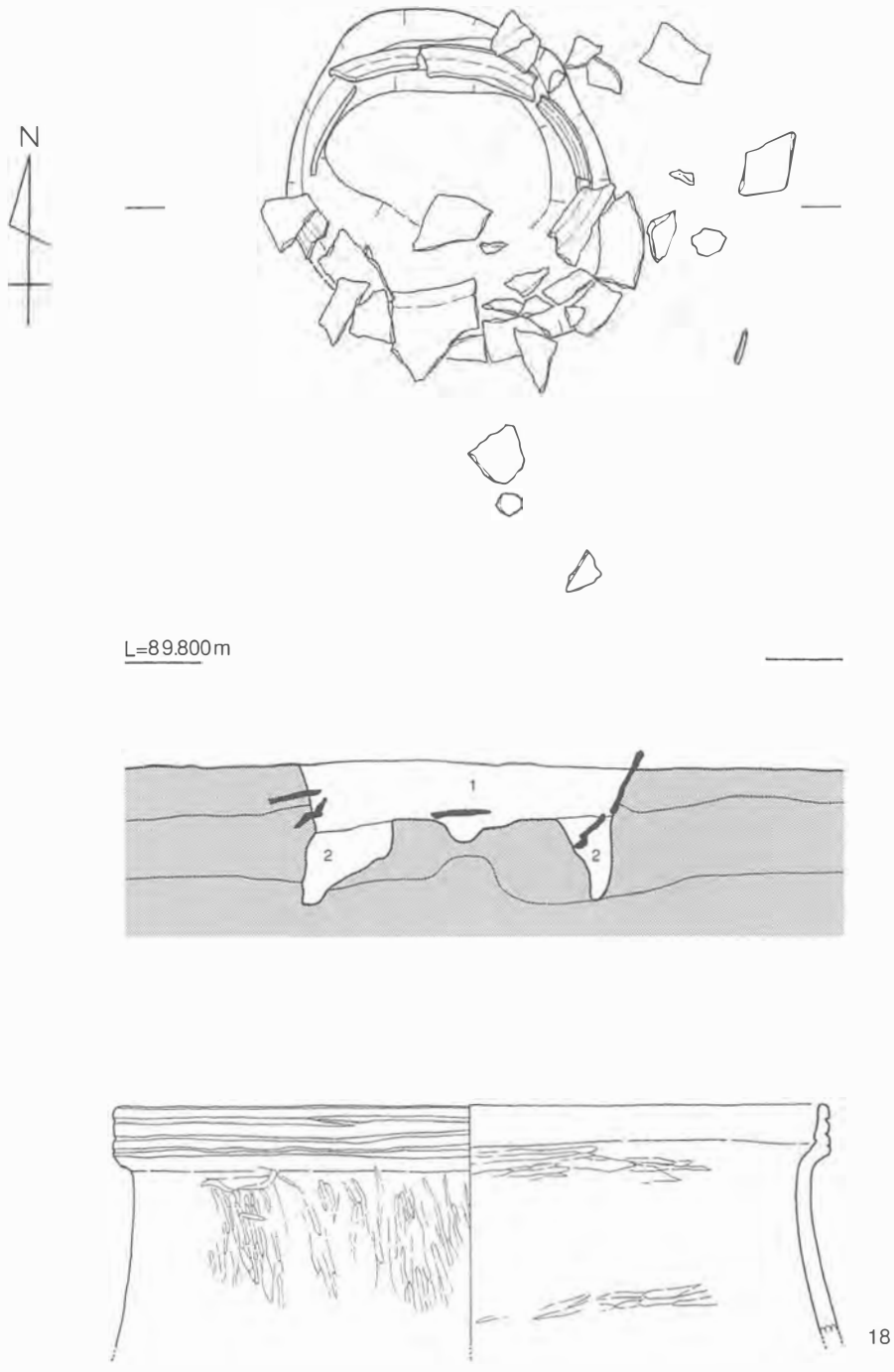




第141図　42－17号埋設土器実測図

上部を削平されているが、掘り方を持つ埋設土器遺構である。掘り方の平面プランは楕円形を呈する。長径は50cm、短径は40cmを測り、遺構検出面から最深部までの深さは20cmである。掘り方内には深鉢が1個埋設されていた。深鉢は口縁を下にして据えられていた。深鉢は肩部以下を欠損しており、半截された形となっていた。本埋設土器は前述したように42－08号住居址内にあるが、遺構の切り合い関係から伴うものではない。

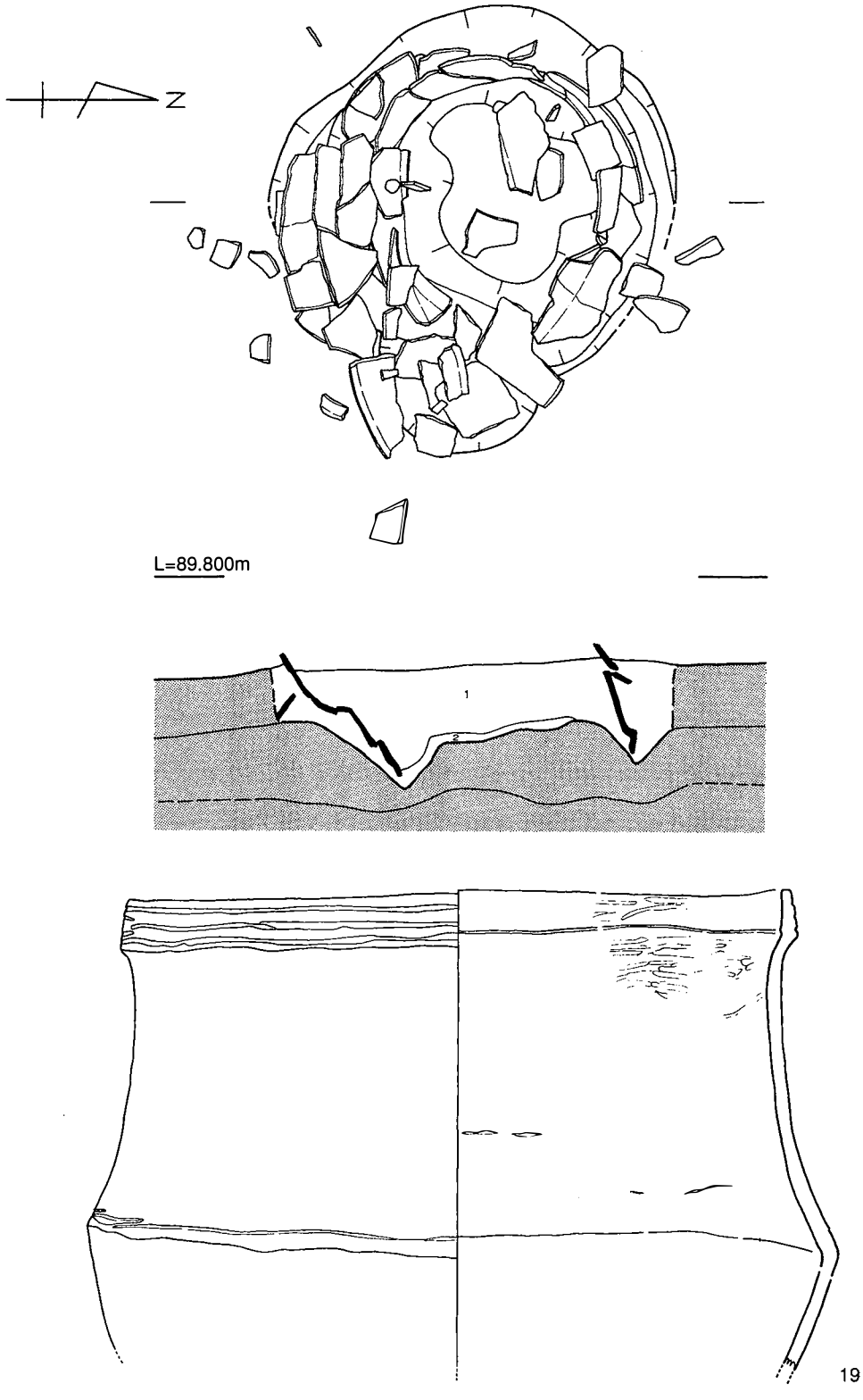
埋設土器遺構の埋土は、2層に分けられる。粒子が細かくしまりのある明黒褐色土（埋土1層）と粒子が細かくしまりのない黒褐色土（埋土2層）であるが、掘り方の埋土は記されておらず、本来的には3層に分けられると考えられる。



第142図　42－18号埋設土器実測図

【遺物】（第142図・図版151）

18は口縁部から頸部の一部と肩部以下を欠損した深鉢である。器面調整は横ミガキが主で、頸部外面は縦ミガキである。口縁帯は直立気味に立ち上がり、３条の沈線が巡っている。頸部は口縁付近では強く外反しているが、それ以下はわずかに外湾している。頸部途中から欠損しているため、全体の様相は不明である。



第143図　42－19号埋設土器実測図

42－19号埋設土器

【遺構・埋土】（第143図・図版69）

42区北側に位置する。42－08号住居址内の西側にあり、前述する42－19号埋設土器の西側に近接している。上部を削平されているが、掘り方を持つ埋設土器遺構だと分かる。掘り方の東側に突出した箇所があるが、平面プランは円形を呈する。長径は65cm、短径は60cmを測り、遺構検出面から最深部までの深さは15cmである。掘り方内には深鉢が１個埋設されていた。深鉢は口縁を下にして据えられていた。深鉢は肩部以下をかなり欠損していた。本埋設土器は前述したように42－08号住居址内にあるが、遺構の切り合い関係から42－18号埋設土器同様、伴うものではない。

埋設土器遺構の埋土は、２層に分けられる。粒子が細かくわずかにしまりのある黒褐色土（埋土１層）と粒子が粗くしまりのある明黒褐色土（埋土２層）であるが、埋土の大半は１層であって、２層は掘り方の底部に薄く堆積するのみである。

【遺物】（第143図・図版152）

19は口縁部から肩部の一部と胴部以下の大半を欠損した深鉢である。器面調整は主に横ミガキで横ミガキの前にヘラナデや貝殻条痕を施している。口縁帯はわずかに外傾し、３～４条の沈線が巡っている。頸部は緩やかに外湾し、胴部もわずかに張り出している。界線は１条巡っているが、所々ヘラ描きの沈線が途切れており、かなり粗雑な印象を受ける。

42－20号埋設土器

【遺構・埋土】（第144図・図版70）

42区西側に位置する。上部をかなり削平されているらしく、掘り方のほとんどを失っているが一応、掘り方を持つ埋設土器遺構としておく。掘り方の平面プランは不整形な楕円形を呈する。長径は95cm、短径は70cmを測り、遺構検出面から最深部までの深さは10cm以上である。掘り方内には浅鉢が１個埋設されていた。浅鉢は口縁を下に据えられていたと考えられるが、削平のためはっきりしない。掘り方内には土器片が広がっていたが、別個体であるため、本埋設土器遺構に伴うかどうか不明である。

埋設土器遺構の埋土は、そのほとんどが後世の撹乱によって削平されているが、かろうじて２層に分けられる。どちらも褐色を基調としているが、きめが細かくしまりのあまりないもの（埋土１層）と粘質を持ちしまりのあるもの（埋土２層）に分けられる。埋土２層にはわずかに焼土、炭化物が混じっている。

【遺物】（第144図・図版153）

20は口縁部から肩部の一部と胴部以下の大半を欠損した浅鉢である。器面調整は横ミガキである。口縁帯はやや外反し、山形突起がついている。また凹点が２点施されているが、山形突起共々、形骸化が進んでいる。凹点の間を通るように１条の沈線が巡っている。頸部はやや弓形に外反し、肩部はやや張り出している。界線はかろうじて１条確認できる。

42－21号埋設土器

【遺構・埋土】（第145図・図版71）

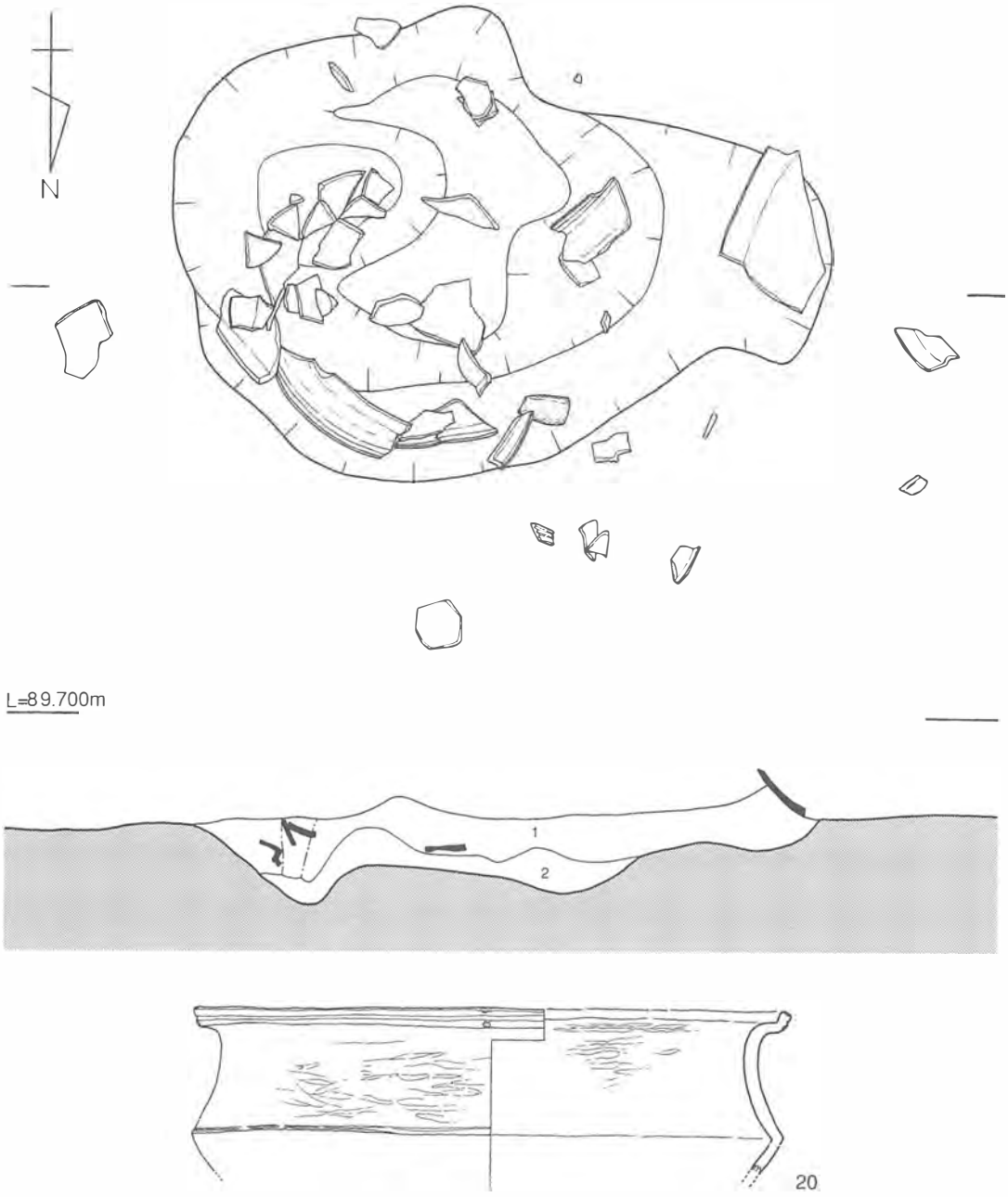
42区北東側に位置する。後述する42－43号埋設土器の西側に近接している。かなり後世の撹乱等で削平さ

れていたが、一応掘り方を持つ埋設土器遺構である。掘り方の平面プランは削平のためはっきりしない。検出時の形態は不整形な円形を呈するが、本来の形態かどうか疑問である。遺構検出面から最深部までの深さは20cm以上である。掘り方内には深鉢が１個埋設されていた。深鉢は口縁を下に据えられていたと考えられる。やや東側に傾斜しているが、掘り方の底の形から考えると本来は垂直であったと推測される。一見土器片の散逸が激しいように見えるが、口縁から底部まで一通り残っており、深鉢の残存状態は削平された割には比較的良好と言える。

埋設土器遺構の埋土は、しまりのある黄褐色土の１層のみであった。

【遺物】（第145図・図版154）

21は口縁部から肩部の一部と胴部の１／３を欠損した深鉢である。器面調整は横ミガキと縦ミガキが主で、



第144図　42－20号埋設土器実測図

外面は縦ミガキ、口縁部、肩部と内面は横ミガキ、という風に使い分けされている。口縁帯は内傾し、３条の沈線が巡っている。頸部は口縁付近ではやや強く外反しているが、それ以下は直線的で、胴部も緩やかに張り出す程度で底部へと繋がる。底部はわずかに上げ底状に抉れているが、平底に近い形状である。界線は見られない。

42－22号埋設土器

【遺構・埋土】（第146図・図版72）

43区南側に位置する。42－42号住居址の西側にあり、周囲はかなり削平されている。上部をやや削平されているが、一応掘り方を持つ埋設土器遺構である。掘り方の平面プランは円形を呈する。径は45cmを測り、遺構検出面から最深部までの深さは25cm以上である。掘り方内には深鉢が１個埋設されていた。深鉢は口縁を上に据えられていたと考えられる。上部の削平により口縁の大半が欠損しているものの、その他の部分は比較的良く残っていた。ただ、胴部と底部の間の部分が欠損しており、埋設当時から欠損していた可能性もある。

埋設土器遺構の埋土は、３層に分けられる。灰褐色砂質土（埋土１層）と粘質をあまり持たずしまりのある茶褐色土（埋土２層）、そしてかなりしまりのある暗褐色土（埋土３層）である。

【遺物】（第146図・図版155）

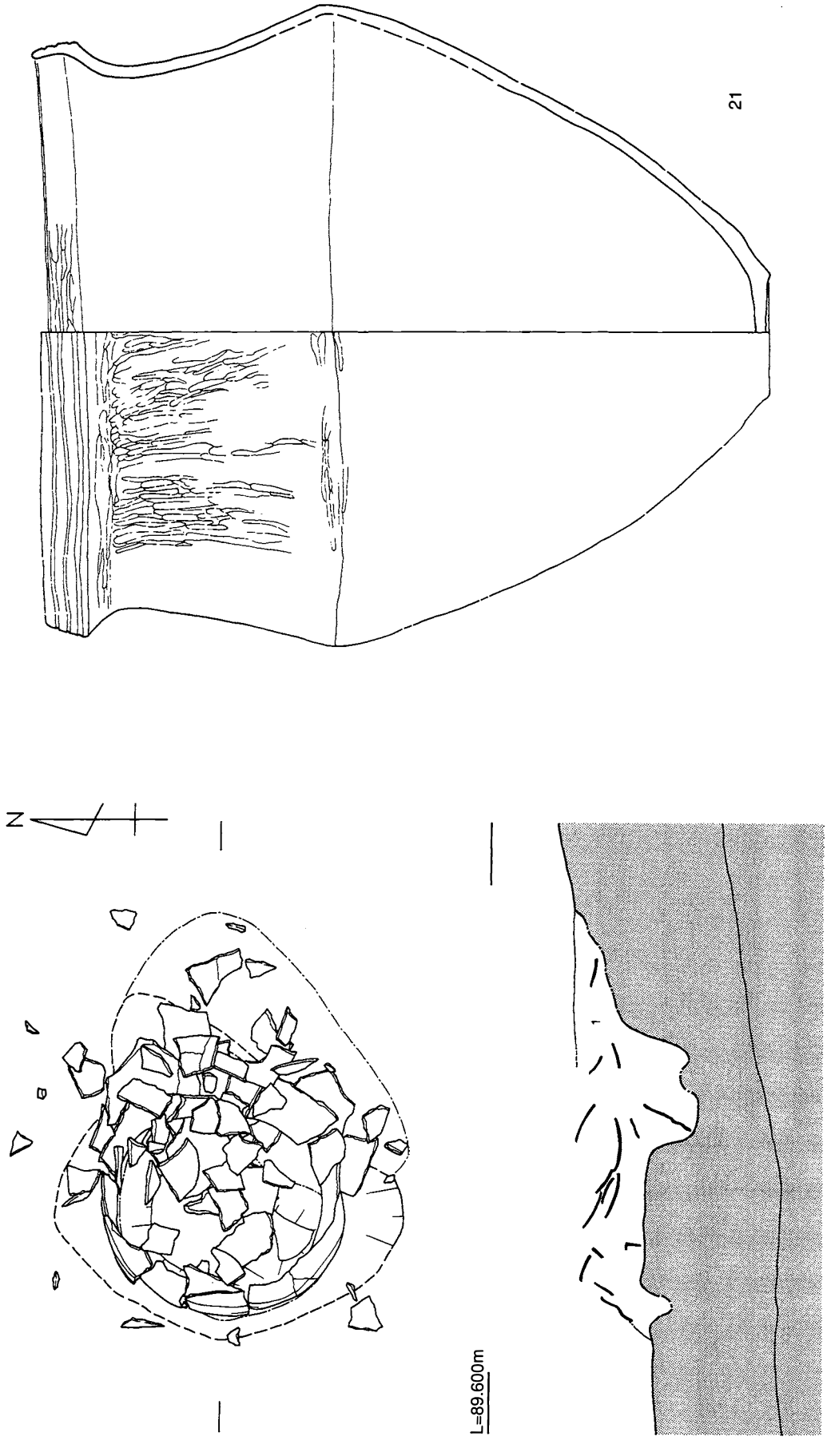
22は口縁部の大半と胴部から底部の１／２を欠損した深鉢である。胴部上半以上と底部は直接接合しないが、同一掘り方内から出土しているため、同一個体と判断、図面上で復元している。器面調整は横ミガキが主で胴部は縦ミガキが施されている。口縁帯はわずかに外傾し、４～５条の沈線が巡っている。頸部はわずかに弓形に外湾しており、胴部も緩やかに張り出す程度で底部へと繋がる。底部は平底でやや胴部から突出している。

42－26号埋設土器

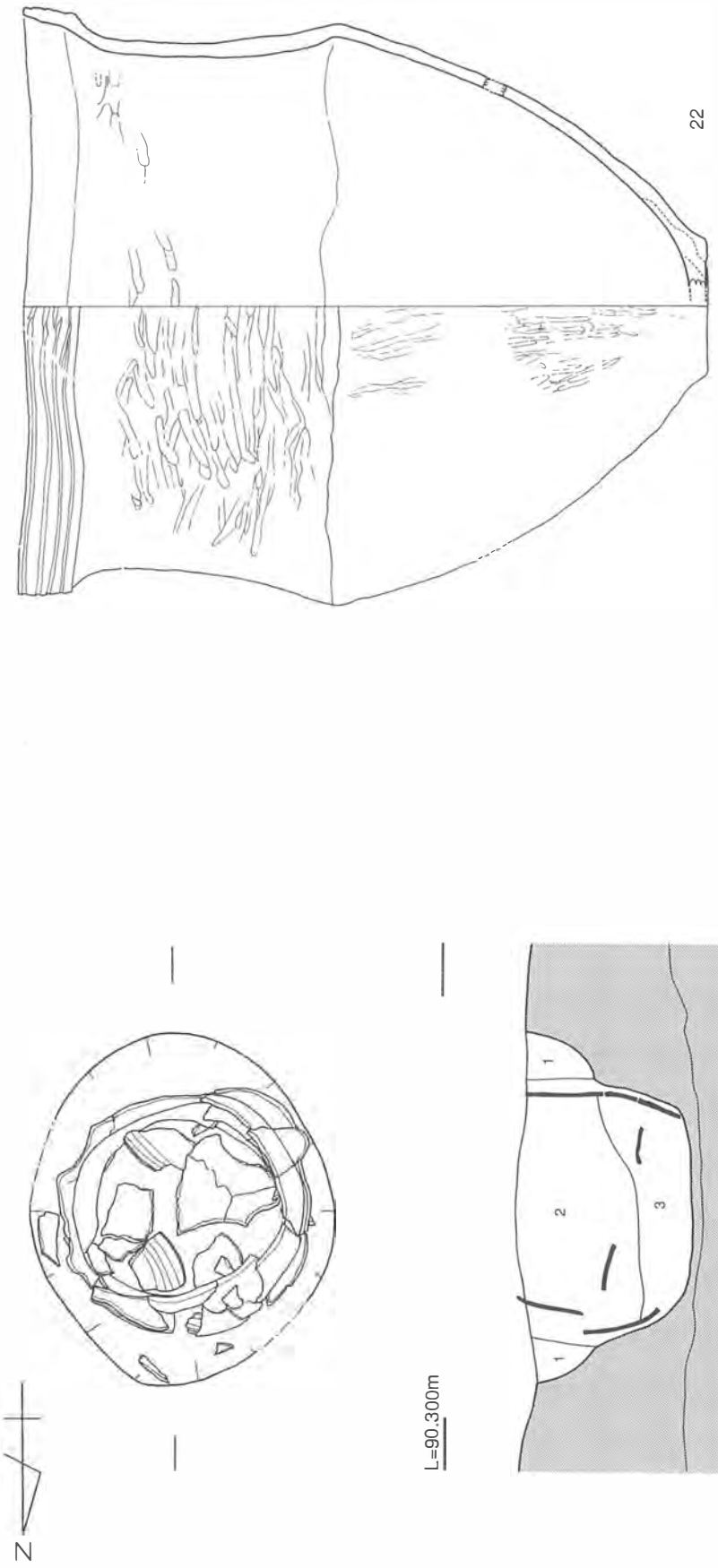
【遺構・埋土】（第147図・図版73）

42区西側に位置する。42－27号住居址内の中央にあり、上部を削平されているが掘り方を持つ埋設土器遺構である。掘り方の平面プランは上部を削平されているものの、やや不整形な円形を呈する。径は50cmを測り、遺構検出面から最深部までの深さは30cm以上である。掘り方内には深鉢が１個埋設されていた。深鉢は口縁を上にしてほぼ垂直に据えられていたと考えられる。上部の削平により口縁が欠損しているものの、その他の部分は比較的良く残っていた。本埋設土器は土圧等で多少変形しているが、口縁を除けば埋設当時の姿を留めていると言える。なお42－27号住居址の項で述べたように埋土の切り合いから、本埋設土器は住居址に伴わないと推測される。

埋設土器遺構の埋土は、深鉢内の埋土と掘り方内の埋土に分けられる。深鉢内の埋土は暗褐色を基調とするが、焼土混じりのややしまりのあるもの（埋土１層）としまりのないもの（埋土２層）に分けられる。一方、掘り方内の埋土はしまりのない暗褐色土（埋土３層）である。



第145図　42−21号埋設土器実測図



第146図　42－22号埋設土器実測図

第147図　42−26号埋設土器実測図

【遺物】（第147図・図版156）

23は口縁部と頸部、底部の大半、そして胴部の一部を欠損した深鉢である。口縁部を欠損しているにもかかわらず、器高が50cm以上あり、かなり大型の深鉢だったことが分かる。器面調整は頸部外面では縦ミガキ、内面はナデ、胴部はヘラナデであるが、頸部内面には土器製作時の接合痕が残っており、器面調整は不十分と言える。頸部から胴部は直線的で、弓形の外湾や膨らみのある張り出しは見られない。底部は平底で円盤貼り付けである。

42－29号埋設土器

【遺構・埋土】（第148図・図版74）

42区北側に位置する。42－17号埋設土器の南側にあり、周囲には住居址の存在も確認されている。掘り方を持つ埋設土器遺構である。掘り方の平面プランは円形を呈する。径は60cmを測り、遺構検出面から最深部までの深さは50cmである。掘り方内には深鉢が１個埋設されていた。深鉢は口縁を上にしてほぼ垂直に据えられていたと考えられる。口縁と底部が多少欠損しているものの、その他の部分は比較的良く残っていた。なお西側に台石や磨石とおぼしき円礫が点在していたが、本埋設土器に伴うかどうかは定かではない。ただ、これらの礫は深鉢の口縁を押し潰すようにして出土しており、石蓋として用いられていた可能性もある。

埋設土器遺構の埋土は、深鉢内の埋土と掘り方内の埋土に分けられる。深鉢内の埋土は、しまりのない暗褐色土（埋土１層）、しまりのある暗褐色土（埋土２層）、ややしまりのある黒褐色土（埋土３層）、焼土と炭化物を含みしまりのある暗褐色土（埋土４層）、そしてわずかに焼土を含んで少し粘質を持ち、しまりのある黒褐色土（埋土５層）に分けられる。掘り方内の埋土については、注記が見当たらず不明である。

【遺物】（第148図・図版157）

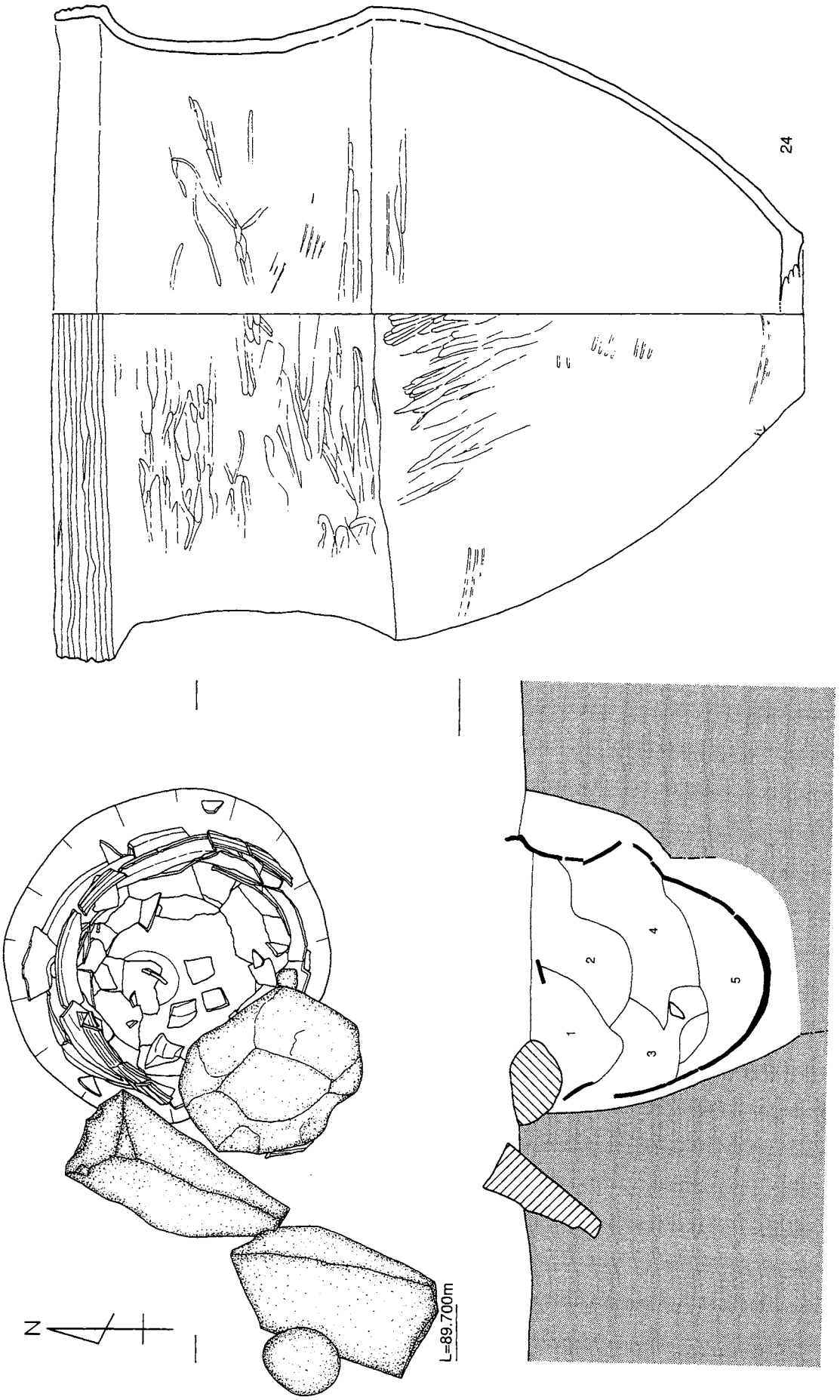
24は口縁部１／３とその他一部を欠損した深鉢である。深鉢としては大型の部類に入る。器面調整は横ミガキが主で、胴部は縦又は斜めミガキである。口縁帯はほぼ直立気味に立ち上がり、４条の沈線を巡らせている。頸部は口縁付近でやや強く外反しているが、肩部に近づくにつれて直線的になる。胴部はやや膨らみを持って張り出している。底部はあまり残っていないが、わずかに上げ底のようである。

42－33号埋設土器

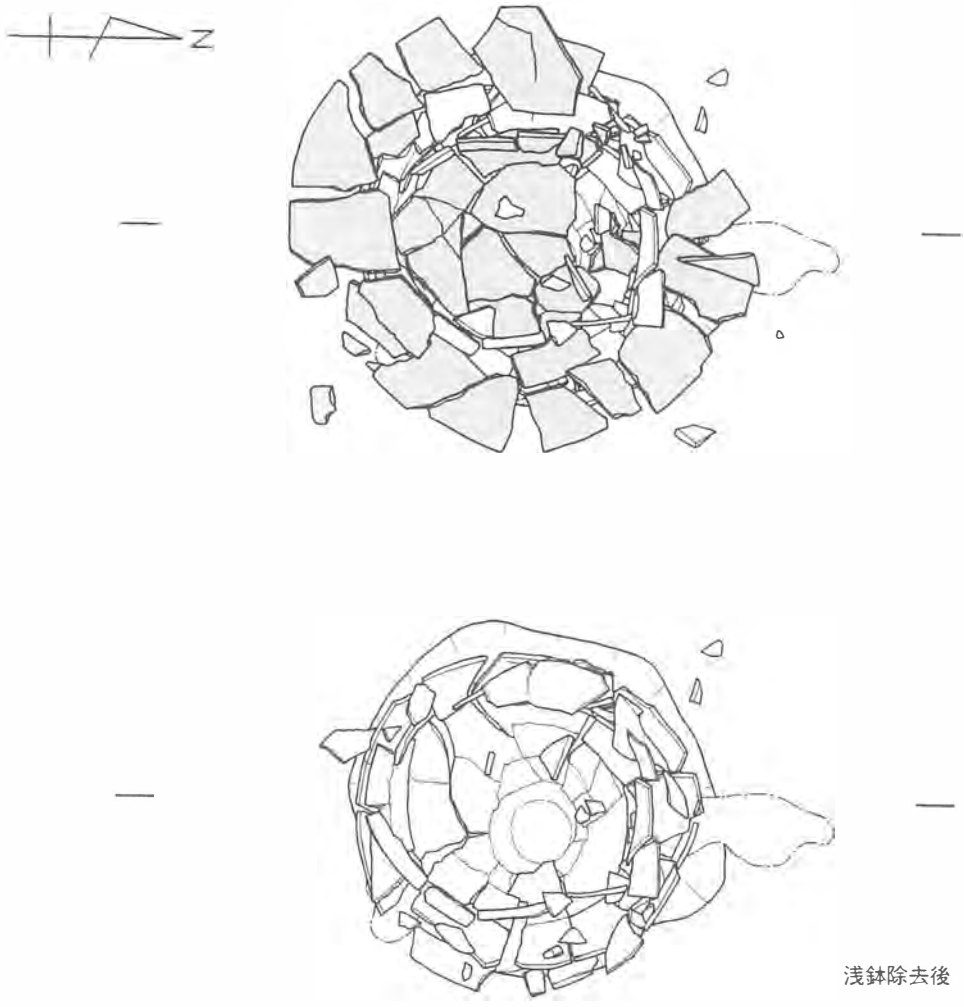
【遺構・埋土】（第149図・図版75）

42区南端に位置する。南西方向に41－03号住居址がある他は、特に目立った遺構は確認されなかった。あまり削平されておらず、残存状況は良好であった。掘り方を持つ埋設土器遺構である。掘り方の平面プランはやや不整形な円形を呈する。ただ掘り方の西側のラインがややはっきりしないため、本来の平面プランかどうかは不明である。長径は50cm、短径は45cmを測り、遺構検出面から最深部までの深さは30cmである。掘り方内には、深鉢と浅鉢がそれぞれ上を向いた形で埋設されていた。主体となる深鉢は、口縁を上にほぼ垂直に据えられていた。浅鉢は破損して深鉢の内側と外側に落ち込んでいた。破損と言っても散逸した土器片はあまりなく、そのまま押し潰された形で検出された。埋設当時の姿を留めていると考えられる。なお、周囲にはピットが数基確認されており、何らかの遺構が存在した可能性もある。

埋設土器遺構の埋土は、深鉢内の埋土と掘り方内の埋土に分けられる。深鉢内の埋土は暗褐色を基調とするが、あまりしまりのないもの（埋土１層）とやや黄色味を帯びており、粘質を持ちしまりのあるもの（埋



第148図　42－29号埋設土器実測図

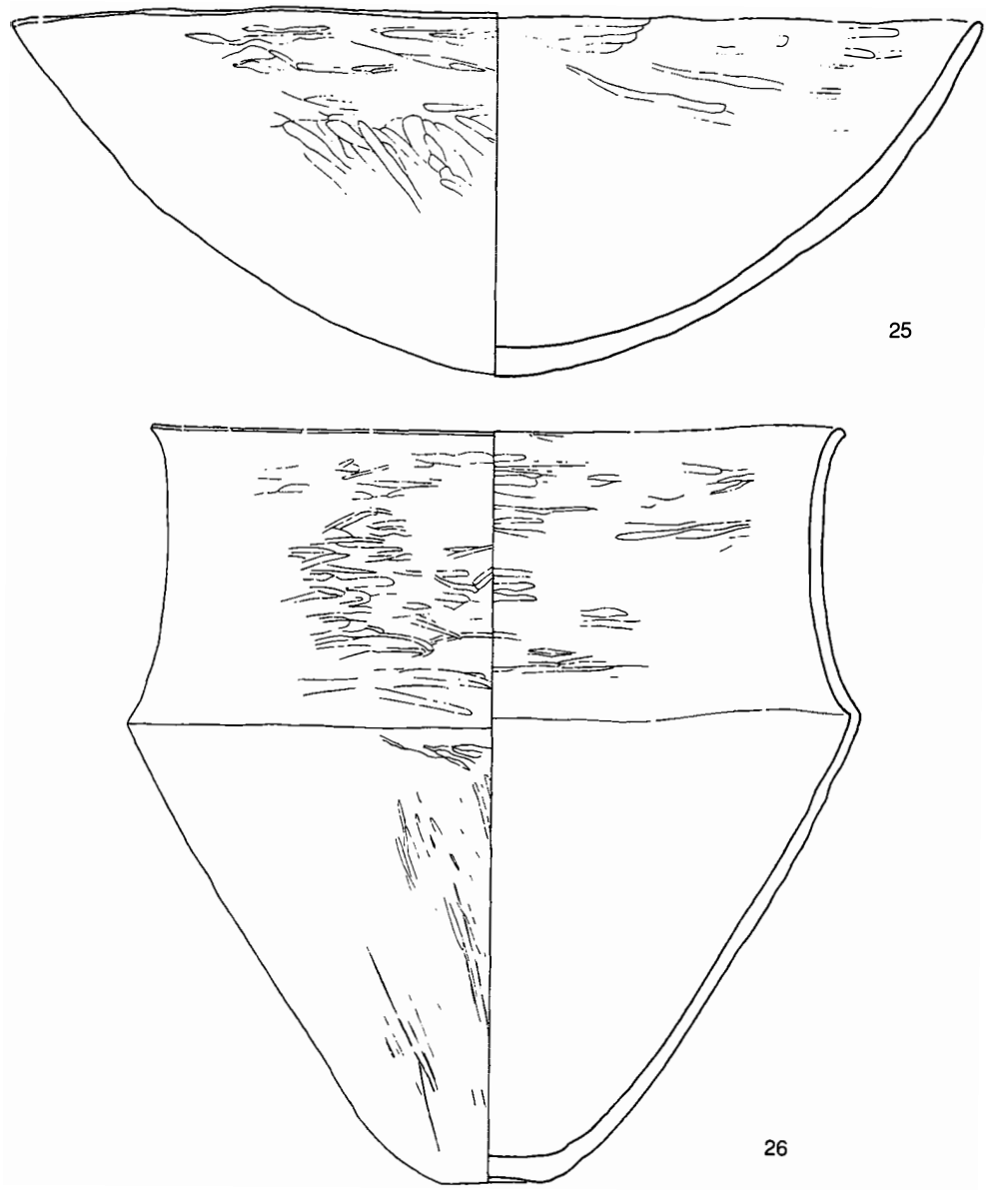


第149図　42−33号埋設土器遺構実測図

土２層)、そしてしまりのないもの（埋土４層）に分けられる。一方、掘り方内の埋土は、黒味が強いしまりのない暗褐色土（埋土３層）である。埋土１層と２層の間に浅鉢が埋没しており浅鉢崩落後、埋土１層が堆積したと推測される。或いは埋土１層の堆積によって浅鉢が押し潰されたのかもしれない。

【遺物】（第150図・図版158）

25は全体の 1 ／ 4 を欠損した浅鉢である。器面調整は主に粗いミガキを施しており、粗製土器の範疇に入ることから、深鉢の一形式とする考えもあるが、本書ではその形態から敢えて浅鉢として取り扱うことにする。特にこれと言った装飾も文様もなく、口縁部から胴部、そして底部へと中華鍋の如き形態をしている。かなり大型の浅鉢で口径は50cmと本遺跡群の当該時期の土器としては最大級の大きさを誇る。なお、底部外面は熱を受けたのか赤変している。**26**はほぼ完形の深鉢である。器面調整は主に横ミガキで、胴部外面は縦ミガキを施している。口縁帯はなく、特に施文された跡はない。口縁部から頸部は弓形に外湾し、肩部はやや強く張り出し、胴部は直線的に底部へと繋がっている。底部はわずかに上げ底になっている。界線はないものの、口唇部は比較的きちんと仕上げられており、全体の形態からも古い様相を呈する土器である。



第150図　42－33号埋設土器出土遺物実測図

42－34号埋設土器

【遺構・埋土】（第151図・図版76）

42区北側に位置する。42－08号住居址内の南側にある。上部を削平されているが、一応掘り方を持つ埋設土器遺構である。掘り方の平面プランは楕円形を呈する。長径は55cm、短径は35cmを測り、遺構検出面から最深部までの深さは15cm以上である。掘り方内には浅鉢が１個埋設されていた。浅鉢は口縁を上に据えられていたと考えられるが、削平のためはっきりしない。削平のため土器片がかなり散逸していたが、それでもある程度は埋設当時の姿を留めている。本埋設土器は前述したように42－08号住居址内にあるが、住居址埋土を掘り込んでおり、42－18号、19号埋設土器同様、住居址に伴うものではない。

埋設土器遺構の埋土は、３層に分けられる。浅鉢内と掘り方内の埋土に分けられ、いずれも暗褐色を基調とするが、浅鉢内にはやや黄色味を帯びたややしまりのあるもの（埋土１層）とやや暗くしまりのないもの(埋土２層)、そして掘り方内には埋土２層に類似したもの（埋土２′層）がある。

【遺物】（第152図・図版159）

27は口縁部１／２とその他２／３を欠損した浅鉢である。器面調整はミガキを施しており、横ミガキと斜めミガキが主である。口縁帯はほぼ直立気味に立ち上がり、欠損部が多いためはっきりしないが、山形突起を有し、凹点を２点施文していたと考えられる。また２条の沈線が巡っている。頸部はやや弓形に外湾し、肩部はやや張り出している。そして胴部はやや丸みを持って張り出しながら底部へ繋がっている。底部は平底である。界線は巡っているが、明瞭な段を形成しているわけではない。

42－43号埋設土器

【遺構・埋土】（第151図・図版77）

42区北東側に位置する。前述した42－21号埋設土器の東側に近接している。掘り方を持つ埋設土器遺構である。トレンチ坑によって掘り方を削平されていたため、掘り方の平面プランははっきりしないが、円形か楕円に近い円形を呈していたと考えられる。長径は45cm、短径ははっきりしないが、30～45cm程を測り、遺構検出面から最深部までの深さは20cmである。掘り方内には深鉢が１個埋設されていた。深鉢は口縁を横にした状態で検出された。このような姿勢で見つかった埋設土器は、本遺跡群においてはほとんど確認されておらず、遺構の性格を判断するうえで重要な要素となろう。底部付近は完全に欠損しているものの、その他の部分は比較的良く残っていた。トレンチ坑や後世の撹乱等はあるが、全体的には埋設当時の姿を留めていると言える。

埋設土器遺構の埋土は、しまりのある灰褐色土の１層のみである。

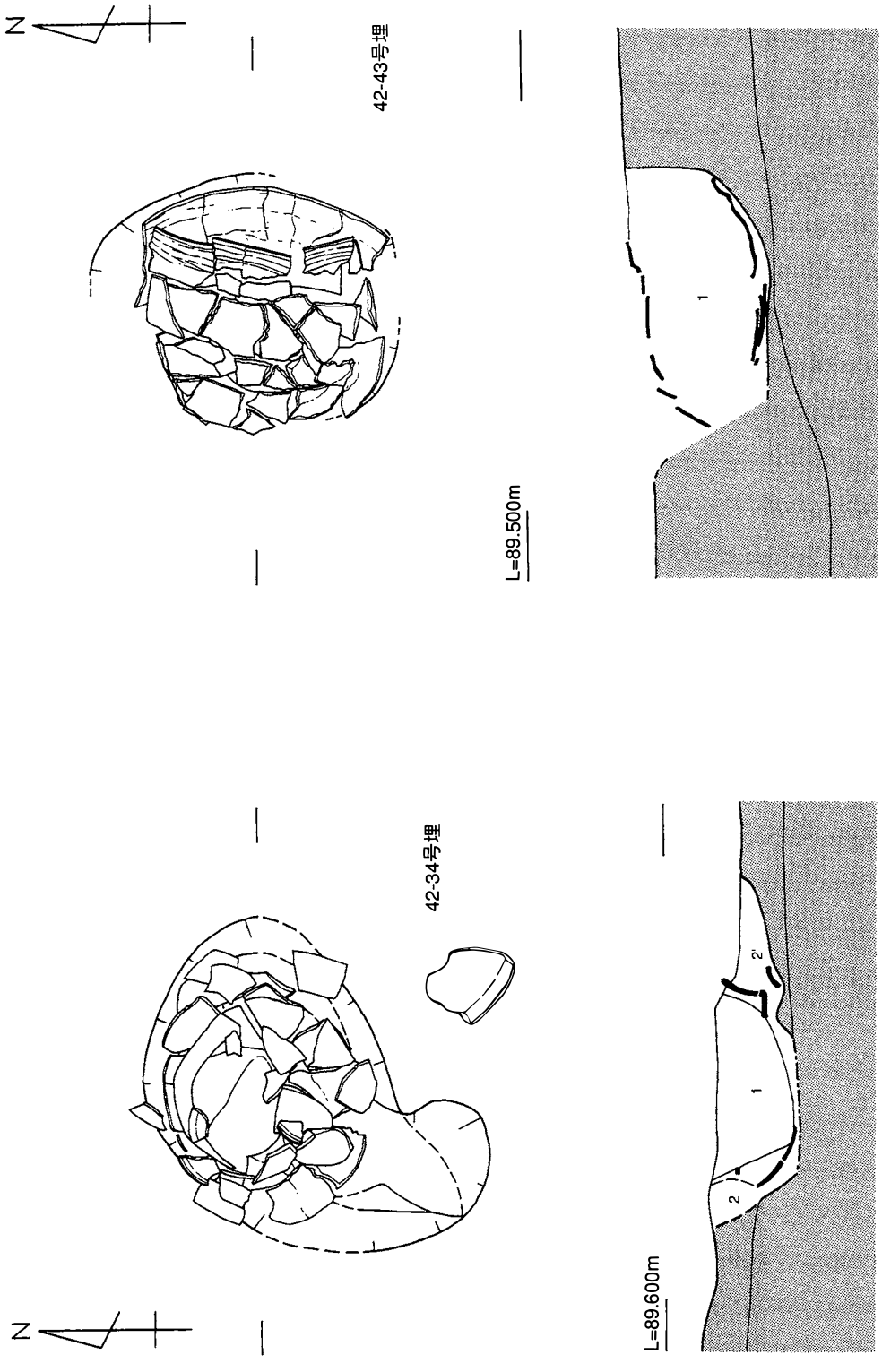
【遺物】（第152図・図版160）

28は胴部の一部と底部を欠損した深鉢である。器面調整は主に横ナデとヘラナデで、ミガキは施されていない。口縁帯はほぼ直立気味に立ち上がり、４条の沈線が巡っている。頸部は緩やかに外湾し、胴部はやや丸みを帯びながら底部へと伸びているが、底部が欠損しているため最終的な形態ははっきりしない。

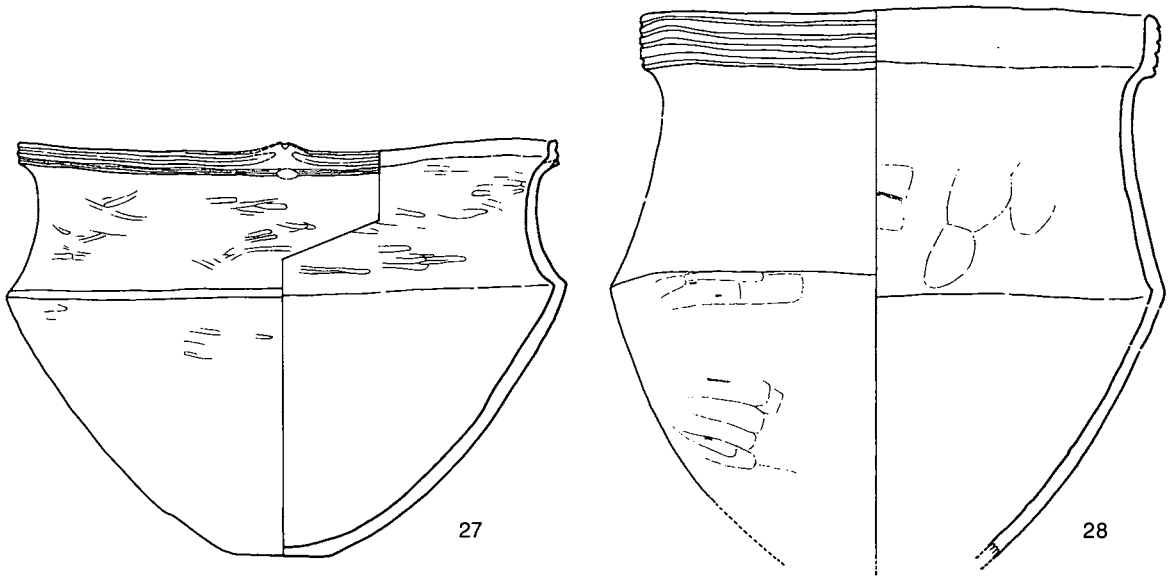
42－57号埋設土器

【遺構・埋土】（第153図・図版78）

43区南側に位置する。周囲には住居址や他の埋設土器等は確認されていない。上部を削平されているが、一応掘り方を持つ埋設土器遺構である。掘り方の平面プランは円形を呈する。径は40cmを測り、遺構検出面から最深部までの深さは10cm以上である。掘り方内には深鉢が 1 個埋設されていた。削平されているが、深鉢は口縁を上にして据えられていたと考えられる。深鉢は胴部以下を欠損しており、半截された形となって



第151図　42－34・43号埋設土器遺構実測図



第152図　42－34・43号埋設土器出土遺物実測図

いた。かなり残存状況が悪く、口縁はほとんど散逸している。

埋設土器遺構の埋土は、焼土、炭化物を含みあまりしまりのない黒褐色土の１層のみである。

【遺物】

掘り方内には、深鉢が１点埋設されていたが、小片のため図示していない。

（３）　その他

42－07号土壙

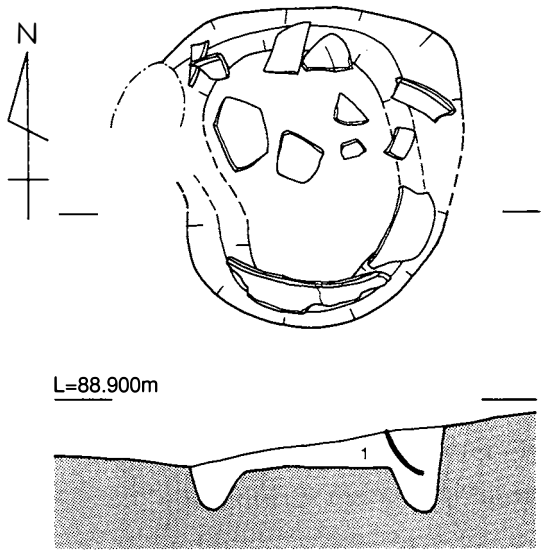
【遺構・埋土】（第154図・図版79）

42区北端に位置する。42－06号住居址と42－08号住居址に間にあり、両者の掘削時に検出された。平面プランは不整形な円形を呈する。長径は3.5m、短径は3.2mを測り、遺構検出面から最深部までの深さは40cmである。土壙内から大量の土器片や石器が確認されている。その性格については当初、その土器片の多さから土器（遺物）捨て場と考えられた。しかし本土壙自体、明確な掘り込みとは言いきれず、自然の落ち込みに遺物が流入した可能性があるため、用途不明の土壙としておく。なお前述したように本土壙は、42－06号と42－08号住居址の間に位置するが、このうち42－06号住居址は本土壙の上にあるため、本土壙の方が古いと考えられる。

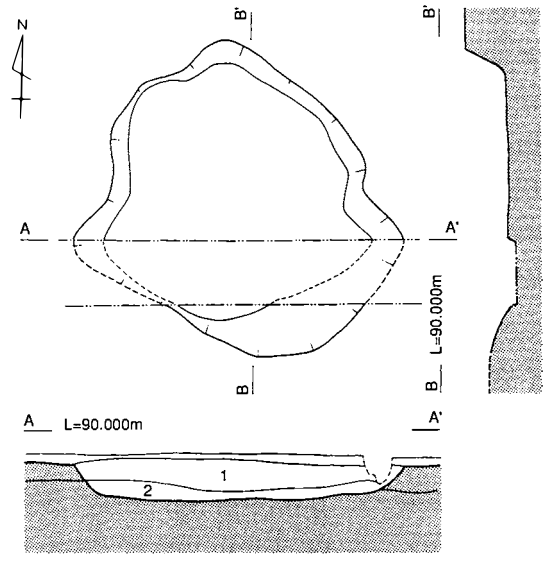
土壙の埋土は、２層に分けられる。いずれも暗褐色を基調とするが、焼土、炭化物を均一に含み、しまりのあるもの（埋土１層）とやや黒めの焼土、炭化物を均一に含み、しまりのあるもの（埋土２層）に分けられる。遺物は埋土１層に多く含まれている。

【遺物】（第156・157図）

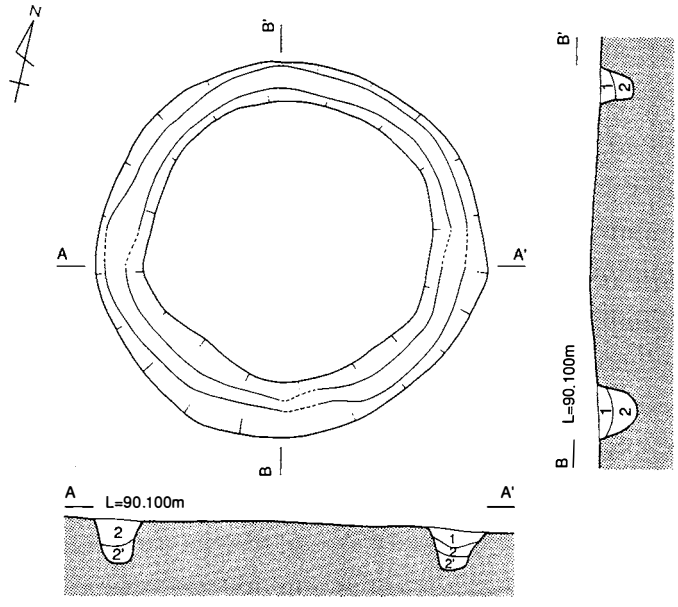
本土壙からは、縄文土器と石器の他に玉類が出土している。前述したように縄文土器を始め多くの遺物が出土している。破片資料が大半であるが、中には完形に近いものもあり、ある程度一括した資料として扱える可能性がある。今回はそれらの中から縄文土器を中心に図示している。



第153図　42－57号埋設土器遺構実測図



第154図　42－07号土壙遺構実測図



第155図　42－47号円形周溝遺構実測図

42－47号円形周溝

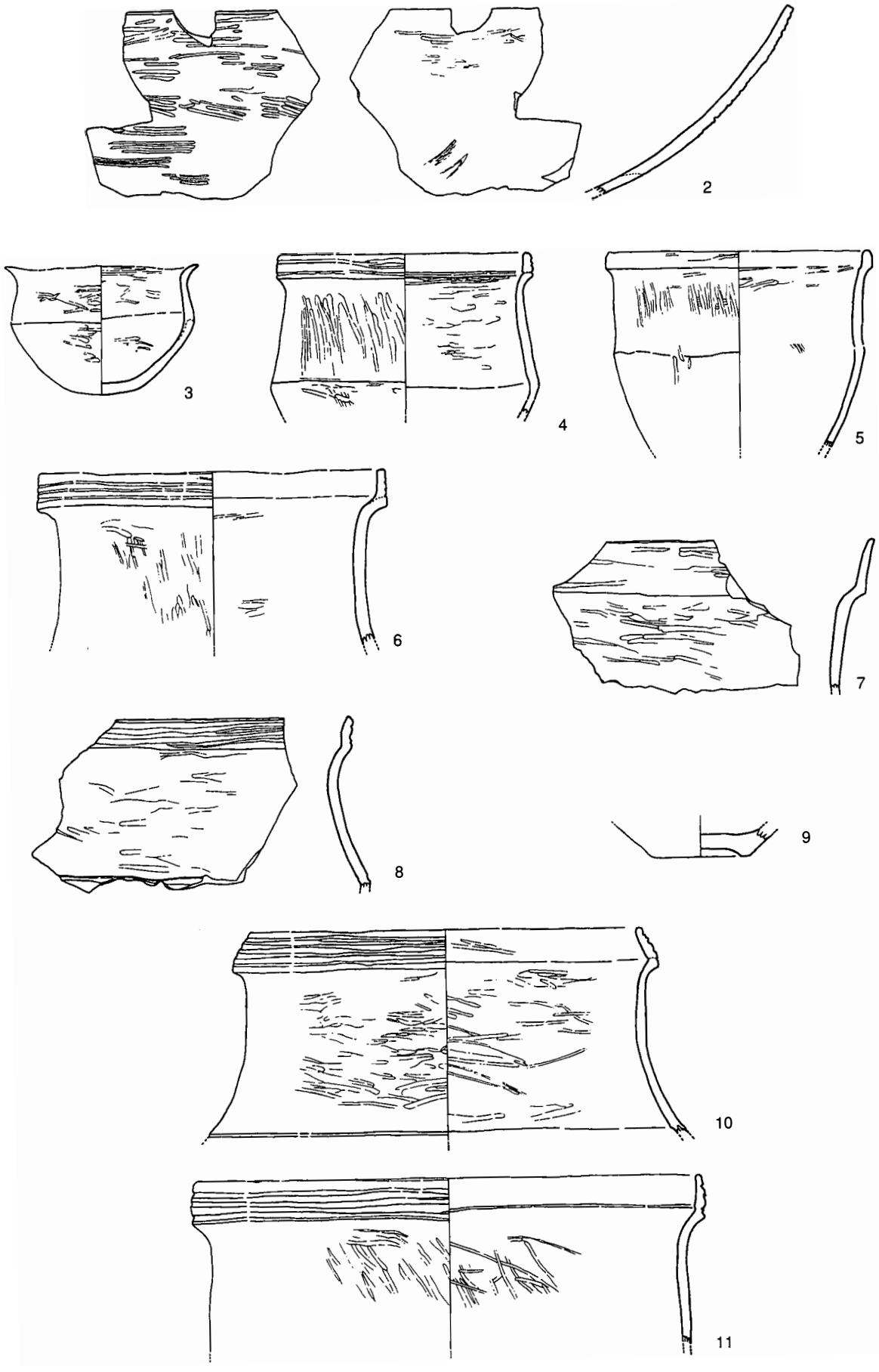
【遺構・埋土】（第155図・図版80）

42区南東端に位置する。周囲は削平されているが、平面プランは円形を呈する。長径は4.2m、短径は4.0mを測り、周溝の幅は0.6ｍ、遺構検出面から最深部までの深さは50cmである。焼土や炭化物は検出されず、ピット等の伴う遺構も見られなかった。

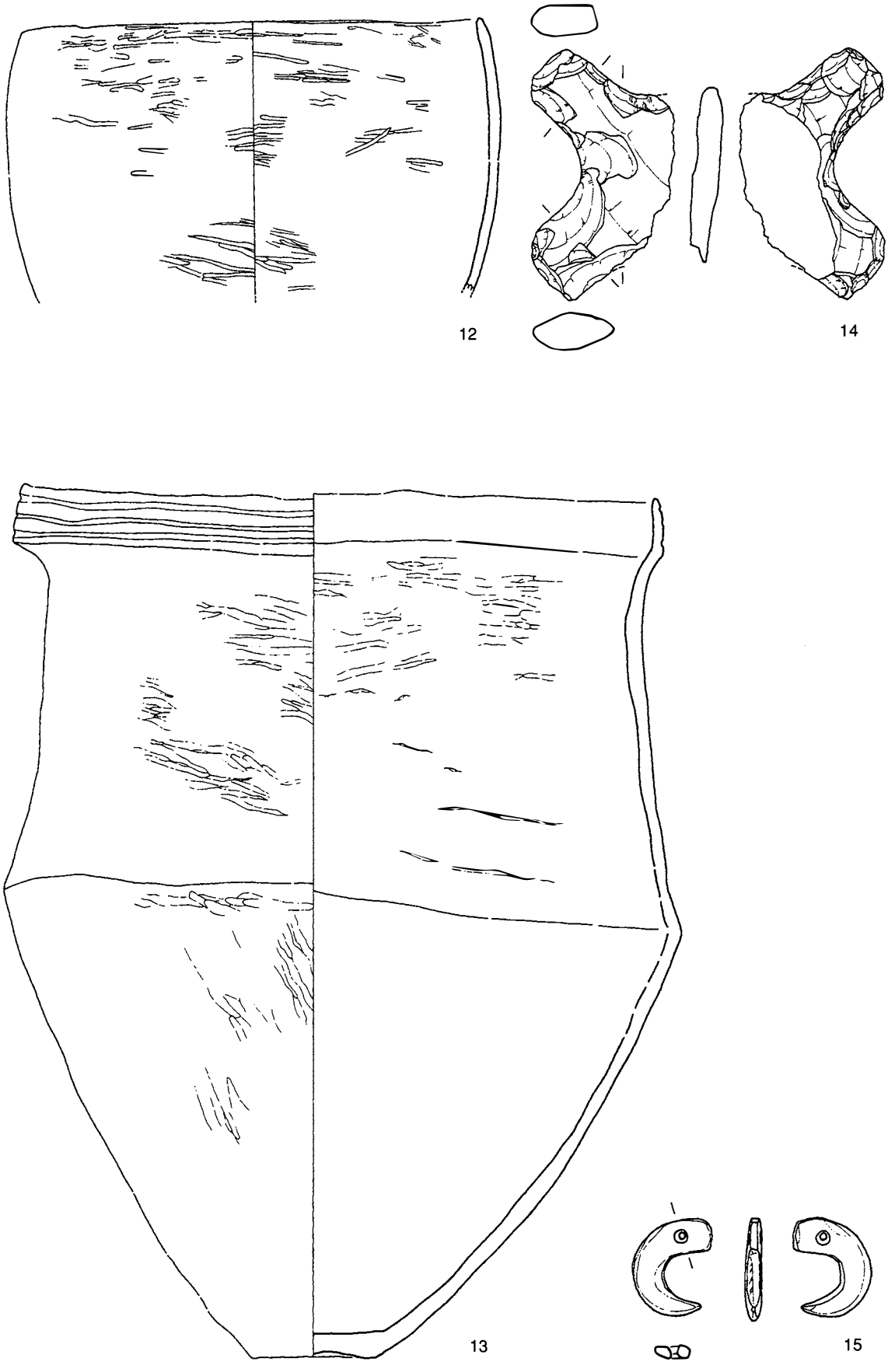
円形周溝遺構の埋土は、基本的に２層に分けられる。どの埋土も暗褐色を基調とするが、黒味が強く粘質、しまりのないもの（埋土１層）とやや明るめの粘質を持ちしまりのあるもの（埋土２層）で区別される。さらに埋土２層は、特に粘質を持ちしまりのある部分（埋土2´層）で細分できる。

【遺物】

本円形周溝からは、縄文土器と石器が出土しているが、いずれも小破片であり、図示していない。



第156図　42－07号土壙出土遺物実測図1



第157図　42－07号土壙出土遺物実測図２

13　45区

【概要】（第158・159図・図版11）

石の本遺跡群の北側に位置する調査区である。北西から南東に向かって傾斜しており、遺跡群の中心を通る丘陵の頂部に近いせいか、やや傾斜が急になっている。ただ調査区の北西部は削平され、本来の傾斜に比べて緩やかになっている。地形的には東に隣接する38区北に似ている。標高92.6ｍから94.0ｍにかけて位置している。

遺構としては、竪穴住居址５軒、埋設土器遺構２基が確認されている。いずれも調査区南側に一列に並ぶように分布しているが、この遺構配置そのものに特に意味はないと考えられる。方形プランの住居址が多いのが特徴的である。また住居に伴っている掘り方を有する合せ口の埋設土器がある。39区でも類似した事例が確認されており、埋設土器のあり方を考えるうえで重要な事例と言える。また使用頻度の高い炉跡が住居址に伴って検出されている。本遺跡群では、明確な掘り込みを持つ炉跡が少ないため、炉のあり方等を考える上で欠かせない事例である。遺構検出面はⅢａ層からⅢｂ層にかけてで、主にⅢｂ層である。出土遺物は縄文土器、石器、玉類、土製品が出土している。全体的に出土量はさほど多いとは言えず、地形的な問題がその原因と考えられる。縄文土器は深鉢、浅鉢が主でほとんどが破片資料である。石器は打製石斧、二次加工のある剥片、敲石・磨石が多く、磨製石斧、石鏃、石匙、楔形石器、石錘、石皿等も見られる。玉類は勾玉、管玉があり、石製と土製がある。土製品は形状不明なものが多い。また焼成粘土塊の出土も確認されている。

（１）　竪穴住居址

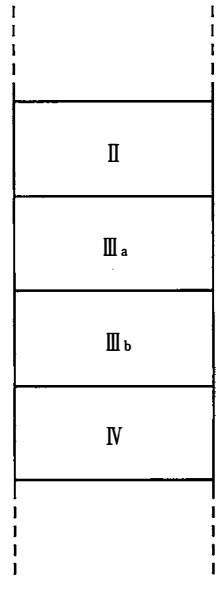
45－05号住居址

【遺構・埋土】（第160図・図版81）

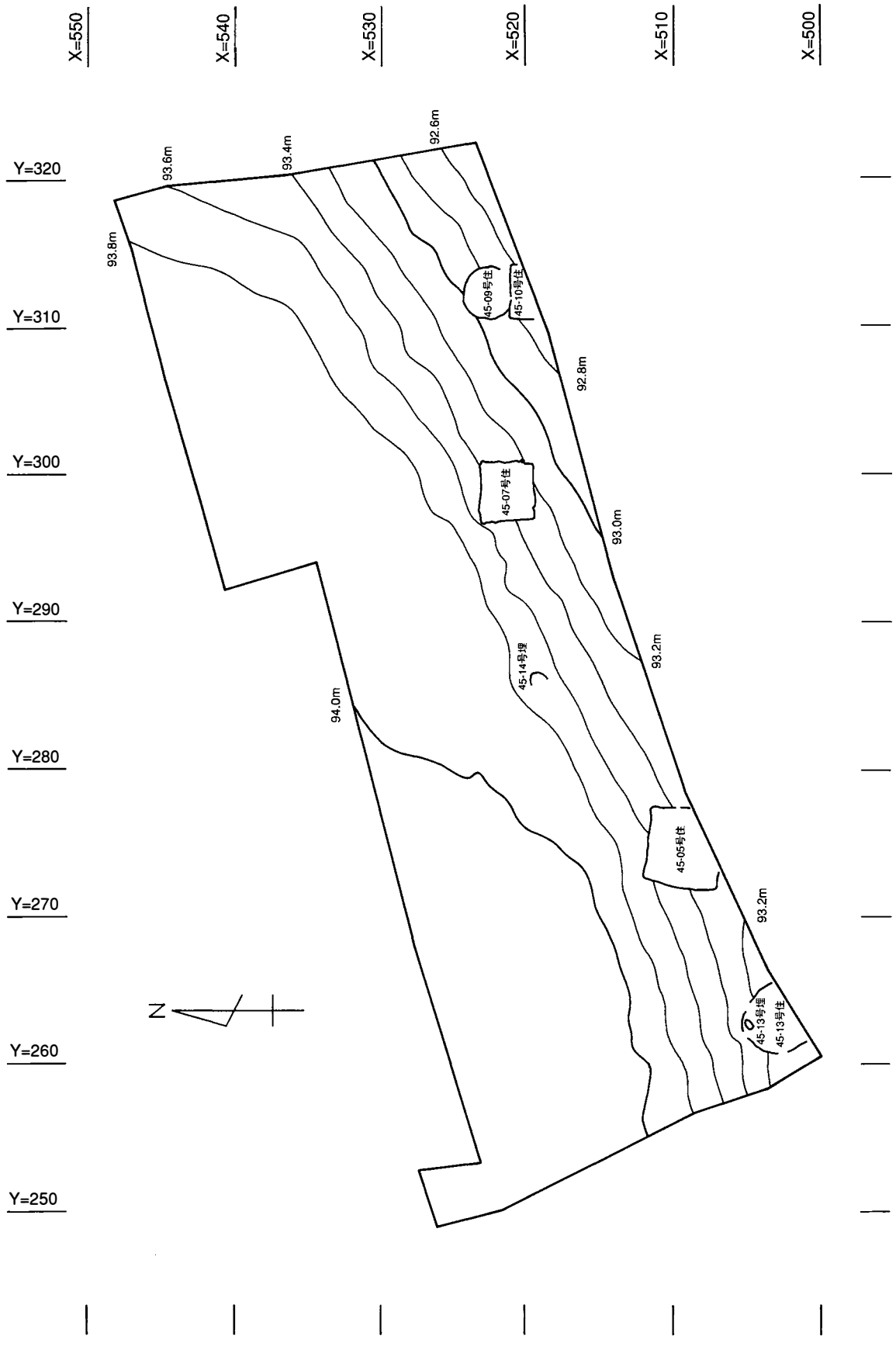
調査区の南端に位置し、南へ傾斜する斜面上に造られている。南東部を削平されているが、平面プランは方形を呈している。本遺跡群において方形を呈する住居址はあまり例がなく、本調査区に方形住居址が多く存在することは重要な意味をもつと考えられる。長辺は5.0ｍ、短辺は4.9ｍを測り、遺構検出面から床面までの深さは30cmである。柱穴は計12個検出したが、削平されていることを考えると、本来もっと多かったと推測される。また柱穴は円を描くように配されており、住居の平面プランと形態を異とする。中央には80×60cmの炉跡が1基確認された。硬化面は見つからなかった。

住居址の埋土は、４層に分けられる。粘質をあまり持たずしまりのない黒褐色シルト（埋土１層）と粘質を持ちしまりのない黄褐色シルト（埋土２層）は遺構内全面に堆積しているが、粘質を強く持ちしまりのある黒褐色シルト（埋土３層）と粘質をあまり持たずしまりのある黄褐色シルト（埋土４層）は住居址の隅に三角堆積している。

なお、本住居址の埋土から多量の炭化物を選別している。それらの中には種子とおぼしきものが含まれていた。詳細は「第Ⅳ章　自然化学分析」の項に譲る。



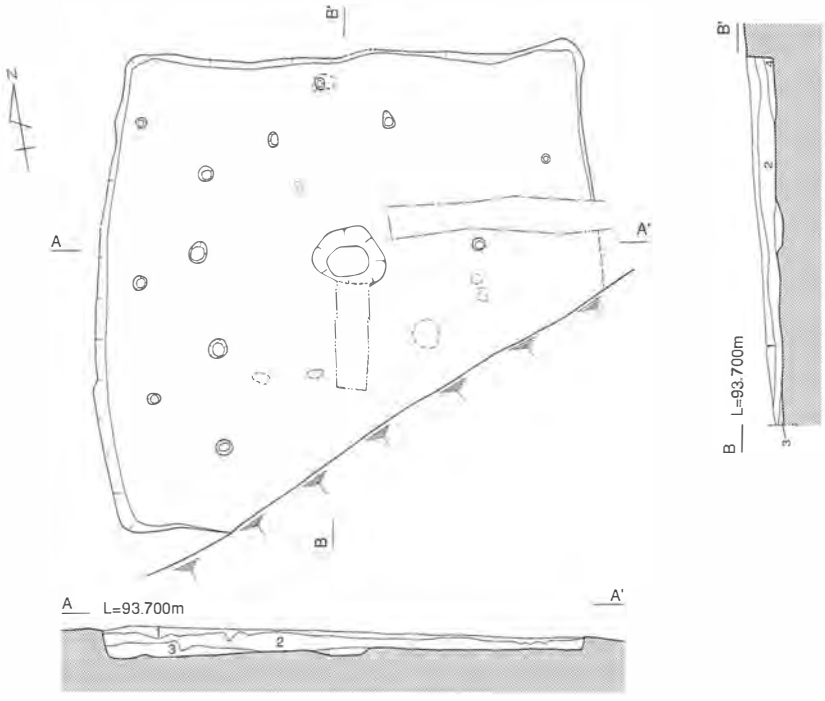
第158図　45区基本層序図



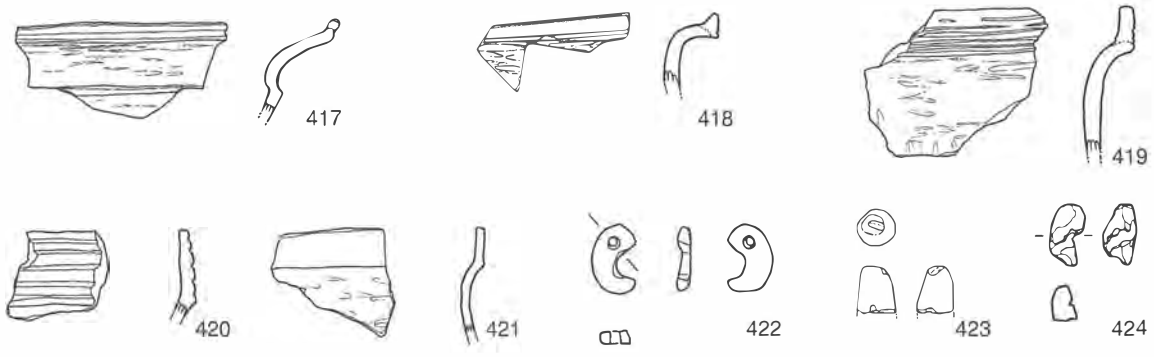
第159図　45区遺構配置図　S：1/400

【遺物】（第161図）

本住居址からは、縄文土器と石器の他に玉類と土製品、焼成粘土塊が出土している。縄文土器は破片のみで、良好な資料はほとんどない。その中から浅鉢２点、深鉢３点を図示している。玉類・土製品・焼成粘土塊はそれぞれ１点ずつ図示している。



第160図　45－05号住居址遺構実測図



第161図　45－05号住居址出土遺物実測図

45－07号住居址

【遺構・埋土】（第162図・図版82）

調査区南側に位置する。平面プランは方形を呈している。長辺は3.8ｍ、短辺は3.6ｍを測る。遺構検出面から床面までの深さは30cmである。柱穴、炉跡等は確認されなかった。また硬化面も見つからなかった。

住居址の埋土は、３層に分けられる。粘質をあまり持たずややしまりのある暗褐色シルト（埋土１層）と粘質を持ちしまりのある明褐色シルト（埋土２層）、埋土２層より鈍い明褐色シルト（埋土３層）であるが、埋土３層は壁際に三角堆積した層である。

【遺物】

本住居址からは、縄文土器が出土している。ただし小破片のみであり、図示していない。

45－09号住居址

【遺構・埋土】（第162図・図版83）

調査区の南東部に位置する。南側を削平されているが、平面プランは円形を呈している。長径は3.5ｍ、短径は3.4ｍを測る。遺構検出面から床面までの深さは24cmである。複数のピットが確認されているが、柱穴は14個あったと考えられる。中央には80×60cmの炉跡とおぼしき焼土の落ち込みが検出された。硬化面は確認されなかった。後述する45－10号住居址とは切り合っており、その新旧関係は土層断面等から45－09号の方が古いと考えられる。

住居址の埋土は、３層に分けられる。粘質をあまり持たずしまりがある黒褐色シルト（埋土１層）と粘質を持ちしまりのある黄褐色シルト（埋土２層）、そして埋土２層より粘質を持つ黄褐色シルト（埋土３層）であるが、埋土３層は壁際に三角堆積している。

【遺物】（第163図）

本住居址からは、縄文土器が出土している。住居の南側で深鉢が口縁を下にして１個体見つかっている。胴部以下を欠損しているが、他は小破片のみであるためこの１点を図示しておく。

45－10号住居址

【遺構・埋土】（第162図・図版83）

調査区南東端部に位置し、約２／３が調査区外に伸びている。そのため平面プランもいまいちはっきりしないが、残存状況から方形を呈していたと推測される。規模についても45－09号住居址に面する部分で3.6ｍを数える他は不明である。遺構検出面から床面までの深さは26cmである。柱穴は北側の壁に沿って５個確認できた。炉跡等の存在は不明である。前述したように45－09号住居址を切っている。

住居址の埋土は、３層に分けられる。粘質を持たずしまりのない黒褐色シルト（埋土１層）と粘質を少し持ちしまりのない暗褐色シルト（埋土２層）、粘質を持ちしまりのある暗褐色土（埋土３層）であるが、埋土３層は壁際に三角堆積している。

【遺物】

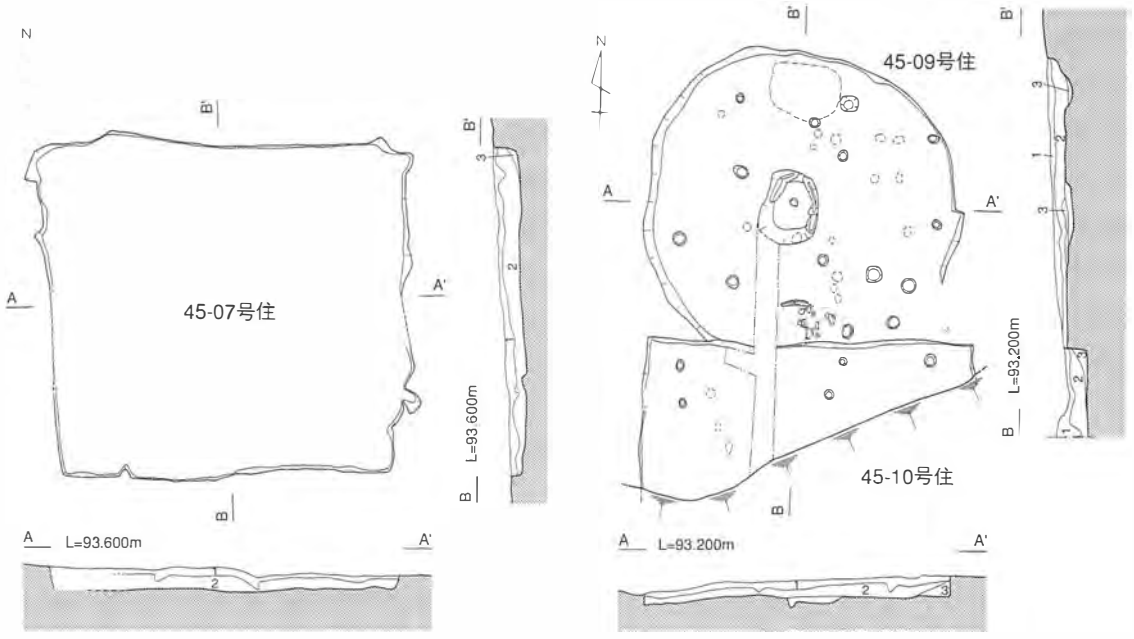
本住居址からは、遺物は出土していない。

45－13号住居址

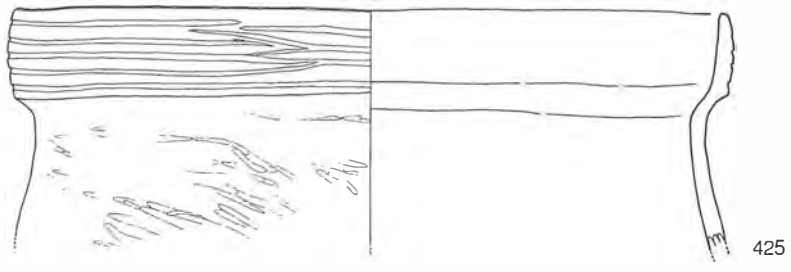
【遺構・埋土】（第164図・図版84）

調査区南西端部に位置する。約１／３が調査区外に伸びている。そのため平面プランもいまいちはっきりしないが、残存状況から円形を呈していたと推測される。長径は4.6ｍ、短径は3.2ｍ以上を測り、遺構検出面から床面までの深さは40cmである。すべてを検出できていないが、調査時には５個の柱穴を確認した。他にも複数ピットを検出したが、住居址に伴うかどうか不明である。調査区南側の断面に半截された形で炉跡が検出された。長さは約80cmで多量の焼土が見られ、炉跡壁面は熱により硬化していた。本遺跡群において数少ない、しっかりした炉跡と言える。また住居址内の北端には埋設土器（45－13号埋設土器）が埋められており、遺構の切り合い関係から45－13号埋設土器は本住居址に伴うと考えられる。

住居址の埋土は、基本的に３層に分けられる。やや黒味を帯び、粘質を持たず、しまりのない暗褐色土



第162図　45－07・09・10号住居址遺構実測図



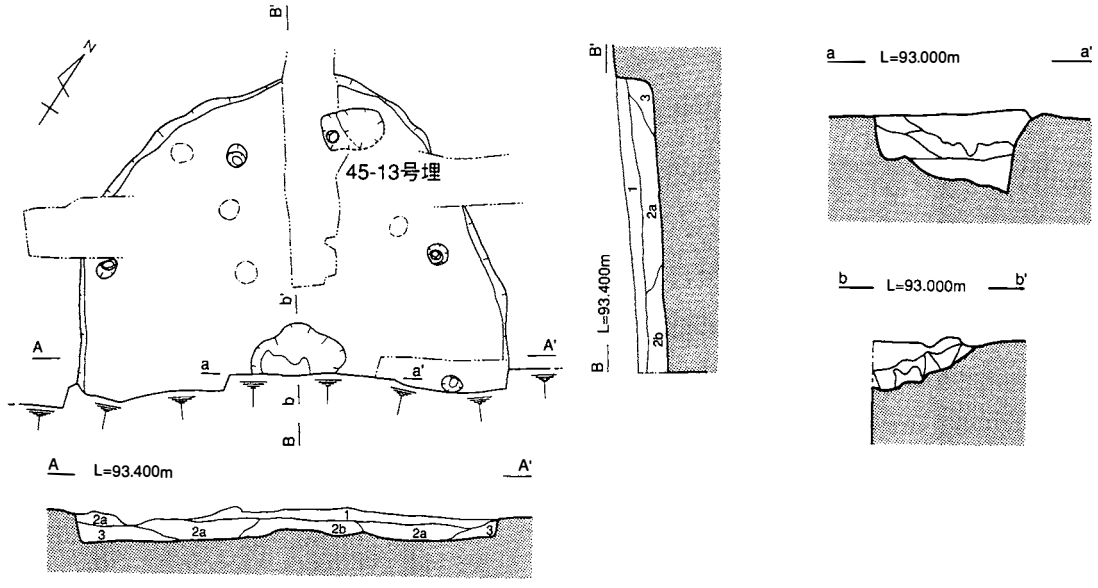
第163図　45－09号住居址出土遺物実測図

（埋土１層）と埋土１層より明るく、しまりの強い暗褐色土（埋土２層）、埋土２層より暗くニガ土を多量に含む暗褐色土（埋土３層）であるが、埋土２層は焼土・炭化物の含み具合で埋土２ａ層、埋土２ｂ層に分層できる。ちなみに埋土２ａ層は炭化物を含み、焼土を若干含むのに対し、埋土２ｂ層は焼土を多量に含んでいる。また埋土１層には炭化物が多く含まれる。

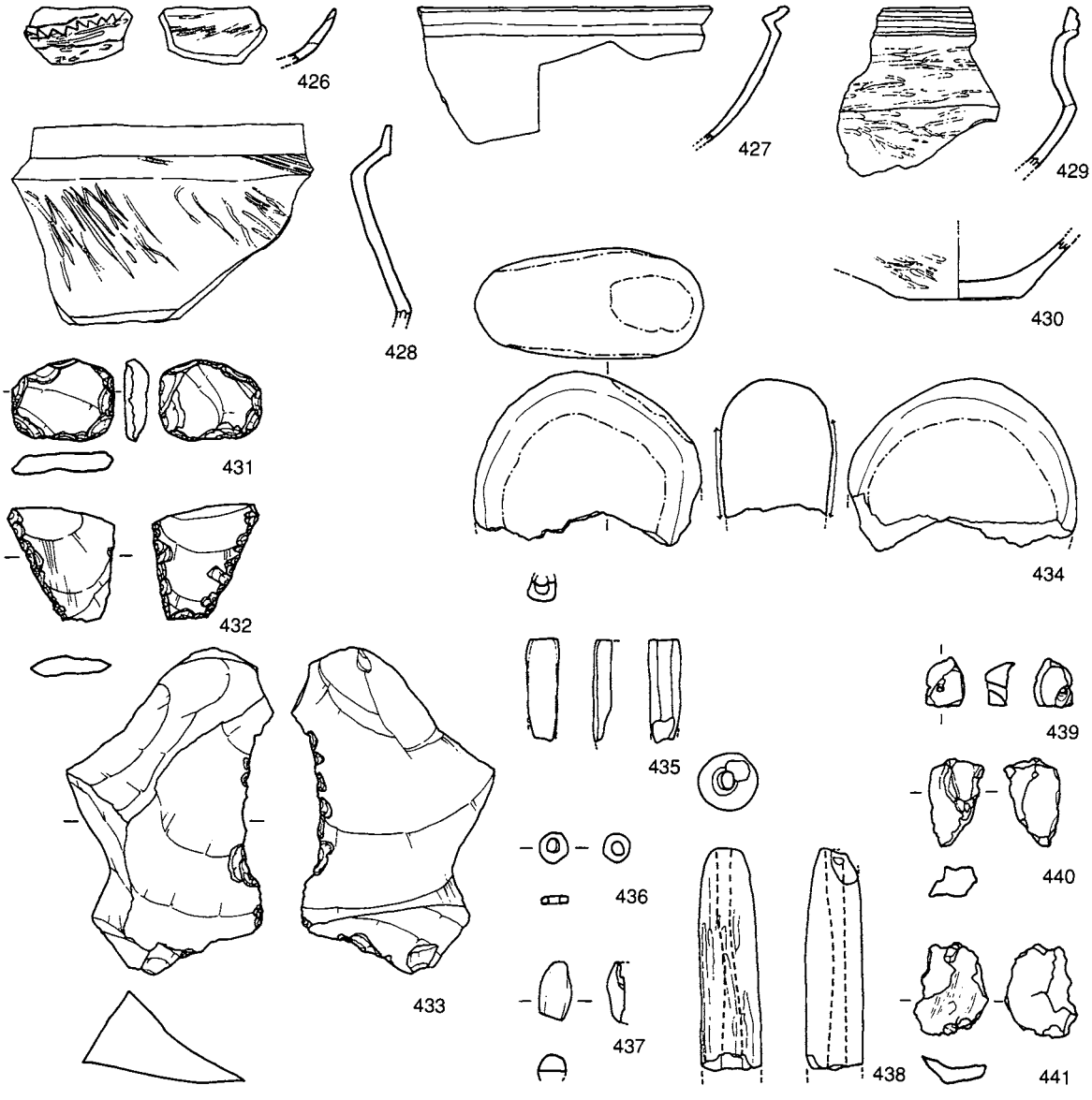
なお、本住居址から45－05号住居址同様、多量の炭化物を選別している。その数は、45－05号住居址よりはるかに多く、大半は埋土１・２層中より出土したものである。詳細は「第Ⅳ章　自然化学分析」の項に譲る。

【遺物】（第165図・図版131・132）

本住居址からは、縄文土器と石器の他に玉類、土製品、焼成粘土塊が出土している。縄文土器は破片資料のみで量的にもあまり多くない。その中から浅鉢３点、深鉢２点を図示している。石器は打製石斧、石匙、二次加工のある剥片、敲石・磨石等が出ており、それらの中から幾つか選んで図示している。玉類は管玉が４点出ており、石製と土製がある。土製品は形状不明で焼成粘土塊かもしれない。焼成粘土塊は多数出土しており、特徴的なものを図示している。



第164図　45－13号住居址遺構実測図



第165図　45－13号住居址出土遺物実測図

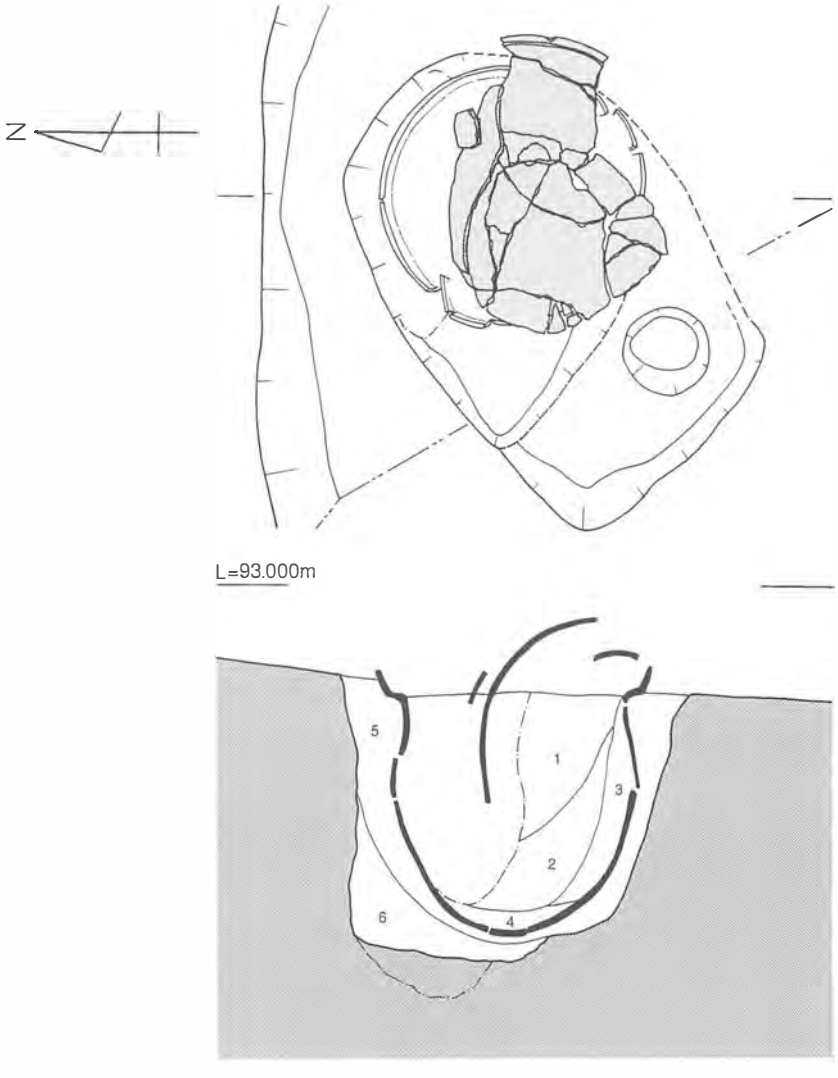
（２）　埋設土器遺構

45－13号埋設土器

【遺構・埋土】（第166図・図版85）

調査区西側に位置する。45－13号住居址内の北端にあり、掘り方を持つ埋設土器遺構である。掘り方は、やや不整形な台形を呈する。長軸は55cm、短軸は43cmを測り、遺構検出面から最深部までの深さは35cmである。掘り方内には、合せ口状に深鉢と浅鉢がセットで検出された。検出時、浅鉢は深鉢内に破損した状態で落ち込んでいた。主体となる深鉢は、口縁を上にほぼ垂直に据えられていた。浅鉢は破損し、深鉢は底部を欠損しているが、基本的に土器片の散逸は少なく、埋設当時の姿を留めていると考えられる。45－13号住居址の項で述べたように埋土の切り合いから、本埋設土器が住居址に伴うものと推測される。

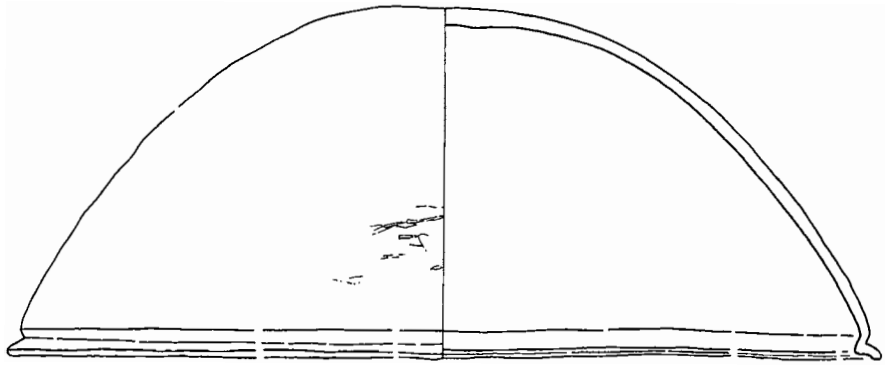
埋設土器遺構の埋土は、深鉢内の埋土と掘り方内の埋土に分けられる。浅鉢が落ち込んだ箇所から、後世の撹乱に伴う流入土が入り込んでおり、残存状況が良くないが、４層に分層できた。あまり粘質を持たずしまりのある埋土１層、埋土１層より軟らかい埋土２層、埋土１・２層よりしまりのない埋土３層、そして粘質を持ちしまりのある埋土４層である。掘り方内の埋土は、粘質を持たずややしまりのある埋土５層と埋土５層に比べしまりのない埋土６層の２層に分けられ、埋土６層は深鉢を安定させるために貼り付けられたと考えられる。

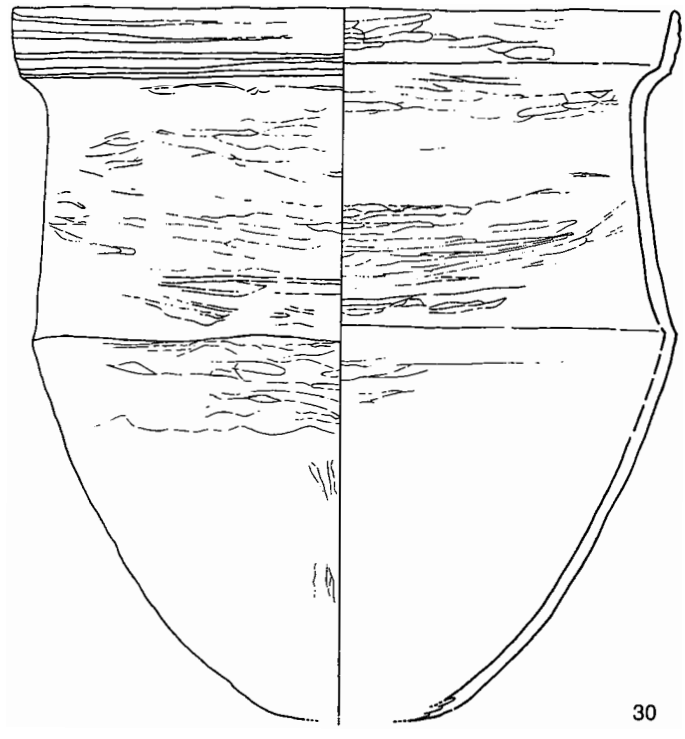


第166図　45－13号埋設土器遺構実測図

【遺物】（第167図・図版161）

29は口縁部１／２とその他１／３を欠損した浅鉢である。かなり大型の浅鉢で合せ口状の埋設土器遺構の中では最大である。口縁帯はほとんど退化し消失しているものの、かろうじてその名残が見られる。大型ながらも器面調整は内外面とも横ミガキが主で、一応精製浅鉢としての体裁は保っている。しかし横ミガキと言ってもやはり粗雑な感は免れない。**30**は深鉢で胴部の一部と底部の大半を欠損しているが、それ以外は良く残っている。器面調整は横ミガキと横ナデが主で、内外面ともよく整えられている。口縁帯はやや外反しており、横ナデによって沈線が部分的に消えている。頸部から肩部にかけては直線的になっており、それに相反するように胴部は下膨れ気味に丸みを帯びている。底部は欠損しているが、破損面の状態から埋設時には欠損していたと考えられる。



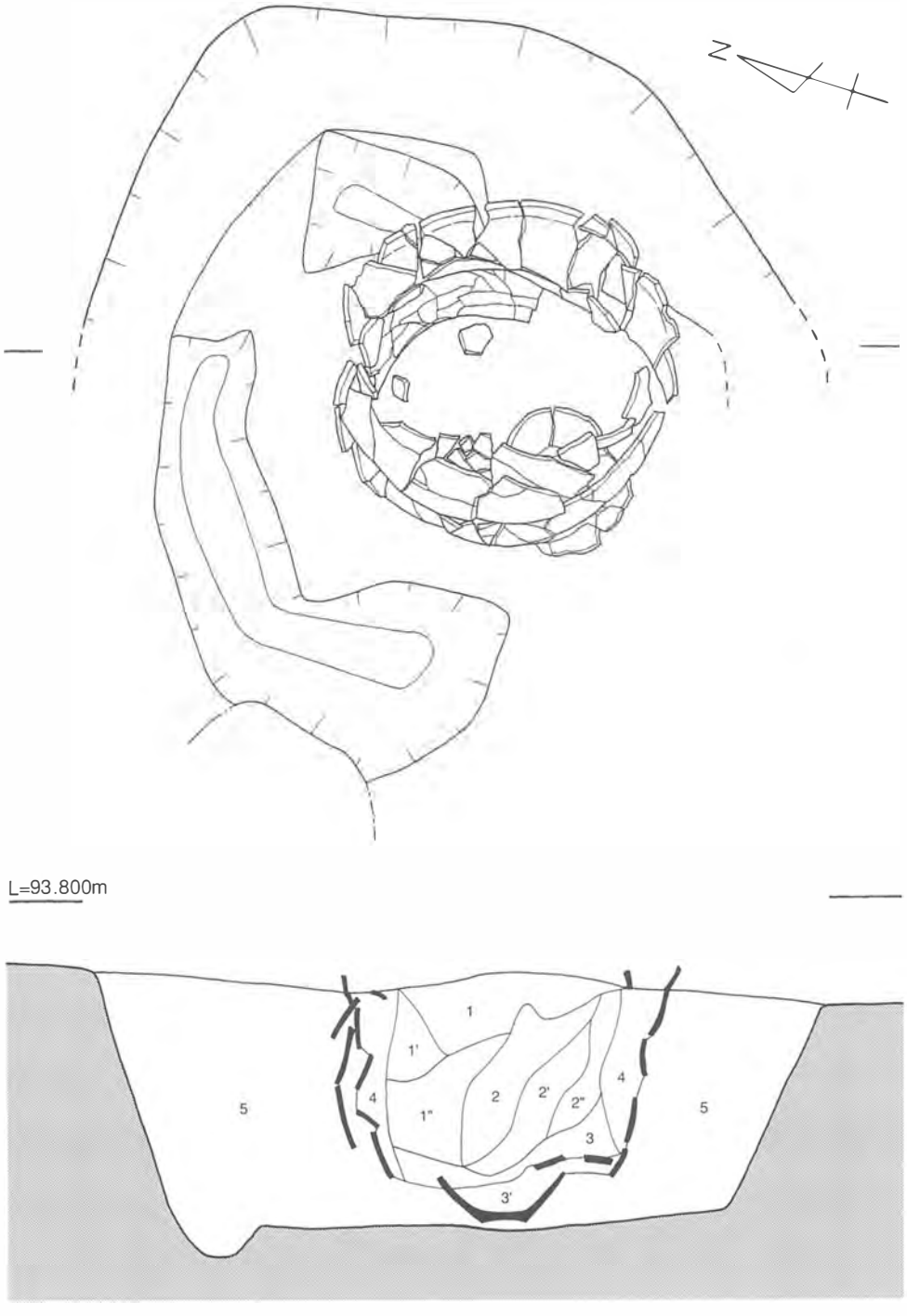


第167図　45－13号埋設土器出土遺物実測図

45－14号埋設土器

【遺構・埋土】（第168図・図版86）

調査区中央に位置する。調査時、掘り方を確認されず、土器周辺を半分掘削して精査後、掘り方らしき土壙を確認した。結果として掘り方を半截してしまったため、掘り方の平面プランは定かではないが、残存状況から円形を呈すると推測される。その規模も長径は100cm以上、短径が100cmを測り、遺構検出面から最深部までの深さは40cmである。掘り方内には、深鉢が口縁を多少欠損した形で検出された。やや潰れたような形ではあるが、口縁を上にほぼ垂直に据えられていた。周囲には伴うような遺構は確認されなかった。

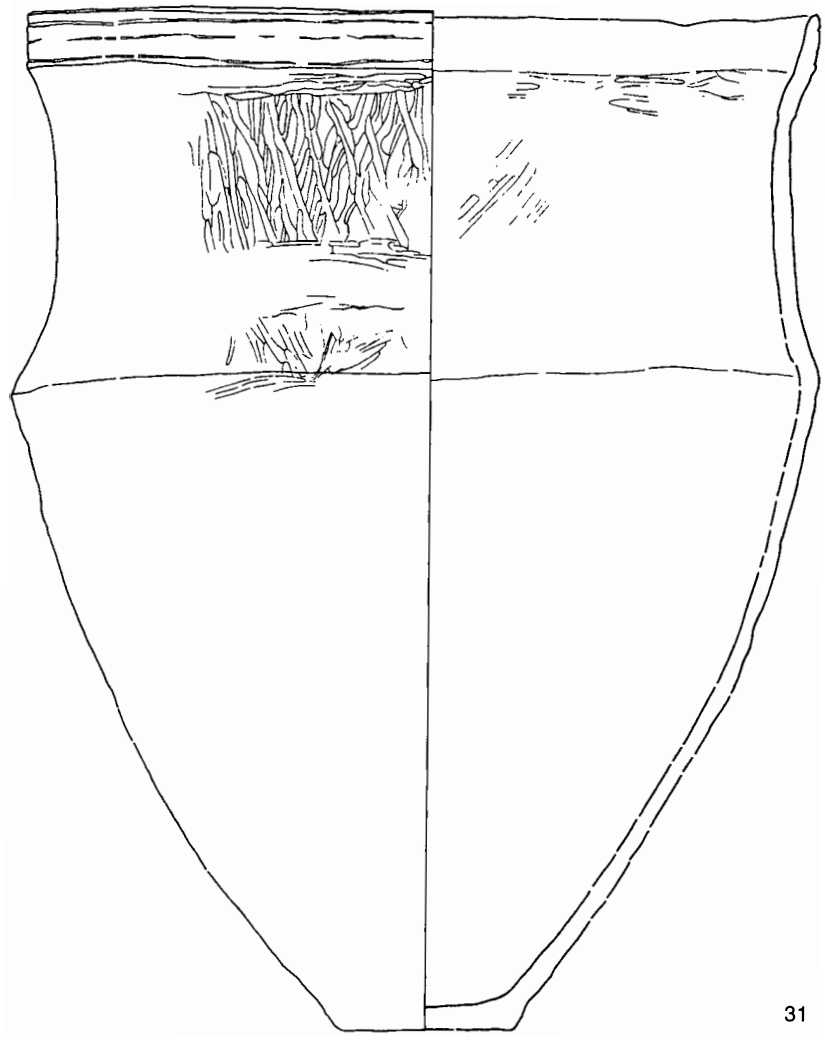


第168図　45－14号埋設土器遺構実測図

埋設土器遺構の埋土は、深鉢内の埋土と掘り方内の埋土に分けられる。深鉢内の埋土は、細かな土質変化を考慮すると10層近くに分けられるが、大まかに分けると 4 層に分けられる。全体的に粘質をあまり持たずしまりのあまりない暗褐色シルト（埋土 1 層)、粘質をやや持ちしまりのある、明褐色シルトのブロックを含む褐色シルト（埋土 2 層)、粘質をあまり持たずややしまりのある暗褐色シルト（埋土 3 層）と粘質をあまり持たずしまりのない暗褐色シルト（埋土 4 層）である。一方、掘り方内の埋土は、粘質を持ちしまりのある褐色シルト（埋土５層）である。埋土１・２層は３層に、埋土３層は２層に細分される。

【遺物】（第169図・図版162）

31は部分的に欠損している深鉢である。特に胴部下半の損壊が激しく、本来の半分も残っていない。胴部下半への過剰な圧力がその原因ではないか。器面調整はミガキが主で、胴部は事前にヘラナデを施している。また貝殻条痕らしき痕跡もあり、こうした器面調整も施していたと考えられる。口縁帯は直立気味で、沈線はミガキによって消えている部分もあるが一応 3 条巡っている。頸部から肩部は部分的にやや外湾しているものの、全体的には起伏は少ない。肩部には界線はなく、底部は平底でやや胴部から突出しており、肉厚になっている。



第169図　45−14号埋設土器出土遺物実測図

14　46区

【概要】（第170・171図）

石の本遺跡群の中央よりやや北西側に位置する調査区である。北から南に向かって傾斜している。北側は造成によって削平されており、やや平坦になっているが全体的に傾斜はきつい。標高88.4ｍから90.0ｍにかけて位置している。谷部のつけ根付近にあり、西側には小山山の山麓が広がっている。

遺構としては、竪穴住居址14軒、埋設土器遺構４基の他に円形周溝遺構１基が検出されている。42区程ではないが、当該時期の遺構が集中しており、遺跡の中心部の一つと言える。遺構の分布は調査区の中央に集中しており、一部東側にも伸びている。遺構検出面はⅡc層からⅢa層にかけてである。出土遺物は縄文土器、石器の他に玉類、土製品が出土している。遺構が集中しているせいか、あるいは谷部のつけ根付近にあり、包含層遺物が多いせいか定かではないが、遺物の出土量は42区に次ぐ量である。縄文土器は浅鉢、深鉢、鉢の他に注口土器もあり、そのほとんどが破片資料である。遺構内遺物は比較的接合しているが、包含層遺物は量の割にあまり接合していない。石器は打製石斧、敲石・磨石、二次加工のある剥片が多く、磨製石斧、石鏃がそれに次いで多く、その他十字形石器、石匙、スクレイパー、楔形石器、石錘、石庖丁形石器、石皿、砥石等も見られる。玉類は勾玉、管玉、丸玉があり、石製と土製がある。土製品は円柱形土製品やしゃもじ形の土製品があり、遺構内出土が目立つ。また焼成粘土塊の出土も確認されている。

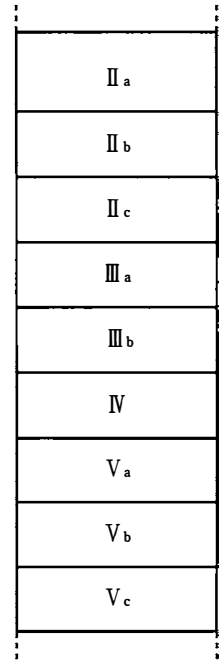
（１）　竪穴住居址

46－02号住居址

【遺構・埋土】（第172図・図版87）

調査区北側に位置する。平面プランはやや楕円形に近いが円形を呈している。長径は6.4ｍ、短径は5.5ｍを測り、遺構検出面から床面までの深さは15cmである。柱穴は５個確認された。炉跡はなく、住居址に伴うような他のピットも検出されなかった。また硬化面も確認されなかった。本住居址は後述する46－03号住居址と切り合っており、その新旧関係は土層断面等から46－03号住居址の方が古いと考えられる。

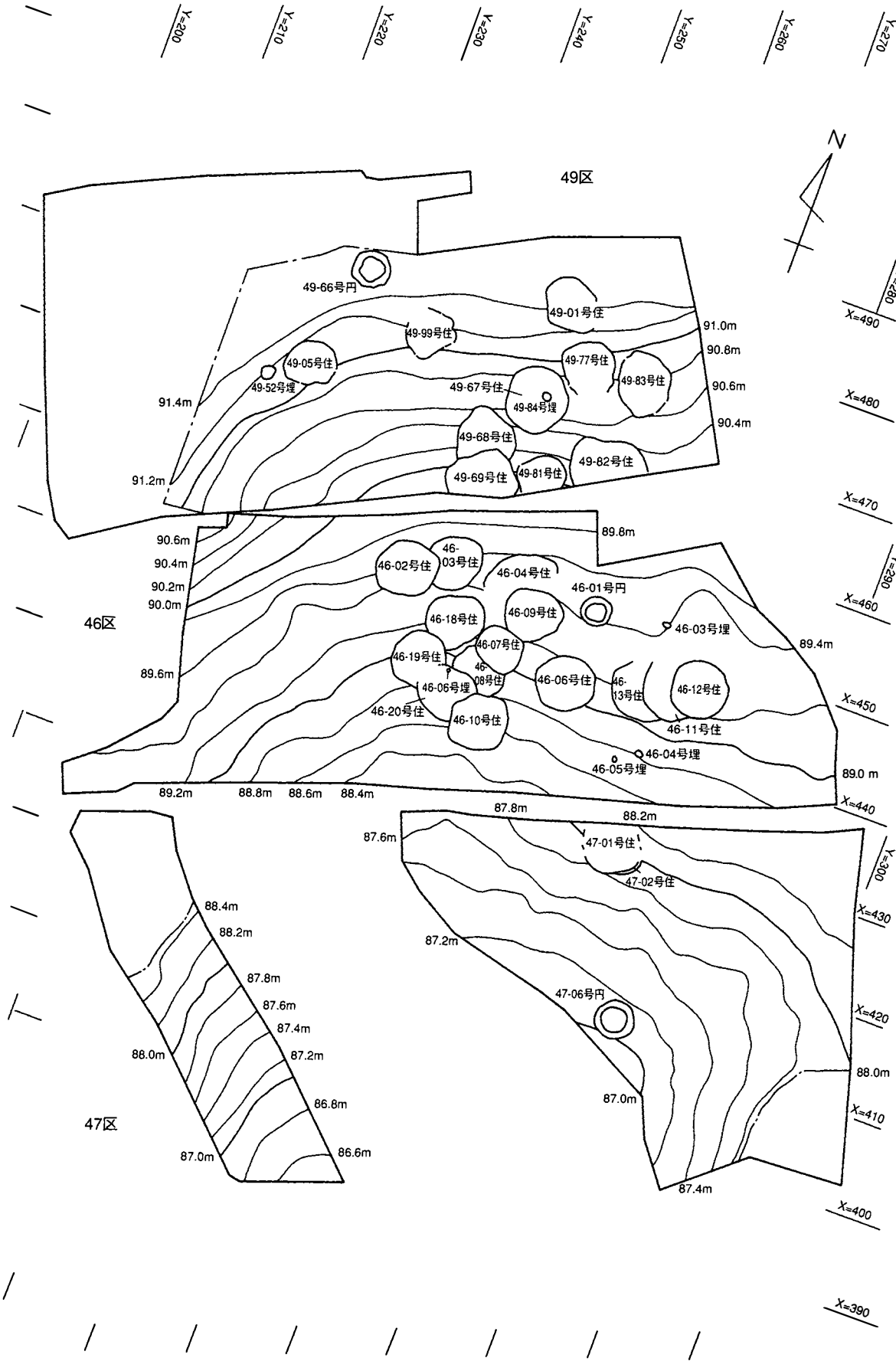
住居址の埋土は、基本的には粘質をあまり持たない明黄褐色弱粘質土のみである。ただ上面にはわずかに流入土とおぼしき土が見られる。



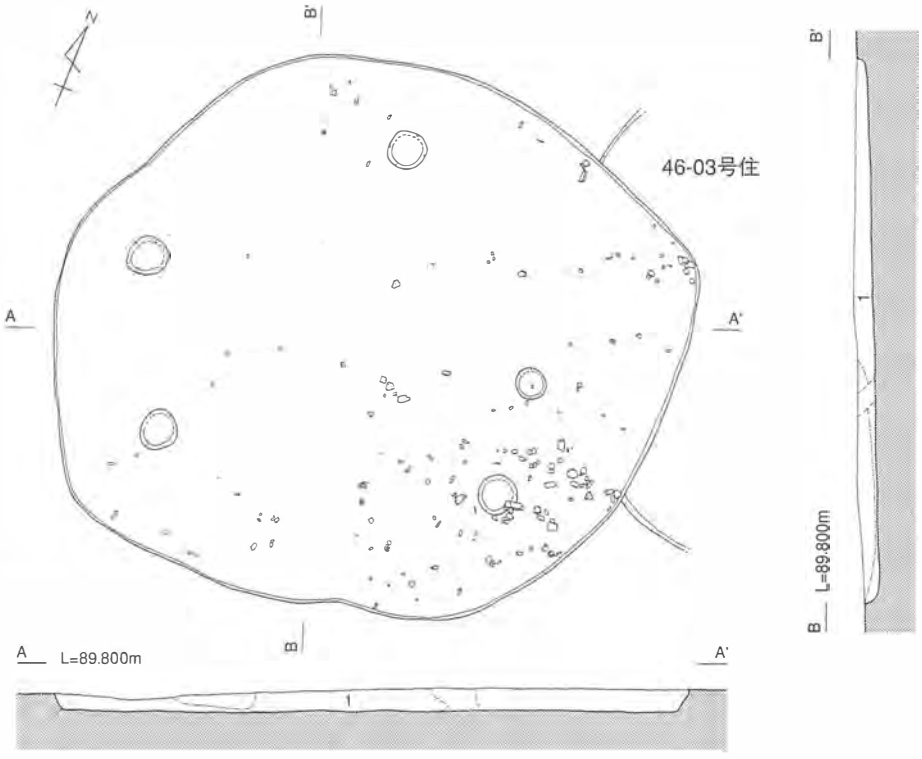
第170図　46区基本層序図

【遺物】（第173図）

本住居址からは、縄文土器と石器の他に玉類、焼成粘土塊が出土している。縄文土器は破片資料のみであるが、反転復元できるものも幾つかある。深鉢４点、浅鉢２点を図示している。石器は打製石斧、磨製石斧、敲石・磨石、二次加工のある剥片、石皿、凹石等が出ており、それらの中から幾つか選んで図示している。玉類は土製勾玉が２点出ており、２点共図示している。焼成粘土塊について今回は図示していない。



第171図　46・47・49区遺構配置図　S：1/600



第172図　46－02号住居址遺構実測図

46－03号住居址

【遺構・埋土】（第174図・図版87）

調査区北側、46－02号住居址の東側に位置する。南西部を46－02号住居址に削平されているが、平面プランは楕円形を呈している。長径は5.5ｍ、短径は4.5ｍを測り、遺構検出面から床面までの深さは10cmである。柱穴は計５個確認された。炉跡はなく、硬化面も確認されなかった。

住居址の埋土は、１層のみで粘質を持たない暗黄褐色砂質土である。

【遺物】（第175図）

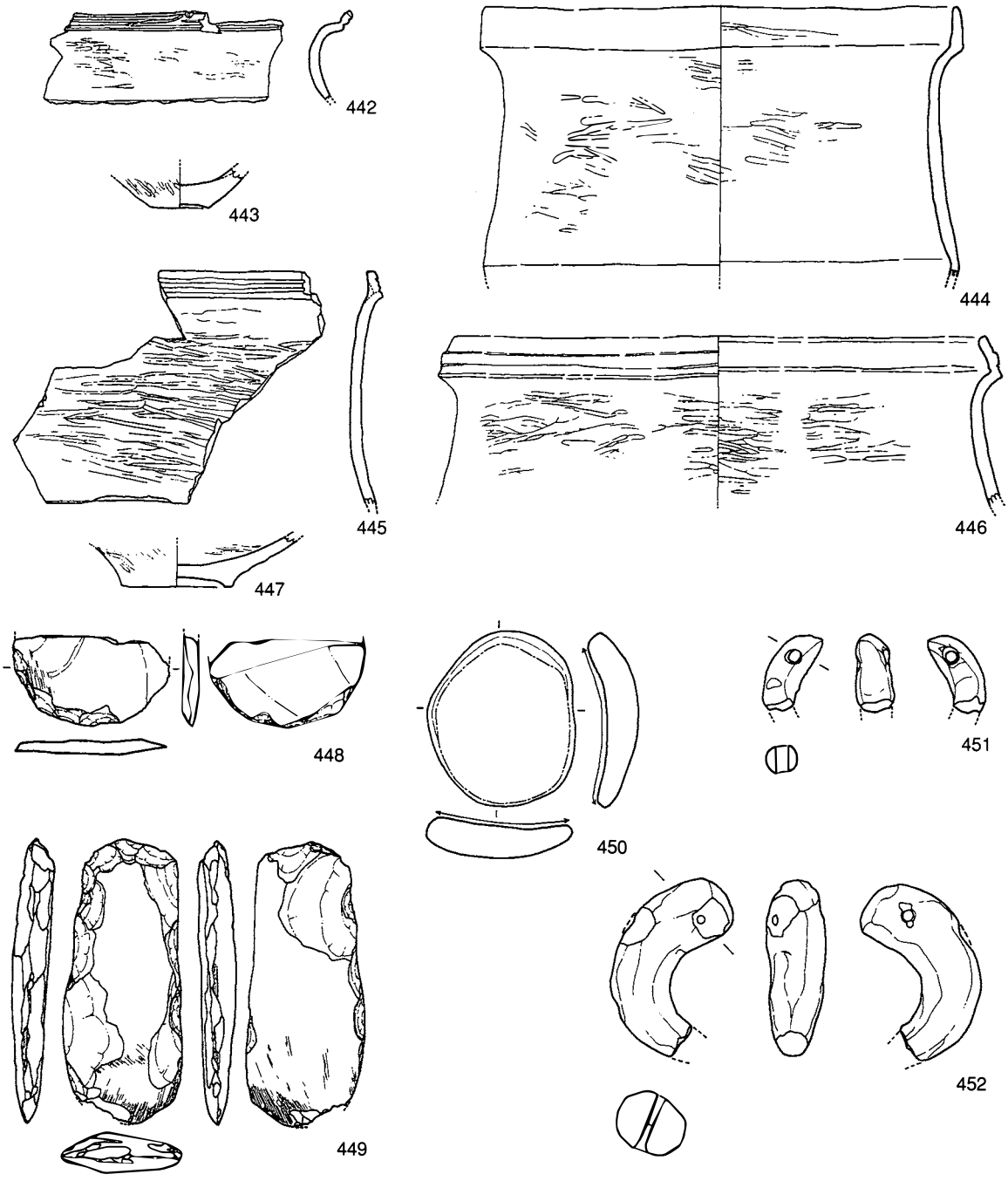
本住居址からは、縄文土器と石器の他に焼成粘土塊が出土している。縄文土器は浅鉢、深鉢が主ですべて破片資料である。それらの中から浅鉢、深鉢１点ずつ図示している。石器は打製石斧、スクレイパー、異形石器、二次加工のある剥片、石皿等が出ており、それらの中から幾つか選んで図示している。焼成粘土塊について今回は図示していない。

46－04号住居址

【遺構・埋土】（第176図・図版88）

調査区北側、46－03号住居址の東側に位置する。南半分を削平されており、平面プランは明らかでないが、残存状況から円形又は楕円形を呈すると考えられる。長径は7.0ｍ、短径は最大4.4ｍで本来はそれ以上あったようである。遺構検出面から床面までの深さは８cmである。柱穴は３個確認したが、他にも幾つかピットを検出したものの本住居址に伴うかは不明である。中央付近には150×85cmの炉跡を１基検出した。硬化面は確認されなかった。

住居址の埋土は、１層のみで粘質をやや持つ暗黄褐色土である。



第173図　46－02号住居址出土遺物実測図

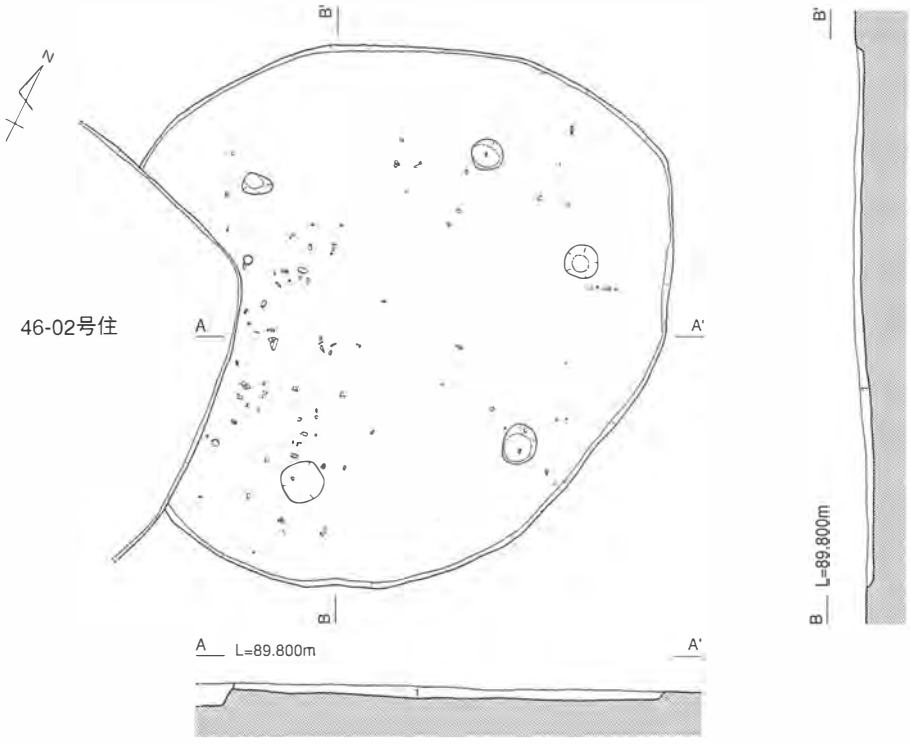
【遺物】（第177図）

本住居址からは、縄文土器と石器が出土している。削平されているため遺物量は多くなく、破片資料のみである。縄文土器は深鉢、浅鉢が主で浅鉢 1 点、深鉢 3 点を図示している。石器は打製石斧、磨製石斧、石錘、敲石・磨石、石皿等が出ているが、それらの中から幾つか選んで図示している。

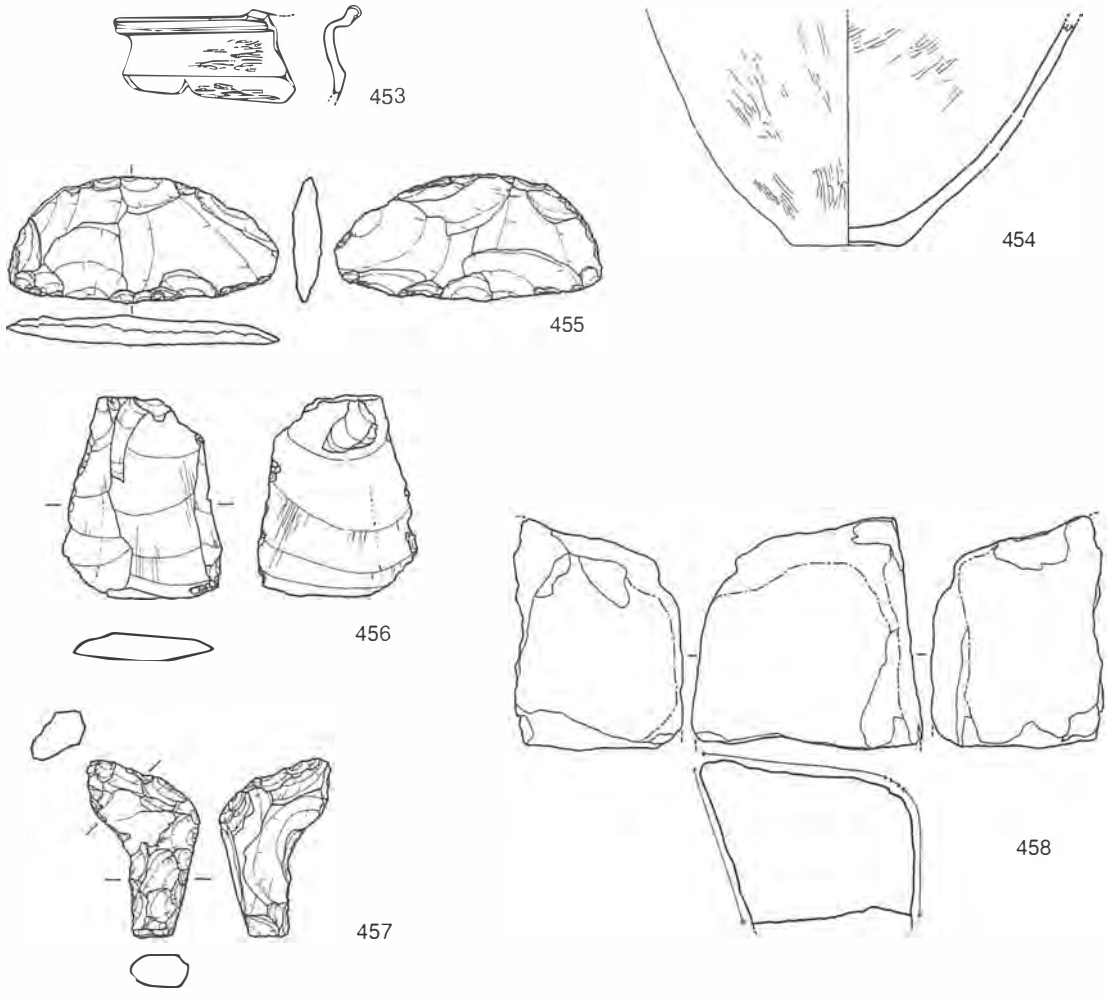
46－06号住居址

【遺構・埋土】（第178図・図版89）

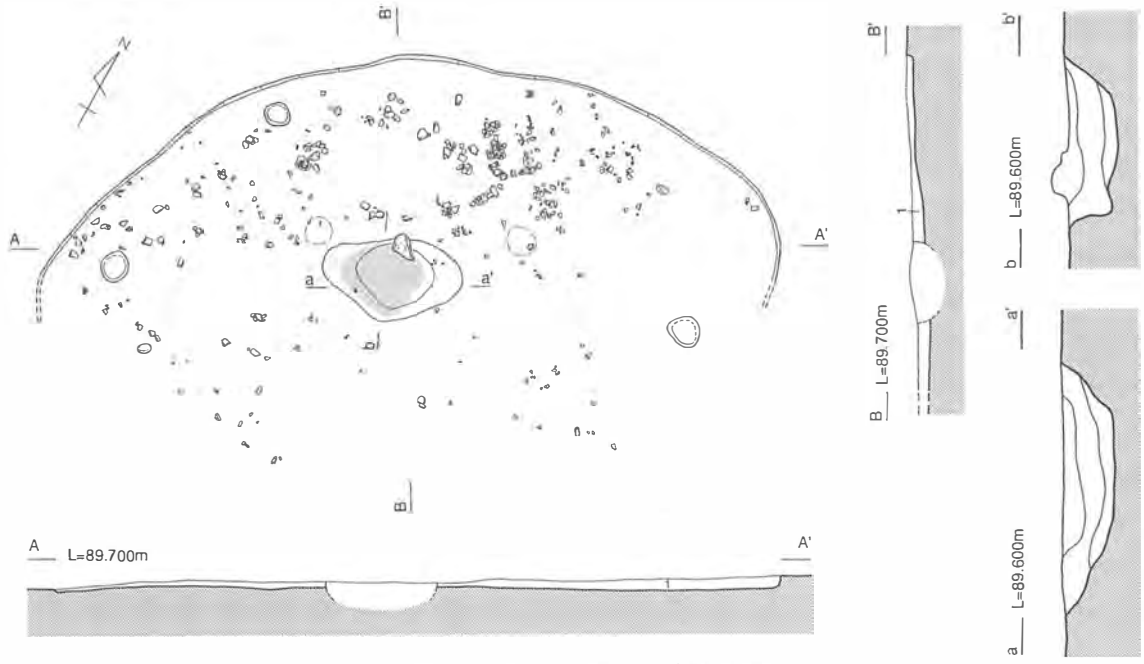
調査区中央に位置する。本調査区の住居址は、その多くは切り合い関係にあるものの、本住居址だけは切



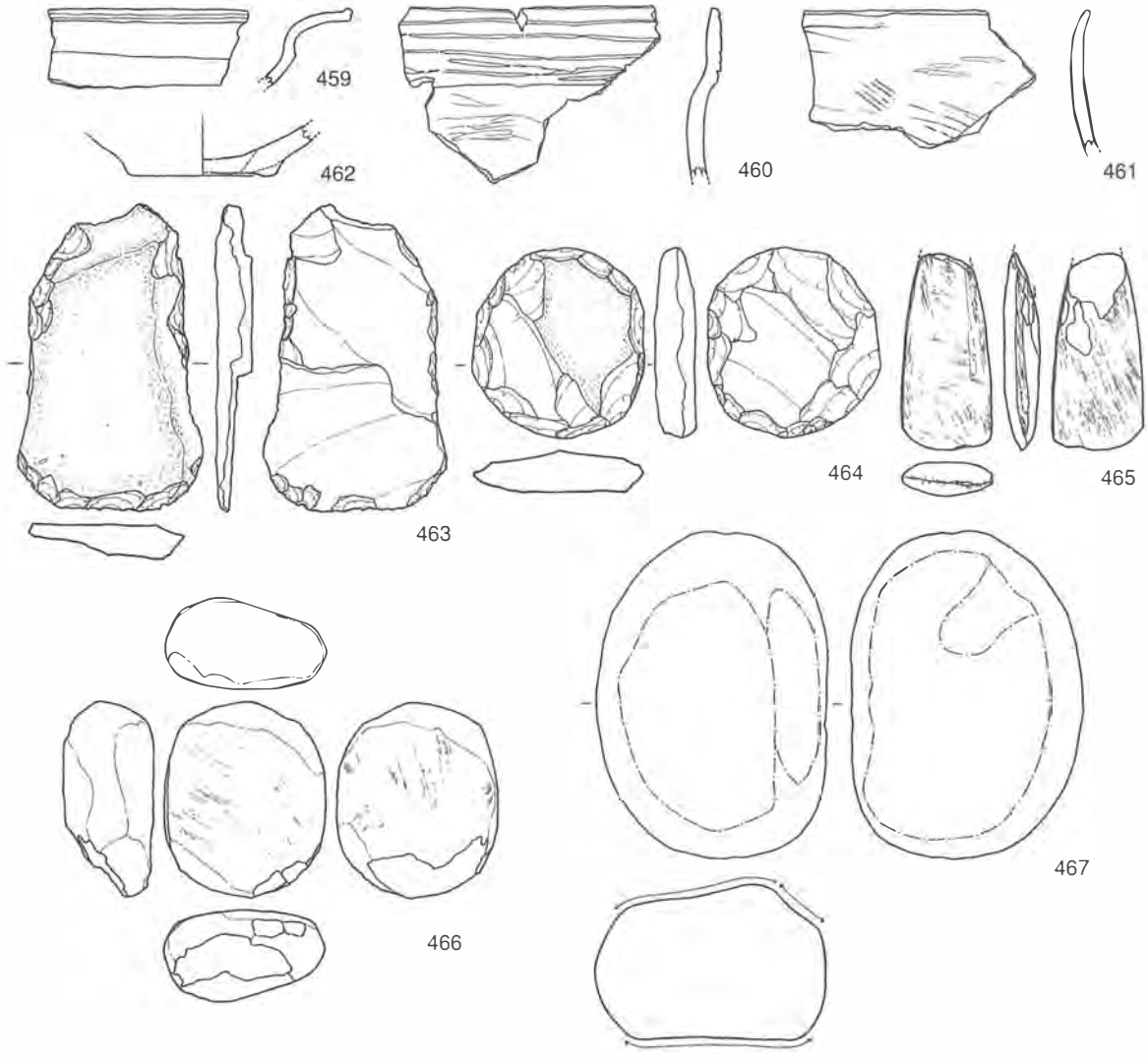
第174図　46－03号住居址遺構実測図



第175図　46－03号住居址出土遺物実測図



第176図　46−04号住居址遺構実測図



第177図　46−04号住居址出土遺物実測図

り合うことなく、単独で存在している。平面プランは円形を呈している。長径は6.0m、短径は5.6ｍを測り、遺構検出面から床面までの深さは15cmである。複数のピットが確認されているが、柱穴は計 7 個確認された。中央よりやや東寄りの場所に100×100cmの炉跡が 1 基検出された。硬化面は確認されなかった。

住居址の埋土は、複数に分層できるが、基本は粘質をほとんど持たない暗茶褐色砂質土（埋土 5 層）である。部分的に堆積している土層として、粘質をほとんど持たない明茶褐色砂質土（埋土 1 層）と所謂「黒ボク土」に近い黒褐色砂質土（埋土 2 層）と粘質をほとんど持たず焼土を含む茶褐色砂質土（埋土 3 層）と埋土 3 層に焼土を含まない茶褐色土（埋土 4 層）、そして粘質を持つ暗茶褐色粘質土（埋土 6 層）がある。

【遺物】（第179図）

本住居址からは、縄文土器と石器の他に土製品と焼成粘土塊が出土している。縄文土器は破片のみで量的にも少ない。浅鉢 1 点を図示している。石器は打製石斧、磨製石斧、石鏃、敲石・磨石、石皿、二次加工のある剥片等が出ており、それらの中から幾つか選んで図示している。土製品、焼成粘土塊について今回は図示していない。

46－07号住居址

【遺構・埋土】（第180図・図版90）

調査区中央に位置する。調査区中央部は、遺構が最も集中した箇所で遺構の切り合い関係が複雑である。平面プランはやや楕円気味の円形を呈する。長径は5.0ｍ、短径は4.1ｍで、遺構検出面から床面までの深さは、17cmである。柱穴は計 6 個確認された。炉跡、硬化面は検出されなかった。本住居址は46－08号住居址と46－09号住居址の 2 軒と切り合い関係にあり、その新旧関係は前述の 2 軒より新しいと考えられる。

住居址の埋土は、粘質を持たない暗茶褐色砂質土（埋土 1 層）と粘質を持たない明茶褐色土（埋土 2 層）の 2 層に分層できる。

【遺物】（第181図）

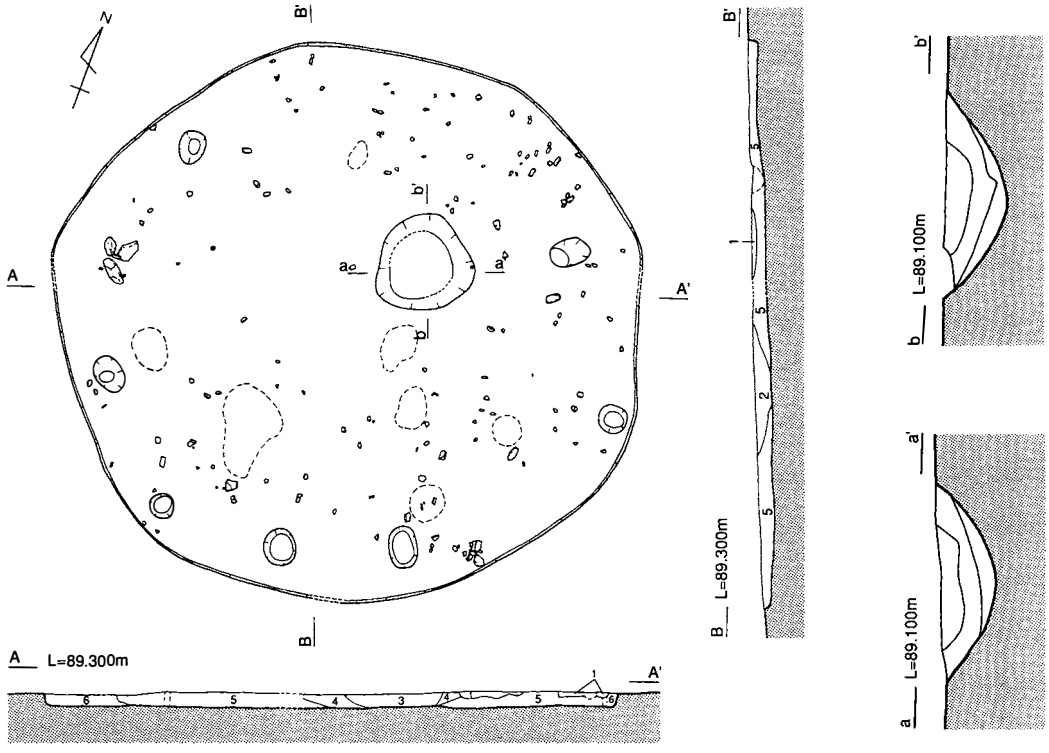
本住居址からは、縄文土器と石器の他に焼成粘土塊が出土している。縄文土器は破片のみで、量的にも多くない。その中から浅鉢 2 点、深鉢 1 点を図示しておく。石器は磨製石斧、二次加工のある剥片、敲石・磨石等が出ており、それらの中から幾つか選んで図示している。焼成粘土塊について今回は図示していない。

46－08号住居址

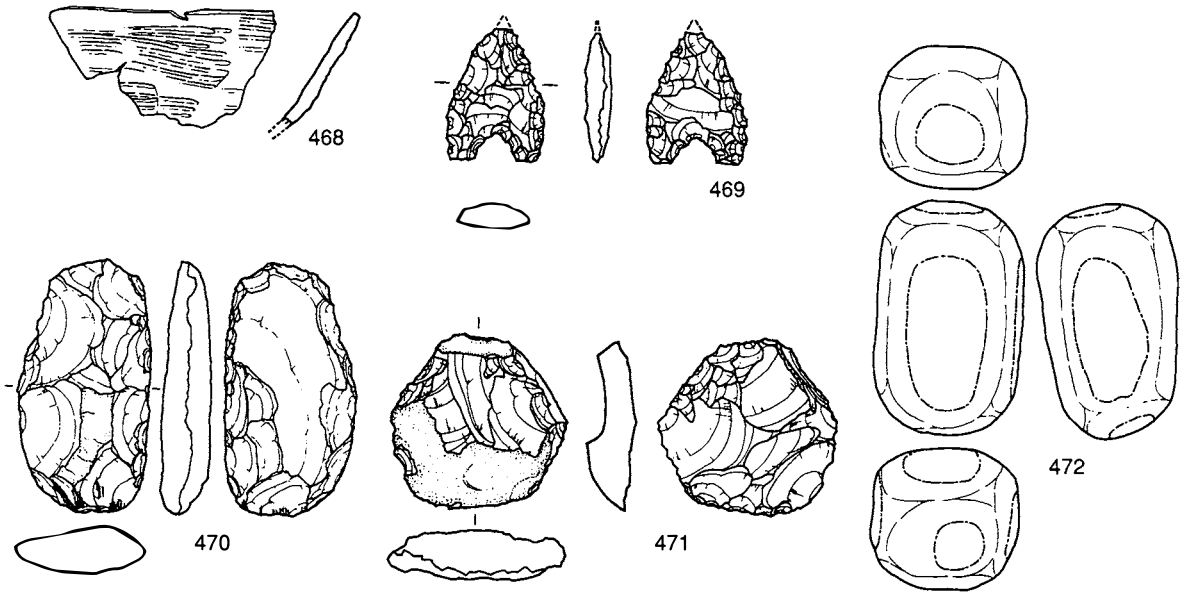
【遺構・埋土】（第182図・図版91）

調査区中央に位置する。北側を46－07号住居址で、南側を46－10号住居址と46－20号住居址に切られているが、残存状況から平面プランは円形を呈していたと推測される。長径は5.4ｍ、短径は4.6ｍで、遺構検出面から床面までの深さは、17cmである。複数のピットを検出したが、柱穴は計 6 個確認された。炉跡、硬化面は検出されなかった。前述したように本住居址は計 3 軒の住居址と切り合い関係にあるわけだが、それらすべてに切られており、調査時の見解が正しいならこれらの住居址の中で最も古い遺構と言える。

住居址の埋土は、他の住居址の埋土に切られながらも粘質をやや持つ暗茶褐色粘質土（埋土 1 層）と粘質を持ちややしまりのある暗黄褐色粘質土（埋土 2 層）の 2 層に分層される。



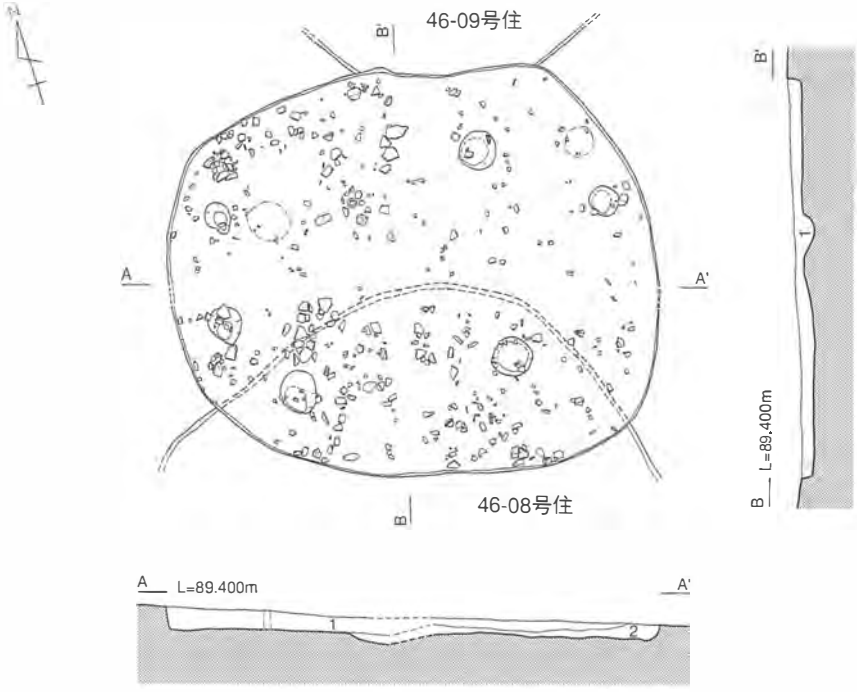
第178図　46－06号住居址遺構実測図



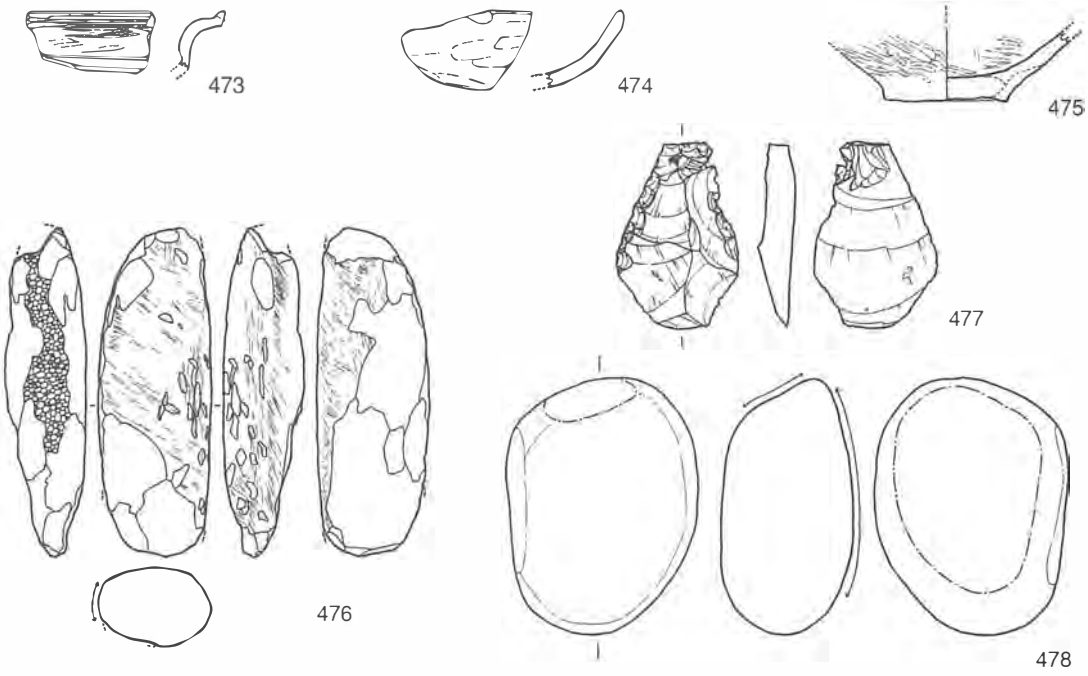
第179図　46－06号住居址出土遺物実測図

【遺物】（第183図）

本住居址からは、縄文土器と石器の他に玉類、土製品が出土している。比較的まとまった遺物量があるが、やはり破片資料が大半である。縄文土器は浅鉢、深鉢、鉢があり、その中から浅鉢１点、深鉢２点、鉢１点を図示している。石器は打製石斧、磨製石斧、石鏃、石錘、二次加工のある剥片、敲石・磨石、砥石等が出ており、それらの中から幾つか選んで図示している。玉類は土製管玉、土製品は円柱形土製品が１点ずつ出ており、それぞれ図示している。



第180図　46－07号住居址遺構実測図



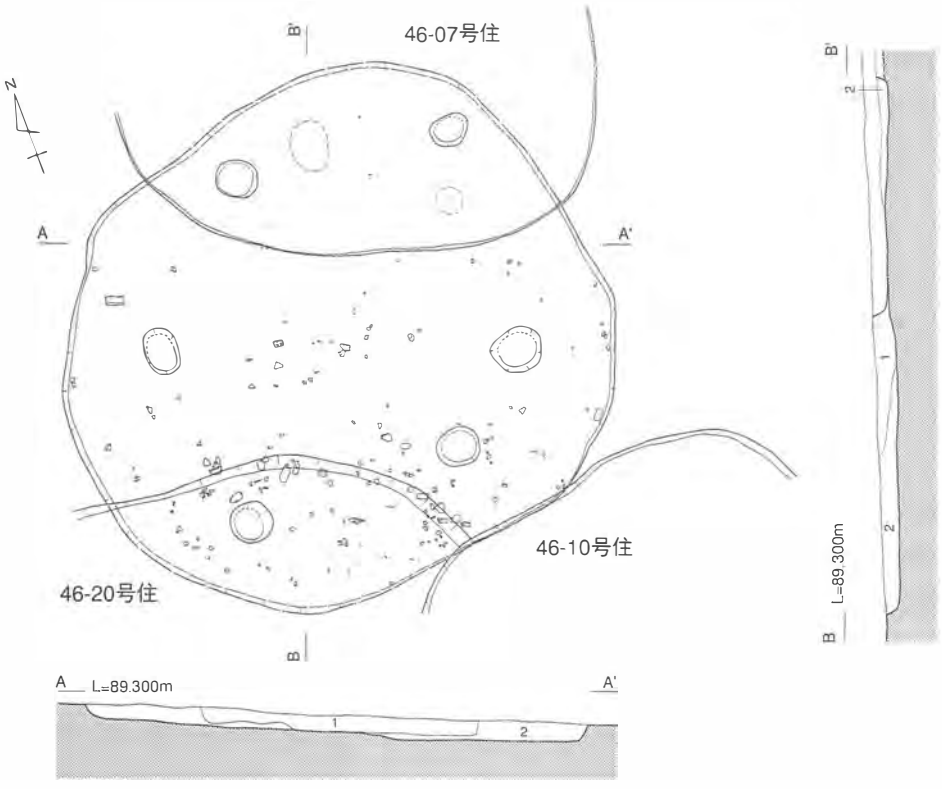
第181図　46－07号住居址出土遺物実測図

46－09号住居址

【遺構・埋土】（第184図・図版92）

調査区中央に位置する。南端を46－07号住居址によって切られているが、平面プランはやや不整形な円形を呈する。長径は6.0ｍ、短径は46－07号住居址によって削平されているが5.5ｍ以上を測る。遺構検出面から床面までの深さは12cmである。柱穴は計６個確認された。住居址内には、焼土を含む土壙状の落ち込みが３基検出されたが、本住居址に伴うものではない。したがって炉跡の有無については不明である。

住居址の埋土は、基本的に２層に分層される。やや粘質を持つ暗茶褐色粘質土（埋土１層）と粘質を持たずしまりのあまりない暗黄褐色砂質土（埋土２層）であるが、部分的に焼土含みの埋土が入り込んでいる。



第182図　46－08号住居址遺構実測図

【遺物】（第186図）

本住居址からは、縄文土器と石器の他に玉類と焼成粘土塊が出土している。比較的多くの遺物が出ているが、破片資料が大半である。縄文土器は浅鉢、深鉢が出ており、それらの中から浅鉢 5 点、深鉢 2 点を図示している。石器は打製石斧、石匙、石鏃、楔形石器、二次加工のある剥片、敲石・磨石、石皿等が出ており、それらの中から幾つか選んで図示している。玉類は土製丸玉が 1 点出ており、それを図示している。焼成粘土塊について今回は図示していない。

46－10号住居址

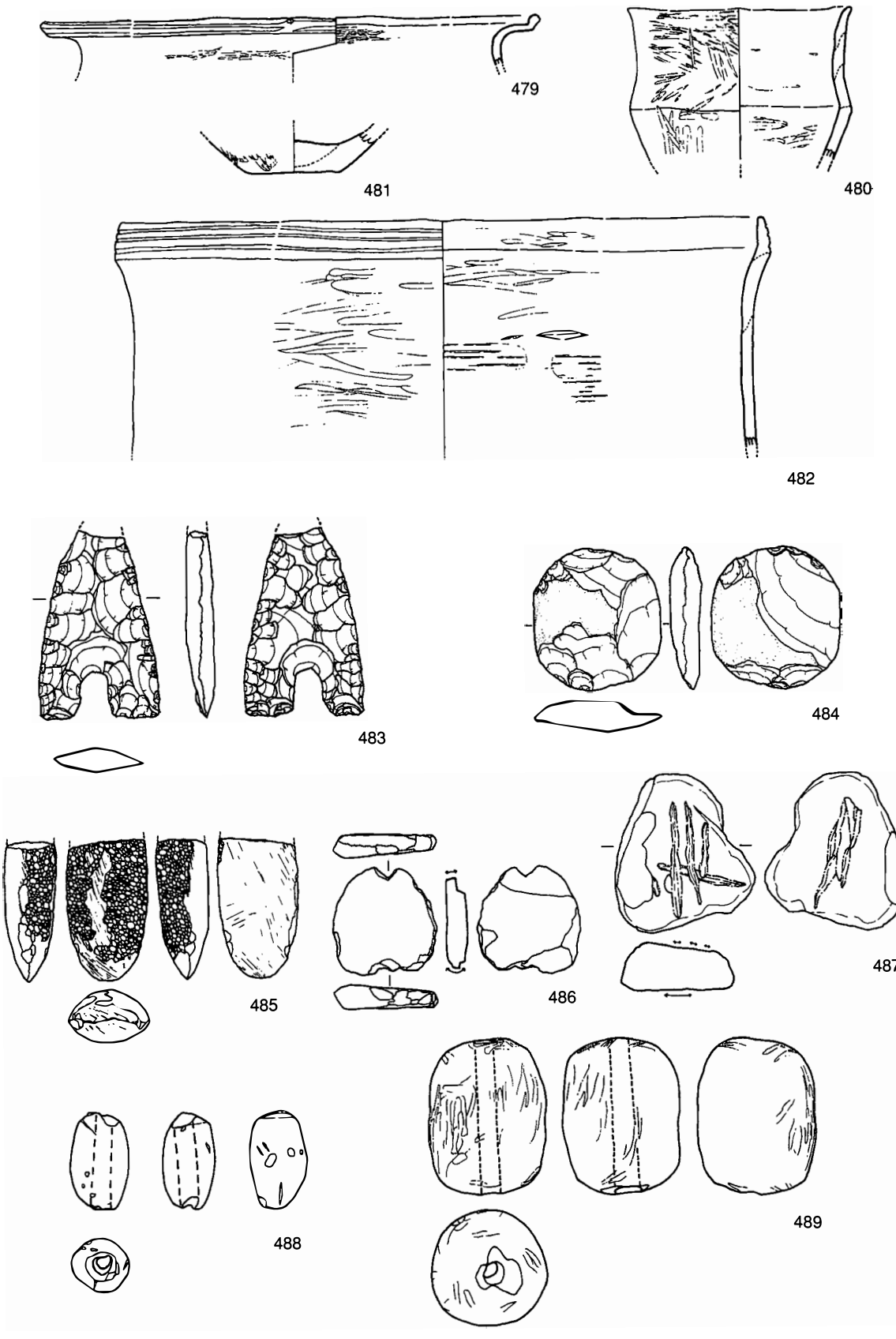
【遺構・埋土】（第185図・図版93）

調査区南側に位置する。平面プランはやや不整形な円形を呈する。長径は6.0ｍ、短径は5.4ｍを測り、遺構検出面から床面までの深さは36cmと本調査区内の住居址としては深い方である。複数のピットを検出したが、柱穴と確認できたのは 6 個のみであった。炉跡、硬化面は検出されなかった。46－08号住居址と46－20号住居址とは切り合い関係にあり、その新旧関係は両者より新しいと考えられる。

住居址の埋土は、 3 層に分けられる。主な埋土は、所謂「黒ボク土」を基調とする粘質をあまり持たない黒褐色粘質土（埋土 1 層）と粘質を持たない淡茶褐色砂質土（埋土 2 層）で、壁面付近に粘質をあまり持たない茶褐色粘質土（埋土 3 層）が三角堆積している。

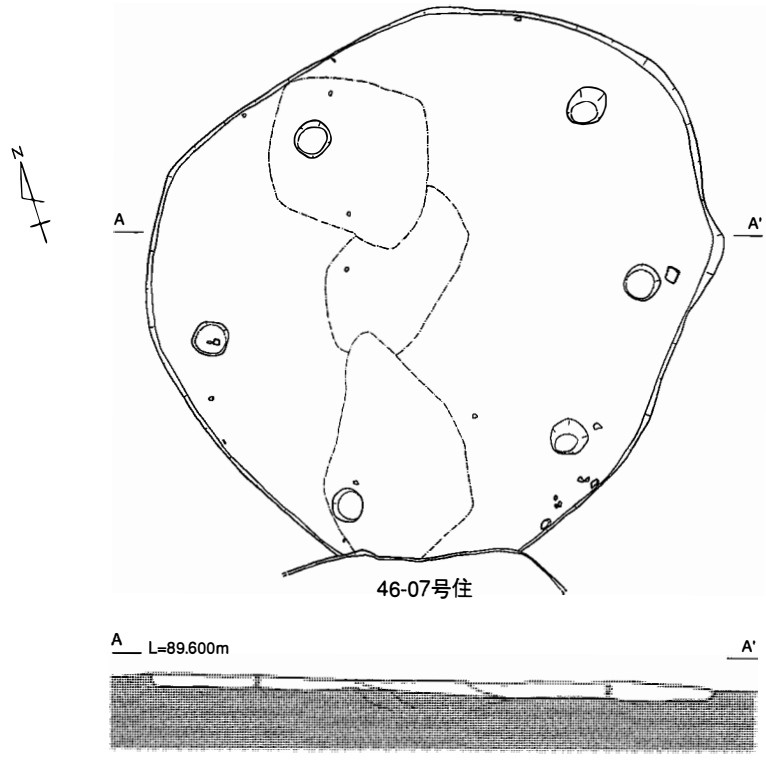
【遺物】（第187図）

本住居址からは、縄文土器と石器の他に玉類と焼成粘土塊が出土している。遺物量は比較的多く、本調査区においては平均的な量である。縄文土器は浅鉢、深鉢、鉢があり、中には残りの良いものも見られる。それらの中から浅鉢 2 点、鉢 1 点、深鉢 3 点を図示している。石器は打製石斧、磨製石斧、石鏃、石匙、二次

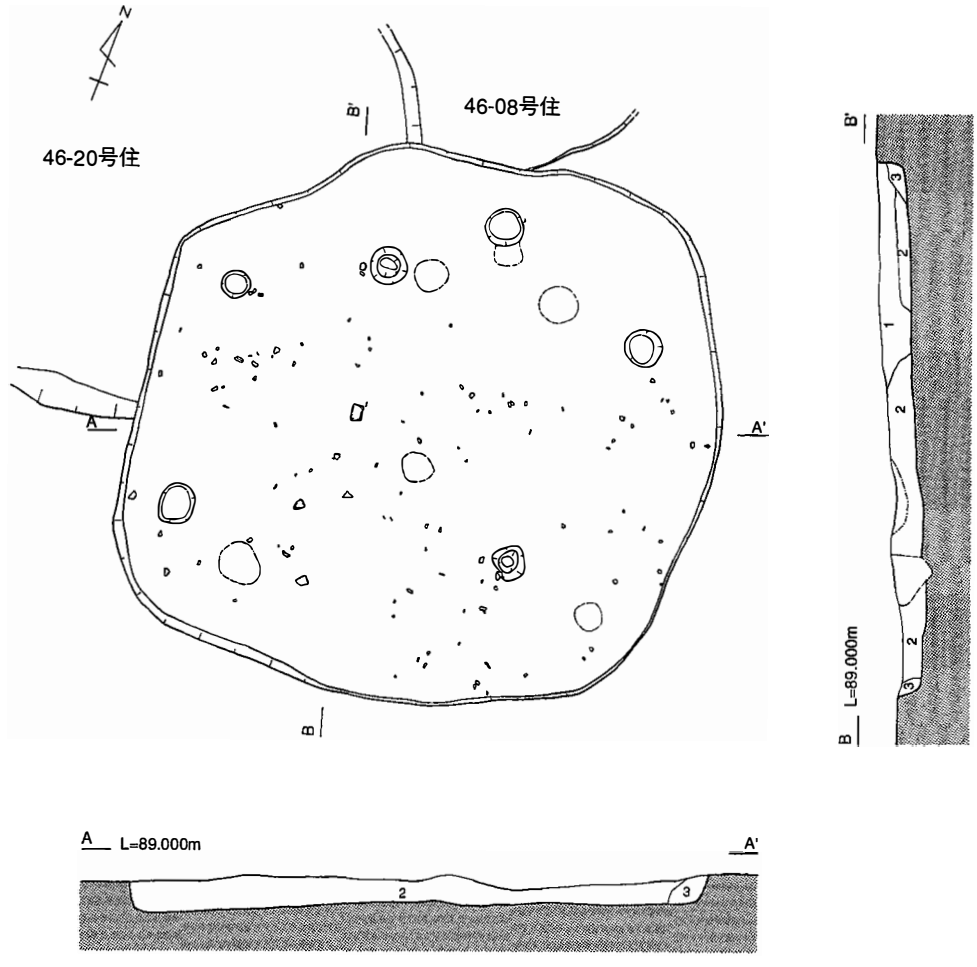


第183図　46－08号住居址出土遺物実測図

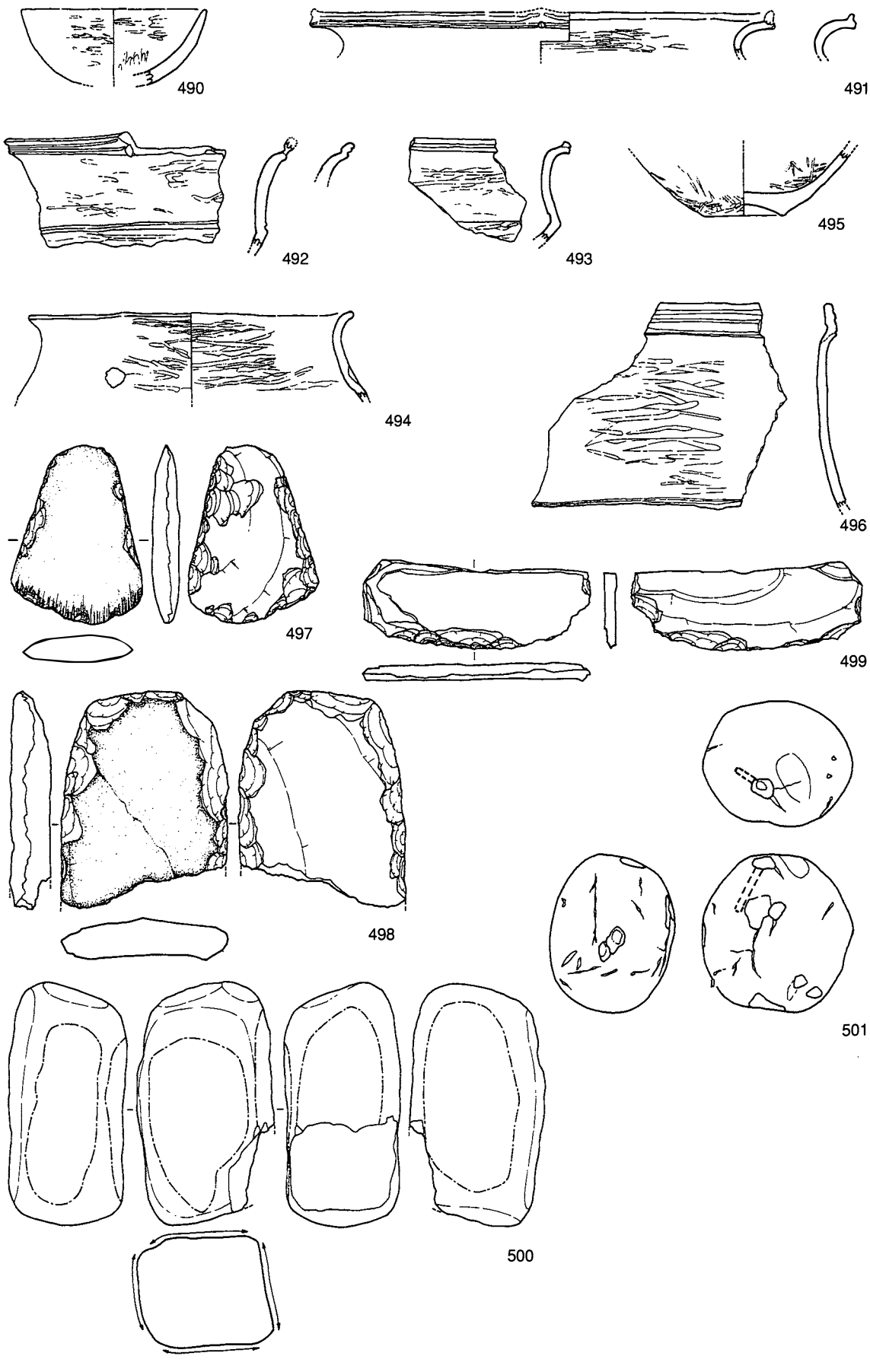
加工のある剥片、敲石・磨石等が出ており、それらの中から幾つか選んで図示している。玉類は石製管玉と土製勾玉が１点ずつ出ており、２点とも図示している。焼成粘土塊について今回は図示していない。



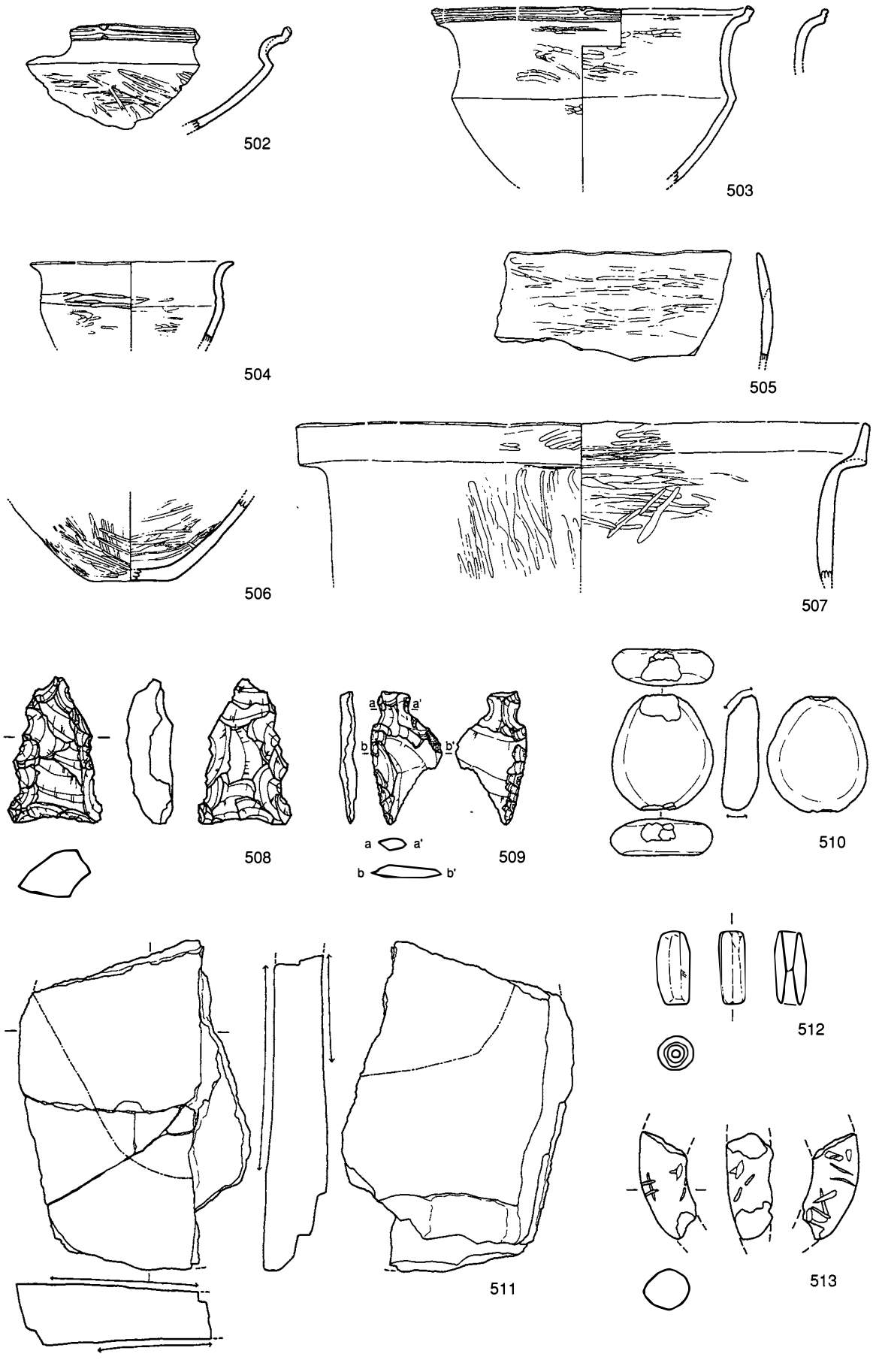
第184図　46－09号住居址遺構実測図



第185図　46－10号住居址遺構実測図



第186図　46－09号住居址出土遺物実測図



第187図　46−10号住居址出土遺物実測図

46－11号住居址

【遺構・埋土】（第188図・図版94）

調査区東側に位置する。全体の約１／３程を46－12号住居址に削平されているが、残存状況から平面プランは円形を呈していたと推測される。長径は6.3ｍ、短径は4.0ｍ以上を測り、遺構検出面から床面までの深さは20cmである。46－12号住居址によって削平されているためはっきりしないが、柱穴は計５個確認できた。また炉跡、硬化面は調査時には検出できなかった。本住居址は46－12号住居址と46－13号住居址と切り合い関係にあり、新旧関係は古い順に46－13号住居址、46－11号住居址、46－12号住居址と考えられる。

住居址の埋土は、２層に分かれているが、どちらも暗茶褐色を基調としている。粘質をほとんど持たないもの（埋土１層）と埋土１層よりやや粘質を持ち、色調がやや明るいもの（埋土２層）である。埋土２層は西側に部分的に堆積したものと考えられる。

【遺物】（第189図）

本住居址からは、縄文土器と石器の他に焼成粘土塊が出土している。削平されているため遺物量は少なく、縄文土器は小片のみのため、図示していない。石器は打製石斧、スクレイパー、二次加工のある剥片、敲石・磨石等が出ており、それらの中から幾つか選んで図示している。焼成粘土塊について今回は図示していない。

46－12号住居址

【遺構・埋土】（第188図・図版94）

調査区の東側に位置する。平面プランは円形を呈する。長径は6.0ｍ、短径は5.8ｍを測り、遺構検出面から床面までの深さは12cmである。柱穴は計６個確認されたが。中央に100×100cmの炉跡とおぼしき焼土の落ち込みが検出された。その南側にも焼土の落ち込みがあったが、これは後世の遺構であり、本住居址に伴うものではない。硬化面は確認されなかった。なお、前述したように本住居址は、46－11号住居址を切っており、近接する住居址の中で最も新しいと考えられる。

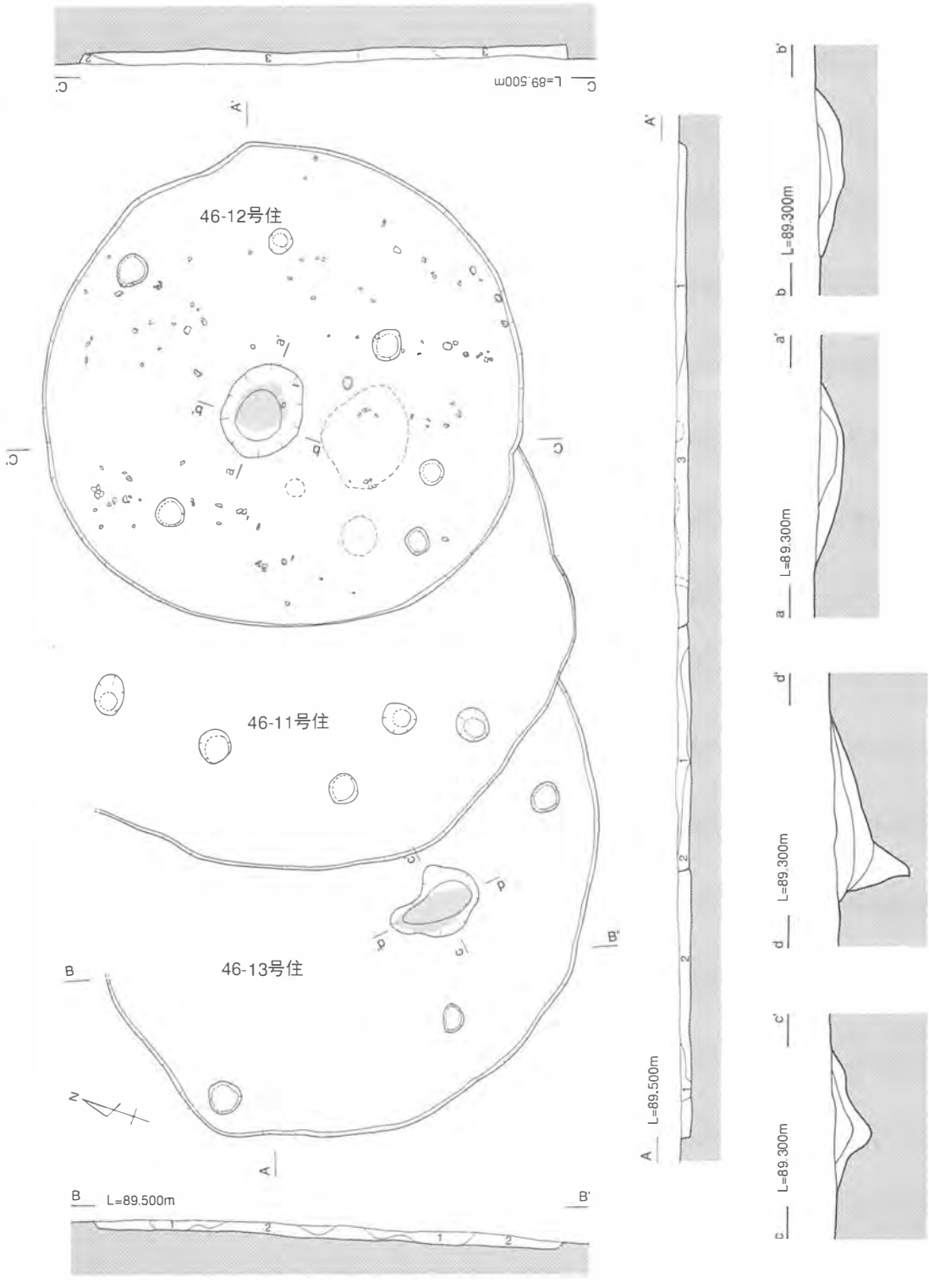
住居址の埋土は、部分的に樹痕や焼土の落ち込みが入り込んでいるものの、基本的には３層に分けられる。粘質を持たない黒褐色砂質土（埋土１層）と粘質をあまり持たない暗黄褐色砂質土（埋土３層）が主な埋土で、壁際に粘質を持つ明黒褐色粘質土（埋土２層）がブロック状に堆積している。

【遺物】（第190図・図版133）

本住居址からは、縄文土器と石器の他に玉類と焼成粘土塊が出土している。遺物量は平均的で、やはり破片資料が目立つ。縄文土器は深鉢、鉢、浅鉢の他に注口土器が出ているが、住居址内からの出土は本遺跡群で唯一の例である。注口部のみの出土であるが、貴重な事例と言えよう。浅鉢３点、鉢１点、深鉢１点、注口土器１点を図示している。石器は打製石斧、磨製石斧、二次加工のある剥片、敲石・磨石等が出ており、それらの中から幾つか選んで図示している。玉類は土製勾玉が１点出ており、それを図示している。焼成粘土塊について今回は図示していない。

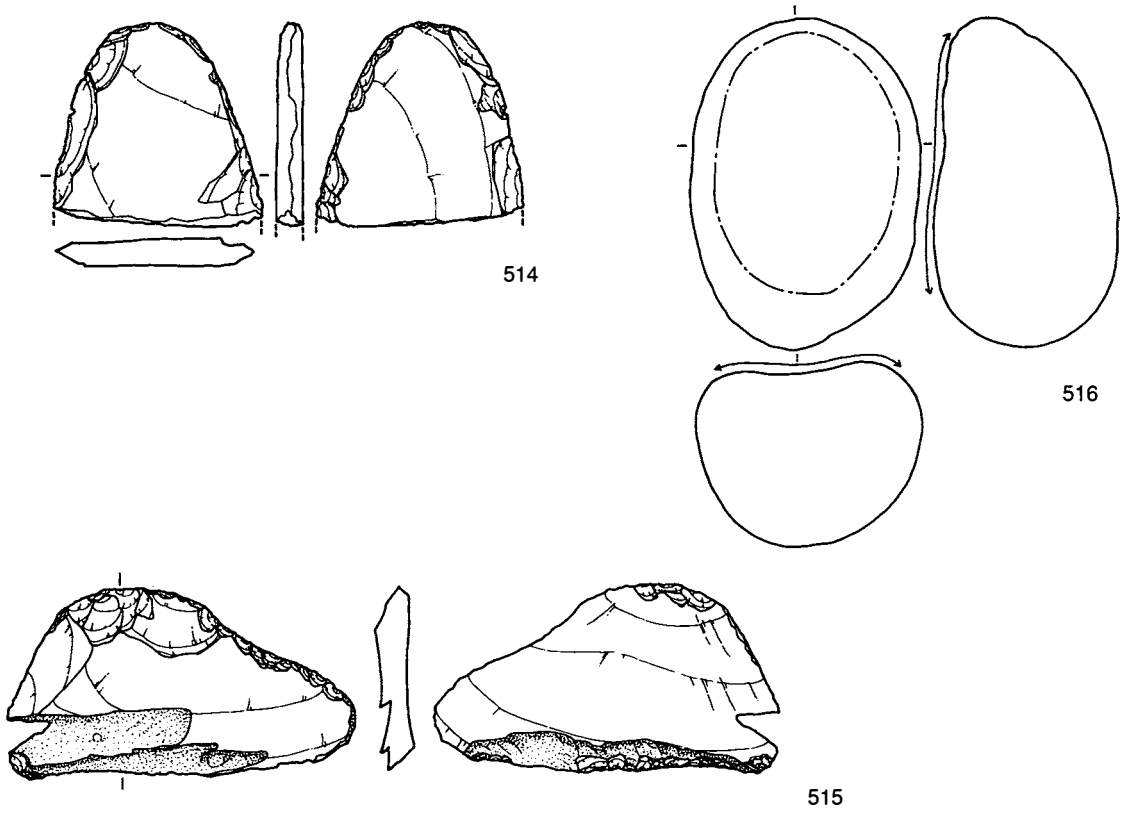
46－13号住居址

【遺構・埋土】（第188図・図版94）



第188図　46−11〜13号住居址遺構実測図

調査区東側に位置する。全体の半分近くを46−11号住居址に削平されているが、残存状況から平面プランは円形を呈していたと推測される。規模も半分近く削平されているためはっきりしないが、長径は7.1m、短径は５〜６mあったと見られ、遺構検出面から床面までの深さは16cmである。柱穴は３個確認されたが、削平されていることを考慮するなら、本来もっと多くの柱穴があったと考えられる。中央よりやや南寄りの場所に120×90cmの炉跡が１基検出された。硬化面は確認されなかった。



第189図　46－11号住居址出土遺物実測図

住居址の埋土は、粘質を持たない暗茶褐色砂質土（埋土１層）と埋土１層よりやや粘質を持つ暗茶褐色粘質土（埋土２層）の２層に分けられる。埋土２層の上から埋土１層が部分的に流入している感がある。

【遺物】（第191図）

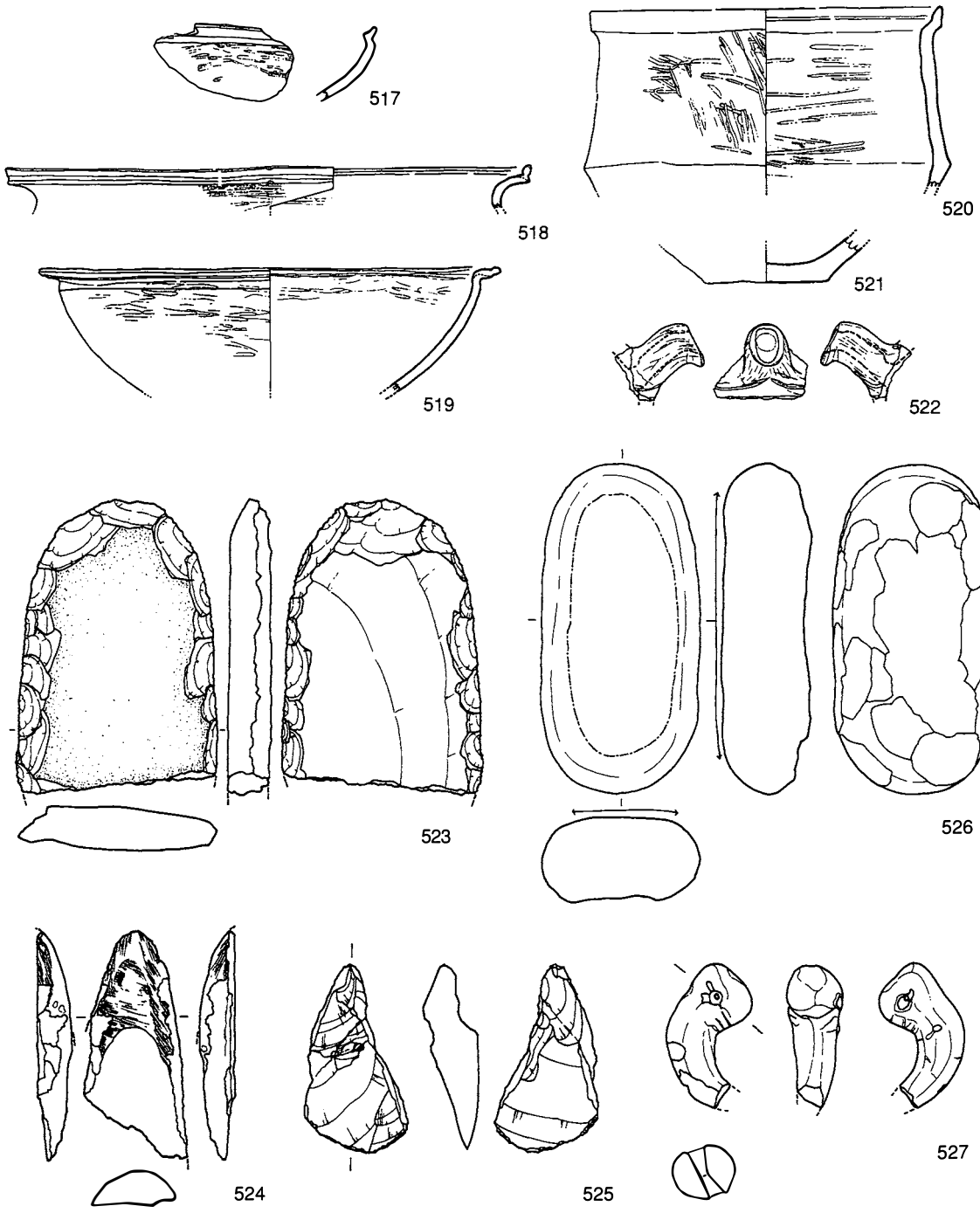
本住居址からは、縄文土器と石器が出土している。削平されているためか遺物量はやや少なめである。縄文土器は深鉢、浅鉢が出ており、破片のみである。その中から浅鉢、深鉢とも１点ずつ図示しておく。石器は打製石斧、石匙、石錘、二次加工のある剥片、石核、敲石・磨石、台石等が出ており、それらの中から幾つか選んで図示している。

46－18号住居址

【遺構・埋土】（第192図・図版95）

調査区中央に位置する。46－03号、46－07号、46－08号住居址の間にあり、南側を46－19号住居址に切られている。平面プランは円形を呈する。長径は5.7ｍ以上、短径は5.8ｍを測り、遺構検出面から床面までの深さは15cmである。部分的に後世の撹乱を受けているが、柱穴は計６個確認された。北側の壁際に焼土の落ち込みがあるが、これは後世の遺構であり、本住居址に伴うものではない。この他に焼土がまとまって検出された箇所はなく、炉跡は検出されなかった。硬化面は確認されなかった。

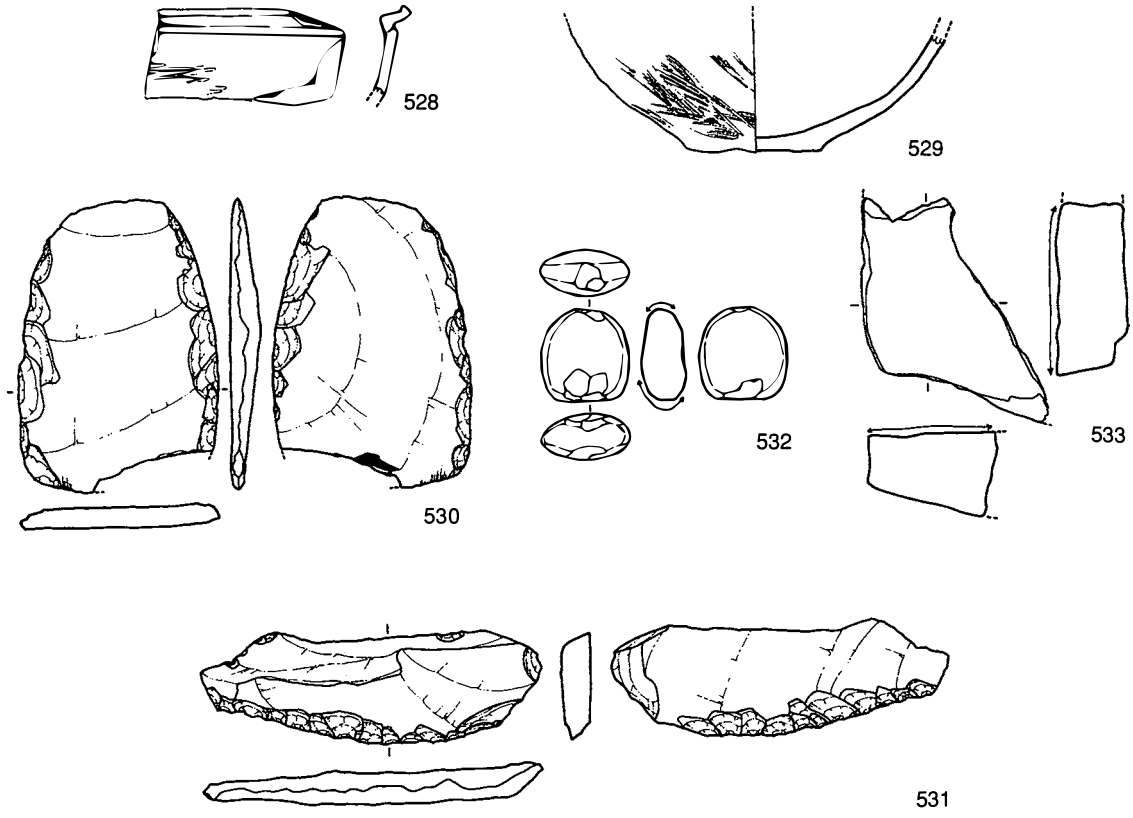
住居址の埋土は、やや明るく、粘質を持つ明黄褐色粘質土（埋土１層）とやや暗く、粘質を少し持つ暗黄褐色砂質土（埋土２層）の２層に分けられる。埋土１層は東側に部分的に堆積しているだけで、主な埋土は埋土２層である。



第190図　46－12号住居址出土遺物実測図

【遺物】（第193・194図）

本住居址からは、縄文土器と石器の他に土製品と焼成粘土塊が出土している。比較的多くの遺物が出土しており、遺物量は多いと言える。縄文土器は深鉢、浅鉢が出ており、反転復元できるものも幾つかある。それらも含めて浅鉢 3 点、深鉢 2 点を図示している。石器は打製石斧、磨製石斧、石鏃、石匙、石錘、二次加工のある剥片、敲石・磨石、石皿等が出ており、それらの中から幾つか選んで図示している。土製品はしゃもじ形のものを含め 2 点出ており、しゃもじ形の土製品を図示している。焼成粘土塊について今回は図示していない。



第191図　46－13号住居址出土遺物実測図

46－19号住居址

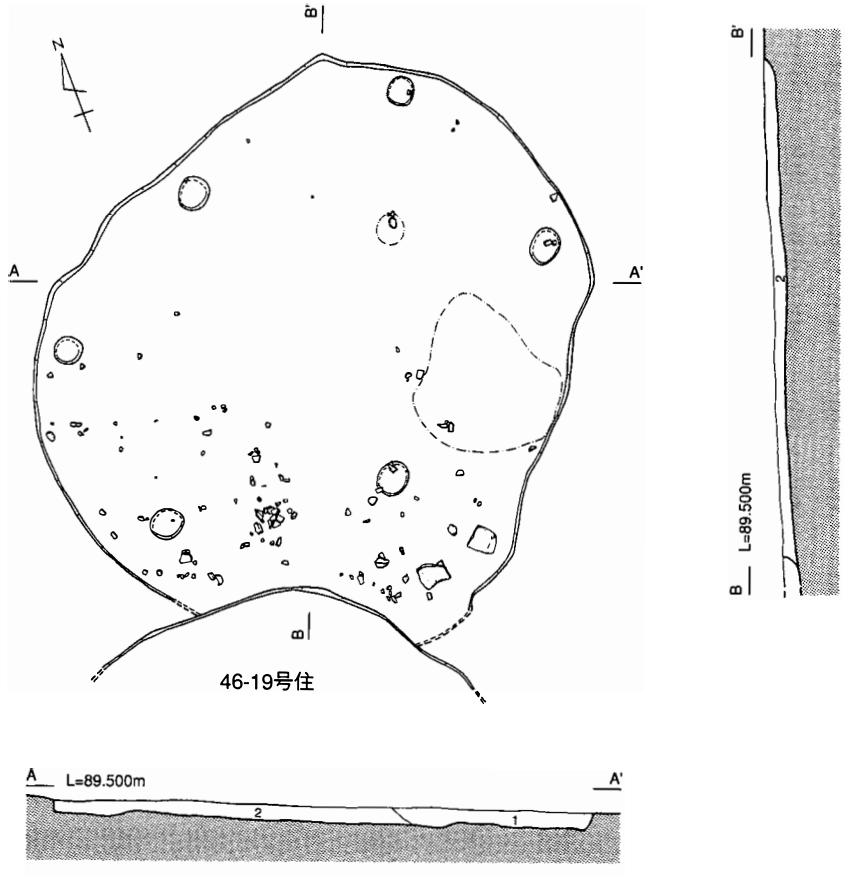
【遺構・埋土】（第195図・図版96）

調査区中央に位置する。平面プランは円形を呈する。長径は6.0ｍ、短径は5.8ｍを測り、遺構検出面から床面までの深さは30cmである。柱穴は計８個確認された。炉跡、硬化面は確認されなかった。本住居址は46－18号住居址と46－20号住居址の２軒と切り合い関係にある。その新旧関係は、本住居址が46－18号・46－20号住居址より新しいと考えられる。

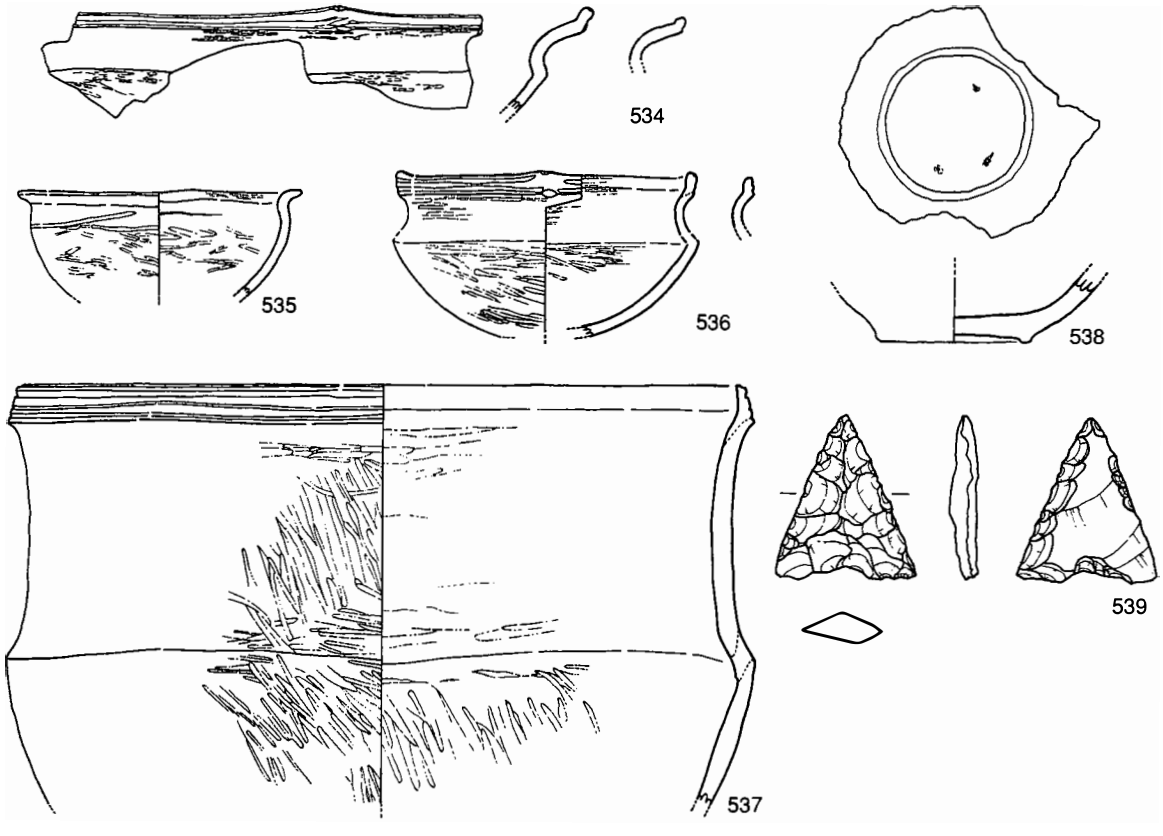
住居址の埋土は、主に粘質を持たない暗茶褐色砂質土（埋土１層）と埋土１層よりやや粘質を持つ暗茶褐色粘質土（埋土２層）の２層に分けられる。北側にやや粘質を持つ暗黄褐色粘質土（埋土３層）と埋土３層よりやや粘質を持たない暗黄褐色砂質土（埋土４層）が堆積しているが、床面と壁際に部分的に見られるだけである。

【遺物】（第196・197図・図版134～136）

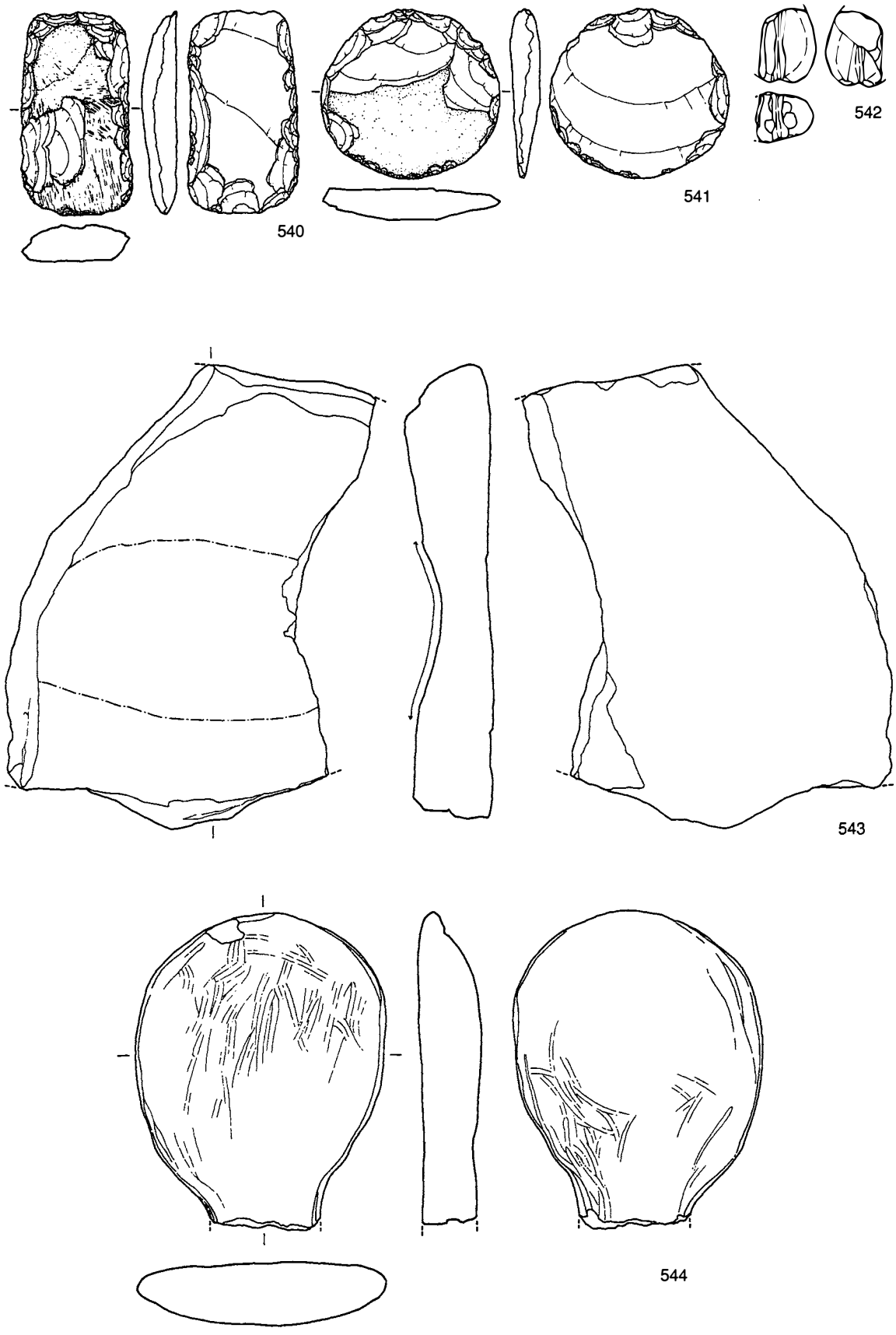
本住居址からは、縄文土器と石器の他に焼成粘土塊が出土している。遺物はまとまって出土しており、本調査区においては残りが良い方である。縄文土器は浅鉢、深鉢、鉢が出ており、完形品やそれに近いものもあり、量的にも恵まれている。それらの中から浅鉢２点、鉢２点、深鉢４点を図示している。石器は打製石斧、石鏃、石錘、二次加工のある剥片、敲石・磨石、石皿等が出ており、それらの中から幾つか選んで図示している。焼成粘土塊について今回は図示していない。



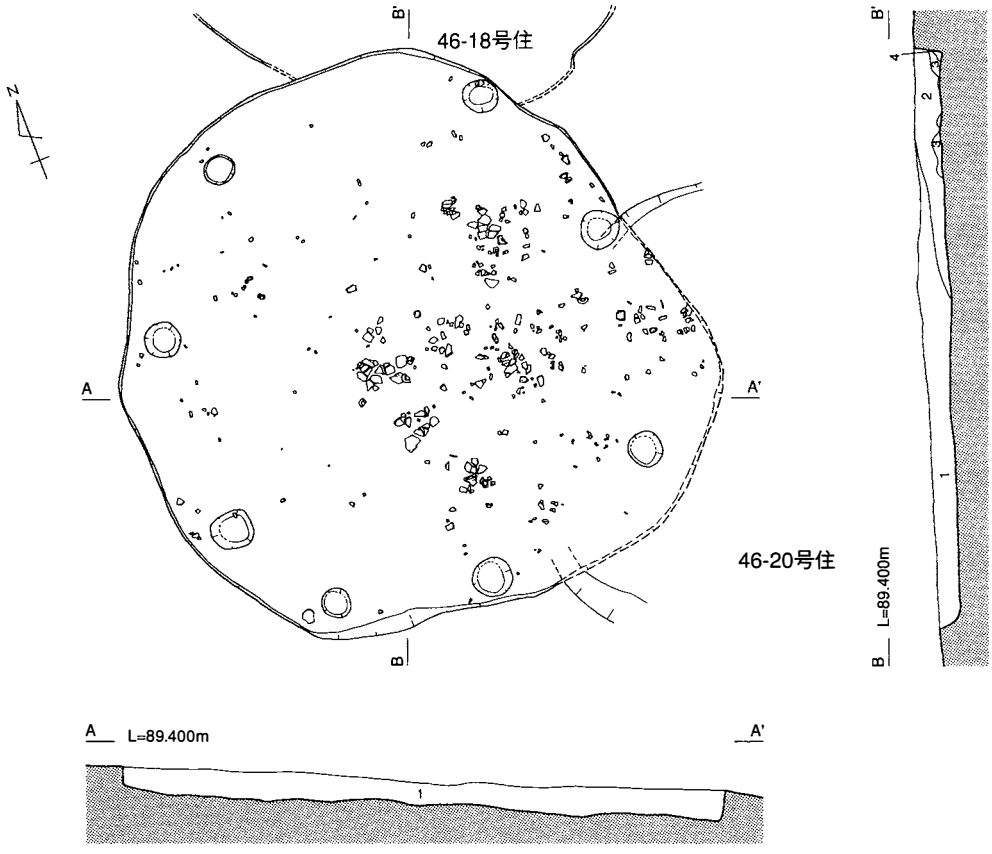
第192図　46－18号住居址遺構実測図



第193図　46－18号住居址出土遺物実測図 1



第194図　46−18号住居址出土遺物実測図 2



第195図　46－19号住居址遺構実測図

46－20号住居址

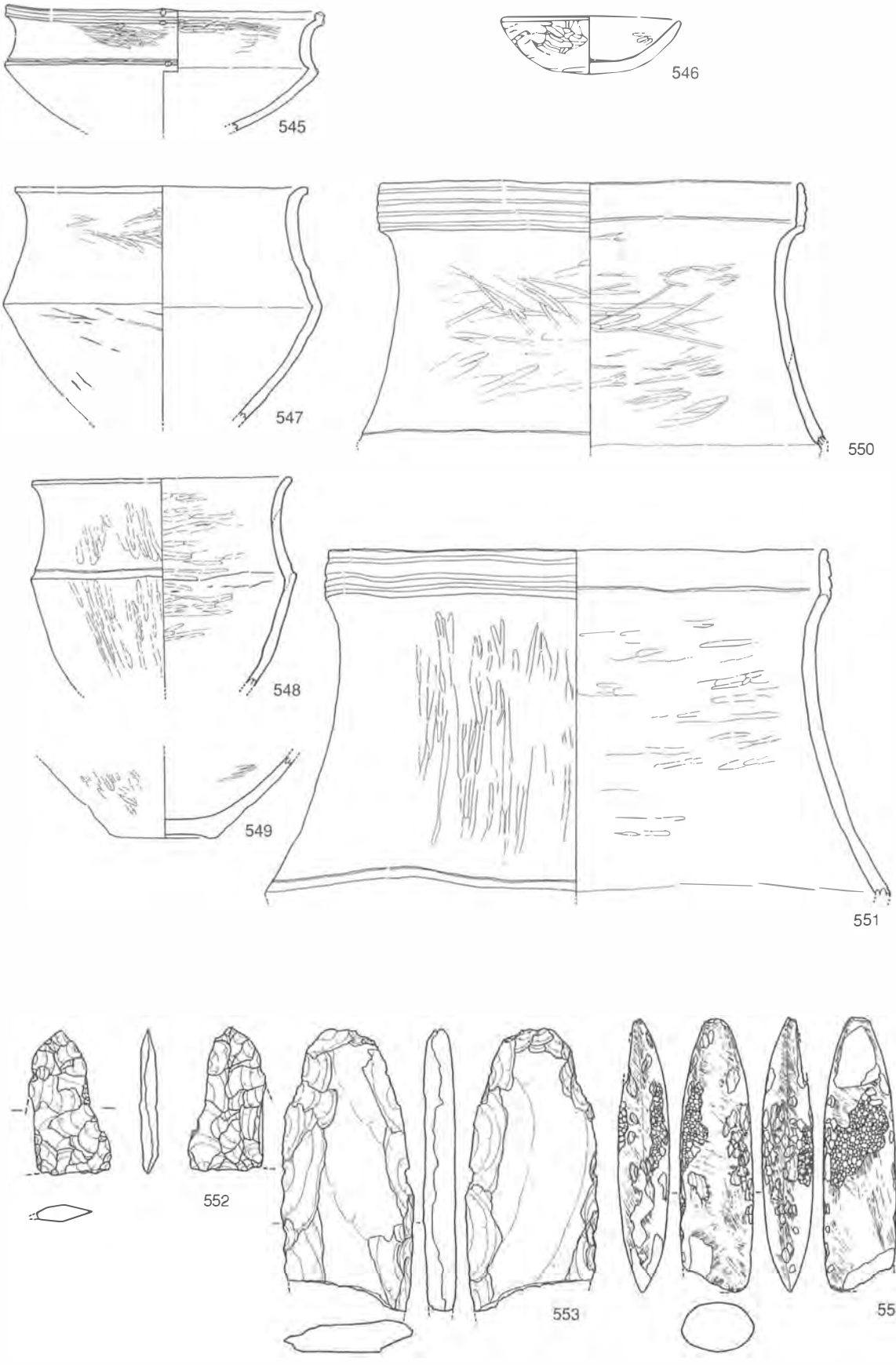
【遺構・埋土】（第198図・図版97）

調査区南側に位置する。調査の終盤に検出されたため、他の遺構によって削平された形になったが、残存状況から平面プランは円形を呈していたと推測される。その規模もはっきりしないが、長径は 6 ～ 7 m、短径は5.4ｍを測り、遺構検出面から床面までの深さは20cmである。柱穴は調査時で 3 個を確認したが、総数は不明である。炉跡や硬化面は検出されなかった。周囲の住居址との切り合い関係は46－08号・46－19号が最も古く、次いで本住居址、最も新しいのが46－10号住居址、と推測される。なお、北側の壁際には埋設土器（46－06号埋設土器）が 1 基検出されているが、掘り方はなく、床面と埋設土器の底部のレヴェルがほぼ一致しており、住居址に伴うと考えられる。

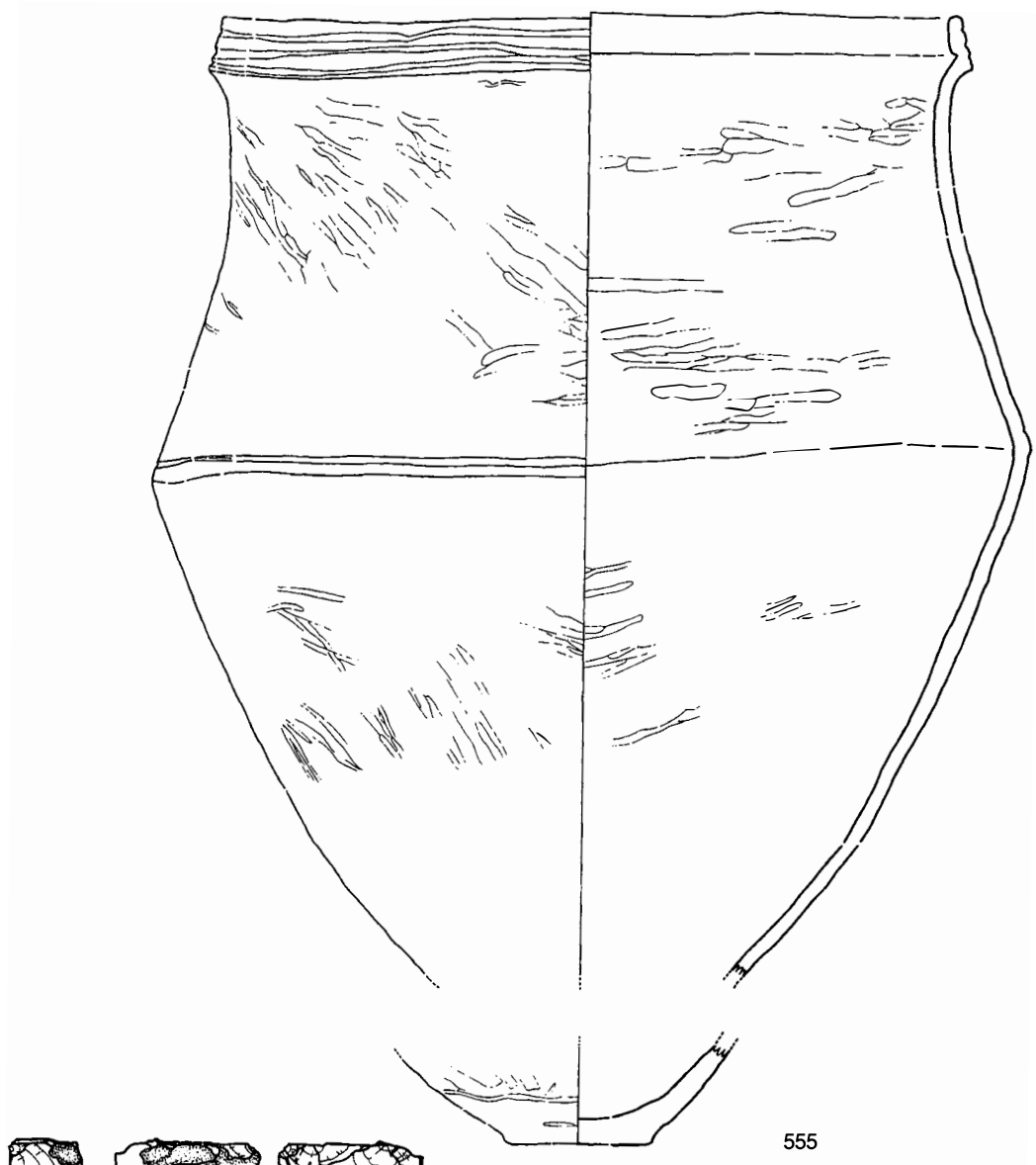
住居址の埋土は、 3 層に分けられるが、主な埋土はやや粘質を持ちしまりのない暗黄褐色粘質土（埋土 1 層）である。埋土 1 層に比べ灰色がかり粘質を持つ暗黄灰色粘質土（埋土 2 層）は南側の壁際に、粘質を持つ明黄褐色粘質土（埋土３層）は床面上にのみ堆積している。

【遺物】（第199図）

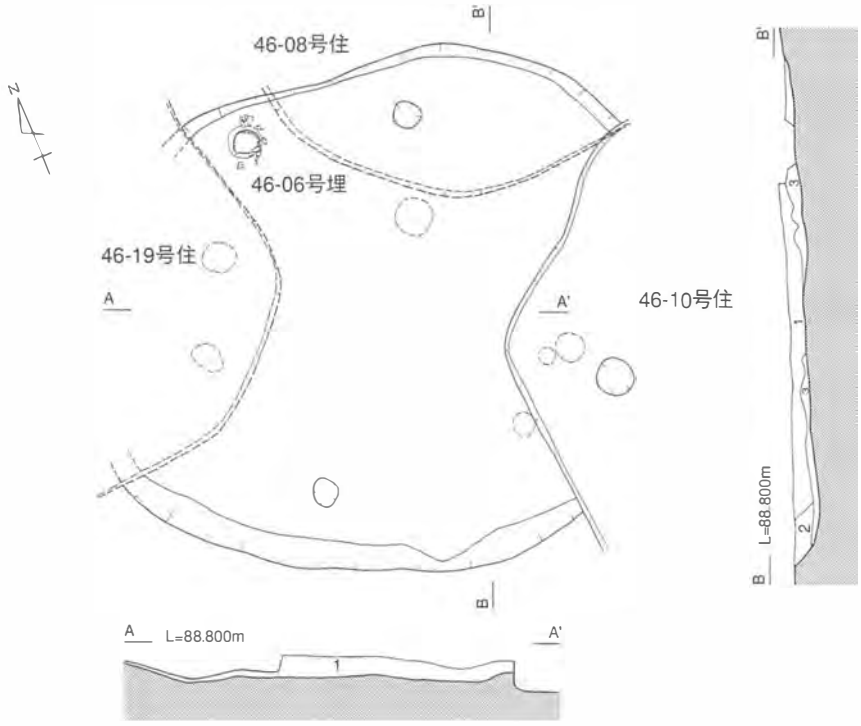
本住居址からは、縄文土器と石器が出土している。削平のためか遺物の出土量はそれほど多くない。縄文土器は深鉢、浅鉢が出ており、反転復元でほぼ全形を復元できるものもあるが、ほとんどは破片である。それらの中から浅鉢 1 点、深鉢 2 点を図示しておく。石器は打製石斧、磨製石斧、二次加工のある剥片、敲石・磨石等が出ており、それらの中から幾つか選んで図示している。



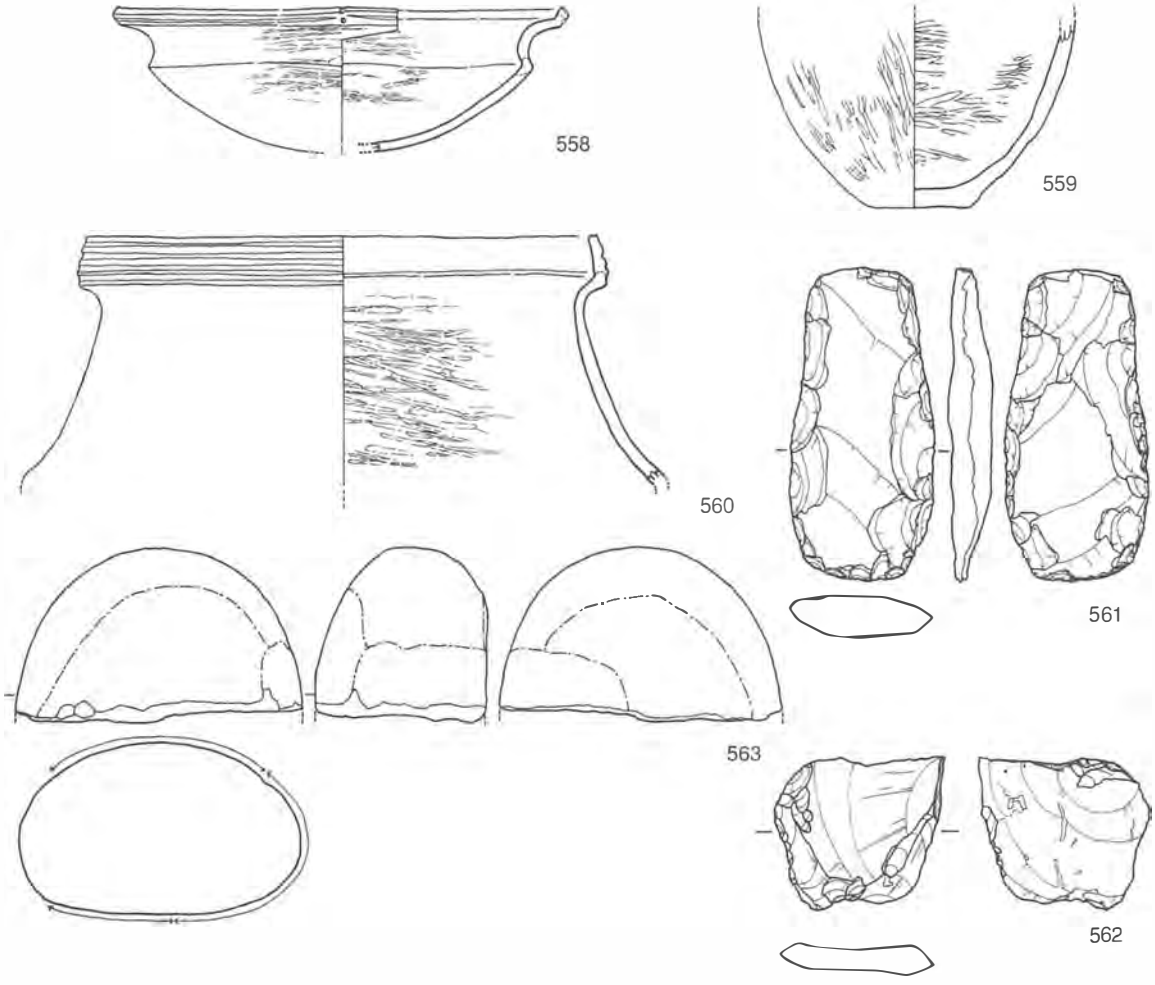
第196図　46－19号住居址出土遺物実測図1



第197図　46－19号住居址出土遺物実測図２



第198図　46－20号住居址遺構実測図



第199図　46－20号住居址出土遺物実測図

（2）　埋設土器遺構

46－03号埋設土器

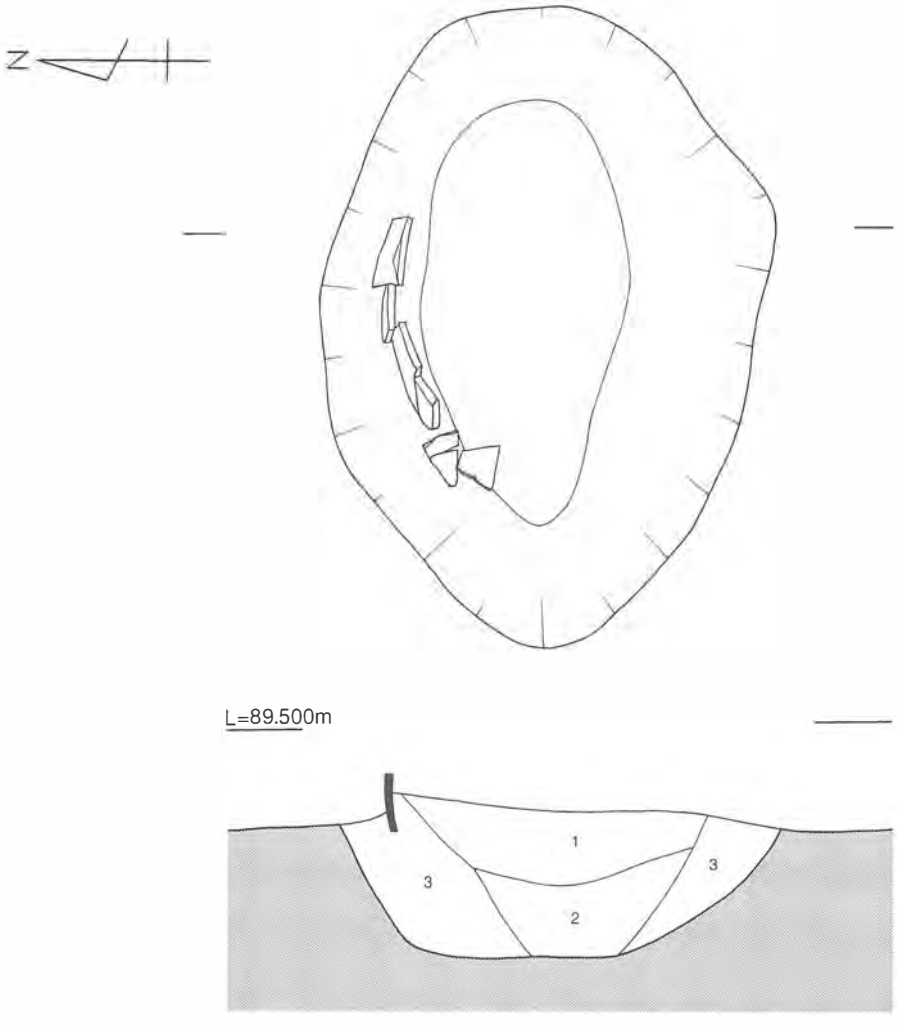
【遺構・埋土】（第200図）

調査区北側に位置する。削平によってかなり原形を失っていたが、一応掘り方を持つ埋設土器遺構である。掘り方は楕円形を呈する。削平によって本来の規模は明らかでないが、調査時の規模は、長径が85cm、短径が60cmを測り、遺構検出面から最深部までの深さは20cmである。掘り方内には深鉢の胴部の破片があるだけで、浅鉢等供伴する遺物は見られなかった。また埋設時の姿勢もはっきりしないが、残存状況から口縁を上に垂直に据えられていた可能性がある。周囲には伴うような遺構は確認されなかった。

埋設土器遺構の埋土は、３層に分層される。さらに、深鉢はほとんど失われているが、埋土の状況から深鉢内の埋土と深鉢と掘り方内の埋土に分けられる。深鉢内の埋土は粘質を持たずしまりの弱い黒褐色砂質土（埋土１層）と粘質を持つ暗褐色粘質土（埋土２層）、掘り方内の埋土は粘質をやや持ちしまりのある暗褐色砂質土（埋土３層）である。このうち埋土１層は、遺構撹乱後に流入したものと考えられる。

【遺物】

掘り方内には深鉢の破片があったものの、小破片のため図示していない。



第200図　46－03号埋設土器遺構実測図

46－04号埋設土器

【遺構・埋土】（第201図・図版98）

調査区南側に位置する。上面を削平されているが、掘り方を持つ埋設土器遺構である。掘り方は不整形な楕円形を呈する。長径は85cm、短径は65cmで、遺構検出面から最深部までの深さは30cmである。掘り方内には、深鉢が口縁の大半を欠損した形で検出された。また底部も欠損していたが、これは埋設当時から欠損していたと考えられる。やや傾斜しているものの、深鉢は口縁を上にほぼ垂直に据えられていた。上面を削平されているため、浅鉢等セットとなる土器の有無については不明である。周囲には伴うような遺構は確認されなかった。

埋設土器遺構の埋土は、深鉢内の埋土と掘り方内の埋土に分けられる。深鉢内の埋土は、黒褐色砂質土（埋土１層）、暗黄褐色砂質土（埋土２層）、暗褐色弱粘質土（埋土３層）、そして暗褐色粘質土（埋土４層）の４層である。掘り方内の埋土は、埋土４層より粘質を持たない暗褐色粘質土（埋土５層）であるが、埋土１層は埋土２～４層堆積後、流入したものと考えられる。

【遺物】（第201図・図版163）

33は口縁部の大半と胴部の一部、そして底部を欠損した深鉢である。最終器面調整は横ミガキであるが、胴部外面はミガキが不十分のため、貝殻条痕が残っている。口縁帯はやや内傾して、３条の沈線が巡っている。頸部から肩部にかけては緩やかなカーブを描いて外湾し、そして胴部も緩やかに張り出している。頸部には補修孔が２個ある。底部の欠損については前述したように埋設時には既に欠損していたと考えられ、埋設姿勢からして埋葬用の可能性が高い。

46－05号埋設土器

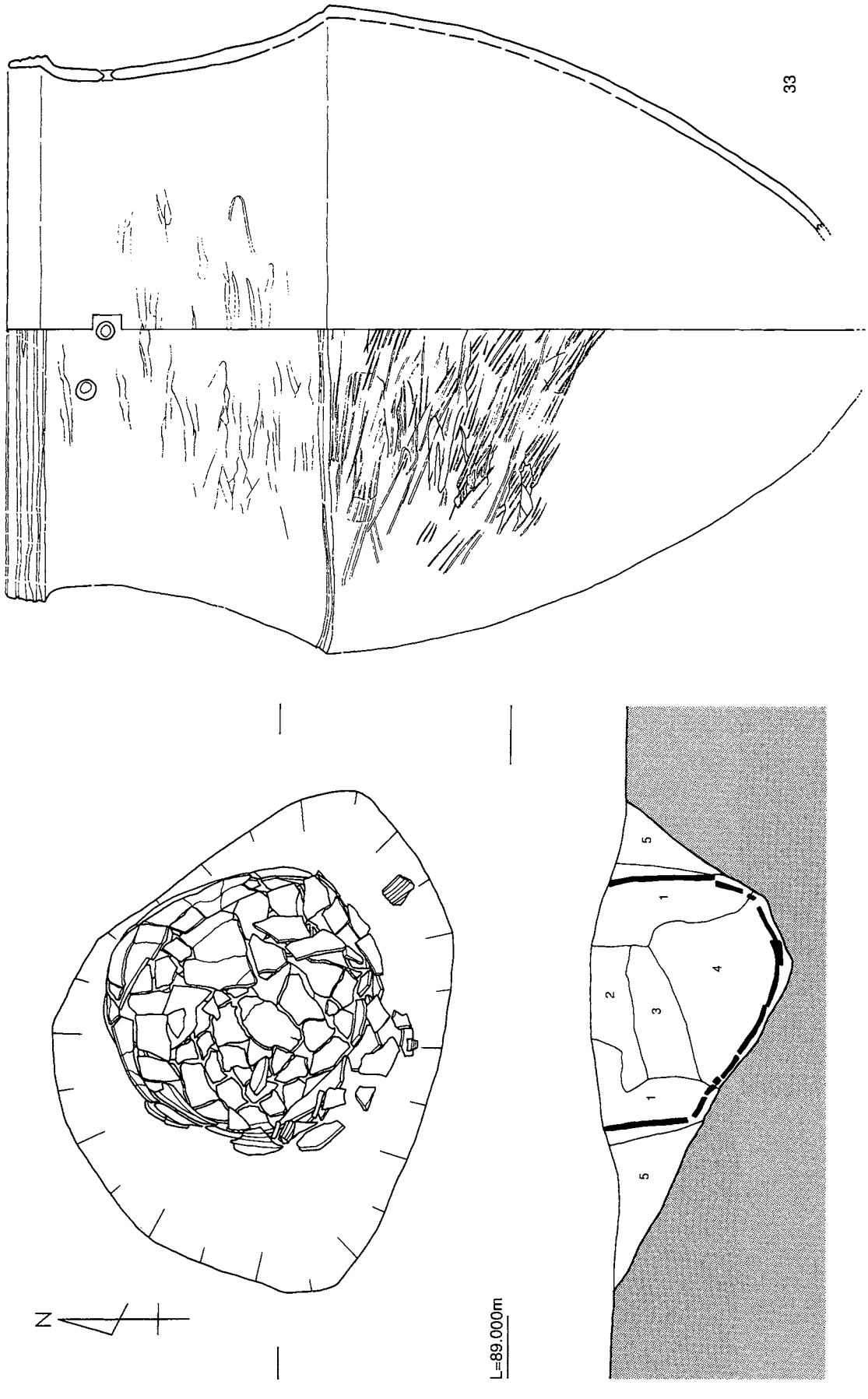
【遺構・埋土】（第202図・図版99）

調査区南側に位置する。掘り方を持つ埋設土器遺構であり、多少上面を削平されていたが、遺構の残りは良好である。掘り方はやや不整形な円形を呈する。長径は65cm、短径は55cmを測り、遺構検出面から最深部までの深さは35cmである。掘り方内には浅鉢と深鉢がセットで検出された。おそらく合せ口状に埋設されていたと考えられるが、検出時、浅鉢は深鉢内に破損した状態で落ち込んでおり、はっきりしない。主体となる深鉢は、口縁を上にほぼ垂直に据えられていた。浅鉢の破損が激しく、埋設当時の姿をあまり留めていないが、破損の割に土器片の散逸は少なく、遺物の復元率は比較的高いと言える。周囲には伴うような遺構は確認されなかった。

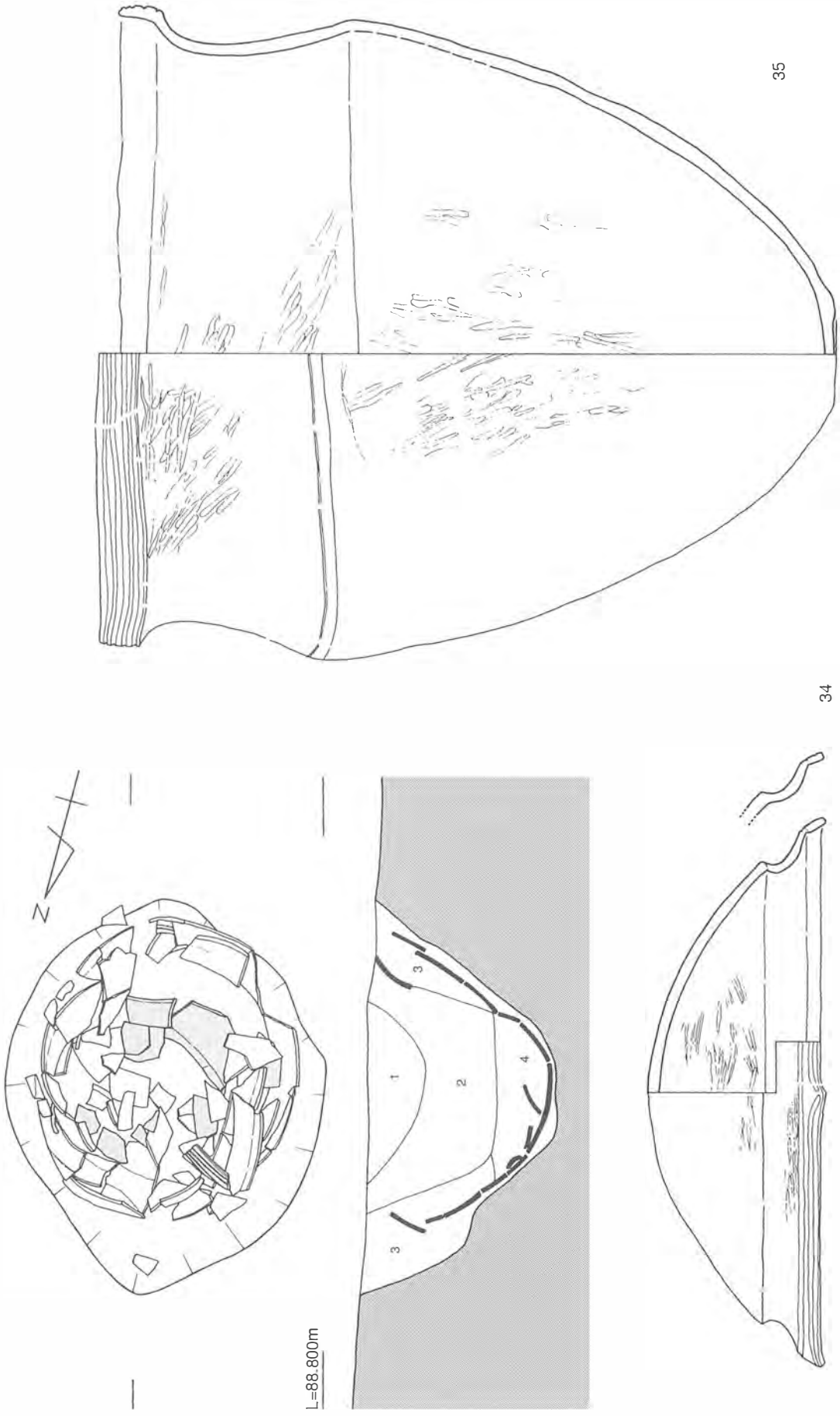
埋設土器遺構の埋土は、４層に分層できる。粘質を持たない黄褐色砂質土（埋土１層）、粘質を持たない暗褐色砂質土（埋土２層）、埋土２層よりしまりのない暗褐色砂質土（埋土３層）、そして粘質を持ちしまりのある暗褐色粘質土（埋土４層）であるが、埋土１～３層は浅鉢破損後に流入したものである。

【遺物】（第202図・図版164）

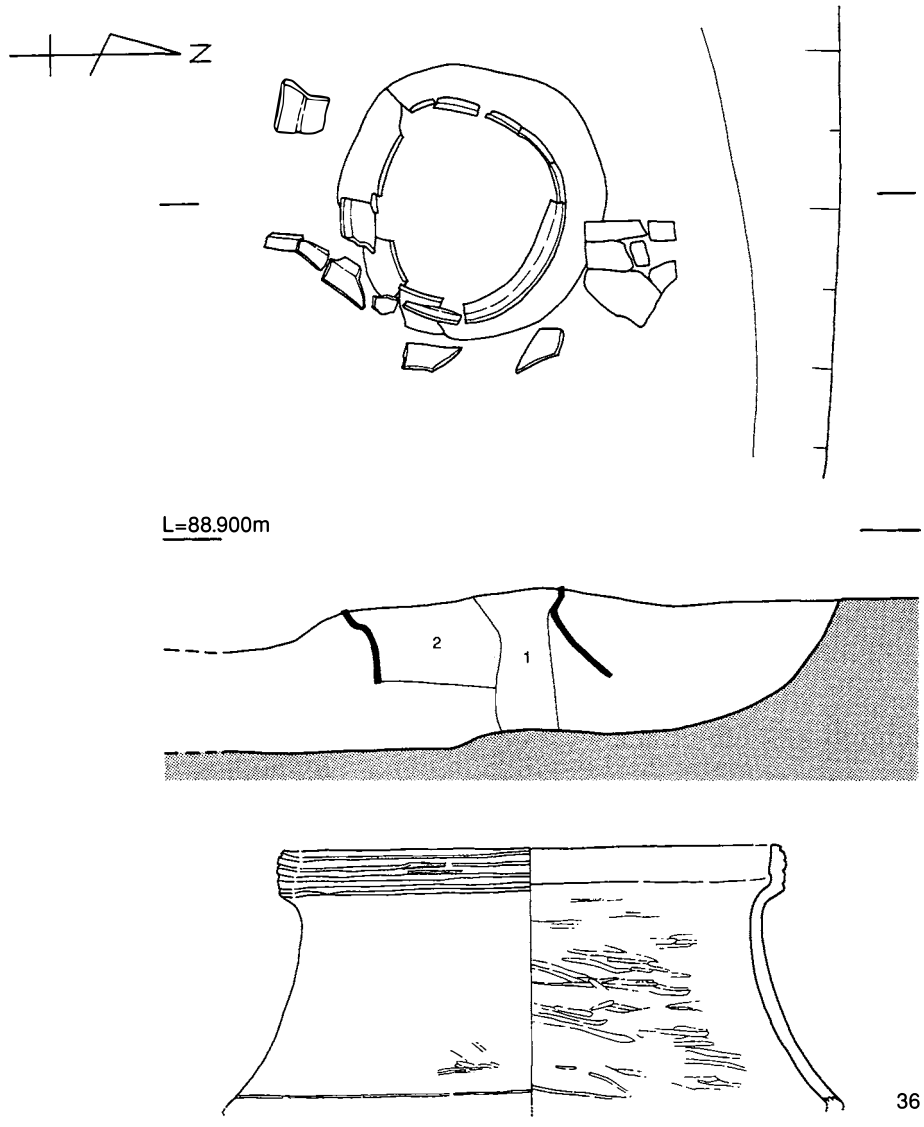
34は口縁部３／４と胴部の一部を欠損した浅鉢である。口縁には山形突起が付されており、口縁帯には２条の沈線が巡っている。器面調整は主に横ナデとミガキであるが、横ナデは口縁帯にのみ施されている。口縁帯はやや外反し、頸部から肩部にかけてはつの字状に外湾している。胴部はあまり張り出さず、一気に底部へと繋がっている。**35**は口縁部３／４と胴部の一部を欠損した深鉢である。大型の深鉢であるが、器高に占める胴部高の割合が、同時期の深鉢の中でもかなり高く、胴部高がそれ以外の部位高の２倍以上ある。器



第201図　46−04号埋設土器実測図



第202図　46－05号埋設土器実測図



第203図　46－06号埋設土器実測図

面調整はミガキが主で、各部位でミガキの方向が異なる。口縁帯は直立しており、４条の沈線が巡っている。短めの頸部はやや弓形に外湾し、胴部は緩やかに張り出している。底部はわずかに高台状の上げ底になっている。

46－06号埋設土器

【遺構・埋土】（第203図・図版100）

調査区南側に位置する。46－20号住居址の北側の壁際にあり、掘り方は確認されなかった。深鉢の胴部以下を打ち欠いた状態で検出された。口縁を上にほぼ垂直に据えられていた。多少土器片が散逸していたが、比較的良く埋設当時の姿を留めていた。46－20号住居址の項で述べたように、床面と埋設土器の底部のレヴェルがほぼ一致していたことから、本埋設土器が住居址に伴うものと推測される。

埋設土器遺構の埋土は、掘り方がないため深鉢内の埋土のみとなる。２層に分けられ、粘質を持たない黒褐色砂質土（埋土１層）と淡黒褐色砂質土（埋土２層）であるが、埋土１層は後世の流入土の可能性がある。

【遺物】（第203図・図版165）

36は口縁部から頸部の半分と胴部以下を欠損した深鉢である。器面はやや風化しているが、調整痕が確認できる。器面調整は横ミガキが主で、頸部外面には斜め方向のミガキが施されている。口縁帯は直立気味に立ち上がり、頸部は口縁付近がやや強く開くものの、肩部に至る部分は緩やかに外湾している。かろうじて界線が残っているが、肩部の上にあるわずかな段として表現されているに過ぎない。

（3）　その他

46－01号円形周溝

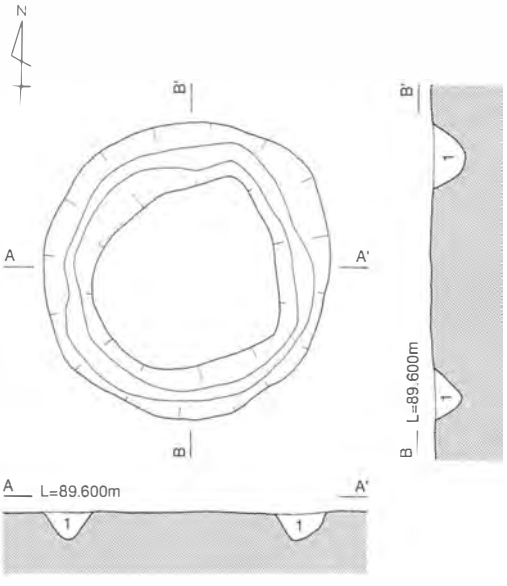
【遺構・埋土】（第204図・図版101）

調査区北側に位置する。平面プランは円形を呈する。長径は3.0ｍ、短径は2.9mを測り、周溝の幅は0.5ｍ、遺構検出面から床面までの深さは30cmである。本遺跡群で検出された円形周溝遺構の中で最も小さい。周囲には本円形周溝に伴うような遺構は確認されなかった。

円形周溝遺構の埋土は、１層のみ確認された。黒褐色砂質土である。

【遺物】

本円形周溝からは、縄文土器と石器が出土しているが、いずれも小破片であり、図示していない。



第204図　46－01号円形周溝遺構実測図

15　47区

【概要】（第171・205図・図版12）

石の本遺跡群の中央よりやや西側に位置する調査区である。北から南に向かって中央にすり鉢状に傾斜している。当該時期の遺構が密集する42区を中心とした区域では、最も低い所に立地しており、本遺跡群の中央を通る丘陵の西縁のつけ根にあたる。また28区、23区を通って南に走る谷部の始まりでもある。標高87.0mから88.4mにかけて位置している。なお47区は東西2つに分かれているが、これは工事の都合上、本来1つの調査区が2つに分断されたもので、どちらも47区として扱っている。

遺構としては竪穴住居址2軒と円形周溝遺構1基が検出されている。竪穴住居址は北側に、円形周溝遺構は南側に分布している。遺構の分布は希薄であるが、北側に隣接する46区では多くの住居址が検出されており、本調査区の2軒の住居址もその流れで捉えた方が理解しやすい。遺構検出面はⅡc層からⅢ層である。出土遺物は縄文土器、石器の他玉類、土器片錘が出土している。縄文土器は深鉢、浅鉢があり、破片資料がほとんどであるが、遺物量は比較的多い。46区からの流れ込みがあるためと考えられる。石器は打製石斧、石鏃、二次加工のある剥片、敲石・磨石が多く、磨製石斧、石匙、スクレイパー、石鎌、石錘、石皿等も見られる。玉類は勾玉、管玉があり、石製と土製がある。

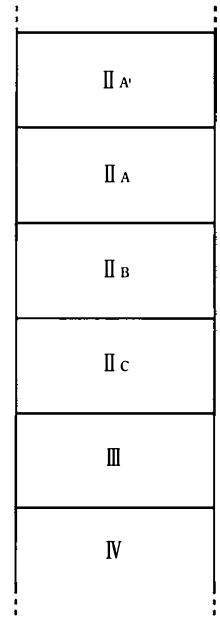
（1）　竪穴住居址

47－01号住居址

【遺構・埋土】（第206図・図版102）

調査区の北端に位置する。遺構の約1／3が調査区外にあり、さらに後世の撹乱によって削平されているが、平面プランは、円形を呈すると考えられる。長径は5.8m、短径は4.2m以上を測り、遺構検出面から床面までの深さは14cmである。柱穴は、後世の撹乱が激しく検出できなかった。中央に炉跡とおぼしき焼土の落ち込みが1基検出された。47－02号住居址の炉跡と重複しており、その規模ははっきりしないが、150～200×100cm程と推測される。硬化面は確認されなかった。なお、本住居址は後述する47－02号と切り合い関係にあり、土層断面等から本住居址の方が新しいと考えられる。

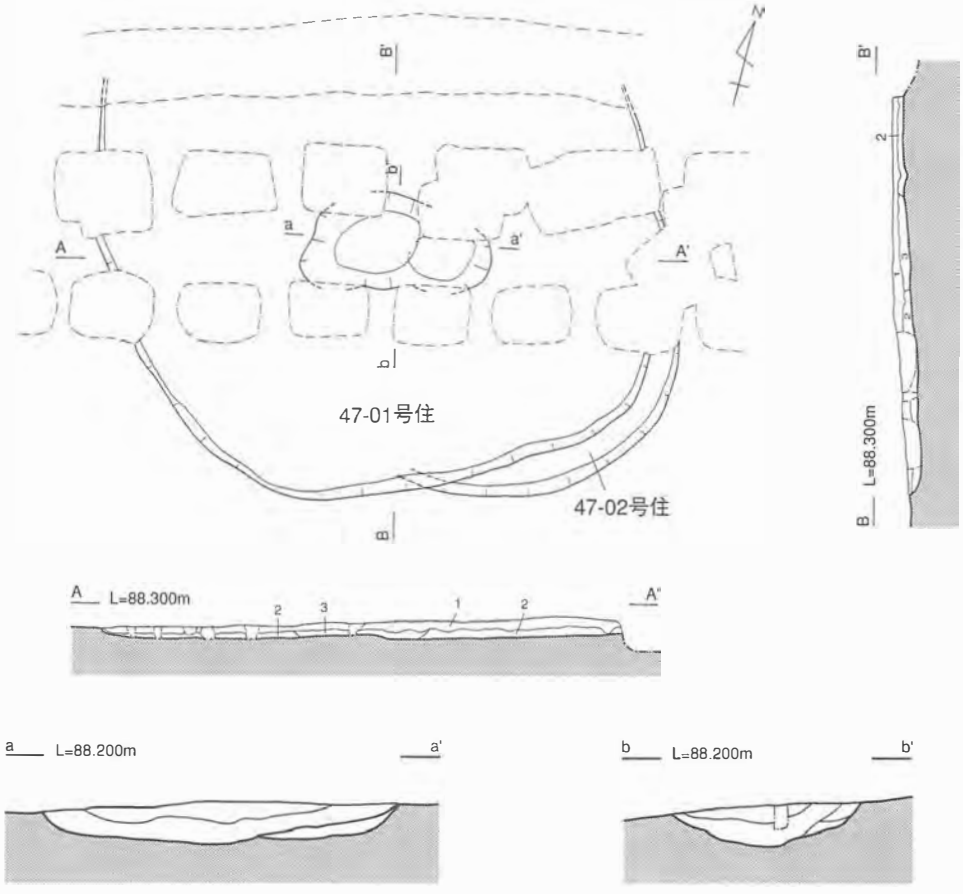
住居址の埋土は、大きく2層に分層できる。あまり粘質を持たずしまりのない暗褐色土（埋土1層）と粘質を持ちややしまりのある暗黄褐色土（埋土2層）である。この他に埋土2層の中で、炉跡付近の土に焼土が混じっている箇所（埋土3層）がある。



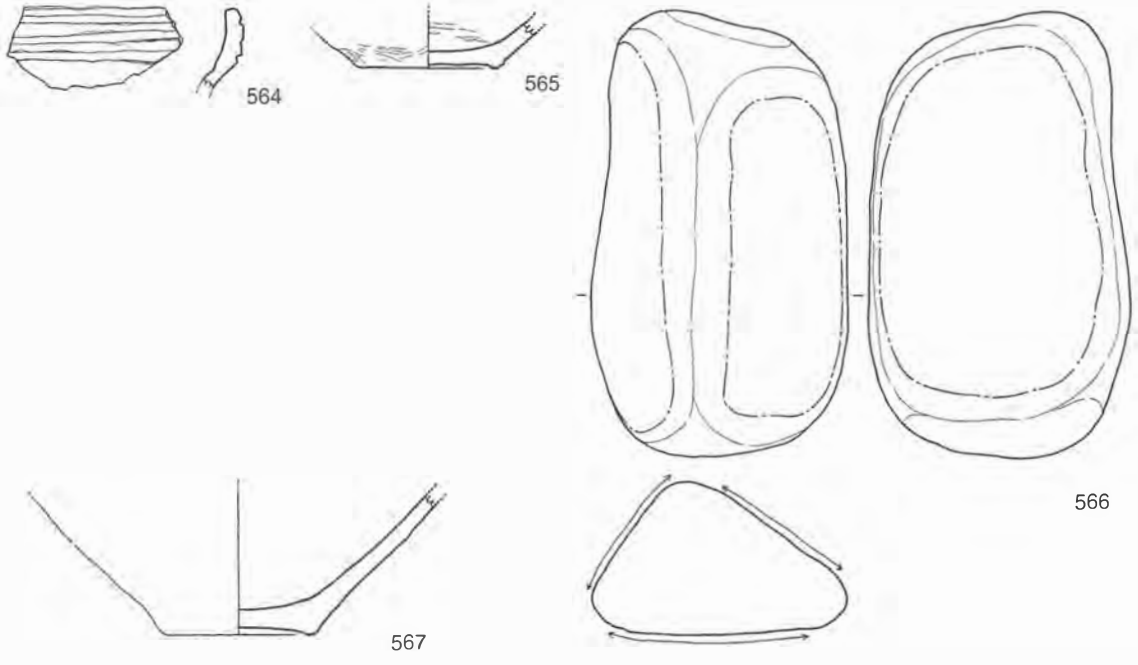
第205図　47区基本層序図

【遺物】（第207図）

本住居址からは、縄文土器と石器が出土している。縄文土器は破片資料のみで、量的も少ない。その中から深鉢片を3点図示している。石器は二次加工のある剥片と石皿で、ここでは石皿のみ図示している。



第206図　47－01・02号住居址遺構実測図



第207図　47－01・02号住居址出土遺物実測図

47－02号住居址

【遺構・埋土】（第206図・図版102）

調査区の北端に位置する。遺構のほとんどが47－01号住居址によって削平されており、その平面プランや規模は不明である。ただ遺構検出面から床面までの深さは10cmである。47－01号住居址同様、柱穴は検出できなかった。炉跡は47－01号住居址の炉跡に切られる形で 1 基見つかったが、その規模は明らかでない。硬化面は確認されなかった。

住居址の埋土は、 3 層に分層される。粘質をあまり持たず、あまりしまりのない暗褐色土（埋土 1 層）とややしまりのある、アカホヤ火山灰の二次堆積土混じりの暗褐色土（埋土 2 層)、そしてアカホヤ火山灰の二次堆積土（埋土 3 層）の 3 層である。

本住居址は、そのほとんどが失われた状態で検出されており、住居址と認定することに疑問な点もあるが、一応住居址として報告する。

【遺物】（第207図）

本住居址からは、縄文土器が出土している。深鉢の底部 1 点のみだが、図示しておく。

（2）　その他

47－06号円形周溝

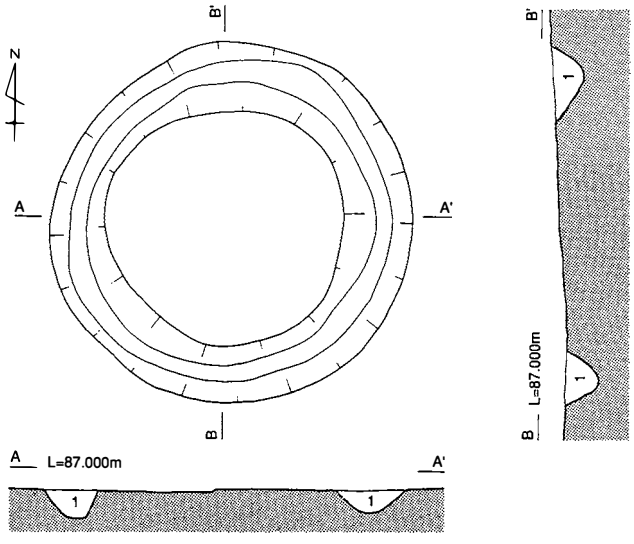
【遺構・埋土】（第208図）

調査区南側に位置する。平面プランは円形を呈する。長径・短径共に4.1ｍを測り、周溝の幅は0.9m、遺構検出面から最深部までの深さは40cmである。上面が削平されている可能性もあるが、周囲には本円形周溝に伴うような遺構は確認されなかった。

円形周溝遺構の埋土は、 1 層のみ確認された。粘質をあまり持たずしまりのない暗褐色土で、細かい明褐色土の斑点を含む。

【遺物】

本円形周溝遺構からは、縄文土器片が出土しているが、小片のため図示していない。



第208図　47－06号円形周溝遺構実測図

16　49区

【概要】（第171・209図）

石の本遺跡群の北側に位置する調査区である。北西から南東に向かって傾斜しており、傾斜はややきつくなっている。その傾斜は、北に行くにしたがってさらにきつくなっているが、調査区北側はかなり削平されているため、やや平坦気味になっている。標高90.0ｍから91.5ｍにかけて位置している。本遺跡群の当該時期の集落では最も西側に位置している調査区である。

遺構としては、竪穴住居址10軒、埋設土器遺構２基の他に円形周溝遺構１基が検出されている。遺構の分布は東側に集中しており、南側にも広がっているようである。調査時もっと多くの遺構を検出していたが、住居址として認定できたもののみ掲載することにした。遺構検出面はⅡb層からⅢ層にかけてである。出土遺物は縄文土器、石器の他に玉類、土製品が出土している。遺構が多い分遺物も多く、比較的まとまった量の遺物が出ている。縄文土器は浅鉢、深鉢、鉢が出ており、そのほとんどが破片資料である。石器は打製石斧、敲石・磨石、二次加工のある剥片が多く、磨製石斧、石鏃がそれに次ぎ、十字形石器、石匙、石錘、スクレイパー、石皿、砥石等も見られる。玉類は勾玉、管玉があり、石製と土製がある。土製品は円柱形土製品が出ている。

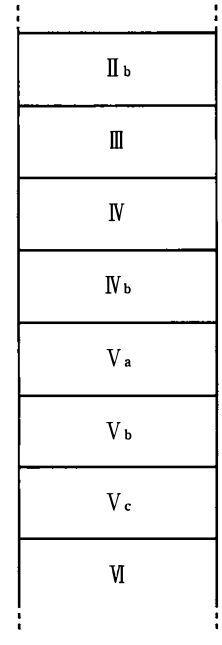
（1）　竪穴住居址

49－01号住居址

【遺構・埋土】（第210図）

調査区東側に位置する。東側の遺構ラインがはっきりしないが、平面プランは楕円形を呈する。上面は削平されているようだが長径は6.6ｍ、短径は5.2ｍを測り、遺構検出面から床面までの深さは20cmである。柱穴は計４個確認された。中央よりやや西寄りの地点に110×100cmの炉跡が１基検出されたほか、竪穴内には計４個のピットが検出された。これらの性格についてははっきりしないが、柱穴の可能性も否定できない。なお硬化面は確認できなかった。

住居址の埋土は、黒褐色シルト混じりの暗褐色シルトの１層のみである。



第209図　49区基本層序図

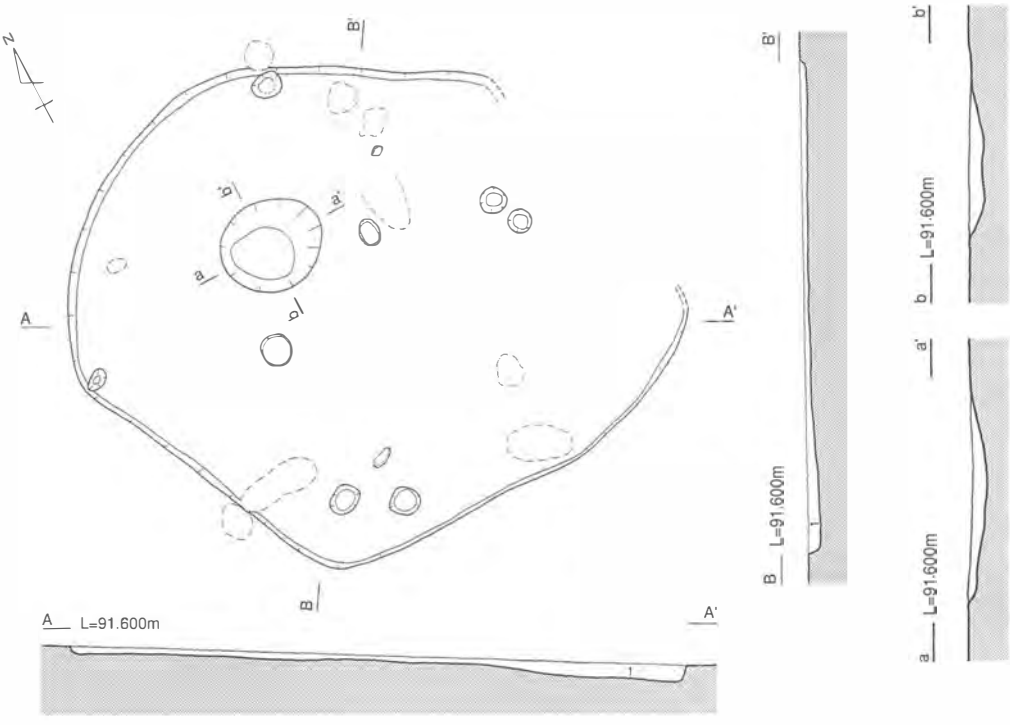
【遺物】（第211図）

本住居址からは、縄文土器と石器が出土している。縄文土器は小破片のみで、図示していない。石器は打製石斧、敲石・磨石が出ており、それら２点を図示している。

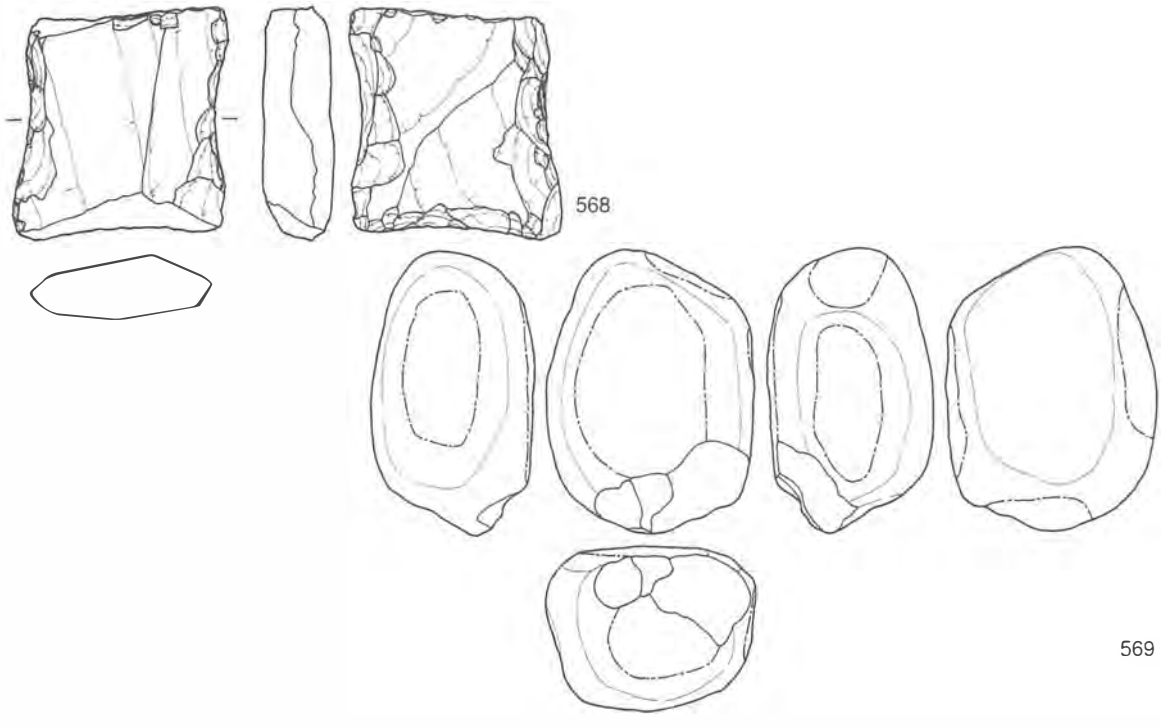
49－05号住居址

【遺構・埋土】（第212図・図版103）

調査区中央に位置する。東西方向にやや歪んでいるが平面プランは円形を呈する。長径は5.6ｍ、短径は4.6ｍを測り、遺構検出面から床



第210図　49－01号住居址遺構実測図



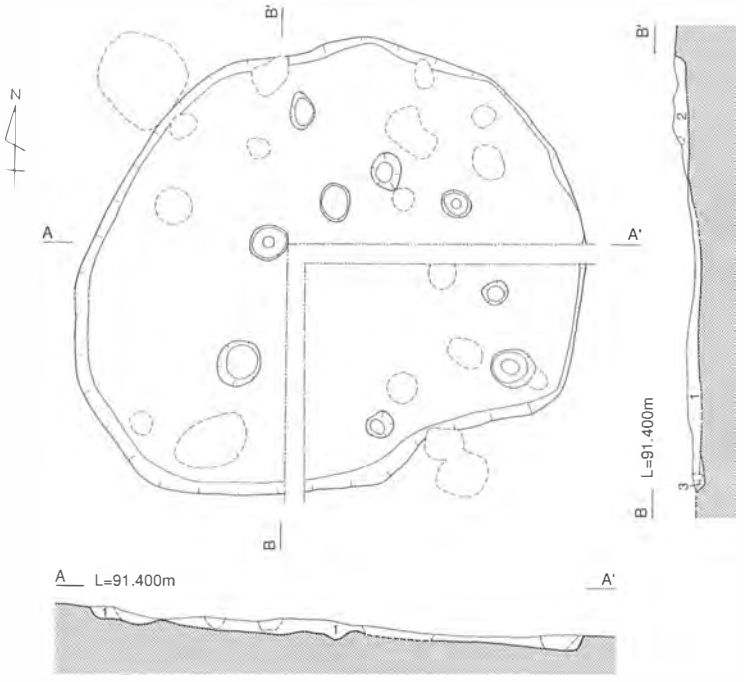
第211図　49－01号住居址出土遺物実測図

面までの深さは16cmである。柱穴は計８個確認された。炉跡は検出されなかった。柱穴と柱穴の間にピットを２個検出したが、本来は柱穴であった可能性もある。硬化面は確認できなかった。

住居址の埋土は、３層に分けられる。黒褐色シルト混じりの褐色シルト（埋土１層）が主な埋土であり、その下に黒褐色シルトとニガ土混じりの黄褐色シルト（埋土２層）と黄褐色シルト混じりの褐色シルト（埋土３層）が壁際に三角堆積している。

【遺物】

本住居址からは、遺物は出土していない。



第212図　49－05号住居址遺構実測図

49－67号住居址

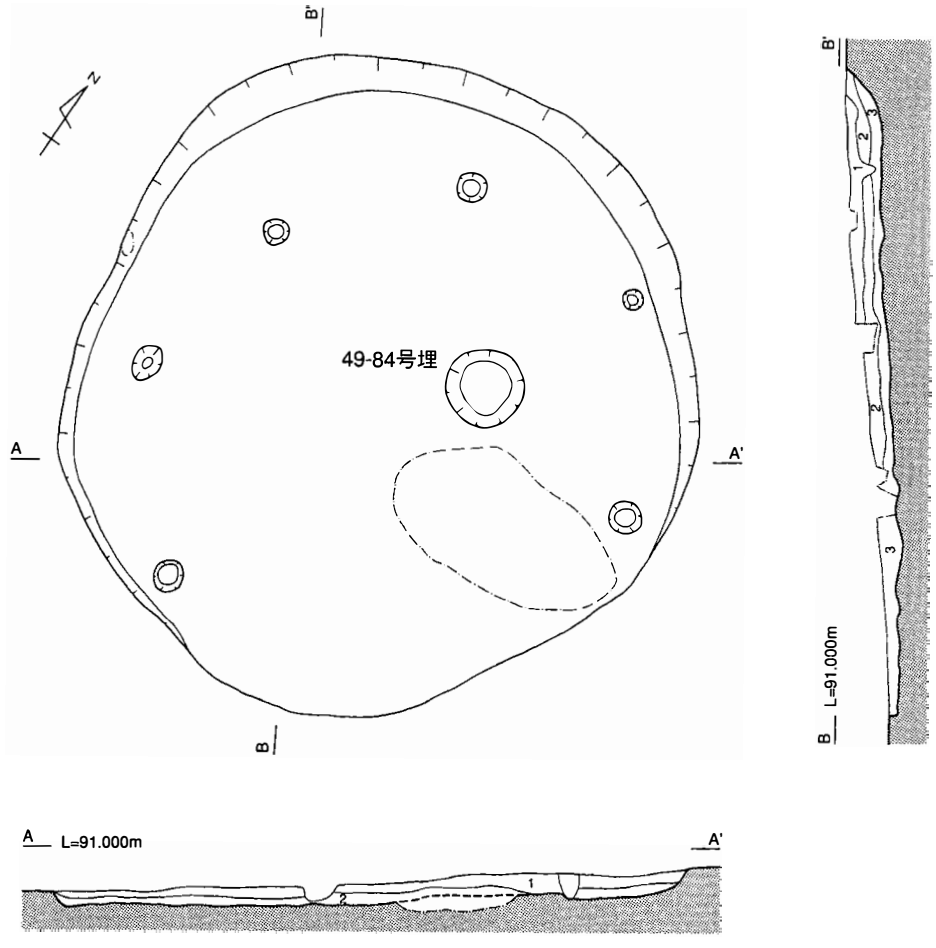
【遺構・埋土】（第213図・図版104）

調査区東側に位置する。部分的に撹乱によって削平されているが、平面プランは円形を呈する。径は7.0mを測り、遺構検出面から床面までの深さは30cmである。柱穴は計６個確認された。炉跡はなく、住居址に伴うような他のピットも検出されなかった。また硬化面も確認されなかった。中央やや東寄りの地点に埋設土器（49－84号埋設土器）が１基検出されているが、住居址の埋土を掘り下げており、本住居址には伴わないと考えられる。

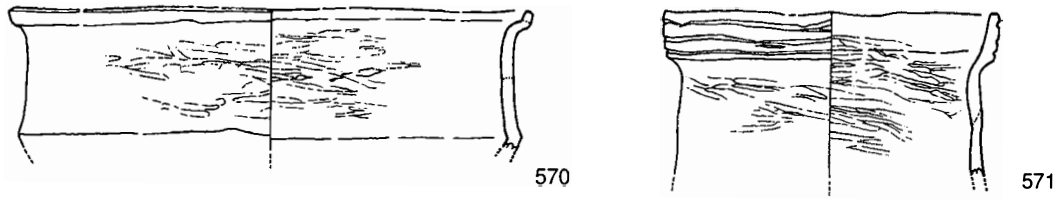
住居址の埋土は、３層に分けられる。黄褐色砂質土（埋土１層）と茶褐色シルト（埋土２層）、そして灰褐色シルト（埋土３層）であるが、埋土１層は南側に行くにつれて削平されており、南壁付近では確認できなかった。

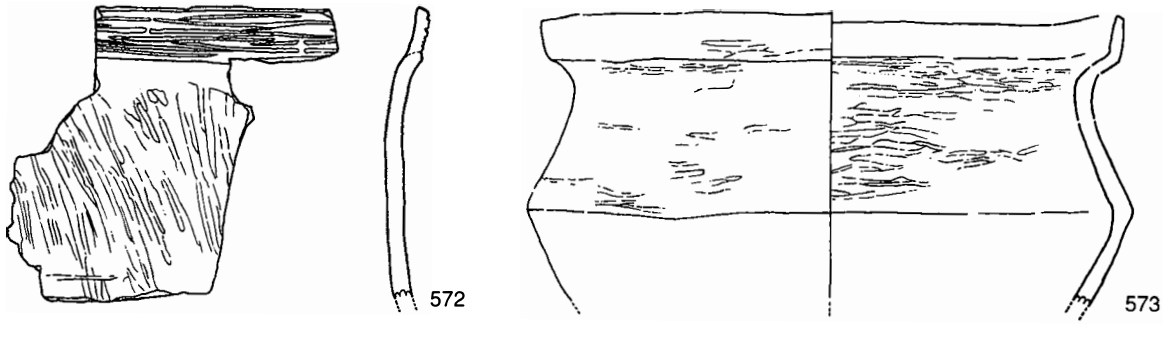
【遺物】（第214・215図・図版137）

本住居址からは、縄文土器と石器の他玉類が出土している。縄文土器は破片資料のみで、その中から浅鉢１点、深鉢３点を図示している。石器は打製石斧、磨製石斧、石鏃、石匙、二次加工のある剥片、敲石・磨石、石皿、砥石等が出ており、それらの中から幾つか選んで図示している。玉類は土製丸玉とおぼしきものが１点出ているが、今回は図示していない。

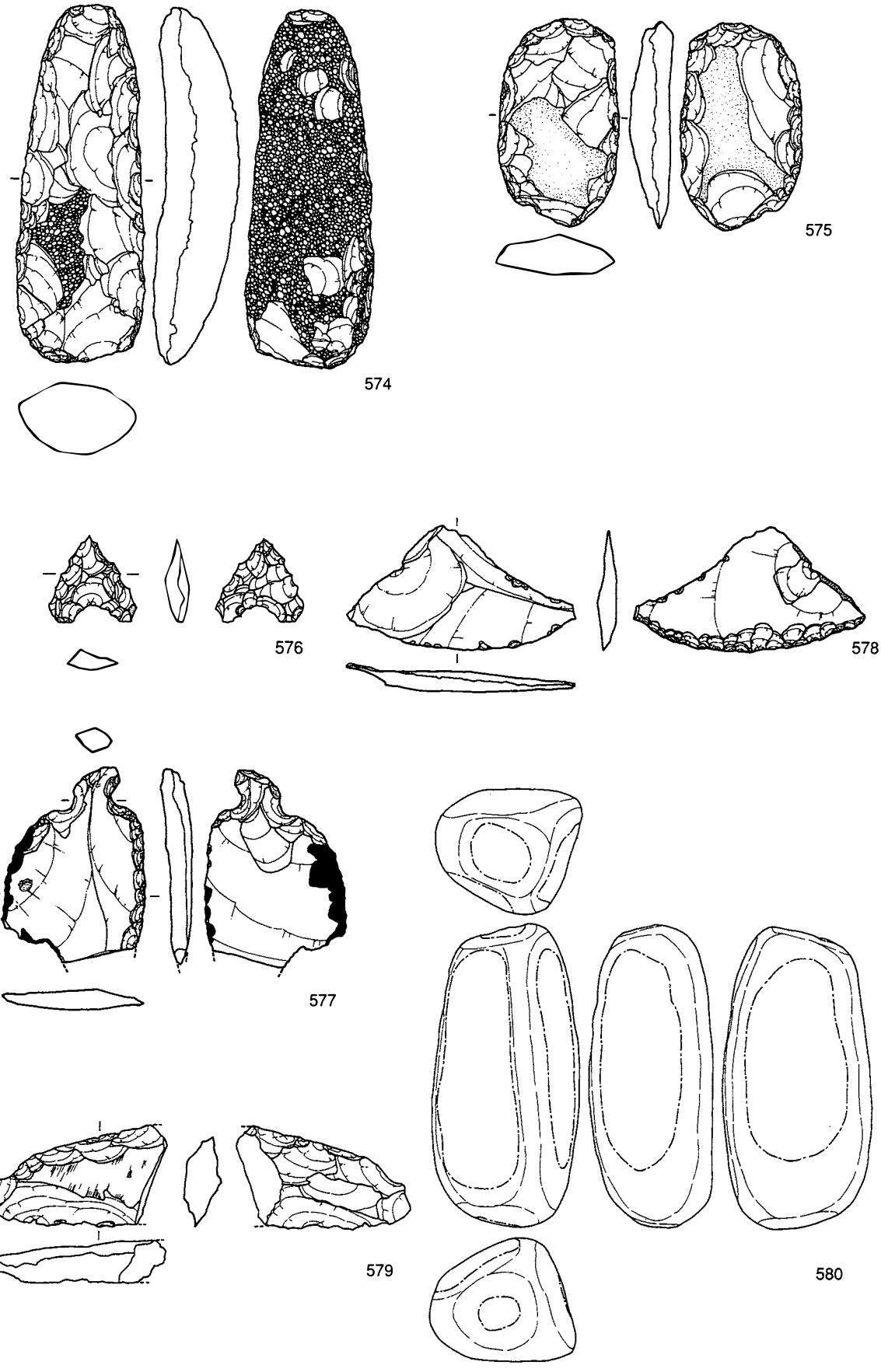


第213図　49－67号住居址遺構実測図





第214図　49－67号住居址出土遺物実測図 1



第215図　49－67号住居址出土遺物実測図2

49－68号住居址

【遺構・埋土】（第216図・図版105）

調査区南側に位置する。南側を49－69号住居址によって削平されているが平面プランは楕円形を呈する。長径は4.7ｍ以上、短径は6.0ｍを測り、遺構検出面から床面までの深さは15cmである。本調査区の住居址は比較的大きいものが多いが、本住居址も例外ではない。柱穴は計 7 個確認された。またこれらのほかに、 2 個の住居址に伴うピットを検出したが、柱穴かどうかははっきりしない。中央付近から径が110cmの炉跡とおぼしき土壙を検出した。硬化面は確認されなかった。前述したように本住居址は49－69号住居址と切り合い関係にあり、その新旧関係は土層断面等から本住居址の方が古いと考えられる。

住居址の埋土は、黒褐色シルト混じりの灰黄褐色シルトの１層のみである。

【遺物】（第217・218図）

本住居址からは、縄文土器と石器の他に玉類が出土している。縄文土器は破片のみで、その中から浅鉢 1 点、鉢 1 点、深鉢 3 点を図示している。石器は打製石斧、磨製石斧、石鏃、石匙、二次加工のある剥片、敲石・磨石等が出ており、それらの中から幾つか選んで図示している。玉類は土製勾玉が 2 点出ており、 2 点とも図示している。

49－69号住居址

【遺構・埋土】（第216図・図版105）

調査区南端に位置する。約 1 ／ 4 が調査区外にのびているが、平面プランはやや隅丸気味の方形を呈すると考えられる。長軸は7.6ｍ、短軸は4.8ｍ以上を測り、遺構検出面から床面までの深さは28cmである。柱穴は 4 個確認されているが、未検出の部分にもあったと考えられるため、 4 個以上としておく。調査区南壁に掛かるように径が100cm前後の炉跡とおぼしき焼土の落ち込みが１基検出された。硬化面は確認されなかった。

住居址の埋土は、２層に分けられる。淡褐色シルト（埋土１層）と淡灰黄色シルト（埋土２層）である。

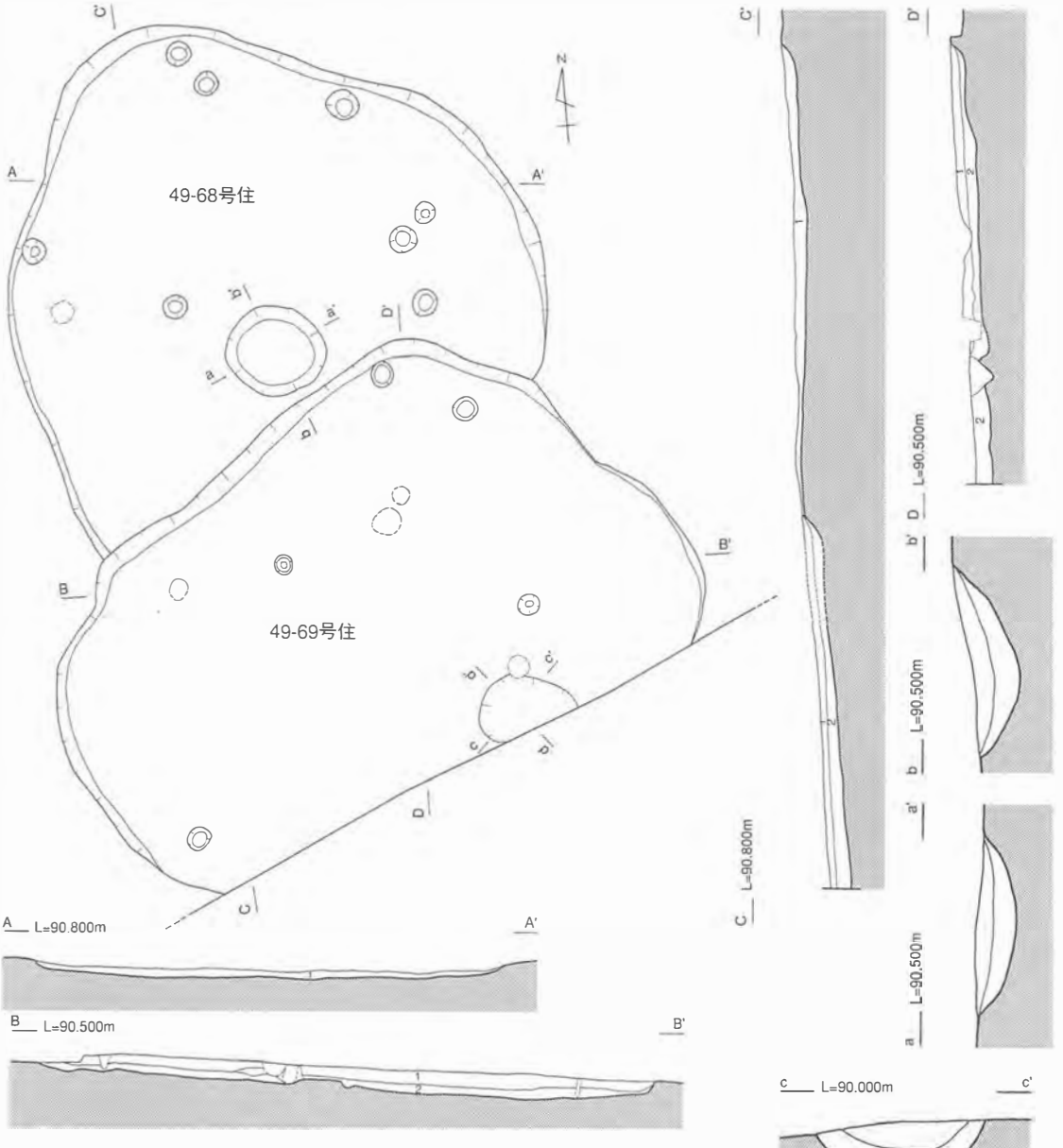
【遺物】（第219図）

本住居址からは、縄文土器と石器の他に玉類が出土している。縄文土器は小破片のみであるが、その中から浅鉢 1 点、深鉢 3 点を図示している。石器は打製石斧、磨製石斧、石錘、使用痕のある剥片、敲石・磨石等が出ており、それらの中から幾つか選んで図示している。玉類は土製勾玉が 1 点出ており、その 1 点を図示している。

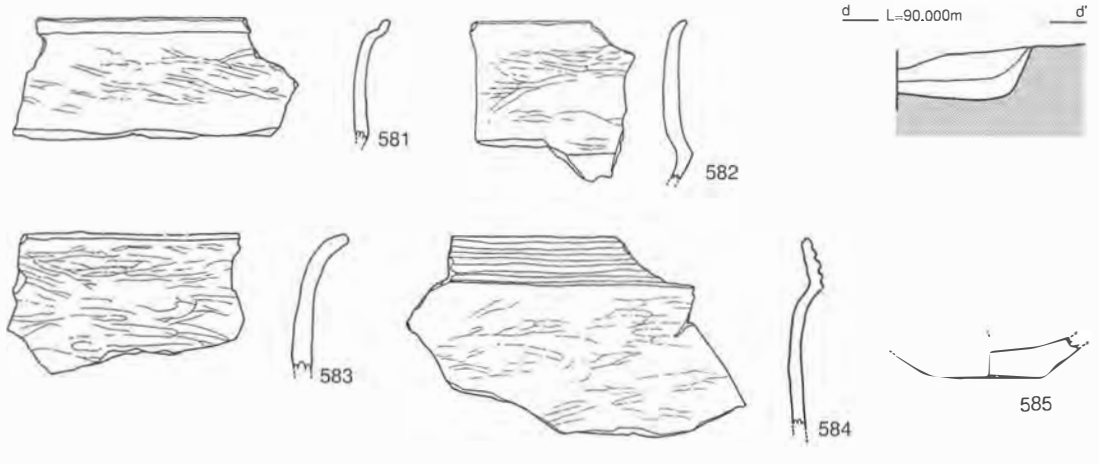
49－77号住居址

【遺構・埋土】（第220図・図版107）

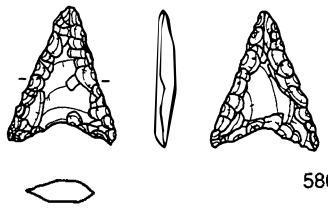
調査区東側に位置する。49－67号住居址と49－83号住居址の間にある。南側を後世の撹乱によって削平されているが、平面プランは円形を呈する。径は6.0ｍを測り、遺構検出面から床面までの深さは32cmである。柱穴は 5 個確認されているが、撹乱によって削平されていることも考えられるため、 5 個以上としておく。炉跡は検出されず、伴うような遺構も確認されなかった。ただ中央付近には撹乱が及んでいるため、既に削平されている可能性もある。

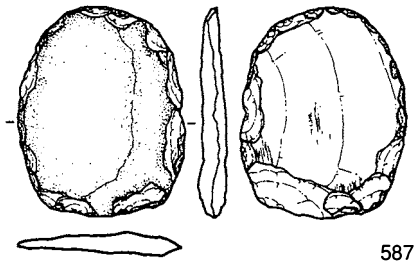


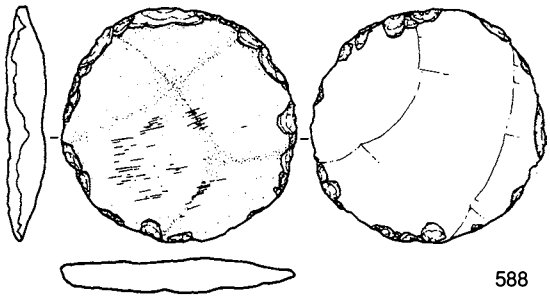
第216図　49－68・69号住居址遺構実測図

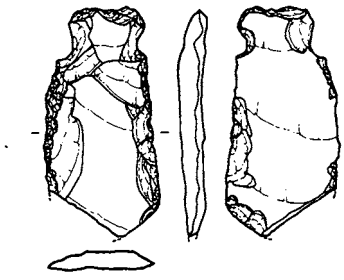


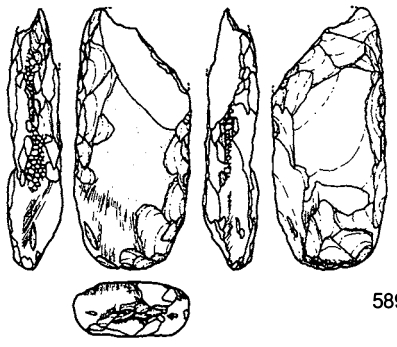
第217図　49－68号住居址出土遺物実測図１

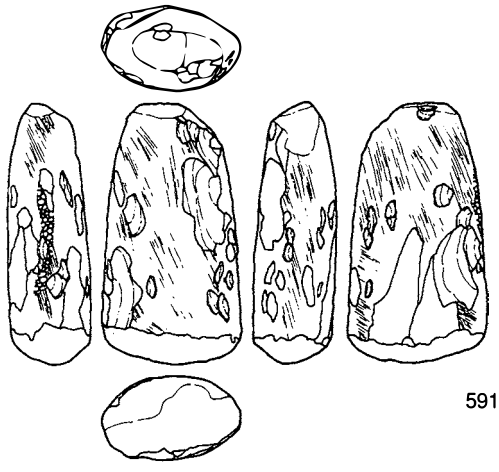


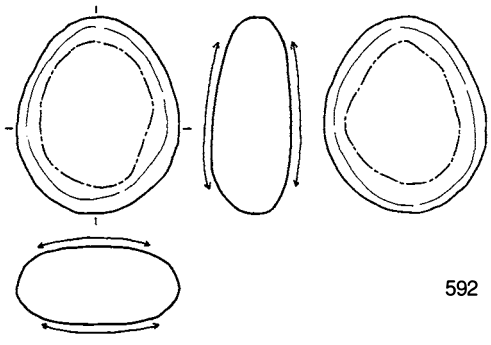


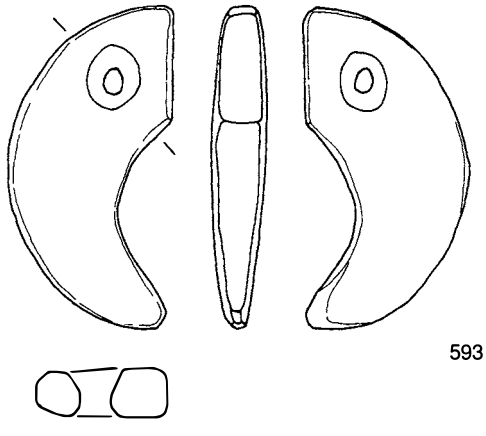


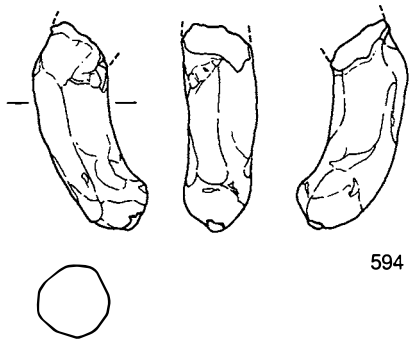




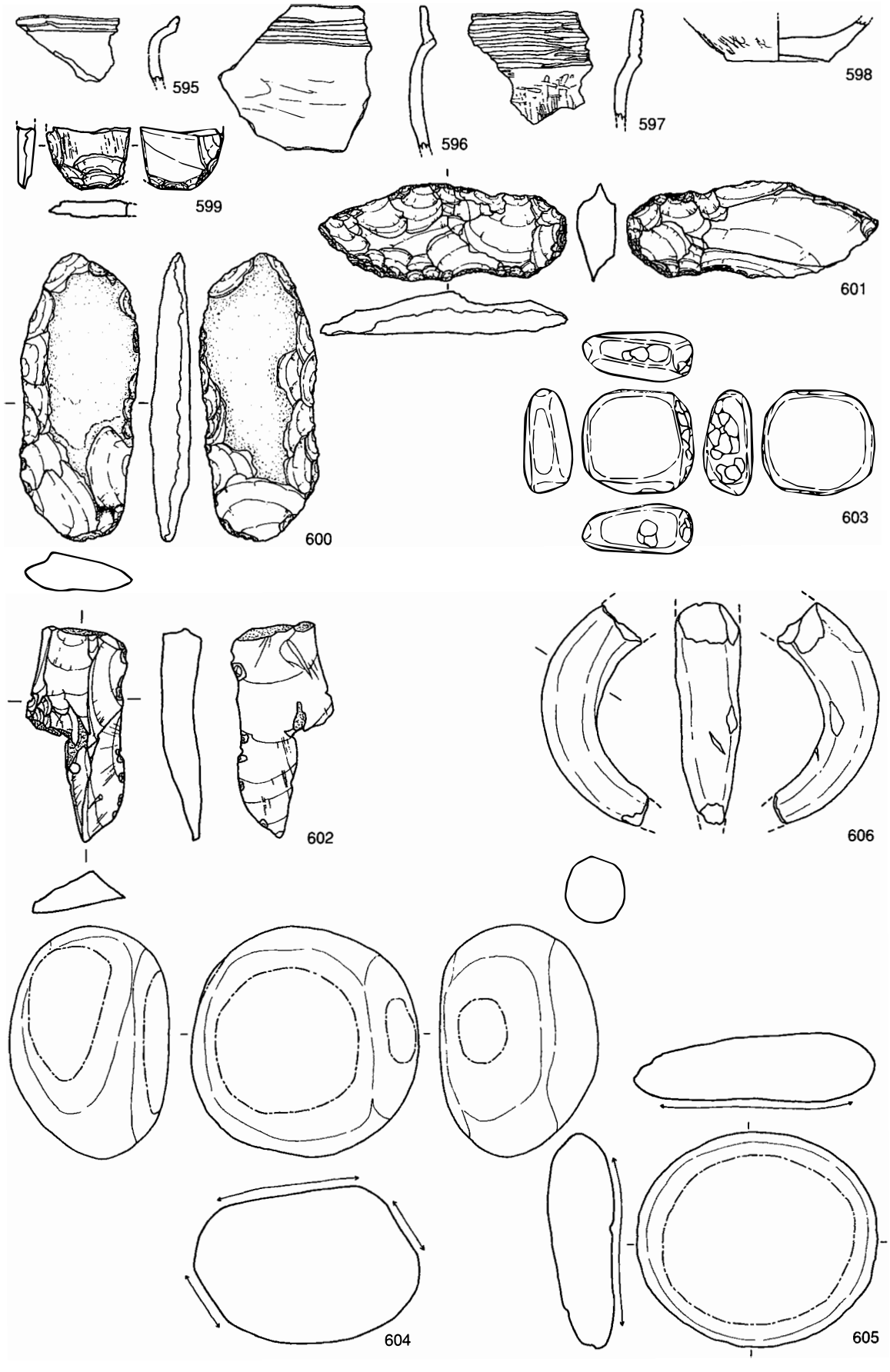








第218図　49－68号住居址出土遺物実測図２



第219図　49－69号住居址出土遺物実測図

住居址の埋土は、２層に分けられる。焼土混じりの黒褐色粘質土（埋土１層）と暗褐色粘質土（埋土２層）である。埋土１層にはニガ土も少量混じっている。

【遺物】（第221図）

本住居址からは、縄文土器と石器が出土している。縄文土器は小破片がほとんどでその中から浅鉢２点、深鉢３点を図示している。石器は打製石斧、磨製石斧、石鏃、石匙、異形石器、二次加工のある剥片、敲石・磨石等が出ており、それらの中から幾つか選んで図示している。

49－81号住居址

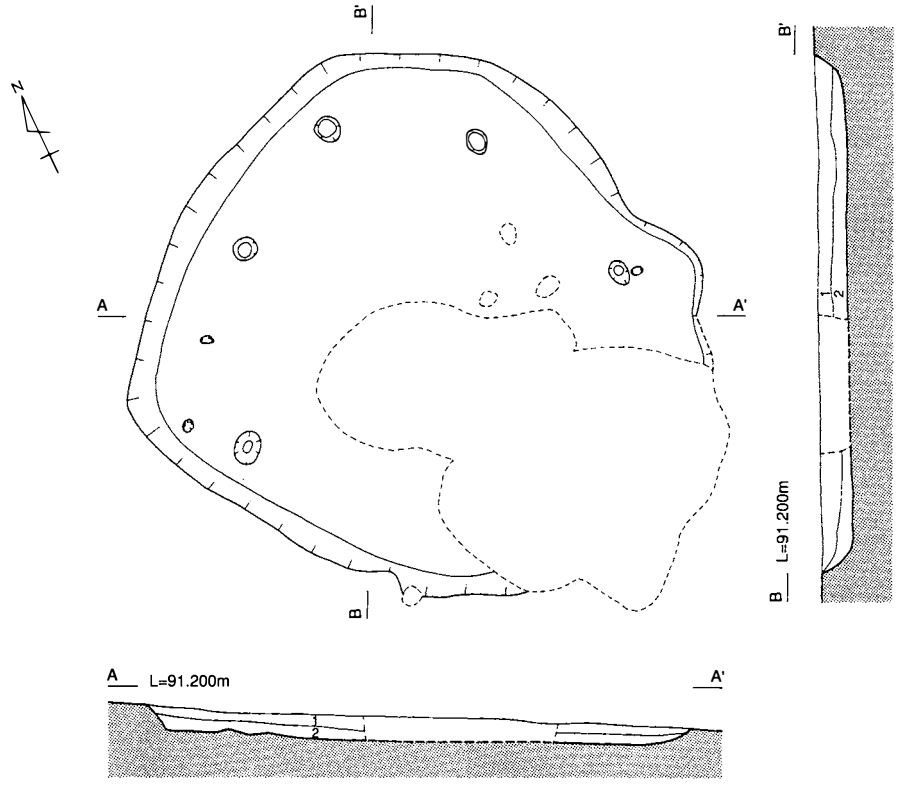
【遺構・埋土】（第222図・図版106）

調査区南端に位置する。49－69号住居址と49－82号住居址の間にある。約１／５が調査区外にのびているが、平面プランは楕円形を呈すると考えられる。長径は5.2ｍ、短径は3.6ｍを測り、遺構検出面から床面までの深さは20cmである。柱穴は計６個確認された。未検出の部分もあるが、柱穴に関しては位置的にみて、すべて検出されたと考えられる。炉跡やピットの類は検出されなかった。

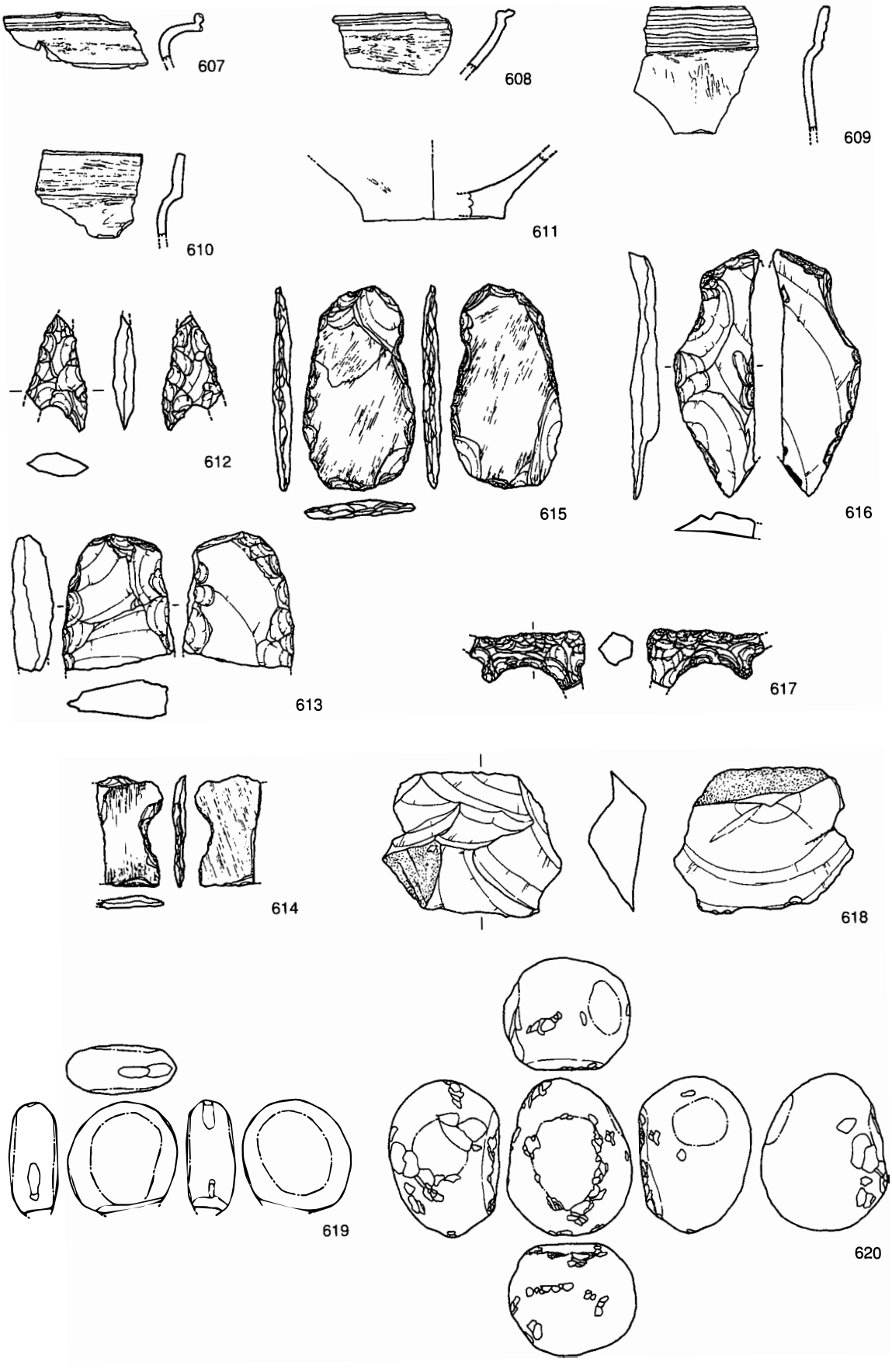
住居址の埋土は、２層に分けられる。褐色シルトを基調とし、焼土が混じらないもの（埋土１層）と焼土が混じるもの（埋土２層）に分層される。

【遺物】（第223図）

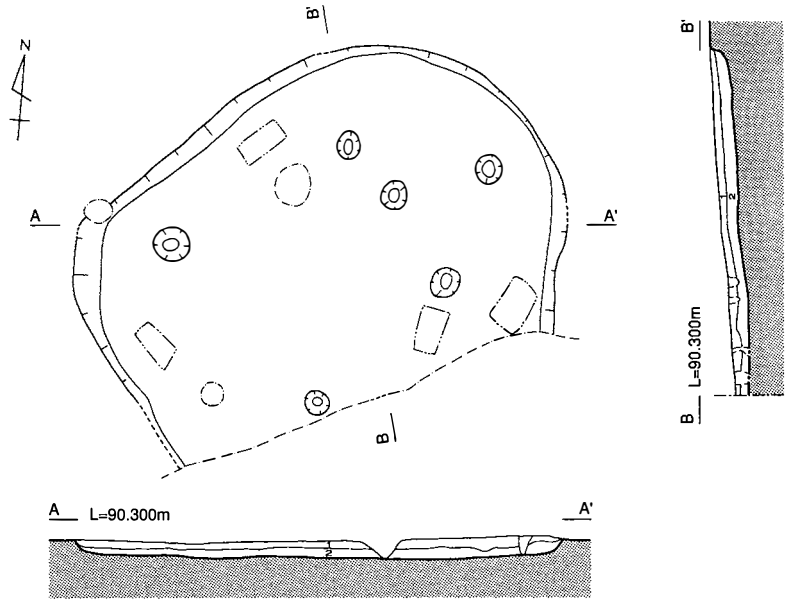
本住居址からは、縄文土器と石器が出土している。縄文土器は小破片のみで図示していない。石器は二次加工のある剥片、敲石・磨石のみ出ており、その２点を図示している。



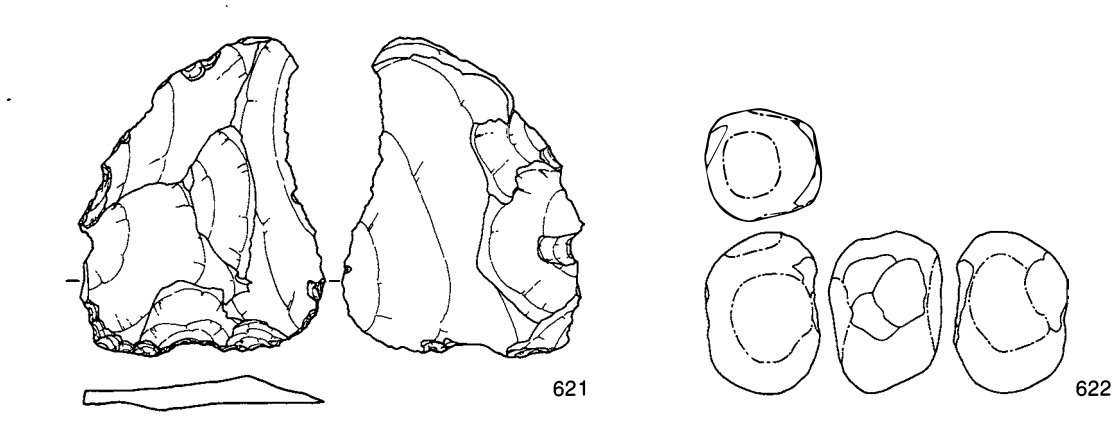
第220図　49－77号住居址遺構実測図



第221図　49－77号住居址出土遺物実測図



第222図　49－81号住居址遺構実測図



第223図　49－81号住居址出土遺物実測図

49－82号住居址

【遺構・埋土】（第224図・図版107）

調査区南端に位置する。49－81号住居址の東側に接するように造られた。約 1 ／ 4 が調査区外にのびているが、平面プランはやや隅丸気味の方形を呈すると考えられる。長軸は7.8ｍ、短軸は5.0以上を測り、遺構検出面から床面までの深さは20cmである。柱穴は計 9 個確認された。未検出の部分にも柱穴は巡っていたと考えられ、本来はもっと多かったようである。炉跡は検出されなかったが、未検出の部分にあった可能性もある。硬化面は確認されなかった。残存部から考えても本遺跡群では最大級の住居址と言える。

【遺物】（第225図）

本住居址からは、縄文土器と石器が出土している。縄文土器は小破片のみで、その中から浅鉢 2 点、深鉢 2 点を図示している。石器は打製石斧、二次加工のある剥片、敲石・磨石等が出ており、それらの中から幾つか選んで図示している。

49－83号住居址

【遺構・埋土】（第226図・図版107）

調査区東側に位置する。49－77号住居址の東側に接するように建てられた。平面プランは楕円気味の円形プランを呈する。長径は6.8ｍ、短径は5.6mを測り、遺構検出面から床面までの深さは22cmである。柱穴は計12個確認された。また南東部の壁面には支柱穴と見られるピットが２個確認された。東西の壁際に径80cm前後のピットが１基ずつ検出されたが、西側のピットから焼土が確認されており、炉跡の可能性もある。硬化面は確認されなかった。

住居址の埋土は、２層に分けられる。黒褐色砂質土混じりの黄褐色粘質土（埋土１層）と暗黄褐色粘質土（埋土２層）である。２層とも橙色砂礫を含み、埋土１層の方が多く含んでいる。

【遺物】（第228図）

本住居址からは、縄文土器と石器が出土している。縄文土器は小破片のみで図示していない。石器は打製石斧、磨製石斧、敲石・磨石、石皿等が出ており、それらの中から幾つか選んで図示している。

49－99号住居址

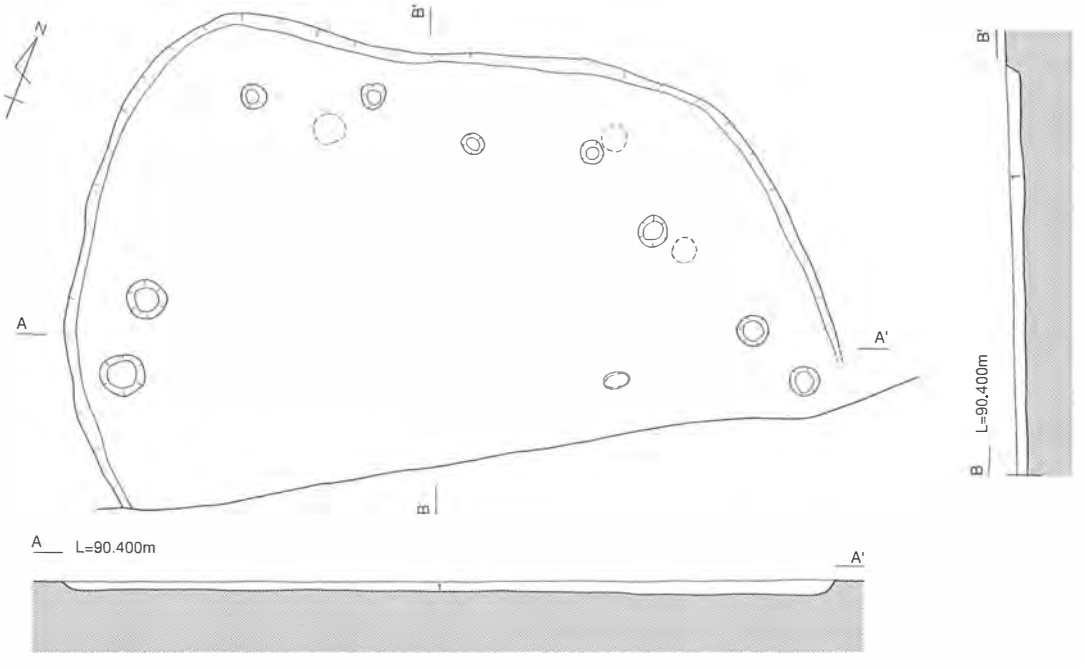
【遺構・埋土】（第227図・図版108）

調査区中央に位置する。西側の壁面を所々後世の撹乱によって削平されているが、平面プランはやや不整気味の円形を呈する。径は5.2ｍを測り、遺構検出面から床面までの深さは、12cmである。柱穴は計10個確認された。炉跡や硬化面等は検出されなかった。

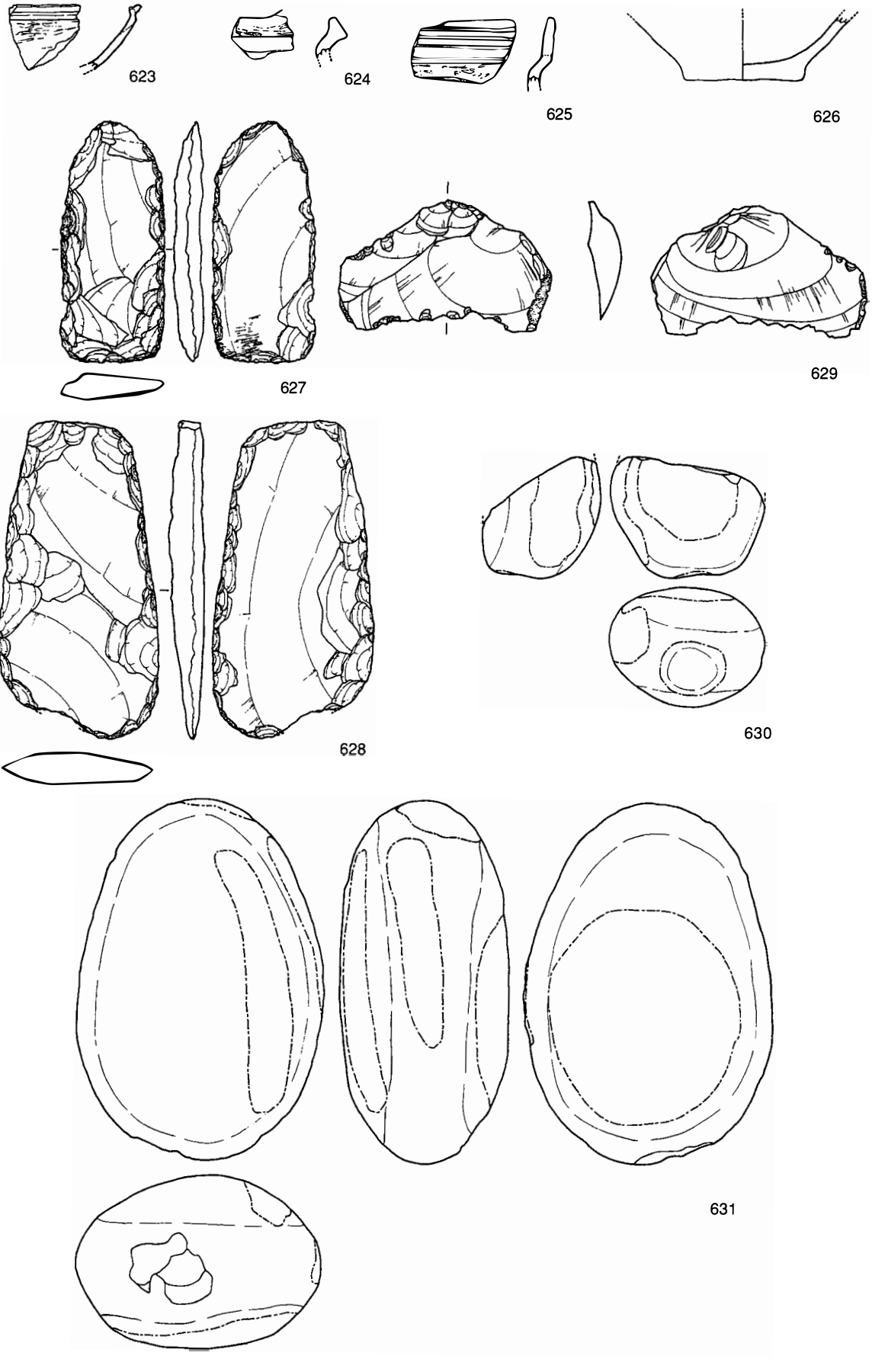
住居址の埋土は１層のみで、黒褐色シルト混じりの黄褐色シルトであった。

【遺物】（第229図）

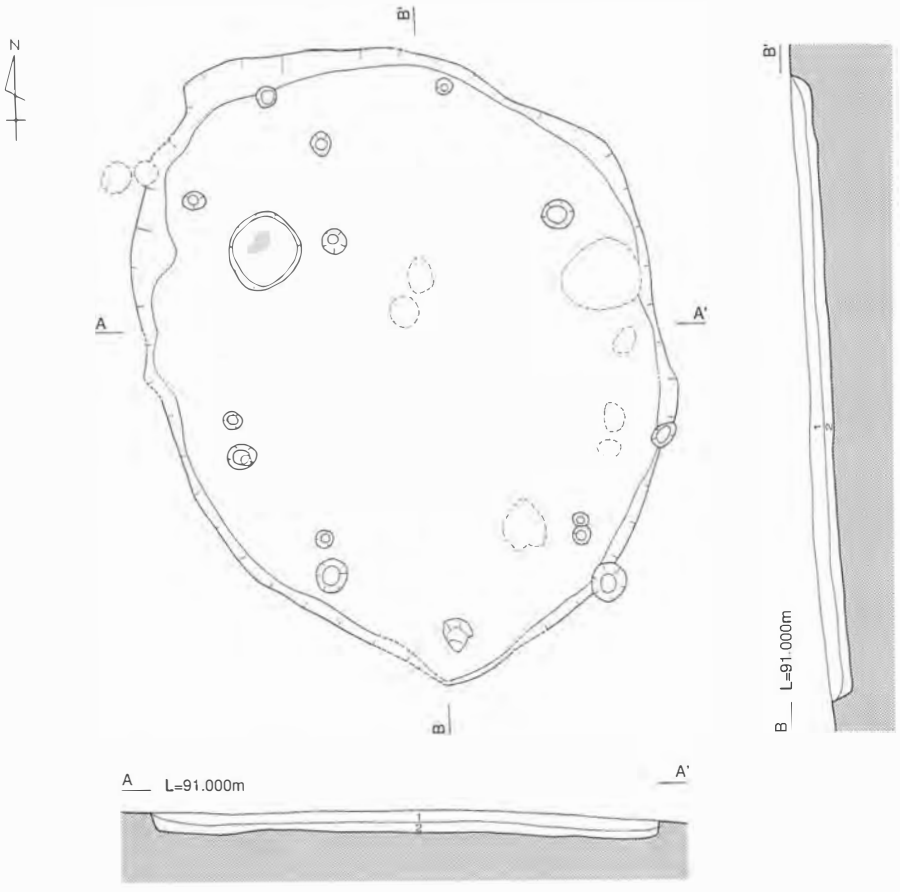
本住居址からは、縄文土器と石器が出土している。縄文土器は小破片のみであり図示していない。石器は打製石斧が２点出ており、その２点を図示している。



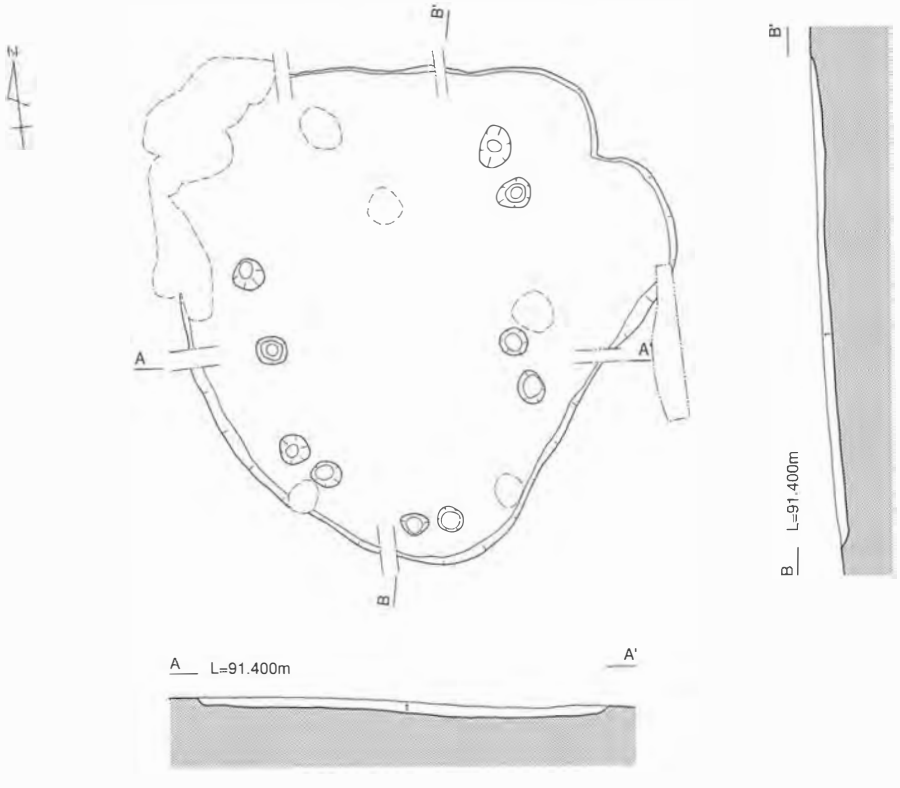
第224図　49－82号住居址遺構実測図



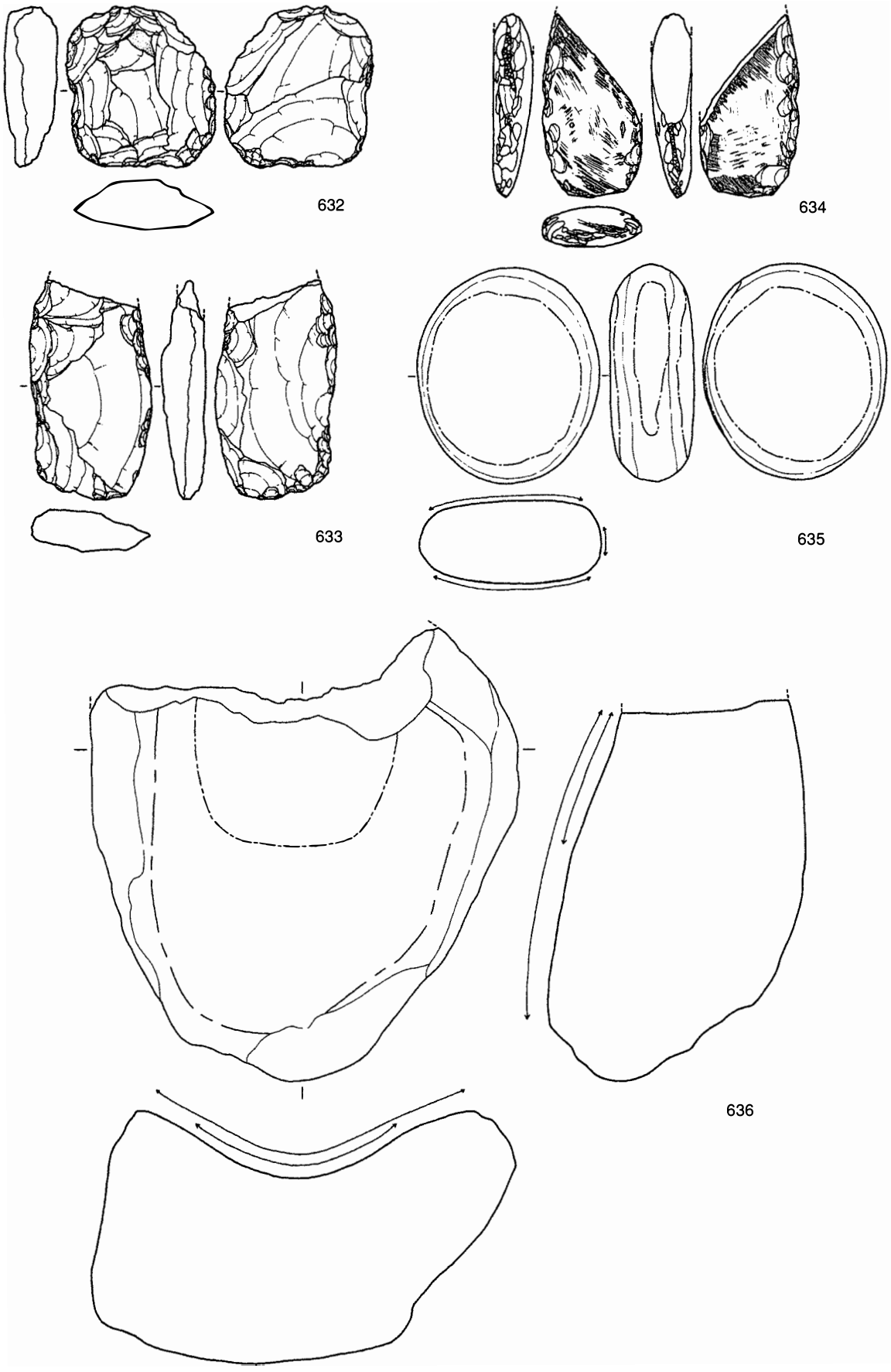
第225図　49－82号住居址出土遺物実測図



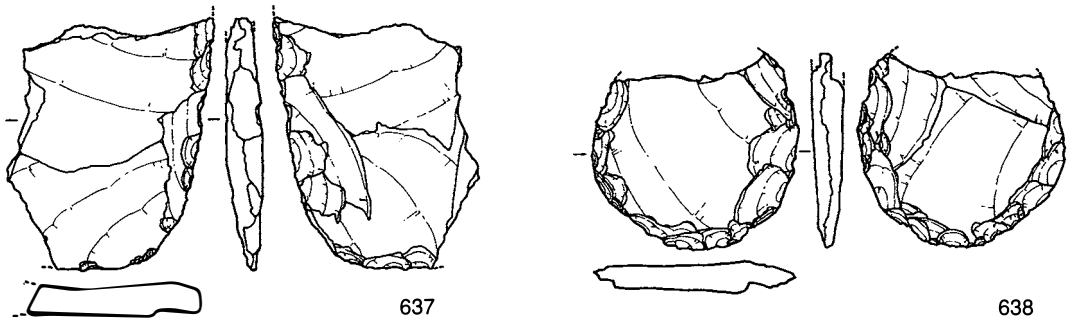
第226図　49－83号住居址遺構実測図



第227図　49－99号住居址遺構実測図



第228図　49－83号住居址出土遺物実測図



第229図　49－99号住居址出土遺物実測図

（２）　埋設土器遺構

49－52号埋設土器

【遺構・埋土】（第230図・図版109）

調査区南側に位置する。49－05号住居址の西側にある。上面はやや削平されていたが、掘り方を有する埋設土器遺構である。掘り方は、やや不整形な円形を呈する。規模は長径が155cm、短径が140cmで遺構検出面から最深部までの深さは、50cmである。掘り方内には、深鉢が胴部を破損した状態で検出された。浅鉢等伴う遺物は見つからなかった。残存状況から、埋設当時は口縁を下にして斜めに据えられていたと考えられる。こうした埋設方法は、本遺跡群では本例のみである。周囲に本埋設土器に伴うような遺構は検出されなかった。

埋設土器遺構の埋土は、２層に分けられる。どちらも粘質を持たない黒褐色土混じりの黄褐色砂質土（埋土１層）と茶褐色砂質土（埋土２層）である。掘り方の底の方には、若干の黒褐色砂質土が堆積していたが、掘り方とは無関係のようである。

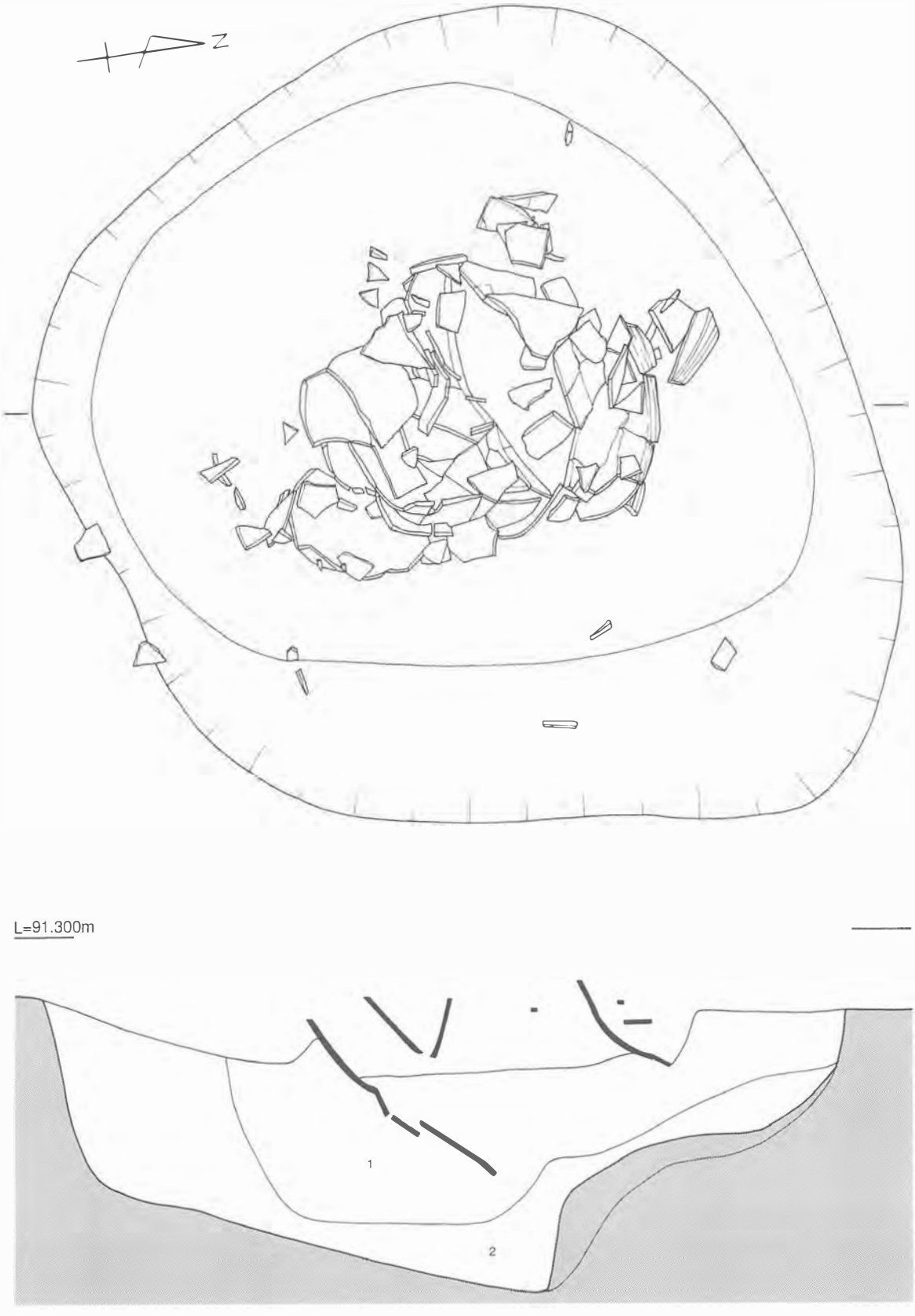
【遺物】（第231図・図版166）

37は胴部１／４を欠損した深鉢である。かなり大型の深鉢で、埋設土器遺構の中でも最大級の大きさである。器面調整は主に横ミガキとミガキであるが、胴部はミガキの前にヘラナデを施している。口縁帯はわずかに内傾し、４条の沈線が巡っている。頸部から肩部は直線的で緩やかに外湾している。胴部もその張り出しは緩やかで、下膨れしながら底部へと繋がっている。底部は高台状の上げ底だが、わずかに抉れているのみである。全体的にやや歪んでいるが、土器自体の重量によるものかもしれない。

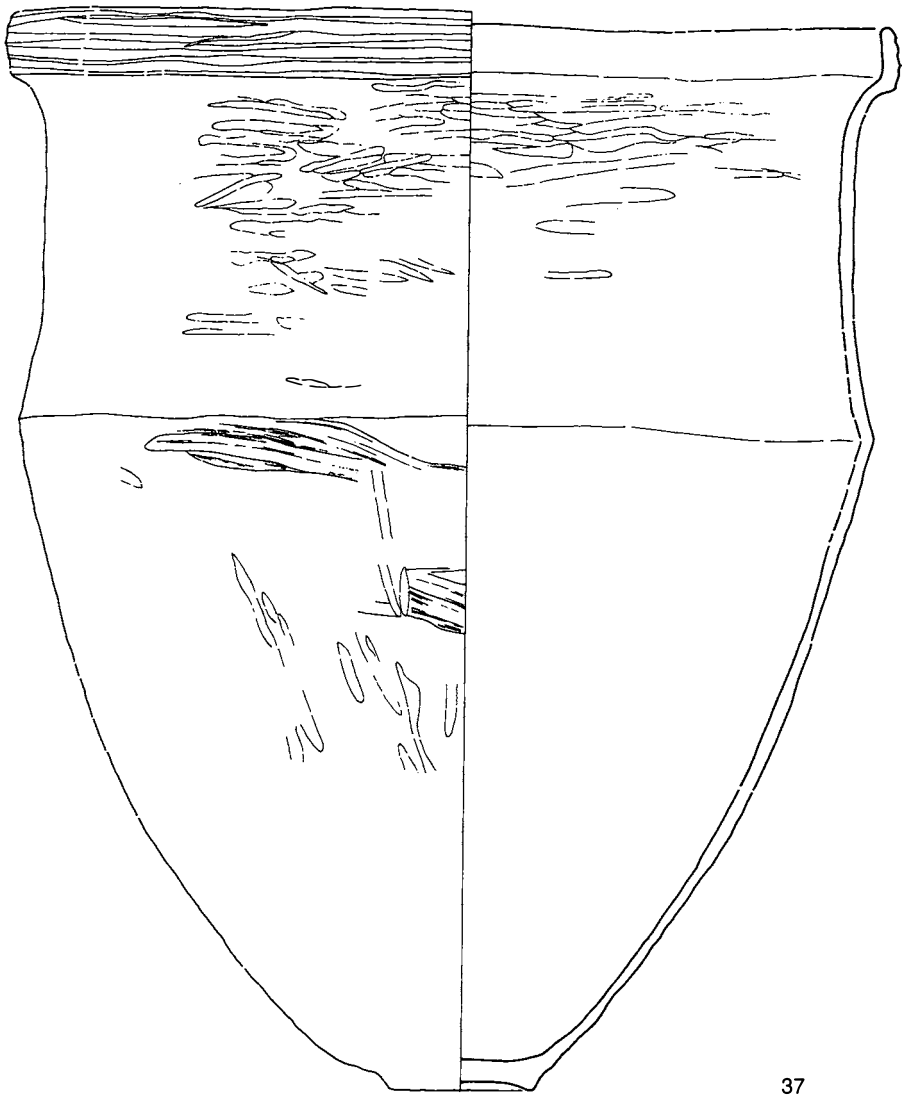
49－84号埋設土器

【遺構・埋土】（第232図・図版110）

調査区東側に位置する。上部をやや削平されているが、掘り方を有する埋設土器遺構である。掘り方は円形を呈する。長径は85cm、短径は80cmを測り、遺構検出面から最深部までの深さは25cmである。掘り方内には、深鉢が上から潰されたような状態で検出された。浅鉢等伴う遺物は見つからなかった。残存状況から、埋設当時は口縁を上にして垂直に据えられていたと考えられる。49－67号住居址の項で述べたように住居址内より検出されたものの、埋土を掘り込んで埋設されているため、住居址に伴わないと推測される。



第230図　49－52号埋設土器遺構実測図



第231図　49ー52号埋設土器出土遺物実測図

埋設土器遺構の埋土は、深鉢内の埋土と掘り方内の埋土に分けられる。深鉢内の埋土は、褐色シルト（埋土１層）と黄褐色シルトをブロック状に含んだ暗褐色シルト（埋土２層）である。一方、掘り方内の埋土は、淡褐色シルト（埋土３層）と黒褐色シルト（埋土４層）である。

【遺物】（第232図・図版167）

38は深鉢で口縁部から肩部の１／２と胴部を欠損している。胴部が欠損しているため、肩部以上と底部が分かれてしまい、直接接合はしないが同一掘り方内から出土しているため、同一個体として扱っている。器面調整は主にミガキで、肩部の下と底部の上のわずかな胴部にはヘラナデが施されている。口縁帯は直立気味に立ち上がり、３～４条の沈線が巡っている。頸部から肩部は直線的で緩やかに外湾している。界線はなく、底部は平底である。

第232図　49－84号埋設土器実測図

（３）　その他

49－66号円形周溝

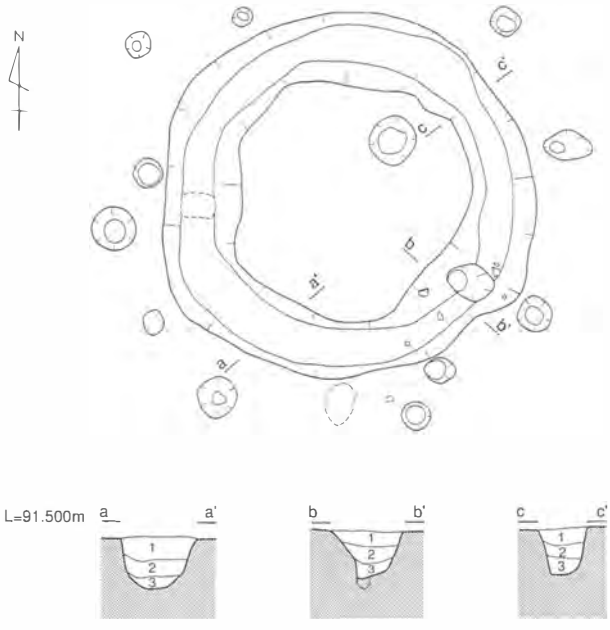
【遺構・埋土】（第233図・図版111）

調査区北側に位置する。平面プランは円形を呈する。長径は4.0ｍ、
遺構検出面から床面までの深さは60cmである。周溝の内外には、
中には円形周溝遺構を巡るように並んでいるものもあり、何らかの建造物が建っていた可能性も否定できない。しかし調査時点においてそれらピット群の性格を特定するには至らなかった。

円形周溝遺構の埋土は、３層に分けられる。焼土混じりの暗褐色シルト（埋土１層）と暗褐色シルト（埋土２層）、

【遺物】

本円形周溝からは、



第233図　49－66号円形周溝遺構実測図

第4節　出土遺物

石の本遺跡群では、前述したように遺構内外、遺物の種類を問わず数多くの遺物が出土している。遺構出土の遺物の紹介は、各遺構の項で述べているが出土遺物自体の概要までは触れていない。本節では、本遺跡群出土の縄文時代後・晩期の遺物について概要を述べていく。なお、図示した遺物については、巻末に遺物観察表を掲載しているので、そちらを参照していただきたい。

1　　土器

本遺跡群で最も出土点数の多い遺物である。正確な点数は把握していないが、相当数に上るものと考えられる。その中でも本書で取上げた、当該時期の遺構が検出された調査区の遺物を中心に見ていきたい。

器種は深鉢、鉢、浅鉢が主で、わずかだが注口土器や小型の土器（ミニチュア土器や手捏土器）が存在する。器種分類についてはこれまでにも様々な研究において行なわれているが、基本的な分類は同じであるのでそれらを参考にしている。当該時期の土器は口縁又は口縁帯（口縁部でくの字状に屈折した部分）、頸部、胴部、そして底部といった部位に分けられ、基本的にはそれらの部位の組み合わせによって構成されているので、各部位の有無やそのプロポーションで大別している。具体的には以下のとおりである。

深鉢

Ａ１類……口縁帯、頸部、胴部、底部で構成される。口縁帯に凹線（又は沈線）を施すもの。

Ａ２類……口縁帯、頸部、胴部、底部で構成される。口縁帯に凹線（又は沈線）を施さないもの。

Ｂ類……口縁部、頸部、胴部、底部で構成される。頸部の上に素口縁がくるもの。

Ｃ類……口縁部、胴部、底部で構成される。口縁の下に胴部がくるもの。

浅鉢

Ａ１類……口縁帯、頸部、胴部、底部で構成される。口縁帯に凹線（又は沈線）を施すもの。

Ａ２類……口縁帯、頸部、胴部、底部で構成される。口縁帯に凹線（又は沈線）を施さないもの。

Ｂ類……口縁部、頸部、胴部、底部で構成される。頸部の上に素口縁がくるもの。

Ｃ類……口縁部、胴部、底部で構成される。口縁の下に胴部がくるもの。

Ｄ１類……口縁帯、胴部、底部で構成される。口縁帯が直線的に立ち上がるもの。

Ｄ２類……口縁帯、胴部、底部で構成される。口縁帯が内湾気味に立ち上がるもの。

鉢

Ａ類……深鉢Ａ類が小型化したもの。

Ｂ類……深鉢Ｂ類が小型化したもの。

Ｃ類……深鉢Ｃ類が小型化したもの。

細部で判別に苦慮する事例もあるが、基本的に上記の分類に収まるものと考えられる。以上の分類を踏まえた上で、各時期のその様相を見ていきたい。なお、注口土器はその特殊性から時期別ではなく、一括して掲載している。

御領式以前（第234図１～12）

本来なら各型式毎に項目を分けて紹介するべきだが、点数が少ないうえ、縄文時代後期に位置付けられる御領式以前の遺構は確認されていないため、これらの遺物が直接本遺跡群の生活址に関わる可能性は低い。遺構とそこから出土した遺物を重視する本書の方針から確実に伴うと考えられる御領式から項目として取上げ、それ以前のものについては一括して報告することとした。

すべて破片資料であり、そのほとんどが小破片である。したがって型式名が異なるものがあるかもしれないが、特徴的なものを選んで図示している。大別すると磨消縄文系（１～３）と黒色磨研系（４～12）に分けられる。第234図に図示したものは包含層遺物であるが、42－25号住居址からも１点出土しており、それについては42区の項で既に図示している。

遺物の分布は、平成７年度の調査区に散発的に見られる程度で、目立った集中箇所はない。しいて言うなら15区でややまとまって出土している程度である。

御領式土器（第234図13～16）

下益城郡城南町所在の御領貝塚を標識遺跡とする土器型式で、黒く丁寧に磨き上げた器面は「黒色磨研土器」と呼ぶにふさわしく、黒色磨研土器様式の中で最も完成された型式であると言える。くの字状に屈折した口縁、やや強く張り出した胴部、半球状に削り込むようにした上げ底等が特徴で、前出の鳥井原式に比べて全体的にやや丸みを帯びてきているが、それでも洗練されたプロポーションを保っている。

包含層遺物では破片資料が多かったが、中には形態の明らかな資料も幾つかある。形態的に住居址出土のものと重なるものが多いため、特徴的なものを４点図示している。器種は深鉢ではＡ１類、Ｂ類が確認されており、浅鉢ではＡ１類、Ｄ１類が、鉢ではＢ類がそれぞれ確認されている。ただ全体の形態が明らかなものが少ないため、他にも器種が存在した可能性はある。

遺物の分布は、遺構が検出された15区・38区南に多く分布しており、他にも30・35・36・40区等で少量確認されており、それ以外の調査区では散発的な出方しかしていない。

天城式土器（第235・236図17～30）

菊池市大字赤星所在の天城遺跡を標識遺跡とする土器型式で、御領式に続く土器型式とされている。御領式で完成された黒色磨研土器様式が次第に簡略化、粗雑化していく。口縁帯の施文が沈線化し、多条化していく。胴部の張り出しも緩やかになり、高台状の上げ底や平底に近いものも出てくる。精製土器である浅鉢も大型化するものとそうでないものの二極化が進む。２～３型式に細分されることが多く、研究者によって細部に相違がある。なお、本書では天城式土器の細分は行なわず、あえて一括して掲載している。

本遺跡群で最も多く出土している土器であろう。遺構出土の遺物で十分その特徴は表せるが、包含層遺物の中にも比較的良好な遺物が多く、参考のためにも掲載しておく。器種は深鉢ではＡ～Ｃ類のすべてが確認されており、同様に浅鉢・鉢でもＡ～Ｃ類のすべてが確認されており、器種のヴァリエーションが豊富になっている。

遺物の分布は、遺跡群全体から出土しているがやはり遺構が集中している42区とその周辺が最も多いようである。他にも当該時期の遺構が確認されている調査区では少なからぬ量が出土している。

古閑式土器（第237図31～40）

上益城郡益城町古閑所在の古閑遺跡を標識遺跡とする土器型式で、天城式に後続する土器型式とされている。最終器面調整に磨きが施されなかったり、大雑把な磨きのみであったりと天城式からさらに粗雑化が進

んでいる。深鉢は口縁帯の施文が条痕化していって、ラッパ状に開いて立ち上がるようになる。頸部から胴部、そして底部のラインは直線気味になり、全体的に角張った印象を受ける。浅鉢も口縁から頸部が大きく外反し、口縁帯の退化が進む。また本型式の大きな特徴として、畿内地方を中心に分布する所謂「滋賀里式土器」を伴うことである。ただし本遺跡群では滋賀里式土器そのものではなく、それを模倣した土器が出土しており、在地の土器製作技術との折衷品と考えられるものもある。

包含層遺物では、深鉢は比較的良好な資料が多いものの、浅鉢は破片資料が多いため器種によってばらつきがあるが、遺構出土遺物で補完できるため、浅鉢は破片、深鉢は残りの良い資料を中心に図示している。器種は深鉢ではＡ類、Ｂ類が確認されており、浅鉢ではＡ類、Ｄ２類が、鉢ではＣ類がそれぞれ確認されている。もう少し多様な器種構成を想定していたが、出土した土器を見るとややヴァリエーションに乏しい感がある。

当該時期の遺構自体がほとんどないためか、住居址が検出された38区北と39区、それに30区でややまとまって出土している他は散漫な出方しかしていない。

注口土器（第237図41～45・図版168）

本来なら各型式の項で掲載するべきものであるが、完形品が皆無でほとんどが断片的な資料であること、注口土器という遺物の持つ特異性等からあえて独立して掲載することにした。出土した調査区は15区と41区、42区、そして46区であり、半分は15区からの出土である。また出土した部位は口縁部と胴部、そして注口部に分けられ、口縁部は15区から、胴部は42区、注口部は41区と46区から出土している。

なお、注口部については天地のあり方に若干疑問が残るものの、そのまま掲載している。

その他（第238図46～56）

これまで各型式と注口土器を紹介してきたが、ここでは型式名がはっきりしないもの、特徴的なもの等をまとめて掲載している。

2　石器

本遺跡群における石器の総点数は15000点を超えており、剥片等を除く道具類（tool）では7000点余りに上る。無論、すべてについて報告するに越したことはないが、本書の容量ではそれが不可能なので各器種の概要を述べるに留めておく。また必要に応じて包含層出土のものも図示している。なお、図示できなかった包含層出土の石器は、一部器種毎にまとめて写真図版に掲載している。

打製石斧（図版169～171）

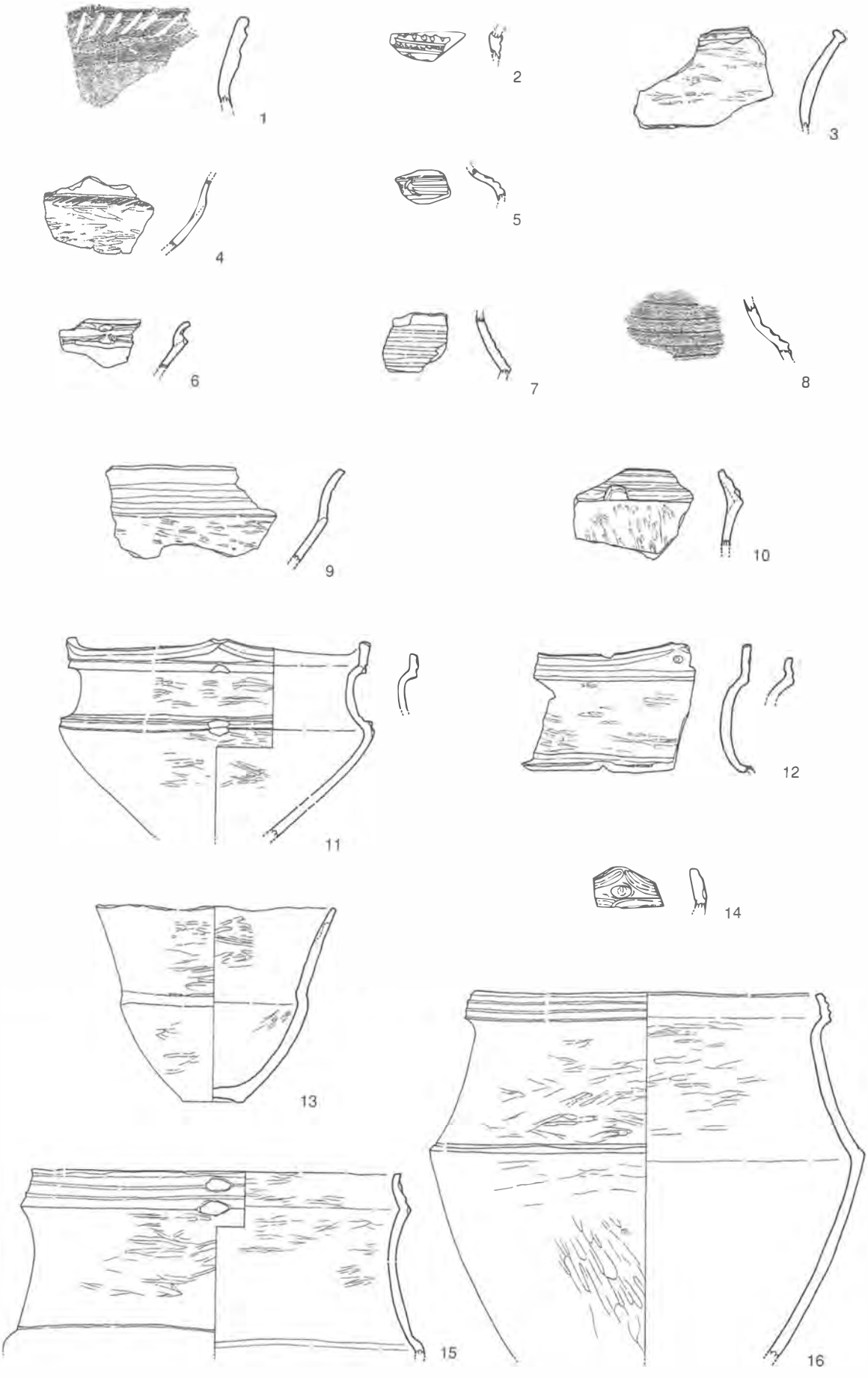
900点近く出土しており、出土した石器の中でもかなり多い方である。一口に打製石斧と言ってもその形態や大きさは様々である。大別すると以下のような分類になる。

Ⅰ類　短冊形を呈するもの。15cmを超えるような長大なものと10～15cmの中型のものがある。打製石斧の中では最も多い。石材は安山岩が多い。

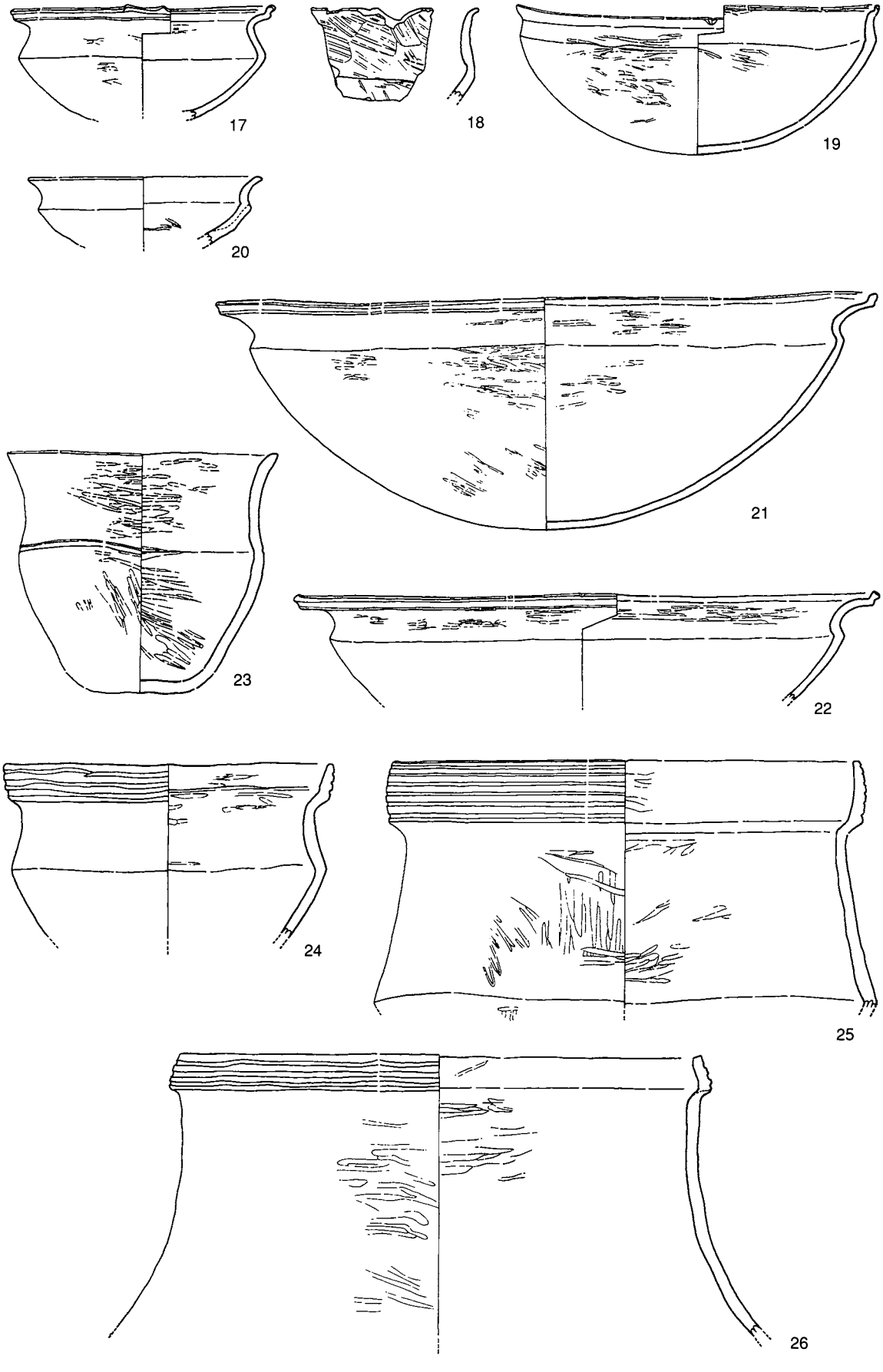
Ⅱ類　撥形を呈するもの。これも長大なものと中型のものがある。石材は安山岩の他粘板岩等がある。

Ⅲ類　分銅形を呈するもの。中型から小型のものが多い。Ⅰ・Ⅱ類に比べ少数である。石材は片岩質のものを多用している。

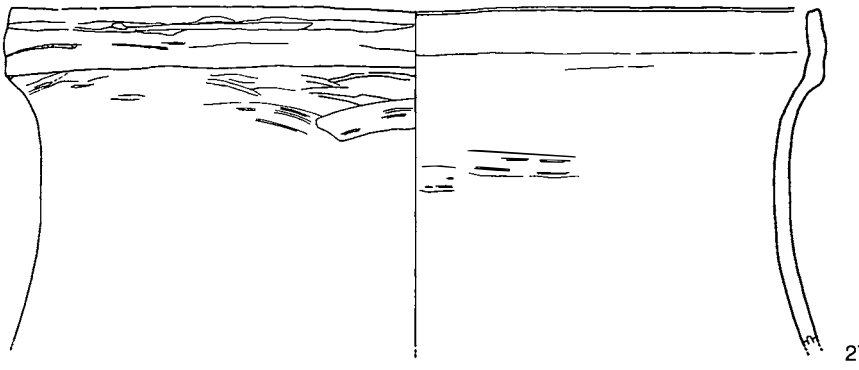
Ⅳ類　円盤形を呈するもの。正円形と楕円形のものがある。また円礫の周縁を加工したものと、大型の

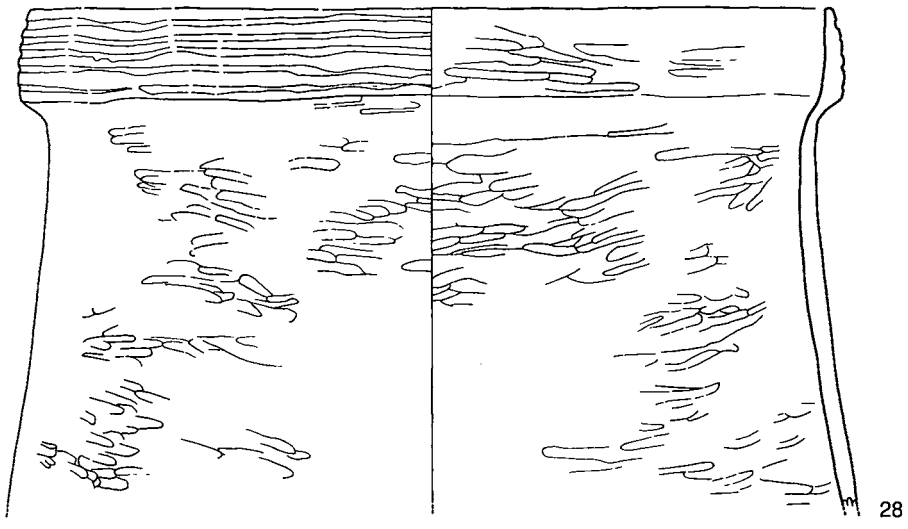


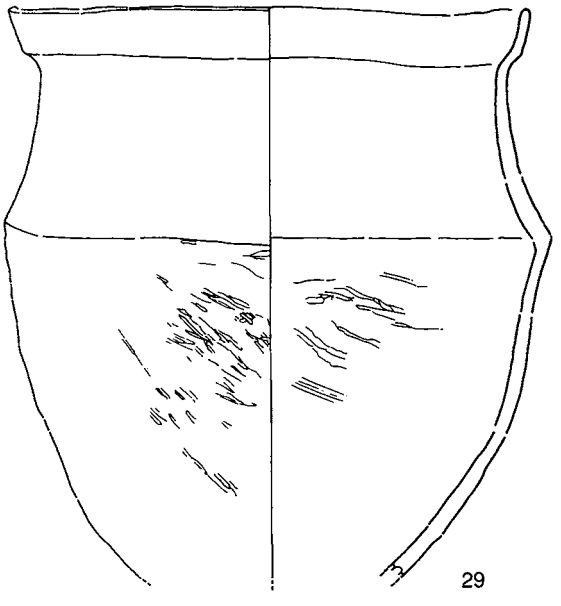
第234図　包含層出土遺物実測図1

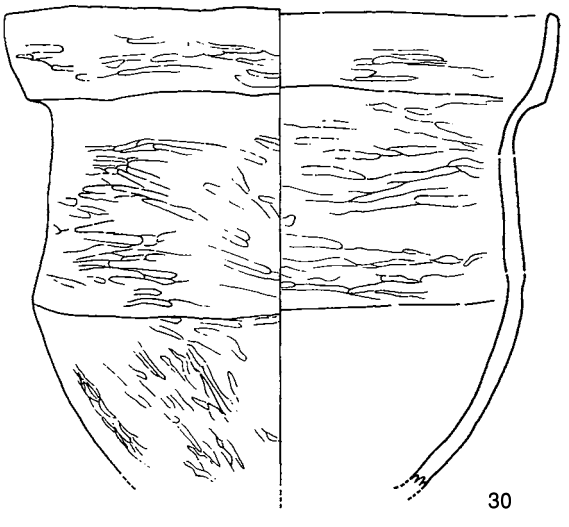


第235図　包含層出土遺物実測図２

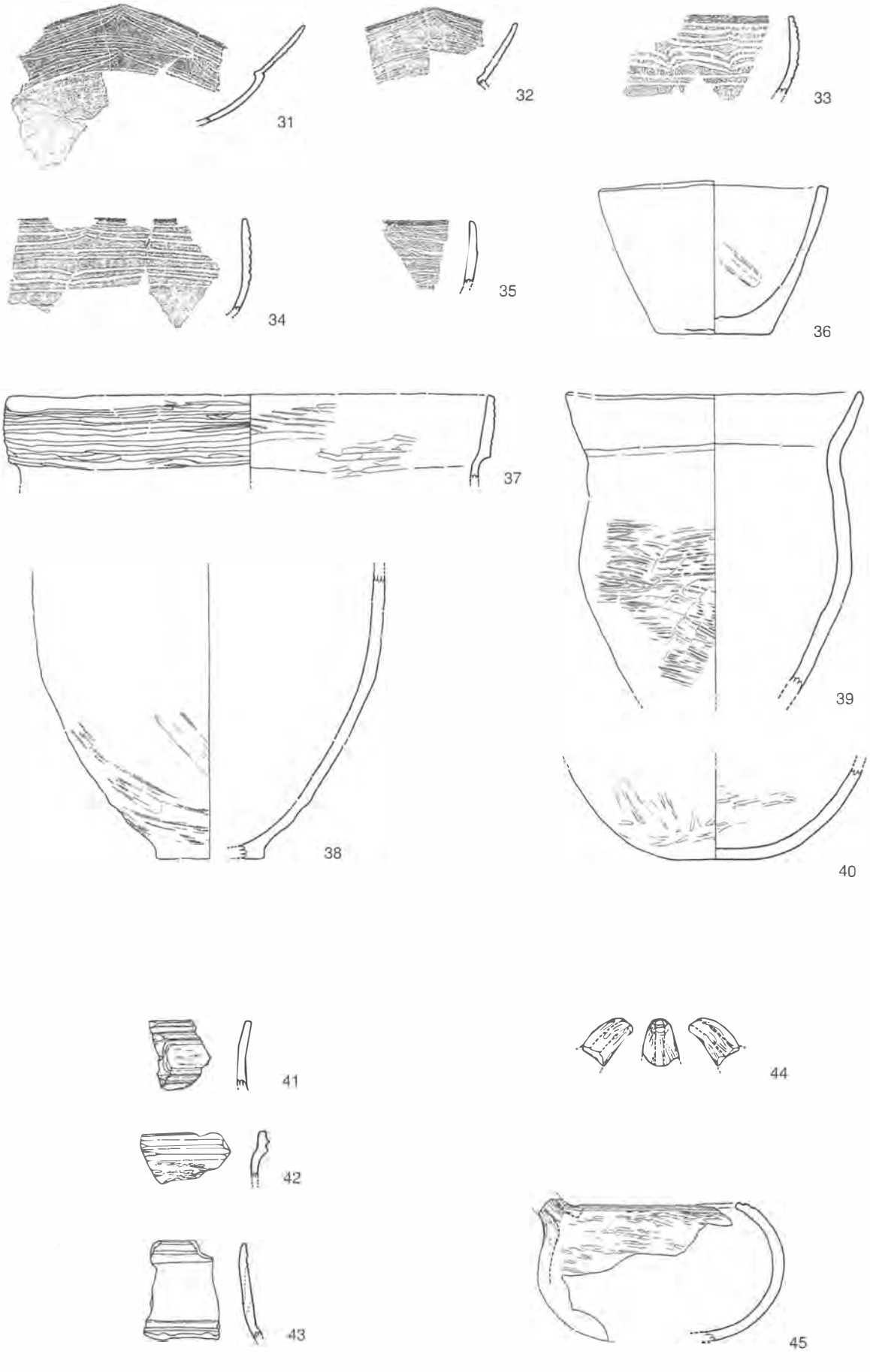




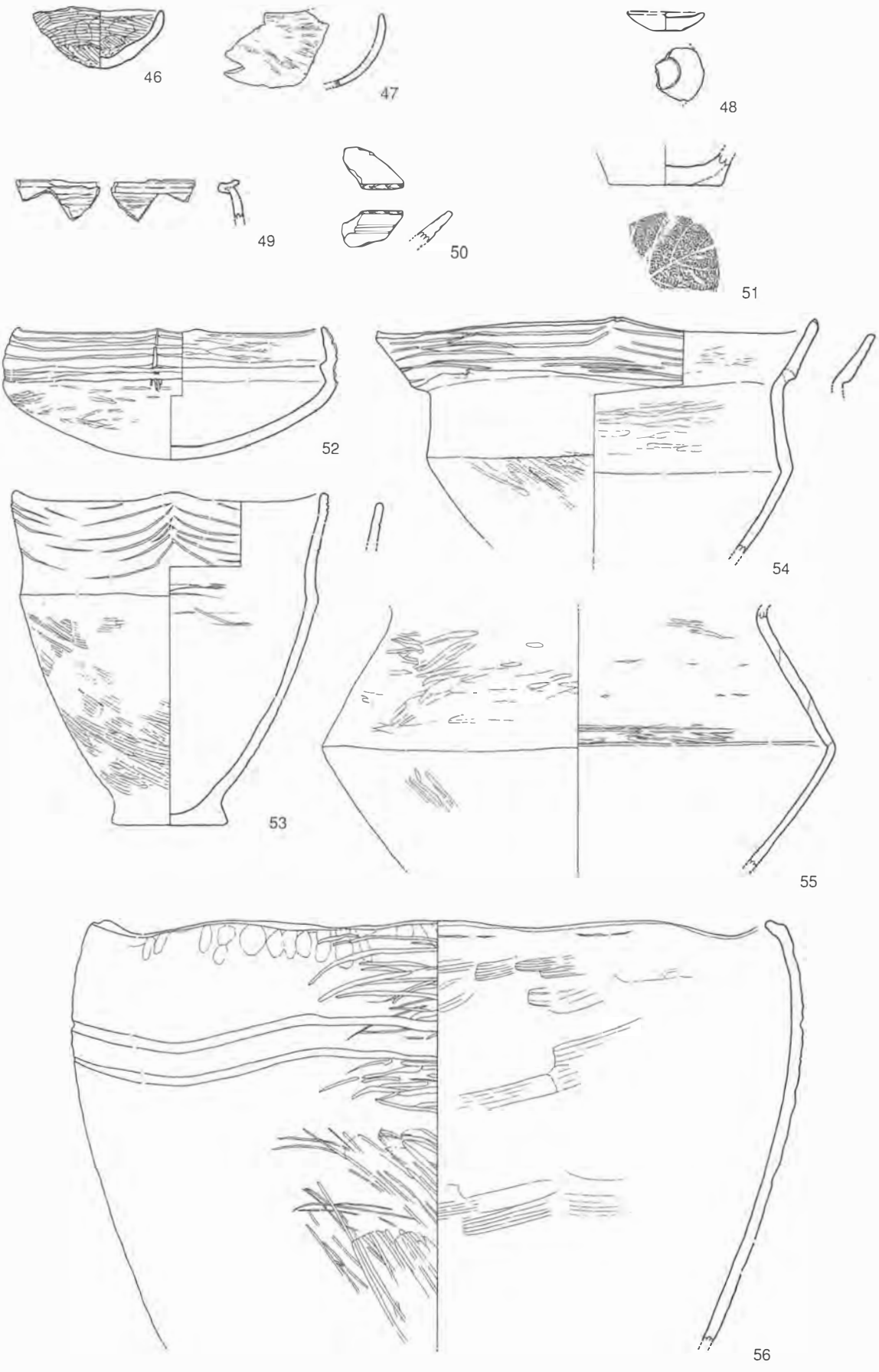




第236図　包含層出土遺物実測図3



第237図　　物実測図4　包含層出土遺



第238図　包含層出土遺物実測図5

剥片を加工したものがある。その厚さから刃部が鋭角なものと鈍角なものに分けられ、用途が異なる可能性もある。安山岩を多用するが、砂岩や片岩質の石を用いることもある。

Ⅴ類　楕円形～柳葉形を呈するもの。比較的小型のものが多く、半月形に近いものもあり、石庖丁形石器を含む可能性が高い。

Ⅵ類　上記の器形以外のもの。

以上、その形態から分類してみたが、完形で出土した打製石斧は少なく、その多くは破損している。特に刃部や基部のみといった破片で形態不明なものが多い。なかには粉砕し、部位さえ判別できないものもあり、使用頻度がかなり高く、消耗品であったことが窺える。

磨製石斧（図版172）

350点近く出土している。比較的まとまった量出土しているが、打製石斧同様、欠損品が多い。分類すると以下のようになる。

Ⅰ類　断面が肉厚の楕円形を呈するもの。一般に細長く、乳棒状を呈する。刃部は両刃が多く、中には片刃気味のものもある。10cm未満の小型の石斧もあるが、大型の石斧もあるようだ。石材はやはり緑泥片岩や粘板岩、頁岩といった片岩質の石が多い。

Ⅱ類　断面が扁平又は横長の楕円形を呈するもの。平面形は、短冊形や撥形といった打製石斧の形態と類似する。両刃よりも片刃のものが多く、ほとんど片刃といっても良い。側縁や頭部を丁寧に研磨したものがあり、小型のものは儀器としての性格を持っていた可能性もある。石材はⅠ類で挙げたものの他に蛇紋岩が目立つ。

大きく分けると上記のようになるが、他にも刃部のみ研磨を施しているものもあるが、これはⅡ類の範疇に入るものである。打製石斧同様、磨製石斧も欠損品が多い。基部や刃部といった各部位のみの他、刃縁が潰れたものもある。また刃部の潰れたものを敲石等に転用したものもあり、このような石器の再利用は器種を問わず多く見受けられる。

石鏃（図版173）

700点余り出土しており、打製石斧に次ぐ出土量である。基部の形態や平面形等で大別できる。まず基部の形態で分類すると以下のようになる。

Ⅰ類　平基式。基部に抉りは入っていない。

Ⅱ類　凹基式。基部に抉りが入る。その形態からわずかな抉りがあるもの、弧形又は山形の抉りが入るもの、U字形の抉りが入るものがある。

また平面形で分類すると以下のようになる。

a類　正三角形を呈する。

b類　二等辺三角形を呈する。

c類　五角形を呈する。

d類　その他（雁股形、側縁に抉りのあるもの等）。

上記2つの分類の組み合わせによって、ある程度の大別が可能である。また側縁に鋸歯状の凹凸が見られるものもあるが、数量としては多くない。石材は黒曜石、安山岩（サヌカイト質を含む）、チャートを用いている。黒曜石は姫島産のものも含まれており、チャートは灰色のものが大半だが、緑色のものがある。緑川産のチャートではないかと考えられる。

石匙（図版174）

100点余り出土している。刃部のつき方で以下のように分類される。

Ⅰ類　　刃部が縦方向についている（縦型）。一側縁のみ刃部を持つものと両側縁に刃部を持つものがある。

Ⅱ類　　刃部が横方向についている（横型）。刃縁の形態によって直線的なものと円弧を描くものがある。またつまみ部があるものとないものがある。

どちらも 5 cm未満の小型のものと10cm前後の中・大型のものがあり、時期差があるものと考えられる。または用途による違いなのかもしれない。石材は石鏃と同様、黒曜石、安山岩（サヌカイト質を含む）、チャートを用いている。

スクレイパー（図版174）

60点余り出土している。急角度に調整された刃部を持つ石器を総称している。機能的に石匙と類しており、厳密な区分は難しいかもしれないが、敢えて区分している。形態的には縦長、横長、円形等があり、調整部位には側縁、端部等がある。石材は石匙と同様、黒曜石、安山岩（サヌカイト質を含む）、チャートを用いている。

石庖丁形石器（**穂摘具**）（図版175）

30点余り出土している。弥生時代の石庖丁に類似した打製の石器で、機能的にも同様の機能を有していたと考えられる。打製石斧としていたものから器種変更したものもあり、特にⅤ類はその可能性がある。半月形から楕円形を呈しており、10～15cmの大きさのものが多い。石材は緑泥片岩や粘板岩の他、安山岩を使用している。

石鎌（図版175）

10点余り出土している。石庖丁形石器に類似した機能を有していたと考えられる。ただ石庖丁形石器が収穫用とされているのに対し、石鎌は除草用とされており、その用途は異なるようである。平面形は長方形から長楕円形を呈している。大きさや石材は石庖丁形石器と同様である。

楔形石器

60点余り出土している。剥片の両端に細かい調整が施したもので、なかには二次加工のある剥片になる可能性のあるものも含まれている。 5 cm未満のものが大半である。石材は黒曜石が多い。

石錐（第239図57・図版175）

10点余り出土している。その形態から以下のように分類できる。

Ⅰ類　　つまみ状の頭部と細長い錐部で構成されるもの。

Ⅱ類　　明瞭な頭部を持たず、細長い錐部を一端に持つもの。

Ⅲ類　　明瞭な頭部を持たず、細長い錐部を両端に持つもの。

頭部や錐部を欠損したものもあり、分類が難しいものもあるが、概ね上記の分類に収まるものと考えられる。遺構内出土のものがないため、本項で掲載しておく。

石錘（図版176）

100点程出土している。漁撈具の一つと考えられるが、縄を掛ける部分の加工方法で大別できる。

Ⅰ類　　円礫の両端に切り目を入れたもの。「切目石錘」と呼ばれるものである。

Ⅱ類　　円礫に溝を巡らせたもの。「有溝石錘」と呼ばれるものである。

Ⅲ類　　円礫の両端を打ち欠いただけのもの。「礫石錘」と呼ばれるものである。

このうちⅢ類が圧倒的に多く、Ⅰ・Ⅱ類はわずかである。また使用している円礫の中には、磨り痕や敲打痕が残っているものもあり、磨石を転用したり、逆に磨石に転用していたようである。

二次加工のある剥片

1300点程出土しており、磨石・敲石に次ぐ多さである。剥片に二次調整を施したものの総称であり、その形態は実に様々である。また石器の未製品をこれらに含んでいる場合もあり、分類は容易ではない。ただその機能については、鋭角の縁辺を持つものが多いことから、石匙やスクレイパーとして使用していた可能性が高い。石材も安山岩から粘板岩、黒曜石、チャート等多岐にわたる。

使用痕のある剥片

70点程出土している。剥片の縁辺を使用しているもので、二次加工のある剥片同様、その形態は定形化していない。剥片をそのまま使用しているのが特徴であるが、その用途は二次加工のある剥片と重なる部分が多かったと考えられる。なお同じ剥片を用いた石器として、研磨痕のある剥片が挙げられる。剥片の一部に研磨痕があるもので、その多くは磨製石斧の小破片である。

礫器

30点程出土している。礫の一部を加工したものである。10cmを超えるような比較的大型のものが多く、打製石斧のような機能を有していたと考えられる。

敲石・磨石・凹石

石器としては最も多く、その点数は3000点を超える。河原石をそのまま使用し、使用痕として磨り痕や敲打痕、それに擂り鉢状の窪みが残っている。磨り痕や敲打痕等のみ残るものが多いものの、中には数種類残るものも少なくなく、磨石と敲石、凹石の厳密な区分は難しい。また器面が赤く変色しているものや磨製石斧を転用しているものもあり、臨機応変な使用・転用が行なわれていたことが分かる。石材は安山岩が多く、次いで砂岩や凝灰岩が多用されている。少数ではあるが緑色片岩や花崗岩も使用している。

石皿

250点程出土している。磨石・敲石と対をなす石器である。１～複数面に使用痕が見られ、使用頻度が高いものは中央部が窪んでいる。多くが20cmを超える大型の礫を使用しており、中には大きさが40cm近いものや重さが20kgを超えるものもある。その一方で20cm以下のやや小型の石皿もある。使用時又は廃棄後に破損したものが多く、完形のものはほとんどない。石材は安山岩の他、凝灰岩や砂岩も使用している。

台石

10点余り出土している。石器製作等の作業台の役目を果たす。前述した石皿に見られるような使用痕のあるものもあり、本来石皿であったものを台石として利用している可能性もある。石材は安山岩、砂岩を多用している。

砥石（図版177）

60点ほど出土している。研磨のための石器で、石器だけでなく骨角器等の加工にも使用されていたと見られる。円礫をそのまま使用したものから、石皿や台石片を転用したものまで様々である。また面的な研磨痕の他に溝状に伸びる研磨痕もあり、中には同じ面に両方見られるものもある。石材は砂岩がほとんどで、軽石を使用したものもある。

石核

50点ほど出土している。剥片が剥離された石塊で、それそのものが道具ではない。遺構内の出土は少なく多くは包含層出土である。またその多くが剥片をほとんど取り終わった残核である。したがって拳大より小さいものが多い。

その他（第239図58～62・図版176・178）

これまで述べてきた石器の他に、その用途や形態が特殊な石器が幾つか出土している。ここではそれらの中から特徴的なものを選んで紹介していく。

58～61は、形態が特徴的な石器で異形石器として扱っている。本遺跡群から出土した異形石器は、その形態から4つに大別できる。

Ⅰ類　　断面三角形（又は菱形）の棒状を呈するもの。石錐の一形態か。

Ⅱ類　　石匙に類するもの。つまみ部が2つあったり、刃部が異様に長大なもので、石匙の一形態か。

Ⅲ類　　多足状に突起が複数あるもの。突起の数は4～5個で何かの未製品か。

Ⅳ類　　その他器種の特定が困難なもの。

異形石器は10点程出土しているが、いずれも上記の分類に当てはまる。ただその用途もはっきりしないし、これらに共通する特徴も、形態が変わっていること以外には特にない。石材も安山岩（サヌカイト質を含む）、黒曜石、チャート等多岐にわたっており、大きさもまちまちである。

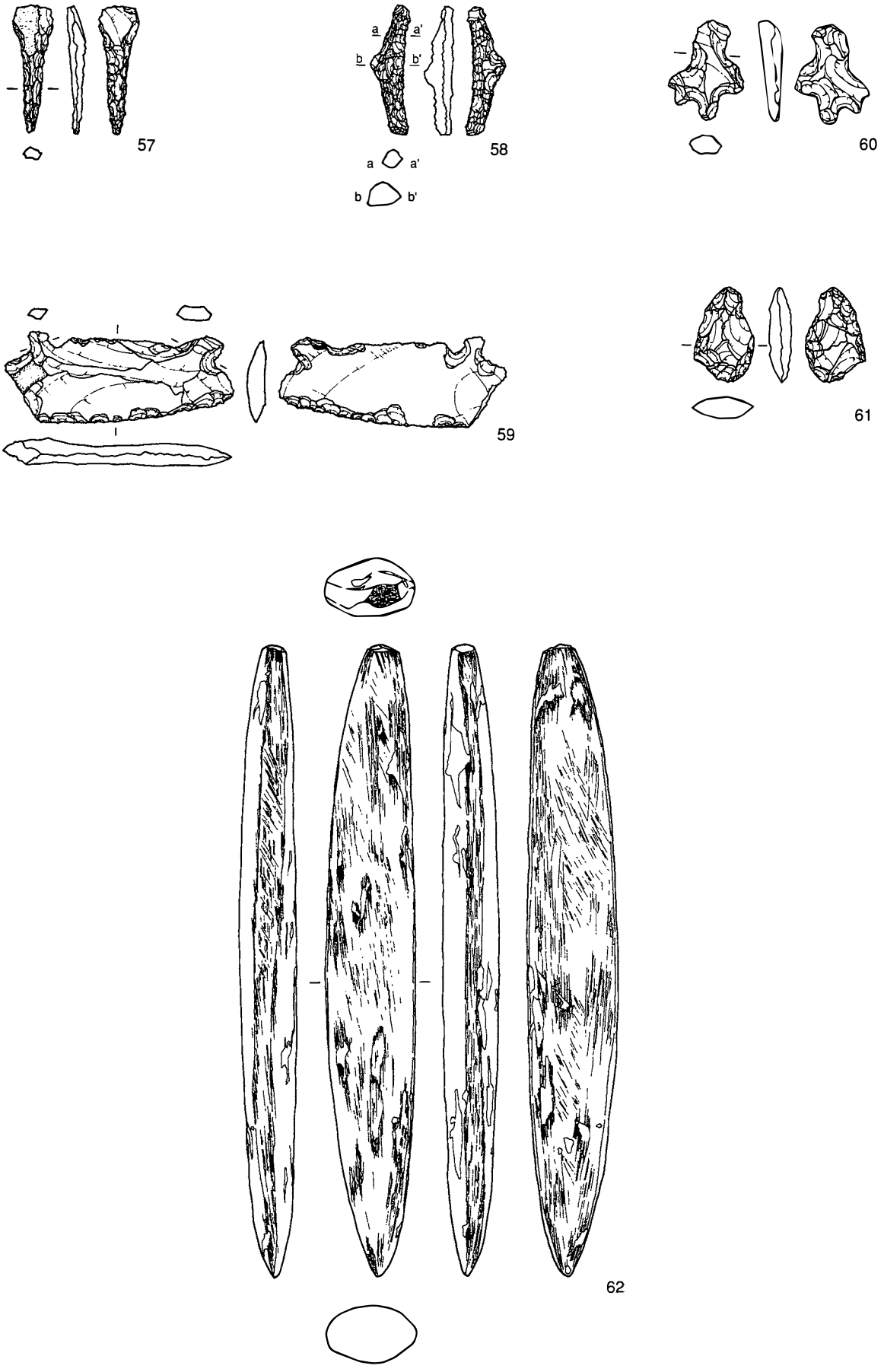
62は石刀である。本遺跡群では石刀の出土はこれ1点のみである。頭部には特にこれといった装飾はなく、平らになるよう面取りを行い、研磨しているのみである。刃部は1側縁にのみあり、やや内反りになっている。断面は楕円形を呈するが、刃部側はわずかに細くなっており、整形の際に刃部を作り出していることが分かる。全面に研磨が施されているが、その下には整形剥離が部分的に残っている。緑泥片岩を使用している。

用途については、異形石器と同様に不明である。ただ出土当時、重機による表土掘削のため石刀は横転していたが、本来は、頭部を上にして直立した状態で据えられていたことが、担当者の話から明らかになっている。石刀の性格や用途を考える上で重要な手がかりとなろう。

また十字形石器も6点出土している。完形品もあるが多くは欠損品である。十字形といっても形態的には「X」に近く、やや縦長を呈している。突起部のつけ根は丁寧に加工しており、この形態に何らかの意味があったのかもしれない。住居址内からは出土していないが、42－07号土壙から1点出土しており、本遺跡群における遺構出土の唯一の例である。

3　その他

本遺跡群から出土しているのは土器、石器だけではない。土偶、玉類、土製品等も数多く出土している。次にこれらの特殊遺物について見ていきたい。なお出土量としては土器、石器ほどではないので極力図示す



第239図　包含層出土遺物実測図 6

るよう努めたが、諸般の事情で特徴的なもの以外は割愛したものもある。

土偶（第240図）

10点程出土している。多くは包含層遺物であるが、住居址出土のものも 2 点ある。すべて破片であり、その部位も頭部、胸部、腕部、脚部と様々である。また破片同士で接合したものや赤色顔料を塗布したものもあり、興味深い。

玉類（第241～243図）

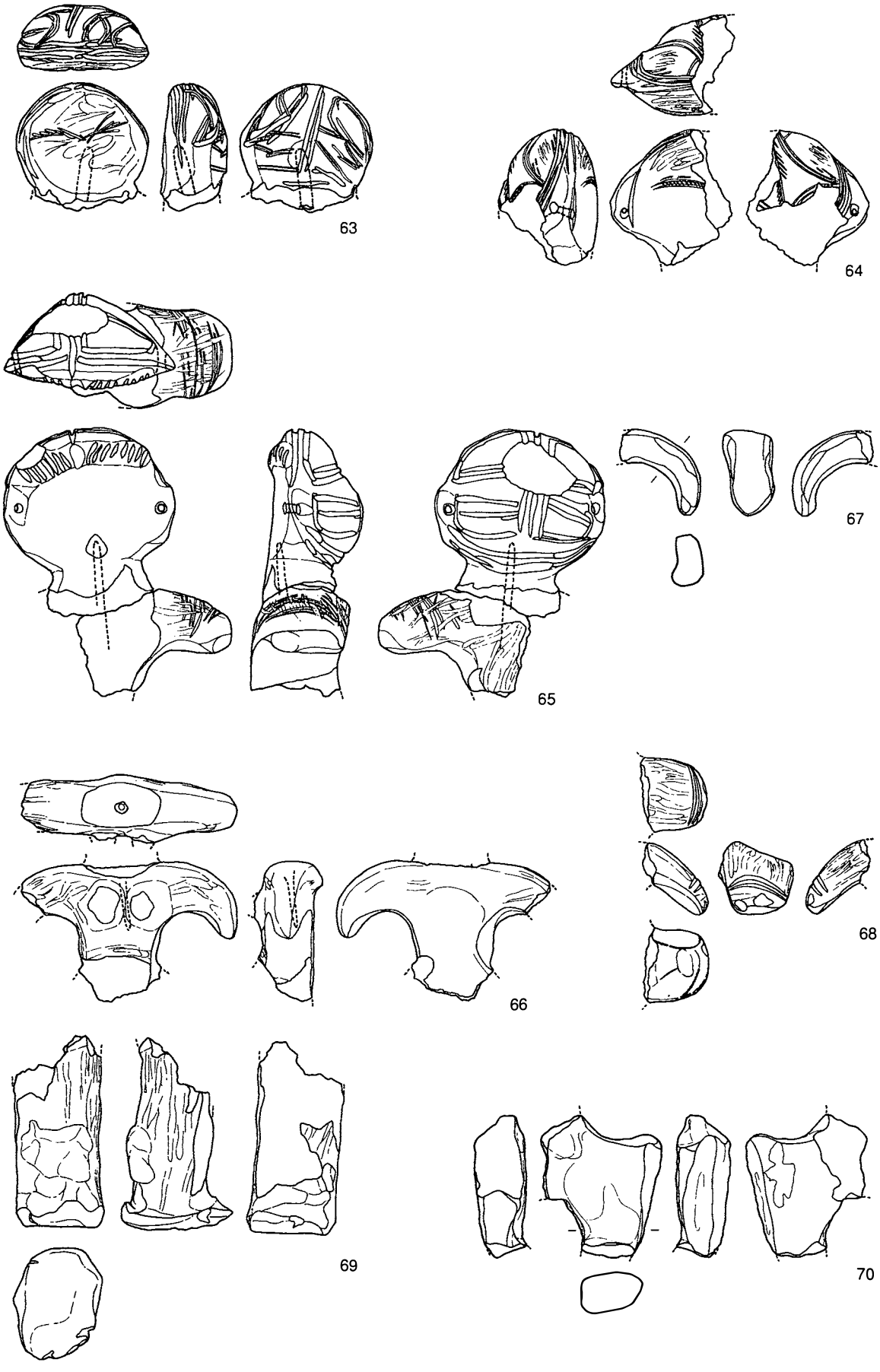
70点程出土している。その形態から勾玉、管玉、丸玉、その他に、材質から石製と土製に分類できる。石製のものについては、素人目に判別できるものについては言及しているが、はっきりしないものについては触れていない。ほとんど図示しているが、いくつか図示していないものもある。

土製品（第244・245図112～128・図版179・180）

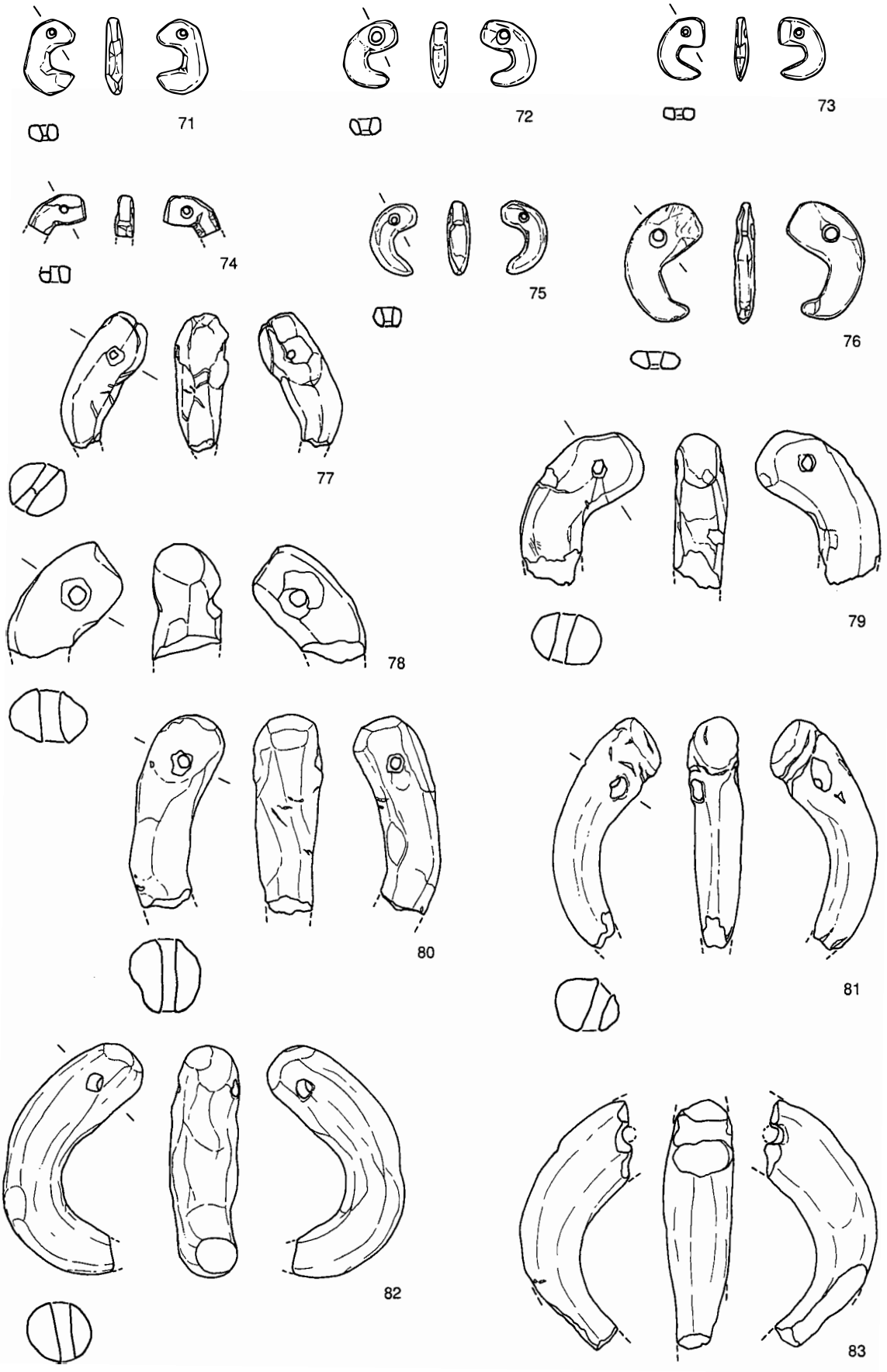
50点程出土している。土偶や玉類以外の土製品をまとめている。形態や大きさは様々で、用途が比較的特定できるものから、用途はおろか形態さえ特定できないものまである。

焼成粘土塊（第245図129～134・図版181）

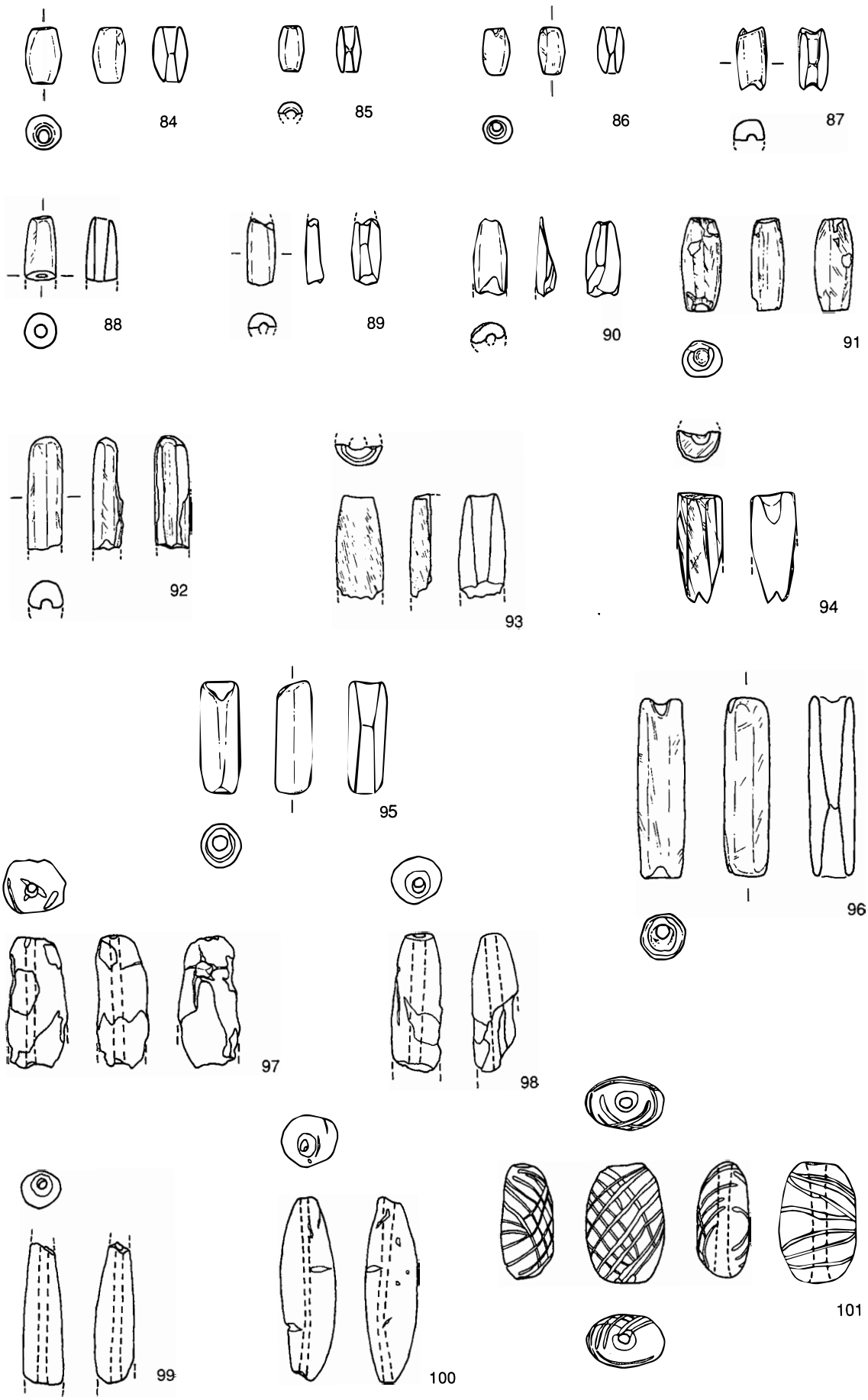
130点程出土している。土器製作時に生じた不要な粘土塊が、熱を受けて変質したものである。特に決まった形態はないが、土器製作時に生じるため各工程で類似したものがある。その大きさも 1 cm程のものから 5 cmを超えるものまである。



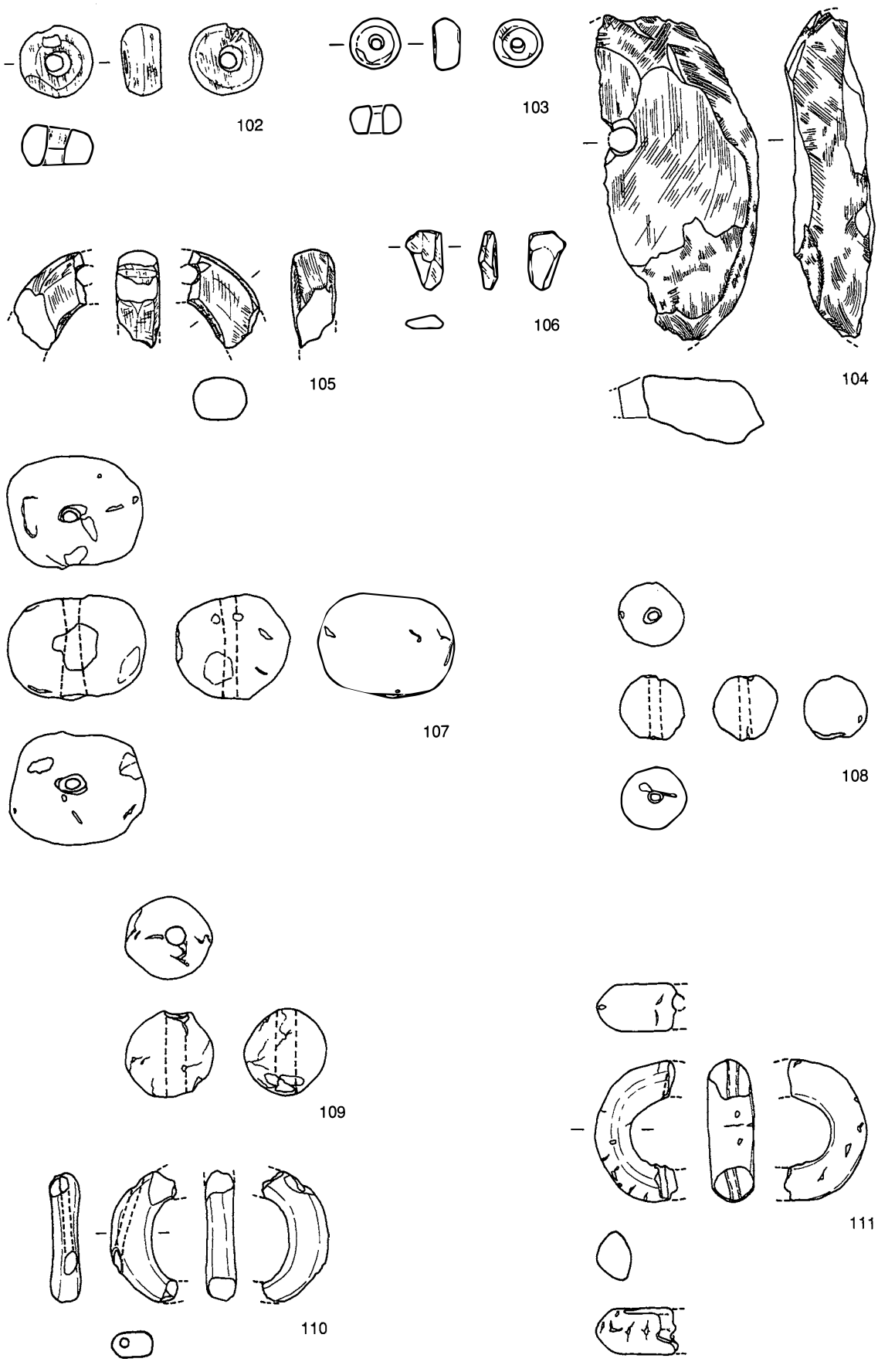
第240図　包含層出土遺物実測図７



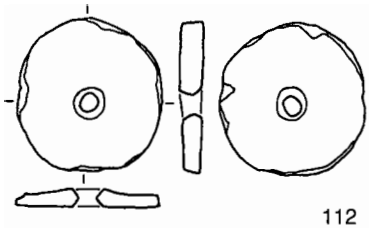
第241図　包含層出土遺物実測図 8

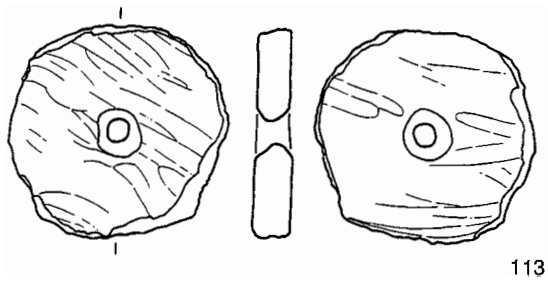


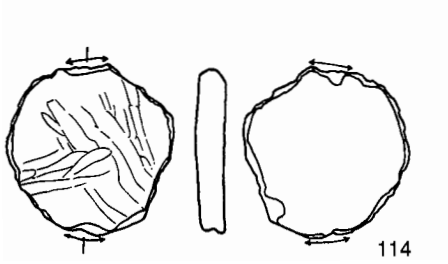
第242図　包含層出土遺物実測図９

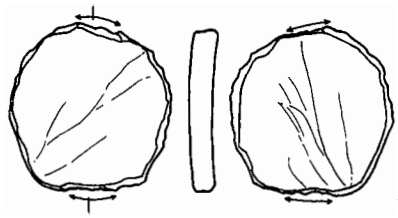


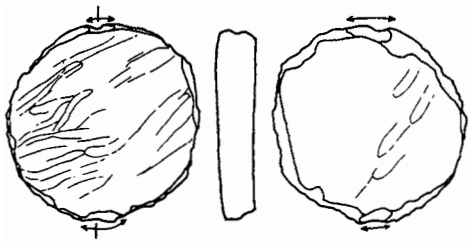
第243図　包含層出土遺物実測図10

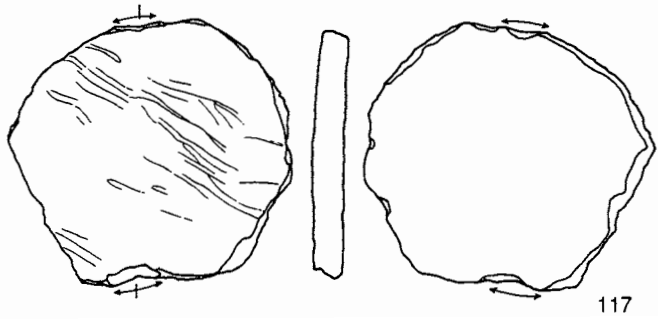


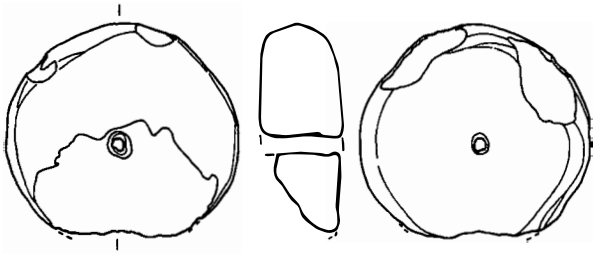


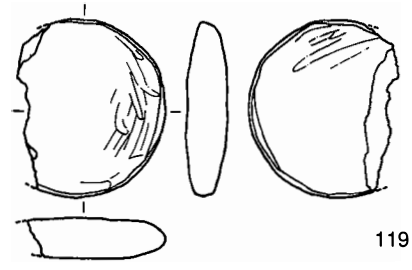


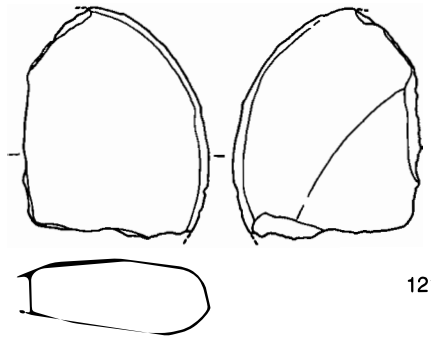




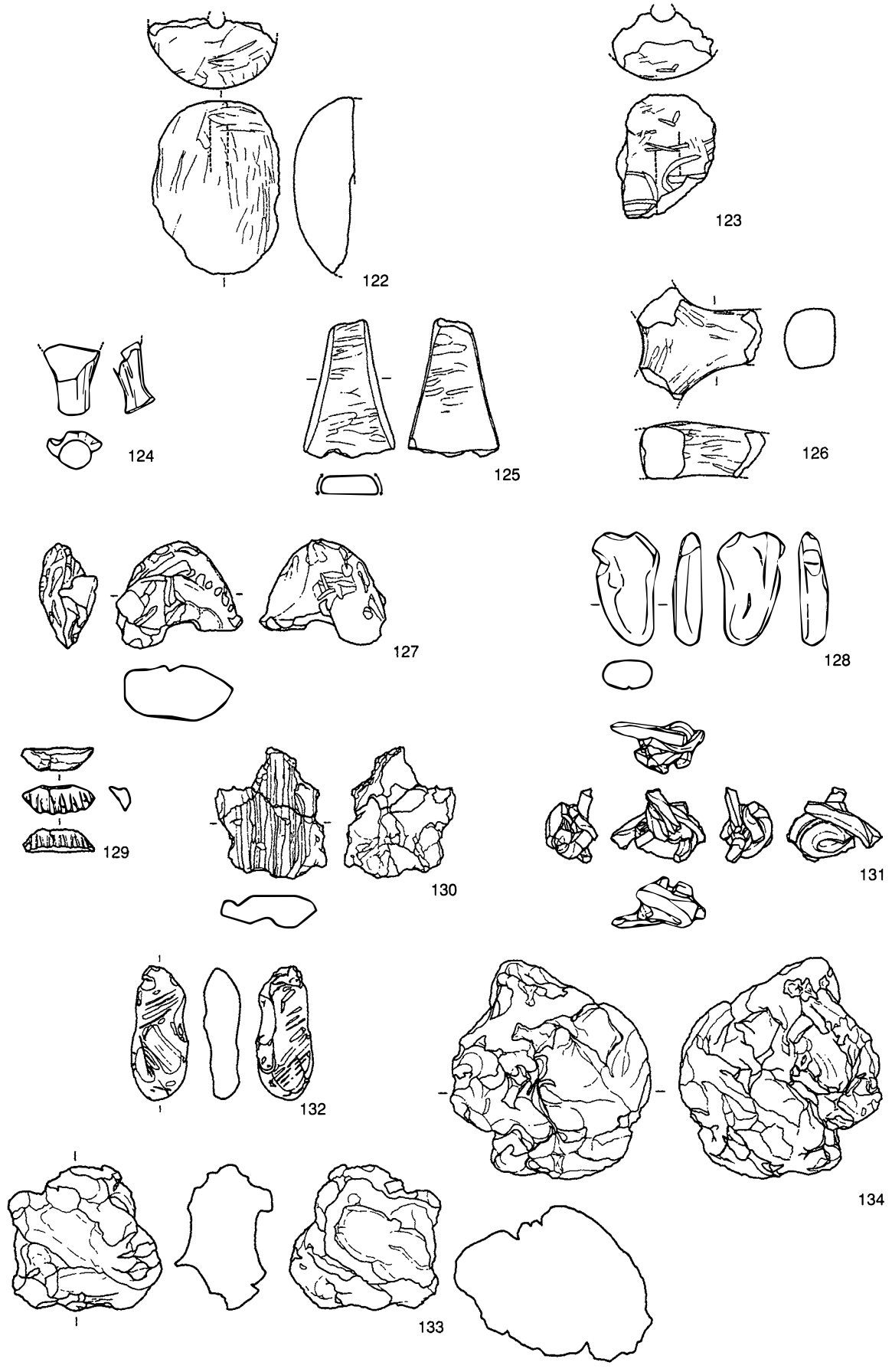








第244図　包含層出土遺物実測図11



第245図　包含層出土遺物実測図12

第Ⅳ章　自然化学分析

第1節　縄文時代後・晩期

1　石の本遺跡群から出土した土器に残存する脂肪の分析

帯広畜産大学生物資源化学科　中野益男
㈱ズコーシャ総合科学研究所　中野寛子，長田正宏

動植物を構成している主要な生体成分にタンパク質、核酸、糖質（炭水化物）および脂質（脂肪・油脂）がある。これらの生体成分は環境の変化に対して不安定で、圧力・水分などの物理的作用を受けて崩壊してゆくだけでなく、土の中に住んでいる微生物による生物的作用によっても分解してゆく。これまで生体成分を構成している有機質が完全な状態で遺存するのは、地下水位の高い低地遺跡、泥炭遺跡、貝塚などごく限られた場所にすぎないと考えられてきた。

最近、ドイツ新石器時代後期にバター脂肪が存在していたこと(1)、古代遺跡から出土した約2千年前のトウモロコシ種子(2)、約5千年前のハーゼルナッツ種子(3)に残存する脂肪の脂肪酸は安定した状態に保持されていることがわかった。このように脂肪は微量ながら比較的安定した状態で千年・万年という長い年月を経過しても変化しないで遺存することが判明した。(4)

脂質は有機溶媒に溶けて、水に溶けない成分を指している。脂質はさらに構造的な違いによって誘導脂質、単純脂質および複合脂質に大別される。これらの脂質を構成している主要なクラス（種）が脂肪酸であり、その種類、含量ともに脂質中では最も多い。その脂肪酸には炭素の鎖がまっすぐに延びた飽和型と鎖の途中に二重結合をもつ不飽和型がある。動物は炭素数の多い飽和型の脂肪酸、植物は不飽和型の脂肪酸を多く持つというように、動植物の種ごとに固有の脂肪酸を持っている。ステロールについても、動物性のものはコレステロール、植物性のものはシトステロール、微生物はエルゴステロールというように動植物に固有の特徴がある。従って、出土遺物の脂質の種類およびそれらを構成している脂肪酸組成と現生動植物のそれとを比較することによって、目に見える形では遺存しない原始古代の動植物を判定することが可能である。

このような出土遺物・遺構に残存する脂肪を分析する方法を「残存脂肪分析法」という。この「残存脂肪分析法」を用いて石の本遺跡群から出土した埋設土器の性格を解明しようとした。

（1）　土壌および土器試料

熊本県熊本市平山町に所在する石の本遺跡群から出土した土器と土器内外の土壌を分析した。この遺跡は丘陵南側に位置し、丘陵には浸食谷が形成されており、この谷部の底から単独で埋設土器遺構が出土した。土器は上鉢と下鉢の2個体から成り、ともに縄文時代晩期初頭のものと推定されている。遺跡内での埋設土器遺構の出土地点と遺構内外での土壌試料採取地点を図1に示す。試料No.1は土器下鉢内1層から、No.2は同じ下鉢内の3層から、それぞれ採取した土壌試料である。No.3は土器そのもので下鉢の底部破片試料である。No.4は埋設土器遺構土坑の埋土4層から、No.5は同じ遺構付近のⅢ層から、No.6は同じ遺構から離れた調査区東壁のⅢ層から、それぞれ採取した土壌試料である。このうち試料No.5とNo.6は対照土壌試料である。

（２）　残存脂肪の抽出

土壌試料82～211gと土器試料163gに３倍量のクロロホルムーメタノール（2：1）混液を加え、超音波浴槽中で30分間処理し残存脂肪を抽出した。処理液を濾過後、残渣に再度クロロホルムーメタノール混液を加え、再び30分間超音波処理をする。この操作をさらに２回繰り返して残存脂肪を抽出した。得られた全抽出溶媒に１％塩化バリウムを全抽出溶媒の４分の１容量加え、クロロホルム層と水層に分配し、下層のクロロホルム層を濃縮して残存脂肪を分離した。

残存脂肪の抽出量を表１に示す。抽出率は土壌試料が0.0092～0.0268％、平均0.0186％、土器試料が0.0020％であった。この値は全国各地の遺跡から出土した土壌、石器、土器等の試料の平均抽出率0.0010～0.0100％と比べると、土壌試料が若干高く、土器試料は平均抽出率の範囲内のものであった。また、埋設土器内土壌試料No.１、No.２と遺構土坑埋土試料No.４とでは前者の方が抽出率が２～３倍高かった。

残存脂肪をケイ酸薄層クロマトグラフィーで分析した結果、脂肪は単純脂質から構成されていた。このうち遊離脂肪酸が最も多く、次いでグリセロールと脂肪酸の結合したトリアシルグリセロール（トリグリセリド）、ステロールエステル、ステロールの順に多く、微量の長鎖炭化水素も存在していた。

（３）　残存脂肪の脂肪酸組成

分離した残存脂肪の遊離脂肪酸とトリアシルグリセロールに5％メタノール性塩酸を加え、125℃封
時間分解し、メタノール分解によって生成した脂肪酸メチルエステルをクロロホルムで分離し、さらにジアゾメタンで遊離脂肪酸を完全にメチル化してから、ヘキサンーエチルエーテルー酢酸（80：30：1）またはヘキサンーエーテル（85：15）を展開溶媒とするケイ酸薄層クロマトグラフィーで精製後、ガスクロマトグラフィーで分析した。(5)

残存脂肪の脂肪酸組成を図２に示す。残存脂肪から11種類の脂肪酸を検出した。このうちパルミチン酸（C16：0）、ステアリン酸（C18：0）、オレイン酸（C18：1）、リノール酸（C18：2）、アラキジン酸（C20：0）、エイコサモノエン酸（C20：1）、ベヘン酸（C22：0）、エルシン酸（C22：1）、リグノセリン酸（C24：0）の9種類の脂肪酸をガスクロマトグラフィーー質量分析により同定した。

各試料中の脂肪酸組成を見ると、試料No.２とNo.３がほぼ同一の組成パターンを示し、試料No.４～No.６もほぼ同一の組成パターンを示していた。試料No.１はNo.２、No.３とはパルミチン酸を除けば全体的には似ているが、やや異なる傾向を示していた。このうち炭素数18までの中級脂肪酸の分布割合を見ると、試料No.１では炭素数20以上の高級脂肪酸の割合が高いために、中級脂肪酸には主要なものがなく、試料No.２とNo.６ではパルミチン酸とオレイン酸がほぼ同量分布していてそれらが主要な脂肪酸で、他の試料中ではパルミチン酸が主要な脂肪酸であった。一般に考古遺物にはパルミチン酸が多く含まれている。これは長い年月の間にオレイン酸、リノール酸といった不飽和脂肪酸の一部が分解しパルミチン酸が生成するためで、主として植物遺体の土壌化に伴う腐植物から来ていると推定される。オレイン酸の分布割合の高いものとしては、動物性脂肪と植物性脂肪の両方が考えられ、植物性脂肪では特に根、茎、種子に多く分布するが、動物脂肪の方が分布割合は高い。リノール酸は主として植物種子・葉に多く分布する。

一方、高等動物、特に高等動物の臓器、脳、神経組織、血液、胎盤に特徴的にみられる炭素数20以上のアラキジン酸、ベヘン酸、リグノセリン酸などの高級脂肪酸はそれら３つの合計含有率が試料No.１で約65％、他の試料中で約32～47％であった。通常の遺跡出土土壌中での高級脂肪酸含有率はアラキジン酸、ベヘン酸、

リグノセリン酸 3 つの合計で 4 ～10%くらいであるので、すべての試料中での高級脂肪酸含有量は非常に多いといえる。特に、試料No. 1 でのリグノセリン酸の含有率は約36%、No. 2 では約28%と、非常に高いものであった。高級脂肪酸含有量が多い場合としては、試料中に高等動物の血液、脳、神経組織、臓器等の特殊な部分が含まれている場合と、植物の種子・葉などの植物体の表面を覆うワックスの構成分として含まれている場合とがある。

以上、石の本遺跡群の試料中では、試料No. 2 とNo. 3 、No. 4 ～No. 6 がそれぞれほぼ同一の組成パターンを示し、試料No. 1 はNo. 2 、No. 3 とパルミチン酸を除けば似てはいるがやや異なる傾向を示すことがわかった。中級脂肪酸の中では主要な脂肪酸はパルミチン酸であるものが多く、試料No. 2 とNo. 6 ではオレイン酸も多いことがわかった。高級脂肪酸はすべての試料中に多かったが、試料No. 1 には特に非常に多く含まれていることもわかった。通常ヒト遺体の埋葬が推測される場合には高級脂肪酸含有量が特に多い地点にはヒトの頭部が存在していたと推定することが多い。

（4）　残存脂肪のステロール組成

残存脂肪のステロールをヘキサン－エチルエーテル－酢酸（80：30：1）を展開溶媒とするケイ酸薄層クロマトグラフィーで分離・精製後、ピリジン－無水酢酸（1：1）を窒素気流下で反応させてアセテート誘導体にしてから、もう一度同じ展開溶媒で精製し、ガスクロマトグラフィーにより分析した。残存脂肪の主なステロール組成を図 3 に示す。残存脂肪から20種類前後のステロールを検出した。このうちコプロスタノール、コレステロール、エルゴステロール、カンペステロール、スチグマステロール、シトステロールなど 8 種類のステロールをガスクロマトグラフィー－質量分析により同定した。

試料中のステロール組成を見てみると、動物由来のコレステロールは試料No. 1 ～No. 3 に約 7 ～13%、No. 4 ～No. 6 に約 4 ～ 6 %分布していた。通常一般的な植物腐植土中にはコレステロールは 2 ～ 6 %含まれている。従って、土器と土器内土壌試料中にはコレステロールがやや多めに含まれており、土器外や遺構外の試料中には通常の遺跡出土土壌中の植物腐植土並みに含まれているといえる。特に、土器内でも下鉢底部の土器破片試料にはコレステロールが約13%と他よりも多く含まれていた。

植物由来のシトステロールはすべての試料中に約 5 ～12%分布していた。通常の遺跡出土土壌中にはシトステロールは30～40%、もしくはそれ以上に分布している。従って、試料中のシトステロール含有量は通常の遺跡出土土壌中の植物腐植土中でよりも少なめであった。さらに、少なめのシトステロール含有量の中でも土器や土器内土壌試料中では土器外試料中でよりもその含有量は少なかった。

クリ、クルミ等の堅果植物由来のカンペステロールやスチグマステロールは、カンペステロールが試料No. 2 に約18%、他のすべての試料中に約2～4%、スチグマステロールが試料No. 2 に約14%、他のすべての試料中に約7～10%分布していた。通常の遺跡出土土壌中にはカンペステロール、スチグマステロールは1～10%分布している。従って、試料No. 2 でのカンペステロール、スチグマステロール含有量はやや多く、他のすべての試料中でのそれは通常の遺跡出土土壌中での植物腐植土並みであった。

微生物由来のエルゴステロールはすべての試料中に約 1 ～ 4 %分布していた。通常人為的に酵母等の微生物を添加して積極的に何かを醗酵させた場合には、エルゴステロールは10%以上分布している。[6] 従って、今回の含有量は単に土壌微生物が増殖したものと考えられる。

哺乳動物の腸および糞便中に特異的に分布するコプロスタノールは試料No. 2 に約 8 %、他のすべての試料中に約 1 ～ 3 %分布していた。コプロスタノールは通常の遺跡出土土壌中には分布していないが、1 %程度の量は検出されることがある。また、コプロスタノールの分布により試料中での哺乳動物の存在を確認するこ

とができる他に、コプロスタノールが10%以上含まれていると、試料中に残存している脂肪の動物種や性別、また遺体の配置状況などが特定できる場合がある。[7] 今回の分析ではコプロスタノール含有量が少ないために、コプロスタノールの分布割合から動物種を判定することはできなかったが、試料No. 2 には約 8 %と、他よりはかなり多く含まれているので、試料No. 2 採取地点付近には哺乳動物の腸や糞便由来の脂肪が残存していた可能性がある。

一般に動物遺体の存在を示唆するコレステロールとシトステロールの分布比の指標値は土壙で0.6以上[8]、土器・石器・石製品で0.8～23.5[9・10]をとる。土壌および土器試料のコレステロールとシトステロールの分布比を表 2 に示す。表からわかるように、土器と土器内土壌試料は分布比がすべて0.6以上を示し、土器外試料は試料No. 6 が0.7と、0.6以上を示したが、他の試料No. 4 とNo. 5 は0.6以下を示した。このことは土器内試料中には動物遺体もしくは動物由来の脂肪が残存していたことを示唆し、土器外にはそれが残存していなかったことを示唆している。遺構から離れた地点から採取した対照試料である試料No. 6 も分布比が0.6以上を示したのは、試料No. 6 の採取地点付近にも高等動物の脂肪が残存していた可能性があるが、哺乳動物の存在を示すコプロスタノールがほとんど検出されないことから、動物遺体そのものが存在していた可能性は少ない。

以上、石の本遺跡群の試料中に含まれている各種ステロール類は、動物性コレステロールが土器底部破片試料No. 3 でやや多く、植物性カンペステロールとスチグマステロールが土器内土壌試料No. 2 でやや多く、哺乳動物の腸または糞便由来のコプロスタノールが試料No. 2 でやや多い他は、すべて通常の遺跡出土土壌中の植物腐植土並みに含まれていることがわかった。また、コレステロールとシトステロールの分布比は土器と土器内土壌試料はすべて0.6以上を示し、試料中に動物遺体もしくは動物由来の脂肪が残存していることを示唆していた。埋設土器遺構から離れた地点から採取した対照土壌試料であるNo. 6 も分布比が0.6以上を示したのは、この試料の採取地点付近にも高等動物の脂肪が残存していた可能性がある。しかし、動物遺体そのものの存在を示すコプロスタノールがほとんど検出されないことから、動物遺体そのものが存在していた可能性は少なく、単に動物脂肪による汚染があったと考えられる。対照土壌試料中のコレステロール含有量があまり多くないにもかかわらず、先の脂肪酸分析で対照土壌試料中の高級脂肪酸含有量が多かったのは、この高級脂肪酸が植物体の表面を覆うワックスの構成分由来のものと考えられる。従って、土器内の内容物の特徴を示す高級脂肪酸は大部分が植物腐植土由来の高級脂肪酸で、その上に高等動物由来の高級脂肪酸が混合したものと考えられる。

（５）　脂肪酸組成の数理解析

残存脂肪の脂肪酸組成をパターン化し、重回帰分析により各試料間の相関係数を求め、この相関係数を基礎にしてクラスター分析を行って各試料の類似度を調べた。同時に出土土壌を土壙墓と判定した福岡県太宰府条坊跡遺跡、前田遺跡および出土土壌を再葬墓と判定した石穴遺跡[11]、出土土壌を再葬墓と判定した同じ福岡県諸田仮塚遺跡[12]、出土した配石遺構にヒト男性遺体が埋葬されており、遺構内での遺体配置状況を推測した鹿児島県西丸尾遺跡[13]、出土土壙を土壙墓と判定した兵庫県寺田遺跡[14]、出土土器を幼児埋葬用甕棺と判定した静岡県原川遺跡[15]、ヒトの体脂肪、出土土壙を再葬墓と判定した宮城県摺萩遺跡[16]、出土土器にヒトの骨のみを埋葬したと判定した青森県上蛇沢(1)遺跡[17]、秋田県片野Ⅰ遺跡[18]、ヒトの骨油、ヒトの胎盤、イノシシ、ニホンジカのような現生動物試料など、各種遺跡試料の脂肪酸との類似度も比較した。予めデータベースの脂肪酸組成と試料中のそれとでクラスター分析を行い、その中から類似度の高い試料を選び出し、再びクラスター分析によりパターン間距離にして表したのが図 4 である。

図からわかるように、石の本遺跡群の試料No. 1 は単独でA群を形成した。石の本遺跡群の他のすべての試

料は相関行列距離0.15以内でB群を形成した。対照試料である他遺跡の試料のうち、ヒト遺体を直接埋葬したことに関わる遺跡の試料やヒトの体脂肪、ヒトの胎盤試料、イノシシ、ニホンジカのような動物試料は相関行列距離0.15以内でC群を形成し、互いに類似していた。ヒトの骨のみを埋葬したことに関わる遺跡の試料やヒトの骨油試料は相関0.1以内でD群を形成し、互いに類似していた。これらの群のうちA群とB群は相関行列距離0.3以内の所にあり、樹状図全体からすれば若干類似しているといえる。A群、B群はC群、D群とは相関行列距離で0.5の所にあり、類似しているとはいえなかった。

以上、石の本遺跡群の試料中に残存する脂肪と類似の脂肪特定することはできなかったが、石の本遺跡群の試料の中では試料No. 2 ～No. 6 はよく似た傾向を示すことがわかった。また、試料No. 1 も他の石の本遺跡群の試料と若干は類似していることもわかった。石の本遺跡群の試料と類似する他遺跡の試料が特定できなかったのは、石の本遺跡群の試料中には非常に多くの高級脂肪酸が含まれるという、通常とは異なる脂肪酸組成パターンを持つシルト土壌の特質のために、相関行列距離的に近い対照試料がなかったと考えられる。

（6）　脂肪酸組成による種特異性相関

残存脂肪の脂肪酸組成から種を特定するために、中級脂肪酸（炭素数16のパルミチン酸から炭素数18のステアリン酸、オレイン酸、リノール酸まで）と高級脂肪酸（炭素数20のアラキジン酸以上）との比をX軸に、飽和脂肪酸と不飽和脂肪酸との比をY軸にとり種特異性相関を求めた。この比例配分により第 1 象限の原点から離れた位置に高等動物の血液、脳、神経組織、臓器等に由来する脂肪、第 1 象限から第 2 象限の原点から離れた位置にヒト胎盤、第 2 象限の原点から離れた位置に高等動物の体脂肪、骨油に由来する脂肪がそれぞれ分布する。第 2 象限から第 3 象限にかけての原点付近に植物と微生物、原点から離れた位置に植物腐植、第 3 象限から第 4 象限にかけての原点から離れた位置に海産動物に由来する脂肪が分布する。

試料の残存脂肪から求めた相関図を図 5 に示す。試料No. 1 は第 1 象限内の原点から非常に離れた位置で単独でA群を形成した。他のすべての試料は同じ第 1 象限内のY軸に近い位置でB群を形成した。これらの分布位置は通常は試料中に残存する脂肪が高等動物の血液、脳、神経組織、臓器等の特殊な部分に由来することを示唆しているが、今回はステロール分析でコレステロールが少ないことから、植物体の表面を覆うワックスの構成分由来の高級脂肪酸を含むシルト土壌の特質のために、第 1 象限内に分布したものと考えられる。

（7）　総括

石の本遺跡群から出土した埋設土器の性格を判定するために、土器内外の土壌と土器破片試料の残存脂肪分析を行った。残存する脂肪酸分析の結果、土器下鉢 3 層試料No. 2 と土器下鉢底部破片試料No. 3 はほぼ同一の組成パターンを示し、土器外の試料No. 4 ～No. 6 もほぼ同一の組成パターンを示すことがわかった。殆どの試料中で中級脂肪酸の中では主要な脂肪酸はパルミチン酸であった。高級脂肪酸はすべての試料中で非常に多かったが、土壌試料のステロール分析でコレステロールがあまり多くないことから、この高級脂肪酸は植物体の表面を覆うワックスの構成分由来のものも混合していると考えられる。

残存する脂肪酸組成の分布に基づく数理解析の結果クラスター分析からは、試料中に残存する脂肪と類似の脂肪を特定することはできなかったが、試料No. 2 ～No. 6 はよく似た傾向を示すことがわかった。また、土器下鉢 1 層試料No. 1 も他の石の本遺跡群の試料と若干は類似していることもわかった。種特異性相関からは、すべての試料が第 1 象限内に分布することがわかったが、ステロール分析でコレステロールがあまり多く含まれていないことを考えると、植物体の表面を覆うワックスの構成分由来の高級脂肪酸を多く含むシル

ト土壌の特質のために、第1象限内に分布したものと考えられる。

残存するステロール分析の結果、試料中に含まれている各種ステロール類は、動物性コレステロールが土器下鉢底部破片試料No. 3 でやや多く、植物性カンペステロール、スチグマステロールと哺乳動物の腸または糞便由来のコプロスタノールが土器下鉢 3 層試料No. 2 でやや多い他は、すべて通常の遺跡出土土壌中の植物腐植土並みに含まれていることがわかった。コレステロールとシトステロールの分布比も土器下鉢破片試料と土器下鉢内土壌試料はすべて0.6以上を示し、試料中に動物遺体もしくは動物由来の脂肪が残存していることを示唆していた。埋設土器遺構から離れた地点から採取した対照土壌試料である試料No. 6 も分布比が0.6以上を示したが、これはNo. 6 採取位置付近にも高等動物の脂肪が残存していた可能性がある。しかし、動物遺体そのものの存在を示すコプロスタノールがほとんど検出されないことから、動物遺体そのものが存在していた可能性は少なく、単に動物脂肪の汚染があったと考えられる。

以上の成績から、石の本遺跡群の試料中特に土器下鉢試料は流入土の影響をかなり受けており、土器内の内容物が示す特徴的な脂肪が単独では検出されなかったが、土器下鉢 1 層試料No. 1 に高級脂肪酸が、下鉢 3 層試料No. 2 にコプロスタノールが、下鉢底部破片試料No. 3 にコレステロールが、それぞれ特に多いことを考え合わすと、試料No. 1 採取地点付近を頭部、No. 2 を腹部、No. 3 を足部として屈葬の形式でこの土器内にヒト遺体が埋葬されていた場合と類似の脂肪が残存していた可能性が考えられる。

参考文献

（1）R.C.A.Rottländer and H.Schlichtherle :「Food identification of samples from archaeological sites」,『Archaeo.Physika.』, 10巻, 1979, pp260.

（2）D.A.Priestley, W.C.Galinat and A.C.Leopold :「Preservation of polyunsaturated fatty acid in ancient Anasazi maize seed」,『Nature』, 292巻, 1981, pp146.

（3）R.C.A.Rottlä nder and H.Schlichtherle :「Analyse frü hgeschichtlicher Gefä ss— inhalte」,『Naturwissenschaften 』, 70巻, 1983, pp33.

（4）中野益男 :「残存脂肪分析の現状」,『歴史公論』, 第10巻 (6) , 1984, pp124.

（5）M.Nakano and W.Fischer :「The Glycolipids of Lactobacillus casei DSM 20021」,『Hoppe-Seyler's Z.Physiol.Chem.』, 358巻, 1977, pp1439.

（6）中野益男, 福島道広, 中野寛子, 中岡利泰, 根岸　孝 :「残存脂肪分析法による原始古代の生活環境—とくに東北地方の縄文時代前期遺跡から出土したクッキー状炭化物の栄養化学的同定（第 7 報）」,『日本農芸化学会東北支部北海道支部合同秋期大会講演要旨』, 1987, pp15.

（7）中野益男：「残留脂肪酸による古代復元」,『新しい研究法は考古学になにをもたらしたか』, 田中　琢, 佐原　眞編, クバプロ, 1995, pp148.

（8）中野益男, 伊賀　啓, 根岸　孝, 安本教傳, 畑　宏明, 矢吹俊男, 佐原　眞, 田中　琢：「古代遺跡に残存する脂質の分析」,『脂質生化学研究』, 第26巻, 1984, pp40.

（9）中野益男：「真脇遺跡出土土器に残存する動物油脂」,『真脇遺跡－農村基盤総合設備事業能都東地区真脇工区に係わる発掘調査報告書』, 能都町教育委員会・真脇遺跡発掘調査団, 1986, pp401.

(10) 中野益男, 根岸　孝, 長田正宏, 福島道広, 中野寛子：「ヘロカルウス遺跡の石器製品に残存する脂肪の分析」,『ヘロカルウス遺跡』, 北海道文化財研究所調査報告書, 第３集, 1987, pp191.

(11) 中野寛子, 明瀬雅子, 長田正宏, 中野益男：「前田遺跡抽出資料残存脂肪分析」,『未発表』, 福岡県太宰府市教育委員会.

(12) 中野寛子, 明瀬雅子, 長田正宏, 中野益男：「諸田仮塚遺跡の土坑に残存する脂肪の分析」,『未発表』, 福岡県教育庁.

(13) 中野益男, 中野寛子, 明瀬雅子, 長田正宏：「西丸尾遺跡の配石遺構に残存する脂肪の分析」,『未発表』, 鹿児島県教育委員会.

(14) 中野益男, 中野寛子, 福島道広, 長田正宏：「寺田遺跡土壙墓状遺構に残存する脂肪の分析」,『未発表』, 兵庫県芦屋市教育委員会.

(15) 中野益男, 幅口　剛, 福島道広, 中野寛子, 長田正宏：「原川遺跡の土器棺に残存する脂肪の分析」,『原川遺跡Ⅰ－昭和62年度袋井バイパス（掛川地区）埋蔵文化財発掘調査報告書』, 第17集,（財）静岡県埋蔵文化財調査研究所, 1988, PP79.

(16) 中野益男, 福島道広, 中野寛子, 長田正宏：「摺萩遺跡の遺構に残存する脂肪の分析」,『未発表』, 宮城県教育委員会.

(17) 中野益男, 中野寛子, 長田正宏：「第１号埋設土器に残存する脂肪の分析」,『上蛇沢（1）遺跡－青森県埋蔵文化財調査報告書』, 第198集, 青森県教育委員会, 1996, PP37.

(18) 中野寛子, 明瀬雅子, 長田正宏, 中野益男：「片野Ⅰ遺跡から出土した土器に残存する脂肪の分析」,『未発表』, 青森県埋蔵文化財調査センター.

表1　土器および土壌試料の残存脂肪抽出量

試料No.	採　取　地　点	湿重量（g）	全脂質（mg）	抽出率（%）
1	S−1埋設土器下鉢1層	144.1	38.6	0.0268
2	S−2埋設土器下鉢3層	81.6	16.0	0.0196
3	S−3埋設土器下鉢底部破片	163.0	3.3	0.002
4	S−4埋設土器遺構土坑埋土	211.2	19.5	0.0092
5	S−5埋設土器遺構付近Ⅲ層	121.2	29.8	0.0246
6	S−6埋設土器より離れた所	158.0	20.6	0.013

表2　試料中に分布するコレステロールとシトステロールの割合

試料No.	コレステロール（%）	シトステロール（%）	コレステロール／シトステロール
1	8.91	5.44	1.64
2	6.89	9.79	0.70
3	13.28	5.76	2.31
4	5.38	12.20	0.44
5	3.68	12.02	0.31
6	6.22	8.86	0.70

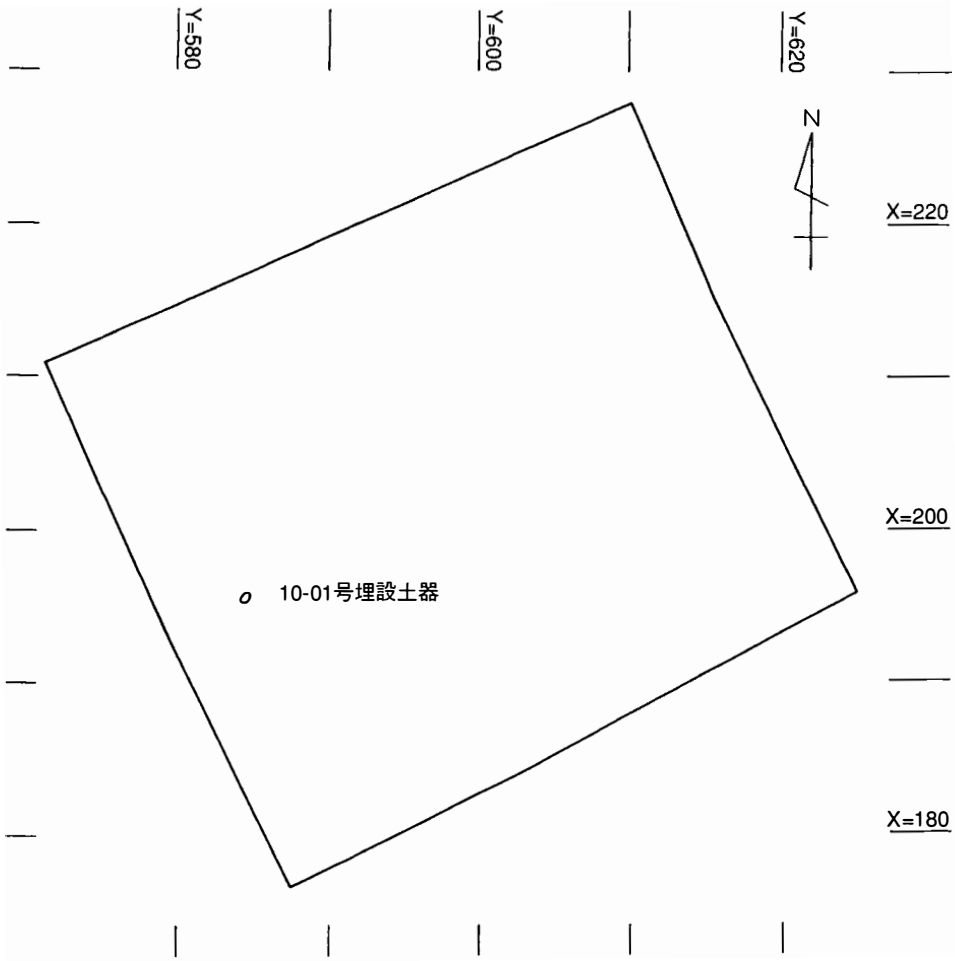

Y=580
Y=600
Y=620
N
X=220
X=200
X=180
10-01号埋設土器
L=76.800m
1層
2層
2層
S1
4層
3層
S2
S4
S3

図１　試料採集位置図

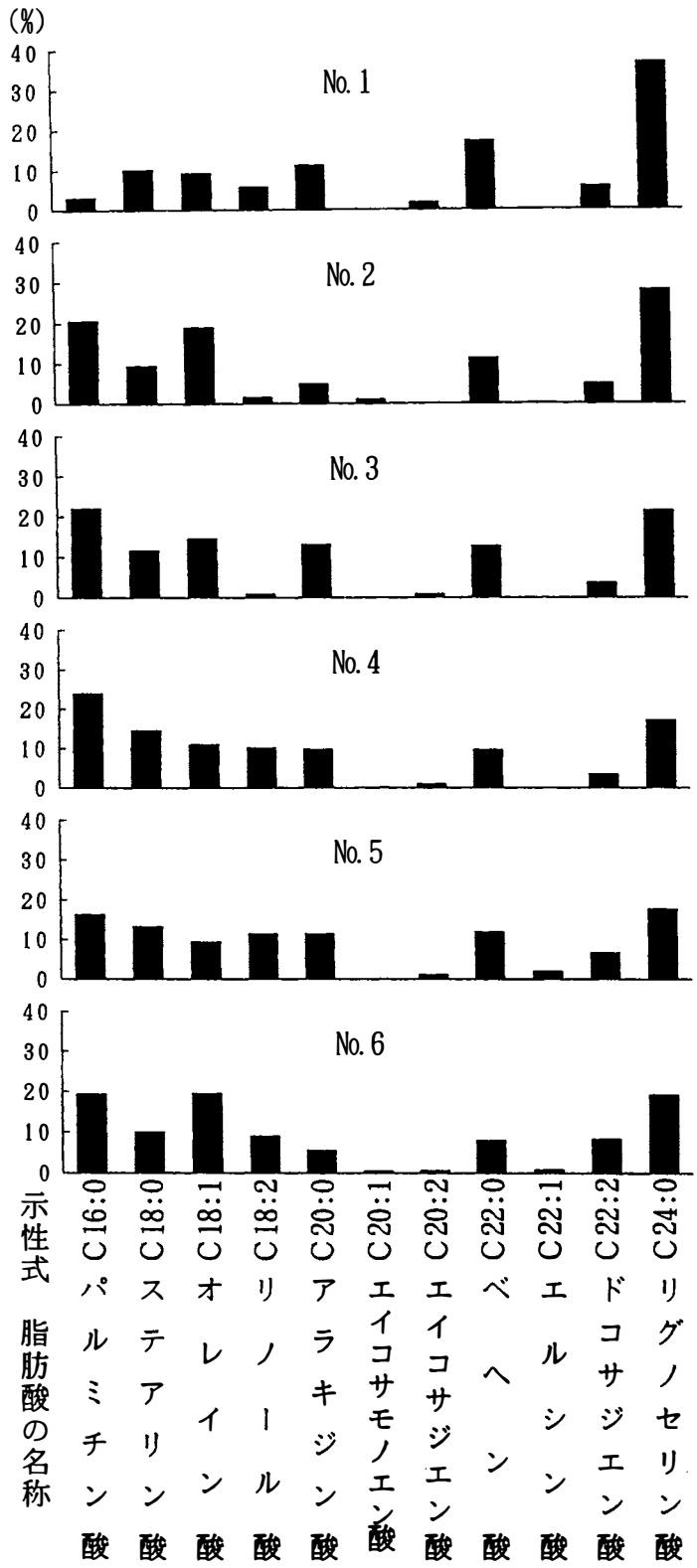


図２　試料中に残存する脂肪の分析

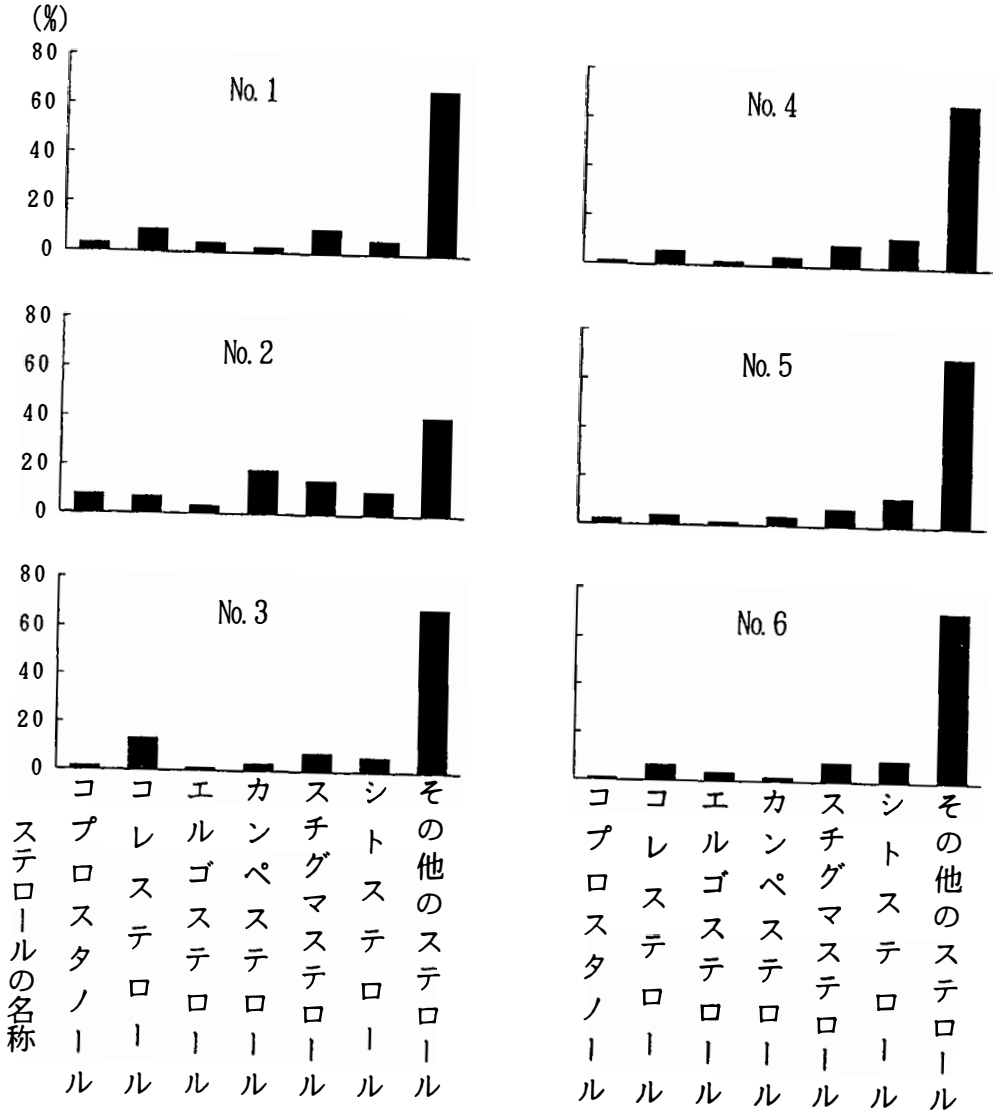


図３　試料中に残存する脂肪のステロール組成

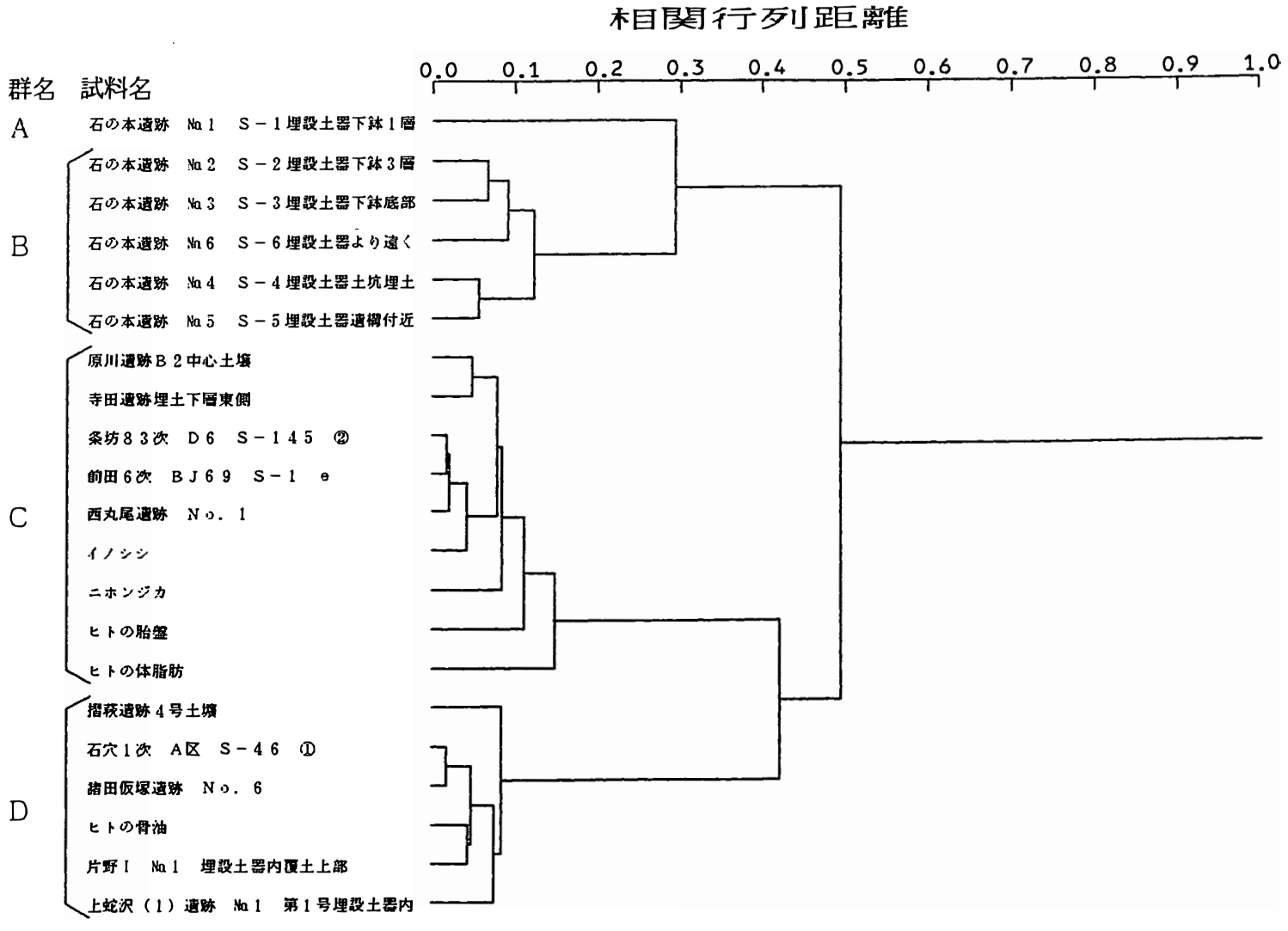


図4　試料中に残存する脂肪の脂肪酸組成樹状構造図

2　石の本遺跡群の植物珪酸体分析

株式会社　古環境研究所

（1）　はじめに

植物珪酸体は、植物の細胞内にガラスの主成分である珪酸（SiO_2）が蓄積したものであり、植物が枯れたあとも微化石（プラント・オパール）となって土壌中に半永久的に残っている。植物珪酸体分析は、この微化石を遺跡土壌などから検出する方法であり、イネをはじめとするイネ科栽培植物の同定および古植生・古環境の推定などに応用されている（杉山，1987）。

（2）　試料

調査地点は、38南調査区深堀トレンチの第１地点と第２地点、46区SB04住居跡、および46区Ａラインである。試料は、38南調査区深堀トレンチの第１地点ではⅢ層からⅥb層の下層までの層準から19点、第２地点ではⅠ層からⅣa層までの層準から10点が採取された。試料採取箇所を分析結果の柱状図に示す。また、46区SB04住居跡では焼土および比較試料について５点が採取された。46区Ａラインでは、Ⅱc層検出面について１ｍ間隔で採取された試料のうち、奇数番号の31点について分析を行った。

（3）　分析法

植物珪酸体の抽出と定量は、プラント・オパール定量分析法（藤原，1976）をもとに、次の手順で行った。

１）試料の絶乾（105℃・24時間）
２）試料約１gを秤量、ガラスビーズ添加（直径約40μm・約0.02g）
　※電子分析天秤により１万分の１gの精度で秤量
３）電気炉灰化法（550℃・６時間）による脱有機物処理
４）超音波による分散（300W・42KHz・10分間）
５）沈底法による微粒子（20μm以下）除去、乾燥
６）封入剤（オイキット）中に分散、プレパラート作成
７）検鏡・計数

同定は、イネ科植物の機動細胞に由来する植物珪酸体をおもな対象とし、400倍の偏光顕微鏡下で行った。計数は、ガラスビーズ個数が400以上になるまで行った。これはほぼプレパラート１枚分の精査に相当する。試料１gあたりのガラスビーズ個数に、計数された植物珪酸体とガラスビーズ個数の比率をかけて、試料１g中の植物珪酸体個数を求めた。

また、おもな分類群についてはこの値に試料の仮比重と各植物の換算係数（機動細胞珪酸体１個あたりの植物体乾重、単位：10^{-5}g）をかけて、単位面積で層厚１cmあたりの植物体生産量を算出した。イネ（赤米）の換算係数は2.94、ヨシ属（ヨシ）は6.31、ススキ属型（ススキ）は1.24、ネザサ節は0.48、クマザサ属は0.75である。

（4）　分析結果

分析試料から検出された植物珪酸体の分類群は以下のとおりである。これらの分類群について定量を行い、その結果を表１および図１～図４に示した。主要な分類群について顕微鏡写真を示す。

〔イネ科〕

機動細胞由来：イネ、キビ族型、ジュズダマ属、　ヨシ属、ススキ属型（ススキ属など）、ウシクサ族、ウシクサ族（大型）、シバ属、Ａタイプ（くさび型）、Ｂタイプ、Ｃタイプ、Ｄタイプ、ネザサ節型（おもにメ

ダケ属ネザサ節)、クマザサ属型（おもにクマザサ属)、マダケ属型（マダケ属、ホウライチク属)、タケ亜科(未分類等)

穎の表皮細胞由来：オオムギ族（ムギ類）

その他：表皮毛起源、棒状珪酸体（おもに結合組織細胞由来)、茎部起源、未分類等

〔樹木〕

ブナ科（シイ属)、ブナ科（アカガシ亜属？)、クスノキ科、マンサク科（イスノキ属)、はめ絵パズル状(ブナ科ブナ属など)、その他

①　38南調査区深堀トレンチ第１地点（図１）

Ⅲ層（試料１）からⅥb層の下層（試料19）までの層準について分析を行った。その結果、最下位層（試料19）からⅥb層（石器包含層、試料17）にかけては、ネザサ節型や棒状珪酸体などが検出されたが、いずれも少量である。Ⅳa層（石器包含層、試料16）では、ウシクサ族型やクマザサ属型、棒状珪酸体が比較的多く検出され、キビ族型、Ｂタイプ、Ｃタイプ、Ｄタイプなども検出された。Ⅴc層下部（試料15）からⅣb層（試料５）にかけてもおおむね同様の結果であるが、Ⅴa層（AT混、試料９）からⅤ0層（試料７）にかけてはＢタイプおよびＣタイプは検出されなかった。

Ⅳa層（試料２～４）ではクマザサ属型が増加しており、Ⅳa層上部（試料２）ではクスノキ科が出現している。樹木はイネ科と比較して一般に植物珪酸体の生産量が低いことから、植物珪酸体分析の結果から古植生を復原する際には、他の分類群よりも過大に評価する必要がある。Ⅲ層（K-Ah混、試料１）ではクマザサ属型が減少し、ススキ属型、ネザサ節型、クスノキ科が増加傾向を示している。

おもな分類群の推定生産量（図の右側）によると、全体的にクマザサ属型が優勢であることが分かる。

②　38南調査区深堀トレンチ第２地点（図２）

Ⅰ層（試料１）からⅣa層（試料10）までの層準について分析を行った。その結果、最下位のⅣa層（試料10）ではクマザサ属型や棒状珪酸体が多量に検出され、ウシクサ族も比較的多く検出された。また、ススキ属型、ネザサ節型、クスノキ科なども検出された。Ⅲb層（K-Ah混、試料８、９）ではウシクサ族やクスノキ科が増加している。Ⅲa層（試料７）からⅡa層（試料３）にかけてもおおむね同様の結果であるが、クマザサ属型は減少傾向を示し、Ⅱb層（試料４）とⅡa層（試料３）ではススキ属型が比較的多く検出された。

Ⅰ層（試料１、２）では、イネ、オオムギ族（穎の表皮細胞)、マダケ属型が出現し、ススキ属型やクスノキ科は減少している。イネの密度は6,000個／ｇ前後と高い値であり、稲作跡の検証や探査を行う場合の判断基準としている5,000個／ｇを上回っている。オオムギ族（穎の表皮細胞）は、ムギ類（コムギやオオムギなど）と見られる形態のもの（杉山・石井，1989）である。密度は700個／ｇと低い値であるが、穎（籾殻）は栽培地に残されることがまれであることから、少量が検出された場合でもかなり過大に評価する必要がある。

おもな分類群の推定生産量（図の右側）によると、Ⅲa層より下位ではクマザサ属型が卓越しており、次いでススキ属型が多くなっていることが分かる。また、Ⅱb層とⅡa層ではススキ属型、Ⅰ層ではイネが優勢となっている。

③　46区SB04住居跡（図３）

縄文時代晩期とされる住居跡の覆土（試料１）と焼土（試料２～４）および床面（試料５）について分析を行った。その結果、全体的に棒状珪酸体が多量に検出され、ウシクサ族やクマザサ属型、クスノキ科も比

較的多く検出された。植物珪酸体組成や密度は、試料間で特に大きな差違は認められなかったが、焼土（試料３、４）ではクスノキ科が他の試料よりも多く検出された。

おもな分類群の推定生産量（図の右側）によると、全体的にクマザサ属型が卓越しており、次いでススキ属型が多くなっていることが分かる。

④　46区Ａライン（図４）

縄文時代晩期とされるⅡc層検出面のＡラインでは、１ｍ間隔で採取された試料のうち奇数番号の31点（試料３～65）について分析を行った（採取地点図参照）。

その結果、全体的に棒状珪酸体が多量に検出され、ススキ属型、ウシクサ族型、クマザサ属型、クスノキ科も比較的多く検出された。また、部分的にキビ族型、ヨシ属、ネザサ節型、樹木起源（その他）なども検出された。調査区東側（試料１～試料21）ではヨシ属が少量ながら比較的まとまって検出され、ススキ属型は他の地点よりも比較的低い値となっている。試料23ではイネが検出されたが、密度は1,400個／ｇと低い値である。

おもな分類群の推定生産量（図の右側）によると、全体的にクマザサ属型が優勢であるが、調査区中部から西部にかけてはススキ属型も多くなっている。

（５）　植物珪酸体分析から推定される植生と環境

以上の結果から、石の本遺跡における堆積当時の植生と環境について推定すると次のようである。

①　38南調査区深堀トレンチ（第１地点・第２地点）

Ⅳb層（石器包含層）およびその下層の堆積当時は、少量ながらメダケ属ネザサ節などが生育するイネ科植生であったものと推定される。タケ亜科のうち、ネザサ節とクマザサ属は一般に相反する出現傾向を示し、前者は温暖の、後者は寒冷の指標となっている。また、ネザサ節とクマザサ属の推定生産量の比率である「ネザサ率」の変遷は、地球規模の氷期ー間氷期サイクルの変動とよく一致することが分かっている（杉山・早田，1996）。ここでは、ネザサ節型が優勢であることから、当時は比較的温暖な気候であったものと推定される。この温暖期は、姶良Tn火山灰との層位関係などから、約３万年前とされる最終氷期の亜寒氷期（酸素同位体ステージ３）に対比される可能性が考えられる。

その後、Ⅳa層（石器包含層）の時期には、ウシクサ族やクマザサ属を主体として、キビ族、Ｂタイプ、Ｃタイプなども見られるイネ科植生が成立したものと考えられ、このような状況はおおむねⅣa層の時期まで継続されたものと推定される。クマザサ属は比較的寒冷なところに生育していることから、当時は寒冷な気候条件下で推移したものと推定される。クマザサ属は氷点下５℃程度でも光合成活動をしており、雪の中でも緑を保っていることから、大半の植物が落葉または枯死する秋から冬にかけてはシカなどの草食動物の重要な食物となっている（高槻，1992）。気候条件の厳しい氷期にクマザサ属が豊富に存在したことは、当時の動物相を考える上でも重要である。なお、姶良Tn火山灰（AT，約2.4-2.5万年前）混のⅤa層より上位では一時的にＢタイプやＣタイプが見られなくなっているが、これはAT降灰の影響によるものと考えられる。

西日本一帯の太平洋側では、約１万年前を境にクマザサ属主体のイネ科植生からネザサ節・ススキ属を主体とする草原植生に移行しているが、本遺跡では鬼界アカホヤ火山灰（K-Ah，約6,300年前）の前後までクマザサ属が優勢のままであり、ネザサ節がほとんど見られない。これは、イネ科植生の変化が気候の寒暖以外の影響を受けていることを示唆しており、当時の植生環境の地域的な変遷を考える上で注目される。

その後、鬼界アカホヤ火山灰より下位のⅣa層の時期には、遺跡周辺でクスノキを主体とした照葉樹林が成立したものと推定される。花粉分析の結果によると、九州の太平洋沿岸部では約6,300年前とされる鬼界アカホヤ火山灰の堆積以前には、シイ林を中心とする照葉樹林が成立していたとされている（松下，1992）。今回の結果は、熊本県内でも同様の時期に照葉樹林が成立していたことを示すものとして注目される。今後、周辺地域で同様の検討を行うことにより、照葉樹林の存在や分布拡大の様相が解明されるものと期待される。

Ⅱb層からⅡa層にかけては、クマザサ属型が減少し、ススキ属やチガヤ属を主体としたイネ科植生が継続されたものと推定される。クマザサ属は森林の林床でも生育が可能であるが、ススキ属やチガヤ属は日当りの悪い林床では生育が困難である。このことから、当時の遺跡周辺は森林で覆われたような状況ではなく、比較的開かれた環境であったものと推定される。

Ⅰ層の時期には、調査地点もしくはその近辺でイネやムギ類の栽培が行われていたと考えられる。遺跡の立地や周辺の植生からここで行われた稲作は畑作の系統（陸稲）であったものと推定される。タケ亜科植物のうち、マダケ属にはマダケやモウソウチクなど有用なものが多く、建築材や生活用具、食用などとしての利用価値が高いが、これらの植物が現れるのは比較的最近のことと考えられる。

② 46区SB04住居跡

縄文時代晩期とされる住居跡の周辺は、ススキ属やチガヤ属、クマザサ属などを主体としたイネ科植生であり、周囲にはクスノキ科を主体とした照葉樹林が分布していたものと推定される。焼土ではクスノキ科が多量に検出されることから、クスノキ科の葉などが燃料の一部として利用されていた可能性が考えられる。

③ 46区Aライン

縄文時代晩期とされるⅡc層の堆積当時は、調査区一帯はススキ属やチガヤ属、クマザサ属などが比較的多く生育するイネ科植生であり、周辺にはクスノキ科を主体とした照葉樹林が分布していたものと推定される。ススキ属やチガヤ属は日当りの悪い林床では生育が困難であることから、当時の調査区周辺は森林で覆われたような状況ではなく、比較的開かれた環境であったものと推定される。また、調査区東部周辺ではヨシ属が生育するような湿地的なところも見られたものと推定される。

試料23ではイネが検出されたが、密度が1,400個／ｇと低いことや、他の地点ではまったく検出されないことから、上層から後代のものが混入したものと考えられる。植物珪酸体分析で同定される分類群のうち栽培植物が含まれるものには、イネ以外にもオオムギ族（ムギ類が含まれる）、ヒエ属型（ヒエが含まれる）、キビ族型A（アワが含まれる）、ジュズダマ属（ハトムギが含まれる）、オヒシバ属（シコクビエが含まれる）、モロコシ属などがあるが、これらの分類群はいずれの試料からも検出されなかった。

群馬県子持村の白井遺跡群では、古墳時代の火山灰直下検出面について20cm間隔で植物珪酸体分析が行われ、ススキの株跡や畠跡の分布状況を詳細に捉えることに成功している。今回は分析試料の間隔が２ｍと広いことなどから詳細な植生分布を捉えるには至らなかったが、縄文時代晩期における遺跡周辺の様相が明らかになった。

参考文献

藤原　宏志（1976）プラント・オパール分析法の基礎的研究（１）ー数種イネ科栽培植物の珪酸体標本と定量分析法ー．考古学と自然科学, 9, p.15-29.

杉山　真二（1987）遺跡調査におけるプラント・オパール分析の現状と問題点．植生史研究, 第２号, p.27-37.

杉山　真二・石井　克己（1989）
群馬県子持村，ＦＰ直下から検出された灰化物の植物珪酸体（プラント・オパール）分析．日本第四紀学会要旨集, 19, p.94-95.

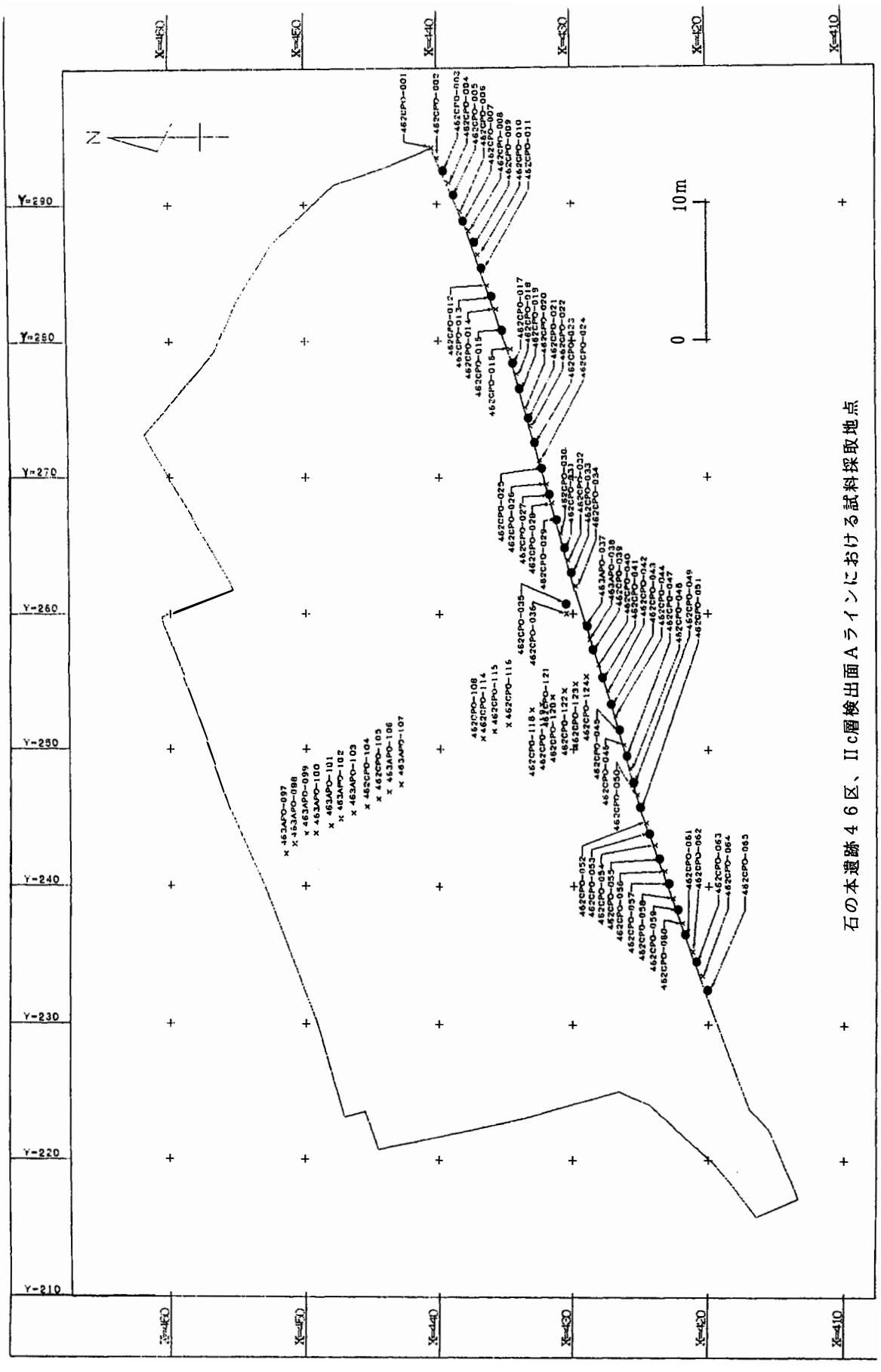
杉山　真二・早田　勉（1994）
植物珪酸体分析による遺跡周辺の古環境推定（第２報）ー九州南部の台地上における照葉樹林の分布拡大の様相ー．日本文化財科学会第11回大会研究発表要旨集, p.53-54.

杉山　真二・早田　勉（1996）
植物珪酸体分析による遺跡周辺の古環境推定（第３報）．ー宮城県高森遺跡周辺における約50万年間の気候変動ー．日本文化財科学会第13回大会研究発表要旨集, p.68-69.

杉山　真二（1996）南九州の植生と古環境ー植物珪酸体分析による検討ー．名古屋大学加速器質量分析計業績報告書（Ⅶ）: p.125-127.

松下まり子（1992）日本列島太平洋岸における完新世の照葉樹林発達史．第四紀研究, 31（５）, p.375-387.

高槻　成紀（1992）北に生きるシカたちーシカ, ササそして雪をめぐる生態学ー．どうぶつ社.



石の本遺跡４６区、IIc層検出面Ａラインにおける試料採取地点

表1　熊本県、石の本遺跡群の植物珪酸体分析結果

検出密度（単位：×100個/g）

分類群 ＼ 試料	38南調査区深掘トレンチ第1地点																		38南調査区深掘トレンチ 第2地点										46区SB04				
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	1	2	3	4	5
イネ科																																		
イネ																				59	69													
オオムギ族(頴の表皮細胞)																				7														
キビ族型	14	8	7	7	23		16	23	23		35	28		13	21	7				30	8	23	37	7	23	7		15		23				
ジュズダマ属																						8												
ヨシ属			14					8							7						8		7								8		5	
ススキ属型	43	23	14	14		14				8										111	123	301	275	65	131	97	101	45	39	109	118	46	77	92
ウシクサ族	158	114	151	102	100	109	78	94	53	133	78	139	65	103	119	58				148	169	173	476	245	284	239	256	369	157	358	204	177	196	284
ウシクサ族(大型)																													8					
シバ属																					8													
Aタイプ(楔型)						7	8							6																				
Bタイプ										8	7	21	36	13	14	14				37		8	15	14		7	8				8			8
Cタイプ				20	23	7				16	14	21	7	26	42	14								7										
Dタイプ												7	15	6	7	7									8									
タケ亜科																																		
ネザサ節型	65	23	28	7		7	8			8	21	7	7		14	14	31	23	15	15	46		7		15	7	8	15	23	39		8	10	
クマザサ属型	180	356	351	183	162	102	62	109	105	181	71	35	80	58	91	72	8			252	107	143	312	231	376	314	473	527	548	249	291	331	359	391
マダケ属型																				7	8													
未分類等	216	243	434	237	216	183	218	203	218	424	120	153	145	148	146	181	78	23	22	296	192	68	424	289	392	359	620	723	611	405	346	377	369	598
その他のイネ科																																		
表皮毛起源	22	38	28	20	31	81	78	39	38	47	142	63	36	58	49					15	69	23	15	29	46	15	54	38	23	62	63	31	43	31
棒状珪酸体	367	508	840	636	863	861	902	758	693	855	651	549	479	520	565	369	39	23	30	845	935	655	870	736	745	822	736	1084	666	879	699	638	637	790
茎部起源			7						15																									
その他	734	750	785	697	794	692	793	742	693	769	835	723	668	674	635	608	117	54	45	785	705	685	878	801	868	680	651	783	689	801	675	754	699	552
樹木起源																																		
ブナ科(シイ属)	7																																	
ブナ科(アカガシ亜属?)																					8													
クスノキ科(バリバリノキ?)	72	30																		52	54	173	141	79	177	82	62	151	47	156	173	308	321	184
マンサク科(イスノキ属)																																		
はめ絵パズル状(ブナ属など)																																		
その他		8			8															7	8		15	7	8	37	8	8			16	8	10	8
(海綿骨針)															7																			
植物珪酸体総数	1878	2099	2658	1922	2220	2062	2161	1976	1837	2449	1974	1746	1540	1623	1716	1347	273	124	112	2667	2514	2260	3474	2512	3072	2666	2977	3756	2812	3081	2600	2677	2724	2937

おもな分類群の推定生産量（単位：kg/㎡·cm）

イネ																				1.74	2.03														
ヨシ属			0.87					0.49							0.44						0.48		0.47								0.50		0.30	
ススキ属型	0.54	0.28	0.17	0.17		0.17				0.10										1.38	1.52	3.74	3.41	0.81	1.62	1.20	1.25	0.56	0.49	1.35	1.46	0.57	0.95	1.14
ネザサ節型	0.31	0.11	0.13	0.03		0.03	0.04			0.04	0.10	0.03	0.03		0.07	0.07	0.15	0.11	0.07	0.07	0.22		0.04		0.07	0.04	0.04	0.07	0.11	0.19		0.04	0.05	
クマザサ属型	1.35	2.67	2.63	1.37	1.21	0.76	0.47	0.82	0.79	1.35	0.53	0.26	0.60	0.43	0.68	0.54	0.06			1.89	0.80	1.07	2.34	1.73	2.82	2.35	3.55	3.95	4.11	1.87	2.18	2.48	2.69	2.93

※試料の仮比重を1.0と仮定して算出。

検出密度（単位：×100個/g）

分類群＼試料	Aライン 3	5	7	9	11	13	15	17	19	21	23	25	27	29	31	33	35	37	41	43	45	47	49	51	53	55	57	59	61	63	65
イネ科																															
イネ											14																				
オオムギ族(穎の表皮細胞)																															
キビ族型									8	8	14			15	7		6	7	7		14	7			14	7	15	7		15	7
ジュズダマ属																															
ヨシ属		7		8	8		15				7		7													7					
ススキ属型	65	51	23	30	15	7	45	15	38	30	106	82	97	167	44	76	57	59	117	117	130	67	66	138	101	185	125	105	68	52	97
ウシクサ族	247	257	173	105	175	117	165	141	220	113	198	269	157	247	191	152	220	348	219	242	462	283	160	138	230	273	345	187	211	127	135
ウシクサ族(大型)										8												7			7						
シバ属										8																					
Aタイプ(楔型)																															
Bタイプ	7	7	23	8		7					7					15		7		7							7				
Cタイプ												7																			
Dタイプ					8																										
タケ亜科																															
ネザサ節型		7	8	8	8		7										6	7			7					7					
クマザサ属型	225	118	203	278	129	213	180	156	236	233	156	119	187	276	184	129	164	230	226	213	252	194	226	203	215	288	206	269	128	224	247
マダケ属型																															
未分類等	232	228	105	225	319	296	419	386	661	375	361	246	434	610	309	137	321	430	343	344	447	268	451	341	438	502	301	463	286	180	187
その他のイネ科																															
表皮毛起源	44	51		8	15	7	15	37	15	15	21	15	22	51	44	30	44	15	29	15	22	7	15	15	14	37	15	15	8	22	15
棒状珪酸体	747	720	489	563	775	675	748	638	866	675	665	739	651	952	735	601	919	696	803	762	1003	797	917	849	826	820	867	986	684	756	696
茎部起源																															
その他	703	625	549	548	585	523	494	534	524	743	680	702	726	821	596	624	604	608	620	630	527	551	604	631	567	524	676	724	662	673	599
樹木起源																															
ブナ科(シイ属)																	6	7													
ブナ科(アカガシ亜属?)													7		7		6											7			
クスノキ科(バリバリノキ?)	160	198	83	60	137	103	90	74	91	195	156	97	120	167	74	91	170	156	168	227	339	171	131	174	158	207	110	209	188	232	150
マンサク科(イスノキ属)														7																	
はめ絵パズル状(ブナ属など)												7																			
その他		7		15	30	28	7	7	8	23	14	15	22	22	29	23	38	22	29	29	7		22	29	22	30	7	45	30	7	22
(海綿骨針)																															
植物珪酸体総数	2430	2278	1654	1853	2205	1976	2185	1987	2668	2424	2399	2299	2433	3334	2221	1880	2563	2593	2562	2587	3210	2353	2592	2517	2592	2887	2673	3017	2263	2290	2156

おもな分類群の推定生産量（単位：kg/m²·cm）

イネ											0.42																				
ヨシ属		0.46		0.47	0.48		0.94				0.45		0.47													0.47					
ススキ属型	0.81	0.64	0.28	0.37	0.19	0.09	0.56	0.18	0.47	0.37	1.32	1.02	1.21	2.07	0.55	0.94	0.70	0.73	1.45	1.45	1.61	0.83	0.81	1.71	1.25	2.29	1.55	1.30	0.84	0.65	1.21
ネザサ節型		0.04	0.04	0.04	0.04		0.04										0.03	0.04			0.03					0.04					
クマザサ属型	1.69	0.88	1.52	2.08	0.97	1.60	1.35	1.17	1.77	1.74	1.17	0.90	1.40	2.07	1.38	0.97	1.23	1.72	1.70	1.59	1.89	1.45	1.69	1.52	1.62	2.16	1.54	2.02	0.96	1.68	1.85

※試料の仮比重を1.0と仮定して算出。

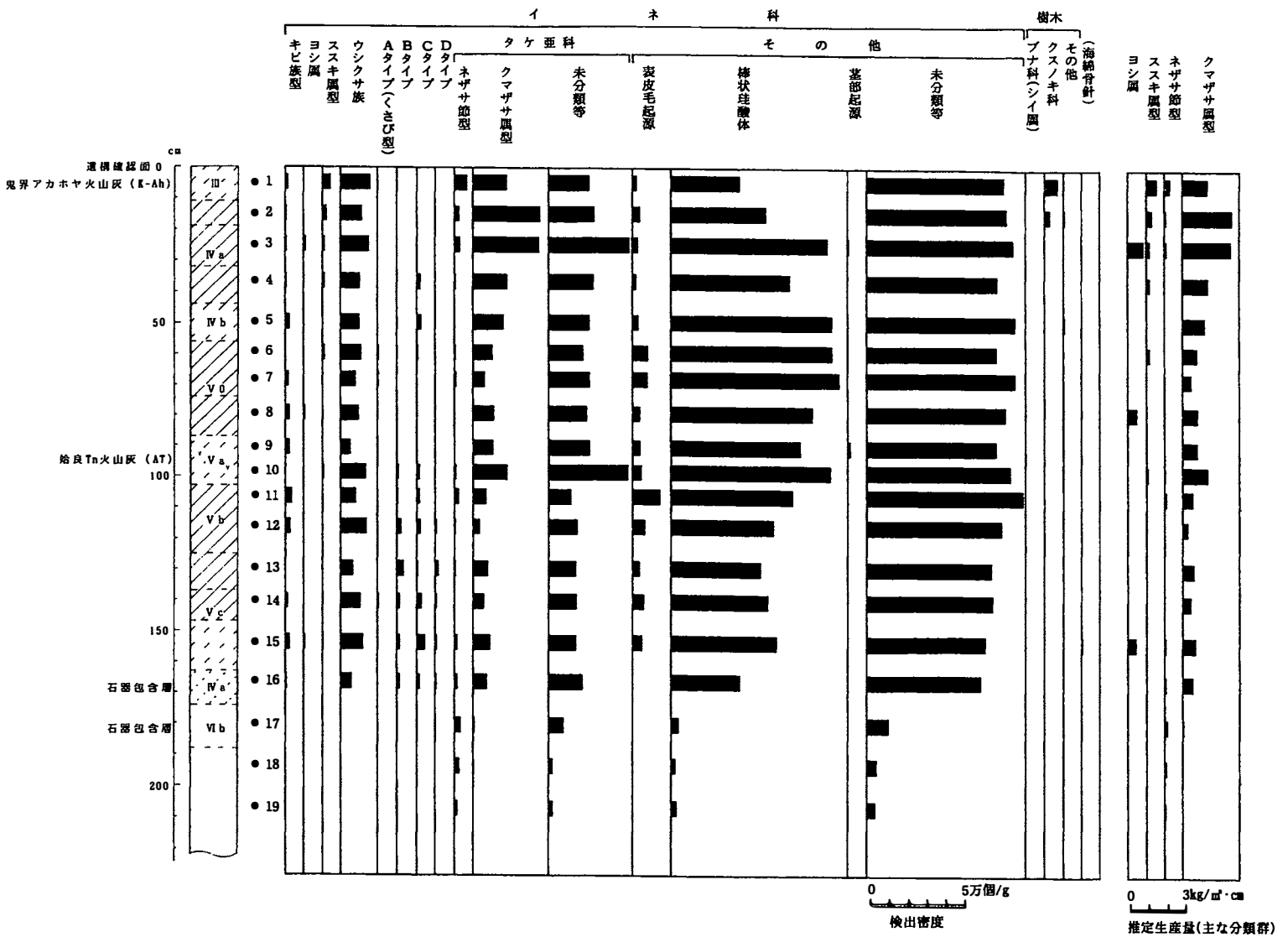


図1　熊本県、石の本遺跡38南調査区深堀トレンチ第1地点の植物珪酸体分析結果

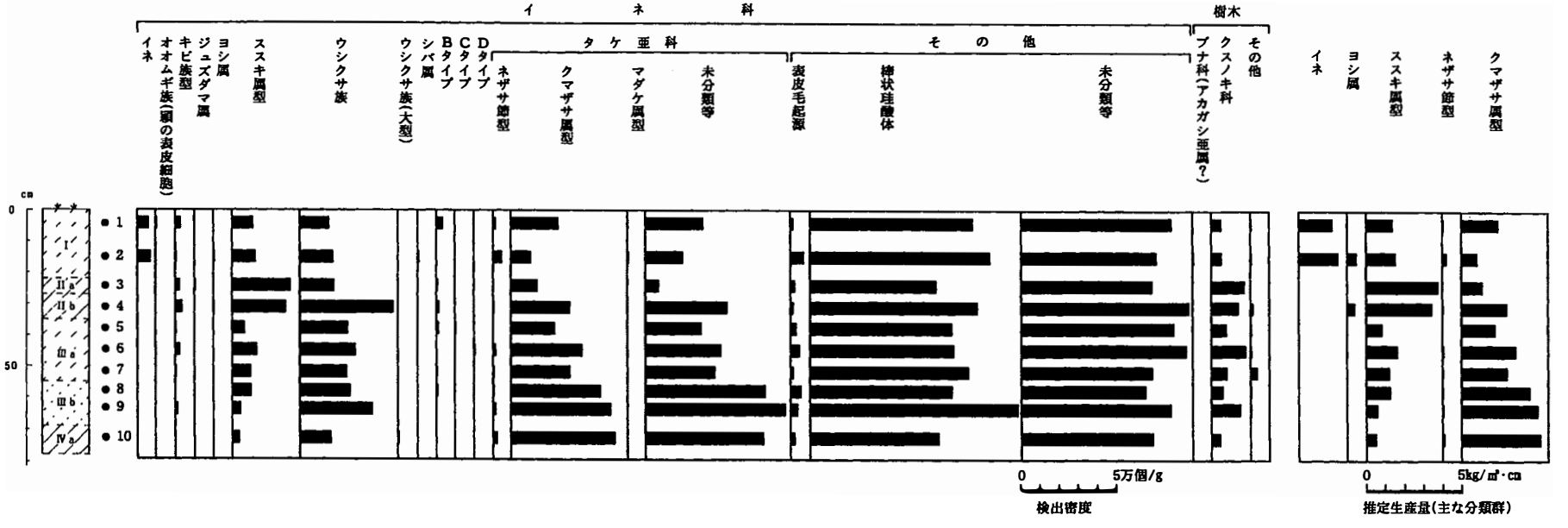


図2　石の本遺跡38南調査区深堀トレンチ第2地点の植物珪酸体分析結果

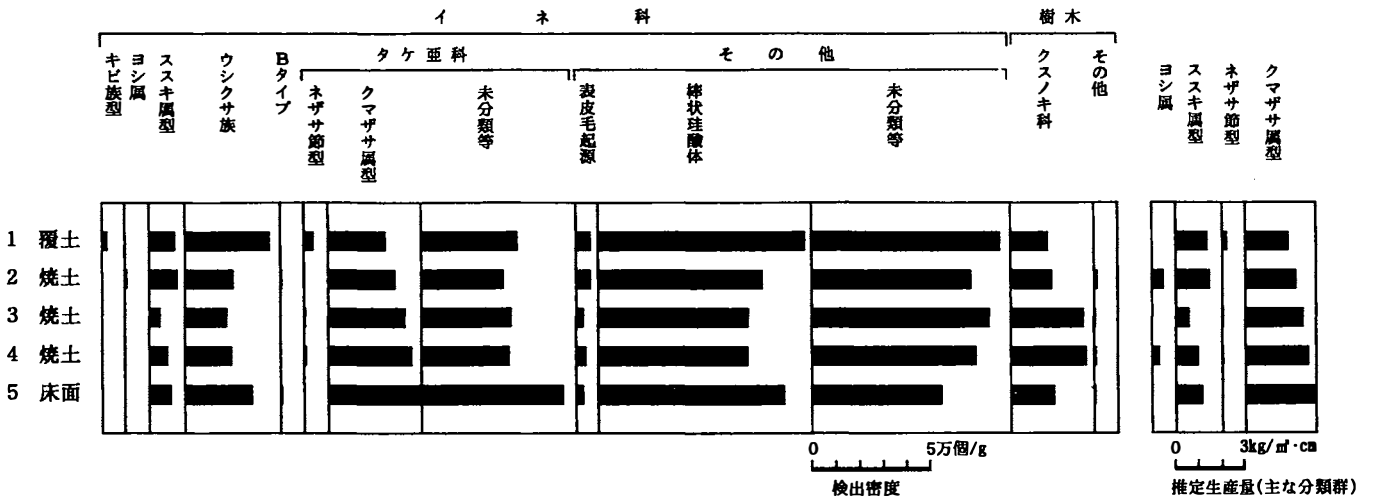


図3　石の本遺跡46区SB04住居跡の植物珪酸体分析結果

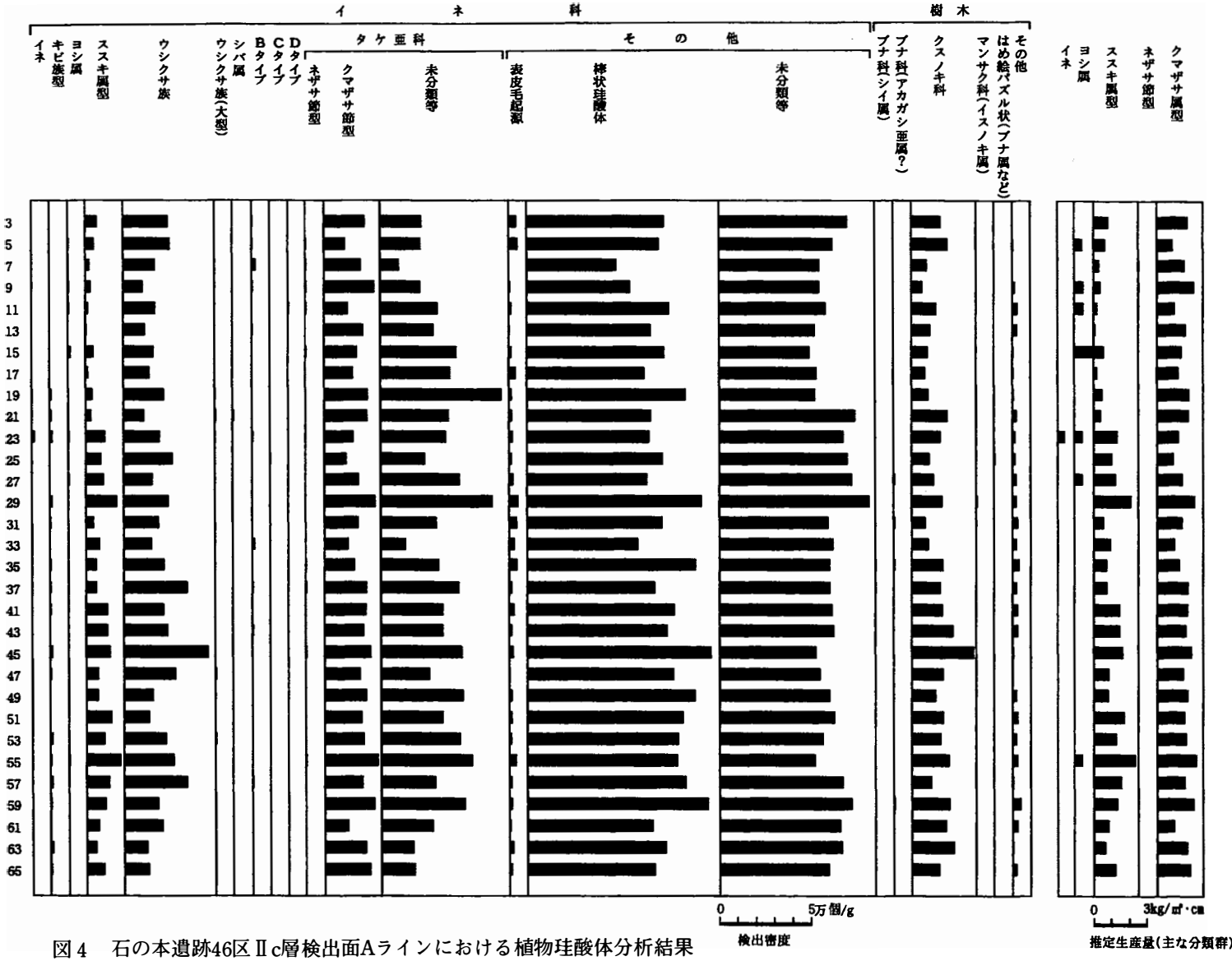
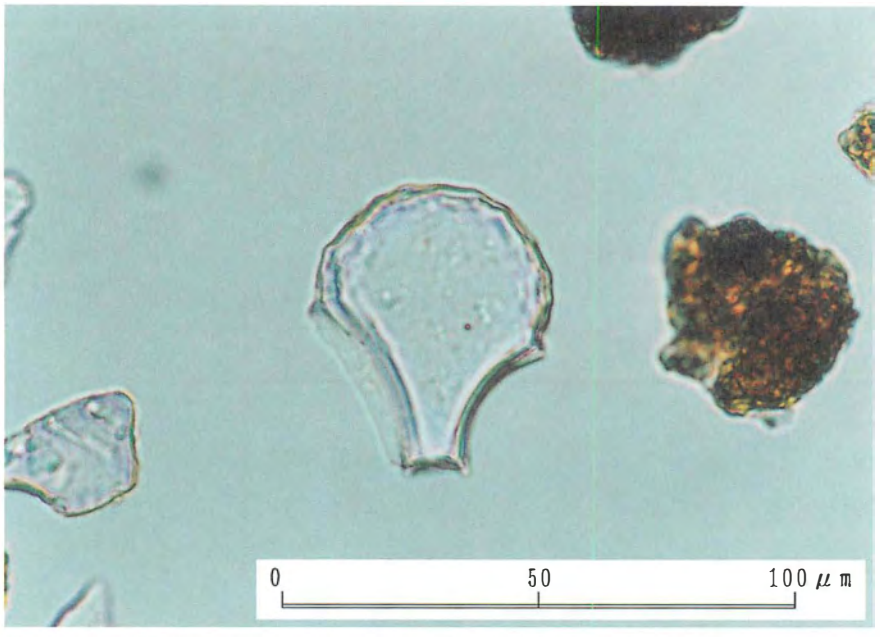


図4　石の本遺跡46区Ⅱc層検出面Aラインにおける植物珪酸体分析結果

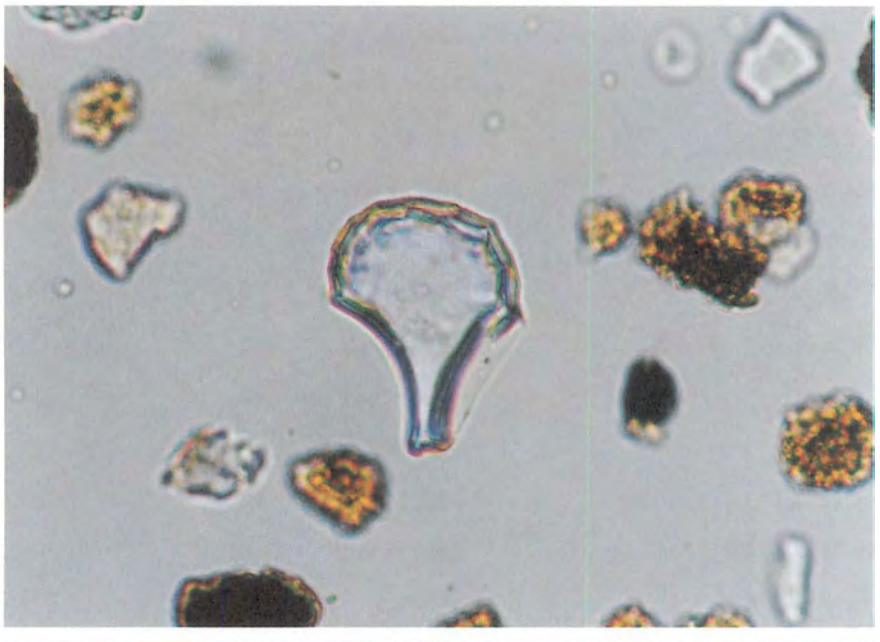
植物珪酸体の顕微鏡写真

（倍率はすべて400倍）

No.	分　類　群	地点	試料名
1	イネ	Aライン	23
2	イネ	38区南No.2	1
3	イネ（側面）	Aライン	23
4	オオムギ族（穎の表皮細胞）	38区南No.2	1
5	キビ族型	Aライン	47
6	ヨシ属	38区南No.1	3
7	ススキ属型	Aライン	65
8	ススキ属型	Aライン	23
9	ウシクサ族	38区南No.1	12
10	ウシクサ族(大型)	38区南No.1	12
11	シバ属	38区南No.2	2
12	イネ科A（クサヒ型）	38区南No.1	6
13	イネ科B	38区南No.1	13
14	イネ科C	38区南No.1	5
15	イネ科D	38区南No.1	12
16	クマザサ属型	38区南No.1	8
17	クマザサ属型	Aライン	17
18	マダケ属型	38区南No.2	2
19	棒状珪酸体	38区南No.1	4
20	ブナ科（シイ属）	38区南No.1	1
21	ブナ科（アカガシ亜属？）	38区南No.2	2
22	クスノキ科	Aライン	43
23	クスノキ科	Aライン	49
24	海綿骨針	38区南No.1	15

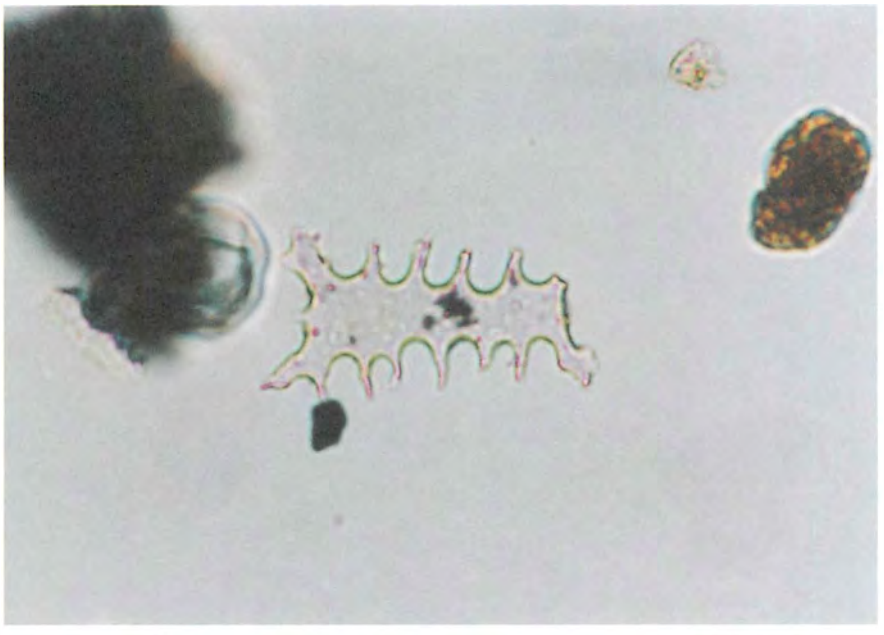


1



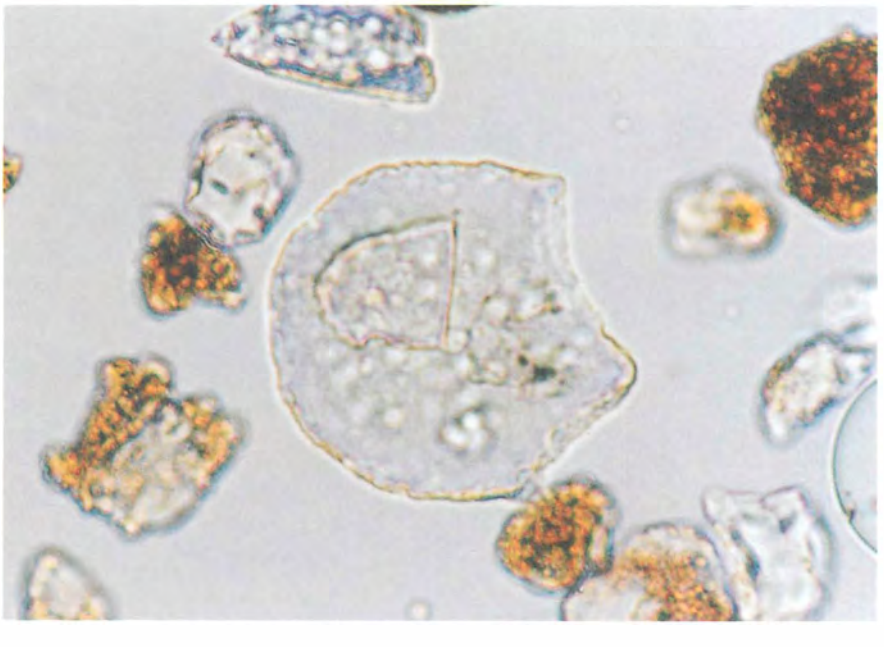
2

3

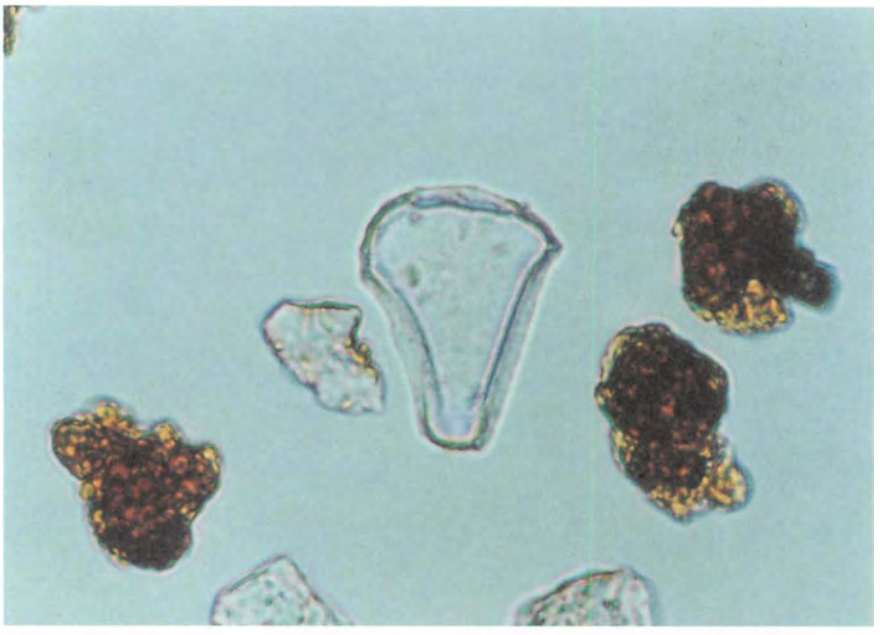


4

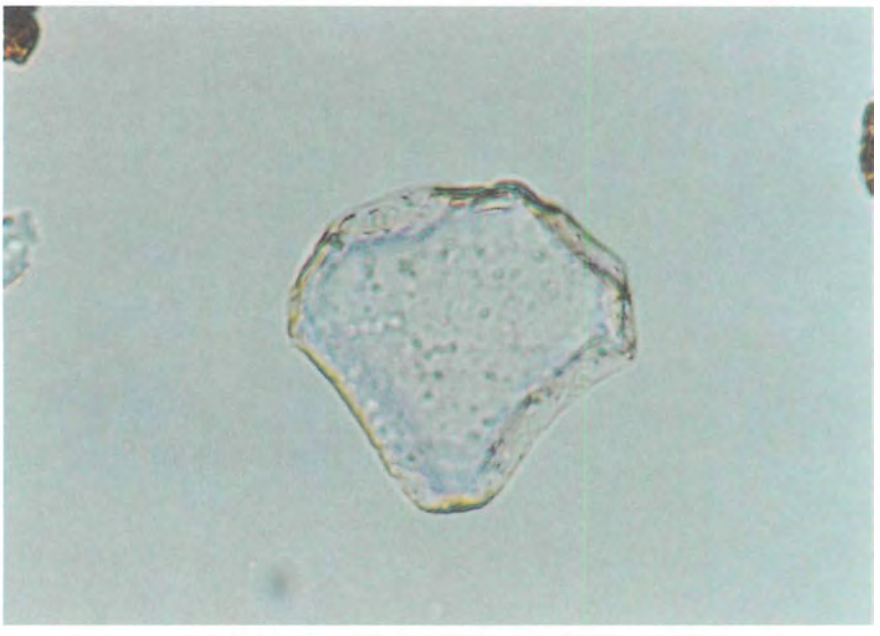
5



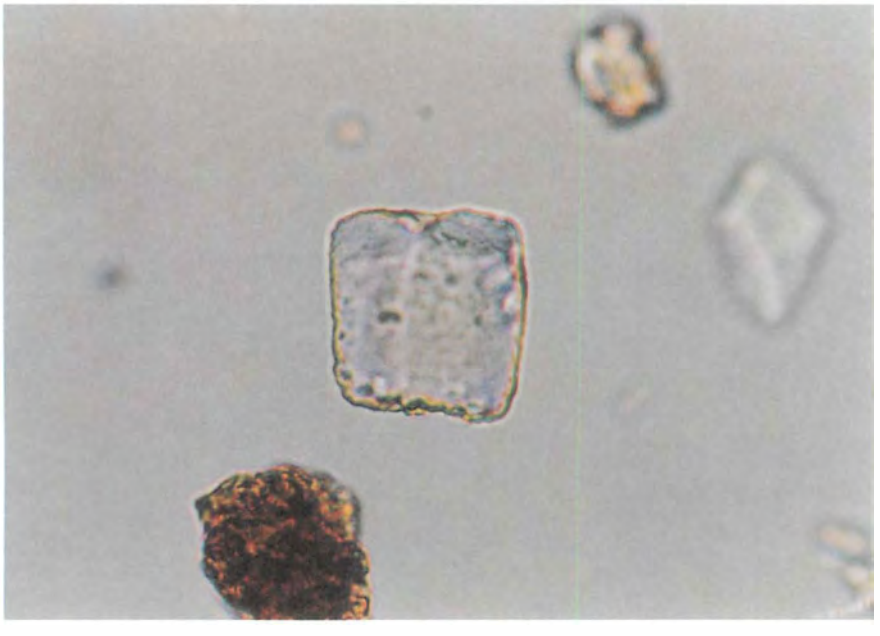
6



7

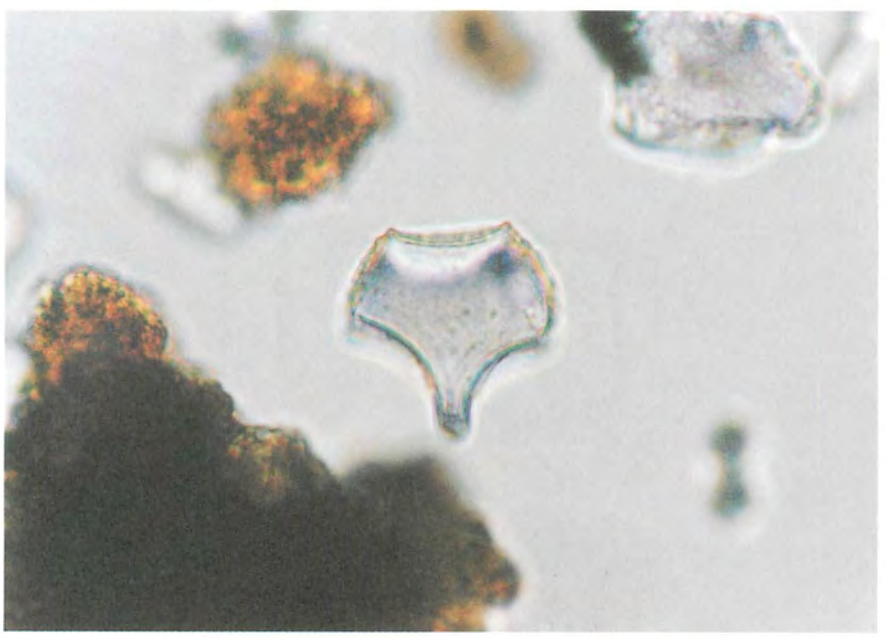


8

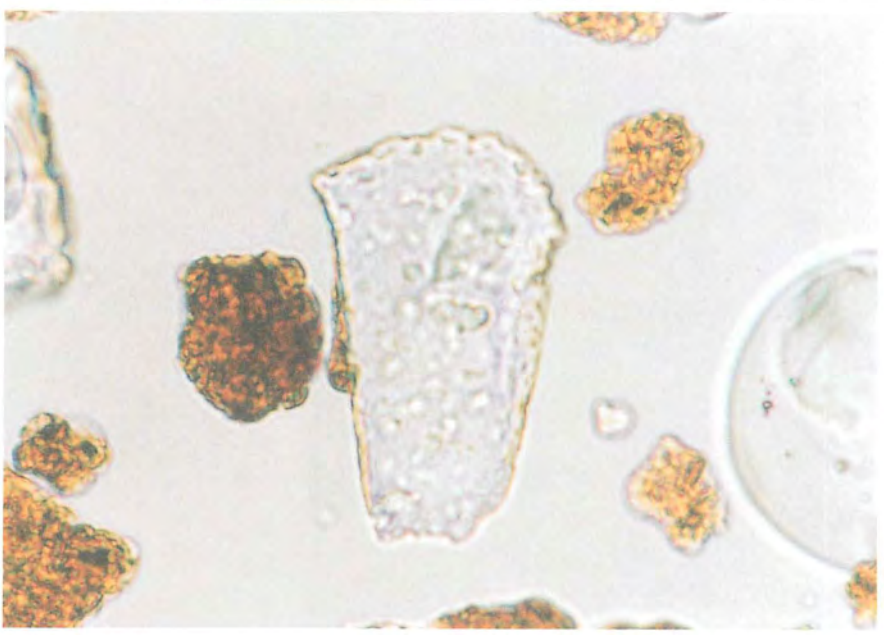


9

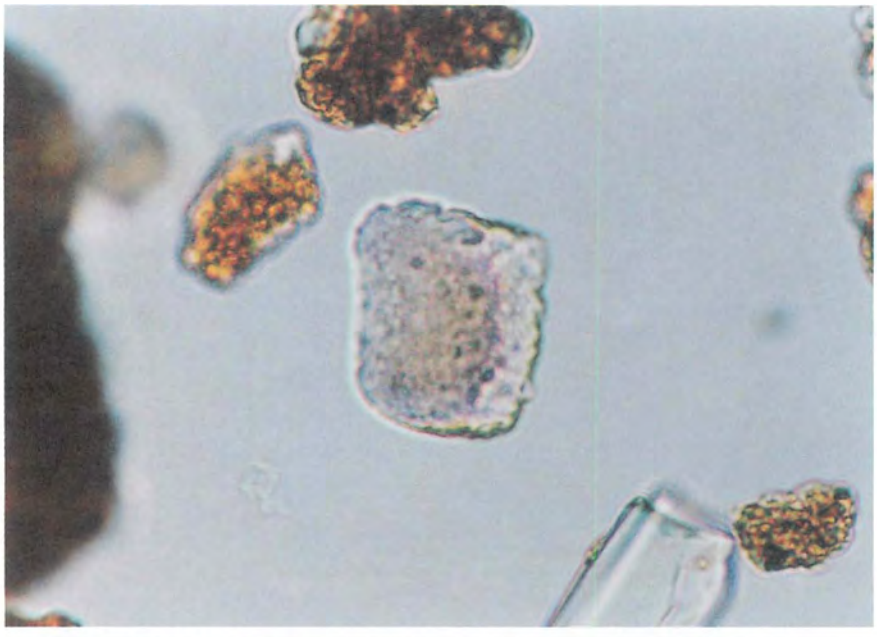
10



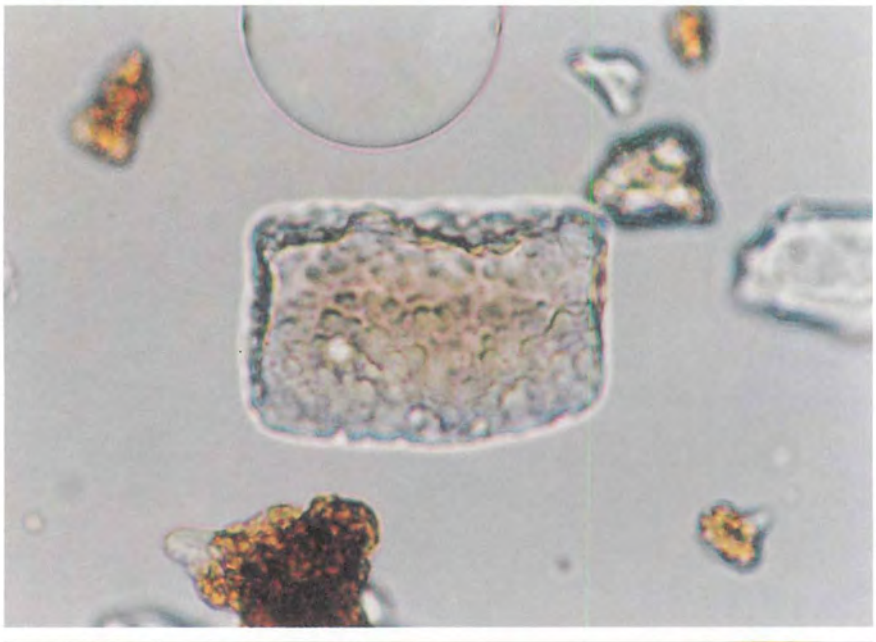
11



12

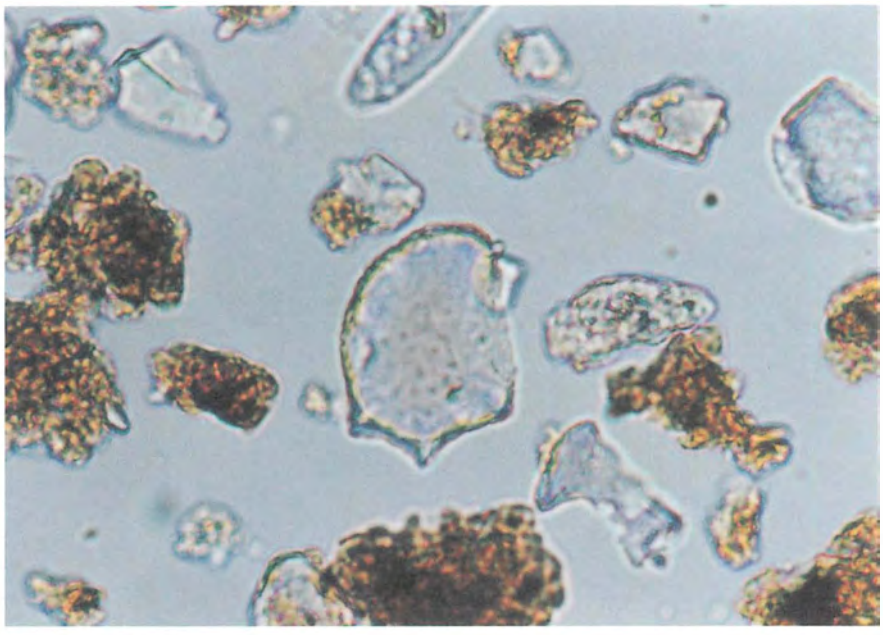


13

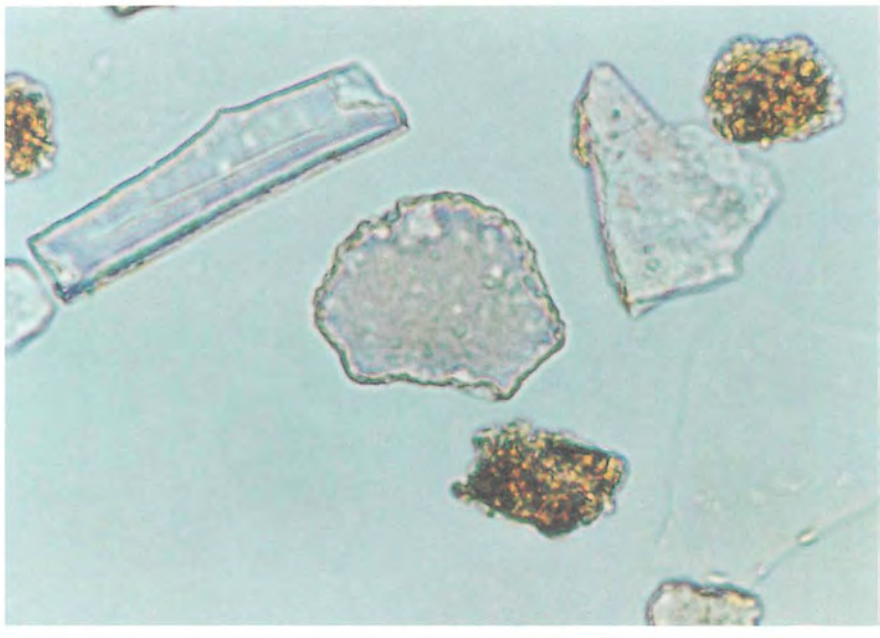


14

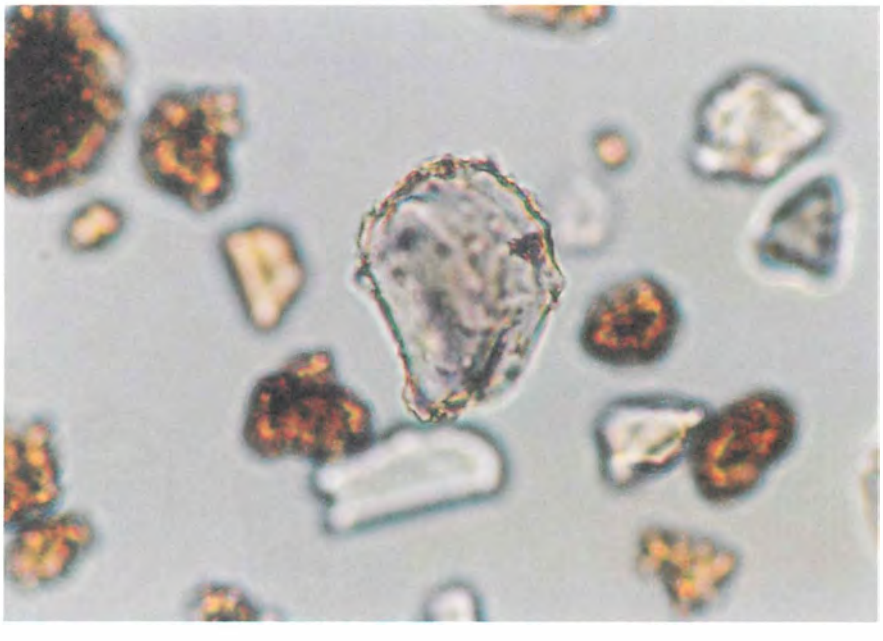
15



16

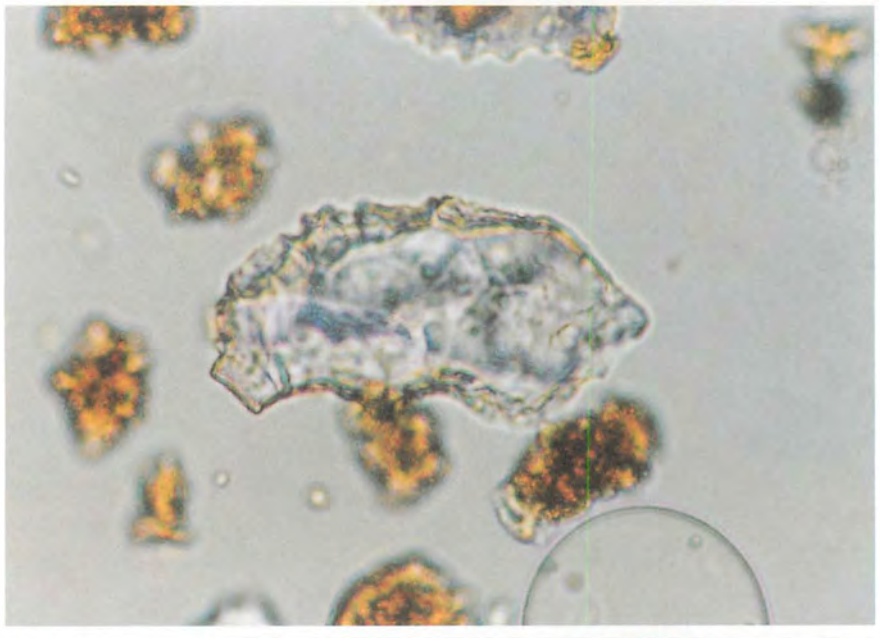


17

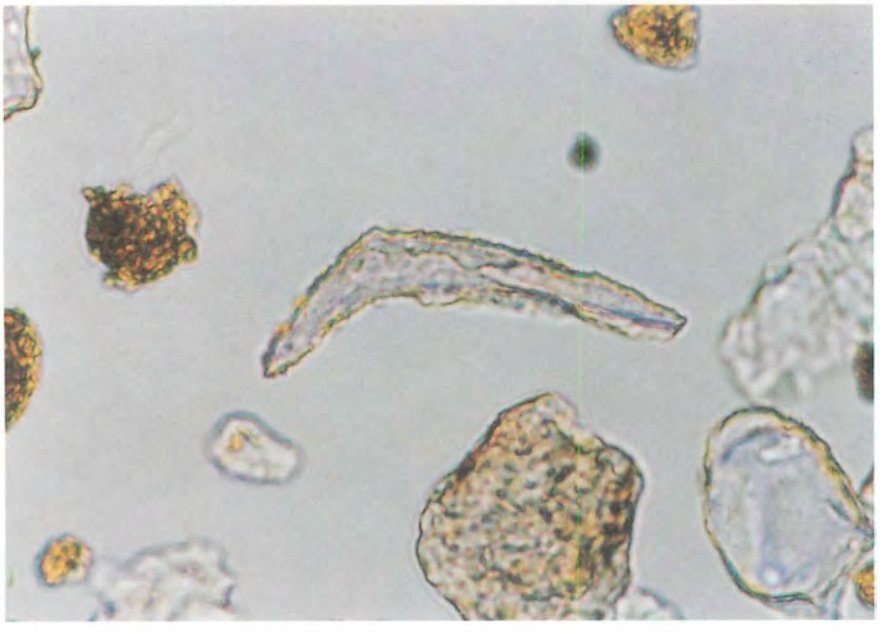


18

19



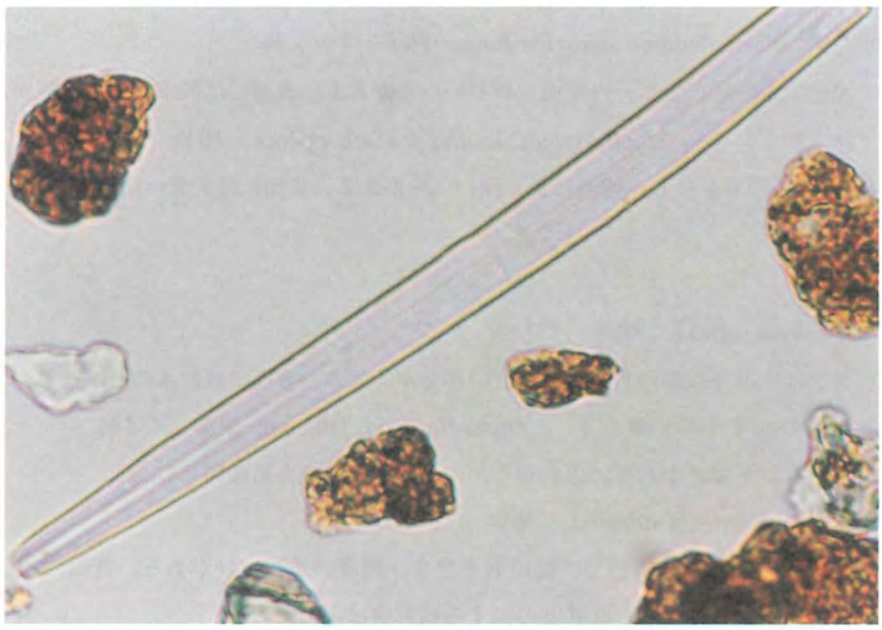
20



21

22

23



24

3　石の本遺跡群における種実同定

株式会社　古環境研究所

(1)　はじめに

植物の種子や果実は比較的強靱なものが多く、堆積物中に残存する。堆積物から種実を検出しその群集の構成や組成を調べ、過去の植生や群落の構成要素を明らかにし古環境の推定を行うことが可能である。また出土した単体試料等を同定し、栽培植物や固有の植生環境を調べることができる。

(2)　試料

試料は、石の本遺跡45区SB-05内出土の炭化物57点、SB-13内出土の炭化物383点である。埋土を現場でフローテーション法（水中浮遊選別法）によって水洗・選別し、1mmメッシュの篩で炭化物及び小遺物を採取後、種実とおぼしきものを抽出した。

前者は埋土1層、埋土2層、上面清掃土より、後者は埋土、埋土1層、埋土2層、屋内炉、埋設土器堀方内、柱穴内埋土、流土（床上？）より検出されたものであり、いずれも選別済みの試料である。なお、流土（床上？）とは雨によって床面検出した住居址内に流れ込んだ土で、上面清掃土とほぼ同質と考えてよい。床面清掃時に採取した土を他の埋土同様、水洗したものである。

(3)　方法

試料を肉眼及び双眼実体顕微鏡で観察し、形態的特徴および現生標本との対比によって同定を行った。結果は同定レベルによって科、属、種の階級で示した。

(4)　結果

①　分類群

樹木3、草本5の計8が同定された。学名、和名および粒数を表1に示し、主要な分類群を写真に示す。以下に同定の根拠となる形態的特徴を記す。

〔樹木〕

コナラ属　*Quercus*　種子　ブナ科

炭化していて黒色で、楕円形を呈する。表面はなめらかで、縦方向に一条の凹線が入る。

キハダ　*Phellodendron amurense* Rupr.　種子　ミカン科

黒色で半円形を呈し、一側面に細長いへそがある。表面には微細な網目模様がある。

カラスザンショウ　*Zanthoxylum ailanthoides* Sieb. et Zucc.　種子　ミカン科

黒色で楕円形を呈し、側面に長く深いへそがある。表面には大きい網目模様がある。

〔草本〕

イネ　*Oryza sativa* L.　果実　イネ科

果実は黒色で長楕円形を呈す。胚の部分がくぼみ、表面には数本の筋が走る。

穀類（イネ-オオムギ-コムギ）　*Oryza-Hordeum-Triticum*　果実　イネ科

イネもしくはオオムギと思われるが、発砲しているため穀類とした。

オオムギ　*Hordeum vulgare* L.　果実　イネ科

炭化しているため黒色で、楕円形を呈す。腹部の端には胚がある。背面には縦に一本の溝がある。側面の形は曲率が大きく、胚と胚乳との接する輪郭線は山形である。

ササゲ属　*Vigna*　種子　マメ科

黒色で楕円形を呈す。へそは縦に細長い。

ササゲ属にはリョクトウ、アズキ、ササゲなどの栽培植物が含まれるが、現時点では識別は困難である。

スイカ　*Citrullus battich*　種子　ウリ科

種子は黒色で倒卵形を呈する。扁平で、種皮は粗面。へそは嘴状の突起の先にある。

② 同定結果

1）45区SB-05内炭化物

埋土 1 層の試料はカラスザンショウ、埋土 2 層はコナラ属種子、カラスザンショウ、穀類、上面清掃土の試料はオオムギとスイカと同定された。

2）SB-13内炭化物

埋土から出土の試料は、カラスザンショウおよび穀類と同定された。

埋土 1 層の試料はコナラ属種子、カラスザンショウ、ササゲ属、埋土 2 層はコナラ属種子、キハダ、カラスザンショウ、ササゲ属と同定された。なお、カラスザンショウとササゲ属は多量である。

屋内炉、埋設土器堀方内、柱穴内埋土より出土の試料はカラスザンショウであった。

流土（床上？）ではイネ果実に同定された。

45区SB-05内炭化物、SB-13内炭化物には植物遺体と考えられる炭化物が数多くみられ、同定が困難であったため未同定種実とした。

（5） 考察

イネ、オオムギ、穀類、ササゲ属、スイカはいずれも栽培植物である。これらの栽培植物の出土が石の本遺跡における種実群集の特徴といえる。イネ、ササゲ属は、日本では概ね弥生時代以降より出土し、ササゲ属は特に中世においてよく検出される。スイカは他の栽培植物より伝来時期が新しく、中世ないし江戸時代である。一般的に栽培されるようになったのは江戸時代である。また、樹木ではカラスザンショウが多い。カラスザンショウは集落周辺の人為環境に多い樹木である。

参考文献

南木睦彦（1991）栽培植物. 古墳時代の研究第4巻生産と流通Ⅰ, 雄山閣出版株式会社, p.165-174.

南木睦彦（1993）葉・果実・種子. 日本第四紀学会編, 第四紀試料分析法, 東京大学出版会, p.276-283.

吉崎昌一（1992）古代雑穀の検出. 月刊考古学ジャーナルNo.355, ニューサイエンス社, p.2-14.

渡辺　誠（1975）縄文時代の植物食. 雄山閣, 187p.

表1　石の本遺跡群における種実同定結果

分類群			45−05号住居址			45−13号住居址						
学名	和名	部位	埋土1層	埋土2層	上面清掃土	埋土	埋土1層	埋土2層	屋内炉	埋設土器掘込内	柱穴内埋土	流土（床上？）
Arbor	樹木											
Quercus	コナラ属	種子		1			11	9				
		破片					＋					
Phellodendron amurense Rupr.	キハダ	種子						1				
Zanthoxylum ailanthoides Sieb. et Zucc.	カラスザンショウ	種子	1	1		1	41	44	2	1	1	
Herb	草本											
Oryza sativa L.	＊イネ	果実										3
Hordeum vulgare L.	＊オオムギ	果実			1							
Oriza－Hordeum－Triticum	＊穀類	果実		1		1						
Vigna	＊ササゲ属	種子					37	91				
		破片						++				
Citrullus battich	＊＊スイカ	種子			1							
Unknown	未同定種子		16	19	16	2	18	28	13	2	2	7
Total	合計		17	22	18	4	107+	173++	15	3	3	10

＊　栽培植物　　＊＊　スイカは中世か近世に伝来

石の本遺跡の種実

1　コナラ属種子　1.0mm

2　キハダ種子　1.0mm

3　カラスザンショウ種子　1.0mm

4　イネ果実　1.0mm

5　オオムギ果実　1.0mm

6　同左　1.0mm

7　ササゲ属種子　1.0mm

8　ササゲ属種子　1.0mm

4　石の本遺跡群における放射性炭素年代測定（1）

株式会社　古環境研究所

1．試料と方法

試料名	地点・層準	種類	前処理・調整	測定法
No. 1	45区 SB-13 埋土1層	炭化物	酸-ｱﾙｶﾘ-酸洗浄，石墨調整	加速器質量分析（AMS）法
No. 2	45区 SB-13 埋土2層	炭化物	酸-ｱﾙｶﾘ-酸洗浄，石墨調整	加速器質量分析（AMS）法
No. 3	45区 SB-13 床面直上	炭化物	酸-ｱﾙｶﾘ-酸洗浄，石墨調整	加速器質量分析（AMS）法
No. 4	45区 SB-13 屋内炉跡	炭化物	酸-ｱﾙｶﾘ-酸洗浄，石墨調整	加速器質量分析（AMS）法
No. 5	45区 SB-13 埋設土器掘込み内	炭化物	酸-ｱﾙｶﾘ-酸洗浄，石墨調整	加速器質量分析（AMS）法

2．測定結果

試料名	^{14}C年代（年BP）	δ^{13}C（‰）	補正^{14}C年代（年BP）	暦年代（西暦）	測定No. Beta−
No. 1	3100±40	−26.1	3080±40	交点：cal BC1380	140963
				1 σ：cal BC1405～1300	
				2 σ：cal BC1425～1260	
No. 2	3090±30	−25.6	3080±30	交点：cal BC1380	140964
				1 σ：cal BC1400～1305	
				2 σ：cal BC1415～1280	
No. 3	4270±40	−26.1	4250±40	交点：cal BC2885	140965
				1 σ：cal BC2900～2875	
				2 σ：cal BC2910～2865, 2800～2760	
No. 4	2920±30	−26.8	2890±30	交点：cal BC1040	140966
				1 σ：cal BC1115～1010	
				2 σ：cal BC1140～985	
No. 5	6890±80	−26.6	6860±80	交点：cal BC5730	140967
				1 σ：cal BC5800～5670	
				2 σ：cal BC5885～5630	

1）^{14}C年代測定値

試料の^{14}C/^{12}C比から、単純に現在（1950年AD）から何年前かを計算した値。^{14}Cの半減期は5,568年を用いた。

2）δ^{13}C測定値

試料の測定^{14}C/^{12}C比を補正するための炭素安定同位体比（^{13}C/^{12}C）。この値は標準物質（PDB）の同位体比からの千分偏差（‰）で表す。

３）補正^{14}Ｃ年代値

δ^{13}Ｃ測定値から試料の炭素の同位体分別を知り、^{14}Ｃ/^{12}Ｃの測定値に補正値を加えた上で算出した年代。

４）暦年代

過去の宇宙線強度の変動による大気中^{14}Ｃ濃度の変動を補正することにより算出した年代（西暦）。補正には、年代既知の樹木年輪の^{14}Ｃの詳細な測定値、およびサンゴのU-Th年代と^{14}Ｃ年代の比較により作成された補正曲線を使用した。最新のデータベース（"INTCAL98 Radiocarbon Age Calibration" Stuiver et al, 1998, Radiocarbon 40(３)）により、約19,000年BPまでの換算が可能となっている。ただし、10,000年BP以前のデータはまだ不完全であり、今後も改善される可能性がある。

暦年代の交点とは、補正^{14}Ｃ年代値と暦年代補正曲線との交点の暦年代値を意味する。１σ（68%確率）・２σ（95%確率）は、補正^{14}Ｃ年代値の偏差の幅を補正曲線に投影した暦年代の幅を示す。したがって、複数の交点が表記される場合や、複数の１σ・２σ値が表記される場合もある。

第２節　縄文時代早・前期

本節では縄文時代後・晩期以外の自然化学分析で、これまで未掲載だったものを取上げている。具体的には17区で検出されたSX－04・05より出土した炭化材の分析である。どちらもⅣ層上面で検出された炉穴と考えられる土壙で、細長い楕円形を呈し、やや特異な形態と言える。土壙の詳細は「石の本遺跡群Ⅲ」に譲るが、以下炭化材の分析結果について述べていく。

１　　石の本遺跡群における樹種同定

株式会社　古環境研究所

（１）　はじめに

木材は、セルロースを骨格とする木部細胞の集合体であり、解剖学的形質の特徴から概ね属レベルの同定が可能である。木材は花粉などの微化石と比較して移動性が少ないことから、比較的近隣の森林植生の推定が可能であり、遺跡から出土したものについては木材の利用状況や流通を探る手がかりとなる。

（２）　試料

試料は、石の本遺跡群17区SX-04およびSX-05の埋土中より出土した炭化材２点である。

（３）　方法

炭化材を割折して新鮮な基本的三断面（木材の横断面、放射断面、接線断面）を作製し、落射顕微鏡によって75～750倍で観察した。同定は解剖学的形質および現生標本との対比によって行った。

（４）　結果

結果を表１に示し、主要な分類群の顕微鏡写真を示す。以下に同定の根拠となった特徴を記す。

コナラ属アカガシ亜属　*Quercus subgen. Cyclobalanopsis* ブナ科　　図版１・２

横断面：中型から大型の道管が、１～数列幅で年輪界に関係なく放射方向に配列する放射孔材である。道管は単独で複合しない。

放射断面：道管の穿孔は単穿孔で、放射組織は平伏細胞からなる。

接線断面：放射組織は同性放射組織型で、単列のものと大型の広放射組織からなる複合放射組織である。

以上の形質よりコナラ属アカガシ亜属に同定される。コナラ属アカガシ亜属にはアカガシ、イチイガシ、アラカシ、シラカシなどがあり、本州、四国、九州に分布する。常緑高木で、高さ30m、径1.5m以上に達する。材は堅硬で強靭、弾力性に優れ耐湿性も高い。特に農耕具に多く用いられる。

（５）　所見

同定の結果、炭化材は２試料ともコナラ属アカガシ亜属であった。コナラ属アカガシ亜属は、一般にカシと総称されるがイチイガシやアラカシなど多くの種があり、温帯下部の暖温帯の照葉樹林を形成する主要高木である。イチイガシは自然度が高いが、アラカシは二次林でもある。

参考文献

佐伯　浩・原田　浩（1985）針葉樹材の細胞．木材の構造，文永堂出版，p.20-48.

佐伯　浩・原田　浩（1985）広葉樹材の細胞．木材の構造，文永堂出版，p.49-100.

島地　謙・伊東隆夫（1988）日本の遺跡出土木製品総覧，雄山閣，296p.

2　石の本遺跡群における放射性炭素年代測定（2）

株式会社　古環境研究所

1．試料と方法

試料名	地点・層準	種類	前処理・調整	測定法
No. 1	ＳＸ－０４	炭化物	酸-ｱﾙｶﾘ-酸洗浄，石墨調整	加速器質量分析（AMS）法
No. 2	ＳＸ－０５	炭化物	酸-ｱﾙｶﾘ-酸洗浄，石墨調整	加速器質量分析（AMS）法

2．測定結果

試料名	^{14}C年代（年BP）	δ^{13}C（‰）	補正^{14}C年代（年BP）	暦年代（西暦）	測定No.（Beta-）
No. 1	3400±40	-26.2	3380±40	交点：Cal BC 1680	153702
				1 σ：Cal BC 1720 ～ 1620	
				2 σ：Cal BC 1750 ～ 1540	
No. 2	3310±40	-25.5	3300±40	交点：Cal BC 1540	153701
				1 σ：Cal BC 1620 ～ 1520	
				2 σ：Cal BC 1680 ～ 1500	

1）^{14}C年代測定値

試料の^{14}C/^{12}C比から、単純に現在（1950年AD）から何年前かを計算した値。^{14}Cの半減期は、国際慣例に従って5,568年を用いた。

2）δ^{13}C測定値

試料の測定^{14}C/^{12}C比を補正するための炭素安定同位体比（^{13}C/^{12}C）。この値は標準物質（PDB）の同位体比からの千分偏差（‰）で表す。

3）補正^{14}C年代値

δ^{13}C測定値から試料の炭素の同位体分別を知り、^{14}C/^{12}Cの測定値に補正値を加えた上で算出した年代。

4）暦年代

過去の宇宙線強度の変動による大気中^{14}C濃度の変動を補正することにより算出した年代（西暦）。補正には、年代既知の樹木年輪の^{14}Cの詳細な測定値、およびサンゴのU-Th年代と^{14}C年代の比較により作成され

た較正曲線を使用した。最新のデータベース（"INTCAL98 Radiocarbon Age Calibration" Stuiver et al, 1998, Radiocarbon 40（３））により、約19,000年BPまでの換算が可能となっている。ただし、10,000年BP以前のデータはまだ不完全であり、今後も改善される可能性がある。

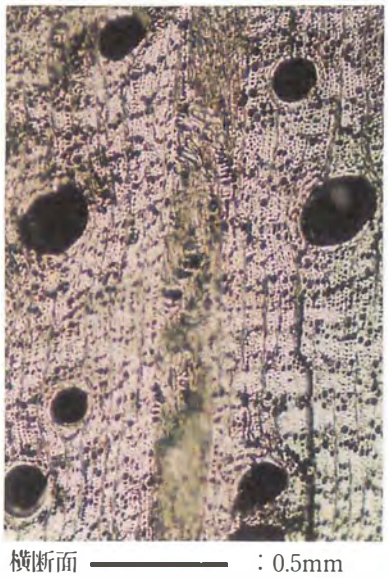
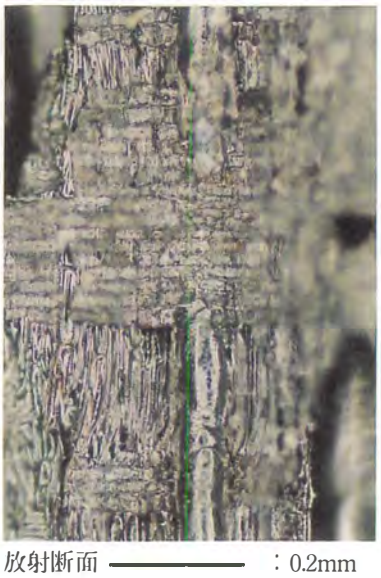
暦年代の交点とは、較正^{14}C年代値と暦年代較正曲線との交点の暦年代値を意味する。１σ（68%確率）・２σ（95%確率）は、較正^{14}C年代値の偏差の幅を較正曲線に投影した暦年代の幅を示す。したがって、複数の交点が表記される場合や、複数の１σ・２σ値が表記される場合もある。

表１　石の本遺跡群における樹種同定結果

	試料No.		結果（和名／学名）		
17区	SX−04	埋土中炭化物	コナラ属アカガシ亜属	*Quercus*	*subgen.Cyclobalanopsis*
17区	SX−05	埋土中炭化物	コナラ属アカガシ亜属	*Quercus*	*subgen.Cyclobalanopsis*

石の本遺跡の木材

横断面 ——— ：0.5mm　放射断面 ——— ：0.2mm　接線断面 ——— ：0.2mm
1．17区　SX-04　埋土中炭化物　コナラ属アカガシ亜属

横断面 ——— ：0.5mm　放射断面 ——— ：0.2mm　接線断面 ——— ：0.2mm
2．17区　SX-05　埋土中炭化物　コナラ属アカガシ亜属

第Ⅴ章　総 括

第1節　遺構

石の本遺跡群の中で、最も大きな割合を占める縄文時代後・晩期について、これまで報告してきた。今回取上げた遺構の多くが、住居址や埋設土器遺構といった比較的時期比定し易いものに偏ったことは、既に第Ⅲ章で述べている。それらと同一レヴェルで検出された多くのピットや焼土混じりの土壙も、当該時期の遺構である可能性も否定できず、本来はこれらを含めて当該時期の集落の様相を考えなければならないはずである。しかし結果としてそれが成されなかったことは、大いに反省すべき点である。このように総括としてはやや物足りない点もあるが、本節では各遺構及び当該時期の集落の様相についてまとめていく。

1　住居址

今回、紹介した遺構数は115基を数え、そのうち最終的に住居址として認知した遺構は計76軒に上る。これは全面調査によって検出された当該時期のものとしては、県内では最多である。近年九州内においても縄文時代の住居址が多く検出されており、県内でも熊本市鶴羽田遺跡、太郎迫遺跡、山海道遺跡、人吉市中堂遺跡、須恵村沖松遺跡等で住居址の存在が比較的まとまって確認されている。こうした事例の増加によって、今後当該時期の集落の様相がより明らかになると考えられるが、残念ながら本書ではそこまで言及することはできない。したがって住居址について特徴的な事柄を幾つか述べるに留まりたい。

住居址76軒のうち時期比定が可能なものは53軒ある。ある程度の時期はわかるものの、時期幅があり比定困難な 5 軒は、敢えて不明分の23軒に入れておく。これら53軒の住居址は、出土遺物から概ね 3 つの時期に分けられる。15区や38区南に多く分布する御領式段階のもの（これを「Ⅰ期」とする）、42区、46区、49区を中心とする天城式段階のもの（これを「Ⅱ期」とする）、そして38区北、39区に点在する古閑式段階のもの（これを「Ⅲ期」とする）である。時期的には第Ⅲ章で述べたようにⅡ期、つまり天城式段階のものが圧倒的に多い。次いでⅠ期、Ⅲ期の順で遺構数は減少する。各時期における住居址の分布は明確に区分されている。Ⅰ期は15区、38区南、40区、つまり遺跡群の北側に広がる舌状に伸びた丘陵上とその東側に走る谷部に分布して、Ⅱ期は30区、36区、39区の南側、42区、45～49区、つまり遺跡群の北側に広がる舌状に伸びた丘陵上とその周縁部に分布している。Ⅲ期は38区北、39区の北側、つまり遺跡群の北側に広がる舌状に伸びた丘陵上に分布しており、分布域を異としながらも北側の丘陵上に連続して住居址が営まれていたことが分かる。また漫然と分布するのではなく、同時期の住居址は数軒単位でまとまるものが多く、特にⅡ期の集中箇所である42・43・46・49区ではそれぞれ 5 ～10軒程度のまとまりが見られる。Ⅱ期の細分化を示唆するものかもしれないが、現時点では明言は避けたい。

住居址の平面プランは円形が大半で、稀に楕円形や方形がある。楕円形については、円形住居が切り合っている可能性も否定できないので注意を要する。方形については時期不明なものも含め 5 軒しかない上、明確な方形を呈するのが45区にのみ分布すると言うやや特殊な状況であり、また方形住居がⅡ期のものしかないことから、単純に円形→方形と言うような平面プランの変遷は追えないのが現状である。

住居址の規模は３ｍ程度のものから７ｍを越えるものまであるが、Ⅰ期に比べⅡ期のものは長径、短径、深さ共にやや大型化している。遺構数の増加と遺構規模の大型化を安易に結びつける必要はないが、ひとつの傾向として捉えておきたい。

屋内に炉を持つ住居は時期不明分を含めて40軒確認され、持たない住居の30軒より多い。ただし時期別に見るとⅠ期ではすべて炉を持つのに対し、Ⅱ期以降になるとむしろ持たないものの方が多くなる。本遺跡群で検出された炉跡はすべて地床炉で、しかも明確な掘り込みを有するものはほとんどない。大半は焼土を含む土の落ち込みのようなものであり、恒常的に使用していた可能性は低いと推測される。

2　埋設土器

従来、「埋甕」、「置鉢」、「土器埋納遺構」と称されていたものを、本書では一括して「埋設土器遺構」として掲載してきた。従って一口に埋設土器と言っても様々な様相を呈している。以下に幾つかの要素について特徴的な事柄を述べていく。

土壙内又は平地に土器を設置するという性格上、設置される土器の器種、形状、姿勢等は、埋設土器の性格を考える上で、重要な要素になる。従ってこれらの要素について順に見ていく。まず器種について見てみると全体の２／３が深鉢で、浅鉢を伴う深鉢を入れると９割以上になり、深鉢を用いるのが主流であったと言えよう。ただし浅鉢を用いた例もあり、深鉢のみと言うわけではない。浅鉢を伴う深鉢が７例あるが、そのうち合せ口状に重ねたものが５例で最も多く、他に深鉢内に浅鉢が据えられたものが１例、浅鉢の口縁を上にして深鉢に重ねたものが１例ある。合せ口状のものは、その形状から何らかの埋葬施設である可能性が高い。他の２例はやや特異な例であるが、深鉢内に浅鉢が据えられた方は埋納品としての様相もなくはない。一方、浅鉢の口縁を上にして深鉢に重ねた方は、今後の類例の増加を待たねばならない。

形状についてはやはり完形品（口縁部等が破損しているものを含む）が最も多く、全体の３／４を占める。その一方で胴部以下を半截したものも７例あり、様々な形態・用途が存在したことを示している。特に半截品はその形態の特異性から完形品にはない用途（器台）を想定する必要がある。住居内にあるものが多いが、伴うものは少ない。堀り方を有するものとそうでないものがあるが、堀り方と言っても深さ数cm程度のもので、土器を固定させる役目を持っていたと考えられる。

埋設姿勢について口縁部を上にした「正位」が最も多い。次いで口縁部を下にした「伏位」が多く、横にした「側位」や口縁部を斜め下に向けた「斜伏位」が１例ずつ確認されている。時期を問わず正位と伏位はあり、埋設土器の標準的な姿勢であったと見られる。側位や斜伏位はその姿勢から弥生時代の甕棺を連想させる。埋葬施設の可能性もあろうか。

時期的には住居址同様Ⅱ期に集中しており、Ⅲ期にもあるがわずかに見られる程度である。Ⅰ期に該当するものはない。ⅠからⅡ期にかけてのものとおぼしき例が１例あるが、明確にⅠ期とは断定できない。その分布も住居址の分布と重複しており、住居の造営に伴って（又は前後して）造られたと考えられる。

以上、埋設土器について述べてみたが、最後に10－01号埋設土器で行なった脂肪酸分析について触れておく。前章のとおり、明確なヒトの存在を示すデータは存在せず、かといって全否定する程の根拠もない、という灰色の分析結果であった。土壌の汚染が主たる原因であるが、今後類似した土壌での脂肪酸分析には細心の注意を払い、できれば汚染の可能性のある土壌では、こうした分析を行なわない方が無難であることを付け加えて埋設土器の総括とする。

3　その他・集落

住居址、埋設土器以外の遺構については、円形周溝と土壙を取上げている。円形周溝については遺構内から時期を特定できるような遺物が出土しておらず、明確な時期を示すには至らなかった。そもそも遺構の性格さえ定かではなく、謎が多い。一口に円形周溝と言っても径３ｍ程度のものもあれば、５ｍを越えるものまであるし、周溝内外にピットを伴うものや周溝の埋土に焼土を含むものまで、実に様々な様相を呈している。ただすべてに共通する事として、住居址群の周囲にあることが指摘できる。住居址との関係は不明だが、時期的に近いものなら、興味深いことである。

土壙については第Ⅲ章で述べたように現時点では用途不明と言わざるを得ない。そもそも遺構かどうか疑わしい部分もあり、明言は避けたい。ただかなりまとまった量の遺物が出土しているのも事実であり、無視できない存在と言える。

以上各遺構について述べてきたが、最後に本遺跡群の当該時期における集落の動向について触れて、本節の総括としたい。

まずⅠ期になって15区、38区北、40区に住居址群が現れる。15区を除いて同じ丘陵上に位置しているが、距離的に見て同じ集団とは考えにくい。また住居址群も３～４軒程度で構成されており、建て替えか同時並行で存在したか、いずれにしてもかなり散漫な分布である。

それがⅡ期になって状況が一変する。42・43・46・49区を中心とした、遺跡群の北側に広がる舌状に伸びた丘陵上に多くの住居址と埋設土器が現れる。また丘陵の周縁、特に東側に走る谷部に面して30区、36区にも住居址の存在が確認され、その数百ｍ南の10区では埋設土器が見られる。ただし、立地的にこれらは丘陵上のものとは別集団と考えるのが妥当である。Ⅰ期にはほとんど見られなかった住居址同士の切り合いもあり、頻繁に建て替えが行なわれていたことを示している。また埋設土器も基本的には住居址の周囲に埋設されていたようだが、中には住居址のあった場所に埋設されるものもあり、集落の最盛期を迎えていたのではないか。

Ⅲ期に入ると遺構数が極端に減少する。Ⅰ期・Ⅱ期と生活が営まれてきた丘陵上に、わずかに住居址が点在するのみである。埋設土器も同様である。Ⅲ期以降、遺構らしい遺構もなく、本遺跡群の縄文集落は終焉を迎えることになる。

第２節　出土遺物

本書では、これまで膨大な量の出土遺物の中から一部を紹介してきた。各遺物については第Ⅲ章で既にその概要を報告しているので、本節ではそれらに対する補足等をもって総括としたい。

1　土器

本遺跡群では、磨消縄文系の土器から黒色磨研土器まで多くの土器が出土した。この中で御領式以前として一括して報告した土器群は遺構に伴うものではないため、時期設定には含めていないが、しいて呼称するなら「０期」となる。土器型式名を挙げると北久根山式、西平式、太郎迫式、三万田式、鳥井原式である。稀に遺構内からも出土しているが、数点程度に過ぎず、それをもって遺構に伴うとは言い難い。

前節でⅠ期からⅢ期に時期区分したが、土器型式もそれに対応させており、それに基づいて遺構を分類している。したがってここではそれらの土器型式毎に述べていきたい。まずⅠ期の御領式は破片が多いものの、各器種で比較的まとまっている。完形品がないのは残念であるが、時期比定には差し支えない。

Ⅱ期の天城式は最も量的に充実している。遺構出土は勿論、包含層遺物の量も本遺跡群内でかなりの割合を占めている。完形品も多く、器種も揃っているがその分課題もある。つまり細分化の問題である。天城式は２～３型式に細分可能であるとする考えは、土器型式設定当時からあり、近年２～３型式に細分するのが主流となっている。本遺跡群の整理に際し、遺構内遺物からそうした天城式の細分ができるかどうか考えてみた。しかし各部の形態変遷は理解できたが、それらを集合体として型式分類しようとした場合、明確な分類が困難であった。結局、「天城式」と従来から呼称されてきた土器型式名を用いることで、大雑把な分類に留めてしまった。消化不良の感もあるが、天城式に対する所見を述べることでその代わりとしたい。

天城式の特徴の一つとして器形の長大化が挙げられる。これは深鉢、浅鉢共に言えることで、特に浅鉢はそれまで小～中型の精製浅鉢に見られたＡ１類の中に、口径が30～40cmクラスの大型の浅鉢が出現するようになる。深鉢も器高が50cmを越えるものも珍しくない。そして実際の大きさ以上に特徴的なのが、各部位のプロポーションが崩れてくることである。それまで口縁部、頸部、胴部の割合が器種を問わず比較的安定していたが、天城式段階になって次第にそのバランスを失っていく。特に胴部は他の部位に比べ、長大化していく傾向があり、これが全体的に長大化していく要因の一つと考えられる。勿論すべてが長大化しているわけではないが、従来のものと長大化したものといった二極化が進んだことは確かである。では何故この時期にそうした現象が発生したのだろうか。残念ながら明確な答えを提示することは難しい。ただⅡ期になって飛躍的に遺構数が増加していることは、この問いに対して一つの仮説を提示している。つまり増加した人口に対し、より多くの食料を供給する必要に迫られた結果、土器の容量を増加させていった。その際、御領式以来の土器製作技法を用いたため、大型化にうまく対応できず、プロポーションが崩れていった。これはあくまで一つの仮説であり、他に明確な根拠があるわけではない。しかし土器の様相は、当時のライフスタイルを反映しているはずなので、こういった見方もあるのではないかと考えている。いずれにしても今後十分な検討を要する問題である。

Ⅲ期の古閑式は量こそ少ないが、39－01号住居址内から一括資料も出土しており、良好な資料が揃っている。基本的に天城式を踏襲するものだが、器壁がやや肉厚になり、大型化に対応した作りとも言える。また外来系の土器（畿内系の土器）との関係やそれらとの折衷品の位置付け等、幾つかの課題もある。

２　石器

各器種の概要は、第Ⅲ章で述べているので、ここでは全体的な事柄について若干述べておきたい。遺跡群全体で15000点以上、住居址内だけでは2500点余りの石器（剥片等を含む）が出土している。（第12表）この中で、剥片以外で突出して多いのが磨石・敲石で、504点出土しており、住居址内出土石器の約２割に上る。次いで打製石斧で252点、二次加工のある剥片の201点が目立つ。後は５～60点前後で石皿（65点）、磨製石斧

（57点）、石鏃（47点）が目につく程度で、それ以外は20点以下のものが大半である。磨石・敲石、石皿は調理具、打製石斧は土堀具としての機能を想定するなら、採集に比重を置いた生活を営んでいたことは容易に想像できる。その一方で狩猟具である石鏃や漁撈具である石錘（23点）は少なく、伐採具である磨製石斧もそれほど多くない。もっとも遺跡群全体で見ると、磨製石斧は350点以上出土しているので、小山山の麓まで集落の広がりが確認されていることから、やはりある程度の森林伐採を行なったと推測される。二次加工のある剥片は加工具の他、石器の未製品も含めているので単純にその機能を特定できない。また礫が136点出土しているが、赤変した礫もあり、煮炊きなどに使用していたことも考えられる。

石材については、専門家による石材鑑定を行なったわけではないので、かなり大雑把な鑑定になっている。安山岩一つ取っても、玄武岩質安山岩、輝石安山岩、流紋岩質安山岩等様々な種類があるが、すべて安山岩として一括している。これら安山岩の中には二子山産の所謂「二子石」とおぼしきものも見られる。白川を越えて二子石が搬入していることになり、興味深い事例と言える。今後、機会があれば専門的な石材鑑定を行なう必要があろう。

30区で出土した石刀について詳細は既に第Ⅲ章で述べたが、周辺地域での石刀の出土例は、上南部遺跡で 7 点出土している他、太郎迫遺跡でも出土している。出土状況から屹立していたことが推測できる例は他になく、東日本で確認されるような立石を用いた祭祀の現場を彷彿とさせる。

3　その他

土偶、玉類、土製品、焼成粘土塊等が出土しているが、個々に述べていく。

土偶は遺跡群全体で10点出土しているが、点数としてはそれほど多いとは言えない。ただ頭部～脚部の各部が一通り揃っており、頭部から腕部にかけて接合するもの（包含層遺物No.65）や器面に赤色顔料を塗布したもの（包含層遺物No.68）等特徴的なものもある。細部の表現方法は、熊本地方で多く見られる沈線（又は細線）を多用するもので、個体差はあるものの共通点も多い。まず顔面と後頭部の境に数条の沈線を巡らせている点である。この際、耳の付近から上の部分で施文されており、耳の前後を通ることで、ことさら耳を強調しているものもある。次に後頭部に数条の沈線を用い、直線又は弧線を施した後、中央を数条の沈線で左右に区切る点である。施文方法に個体差があるが、結果として左右対称をなしている。このような表現方法が当時の精神文化を反映したものなのかは定かではないが、今後検討の余地はあろう。

玉類は勾玉、管玉、丸玉を中心に、それぞれ石製、土製のものが出土した。勾玉は断面扁平でコの字形を呈しているが、これは当該時期の九州地方で普遍的に見られるタイプである。擦切技法による製作過程が明確に分かる資料はないが、その形態から擦切技法が用いられたことは明らかである。一方、土製勾玉は粘土紐を加工して作ったものが大半で、石製とはその形状に差がある。ただ49－68号住居址出土の勾玉（No.593）は例外で、断面扁平の半環状を呈している。器面は丁寧に研磨されており、明瞭に角を作り出している。頭部端の調整がやや粗いので、欠損した可能性も否定できないが、現時点では断定できない。土製勾玉が石製勾玉の模倣品とするなら、このような形状の石製勾玉が存在したことになるが、遺跡群内からは見つかっていない。特異な形状なので、今後の類例の増加を待ちたい。

管玉は、石製、土製を問わずほとんどが中央でやや膨らみを持つ「エンタシス状管玉」である。中には直線的なものもあるが、少数である。両端部の穿孔付近が摩滅しているもの（包含層遺物No.95・96）もあり、恒常的に使用していたと考えられる。ほとんどが無文だが、土製に沈線を施すものが 1 点ある。その他幾つ

か玉類があるが、大珠のような石製品（包含層遺物No.104）や環状の土製品（包含層遺物No.110・111）は特徴的な事例である。

土製品は土器片錘、円盤形土製品、円柱形（有孔紡錘形）土製品等出土している。土器片錘は漁撈具として考えてよいが、その他の土製品はその形態や用途が不明なものが多く、ここで多くを語ることは避けたい。ただその多くが、熊本地方において当該時期の遺跡から出土する特殊遺物と類似しており、当該時期の特徴的な遺物と言えよう。

第3節　環境

第Ⅳ章で自然科学分析について掲載しているが、個々の詳細な分析結果は各項に譲ることにして、本節では当時の石の本遺跡群の自然環境を、これらの分析結果を基に考えてみたい。

一口に当時の自然環境と言ってもⅠ期からⅢ期まであり、遺跡群の様相も異なるので分析を行なった46ー04号住居址の時期に当たるⅡ期の自然環境として述べていく。当時の植生として、集落周辺にクスノキ科を主体とする照葉樹林が広がっていたことが、植物珪酸体分析によって明らかになっている。また住居址内の焼土からも同種の珪酸体が多く検出されている。Ⅰ期に比べ、居住域が西側に拡大していることを考えると、これらの森林を切り開いた可能性が高い。これはすでに前節で指摘したことだが、自然科学的な分析から同様な結果が得られたことで、より確実なものとなったと言えよう。また集落の近くにはススキ属、チガヤ属、クマザサ属等が生い茂り、ところによってはヨシ属も生えていたと推測される。ヨシ属は水辺や湿地に生息する植物であるので、もしかしたら湧水地のような場所が近くにあったのかもしれない。ヨシ属が比較的まとまって確認されたのは46区東部周辺であり、ちょうど隣接する42区や46区の住居址群の空白地帯に位置している。住まいを営むには不適当な場所と判断されたのかもしれない。

植物珪酸体の他にも大型植物遺体の同定から、当時の植生を見てみたい。45区の住居址内（45ー05・13号住居址）から採集した炭化物が、樹木ではコナラ属、キハダ、カラスザンショウ、草本ではイネ、穀類、オオムギ、ササゲ属、スイカ等と判明した。このうちイネ、オオムギ、スイカは点数の少なさと採取した土壌の不確かさから当時のものとは考えにくい。まとまった点数が出ているのは樹木ではコナラ属、カラスザンショウ、草本ではササゲ属である。カラスザンショウを除いてどちらも食用である。コナラ属はアク抜きを要するものの栄養価が高く、主食の一つであったと考えられている。ササゲ属には栽培植物（リョクトウ、アズキ等）も含まれており当時、単なる採集だけでなくこれらの栽培も行なっていたことを示唆している。カラスザンショウは低地の二次林に多く見られ、植物珪酸体の分析とほぼ同様の結果を示している。

これらの結果を総合すると次のようになる。照葉樹林を切り開いて集落を営んでいた人々は、丘陵上の適地に住まいを設け、周辺の山林からコナラ属等の種子を採集していた。その一方でササゲ属を栽培して糧としていた。当然狩猟や漁撈も行なっていたことは、出土遺物から明らかなので、当時の食生活はかなり安定した、豊饒としたものであったことが窺える。

以上、自然化学分析についてまとめてみた。近年、多くの現場でこうした分析を行なうようになったのは、自然科学的側面から当時の様相を明らかにしよう、という担当者の意識の向上を示していると言えよう。しかし実際のところ、それらを調査成果に反映させているものはあまり多くない。何を知るためにどういった分析を行なうのか、そしてその結果が何を物語っているのかを担当者は十分認識し、調査成果に役立てていく必要がある。

参考文献

上野辰男・富田紘一　「縄文時代特殊遺物」『上野蒐集考古資料図録』第１集　肥後上代文化研究所　1986

清田純一　「縄文後・晩期土器考－中九州の縄文後・晩期土器とその並行型式について－」『肥後考古』第11号　1998

渡辺　誠・甲元眞之編
『縄文人・弥生人は何を食べたか』普及版[季刊考古学]　雄山閣　2000

富田紘一　「中九州縄文後晩期の遺跡－土偶から見た集落間の交流－」『九州上代文化論集』　乙益重隆先生古稀記念論文集刊行会　1990

坪井清足　「御領貝塚の発掘調査」『城南町史』　城南町　1965

島津義昭　「黒色磨研土器様式」『縄文土器大観』第４巻　小学館　1989

泉　拓良　「西日本磨研土器様式」『縄文土器大観』第４巻　小学館　1989

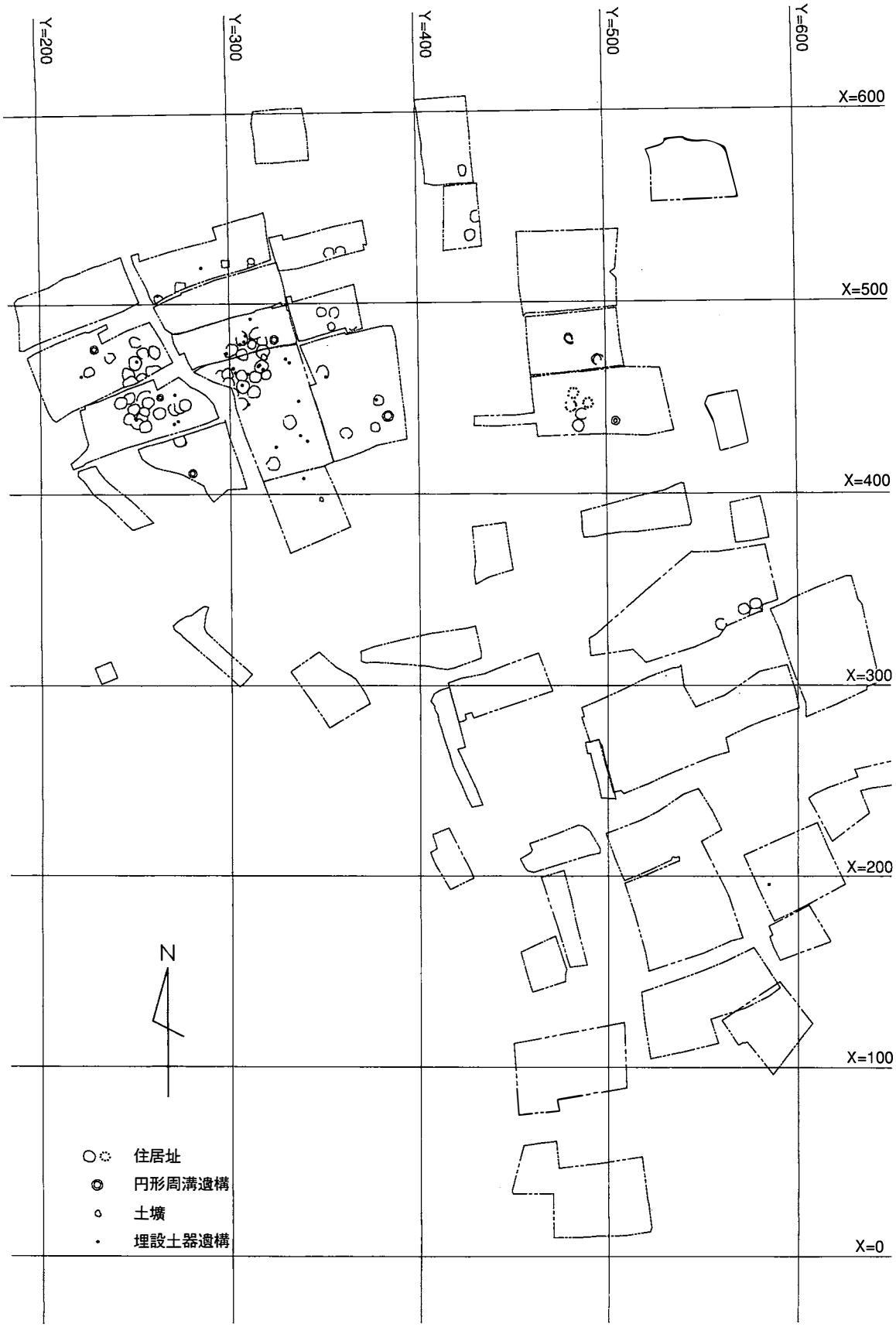
網田龍生　「熊本県北部の石器組成の変遷」『農耕開始期の石器組成２　九州』国立歴史民俗博物館資料調査報告書７　国立歴史民俗博物館　1996

小南裕一　「縄文後・晩期石器研究ノート」『(財)北九州市教育文化事業団埋蔵文化財調査室研究紀要』第13号　(財)北九州市教育文化事業団埋蔵文化財調査室　1999

木下尚子　「双口土器と獣形勾玉」『鹿児島考古』第35号　鹿児島県考古学会　2001

※　他にも多くの文献を参照したが、紙幅の都合上、割愛させていただく。

第246図　地形復元図（縄文後・晩期）　S：1/5000



第247図　全体遺構配置図（縄文後・晩期）　S：1/3000

第6表　遺構一覧表（竪穴住居址）

調査区名	遺構名（報告書用）	長軸(m)	短軸(m)	深さ(m)	平面プラン	柱穴(有無)	(数)	炉跡	硬化面(有無)	(範囲)	出土遺物(有無)	時期	備考
15区	15-01号住居	6.3	5.2	0.22	円形	有	15	有	無	―	有		
15区	15-02号住居	6.6	3.5+	0.15	円形	有	8+	有	無	―	有	Ⅰ	半分近く調査区外、15-01住に削平
15区	15-04号住居	5.9	5.5	0.2	円形	有	9	有	無	―	有	Ⅰ	
15区	15-05号住居	5.7	5.5	0.2	円形	有	10	有	無	―	有	Ⅰ	
30区	30-01号住居	＋	＋	―	円形か	有	4	有	有	4.7*3.7	有		上部を削平、規模は6～6.5m、支柱穴9個
30区	30-02号住居	6.2	6.0	0.1	円形	有	10	有	無	―	有		
30区	30-03号住居	5.8+	5.8	0.1	円形	有	4	有	無	―	有	Ⅱ？	支柱穴10個
30区	30-04号住居	＋	＋	―	円形か	有	9	無	有	3.0*2.4	有	Ⅲ？	上部を削平、床面残る
30区	30-05号住居	＋	＋	―	円形か	有	9	有	無	―	有	Ⅱ？	上部を削平
31区	31-05号住居	5.4	5.2	0.16	円形	無	―	有	無	―	有		
31区	31-09号住居	5.8	2.5+	0.1	円形か	無	―	有	無	―	無		半分近く削平
35区	35-01号住居	5.9	5.5	0.2	円形	有	6	有	無	―	無		全面的に削平され、残存状況悪し
35区	35-02号住居	6.0	4.1+	0.1	円形か	有	3+	有	無	―	無		東側は撹乱及び調査区外で削平
36区	36-05号住居	5.8	4.0	0.15	楕円形	有	6	不明	無	―	有	Ⅱ	床面中央に焼土有
38区n	38-01号住居	5.3	3.8+	0.3	円形	有	4	有	無	―	有	Ⅱ～Ⅲ	
38区n	38-02号住居	5.5	4.5+	0.25	円形	無	―	有	無	―	有	Ⅲ	
38区s	38-12号住居	4.0	3.5	0.12	円形	有	1+	無	無	―	有		
38区s	38-13号住居	5.0	4.5	0.12	円形	有	3	有	無	―	有	Ⅰ？	
38区s	38-14号住居	5.5	4.8	0.12	円形	無	―	有	無	―	有	Ⅰ？	焼土壙を持つ土壙と記載
38区s	38-16号住居	3.6	1.3+	0.1	円形か	不明	+	有	無	―	有	Ⅰ	約2/3を削平
39区	39-01号住居	6.5	6.1	0.15	円形	有	8	無	無	―	有	Ⅲ	SX-13で削平、住居内に埋設土器有
39区	39-02号住居	6.6	5.3	0.2	円形	有	3+	有	無	―	有	Ⅱ？	
39区	39-06号住居	5.1	4.7	0.2	円形	有	6	無	無	―	有	Ⅱ？	
39区	39-23号住居	5.2	5.0	0.2	円形	有	5	無	無	―	有	Ⅱ？	住居内に埋設土器有
40区	40-01号住居	＋	＋	―	不明	無	―	有	有	2.7*1.7	有	Ⅰ？	床面のみ残存
41区	41-03号住居	7.2	6.3	0.2	円形	有	17	有	有	1.5*0.5	有	Ⅰ～Ⅱ	中央に落ち込み有、ピット多数有
41区	41-04号住居	6.7	6.0	0.4	円形	有	15	無	無	―	有	Ⅰ～Ⅱ	壁際に溝有、ピット多数有
42区	42-05号住居	5.6	5.4	0.3	円形	有	6+	有	無	―	有	Ⅱ？	
42区	42-06号住居	6.8	6.8	0.2	円形	有	4+	有	無	―	有	Ⅱ	
42区	42-08号住居	7.1	5.8	0.15	円形	有	6	無	無	―	有	Ⅱ	支柱穴10個、住居内に埋設土器有（3基）
42区	42-12号住居	4.6+	5.5	0.15	円形	有	3+	有	無	―	有	Ⅱ	42-14住により削平
42区	42-13号住居	＋	＋	0.15	円形か	有	3+	不明	無	―	有	Ⅱ？	42-12・14住により削平をうける
42区	42-14号住居	5.6	2.8+	0.2	円形	有	1+	有	無	―	有		西側調査区外
42区	42-25号住居	6.4+	5.3	0.12	楕円形	不明	+	無	無	―	有	Ⅱ	
42区	42-27号住居	6.9	6.8	0.15	円形	有	4	無	無	―	有	Ⅱ	
42区	42-28号住居	6.0	5.4	0.2	円形	有	6	無	無	―	有	Ⅱ	
42区	42-30号住居	6.0	3.8+	0.26	円形	有	5+	無	無	―	有	Ⅱ	西半分を削平、支柱穴18個
42区	42-31号住居	5.6	5.3	0.14	円形	有	4	有	無	―	有	Ⅱ	
42区	42-32号住居	7.0	5.9	0.15	円形	有	4+	有	無	―	有	Ⅱ	
42区	42-35号住居	4.6	1.5+	0.14	円形	不明	1+	無	無	―	有	Ⅱ	西側削平
42区	42-38号住居	4.8+	4.5	0.12	円形	有	9	無	無	―	有	Ⅱ	対に見える柱穴有
42区	42-39号住居	4.0+	4.8	0.12	円形	有	6	無	無	―	有	Ⅱ	対に見える柱穴有
42区	42-42号住居	6.0	5.8	0.15	円形	有	8	有	無	―	有	Ⅱ～Ⅲ	対に見える柱穴有
42区	42-51号住居	6.7	5.9	0.1	円形	有	12	有	無	―	有	Ⅱ	対に見える柱穴有
42区	42-54号住居	5.1	4.6	0.12	円形	有	7	無	無	―	有	Ⅱ	対に見える柱穴有
45区	45-05号住居	5.0	4.9	0.3	方形	有	12+	有	無	―	有	Ⅱ	部分的に削平
45区	45-07号住居	3.8	3.6	0.3	方形	無	―	無	無	―	有		
45区	45-09号住居	3.5	3.4	0.24	円形	有	14+	有	無	―	有	Ⅱ？	
45区	45-10号住居	3.6	1.7+	0.26	方形	有	5+	不明	無	―	無		約2/3を削平
45区	45-13号住居	4.6	3.2+	0.4	円形	有	5+	有	無	―	有	Ⅱ～Ⅲ	住居内に埋設土器有
46区	46-02号住居	6.4	5.5	0.15	円形	有	5	無	無	―	有	Ⅱ	
46区	46-03号住居	5.5	4.5	0.1	円形	有	5	無	無	―	有	Ⅱ？	短軸方向は46-02住に削平
46区	46-04号住居	7.0	4.4+	0.08	円形か	有	3+	有	無	―	有	Ⅱ	短軸方向は、半分以上削平
46区	46-06号住居	6.0	5.6	0.15	円形	有	7	有	無	―	有		
46区	46-07号住居	5.0	4.1	0.17	円形	有	6	無	無	―	有	Ⅱ	
46区	46-08号住居	5.4	4.6	0.17	円形	有	6	無	無	―	有	Ⅱ	46-07・10・20住に削平
46区	46-09号住居	6.0	5.5+	0.12	円形	有	6	不明	無	―	有	Ⅱ	
46区	46-10号住居	6.0	5.4	0.36	円形	有	6	無	無	―	有	Ⅱ	支柱の可能性はあるが、断定できず
46区	46-11号住居	6.3	4.0+	0.2	円形か	有	5+	不明	無	―	有		
46区	46-12号住居	6.0	5.8	0.12	円形	有	6	有	無	―	有	Ⅱ	
46区	46-13号住居	7.1+	＋	0.16	円形か	有	3+	有	無	―	有	Ⅱ？	
46区	46-18号住居	5.7+	5.8	0.15	円形	有	6	無	無	―	有	Ⅱ	短軸方向は、46-19住に削平
46区	46-19号住居	6.0	5.8	0.3	円形	有	8	無	無	―	有	Ⅱ	
46区	46-20号住居	＋	5.4	0.2	円形	有	3+	無	無	―	有	Ⅱ	46-08・19住に削平、伴う柱穴も全て検出できず。
47区	47-01号住居	5.8	4.2+	0.14	円形	不明	+	有	無	―	有	Ⅱ？	イモ穴により削平
47区	47-02号住居	＋	＋	0.1	不明	不明	+	有	無	―	有	Ⅱ？	47-01住によりほとんど削平
49区	49-01号住居	6.6	5.2	0.2	楕円形	有	4	有	無	―	有		部分的に削平、住居に伴うピット4個有
49区	49-05号住居	5.6	4.6	0.16	円形	有	8	無	無	―	無		住居に伴うピット2個有り
49区	49-67号住居	7.0	7.0	0.3	円形	有	6	無	無	―	有	Ⅱ	
49区	49-68号住居	4.7+	6.3	0.15	楕円形	有	7	有	無	―	有	Ⅱ	49-69住に削平、住居に伴うピット2個有
49区	49-69号住居	7.6	4.8+	0.28	方形	有	4+	有か	無	―	有	Ⅱ	南側は調査区外のため未検出
49区	49-77号住居	6.0	6.0	0.32	円形	有	5+	無	無	―	有	Ⅱ	部分的に風倒木による削平有
49区	49-81号住居	5.2	3.6+	0.2	楕円形	有	6	無	無	―	有		約1/3を削平
49区	49-82号住居	7.8	5.0+	0.2	方形	有	9+	無	無	―	有	Ⅱ	半分近く未検出
49区	49-83号住居	6.8	5.6	0.22	円形	有	12	有か	無	―	有		壁面に支柱穴2個有
49区	49-99号住居	5.2	5.2	0.12	円形	有	10	無	無	―	有		

第７表　遺構一覧表（埋設土器）

調査区名	遺構名（報告書用）	検出状況 形状	姿勢	掘込み	長径 (cm)	短径 (cm)	深さ (cm)	住居との関係	共伴	器種	時期	備考
10区	10-01号埋設土器	完形	正位	有	74	49	40	無	有	浅・深	Ⅱ	
39区	39-09号埋設土器	半截	正位	無	—	—	—	有	無	深	Ⅱ	39-23号住に伴う
39区	39-12号埋設土器	完形	正位	有	70	65	30	有	有	浅・深	Ⅲ	39-01号住に伴う
40区	40-03号埋設土器	完形	正位	有	72	60	34	無	有	浅・深	Ⅱ	浅鉢（精製）上向き,深鉢内にある
41区	41-02号埋設土器	破損	正位	有	35+	45	17+	無	無	深	Ⅱ	
41区	41-05号埋設土器	完形	正位	有	58+	61	53	無	無	深	Ⅱ	
41区	41-06号埋設土器	完形	正位	有	50	45+	30	無	無	深	Ⅱ	
42区	42-01号埋設土器	完形	正位	有	45+	45	20+	無	有	浅・深	Ⅱ	上鉢は破損
42区	42-02号埋設土器	破損	伏位	有	50	＋	10+	無	無	浅	Ⅱ	かなり削平
42区	42-03号埋設土器	半截	伏位	有	60	50+	15+	無	無	深	Ⅲ	かなり削平,42-32住内だが伴わず
42区	42-04号埋設土器	半截	正位	有	80+	70	10+	無	無	深	Ⅱ?	口線帯欠損,42-32住内だが伴わず
42区	42-16号埋設土器	半截	正位	有	50	50	20+	無	無	深	Ⅱ	
42区	42-17号埋設土器	破損	伏位	有	55	45	12+	無	無	深	Ⅱ	
42区	42-18号埋設土器	半截	伏位	有	50	40	20+	無	無	深	Ⅱ	42-08住内だが伴わず
42区	42-19号埋設土器	破損	伏位	有	65	60	15+	無	無	深	Ⅱ	42-08住内だが伴わず
42区	42-20号埋設土器	破損	伏位か	有	95	70	10+	無	無	浅	Ⅱ	かなり削平
42区	42-21号埋設土器	完形	伏位	有	＋	＋	20+	無	無	深	Ⅱ	かなり削平されているが深鉢の残り良好
42区	42-22号埋設土器	破損	正位	有	45	45	25+	無	無	深	Ⅱ	胴部の一部を欠損
42区	42-26号埋設土器	破損	正位	有	50	50	30+	無	無	深	Ⅱ～Ⅲ	42-27住内だが伴わず
42区	42-29号埋設土器	完形	正位	有	60	60	50	無	無	深	Ⅱ	口縁付近に礫
42区	42-33号埋設土器	完形	正位	有	50	45	30	無	有	浅・深	Ⅰ～Ⅱ	浅鉢は上向き,周囲にピット有
42区	42-34号埋設土器	完形	正位	有	55	35	15+	無	無	浅	Ⅱ	42-08住内だが伴わず
42区	42-43号埋設土器	破損	側位	有	45	30+	20	無	無	深	Ⅱ	底部付近を欠損
42区	42-57号埋設土器	半截	正位	有	40	40	10+	無	無	深		かなり削平
45区	45-13号埋設土器	完形	正位	有	55	43	35	有	有	浅・深	Ⅱ～Ⅲ	45-13住に伴う,底部欠損
45区	45-14号埋設土器	完形	正位	有	100+	100	40	無	無	深	Ⅱ	
46区	46-03号埋設土器	破片	不明	有	85	60	20	無	無	深		かなり削平。姿勢はおそらく正位
46区	46-04号埋設土器	破損	正位	有	85	65	30	無	無	深	Ⅱ	
46区	46-05号埋設土器	完形	正位	有	65	55	35	無	無	浅・深	Ⅱ	姿勢は斜位にみえるが、調査時には、正位として認識
46区	46-06号埋設土器	半截	正位	無	—	—	—	有	無	深	Ⅱ	46-20住内
49区	49-52号埋設土器	完形	斜伏位	有	155	140	50	無	無	深	Ⅱ	
49区	49-84号埋設土器	完形	正位	有	85	80	25	無	無	深	Ⅱ	49-67住内だが伴わず

＊検出状況について
形状　完形（口縁から底部まで一通り立ち上がるもの）、破損（口縁や底部等の部位が埋納後の削平等により欠損しているもの）、
　　半截（埋納時既に約半分を欠損していたもの）、破片（破損よりさらに欠損した箇所が大きく、部分的しか残っていないもの）
姿勢　正位（口縁を上にして直立してあるもの）、側位（口縁を横にして寝せてあるもの）、伏位（口縁を下にして直立してあるもの）、斜伏位（口縁を下にして斜めにしてあるもの）
掘込み　有（掘り込んでいるもの）、無（掘り込んでないもの）　　なお、計測値の単位はcmで統一している。はっきりしないものには「＋」とする
住居との関係　有（層位的にみて住居址に伴うもの）、無（層位的にみて住居址に伴わないもの）
共伴　有（深鉢の他にも浅鉢を伴うもの）、無（深鉢のみのもの）

分からないものは「不明」、それ以外で上記の内容に当てはまらないものについては「その他」とし、備考にその内容を記載する。

第８表　遺構一覧表（その他の遺構）

調査区名	遺構名（報告書用）	長径 (m)	短径 (m)	溝幅 (m)	深さ (cm)	出土遺物（有無）	時期	備考
30区	30—01号円形周溝	4.6	4.4	1.2	90	有		周溝内に焼土含む
31区	31—01号円形周溝	5.3	3.9	0.3	20	無		
39区	39—08号円形周溝	5.6	4.2	0.8	40	有		周溝内部にpit伴うか
42区	42—47号円形周溝	4.2	4.0	0.6	50	有		
46区	46—01号円形周溝	3.0	2.9	0.5	30	有		
47区	47—06号円形周溝	4.1	4.1	0.9	40	有		
49区	49—66号円形周溝	4.0	3.0	0.8	60	有		周溝内外部にpit伴うか

調査区名	遺構名（報告書用）	長径 (m)	短径 (m)	深さ (cm)	平面プラン	出土遺物（有無）	時期	備考
42区	42—07号土壙	3.5	3.2	40	円形	有		埋土中に大量の遺物を確認

第9表　土器観察表

No.	収蔵No.	調査区名	遺構名（報告書用）	器種	分類	計測値(cm) 口径	胴部径	器高	底部径	胎土	色調	技法的特徴 外面	技法的特徴 内面	残存部位	備考
11		15区	15-02号住居	浅	A1	—	—	6.7+	—	石英・角閃石等	黒褐色	横ミ	横ミ	口～胴一部	山形突起,三角文
12		15区	15-02号住居	浅	D1	—	—	5.4+	—	石英・角閃石等	黄褐色	横又は斜ミ	横ミ	口～胴一部	口線に凹点2
13		15区	15-02号住居	浅	不明	—	—	4.3+	4.0	角閃石等	淡褐色	ミ	横又は斜ミ	胴一部・底	
14		15区	15-02号住居	深	A1	—	—	5.4+	—	石英・角閃石等	淡褐色	横ミ	横ミ	口一部	口線に凹点1,口線外面は部分的に黒変
15		15区	15-02号住居	深	不明	—	—	8.5+	8.0	石英・角閃石等	明褐色	横又は斜へ	ナ	胴一部・底	
16		15区	15-04号住居	浅	D1	(25.4)	—	10.4	(3.5)	石英・雲母等	暗褐色	横又は斜ミ	横又は斜ミ	全体の1/4	口線に凹点1
17		15区	15-04号住居	浅	D1	(22.0)	—	6.4+	—	石英・角閃石等	暗褐色	横又は斜ミ	横又は斜ミ	全体の1/4	口線に凹点1
18		15区	15-04号住居	浅	不明	—	—	2.1+	—	石英・角閃石等	暗褐色	横ミ	横ミ	口一部	口線に羽状文
19		15区	15-04号住居	深	A1	(30.0)	—	5.4+	—	石英・角閃石等	淡褐色	横ミ	横ミ	口1/4	口線に三角文2,口線は部分的に黒変
20		15区	15-04号住居	深	A1	—	—	12.0+	—	石英・角閃石・雲母等	褐色	横又は斜ミ	横ミ	口～胴一部	口線に三角文
21		15区	15-04号住居	深	B	(34.4)	(31.2)	18.7+	—	石英・角閃石等	褐色	横ミ	横ミ	口1/4・肩一部	
32		15区	15-05号住居	浅	D1	—	—	4.2+	—	石英・角閃石等	茶褐色	ミ	横ミ	口～胴一部	口線に凹点1
33		15区	15-05号住居	浅	不明	—	—	1.1+	4.2	角閃石等	茶褐色	ミ	不ミ	胴一部・底	
34		15区	15-05号住居	深	A1	(26.8)	—	9.2+	—	長石・角閃石等	淡褐色	横ミ	横ミ	口1/5・剄1/5	口線に凹点1
35		15区	15-05号住居	深	A1	—	—	9.9	—	石英・角閃石等	暗褐色	横又は斜ミ	横又は斜ミ	口～剄一部	
36		15区	15-05号住居	深	不明	—	—	1.4+	7.0	石英・角閃石等	黄褐色	へ	不ミ	胴一部・底	
37		15区	15-05号住居	深	不明	—	(27.4)	15.3+	—	石英・長石・角閃石等	明褐色	横又は斜ミ	横ミ	剄一部・胴1/4	胴部外面に煤付着
43		30区	30-02号住居	深	不明	—	—	4.9+	7.8	砂粒	茶褐色	斜ミ	ミ	胴一部・底	底部内面黒変
49		30区	30-03号住居	深	A1	43.0	(41.0)	26.3+	—	石英・角閃石等	褐色	横ミ	横ミ	口・剄の大半・胴一部	頸部内面部分的に縦ミ
59		30区	30-04号住居	浅	D2	—	—	5.6+	—	石英・雲母等	黄褐色	横ミ	横ミ	口～胴一部	波状口線
60		30区	30-04号住居	深	不明	—	—	2.1+	(9.4)	石英等	淡褐色	ナ	ナ	底	底部内面黒変
64		30区	30-05号住居	浅	A1	—	—	2.9+	—	石英・角閃石等	暗褐色	横ミ	横ミ	口～胴一部	
67		36区	36-05号住居	浅	A1	(34.5)	32.7	22.3+	—	石英・雲母等	黒褐色	横ミ	横ミ	全体の1/2(底以外)	山形突起,凹点1,底部外面赤変
68		36区	36-05号住居	深	A1	—	—	7.8+	—	石英等	淡黄褐色	横又は斜ミ	横ナ	口～剄一部	
69		36区	36-05号住居	深	A1	(36.4)	—	16.7+	—	石英・角閃石・黒雲母等	褐色	横ミ	横へ	口～剄1/4	内面に接合痕
70		36区	36-05号住居	深	不明	—	—	8.1+	11.1	石英・長石・角閃石等	明黄褐色	横又は縦ミ	ナ	胴一部・底	
84		38区n	38-01号住居	浅	A1	51.6	44.4	18.2+	—	石英・長石等	明黄褐色	横ミ	横ミ	全体の1/2(底以外)	
85		38区n	38-01号住居	深	A1	—	—	11.4+	—	石英・長石・角閃石等	黄褐色	横ミ	横ミ	口～剄一部	
91		38区n	38-02号住居	浅	A1	—	—	7.2+	—	石英等	暗褐色	横ミ	横又は斜ミ	口～剄一部	外面に煤付着
92		38区n	38-02号住居	深	不明	—	—	2.7+	11.0	石英・長石等	淡褐色	条	条	胴一部・底	意図的に打ち欠いたか
93		38区n	38-02号住居	深	A1	25.8	—	11.8+	—	石英・長石・角閃石等	黄褐色	横ミ	横ミ	口・剄大半	内面部分的に黒変
94		38区n	38-02号住居	深	A1	33.5	—	17.0+	—	石英・長石等	淡褐色	横又は縦ミ	横ミ	口・剄1/3	
95		38区n	38-02号住居	深	A1	34.2	34.5	23.7+	—	石英・角閃石・黒雲母等	黄褐色	横ミ	横ミ	口～剄4/5,胴一部	
96		38区n	38-02号住居	深	A1	(39.7)	—	11.9+	—	石英・角閃石等	明黄褐色	横又は斜ミ	横又は斜ミ	口～剄1/2	頸部に補修孔
110		38区s	38-13号住居	深	B	—	—	12.9+	—	石英・角閃石等	暗褐色	横又は斜ミ	横又は斜ミ	口～肩一部	
111		38区s	39-13号住居	深	不明	—	—	7.2+	6.4	砂粒	淡褐色	横又は斜ミ	斜ミ	胴一部・底	外面に煤付着
117		38区s	38-14号住居	深	B	—	—	6.2+	—	石英・角閃石等	明褐色	斜ミ	横ミ	口～剄一部	胎土に角閃石を多く含む
118		38区s	38-14号住居	深	不明	—	—	1.8+	4.6	石英・角閃石等	淡赤褐色	斜ミ	不ミ	胴一部・底	胎土に角閃石を多く含む,内面に煤付着
123		38区s	38-16号住居	浅	不明	—	—	5.7+	—	砂粒	淡褐色	横ミ	横ミ	口～剄一部	凹点2,外面に煤付着
124		38区s	38-16号住居	浅	不明	—	—	4.8+	—	石英・角閃石等	暗黄褐色	横ミ	横又は斜ミ	口～剄一部	凹線の間に羽状文
125		38区s	38-16号住居	深	A1	(37.6)	(35.9)	35.3+	—	角閃石等	黒褐色	ミ	横ミ	全体の1/2(底以外)	凹点2
126		38区s	38-16号住居	深	B	—	—	11.3+	—	石英・角閃石等	暗黄褐色	横又は斜ミ	横又は斜ミ	口～肩一部	
127		39区	39-01号住居	浅	D2	(14.8)	(11.0)	7.1	—	砂粒	暗褐色	横ミ	横ミ	全体の1/2(底以外)	波状口線,凹点1
128		39区	39-01号住居	浅	D2	(24.0)	(18.2)	6.2+	—	砂粒	黒褐色	横ミ	横又は斜ミ	全体の2/3(底以外)	波状口線
129		39区	39-01号住居	浅	D2	(29.6)	(21.6)	8.9+	—	石英・角閃石等	淡褐色	横ミ	横又は斜ミ	口～肩1/3・胴1/5	波状口線,SX-13出土
130		39区	39-01号住居	浅	C	(20.4)	—	9.2	—	砂粒	赤褐色	横ミ	横ミ	全体の2/3(底以外)	口縁に山形文
131		39区	39-01号住居	浅	A2	(30.0)	(29.7)	8.9+	—	石英・角閃石・雲母等	黒褐色	横又は斜ミ	縦又は横ミ	全体の4/5(底以外)	器形やや歪む
132		39区	39-01号住居	浅	A1	—	—	12.2+	—	石英・角閃石等	黒褐色	横ミ	横又は斜ミ	口～胴一部	
133		39区	39-01号住居	浅	A1	(46.8)	(40.4)	10.4+	—	石英・角閃石・雲母等	暗黄褐色	横又は斜ミ	横又は斜ミ	全体の1/6(底以外)	
134		39区	39-01号住居	深	B	(28.9)	(29.9)	13.6+	—	石英・長石・角閃石等	淡褐色	ミ	横ミ	口1/2・胴一部	外面部分的に黒変
135		39区	39-01号住居	深	不明	—	—	11.8+	(8.0)	石英・角閃石等	明褐色	ナ	ナ	胴1/3・底1/5	
136		39区	39-01号住居	深	A2	(26.4)	(28.8)	29.9+	—	石英・角閃石・雲母等	暗赤褐色	横又は斜ナ	横又は斜ナ	口一部・胴1/4	
137		39区	39-01号住居	深	A1	(36.7)	38.3	51.4	10.0	石英・角閃石等	暗黄褐色	条又はへ	横ナ又はへ	全体の2/3	底部内面付近に炭化物付着,口縁外面は黒変
158		39区	39-02号住居	浅	C	(10.2)	—	2.0	—	石英・長石等	暗褐色	ミ	ミ	全体の2/3	器面剥離多い,皿状を呈する
159		39区	39-02号住居	浅	A1	—	—	7.6+	—	石英・長石・雲母等	黄褐色	横又は斜ミ	横ミ	口～剄一部	
164		39区	39-06号住居	浅	不明	—	—	3.2+	—	石英・角閃石等	暗黄褐色	横ミ	横ミ	口一部	外面に煤付着
167		40区	40-01号住居	浅	不明	—	—	1.3+	2.5	砂粒	淡褐色	縦又は斜ミ	横又は斜ミ	胴一部・底	
168		40区	40-01号住居	深	不明	—	—	8.5+	6.0	石英・長石・角閃石等	明褐色	縦又は斜へ	斜ミ	胴一部・底	
170		41区	41-03号住居	浅	C	(16.0)	—	4.3+	—	石英・角閃石等	黄褐色	横ミ	横ミ	底	浅鉢の胴部を再利用か
171		41区	41-03号住居	鉢	C	—	—	10.2+	—	石英・角閃石等	暗褐色	横ミ	横ミ	口～胴一部	口縁にリボン状突起か
172		41区	41-03号住居	鉢	A	—	—	9.4+	—	砂粒	淡褐色	横ミ	横ミ	口～胴一部	外面に煤付着
173		41区	41-03号住居	深	A1	—	—	9.4+	—	石英・角閃石等	暗褐色	横ミ	横ミ	口～肩一部	外面に煤付着
174		41区	41-03号住居	深	不明	—	—	12.6+	7.4	石英・長石・角閃石等	黄褐色	縦ミ	横又は縦ミ	胴一部・底	底部に煤付着
175		41区	41-03号住居	深	A1	(30.6)	(35.6)	22.7+	—	石英・長石・角閃石等	淡褐色	横又は縦ミ	横又は縦ミ	全体の2/3(底以外)	剄部に煤付着
176		41区	41-03号住居	深	A1	37.8	40.8	22.7+	—	石英・長石・角閃石等	褐色	縦又は横ミ	横ミ	口1/2・剄・胴一部	剄部に煤付着
177		41区	41-03号住居	深	A1	28.1	(31.8)	28.1+	—	石英・角閃石等	黄褐色	横又は縦ミ	ミ	口2/3・胴1/2	外面胴部に炭化物付着
178		41区	41-03号住居	深	不明	—	(34.1)	42.3+	—	角閃石等	暗黄褐色	縦ミ	横ミ	胴2/3	底部は意図的に破損か
179		41区	41-03号住居	鉢	B	(18.3)	20.9	18.3	5.0	砂粒	褐色	ナ	横ミ	口1/3・胴～底1/2	剄部に煤付着
180		41区	41-03号住居	深	C	24.5	—	24.3	8.0	長石・角閃石等	黄灰色	横又は縦ミ	斜ミ	全体の2/3	口縁は斜めになっている
181		41区	41-03号住居	深	A2	(22.3)	(27.0)	25.2+	—	砂粒	灰褐色	横へ	横又は斜へ	全体の2/3(底以外)	器面やや風化
188		41区	41-04号住居	浅	A1	(20.9)	(13.4)	9.1	(4.4)	石英・角閃石等	茶褐色	横ミ	横ミ	全体の3/5	巻貝による扇状文
189		41区	41-04号住居	浅	A1	(15.4)	—	3.2+	—	砂粒	淡茶褐色	横ミ	横ミ	口～剄一部	
190		41区	41-04号住居	浅	A1	—	—	4.5+	—	石英・角閃石等	明褐色	横ミ	横ミ	口～剄一部	山形突起,凹点2,頸部外面が一部黒変
191		41区	41-04号住居	浅	A1	—	—	5.4+	—	砂粒	明褐色	横ミ	横ミ	口～剄一部	山形突起,凹点2
192		41区	41-04号住居	浅	A2	—	—	6.3+	—	砂粒	淡黄褐色	横ミ	横ミ	口～剄一部	内外面共一部黒変
193		41区	41-04号住居	深	A1	—	—	6.4+	—	石英・角閃石等	明褐色	横ミ	横ミ	口～剄一部	口縁外面に煤付着
194		41区	41-04号住居	深	不明	—	31.2	25.3+	7.6	砂粒	褐色	横又は縦ミ	横又は縦ミ	剄1/3・肩以下	頸部に補修孔
195		41区	41-04号住居	小	—	—	—	1.2+	—	石英・角閃石等	黄褐色	ナ	ナ	全体の一部	ミニチュア土器か
202		42区	42-05号住居	浅	A1	—	—	8.2+	—	石英・角閃石等	暗褐色	横ミ	横ミ	口～剄一部	山形突起,凹点1
210		42区	42-06号住居	浅	A1	—	—	4.8+	—	砂粒	暗褐色	横ミ	横ミ	口～剄一部	山形突起,凹点1,内面一部黒変
211		42区	42-06号住居	浅	A1	—	—	4.5+	—	石英・角閃石等	明褐色	横又は斜ミ	横ミ	口～胴一部	
212		42区	42-06号住居	鉢	B	(16.2)	—	8.0+	—	砂粒	淡褐色	横又は斜ミ	横ミ	口～剄一部	
213		42区	42-06号住居	深	不明	—	—	8.7+	4.8	石英・角閃石等	明褐色	縦ミ	横ナ	胴1/3・底	胴部外面に煤付着
218		42区	42-08号住居	浅	A1	—	—	6.0+	—	石英・角閃石等	褐色	横ミ	横ミ	口～胴一部	
219		42区	42-08号住居	鉢	B	(17.4)	(17.2)	12.7+	—	砂粒	淡黄褐色	斜へ	横ナ	口一部・胴1/3	
220		42区	42-08号住居	鉢	不明	—	—	9.5+	3.6	砂粒	黄褐色	縦又は横ミ	横ミ	胴1/2・底	底部の一部に煤付着
221		42区	42-08号住居	深	不明	—	—	2.6+	7.0	砂粒	黄褐色	ミ	ミ	底	
222		42区	42-08号住居	深	A1	(30.0)	—	15.2+	—	砂粒	黒褐色	横ミ	横ミ	口1/3・剄1/4	
223		42区	42-08号住居	深	A1	(29.6)	(34.3)	23.5+	—	石英・角閃石等	淡褐色	横又は縦ミ	横ミ	口1/3・剄～胴1/4	口縁と胴部に煤付着

224		42区	42-08号住居	深	A1	(35.6)	—	19.6+	—	砂粒	茶褐色	斜又は横ミ	横ミ	口一部・剄1/4	
225		42区	42-08号住居	深	A1	(37.4)	(40.6)	20.1+	—	石英・長石・鐚母等	暗褐色	横又は斜ミ	横ミ	口～肩1/4	
239		42区	42-12号住居	浅	A1	—	—	7.7+	—	石英・角閃石等	暗褐色	横ミ	横ミ	口～胴一部	リボン状突起
240		42区	42-12号住居	浅	A1	—	—	8.1+	—	石英・角閃石等	暗褐色	横ミ	横ミ	口～胴一部	口縁と胴部の一部が黒変
241		42区	42-12号住居	深	A1	(26.4)	—	8.6+	—	砂粒	淡褐色	横ミ	横ミ	口1/4・剄一部	
242		42区	42-12号住居	深	A1	(30.3)	—	12.3+	—	石英・角閃石等	明褐色	横ミ	横ミ	口1/4・剄一部	口縁から頸部にかけて一部黒変
250		42区	42-13号住居	浅	A1	—	—	6.2+	—	砂粒	淡褐色	横ミ	横ミ	口～剄一部	
251		42区	42-13号住居	深	A1	—	—	14.4+	—	砂粒	暗褐色	横又は斜ミ	横又は斜ミ	口～剄一部	
252		42区	42-13号住居	深	不明	—	—	1.6+	5.8	砂粒	黄褐色	底はへ	不ミ	底	
260		42区	42-25号住居	浅	A1	—	—	5.9+	—	石英・角閃石等	黄褐色	横又は斜ミ	横又は斜ミ	口～胴一部	リボン状突起
261		42区	42-25号住居	浅	A1	—	—	5.6+	—	砂粒	暗褐色	横ミ	横ミ	口～剄一部	リボン状突起
262		42区	42-25号住居	浅	A1	—	—	5.1+	—	石英・角閃石等	暗褐色	横又は斜ミ	横又は斜ミ	口～胴一部	
263		42区	42-25号住居	深	A1	—	—	6.7+	—	砂粒	暗褐色	横又は斜ミ	横ミ	口～剄一部	
264		42区	42-25号住居	深	不明	—	—	3.5+	8.0	砂粒	明褐色	斜ミ	不ミ	胴一部・底	
265		42区	42-25号住居	深	—	—	—	4.9	—	石英・角閃石等	黄褐色	横ミ	横ミ	口～剄一部	波状口縁,凹点2,渦巻文か,西平式
273		42区	42-27号住居	浅	A1	—	—	5.8+	—	石英・角閃石等	淡褐色	横ミ	横ミ	口～剄一部	山形突起か
274		42区	42-27号住居	浅	A1	—	—	3.1+	—	砂粒	暗褐色	横ミ	横ミ	口～剄一部	
275		42区	42-27号住居	鉢	B	(18.7)	—	5.4+	—	砂粒	黄褐色	横又は斜ミ	横ナ	口～剄一部	
276		42区	42-27号住居	鉢	C	—	—	7.2+	—	石英・角閃石等	暗褐色	横ミ	横ミ	口～胴一部	口縁に補修孔
277		42区	42-27号住居	深	A1	—	—	9.5+	—	砂粒	茶褐色	縦又は斜ミ	横ミ	口～剄一部	頸部に補修孔
278		42区	42-27号住居	深	不明	—	—	2.6+	8.4	石英・角閃石等	黄褐色	ミ	不ミ	胴一部・底	
279		42区	42-27号住居	深	A1	(28.0)	(32.4)	21.4+	—	砂粒	明褐色	横ミ	横ミ	口1/5・剄1/5・胴一部	口縁外面に煤付着
280		42区	42-27号住居	深	A1	(30.1)	(35.2)	17.0+	—	砂粒	茶褐色	横又は斜ミ	横ミ	口2/3・剄2/3	口縁外面の一部が黒変
293		42区	42-28号住居	浅	C	(13.8)	—	6.3	—	石英・角閃石等	暗褐色	横又は斜へミ		口一部・胴1/3・底2/3	外面部分的に黒変
294		42区	42-28号住居	浅	A1	(33.1)	—	6.6+	—	石英・長石・角閃石等	淡褐色	横ミ	横ミ	口～剄1/4	
295		42区	42-28号住居	浅	A1	—	—	10.8+	—	砂粒	暗褐色	横ミ	横ミ	口～胴一部	
296		42区	42-28号住居	深	C	—	—	13.6+	—	砂粒	淡褐色	横又は斜ミ	横又は縦ミ	口～胴一部	胴部外面に煤付着
297		42区	42-28号住居	深	A1	—	—	12.4+	—	石英・長石・角閃石等	淡褐色	斜ミ	横ミ	口～剄一部	
298		42区	42-28号住居	深	A2	(24.8)	—	12.1+	—	砂粒	淡褐色	横ミ	ミ	口～剄1/3	頸部外面に煤付着
299		42区	42-28号住居	深	不明	—	—	2.3+	6.5	砂粒	黄褐色	縦ミ	ナ	胴一部・底	
300		42区	42-28号住居	深	A1	(36.2)	—	18.0+	—	石英・長石等	褐色	横又は斜ミ	横又は斜ミ	口～剄1/3・胴一部	口縁外面の一部が黒変
308		42区	42-30号住居	浅	A1	(17.8)	(15.9)	5.5+	—	砂粒	黒褐色	横ミ	横又は縦ミ	口～剄1/3・胴1/4	山形突起,凹点3(口縁2、肩1)
309		42区	42-30号住居	浅	A1	(34.8)	(30.8)	9.3+	—	砂粒	明褐色	横ミ	横ミ	口～剄1/4・胴一部	
310		42区	42-30号住居	鉢	A	—	—	11.7+	—	砂粒	褐色	横ミ	横ミ	口～胴一部	口縁から頸部にかけて煤付着
311		42区	42-30号住居	深	A1	(29.8)	—	12.0+	—	砂粒	淡褐色	横又は斜ミ	横ミ	口1/3・剄一部	口縁外面の一部が黒変
312		42区	42-30号住居	深	A1	(36.4)	—	8.6+	—	石英・角閃石等	暗褐色	横又は縦ミ	横又は斜ミ	口1/4・剄一部	
325		42区	42-31号住居	浅	A1	(32.0)	(28.6)	6.9+	—	砂粒	黒褐色	横ミ	横又は斜ミ	口～剄1/4・胴一部	山形突起,凹点1
326		42区	42-31号住居	浅	A1	(30.6)	—	6.0+	—	砂粒	黄褐色	横ミ	横ミ	口～剄1/4	口縁外面に煤付着
327		42区	42-31号住居	浅	不明	—	—	2.7+	4.5	砂粒	暗褐色	斜ミ	ミ	胴一部・底	外面が黒変
328		42区	42-31号住居	深	A1	—	—	12.0+	—	石英・角閃石等	赤褐色	ナ	ナ	口～剄一部	
329		42区	42-31号住居	深	A1	—	—	16.4+	—	砂粒	暗黄褐色	横ミ	横ミ	口～剄一部	外面に煤付着
330		42区	42-31号住居	深	A2	(34.4)	—	21.7+	—	石英等	暗黄褐色	ミ	ミ	口1/5・剄1/4	
331		42区	42-31号住居	深	A2	39.9	—	14.3	—	砂粒	明褐色	ミ	横ナ	口～剄1/2	頸部外面が黒変
332		42区	42-31号住居	深	不明	—	—	5.7+	7.4	石英・長石・角閃石等	明褐色	横又は斜ミ	ミ	胴一部・底	内面やや風化
342		42区	42-32号住居	浅	A2	—	—	5.6+	—	石英等	暗褐色	横ミ	横ミ	口～胴一部	
343		42区	42-32号住居	鉢	A	(19.4)	(22.0)	12.5+	—	砂粒	暗黄褐色	横又は縦ミ	横又は縦ミ	口一部・剄～胴1/4	頸部に補修孔,外面が部分的に黒変
344		42区	42-32号住居	深	A1	(40.8)	—	18.9+	—	角閃石等	黄褐色	斜ミ	横ミ	口～剄1/4	外面に煤付着
354		42区	42-35号住居	深	A1	—	—	14.2+	—	砂粒	黄褐色	横又は斜ミ	ミ	口～剄一部	
355		42区	42-35号住居	深	A1	(33.6)	—	18.5+	—	石英・角閃石等	暗褐色	ミ	条	口～剄1/4	
356		42区	42-35号住居	深	不明	—	(35.0)	21.7+	—	砂粒	暗黄褐色	横又は斜ミ	横ミ	剄一部・胴1/3	底部は意図的に破損か
363		42区	42-38号住居	浅	C	—	—	4.2+	—	石英・角閃石等	暗褐色	横ミ	横ミ	口～胴一部	リボン状突起,器面に赤色顔料塗布
364		42区	42-38号住居	浅	A1	(31.2)	—	3.0+	—	石英等	暗褐色	横ミ	横ミ	口～剄1/4	山形突起,凹点2,口縁が黒変
365		42区	42-38号住居	深	A2	(36.4)	—	22.6+	—	石英等	淡赤褐色	ミ	横ミ	口1/4,胴一部	器面調整不十分のため凹凸目立つ
366		42区	42-38号住居	深	不明	—	—	1.8+	7.8	角閃石・鐚母等	黄褐色	条	条	胴一部・底	
374		42区	42-39号住居	小	—	—	(7.3)	4.2+	3.3	石英・角閃石等	淡黄褐色	横又は縦ミ	ミ	胴～底4/5	胎土に黒曜石混入か
375		42区	42-39号住居	浅	A1	—	—	2.6+	—	砂粒	暗褐色	横又は斜ミ	横ミ	口～胴一部	口縁に鋸歯文
376		42区	42-39号住居	深	A1	—	—	3.0+	—	砂粒	淡褐色	横ミ	横ミ	口一部	
377		42区	42-39号住居	深	不明	—	—	4.0+	7.5	砂粒	明褐色	ミ	ミ	胴一部・底	
378		42区	42-39号住居	深	不明	—	—	3.9+	9.4	砂粒	暗黄褐色	ミ	ミ	胴一部・底	底部外面が黒変
385		42区	42-42号住居	浅	C	—	—	2.7+	—	石英等	黄褐色	横ミ	横ミ	口一部	口縁に反転山形文
386		42区	42-42号住居	浅	C	—	—	5.9+	—	石英・角閃石等	暗褐色	ナ	斜ミ	口～胴一部	口縁から胴部にかけて黒変
387		42区	42-42号住居	浅	A1	—	—	8.0+	—	石英・角閃石等	暗褐色	横ミ	横ミ	口～剄一部	
388		42区	42-42号住居	深	A2	—	—	4.7+	—	砂粒	淡褐色	横ナ	横ナ	口～剄一部	
389		42区	42-42号住居	深	不明	—	—	2.4+	7.9	砂粒	淡黄褐色	ナ	ナ	胴一部・底	底部消れる
399		42区	42-51号住居	深	A1	—	—	16.0+	—	石英・角閃石・鐚母等	暗褐色	横ミ	横ミ	口～剄一部	外面の一部に煤付着
400		42区	42-51号住居	深	B	—	—	26.0+	—	石英・鐚母等	茶褐色	横ミ	横ミ	口～胴一部	
401		42区	42-51号住居	深	不明	—	—	1.9+	7.9	石英・鐚母等	明褐色	ミ	ミ	胴一部・底	
410		42区	42-54号住居	浅	A1	—	—	1.8+	—	砂粒	黄褐色	横ナ	ミ	口一部	山形突起
411		42区	42-54号住居	深	A1	(26.4)	—	5.5+	—	石英等	明褐色	横又は縦ミ	横ミ	口1/4・剄一部	器面の一部が黒変
412		42区	42-54号住居	深	不明	—	—	6.1+	7.7	石英・角閃石等	黄褐色	ミ	不ミ	胴一部・底	
417		45区	45-05号住居	浅	A1	—	—	5.0+	—	石英・角閃石等	淡褐色	横ミ	横ミ	口～胴一部	山形突起,凹点1
418		45区	45-05号住居	浅	A1	—	—	3.9+	—	石英等	淡褐色	横又は縦ミ	横ミ	口～剄一部	山形突起・剄部内面が黒変
419		45区	45-05号住居	深	A1	—	—	7.6+	—	砂粒	暗褐色	横ミ	横ミ	口～剄一部	
420		45区	45-05号住居	深	A1	—	—	4.6+	—	石英等	暗褐色	横ミ	横ミ	口～剄一部	剄部外面に一部煤付着
421		45区	45-05号住居	深	A2	—	—	5.7+	—	石英・角閃石等	淡褐色	横ミ	横又は斜ミ	口～剄一部	外面に煤付着
425		45区	45-09号住居	深	A1	38.0	—	13.2+	—	石英・角閃石等	淡褐色	横又は斜ミ	横ナ	口1/2・剄1/3	口縁付近が一部黒変,器面やや風化
426		45区	45-13号住居	浅	C	—	—	3.3+	—	砂粒	淡褐色	横ミ	斜ミ	口～胴一部	外面に接合痕を残し、それに沿って鋸歯文あり
427		45区	45-13号住居	浅	A2	—	—	7.7+	—	砂粒	淡褐色	横ミ	横ミ	口～胴一部	口縁付近が皿変
428		45区	45-13号住居	浅	A2	—	—	11.5+	—	石英・角閃石等	黄褐色	斜ミ	横へ	口～肩一部	外面(肩部付近)に一部煤付着
429		45区	45-13号住居	鉢	A	—	—	9.5+	—	石英等	淡褐色	横ミ	横ミ	口～胴一部	胴部内面に一部煤付着
430		45区	45-13号住居	深	不明	—	—	3.6+	7.2	砂粒	淡褐色	斜ミ	ナ	胴一部・底	内面に煤付着
442		46区	46-02号住居	浅	A1	—	—	5.7+	—	石英・角閃石等	淡褐色	横ミ	横ミ	口～剄一部	山形突起,凹点1
443		46区	46-02号住居	浅	不明	—	—	2.5+	3.6	角閃石等	明褐色	縦ミ	ミ	胴一部・底	
444		46区	46-02号住居	深	A2	(29.0)	(29.2)	16.5+	—	砂粒	暗赤褐色	横ミ	横ミ	口～剄1/5・胴一部	口縁と胴部の外面が黒変
445		46区	46-02号住居	深	A1	—	—	14.3+	—	砂粒	明褐色	横ミ	横ミ	口～剄一部	
446		46区	46-02号住居	深	A1	(22.4)	—	10.3+	—	砂粒	黄褐色	横ミ	横ミ	口～剄1/4	口縁外面の一部が黒変
447		46区	46-02号住居	深	不明	—	—	3.1+	6.8	石英・角閃石等	明褐色	縦ミ	横ミ	胴一部・底	胴部外面に煤付着
453		46区	46-03号住居	浅	A1	—	—	4.8+	—	石英等	黒褐色	横ミ	横ミ	口～胴一部	リボン状突起
454		46区	46-03号住居	深	不明	—	—	11.5+	5.9	砂粒	明褐色	縦又は横ミ	斜ミ	胴一部・底	胴部外面が一部黒変
459		46区	46-04号住居	浅	A1	—	—	4.2+	—	砂粒	暗褐色	横ミ	横ミ	口～胴一部	胴部に煤付着,外面やや風化
460		46区	46-04号住居	深	A1	—	—	9.3+	—	石英・角閃石等	黒褐色	横ミ	横ミ	口～剄一部	
461		46区	46-04号住居	深	A2	—	—	7.3+	—	石英・角閃石等	黄褐色	ナ	ナ	口～剄一部	胎土に黒曜石混入か

462		46区	46-04号住居	深	不明	—	—	2.7+	(7.9)	砂粒	赤褐色	ナ	ミ	胴一部・底1/2	胴部外面の一部に煤付着
468		46区	46-06号住居	浅	C	—	—	6.2+	—	石英・長石等	黄褐色	ナ	へ	口～胴一部	
473		46区	46-07号住居	浅	A1	—	—	3.2+	—	砂粒	暗褐色	横ミ	横ミ	口～肩一部	
474		46区	46-07号住居	浅	C	—	—	4.1+	—	砂粒	淡褐色	へ	斜ミ	口～胴一部	外面の一部が黒変
475		46区	46-07号住居	深	不明	—	—	3.6+	6.5	砂粒	暗黄褐色	斜ミ	不ミ	胴一部・底	底部から胴部にかけて黒変
479		46区	46-08号住居	浅	A1	(33.2)	—	3.4+	—	石英・角閃石等	暗褐色	横ミ	横ミ	口～剝一部	山形突起,凹点1
480		46区	46-08号住居	鉢	B	(15.0)	(14.8)	10.1+	—	石英・角閃石等	黄褐色	縦又は横ミ	横ミ	口～剝1/4・胴一部	
481		46区	46-08号住居	深	不明	—	—	2.7+	6.1	角閃石等	淡褐色	縦又は斜へ	ナ	胴一部・底	
482		46区	46-08号住居	深	A1	(42.8)	—	15.2+	—	砂粒	明褐色	横ミ	ナ	口1/5・剝一部	口縁一部黒変
490		46区	46-09号住居	浅	C	(13.0)	—	5.2+	—	石英・角閃石等	暗褐色	横ミ	横ミ又は斜ミ	口～胴1/4	外面に煤付着
491		46区	46-09号住居	浅	A1	(32.8)	—	2.8+	—	石英・長石等	黄褐色	横ミ	横ミ	口～剝1/4	山形突起か,凹点1以上
492		46区	46-09号住居	浅	A1	—	—	8.1+	—	石英・角閃石等	褐色	横ミ	横ミ	口～剝一部	山形突起,凹点1以上
493		46区	46-09号住居	浅	A1	—	—	7.2+	—	石英等	淡褐色	横ミ	横ミ	口～胴一部	外面に煤付着
494		46区	46-09号住居	鉢	B	(22.8)	—	5.9+	—	石英・長石・角閃石等	暗褐色	横ミ	横ミ	口～剝1/3	頸部外面に穿孔しようとした痕跡有
495		46区	46-09号住居	深	不明	—	—	4.5+	5.8	砂粒	黄褐色	横ミ	ミ	胴一部・底	外面に煤付着
496		46区	46-09号住居	深	A1	—	—	14.4+	—	角閃石・雲母等	暗褐色	横ミ	横又は斜ミ	口～肩一部	外面に煤付着
502		46区	46-10号住居	浅	A1	—	—	7.4+	—	砂粒	暗褐色	横又は斜ミ	横ミ	口～胴一部	山形突起,凹点2
503		46区	46-10号住居	浅	A1	22.4	(19.9)	12.2+	—	石英・角閃石・雲母等	褐色	横又は斜ミ	横又は斜ミ	口～肩大半・胴1/2	山形突起,凹点1
504		46区	46-10号住居	鉢	B	(14.2)	(12.9)	5.6+	—	石英・雲母等	暗褐色	横ミ	横ミ	口～肩1/4・胴一部	
505		46区	46-10号住居	深	C	—	—	7.6+	—	石英・角閃石等	淡黄褐色	横ミ	横ミ	口～胴一部	
506		46区	46-10号住居	深	不明	—	—	5.7+	6.0	石英・角閃石等	暗黄褐色	縦又は斜ミ	不ミ	胴一部・底1/3	
507		46区	46-10号住居	深	A2	(40.0)	—	10.7+	—	砂粒	暗褐色	横又は縦ミ	横又は斜ミ	口～剝1/4	
517		46区	46-12号住居	浅	A2	—	—	4.5+	—	雲母等	暗褐色	横ミ	横又は斜ミ	口～胴一部	
518		46区	46-12号住居	浅	A1	(31.7)	—	2.5+	—	角閃石等	黄褐色	横ミ	横ミ	口～剝一部	山形突起,凹点2
519		46区	46-12号住居	浅	A2	(28.1)	(25.7)	7.4+	—	石英・雲母等	淡褐色	横ミ	横ミ	口1/4・剝～胴一部	
520		46区	46-12号住居	鉢	A	(20.8)	(21.8)	10.7+	—	石英・角閃石等	明褐色	横ミ	横ミ	口一部・剝～胴1/4	器面一部黒変
521		46区	46-12号住居	深	不明	—	—	3.2+	7.4	石英・角閃石・雲母等	明褐色	斜へ	ナ	胴一部・底	外面の一部が赤変
522		46区	46-12号住居	注	—	—	—	4.6+	—	石英・角閃石・長石等	褐色	ミ	不明	注口	上部・下部に沈線
528		46区	46-13号住居	浅	A2	—	—	5.1+	—	角閃石等	暗褐色	横ミ	横ミ	口～胴一部	外面に煤付着
529		46区	46-13号住居	深	不明	—	—	6.8+	7.1	石英・雲母等	黄褐色	ミ	ナ	胴一部・底	外面に煤付着
534		46区	46-18号住居	浅	A1	—	—	6.1+	—	石英・雲母等	淡褐色	横ミ	横又は斜ミ	口～胴一部	山形突起,凹点2
535		46区	46-18号住居	浅	B	(15.2)	(13.9)	5.6+	—	石英・角閃石等	暗褐色	横又は斜ミ	横ミ	口1/4・胴一部	眉部に沈線一条巡る
536		46区	46-18号住居	浅	A1	(15.6)	(16.5)	8.8+	—	石英・角閃石等	褐色	横又は斜ミ	横又は斜ミ	口～胴1/4	山形突起,凹点2
537		46区	46-18号住居	深	A1	(38.0)	(42.0)	22.4+	—	砂粒	暗褐色	横又は斜ミ	横ミ	口一部・剝～胴1/4	
538		46区	46-18号住居	深	不明	—	—	3.6+	8.1	砂粒	淡黄褐色	横ナ	への後ミ	胴一部・底	底部外面に刺突文状の凹み
545		46区	46-19号住居	浅	A1	(21.4)	(21.6)	8.1+	—	砂粒	黒褐色	横ミ	横ミ	全体の1/2(底以外)	山形突起,凹点3(口縁2,肩1)
546		46区	46-19号住居	浅	C	12.1	—	4.0	—	石英・角閃石・雲母等	明褐色	横又は斜ミ	横又は斜ミ	全体の大半	
547		46区	46-19号住居	鉢	B	20.0	21.8	16.0+	—	砂粒	明褐色	横又は斜ミ	横ミ	口1/2・剝～胴1/3	
548		46区	46-19号住居	鉢	B	(17.7)	(18.2)	14.3+	—	石英・角閃石等	暗褐色	横ミ	横ミ	口1/4・剝～胴1/4	外面に煤付着
549		46区	46-19号住居	深	不明	—	—	5.6+	7.3	石英・角閃石等	淡褐色	横又は斜ミ	横ミ	胴一部・底	
550		46区	46-19号住居	深	A1	(29.2)	—	18.5+	—	石英・角閃石等	淡褐色	横又は斜ミ	横ミ	口1/5・剝1/4	外面に煤付着
551		46区	46-19号住居	深	A1	(34.1)	(42.8)	23.9+	—	砂粒	淡褐色	縦ミ	横ミ	口1/3・剝1/4・胴一部	
555		46区	46-19号住居	深	A1	38.9	46.6	51.0+	8.0	石英・角閃石等	明褐色	横又は斜ミ	横ミ	全体の4/5	胴部以上と底部は同一個体か
558		46区	46-20号住居	浅	A1	(24.0)	(20.7)	7.7+	—	砂粒	暗褐色	横ミ	横ミ	全体の1/4(底以外)	山形突起,凹点2
559		46区	46-20号住居	鉢	不明	—	—	10.1+	5.9	石英・角閃石等	淡黄褐色	縦ミ	横ミ	胴一部・底	鉢か
560		46区	46-20号住居	深	A1	(27.6)	—	13.3+	—	石英・角閃石等	淡褐色	ミ	横又は斜ミ	口～剝1/4	口縁内面が一部黒変,器面やや風化
564		47区	47-01号住居	深	A1	—	—	4.4+	—	石英・長石・角閃石等	褐色	横ナ	横ミ	口～胴一部	口縁に一部煤付着
565		47区	47-01号住居	深	不明	—	—	2.5+	7.6	石英・角閃石等	黄褐色	不ミ	横ミ	胴一部・底	底部外面が一部黒変
567		47区	47-02号住居	深	不明	—	—	7.5+	8.0	石英・角閃石・雲母等	明褐色	条	斜ナ	胴一部・底	
570		49区	49-67号住居	浅	A2	(27.0)	(26.4)	7.4+	—	砂粒	暗黄褐色	横ミ	横ミ	口～剝1/5・胴一部	剝部外面に一部煤付着
571		49区	49-67号住居	鉢	A1	(17.4)	—	8.6+	—	角閃石等	暗黄褐色	横ミ	横ミ	口1/2・胴一部	
572		49区	49-67号住居	深	A1	—	—	15.5+	—	石英・角閃石等	暗褐色	ミ	ナ	口～胴一部	口縁が一部黒変
573		49区	49-67号住居	深	A2	(30.2)	(31.7)	15.3+	—	石英等	淡褐色	横ミ	横ミ	口1/5・剝～胴一部	口縁～胴部の外面に一部煤付着
581		49区	49-68号住居	浅	A2	—	—	6.8+	—	石英等	暗黄褐色	横ミ	横ミ	口～剝1/5・胴一部	
582		49区	49-68号住居	鉢	B	—	—	8.9+	—	石英・角閃石等	暗黄褐色	横ミ	横ミ	口～胴一部	口縁～胴部にかけて一部煤付着
583		49区	49-68号住居	深	B	—	—	8.0+	—	石英・角閃石等	淡褐色	横ミ	横ミ	口1/6	口縁先端部に一部煤付着,口縁内面に黒変
584		49区	49-68号住居	深	A1	—	—	10.8+	—	石英・雲母等	黄褐色	横ミ	横ミ	口～胴一部	口縁帯外面が一部黒変
585		49区	49-68号住居	深	不明	—	—	2.2+	6.6	石英等	明褐色	へ	ナ	胴一部・底	胴部の一部外面に煤付着
595		49区	49-69号住居	浅	A1	—	—	4.6+	—	石英・角閃石等	暗褐色	横ミ	横ミ	口～胴一部	山形突起,凹点1,一部スス付着
596		49区	49-69号住居	深	A1	—	—	10.2+	—	砂粒	暗褐色	ナ	へ	口～胴一部	
597		49区	49-69号住居	深	A1	—	—	7.8+	—	石英・角閃石等	灰褐色	横又は縦ミ	横ミ	口～剝一部	
598		49区	49-69号住居	深	不明	—	—	2.9+	7.1	石英等	黄褐色	縦ミ	不ナ	胴一部・底一部	底部に施文具らしい圧痕
607		49区	49-77号住居	浅	A1	—	—	3.8+	—	石英等	褐色	横ミ	横ミ	口～剝一部	山形突起か,凹点2
608		49区	49-77号住居	浅	A2	—	—	4.3+	—	石英・角閃石等	褐色	横ミ	横ミ	口～胴一部	口縁外面に一部煤付着
609		49区	49-77号住居	深	A1	—	—	8.8+	—	砂粒	淡褐色	横又は縦ミ	横ミ	口～剝一部	
610		49区	49-77号住居	深	A2	—	—	5.9+	—	石英・雲母等	褐色	横又は縦ミ	横ミ	口～剝一部	
611		49区	49-77号住居	深	不明	—	—	4.4+	10.0	石英・角閃石等	灰黄褐色	縦又は斜ミ	斜ミ	底1/3・胴1/3	
623		49区	49-82号住居	浅	A2	—	—	4.6+	—	石英・雲母等	黄褐色	横ミ	横ミ	口～胴一部	
624		49区	49-82号住居	浅	A2	—	—	3.9+	—	石英・雲母等	灰褐色	横ミ	横又は斜ミ	口～剝一部	山形突起かリボン状突起
625		49区	49-82号住居	深	A1	—	—	4.5+	—	砂粒	黄褐色	横又は斜ミ	横ミ	口～剝一部	
626		49区	49-82号住居	深	不明	—	—	4.2+	(8.3)	砂粒	灰黄褐色	縦ミ	不ミ	胴一部・底1/2	底部内面に一部煤付着
	埋設土器															
1		10区	10-01号埋設	浅	A2	21.0	20.9	8.6	—	石英等	淡褐色	ミ	横ミ	口・胴の大半	口縁・肩部に凹点,山形突起,合口(上)
2		10区	10-01号埋設	深	A2	(27.1)	33.6	40.3	6.7	角閃石等	淡褐色	横ナ	根又は縦ミ	ほぼ完形	頸部に接合痕,合口(下)
3		39区	39-09号埋設	深	A1	(39.2)	—	20.6	—	石英・角閃石等	淡黄褐色	横ミ	横ミ	口～頸2/3	外面部分的に黒変
4		39区	39-12号埋設	浅	A1	(34.8)	(31.6)	11.2+	—	砂粒	黒褐色	縦又は横ミ	縦又は横ミ	全体の約1/3	合口(上)
5		39区	39-12号埋設	深	A1	38.0	40.0	52.4	11.9	石英等	明褐色	横ミ	横又は斜ミ	ほぼ完形	沈線条痕化,歪み有り,合口(下)
6		40区	40-03号埋設	浅	A1	15.9	13.7	6.4	2.2	石英等	黒褐色	横ミ	横ミ	完形	口縁・胴部に凹点,山形突起,深鉢内に埋納
7		40区	40-03号埋設	深	A1	41.7	43.4	53.5	5.7	石英・長石・雲母等	淡褐色	横ミ	ナ	口1/2・その他大半	口縁に一条沈線か,外面に煤
8		41区	41-02号埋設	深	B	39.2	40.9	50.2	7.6	石英・角閃石等	黒褐色	横ナ	ナ	口2/3・その他大半	胴部に煤
9		41区	41-05号埋設	深	A1	(38.7)	(42.7)	49.8	8.6	長石・角閃石等	黒褐色	横ミ	横ミ	口1/2・その他大半	胴部下半内面黒変
10		41区	41-06号埋設	深	A1	38.8	44.1	49.3	7.5	石英・角閃石等	明褐色	横ミ又はへ	横ミ	ほぼ完形	胴部下半内面に煤
11		42区	42-01号埋設	浅	A1	33.2	31.7	15.2+	—	砂粒	褐色	横又は斜ミ	横ミ	口5/6・胴1/2	口縁に凹点,山形突起,口縁・頸部に煤,合口(上)
12		42区	42-01号埋設	深	A1	29.6	30.6	33.8	7.8	砂粒	褐色	横又は縦ミ	横又は縦ミ	ほぼ完形	胴部黒変,内面接合痕,胴部に煤,合口(下)
13		42区	42-02号埋設	浅	A1	28.0	(30.8)	19.7+	—	石英・角閃石等	暗褐色	横又は斜ミ	ミ	口5/6・胴1/2	山形突起
14		42区	42-03号埋設	深	A1	37.3	—	19.5+	—	石英・長石等	明褐色	斜ミ	横ミ	口大半・剝大半	頸部に補修孔
15		42区	42-04号埋設	深	不明	—	(50.4)	20.5	—	長石・角閃石等	暗褐色	横ミ	横ミ	剝大半・肩一部	
16		42区	42-16号埋設	深	A1	42.2	—	23.5+	—	石英・長石・角閃石等	暗黄褐色	横又は斜ミ	横ミ	口～頸2/3	
17		42区	42-17号埋設	深	A1	36.3	(42.3)	24.8+	—	石英・角閃石等	褐色	条	横ミ	肩以上・胴一部	口縁の条痕は沈線か
18		42区	42-18号埋設	深	A1	38.0	—	12.3+	—	石英等	明褐色	横又は縦ミ	横ミ	口～頸5/6	外面部分的に黒変
19		42区	42-19号埋設	深	A1	39.0	44.1	27.2+	—	石英・角閃石・雲母等	明褐色	横ミ	横ミ	肩以上・胴一部	
20		42区	42-20号埋設	浅	A1	33.7	33.5	9.4+	—	石英・角閃石等	明褐色	横ミ	横ミ	肩以上・胴一部	口縁に凹点,山形突起

21		42区	42-21号埋設	深	A1	37.2	41.8	48.2	8.0	石英・角閃石・雲母等	明褐色	横又は縦ミ	横ミ又はナ	頸以上4/5・胴2/3・底	底部内面は黒変,頸部・胴部外面に煤
22		42区	42-22号埋設	深	A1	(34.1)	33.8	27.4+	(7.8)	石英・角閃石・長石等	淡褐色	横又は縦ミ	横又は縦ミ	口一部・胴・底1/2	胴部下半は欠損だが同一個体,頸部外面に煤
23		42区	42-26号埋設	深	不明	—	42.7	54.2+	(9.3)	石英・長石等	暗褐色	へ	ナ	剄1/6・胴4/5・底一部	頸部内面に接合痕,胴部外面に煤
24		42区	42-29号埋設	深	A1	45.3	44.7	53.2	11.2	石英・長石等	明褐色	横ミ	ミ	口2/3・その他大半	底部中央部欠損
25		42区	42-33号埋設	浅	C	50.0	—	19.0	—	砂粒	暗褐色	横又は斜ミ	ミ	全体の3/4	口縁に煤,底部赤変,深鉢と対
26		42区	42-33号埋設	深	B	36.5	38.5	39.9	5.4	石英・角閃石等	黄褐色	ミ	横ミ	ほぼ完形	口縁端部は横ナ,頸部部分的に黒変,浅鉢と対
27		42区	42-34号埋設	浅	A1	28.2	29.5	21.7+	5.0	石英・雲母・角閃石等	暗褐色	ミ	ミ	口1/2・その他1/3	口縁に凹点,山形突起か,底部赤変
28		42区	42-43号埋設	深	A1	26.7	29.2	28.8+	—	石英等	明褐色	横ナ	ナ	口・頸・胴4/5	内面に煤,内面指頭圧痕,器面黒変
29		45区	45-13号埋設	浅	A2	(45.8)	44.7	18.3	—	石英・長石・角閃石等	黒褐色	横ミ	横ミ	口1/2・胴2/3	合口(上)
30		45区	45-13号埋設	深	A1	35.0	34.1	37.4	—	石英等	暗黄褐色	ミ	横ミ	胴以上・底の一部	内面に煤,合口(下)
31		45区	45-14号埋設	深	A1	41.7	42.4	53.3	9.0	石英・角閃石等	淡褐色	横ミ	横又は斜ミ	全体の大半	胴部外面はｽｶﾞｷの前に条痕か,底部内面は黒変
32		46区	46-03号埋設	深	不明	—	—	—	—	石英・長石・角閃石等	暗褐色	縦ミ	横ミ	剄一部	小片のため実測不可、遺物Noは32(図面なし)
33		46区	46-04号埋設	深	A1	(36.6)	(44.3)	58.5	—	石英・長石・角閃石等	暗黄褐色	横ミ	横ミ	口一部・胴大半	頸部に補修孔
34		46区	46-05号埋設	浅	A1	37.0	31.2	12.0	—	石英等	明淡褐色	横又は斜ミ	横又は斜ミ	口1/4・胴大半	山形突起,合口(上)
35		46区	46-05号埋設	深	A1	42.1	42.3	50.2	6.4	石英・角閃石等	黒褐色	横又は縦ミ	ミ	口1/4・胴大半	合口(下)
36		46区	46-06号埋設	深	A1	(26.0)	—	13.4+	—	石英・角閃石等	黄褐色	横又は斜ミ	横ミ	口～剄1/2	外面やや風化,外面部分的に黒変
37		49区	49-52号埋設	深	A1	45.7	45.0	56.4	7.6	石英・角閃石等	淡褐色	横又は縦ミ	横ミ	剄以上,胴3/4	口縁内面に粘土付着
38		49区	49-84号埋設	深	A1	41.0	41.0	24.3+	5.0	石英・長石・角閃石等	暗褐色	横又は斜ミ	横ミ	口1/2・剄1/2・底	底部内面は黒変,内面風化

その他の遺構

2		42区	42-07号土壙	浅	C	—	—	12.8+	—	砂粒	淡黄褐色	条	横又は斜ミ	口～胴一部	内面が一部黒変
3		42区	42-07号土壙	浅	B	(13.6)	12.9	8.8	—	砂粒	黄褐色	横又は斜ミ	横又は斜ミ	口～剄1/6・胴・底	
4		42区	42-07号土壙	鉢	A	(17.4)	(19.0)	11.1+	—	石英等	暗赤褐色	横又は斜ミ	横ミ	口～剄1/3・胴一部	
5		42区	42-07号土壙	鉢	A	(18.3)	(17.6)	13.6+	—	角閃石等	褐色	ミ	横ミ	口1/3・剄～胴一部	
6		42区	42-07号土壙	深	A1	(24.2)	—	11.6+	—	石英・角閃石等	褐色	横又は縦ミ	横ミ	口～剄1/4	
7		42区	42-07号土壙	深	A1	—	—	11.9+	—	石英等	橙色	横ミ	横ミ	口～胴一部	外面に煤付着
8		42区	42-07号土壙	深	A2	—	—	10.3+	—	石英・角閃石等	明褐色	横ミ	横ミ	口～剄一部	
9		42区	42-07号土壙	深	不明	—	—	2.1+	6.8	砂粒	黄褐色	縦又は斜ミ	横ミ	胴一部・底	
10		42区	42-07号土壙	深	A1	(27.4)	—	14.1+	—	石英・角閃石等	淡褐色	横又は斜ミ	横ミ	口～剄一部	
11		42区	42-07号土壙	深	A1	(25.4)	—	11.9+	—	砂粒	黄褐色	横又は斜ミ	横又は斜ミ	口～剄1/3	口縁～頸部の一部が黒変
12		42区	42-07号土壙	深	C	31.0	33.4	18.3+	—	長石等	暗褐色	横ミ	横ミ	口～胴1/2	内外面に煤付着
13		42区	42-07号土壙	深	A1	42.5	45.8	59.0	8.4	石英・長石・角閃石等	淡褐色	ミ	横ミ	ほぼ完形	

包含層遺物

1		39区		深	不明	—	—	6.4+	—	石英・角閃石・雲母等	黒褐色	横又は斜ナ	横ナ	口～剄一部	口縁に斜線文
2		45区		深	不明	—	—	2.2+	—	石英・角閃石等	淡黄褐色	横ナ	横ミ	胴一部	磨消縄文・刺突文
3		38区s		深	不明	—	—	7.3+	—	石英・角閃石・雲母等	淡褐色	横ミ	横ミ	口～剄一部	口縁に磨消縄文
4		15区		浅	不明	—	—	5.4+	—	石英・角閃石・雲母等	淡褐色	横ミ	横ミ	剄～胴一部	胴部に羽状文
5		15区		深	不明	—	—	2.4+	—	石英・角閃石等	黄褐色	横ミ	横ミ	胴一部	胴部にX状文
6		15区		浅	不明	—	—	3.5+	—	石英・角閃石等	橙褐色	横ミ	横ミ	口一部	口縁に扇状文
7		15区		深	不明	—	—	4.3+	—	石英・長石・角閃石等	淡褐色	横ミ	横ミ	胴一部	五条凹線
8		39区		深	不明	—	—	3.7+	—	石英・角閃石・雲母等	黒褐色	横ミ	横ミ	胴一部	四条凹線の間に羽状文
9		35区		浅	D1	—	—	6.6+	—	石英・角閃石・雲母等	淡褐色	横ミ	横ミ	口一部	口縁に三条凹線,外面に煤付着
10		15区		深	A1	—	—	6.5+	—	石英等	暗褐色	横又は縦ミ	横ミ	口～剄一部	口縁に三条凹線
11		30区		鉢	A	(21.6)	(22.4)	14.0+	—	砂粒	黄褐色	横ミ	ミ	全体の1/4(底除く)	山形突起,口縁と肩部に凹点
12		15区		深	A1	—	—	9.2+	—	石英・長石等	淡褐色	横ミ	横ミ	口～剄一部	山形突起,口縁に凹点
13		38区s		鉢	B	(17.2)	(13.5)	13.9	(4.0)	石英・角閃石・雲母等	茶褐色	横又は斜ミ	横又は斜ミ	全体の1/3	口縁から肩部は黒変
14		15区		深	不明	—	—	2.9+	—	石英・角閃石・雲母等	淡褐色	横ミ	横ミ	口一部	山形突起,口縁に凹点
15		38区s		深	A1	(26.4)	(30.2)	12.9+	—	石英・角閃石等	黄褐色	横ミ	横ミ	口1/5・剄～肩4/5	口縁に三条凹線・凹点
16		40区		深	A1	(24.6)	(31.0)	26.0+	—	石英・角閃石等	黒褐色	横又は斜ミ	横ミ	口一部・剄～胴1/3	
17		30区		浅	A1	(18.5)	(17.3)	7.8+	—	砂粒	明褐色	横ミ	横ミ	全体の1/4(底除く)	リボン状突起,胴部が一部黒変
18		30区		浅	B	—	—	6.4+	—	角閃石等	黄褐色	ミ	横ミ	口～胴一部	鉢か
19		47区		浅	A2	24.9	24.7	10.4	—	石英・角閃石・雲母等	黄褐色	横ミ	横又は斜ミ	全体の2/3	口縁に凹点,底部外面が赤変
20		30区		浅	B	(16.4)	(15.0)	4.6+	—	石英・角閃石・雲母等	黄褐色	ナ	横ナ	全体の1/4(底除く)	
21		30区		浅	A1	(45.8)	(41.2)	16.1	—	長石・角閃石等	暗褐色	横ミ	横ミ	全体の1/4	
22		30区		浅	A1	40.1	35.9	7.5+	—	砂粒	褐色	横ミ	横ミ	口3/5・胴一部	口縁に凹点,器面に煤付着
23		36区		鉢	B	(18.9)	(17.1)	16.7	6.8	砂粒	赤褐色	横又は斜ミ	横ミ	口～胴1/2・底	外面が赤変,煤付着
24		42区		鉢	A	(23.0)	(22.2)	12.0+	—	石英・角閃石等	褐色	横又は斜ミ	横ミ	全体の1/4(底除く)	器面風化,部分的に煤付着
25		38区n		深	A1	(32.4)	(35.0)	17.2+	—	石英・角閃石等	明褐色	横又は斜ミ	横又は斜ミ	口2/3・剄1/3	
26		42区		深	A1	(36.4)	—	19.5+	—	石英・角閃石等	明褐色	横又は斜ミ	横又は斜ミ	口一部・剄1/4	
27		46区		深	A1	(42.4)	—	17.5+	—	石英・角閃石・雲母等	明褐色	横又は斜ミ	ナ	口1/2・剄一部	口縁の沈線は施文後横ナデのため暗文化
28		38区n		深	A1	(42.2)	—	26.1+	—	石英・角閃石等	淡褐色	横ミ	横ミ	口～剄2/3	
29		30区		深	A2	27.0	28.8	29.8+	—	砂粒	黄褐色	斜ミ	斜ミ	全体の1/2(底除く)	
30		30区		深	A2	29.0	25.7	25.3+	—	石英・角閃石等	橙色	横又は斜ミ	横又は斜ミ	口2/3・剄～胴大半	外面煤付着
31		39区		浅	D2	—	—	6.7+	—	石英・雲母等	褐色	横ミ	横ミ	口～胴一部	波状口縁,山形文
32		39区		浅	D2	—	—	4.0+	—	砂粒	褐色	横ミ	横ミ	口～剄一部	波状口縁,山形文
33		39区		浅	C	—	—	5.5+	—	石英・雲母等	褐色	横ミ	横ミ	口～胴一部	反転山形文
34		39区		浅	C	—	—	6.6+	—	石英・雲母等	黒褐色	横ミ	横ミ	口～胴一部	反転山形文
35		39区		浅	C	—	—	4.4+	—	砂粒	褐色	横ミ	横ミ	口～胴一部	反転山形文か
36		39区		鉢	C	16.1	—	10.8	8.0	石英・角閃石・雲母等	淡褐色	ナ	ナ	ほぼ完形	器面やや赤変
37		30区		深	A1	34.7	—	6.2+	—	砂粒	淡褐色	横ミ	横ミ	口2/3・剄一部	口縁に煤付着
38		36区		深	不明	—	—	20.0+	(7.5)	石英・雲母等	黄褐色	斜へ	横へ	胴～底1/2	
39		38区s		深	A2	20.8	(19.0)	21.2+	—	石英・長石・角閃石等	黄褐色	ナ	ナ	口2・3・胴1/2	
40		47区		深	不明	—	—	6.3+	7.2	石英・角閃石・雲母等	黄褐色	縦又は斜ミ	横又は斜ミ	胴一部・底	底部外面やや赤変
41		15区		注	—	—	—	4.9+	—	砂粒	暗褐色	横ミ	横ミ	口一部	壺か,X状文
42		15区		注	—	—	—	3.5+	—	石英・角閃石等	淡褐色	横ミ	横ミ	口一部	壺か
43		15区		注	—	—	—	7.0+	—	石英・角閃石等	黄褐色	横ミ	ナ	口～剄一部	壺か
44		41区		注	—	—	—	—	—	石英・長石・雲母等	橙色	ミ	不明	注口	
45		42区		注	—	(11.0)	(17.4)	10.1+	—	砂粒	黄褐色	横ミ	横ミ	口1/2・胴1/3	注口部欠損
46		30区		浅	C	9.2	—	4.0	—	長石・角閃石等	淡褐色	ミ	ミ	完形	
47		47区		浅	C	—	—	5.5+	—	石英・角閃石等	暗褐色	横又は斜ミ	横ミ	口～胴一部	口縁に突起らしきものか
48		45区		小	—	5.4	—	1.3	2.2	石英・角閃石等	褐灰色	ナ	ナ	全体の1/3	底部が若干上げ底
49		30区		浅	A2	—	—	2.9+	—	石英・角閃石等	黒褐色	横ミ	横ミ	口～胴一部	
50		45区		不	—	—	—	2.6+	—	石英・角閃石等	黄褐色	横ナ	横ナ	口一部	浅鉢か,口縁端部に綾杉文
51		53区		深	不明	—	—	2.3	7.9	石英・長石・角閃石等	黄褐色	ナ	ナ	底	土器作成時の葉の圧痕が残る
52		30区		浅	D2	(21.4)	23.5	9.3	—	石英・角閃石等	明褐色	横又は斜ミ	横又は斜ミ	口1/2・胴～底2/3	山形突起,突起部に沈線
53		30区		深	B	(21.6)	(20.9)	(23.2)	8.2	石英・長石等	暗黄褐色	横ナ又は条	横ナ又は横ミ	全体の1/2	波状口縁,山形文
54		39区		鉢	A1	30.8	(25.7)	16.5+	—	角閃石・雲母等	淡褐色	横又は斜ミ	横又は斜ミ	口3/4・剄～胴1/4	波状口縁,山形文
55		49区		深	不明	—	(36.2)	17.0+	—	石英・角閃石・雲母等	淡褐色	横又は斜ミ	横へ	剄1/2・胴2/3	
56		5区		深	C	(48.6)	(51.2)	29.4+	—	石英・長石・角閃石等	暗褐色	横ナ又は条	横ナ	口～胴1/4	胴部に沈線二条,口縁に指頭圧痕

＊ ミガキ=ミ,横ミガキ=横ミ、縦ミガキ=縦ミ,斜めミガキ=斜ミ、不定方向のミガキ=不ミ

ナデ=ナ、横ナデ=横ナ、ヘラナデ=ヘ、横ヘラナデ=横ヘ、縦ヘラナデ=縦ヘ、斜めヘラナデ=斜ヘ、貝殻条痕=条

口縁部=口、頸部=頸、肩部=肩、胴部=胴、底部=底

収蔵Noは本県の収蔵システムに対応したナンバーである。

数値の後の「+」は「…以上」という意味である。またカッコ内の数値は復元値である。

第10表　石器観察表

No.	収蔵No.	調査区名	遺構名（報告書用）	器種名	分類	石質	計測値 長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	備考
1		15区	15-01号住居	打製石斧	不明	緑泥片岩	4.1+	3.3	0.5	8.0+	刃部欠損
2		15区	15-01号住居	石庖丁形石器		粘板岩	4.3	10.9	0.9	55.6	
3		15区	15-01号住居	二次加工のある剥片		安山岩（サ）	4.1	2.3	1.0	10.1	
4		15区	15-01号住居	二次加工のある剥片		安山岩（サ）	3.0	4.7	1.2	20.6	
5		15区	15-01号住居	敲石・磨石		安山岩	10.2+	5.1	5.1	405.6+	基部は欠損又は敲打により潰れる
6		15区	15-01号住居	敲石・磨石		安山岩	12.4	10.1	3.4	687.4	
7		15区	15-01号住居	敲石・磨石		安山岩	10.3	6.1	3.0	326.9	
8		15区	15-01号住居	砥石		砂岩	9.5+	7.0	4.9	161.6+	石皿としても使用,両端を欠損
9		15区	15-01号住居	台石		砂岩	10.3+	19.4	6.3	2018.0+	欠損品
10		15区	15-01号住居	台石		砂岩	36.5	29.3	9.4	15000.0	
22		15区	15-04号住居	石鏃	Ⅱb	安山岩（サ）	2.2	1.6	0.4	0.8	無茎,凹基
23		15区	15-04号住居	石鏃	Ⅱc	チャート	1.5	1.5	0.3	0.1	無茎,凹基
24		15区	15-04号住居	二次加工のある剥片		安山岩（サ）	2.5	1.8	0.4	1.0	石鏃の未製品か
25		15区	15-04号住居	二次加工のある剥片		安山岩（サ）	4.6	7.7	1.3	41.0	石匙の機能を有する
26		15区	15-04号住居	打製石斧	Ⅰ	安山岩	12.8+	7.5	2.7	281.9+	基部欠損,一部礫面残す
27		15区	15-04号住居	打製石斧	Ⅳ	安山岩	7.9	7.9	2.5	177.1	
28		15区	15-04号住居	打製石斧	Ⅳ	安山岩	8.1+	8.5	1.2	99.0+	一部欠損
29		15区	15-04号住居	磨製石斧	Ⅱ	頁岩か	8.7+	5.8	2.6	111.7+	刃部欠損
30		15区	15-04号住居	敲石・磨石		安山岩	12.7	6.9	3.4	482.0	両端に敲打痕
31		15区	15-04号住居	石皿		凝灰岩	19.5	13.1	6.1	1570.0	両側縁に敲打痕
38		15区	15-05号住居	石鏃	Ⅱb	安山岩（サ）	2.2+	1.5	0.3	0.7+	先端欠損,無茎,凹基
39		15区	15-05号住居	石鏃	Ⅱb	黒曜石（姫）	2.2+	1.8	0.5	1.2+	先端欠損,無茎,凹基
40		15区	15-05号住居	二次加工のある剥片		安山岩（サ）	4.3	2.6	1.3	13.7	側縁部に刃部
41		15区	15-05号住居	二次加工のある剥片		黒曜石（姫）	2.5	2.6	0.9	4.2	
42		15区	15-05号住居	石錘	Ⅲ	千枚岩	7.8	7.4	1.1	110.4	筋理明瞭
44		30区	30-02号住居	打製石斧	不明	安山岩	5.3+	4.7+	1.5	33.6+	基部端と刃部欠損
45		30区	30-02号住居	打製石斧	不明	安山岩	4.9+	4.8+	1.3	27.6+	基部欠損
46		30区	30-02号住居	二次加工のある剥片		安山岩（サ）	7.1	3.7	0.6	15.6	
47		30区	30-02号住居	敲石・磨石		安山岩	4.2	3.1	2.5	48.2	
48		30区	30-02号住居	敲石・磨石		砂岩	7.2+	8.2	7.9	565.9+	欠損後割れ面を使用
50		30区	30-03号住居	打製石斧	Ⅰ	安山岩	13.5	6.6	2.0	200.4	刃部と基部に擦痕
51		30区	30-03号住居	打製石斧	Ⅰ	安山岩（二）	13.9	8.0	1.9	274.0	刃部と基部に擦痕,二子石
52		30区	30-03号住居	磨製石斧	Ⅱ	蛇紋岩	7.6+	4.6	1.3	71.3+	基部端と刃部の一部欠損
53		30区	30-03号住居	磨製石斧	不明	粘板岩	4.7+	4.6+	0.8	18.0+	破片（表面に研磨痕）
54		30区	30-03号住居	敲石・磨石		安山岩	4.9	3.8	3.4	79.7	
55		30区	30-03号住居	敲石・磨石		凝灰岩	3.6	3.4	2.6	39.1	
56		30区	30-03号住居	石皿		安山岩	28.5	13.2	6.7	4137.0	
58		30区	30-03号住居	石皿		安山岩	32.5	26.7	18.2	24300.0	
61		30区	30-04号住居	石鏃	不明	安山岩（サ）	1.7	1.5	0.5	0.9	未製品
62		30区	30-04号住居	打製石斧	不明	安山岩（サ）	4.1+	4.8	1.2	22.3+	刃部欠損
63		30区	30-04号住居	敲石・磨石		安山岩	3.9	3.8	3.0	62.8	
65		31区	31-05号住居	打製石斧	不明	安山岩	5.7+	8.4	2.3	110.9+	刃部欠損
66		31区	31-05号住居	打製石斧	Ⅰ	安山岩	9.2+	7.9	1.4	129.7+	刃部欠損,製作途中で欠損か
71		36区	36-05号住居	打製石斧	Ⅰ	頁岩	16.6+	5.4	2.2	233.0+	基部欠損後再加工か
72		36区	36-05号住居	打製石斧	Ⅰ	安山岩	22.4+	6.2+	1.9	200.0+	基部と刃部の1/3欠損,刃部に擦痕
73		36区	36-05号住居	打製石斧	Ⅱ	安山岩	12.9	6.4	1.3	111.6	刃部一部欠損
74		36区	36-05号住居	打製石斧	Ⅴ	不明	11.3	6.2	1.9	141.0	
75		36区	36-05号住居	打製石斧	Ⅴ	安山岩	11.9	5.7	1.3	84.0	
76		36区	36-05号住居	打製石斧	不明	安山岩	6.5+	6.4	1.4	80.0+	基部欠損
77		36区	36-05号住居	打製石斧	Ⅵ	安山岩	12.5	8.0	1.9	225.0	
78		36区	36-05号住居	使用痕のある剥片		黒曜石	1.4	1.9	0.3	0.5	
79		36区	36-05号住居	礫器		安山岩	13.5	14.3	5.2	1319.0	
80		36区	36-05号住居	敲石・磨石		安山岩	8.2	5.5	2.3	167.0	側縁部に敲打痕
81		36区	36-05号住居	敲石・磨石		安山岩	14.9	11.0	6.5	1521.0	
82		36区	36-05号住居	砥石		砂岩	10.9	6.9	3.6	329.0	
83		36区	36-05号住居	台石		安山岩	35.5	14.9	10.5	6150.0	使用面に凹
86		38区n	38-01号住居	石鏃	Ⅱb	チャート	2.4	1.9	0.4	1.3	
87		38区n	38-01号住居	楔形石器		黒曜石	2.2	2.5	0.9	3.6	
88		38区n	38-01号住居	二次加工のある剥片		黒曜石	2.1	1.7	0.4	0.7	石鏃の未製品か,右側縁に調整
89		38区n	38-01号住居	二次加工のある剥片		安山岩	3.2	5.3	1.2	16.5	右側縁を欠損か
90		38区n	38-01号住居	砥石		砂岩	5.5+	5.8	3.6	97.4+	部分的に欠損
97		38区n	38-02号住居	石鏃	Ⅱa	チャート	1.6	1.4	0.5	0.7	主要剥離面残存
98		38区n	38-02号住居	使用痕のある剥片		黒曜石	2.7	2.1	0.5	2.7	一側縁を刃部として使用
99		38区n	38-02号住居	打製石斧	不明	安山岩	5.0+	7.7	1.1	61.0+	基部欠損,使用痕
100		38区n	38-02号住居	打製石斧	不明	安山岩	9.7+	9.7+	3.5	368.0+	側縁の一部以外欠損,器面に擦痕
101		38区n	38-02号住居	二次加工のある剥片		粘板岩	4.4	8.9	0.5	21.4	表面に擦痕
102		38区n	38-02号住居	磨製石斧	Ⅱ	蛇紋岩	4.4+	4.8+	0.6+	13.9+	刃部以外欠損,研磨痕
103		38区n	38-02号住居	磨製石斧	Ⅱ	粘板岩	8.9	3.7	1.3	59.1	基部一部欠損
104		38区n	38-02号住居	磨製石斧	Ⅱ	蛇紋岩	9.6	4.5	1.1	67.5	基部一部欠損,側縁に剥離面多く残る
105		38区n	38-02号住居	磨製石斧	Ⅱ	蛇紋岩	9.6+	5.2	0.9	68.5+	基部欠損,研磨痕
106		38区n	38-02号住居	敲石・磨石		凝灰岩	7.6	5.2	3.1	196.4	
107		38区n	38-02号住居	敲石・磨石		凝灰岩	8.0	6.2	3.3	155.1	
108		38区n	38-02号住居	敲石・磨石		安山岩	7.7	6.8	2.0	114.5	側縁に敲打痕
109		38区n	38-02号住居	石皿		安山岩	28.0	10.7+	7.1	4583.0+	1/3程欠損,裏面に剥離痕
112		38区s	38-13号住居	石鏃	Ⅱc	黒曜石	1.8	1.7	0.4	0.7	
113		38区s	38-13号住居	石錐		頁岩	2.1	8.2	1.5	40.7	裏面に礫面残る
114		38区s	38-13号住居	二次加工のある剥片		安山岩	11.3	6.3	2.2	175.2	石斧の未製品か
115		38区s	38-13号住居	敲石・磨石		凝灰岩	16.3	12.0	4.6	1114.0	
116		38区s	38-13号住居	敲石・磨石		安山岩	14.2	10.0	6.5	1281.0+	右側一部欠損
119		38区s	38-14号住居	打製石斧	Ⅳ	安山岩	9.3	9.0	1.9	192.0	
120		38区s	38-14号住居	打製石斧	Ⅲ	片岩質か	7.7	4.3	1.1	36.0	両端が一部欠損,石庖丁形石器の可能性
121		38区s	38-14号住居	敲石・磨石		砂岩	7.2+	4.3+	5.7	220.1+	全体的にかなり欠損
122		38区s	38-14号住居	敲石・磨石		安山岩	9.7+	8.9	4.3	558.0	下端部は敲打により欠損
138		39区	39-01号住居	石鏃	Ⅱb	黒曜石	2.1	1.5	0.3	0.5	
139		39区	39-01号住居	石匙	Ⅰ	安山岩（サ）	9.2	4.9	1.6	59.4	つまみ部に礫面残る
140		39区	39-01号住居	石匙	Ⅰ	黒曜石	4.1	1.9	0.6	2.7	中央に節理
141		39区	39-01号住居	楔形石器		黒曜石	2.8	2.3	0.7	3.9	両側縁に使用痕か（二次加工のある剥片の可能性有）
142		39区	39-01号住居	石庖丁形石器		粘板岩	4.7	7.7+	0.9	36.4+	中央で2つに折れている,表面に研磨痕残る,半分欠損
143		39区	39-01号住居	石庖丁形石器		安山岩	5.6	11.8	1.9	111.0	中央から2つに折れる,使用時の破損か

144		39区	39-01号住居	打製石斧	Ⅱ	安山岩	17.2	7.7	3.0	411.7	中央で2つに折れている,使用時の破損か,両面に礫面残る
145		39区	39-01号住居	打製石斧	Ⅱ	安山岩	14.5	7.8	2.3	358.5	中央で2つに折れている,使用時の破損か,刃部を中心に擦痕が残る
146		39区	39-01号住居	打製石斧	Ⅱ	安山岩	11.8+	9.6	1.4	222.5+	基部欠損,両面に擦痕
147		39区	39-01号住居	打製石斧	Ⅱ	安山岩	8.5+	6.5	3.0	189.9+	刃部欠損,裏面に礫面残る,未製品か
148		39区	39-01号住居	打製石斧	Ⅳ	蛇紋岩	7.9	8.3	1.1	123.5	両面に研磨痕(又は擦痕),特に裏面の一部は丁寧に研磨される
149		39区	39-01号住居	二次加工のある剥片		黒曜石	3.3	1.8	0.7	3.6	裏面に礫面残る
150		39区	39-01号住居	二次加工のある剥片		黒曜石	4.8	3.5	0.6	8.7	裏面に礫面残る
151		39区	39-01号住居	二次加工のある剥片		黒曜石	3.6	2.6	0.5	2.9	裏面に礫面残る
152		39区	39-01号住居	二次加工のある剥片		安山岩	5.8	6.0	1.2	45.2	裏面に礫面残る
153		39区	39-01号住居	二次加工のある剥片		安山岩	3.0	5.2	0.9	12.3	
154		39区	39-01号住居	二次加工のある剥片		安山岩(サ)	2.3	6.9	0.9	7.6	
155		39区	39-01号住居	敲石・磨石		安山岩	14.9	11.2	9.4	1923.0	各面に使用痕残る(一部明瞭に残る)
156		39区	39-01号住居	敲石・磨石		安山岩	11.8+	7.0	3.9	427.6+	端部を欠損
157		39区	39-01号住居	石皿		砂岩	41.1	22.5+	15.1	16700.0+	2つに割れている,1/3程欠損,左側縁に赤変している箇所有
160		39区	39-02号住居	石鏃	Ⅱb	安山岩(サ)	2.2+	2.0	0.4	1.2+	先端が欠損,横痕より出土
161		39区	39-02号住居	石庖丁形石器		千枚岩か	2.8	8.6	0.7	13.8	裏面に研磨痕
162		39区	39-02号住居	敲石・磨石		安山岩	11.8	6.2	2.5	263.0	
163		39区	39-02号住居	敲石・磨石		安山岩	14.9	9.8	4.5	993.0	
165		39区	39-06号住居	石鏃	Ⅱa	チャートか	1.5	1.4	3.5	0.4	基部一部欠損
166		39区	39-23号住居	打製石斧	Ⅰ	安山岩	8.8+	9.1	2.0	197.6+	刃部と基部を欠損,裏面に擦痕,中央で2つに折れる
169		40区	40-01号住居	二次加工のある剥片		チャート	1.7	1.6	0.3	0.5	側縁部を使用か
182		41区	41-03号住居	石鏃	Ⅱb	黒曜石	1.6+	1.3	0.4	0.5+	先端、基部を欠損
183		41区	41-03号住居	打製石斧	Ⅰ	礫岩か	13.0	7.5	2.0	246.4	裏面に礫面残る
184		41区	41-03号住居	打製石斧	Ⅳ	安山岩	10.0	10.2	1.6	175.7	裏面に礫面残る
185		41区	41-03号住居	二次加工のある剥片		黒曜石	1.9	2.3	0.7	2.5	両端を加工
186		41区	41-03号住居	二次加工のある剥片		安山岩(サ)	6.9	11.8	2.3	194.1	側縁に礫面残る
187		41区	41-03号住居	石皿		砂岩	22.4	18.2	7.2	4141.0	
196		41区	41-04号住居	打製石斧	Ⅰ	礫岩か	8.4+	5.0	1.7	89.1+	基部欠損,裏面に擦痕
197		41区	41-04号住居	石匙	Ⅱ	チャート	2.5	7.0	0.9	16.5	二次加工のある剥片の可能性もある
198		41区	41-04号住居	二次加工のある剥片		黒曜石	1.7	1.5	0.3	0.5	
199		41区	41-04号住居	敲石・磨石		不明	15.7	3.9	3.3	149.0	下端に使用痕
200		41区	41-04号住居	敲石・磨石		不明	6.6	5.6	4.0	162.6	全体的に摩滅
201		41区	41-04号住居	敲石・磨石		安山岩	8.6+	9.5	6.5	690.0+	半分程欠損
203		42区	42-05号住居	打製石斧	Ⅵ	安山岩	9.7+	7.5	1.9	181.6+	基部欠損,裏面に礫面残る
204		42区	42-05号住居	磨製石斧	Ⅰ	蛇紋岩か	12.4	4.9	2.3	213.0+	一度縦方向に割れたが、割れ面を一部研磨した後再利用か
205		42区	42-05号住居	二次加工のある剥片		石英	5.8	2.4	0.5	10.2	
206		42区	42-05号住居	敲石・磨石		砂岩	6.7	5.9	3.1	173.7	
207		42区	42-05号住居	敲石・磨石		不明	8.6+	6.0	4.3	300.0+	元々磨製石斧だったが破砕後敲石に転用、両端をそれぞれ使用
208		42区	42-05号住居	敲石・磨石		安山岩	10.5	9.0	2.8	422.7	下端に敲打痕
214		42区	42-06号住居	打製石斧	不明	安山岩	5.3+	7.0	1.5	55.3+	基部欠損,刃部に擦痕残り
215		42区	42-06号住居	スクレイパー		安山岩(サ)	11.0	11.7	2.3	231.2	両側縁に加工,下端を刃部としたか,裏面に礫面残る
216		42区	42-06号住居	石錐	Ⅲ	安山岩	7.6	6.6	2.0	145.3	上下端に紐を結んだ跡と思われる擦痕有,両側縁には敲打痕
226		42区	42-08号住居	打製石斧	不明	緑色片岩	5.9+	5.5	1.4	58.8+	刃部欠損
227		42区	42-08号住居	打製石斧	不明	安山岩	7.2+	8.2	1.8	153.1+	基部欠損
228		42区	42-08号住居	磨製石斧	Ⅱ	蛇紋岩	5.8+	5.2+	2.5	86.1+	基端、刃部を欠損、器面に研磨痕有
229		42区	42-08号住居	石庖丁形石器		緑泥片岩	5.5	9.8+	0.4	20.5+	打製石斧から器種変更、両側縁を欠損
230		42区	42-08号住居	使用痕のある剥片		黒曜石	4.5	1.6	0.7	2.9	右側縁を使用、裏面に礫面残る
231		42区	42-08号住居	石錐	Ⅲ	安山岩	4.0	4.5	1.5	47.0	両端を打欠き使用
232		42区	42-08号住居	石錐	Ⅲ	安山岩	8.6	5.4	2.9	177.7	両端を打欠き使用
233		42区	42-08号住居	敲石・磨石		不明	5.2+	4.6	4.0	116.6+	部分的に欠損、計3面に使用痕
234		42区	42-08号住居	敲石・磨石		安山岩	11.7	10.0	5.1	897.0	計4面に使用痕
235		42区	42-08号住居	石皿		凝灰岩	24.6	22.5	5.2	4577.0	表・裏面を使用
243		42区	42-12号住居	石鏃	Ⅱb	安山岩	2.5	1.5	0.4	1.0	表面に礫面残る
244		42区	42-12号住居	磨製石斧	Ⅰ	緑泥片岩	3.2+	3.3	0.6	7.9+	刃部のみ残存、研磨痕残る
245		42区	42-12号住居	打製石斧	Ⅰ	安山岩	19.7	6.9	2.7	472.2	刃部に擦痕、両面に礫面残る
246		42区	42-12号住居	石匙	Ⅱ	粘板岩	4.0+	10.2	1.3	47.2	つまみ部の端部を欠損、表面に礫面残る
247		42区	42-12号住居	石錐	Ⅲ	砂岩	5.9	5.6	1.7	70.3	両端を打欠き使用
248		42区	42-12号住居	砥石		砂岩	10.8+	10.5	12.5+	843.0+	各部を欠損、溝状の使用痕多数有
249		42区	42-12号住居	敲石・磨石		安山岩	9.8+	8.7	8.2	816.0+	半分程欠損
253		42区	42-13号住居	打製石斧	不明	安山岩	4.3+	5.7	1.4	48.6+	刃部と基端を欠損
254		42区	42-13号住居	石匙	Ⅱ	安山岩(サ)	4.2	6.5	0.9	18.7	つまみ部は加工途中か
255		42区	42-13号住居	敲石・磨石		安山岩	8.4	7.5	3.8	297.1	
256		42区	42-13号住居	凹石		安山岩	11.0	8.8	4.5	688.0	両面にくぼみ,右側縁には敲打痕,磨石を転用か
257		42区	42-13号住居	砥石		砂岩	11.7	4.2	2.5	217.9	端部が欠損
258		42区	42-14号住居	打製石斧	不明	安山岩	5.4+	4.4+	1.4	30.5+	側縁の一部か,一部礫面残る
259		42区	42-14号住居	石鏃	不明	チャート	3.5	3.4	0.9	10.7	未製品
266		42区	42-25号住居	打製石斧	Ⅰ	緑泥片岩	8.8	7.3	1.9	175.1	基部を欠損後、再加工か,表面に礫面残る
267		42区	42-25号住居	石鏃	Ⅱb	チャート	2.5	1.6	0.4	0.6	
268		42区	42-25号住居	石鏃	Ⅱa	安山岩	1.8	1.3	0.6	1.1	未製品か
269		42区	42-25号住居	スクレイパー		安山岩	5.1	5.5	1.0	28.9	
270		42区	42-25号住居	敲石・磨石		安山岩	7.0	3.7	3.4	157.8	
281		42区	42-27号住居	石鏃	Ⅱd	チャート	2.5	1.4	0.4	0.8	
282		42区	42-27号住居	石鏃	Ⅱb	安山岩	3.9	1.6	0.4	1.1	
283		42区	42-27号住居	打製石斧	Ⅰ	緑泥片岩	8.2+	4.3	0.7	29.9+	基端を欠損
284		42区	42-27号住居	打製石斧	不明	安山岩	9.4+	7.5	1.3	107.5+	基部を欠損,裏面に礫面
285		42区	42-27号住居	二次加工のある剥片		安山岩(サ)	3.3	4.9	0.7	10.2	下端を使用か
286		42区	42-27号住居	石錐	Ⅲ	安山岩	4.1	4.0	2.5	50.2+	部分的に欠損,両端を打欠き使用
287		42区	42-27号住居	磨製石斧	Ⅰ	不明	13.5+	5.7	3.3	282.4+	蛇紋岩か,基端と刃部を欠損,左側縁に礫面残る
288		42区	42-27号住居	磨製石斧	Ⅱ	緑泥片岩	9.7+	6.8	1.2	110.3+	基部を欠損,主に刃部を研磨,裏面に礫面残る
289		42区	42-27号住居	敲石・磨石		安山岩	15.1	7.1	6.4	1116.0	各面に使用痕残る
290		42区	42-27号住居	敲石・磨石		安山岩	7.3	7.5	3.4	268.0	
291		42区	42-27号住居	砥石		砂岩	10.5+	7.4+	4.9	360.2+	部分的に残る,表・裏面を使用
301		42区	42-28号住居	石鏃	Ⅱc	安山岩	2.1	1.3	0.3	0.5	
302		42区	42-28号住居	打製石斧	Ⅱ	安山岩	9.0+	6.3	1.2	79.0	基端を欠損,刃縁の裏面に擦痕
303		42区	42-28号住居	打製石斧	Ⅰ	安山岩	13.7	6.8	2.6	247.7	両面に礫面と擦痕
304		42区	42-28号住居	磨製石斧	Ⅱ	蛇紋岩	16.5+	6.7	3.0	442.3+	刃縁を欠損,全面に剥離痕(調整痕か欠損),全面に研磨痕,丁寧な作り
305		42区	42-28号住居	スクレイパー		黒曜石	3.5	4.4	1.6	16.2	旧石器の剥片を再加工,旧石器の剥離面は風化
306		42区	42-28号住居	敲石・磨石		安山岩	8.5+	9.5	3.3	601.0+	半分程欠損,敲打痕有
307		42区	42-28号住居	石皿		安山岩	25.5+	11.6	8.9	3341.0+	2/3～1/2程欠損
313		42区	42-30号住居	石鏃	Ⅱa	安山岩	2.0	1.7	0.4	0.9	
314		42区	42-30号住居	石鏃	Ⅱd	黒曜石	3.7	1.7	0.3	1.1	基部の左側を欠損,裏面に礫面

315		42区	42-30号住居	打製石斧	Ⅱ	安山岩	11.5	6.0	1.0	81.2	刃部に擦痕,基端の一部を欠損
316		42区	42-30号住居	打製石斧	Ⅰ	安山岩	8.8+	6.7	2.5	180.9+	基部(又は刃部)を欠損
317		42区	42-30号住居	打製石斧	Ⅲ	安山岩	8.6	5.1	1.1	46.0	
318		42区	42-30号住居	磨製石斧	Ⅰ	粘板岩	7.8+	6.0	3.7	230.6+	基部を欠損,全面に研磨痕,丁寧な作り
319		42区	42-30号住居	石鏃	Ⅲ	安山岩	6.6	5.3	2.3	107.0	
320		42区	42-30号住居	敲石・磨石		安山岩	13.3	4.6	3.9	418.0	
321		42区	42-30号住居	二次加工のある剥片		安山岩(サ)	2.8	3.8	0.6	4.3	下端を使用か
322		42区	42-30号住居	二次加工のある剥片		安山岩(サ)	4.3	6.2+	0.8	19.0+	左側を欠損,下端を刃部としていたか
323		42区	42-30号住居	石核		黒曜石	3.6	4.4	2.6	35.2	不純物多い
333		42区	42-31号住居	打製石斧	Ⅰ	粘板岩	11.0	8.0	1.5	168.0	刃部と基部に擦痕
334		42区	42-31号住居	打製石斧	Ⅴ	安山岩	6.7+	5.5	1.4	68.0+	刃縁と基端を欠損,裏面に礫面残るか
335		42区	42-31号住居	打製石斧	Ⅳ	安山岩	9.5	9.5	2.5	274.0	両面とも礫面残る,裏面に擦痕
336		42区	42-31号住居	磨製石斧	Ⅱ	緑色片岩	14.5	5.8	2.1	258.0	刃部を中心に研磨している
337		42区	42-31号住居	磨製石斧	Ⅰ	片岩質か	6.3+	6.8+	4.1	193.3+	基部・刃縁を欠損,全面に研磨痕,石質は角閃片岩か
338		42区	42-31号住居	石鏃	Ⅲ	不明	7.7	6.2	1.3	87.2	側縁に剥離面,石質は片岩質か
339		42区	42-31号住居	敲石・磨石		安山岩	11.4	8.6	4.6	689.4	
340		42区	42-31号住居	砥石		砂岩	7.1+	4.9+	3.6	162.4+	裏面に滑状の使用痕有
341		42区	42-31号住居	石皿		安山岩	31.7	24.8	7.6	8400.0	
345		42区	42-32号住居	石鏃	Ⅱc	安山岩(サ)	1.8	1.7	0.3	0.9	
346		42区	42-32号住居	打製石斧	Ⅴ	安山岩	16.0	6.2	3.0	297.0	刃部に擦痕,裏面に礫面残る
347		42区	42-32号住居	打製石斧	Ⅱ	安山岩か	10.3	5.5	1.2	92.0	刃縁に擦痕
348		42区	42-32号住居	打製石斧	Ⅳ	不明	8.3	8.6	1.9	214.0	側縁を部分的に加工,石質は雲母片岩か
349		42区	42-32号住居	磨製石斧	Ⅱ	不明	9.4	4.1	1.8	90.0	側縁に剥離面,石質は片岩質か,刃部に特に研磨痕が良く残る
350		42区	42-32号住居	石皿		砂岩	27.0+	22.5+	3.1	2891.0+	
351		42区	42-32号住居	敲石・磨石		安山岩	20.2	13.1	7.1	2497.0	
357		42区	42-35号住居	打製石斧	不明	安山岩	4.3+	6.9+	2.1	65.2+	基部以外欠損
358		42区	42-35号住居	打製石斧	Ⅳ	安山岩	9.4	13.5	1.9	249.7	扁平な円礫を加工して製作
359		42区	42-35号住居	磨製石斧	Ⅰ	頁岩	13.0	5.4	3.0+	332.2+	裏面を欠損後再加工(研磨)して使用
360		42区	42-35号住居	スクレイパー		安山岩(サ)	8.2	6.9	2.8	143.5	右側縁を加工して刃部とする
361		42区	42-35号住居	石鏃	Ⅲ	安山岩	6.4	5.3	2.5	136.7	表面に磨石の使用痕
362		42区	42-35号住居	敲石・磨石		安山岩	10.9	8.5	7.1	923.0	表面に剥離痕(敲打痕か),器面は赤変している
367		42区	42-38号住居	打製石斧	Ⅰ	安山岩	16.9	6.5	2.7	407.4	両面に礫面
368		42区	42-38号住居	打製石斧	Ⅳ	安山岩	9.7	9.4	1.6	158.0	側縁を加工し、両面とも礫面残る
369		42区	42-38号住居	石庖丁形石器		安山岩	6.5	5.1+	1.0	38.3+	2/3~1/2程欠損,刃部を中心に研磨
370		42区	42-38号住居	二次加工のある剥片		黒曜石	1.7	1.8	0.8	1.9	両端を加工
371		42区	42-38号住居	スクレイパー		安山岩(サ)	5.4	7.8	1.7	83.0	
372		42区	42-38号住居	石皿		砂岩	17.2+	7.4+	5.9+	1108.0+	欠損品
379		42区	42-39号住居	打製石斧	不明	安山岩	6.9+	5.6	1.0	49.0+	基部欠損
380		42区	42-39号住居	打製石斧	不明	安山岩	4.1+	5.9	1.3	37.2+	基部と刃縁の一部を欠損
381		42区	42-39号住居	磨製石斧	Ⅱ	粘板岩	9.9+	6.3	1.0	71.5+	刃部と基端を欠損,両面に研磨痕,側縁に剥離痕
382		42区	42-39号住居	石鏃	Ⅲ	安山岩	6.4	6.7	2.0	79.1	
383		42区	42-39号住居	砥石		砂岩	7.2+	6.5+	2.8+	127.3+	欠損品,部分的に滑状の使用痕有
390		42区	42-42号住居	石鏃	Ⅱb	安山岩(サ)	2.3	1.3	0.3	0.6	基部の右側を欠損
391		42区	42-42号住居	石鏃	不明	黒曜石	2.3	1.9	0.8	3.7	石鏃の未製品
392		42区	42-42号住居	打製石斧	Ⅰ	安山岩	13.3	5.9	2.1	206.6	
393		42区	42-42号住居	打製石斧	Ⅰ	安山岩	15.8+	11.7	3.7	887.0+	基部を欠損,両面に礫面残る
394		42区	42-42号住居	打製石斧	Ⅳ	片岩質か	10.8	9.4	2.5	352.5	両側縁は潰れか礫面,両面とも礫面残る,石質は雲母片岩か
395		42区	42-42号住居	使用痕のある剥片		黒曜石	4.5	2.2	0.9	6.5	左側縁を使用,裏面に礫面残る
396		42区	42-42号住居	石鏃	Ⅲ	安山岩	6.0	6.0	2.7	104.4	表面はやや赤変
397		42区	42-42号住居	敲石・磨石		安山岩	12.7	8.4	6.7	102.1	
398		42区	42-42号住居	砥石		砂岩	10.9	7.0	4.2	365.3	表面に滑状の使用痕有
402		42区	42-51号住居	石鏃	Ⅱb	黒曜石	2.2	1.5	0.4	0.7	先端を欠損
403		42区	42-51号住居	打製石斧	Ⅱ	緑泥片岩	8.3+	5.7	1.3	63.5+	基端を欠損
404		42区	42-51号住居	打製石斧	Ⅳ	安山岩	7.5	7.7	1.4	91.6	裏面に礫面残る
405		42区	42-51号住居	磨製石斧	Ⅰ	頁岩か	7.8	4.8	2.5	138.7	右側縁と刃縁、基端に敲打痕,全面に剥離痕(焼割)
406		42区	42-51号住居	石匙	Ⅱ	安山岩	3.7	7.1	1.2	23.7	つまみ部に礫面
407		42区	42-51号住居	石鏃	Ⅲ	砂岩か	4.7	4.0	2.9	60.2	裏面に滑状の窪み
408		42区	42-51号住居	敲石・磨石		安山岩	12.2+	11.6	6.3	1051.0+	1/3程欠損,砥石としても使用(滑状の使用痕),器面やや風化
409		42区	42-51号住居	石皿		安山岩	8.5+	10.6	3.4	392.0+	かなり欠損(半分程?)
413		42区	42-54号住居	打製石斧	Ⅰ	安山岩	8.4+	6.2	1.2	81.4+	基部欠損,刃部に擦痕
414		42区	42-54号住居	打製石斧	Ⅰ	緑泥片岩	7.5+	6.5	1.4	74.5+	磨製石斧の転用品か,刃縁に潰れた箇所有
415		42区	42-54号住居	敲石・磨石		安山岩	7.4	6.8	2.7	221.1	裏面に凹石のような窪み有
431		45区	45-13号住居	打製石斧	不明	安山岩	3.5+	4.4	1.0	18.6+	基部欠損,欠損後再加工か
432		45区	45-13号住居	二次加工のある剥片		黒曜石	1.6	1.5	0.3	0.5	両側縁を加工している
433		45区	45-13号住居	二次加工のある剥片		安山岩(サ)	9.4	5.4	3.0	82.5	右側縁を加工している
434		45区	45-13号住居	敲石・磨石		安山岩	7.5+	10.0	4.8	487.1+	半分程欠損
448		46区	46-02号住居	打製石斧	不明	安山岩(サ)	4.2+	7.3	0.8	25.3+	刃部以外欠損,石庖丁形石器の可能性有
449		46区	46-02号住居	磨製石斧	Ⅱ	緑泥片岩	13.3	5.6	1.9	163.5	刃縁の一部欠損,刃部のみ研磨
450		46区	46-02号住居	凹石		安山岩	8.2	7.5	1.5	121.0	裏面の窪みを使用か(又は使用による窪みか)
455		46区	46-03号住居	石庖丁形石器		安山岩	5.0	10.7	1.2	61.8	
456		46区	46-03号住居	二次加工のある剥片		黒曜石	2.6	2.1	0.4	2.1	両側縁を使用か
457		46区	46-03号住居	異形石器	Ⅳ	黒曜石	4.7	3.0	1.0	12.5	表面に礫面残る,用途不明,くの字状を呈する
458		46区	46-03号住居	石皿		砂岩	12.1+	12.2	9.0+	1729.0+	欠損品(どの程度欠損しているか不明)
463		46区	46-04号住居	打製石斧	Ⅱ	安山岩	12.4	7.5	1.5	138.7	表面に礫面残る,未製品か
464		46区	46-04号住居	打製石斧	Ⅳ	安山岩	7.7	7.0	1.7	129.0	表面に礫面残る
465		46区	46-04号住居	磨製石斧	Ⅱ	蛇紋岩	7.9+	3.6	1.4	64.9+	基部を一部欠損
466		46区	46-04号住居	敲石・磨石		緑色片岩	7.9	6.5	3.7	311.5	磨製石斧の欠損品を再利用か,側縁に磨石としての使用痕
467		46区	46-04号住居	敲石・磨石		凝灰岩	13.3	9.3	6.3	675	表・裏面に使用痕
469		46区	46-06号住居	石鏃	Ⅱb	黒曜石	1.7	1.3	0.4	0.6	
470		46区	46-06号住居	打製石斧	Ⅰ	安山岩	10.0	5.4	1.9	121.2	表面に礫面残る,刃部に擦痕
471		46区	46-06号住居	スクレイパー		黒曜石	4.6	4.7	1.2	26.0	表面に礫面残る,下端を刃部とするか
472		46区	46-06号住居	敲石・磨石		安山岩	9.3	5.9	5.6	487.3	計4面に使用痕,器面が赤変
476		46区	46-07号住居	磨製石斧	Ⅰ	頁岩	13.0+	4.5	3.2	271.1+	刃部と基端と基部の一部欠損,左側縁に敲打痕
477		46区	46-07号住居	二次加工のある剥片		黒曜石	4.9	3.2	1.0	11.5	両側縁を加工している
478		46区	46-07号住居	敲石・磨石		安山岩	10.1	7.7	5.3	64.7	2面使用
483		46区	46-08号住居	石鏃	Ⅱb	チャート	3.1+	2.0	0.5	2.9+	先端欠損
484		46区	46-08号住居	打製石斧	Ⅳ	砂岩	7.2	6.5	1.6	74.6	両面に礫面残る
485		46区	46-08号住居	磨製石斧	Ⅰ	火山岩質か	7.1+	4.1	2.7	104.4+	基部欠損,器面に敲打痕
486		46区	46-08号住居	石鏃	Ⅲ	安山岩	5.4	5.3	0.7	42.5	
487		46区	46-08号住居	砥石		砂岩	8.0	7.1	2.4	156.0	表・裏面に使用痕
497		46区	46-09号住居	打製石斧	Ⅱ	安山岩	9.4	7.0	1.5	101.2	表面に礫面残る,刃部に擦痕

498		46区	46-09号住居	打製石斧	Ⅱ	安山岩	11.5+	9.0	2.0	289.1+	刃部欠損,裏面に礫面残る
499		46区	46-09号住居	石錐		粘板岩	3.1	8.1	0.6	18.0	裏面に礫面残る
500		46区	46-09号住居	敲石・磨石		花崗岩	13.0	7.4	5.8	984.0+	一部欠損
508		46区	46-10号住居	石鏃	Ⅰd	黒曜石	2.6	1.6	0.8	2.7	
509		46区	46-10号住居	石匙	Ⅰ	安山岩	4.6	2.5	0.5	4.4	左側縁を加工
510		46区	46-10号住居	石錘	Ⅲ	安山岩	6.0	5.3	1.8	91.7	器面やや赤変
511		46区	46-10号住居	石皿		砂岩	23.0+	16.3+	4.4	1976.0+	2/3～3/4程欠損か,裏・裏面を使用
514		46区	46-11号住居	打製石斧	Ⅱ	安山岩	8.0+	8.3	1.1	98.8+	刃部欠損
515		46区	46-11号住居	スクレイパー		安山岩	5.0	9.2	1.0	41.3	刃部に礫面含む
516		46区	46-11号住居	敲石・磨石		安山岩	13.2	9.3	7.3	1247.6	1面のみ使用
523		46区	46-12号住居	打製石斧	Ⅰ	安山岩	13.4+	9.2	2.0	371.8+	刃部欠損,裏面に礫面残る
524		46区	46-12号住居	磨製石斧	Ⅰ	頁岩	8.4+	4.7+	1.6+	67.0+	基部の一部以外欠損,側縁に敲打痕
525		46区	46-12号住居	二次加工のある剥片		黒曜石	5.7	3.2	1.6	18.7	下縁辺を使用か
526		46区	46-12号住居	敲石・磨石		安山岩	15.0	7.4	4.0	744.0	裏面は部分的に欠損(敲打によるものか),器面がやや赤変
530		46区	46-13号住居	打製石斧	Ⅰ	安山岩	11.5	7.9	1.2	119.0+	刃部の一部欠損,刃縁に擦痕
531		46区	46-13号住居	石匙	Ⅱ	安山岩	3.0	8.9	1.0	26.4	左側縁につまみらしき突起有,一応横型
532		46区	46-13号住居	石錘	Ⅲ	安山岩	3.7	3.6	1.8	38.4	器面やや赤変
533		46区	46-13号住居	砥石		砂岩	11.9+	9.7+	4.4+	498.4+	大半欠損
539		46区	46-18号住居	石鏃	Ⅱb	チャート	2.2	1.9	0.4	1.0	
540		46区	46-18号住居	打製石斧	Ⅰ	安山岩	10.5+	5.8	1.9	159.2	裏面に礫面と擦痕
541		46区	46-18号住居	打製石斧	Ⅳ	安山岩	8.8	9.4	1.6	164.8	裏面に礫面
542		46区	46-18号住居	石錘	Ⅱ	砂岩	4.9	3.0	2.6	38.0	1/4程欠損
543		46区	46-18号住居	石皿		砂岩	26.5+	31.8+	6.0	6100.0+	半分程欠損,裏面に使用痕
552		46区	46-19号住居	石鏃	Ⅰd	黒曜石	2.5	1.3+	0.3	0.8+	左側縁欠損
553		46区	46-19号住居	打製石斧	Ⅰ	安山岩	14.6+	7.0	1.7	219.8+	刃部欠損
554		46区	46-19号住居	磨製石斧	Ⅰ	頁岩	14.1+	3.8	2.7	190.0+	刃部大半欠損,全面に敲打痕、研磨痕
556		46区	46-19号住居	石核		黒曜石	2.0	4.3	2.0	15.4	横長剥片をとったか
557		46区	46-19号住居	敲石・磨石		安山岩	11.1	8.7	7.9	1136.0	裏・裏面は使用のため平らに磨滅
561		46区	46-20号住居	打製石斧	Ⅰ	安山岩	12.7	5.9	1.8	157.3	刃縁に擦痕
562		46区	46-20号住居	二次加工のある剥片		黒曜石	2.0	2.3	0.4	1.8	左側縁を加工
563		46区	46-20号住居	敲石・磨石		安山岩	7.1+	11.7	7.0	829.0+	半分程欠損,両面に使用痕の他右側面に帯状の使用痕か
566		47区	47-01号住居	敲石・磨石		安山岩	23.4	13.7	8.6	4000.0	
568		49区	49-01号住居	打製石斧	不明	安山岩	9.2	8.7	2.9	316.5	刃部と基部を欠損後,両端を再加工
569		49区	49-01号住居	敲石・磨石		安山岩	11.4	8.5	6.6	949.6	下部に敲打によるものか,欠損している箇所有り
574		49区	49-67号住居	打製石斧	Ⅰ	頁岩か	18.5	6.9	4.4	663.0	磨製石斧の未製品か,裏面に敲打痕多数
575		49区	49-67号住居	打製石斧	Ⅰ	安山岩	10.6	6.4	2.2	156.0	両面に礫面残る
576		49区	49-67号住居	石鏃	Ⅱa	黒曜石	1.4	1.4	0.4	0.5	右の基部に礫面残る
577		49区	49-67号住居	石匙	Ⅰ	安山岩	6.8+	4.9	1.1	25.8+	下端を欠損
578		49区	49-67号住居	石匙	Ⅱ	安山岩(サ)	4.3	8.0	0.9	16.1	つまみ部はない
579		49区	49-67号住居	石錘		安山岩	3.5	6.1+	1.5	26.6+	基部を欠損,裏面に研磨痕(又は擦痕)
580		49区	49-67号住居	敲石・磨石		安山岩	15.8	7.8	6.5	122.6	計5面に使用痕
586		49区	49-68号住居	石鏃	Ⅱb	チャート	1.9	1.4	0.3	0.7	
587		49区	49-68号住居	打製石斧	Ⅳ	緑色片岩	8.6	6.9	1.2	87.7	裏面に礫面,裏面に擦痕
588		49区	49-68号住居	打製石斧	Ⅳ	安山岩	9.8	9.9	1.7	174.1	裏面に礫面と擦痕
589		49区	49-68号住居	磨製石斧	Ⅱ	泥岩	11.0	4.8	2.3	150.5+	基部の一部を欠損,刃部に擦痕,両面に礫面,側縁は潤れている
590		49区	49-68号住居	石匙	Ⅰ	安山岩(サ)	6.3	3.1	0.8	14.2	下端を一部欠損
591		49区	49-68号住居	敲石・磨石		緑泥片岩	10.9	5.8	3.5	354.4	磨製石斧を転用,両側縁に敲打痕,両端に使用痕
592		49区	49-68号住居	敲石・磨石		安山岩	8.2	6.9	3.4	280.9	
599		49区	49-69号住居	打製石斧	不明	緑色片岩	3.3+	4.5+	1.0	20.2+	刃部片のみ残存,裏面に擦痕
600		49区	49-69号住居	打製石斧	Ⅰ	安山岩	14.4	6.4	2.2	228.2	器面やや風化、刃部に擦痕
601		49区	49-69号住居	石匙丁形石器		安山岩(サ)	5.2	13.5	2.3	136.0	
602		49区	49-69号住居	使用痕のある剥片		黒曜石	3.8	1.8	0.7	3.7	右側縁を使用か
603		49区	49-69号住居	石錘	Ⅲ	安山岩	5.6	6.0	2.6	130.2	上下端を敲打し使用か、右側縁にも敲打痕
604		49区	49-69号住居	敲石・磨石		砂岩	12.3	12.3	8.6	1786.0	計3面に使用痕
605		49区	49-69号住居	石皿		凝灰岩	15.1	17.1	4.8	1601.0	表面に使用痕
612		49区	49-77号住居	石鏃	Ⅱb	黒曜石	2.0	1.1	0.4	0.3	基部の一部と先端を欠損
613		49区	49-77号住居	打製石斧	不明	安山岩	7.2+	5.9	2.2	112.5+	刃部を欠損
614		49区	49-77号住居	打製石斧	Ⅲ	蛇紋岩	5.8	3.5+	0.7	16.1+	石匙丁形石器か,両面に擦痕(又は研磨痕)有
615		49区	49-77号住居	磨製石斧	Ⅱ	蛇紋岩	9.9	6.1	1.0	79.9	側縁の調整痕残る,或いは打製石斧か
616		49区	49-77号住居	石匙	Ⅰ	安山岩(サ)	8.6	3.1	1.0	20.9	右側縁は欠損後再加工したか
617		49区	49-77号住居	異形石器	Ⅲ	黒曜石(姫)	2.1+	4.1+	1.2	16.1+	四又状の形態、端部を欠損
618		49区	49-77号住居	二次加工のある剥片		黒曜石	2.5	3.2	1.0	5.9	下端を刃部としたか,両面に礫面残る
619		49区	49-77号住居	敲石・磨石		砂岩	5.9+	5.8	2.6	131.1+	両面と上端に使用痕
620		49区	49-77号住居	敲石・磨石		不明	8.3	6.8	5.9	463.7	計3面に磨石としての使用痕有、全面に敲打痕有
621		49区	49-81号住居	二次加工のある剥片		安山岩	8.4	6.4	0.9	40.5	下端を加工
622		49区	49-81号住居	敲石・磨石		安山岩	6.4	4.4	4.4	192.8	磨石としてだけでなく敲石として使用
627		49区	49-82号住居	打製石斧	Ⅰ	粘板岩	12.8	5.5	1.6	143.5	裏面に擦痕
628		49区	49-82号住居	打製石斧	Ⅱ	安山岩	17.0	8.6	1.9	333.0	刃部の一部を欠損
629		49区	49-82号住居	使用痕のある剥片		黒曜石	2.3	3.8	0.7	3.5	右側縁と下端部に使用痕,ただし右側縁は調整痕の可能性
630		49区	49-82号住居	敲石・磨石		安山岩か	4.5+	8.3	6.5	349.0+	半分程欠損
631		49区	49-82号住居	敲石・磨石		安山岩	19.2	13.2	9.2	3270.2	下端に敲打によると思われる欠損有り
632		49区	49-83号住居	打製石斧	Ⅵ	安山岩	8.5	7.9	2.8	205.7	基部(又は刃部)欠損後再加工
633		49区	49-83号住居	打製石斧	Ⅰ	不明	11.6+	6.4	2.3	187.4+	基端を欠損,打製石斧の未製品か
634		49区	49-83号住居	磨製石斧	Ⅱ	粘板岩	9.7+	5.2	2.1	123.6+	基部欠損,両側縁に剥離痕残る
635		49区	49-83号住居	敲石・磨石		安山岩	11.5	9.7	4.4	790.0	計3面に使用痕
636		49区	49-83号住居	石皿		安山岩	31.6+	30.0	19.0	16900.0+	約1/4欠損,中央に凹み(使用による)
637		49区	49-99号住居	打製石斧	不明	安山岩	10.0+	8.2+	1.4	141.08+	刃部の一部と基部を欠損
638		49区	49-99号住居	打製石斧	Ⅳ	安山岩	7.7+	8.3	1.3	85.3+	上部を欠損

その他の遺構

No.	収蔵No.	調査区名	遺構名(報告書用)	器種名	分類	石質	計測値 長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	備考
1		30区	30-01号円形周溝	石鏃	Ⅱb	安山岩(サ)	3.1	1.1	0.4	1.5	無茎,凹基
14		42区	42-07号土壙	十字形石器		安山岩	8.3	4.8+	1.1	41.7+	半分欠損,突起のつけ根に擦痕

包含層遺物

No.	収蔵No.	調査区名		器種名	分類	石質	計測値 長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	備考
57		15区		石錐	Ⅰ	安山岩(サ)	4.4	1.4	0.5	2.0	表面に礫面
58		41区		異形石器	Ⅰ	黒曜石	4.4	1.4	0.8	2.5	断面三角形,錐状の石器,所々に礫面
59		40区		異形石器	Ⅱ	安山岩	3.0	7.9	0.7	17.6	石匙状を呈し、つまみが2つ,表面に礫面
60		38区s		異形石器	Ⅲ	安山岩(サ)	3.5	2.6	0.8	4.2	多足状の突起有
61		15区		異形石器	Ⅳ	チャート	3.3	2.1	0.8	4.8	楕円形を呈する,何かの未製品か
62		30区		石刀		緑泥片岩	32.9	4.8	3.0	784.6	全面に研磨痕(所々に整形の剥離痕有),両側縁を丁寧に研磨

第11表　その他の遺物観察表

No	収蔵No.	調査区名	遺構名（報告書用）	器種名	石質	計測値 長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	備考
57		30区	30-03号住居	管玉	緑色片岩	1.2	0.7	0.3+	0.3+	半分欠損
209		42区	42-05号住居	土製品		2.0+	1.6	0.7	2.7+	穿孔あり（焼成前），取っ手の一部か
217		42区	42-06号住居	土偶		3.4+	3.1+	1.7+	11.5+	土偶の頭部か
236		42区	42-08号住居	土製勾玉		3.0+	2.0+	1.3	4.8+	胴部以下欠損
237		42区	42-08号住居	土製管玉		2.2+	0.8	0.8	1.2+	1/3程欠損，土錘か
238		42区	42-08号住居	土製品		1.8	0.7	0.7	1.0	胴部に一周する沈線（刻み）有
271		42区	42-25号住居	土製勾玉		1.8+	1.0+	0.7+	0.9+	頭部と尾部欠損
272		42区	42-25号住居	土偶		2.7+	2.6+	2.3+	12.0+	頭部のみ一部残存，木芯痕あり，口を表現
292		42区	42-27号住居	土製勾玉		2.1+	1.2+	0.8	1.5+	頭部と尾部欠損
324		42区	42-30号住居	焼成粘土塊		3.5	4.2	2.1	18.1	表面に葉の圧痕
352		42区	42-32号住居	円盤形土製品		7.5	7.5	1.7+	77.5+	一部欠損
353		42区	42-32号住居	土製品		7.1	6.3	2.1	94.6+	かなり欠損，円盤形土製品か
373		42区	42-38号住居	土製品		6.5	3.8	2.2	53.3+	大半欠損，円盤形土製品か
384		42区	42-39号住居	丸玉		0.7	0.7	0.5	0.3	
416		42区	42-54号住居	土製勾玉		2.4+	2.3	0.8	3.4+	尾部の一部欠損
422		45区	45-05号住居	勾玉		0.9	0.6	0.2	0.1	
423		45区	45-05号住居	土製品		1.3	1.0	1.0	1.2	端部にくぼみあり
424		45区	45-05号住居	焼成粘土塊		1.7	1.0	1.0	0.9	ねじれたような形状
435		45区	45-13号住居	管玉		1.5	0.5	0.3	0.3	
436		45区	45-13号住居	管玉		0.4	0.4	0.1	0.1	管玉の破片か
437		45区	45-13号住居	管玉		0.9	0.5	0.3	0.1	半分欠損
438		45区	45-13号住居	土製管玉		3.2	0.9	0.8	2.3	1/3～1/2程残存，上下より穿孔あり，土錘か
439		45区	45-13号住居	焼成粘土塊		1.4	1.1	0.9	0.9	穿孔あり
440		45区	45-13号住居	焼成粘土塊		2.5	1.6	1.6	2.6	指（爪）の圧痕あり
441		45区	45-13号住居	焼成粘土塊		2.7	2.1	1.0	2.6	工具等の痕跡あり
451		46区	46-02号住居	土製勾玉		1.2+	0.9+	0.5	0.4	半分程欠損
452		46区	46-02号住居	土製勾玉		2.8+	1.8	0.9	3.1+	先端部欠損
488		46区	46-08号住居	土製管玉		1.6	1	0.9	1.3	
489		46区	46-08号住居	円柱形土製品		5.2	4.0	3.9	86.7	穿孔あり（焼成前），土錘か
501		46区	46-09号住居	土製丸玉		2.8	2.7	2.2	17.0	穿孔しかけた箇所有，爪の圧痕有
512		46区	46-10号住居	管玉	蛇紋岩	1.3	0.6	0.5	0.6	
513		46区	46-10号住居	土製勾玉		1.9+	1.0+	0.8+	1.1+	頭部と尾部欠損
527		46区	46-12号住居	土製勾玉		2.2+	1.3	0.8	1.4+	先端部欠損
544		46区	46-18号住居	土製品		10.9+	8.7	2.2	188.2+	一部欠損，しゃもじ形
593		49区	49-68号住居	土製勾玉		4.5	2.3	0.8	6.7	断面扁平，丁寧な作り
594		49区	49-68号住居	土製勾玉		2.8+	1.6	1.0	3.6+	頭部欠損
606		49区	49-69号住居	土製勾玉		3.9+	1.9+	1.2	5.8+	頭部と尾部欠損

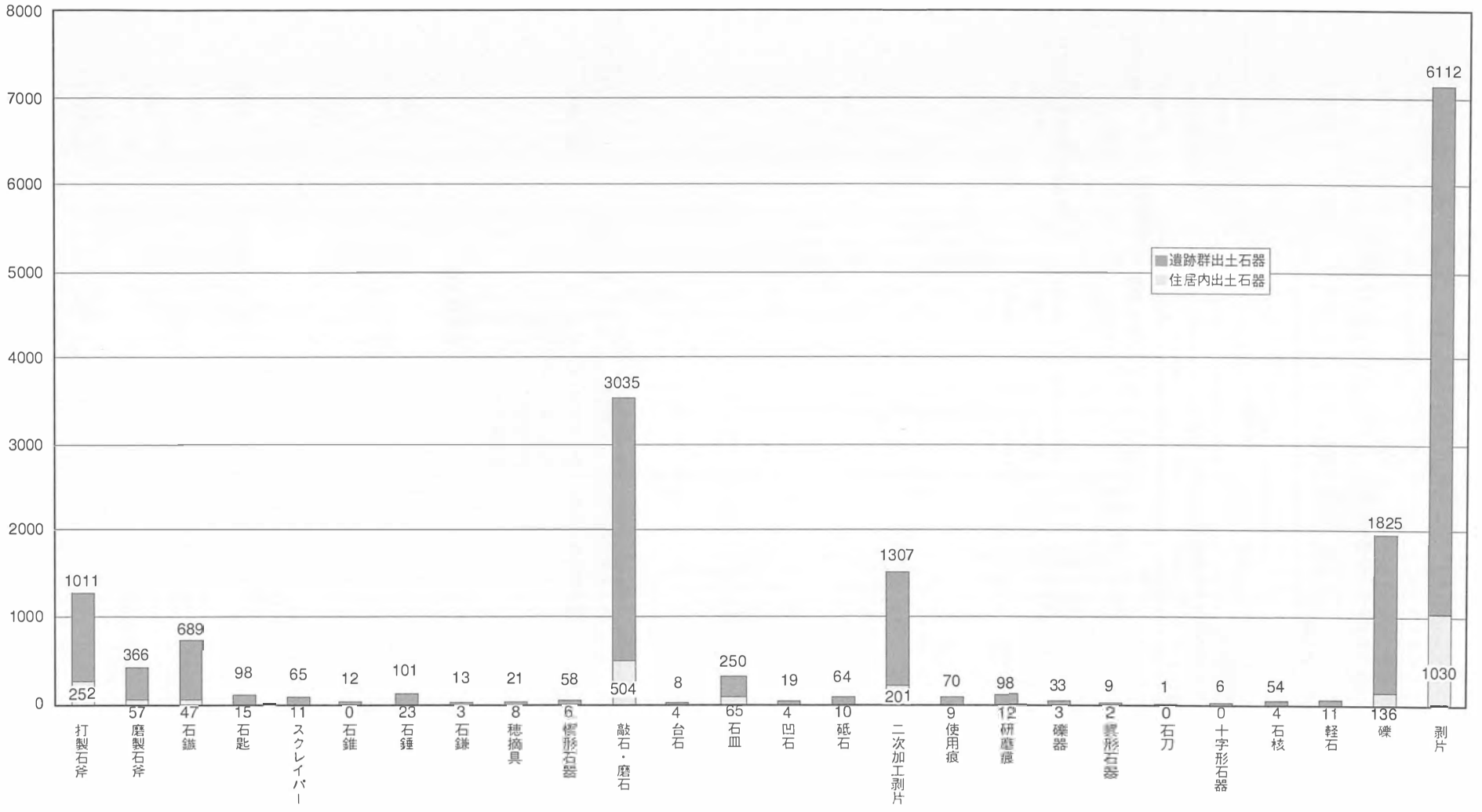
その他の遺構

No	収蔵No.	調査区名	遺構名（報告書用）	器種名	石質	計測値 長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	備考
15		42区	42-07号土壙	勾玉		1.7	1.3	0.2	0.7	

包含層遺物

No	収蔵No.	調査区名		器種名	石質	計測値 長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	備考
63		30区		土偶		4.4+	4.6	2.3	43.1+	頭部のみ残存（完形），木芯痕あり，髪・目など表現
64		36区		土偶		4.8+	4.3+	3.5	35.4+	頭部右半分のみ残存，耳に穿孔あり，髪・目など表現
65		36区		土偶		9.4+	8.0+	3.2	137.3+	頭部及び胴部の左腕残存，木芯痕あり
66		40区		土偶		4.9+	7.5+	2.1	51.4+	頭部を除いた上半身（右腕と胸部分を欠損），木芯痕あり
67		41区		土偶		3.6+	1.7+	1.1	7.3+	腕部のみ残存（右腕か）
68		41区		土偶		3.0+	2.6+	1.2	8.6+	腕部のみ残存（右腕か），器面に赤色顔料
69		36区		土偶		6.6+	3.3	3.9	58.7+	脚部のみ残存（左脚か）
70		41区		土偶		5.0+	4.2+	1.5+	30.2+	脚部のみ残存（左脚か）
71		43区		勾玉		1.3	0.9	0.3	0.4	「コ」の字状を呈する
72		43区		勾玉		1.2	1.0	0.3	0.4	
73		42区		勾玉	蛇紋岩	1.1	0.8	0.2	0.2	「コ」の字状を呈する
74		30区		勾玉		0.7+	1.0+	0.3	0.2+	胴部欠損
75		30区		勾玉		1.3	0.8	0.3	0.5	「C」の字状を呈す
76		42区		勾玉		2.1	1.4	0.3	1.1	やや「く」の字状を呈す
77		49区		土製勾玉		2.4+	1.5	1.0	2.3+	先端部欠損
78		49区		土製勾玉		1.9+	2.2+	1.1	3.4+	胴部欠損
79		46区		土製勾玉		2.6+	2.2	0.8	3.7+	胴部欠損
80		42区		土製勾玉		3.4+	1.7	1.3	5.4+	尾部欠損
81		42区		土製勾玉		4.0+	1.9	0.9	4.0+	先端部欠損
82		47区		土製勾玉		4.1	2.5	1.0	8.5+	先端部欠損
83		49区		土製勾玉		4.4+	2.0+	1.3	7.2+	頭部と尾部欠損
84		42区		管玉	滑石	1.0	0.6	0.6	0.5	
85		49区		管玉		0.8	0.4	0.2+	0.1+	全体の約1/2欠損
86		47区		管玉	蛇紋岩	0.8	0.5	0.5	0.3	
87		42区		管玉		1.1	0.5	0.4+	0.2+	全体の約1/2欠損
88		42区		管玉		1.1+	0.6	0.6	0.5+	全体の約1/2欠損
89		42区		管玉	蛇紋岩	1.1+	0.5	0.3+	0.2+	全体の約1/2欠損，表面は丁寧に研磨
90		42区		管玉	蛇紋岩	1.3	0.5+	0.4+	0.3+	全体の約1/2欠損
91		42区		管玉		1.6	0.7	0.6	1.0	未製品，穿孔途中
92		42区		管玉		1.9	0.6	0.5+	0.8+	全体の約1/3欠損
93		41区		管玉		2.8+	0.8	0.4+	0.8+	全体の約2/3欠損
94		43区		管玉	滑石	1.9+	0.8	0.6+	0.7+	全体の約1/2欠損，端部を研磨
95		41区		管玉		1.9	0.8	0.8	1.4	
96		41区		管玉	滑石	3.1	0.8	0.8	3.0	両端に使用痕
97		42区		土製管玉		2.3+	1.1	0.9	2.1+	一部欠損
98		42区		土製管玉		2.4+	0.9	0.8	1.5+	下部を約1/3欠損
99		49区		土製管玉		2.5+	0.7	0.7	1.0+	下部を約1/3欠損
100		42区		土製管玉		3.2	1.0	0.9	2.5	
101		45区		土製管玉		2.1	1.4	0.9	2.5	表面に格子状の文様有
102		39区		丸玉		1.2	1.3	7.0	1.8	
103		39区		丸玉	蛇紋岩	0.9	0.9	0.5	0.6	
104		30区		石製品	滑石	5.6+	2.7+	1.2+	21.0+	半分以上欠損，器面に研磨痕，中央に穿孔
105		46区		石製品	滑石	1.7+	1.3+	0.8	1.6+	大半欠損，穿孔有，玉類か
106		30区		石製品	蛇紋岩	1.0+	0.7+	0.3+	0.2+	研磨痕有，玉類の未製品か
107		42区		土製丸玉		1.8	2.4	2.0	8.1	指頭圧痕有

108		42区		土製丸玉		1.1	1.1	1.1	1.1	
109		39区		土製丸玉		1.5	1.5	1.5	2.9	片方からの穿孔
110		39区		土製玉類		2.3+	1.2+	0.5	1.0+	両端欠損,背部に穿孔
111		45区		土製玉類		2.5	1.4+	0.8	1.9+	全体の約1/2欠損,上下からそれぞれ穿孔
112		15区		土器片錘		4.0	3.9	0.6	10.0	穿孔は両側から
113		42区		土器片錘		6.6	5.9	1.0	38.7	穿孔は両側から
114		40区		土器片錘		4.5	4.5	0.8	18.1	
115		15区		土器片錘		4.4	4.3	0.6	14.8	
116		41区		土器片錘		5.2	5.1	1.1	32.0	
117		47区		土器片錘		7.0	7.6	0.9	50.5	
118		39区		円盤形土製品		5.7+	6.2	2.2	65.2+	穿孔あり
119		42区		円盤形土製品		4.8	3.9+	1.1	19.5+	一部欠損
120		42区		円盤形土製品		3.8+	5.4	1.9	21.7+	2/3程欠損か
121		46区		円盤形土製品		6.2+	5.0+	1.9	37.4+	欠損品,別器種の可能性有
122		41区		円柱形土製品		6.1	4.5	2.7	54.8+	全体の約1/2欠損,穿孔あり,土錘か
123		49区		円柱形土製品		4.3+	3.5+	2.0	25.6+	穿孔あり,器面に文様有
124		41区		土製品		2.5+	1.9+	1.1+	3.2+	土器に付属した突起状のものか
125		41区		土製品		4.8+	3.2+	0.7	11.2	深鉢の胴部の一部,用途不明
126		42区		土製品		3.9+	4.3+	1.8	24.1+	三又状を呈する
127		45区		土製品か		3.7	4.4	2.0	19.1+	焼成粘土塊か,棒状・貝殻の圧痕あり
128		45区		土製品か		3.9	2.4	1.0	8.4	焼成粘土塊か,爪の痕跡か
129		45区		焼成粘土塊		0.8	2.5	0.7	1.0	2枚貝の裏に付着した粘土か
130		36区		焼成粘土塊		4.6	3.9	1.1	12.0	工具の痕跡あり
131		36区		焼成粘土塊		2.6	3.3	1.8	5.2	浅鉢の口縁部をまとめたものか
132		39区		焼成粘土塊		4.7	2.0	1.4	11.0	指頭圧痕と工具の痕跡あり
133		45区		焼成粘土塊		5.1	5.4	3.0	65.0	指の圧痕あり
134		42区		焼成粘土塊		7.7	7.1	5.4	208.5	爪の圧痕有



第12表　石の本遺跡群石器組成グラフ

報告書抄録

ふりがな	いしのもといせきぐん
書名	石の本遺跡群Ⅴ
副書名	第54回国民体育大会秋季主会場整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	熊本県文化財調査報告
シリーズ番号	205集
編集者名	中村幸弘
編集機関	熊本県教育委員会
所在地	〒862－0950 熊本県熊本市水前寺６－18－１
発行年月日	2002年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
いしのもといせきぐん 石の本遺跡群	くまもとけん 熊本県 くまもとし 熊本市 ひらやままち 平山町 あざいしのもと 字石の本	43201	121	32° 50′ 6″	130° 48′ 5″	940510 ～ 980331	13,549,600	国体主会場建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
石の本遺跡群	集落	縄文時代後・晩期	竪穴住居址　67 埋設土器　32 円形周溝　7 土壙多数	縄文土器 石器 玉類 石刀 土偶 土製品 焼成粘土塊	縄文集落

写真図版

図版１　10区全景（東から）

図版２　15区全景（東から）

図版３　30区全景（東から）

図版４　31区全景（北から）

図版５　35区全景（南から）

図版６　36区全景（西から）

図版７　38区北住居址遠景（北から）

図版８　38区南全景（北西から）

図版９　39区全景（南から）

図版10　40区全景（南から）

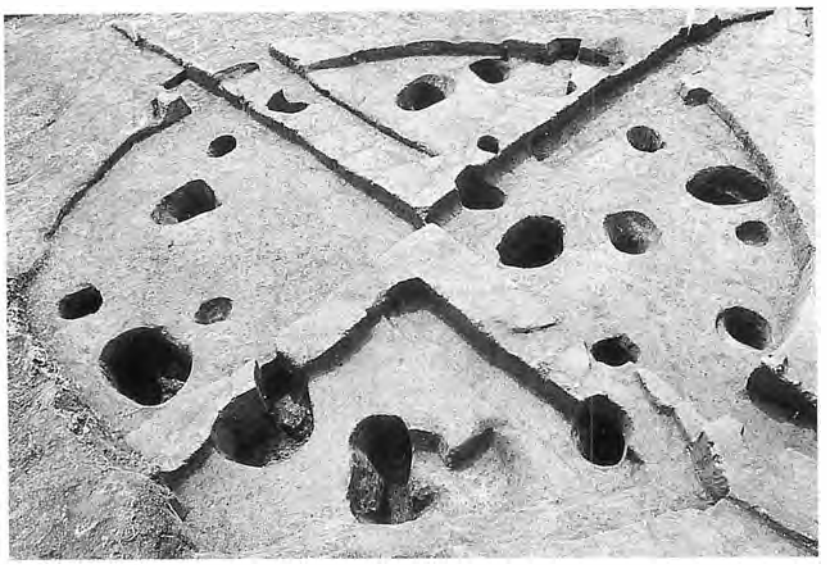
図版11　45区全景（南から）

図版12　47区遺構確認（南から）

図版13　10－01号埋設土器（北から）

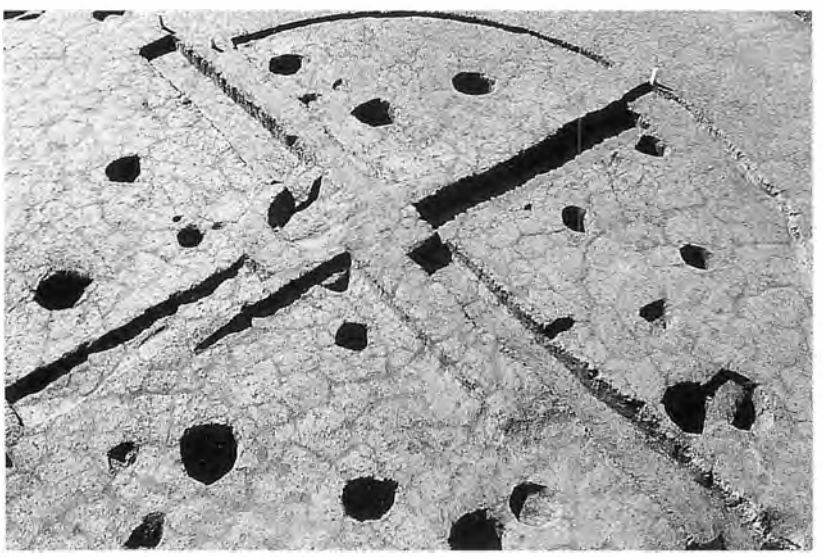
図版14　15－01号住居址（東から）

図版15　15－02号住居址（西から）

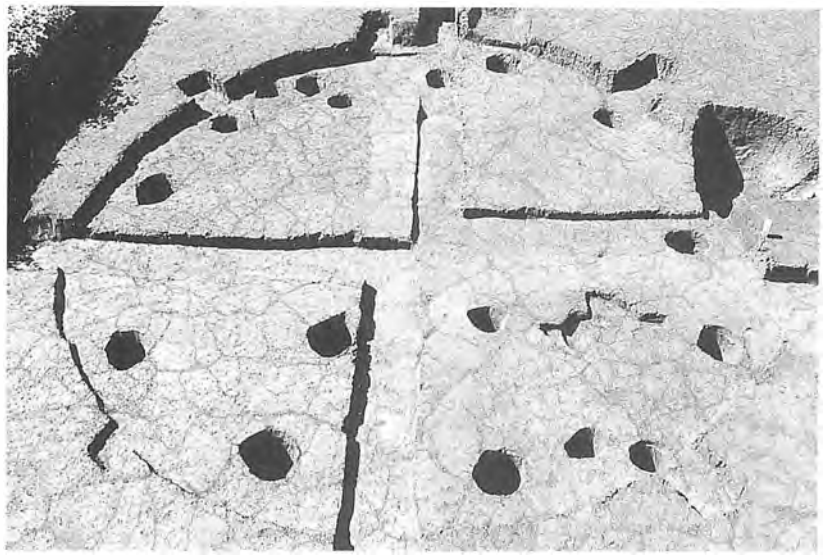


図版16　15－04号住居址（南東から）

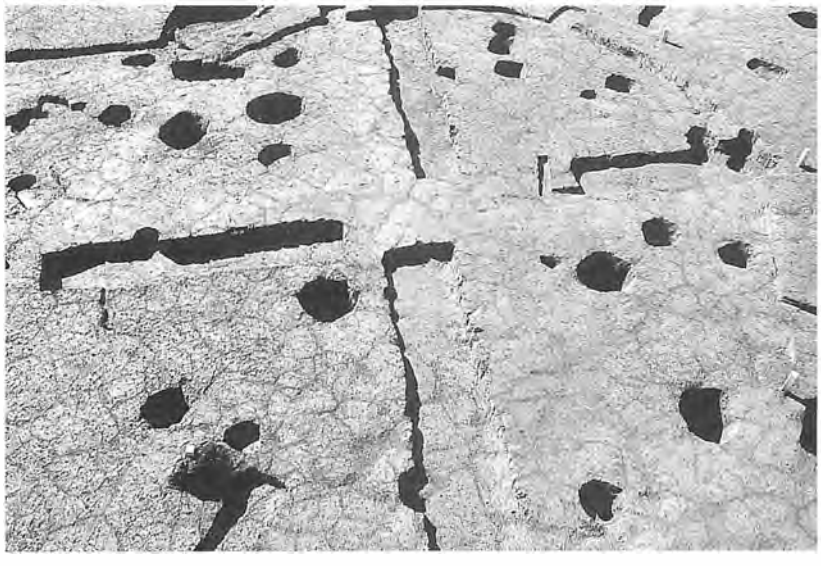
図版17　15－05号住居址（西から）



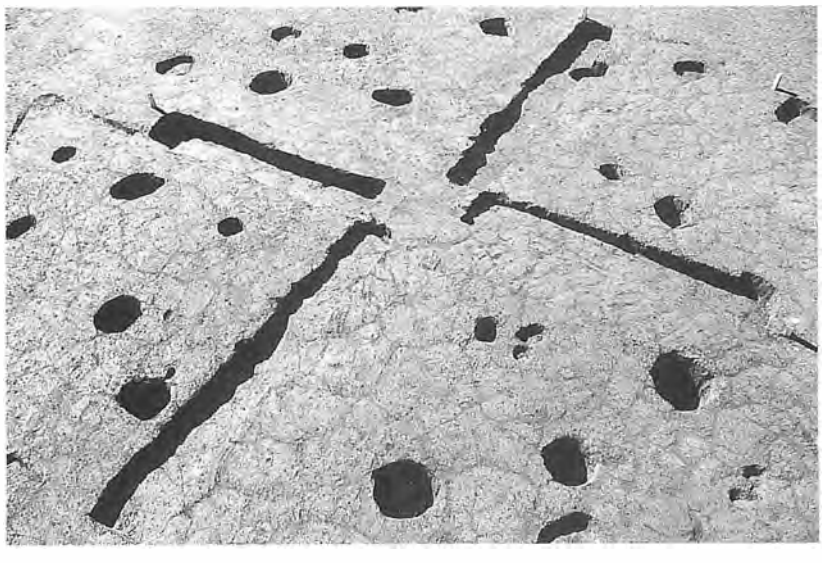
図版18　30－01号住居址（東から）



図版19　30－02号住居址（東から）



図版20　30－03号住居址（東から）



図版21　30－04号住居址（東から）

図版22　30－05号住居址（東から）

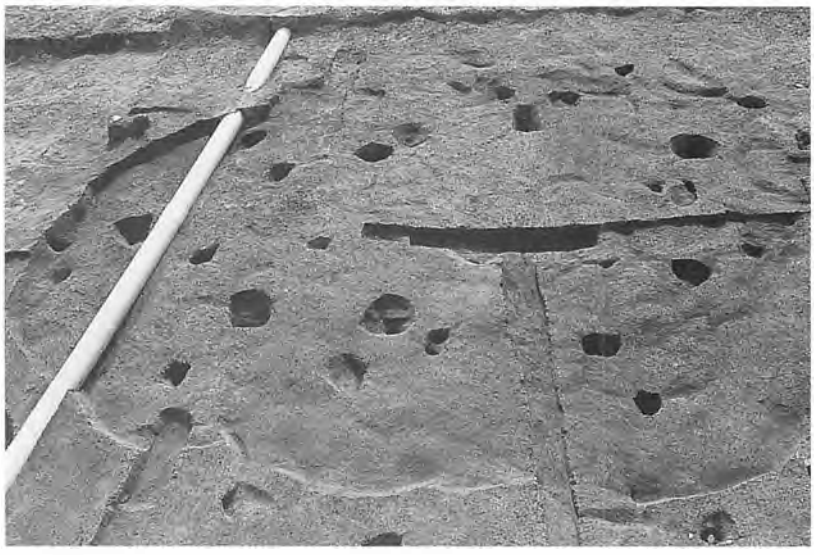
図版23　30－01号円形周溝（東から）

図版24　31－05・09号住居址（南から）

図版25　31－01号円形周溝（北東から）

図版26　35－01号住居址（南から）

図版27　35－02号住居址（北から）

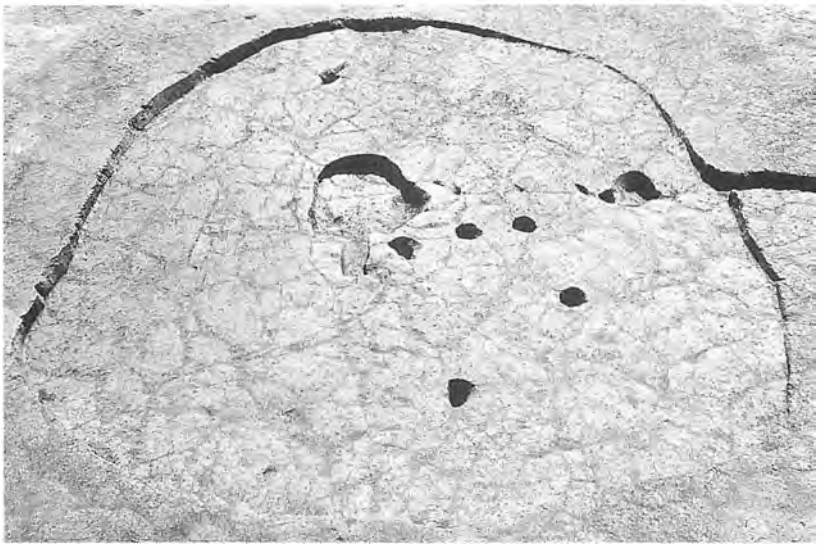


図版28　36－05号住居址（東から）

図版29　38－01号住居址（南から）

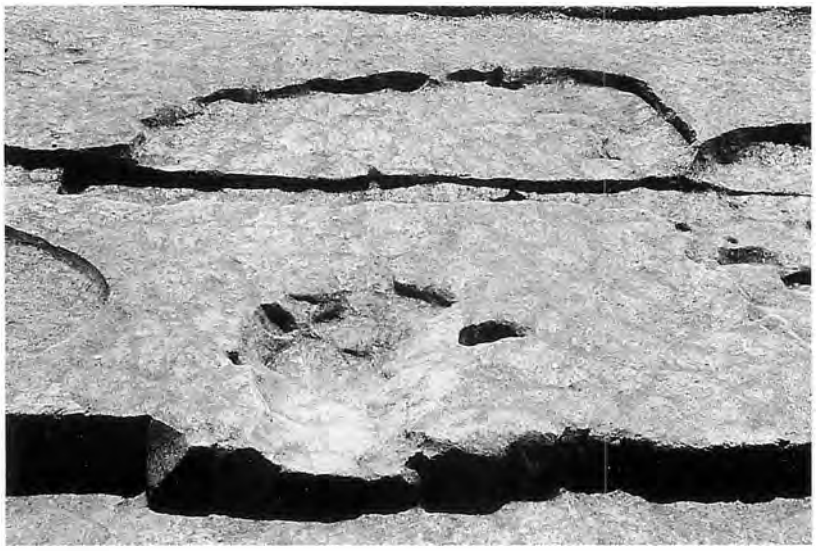
図版30　38－02号住居址（南から）

図版31　38－12号住居址（西から）



図版32　38－13号住居址（南から）

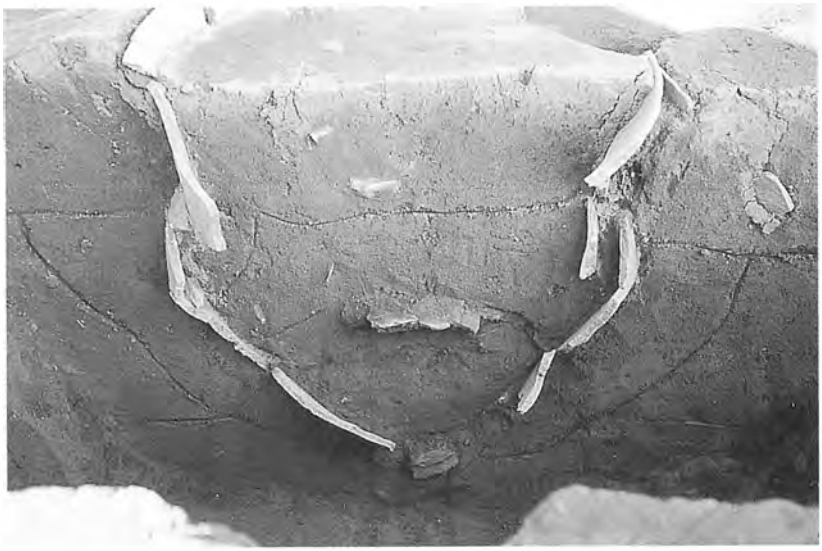
図版33　38－14号住居址（東から）



図版34　38－16号住居址（北から）

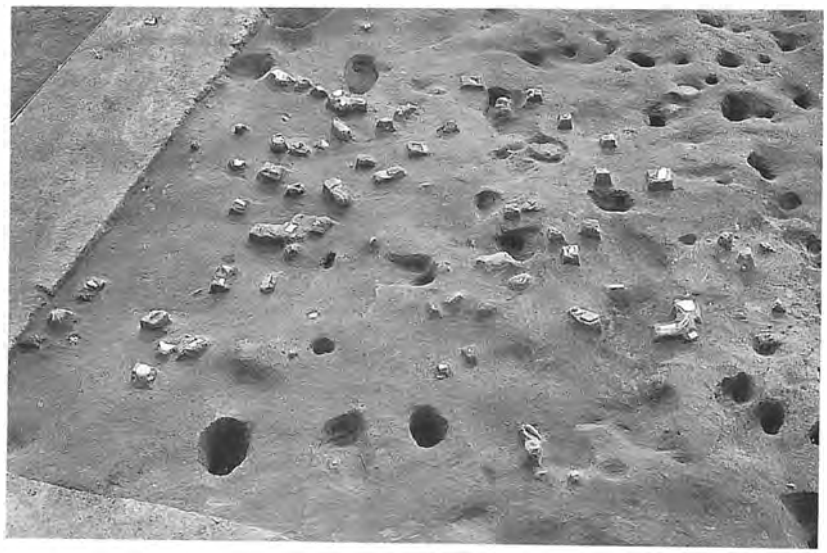
図版35　39－01号住居址（北から）

図版36　39－02号住居址（東から）



図版40　39－12号埋設土器（南から）

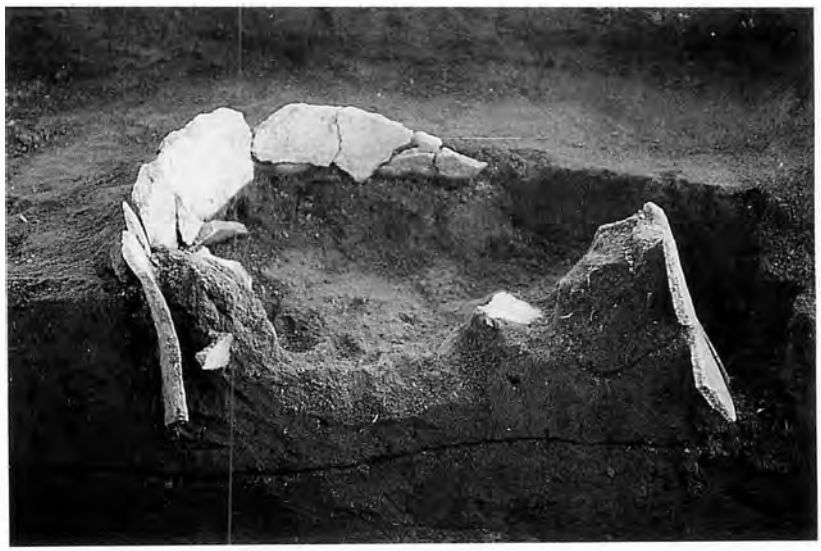
図版41　39－08号円形周溝（東から）



図版42　40－01号住居址（北から）

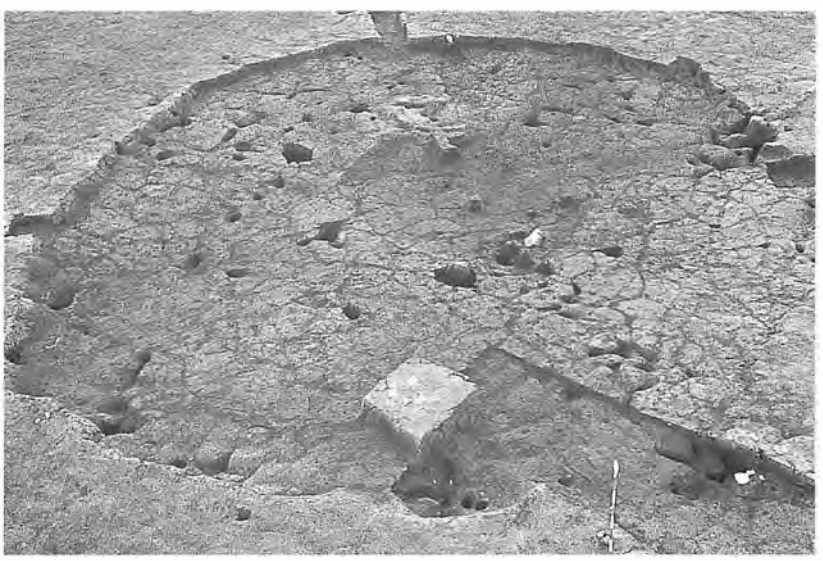
図版37　39－06号住居址（東から）

図版38　39－23号住居址（東から）



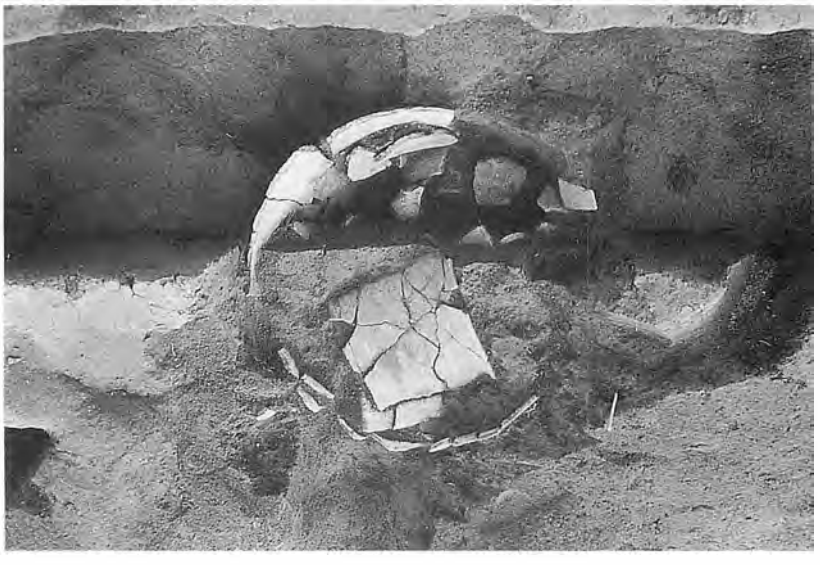
図版39　39－09号埋設土器（北から）

図版43　40－03号埋設土器（東から）



図版44　41－03号住居址（北から）

図版45　41－04号住居址（北から）



図版46　41－02号埋設土器（南から）

図版47　41－05号埋設土器（北東から）

図版48　41－06号埋設土器（南から）

図版49　42－05号住居址（南から）

図版50　42－06号住居址（東から）

図版51　42－08号住居址（南から）

図版52　42－12～14号住居址（西から）

図版53　42－25号住居址（北から）

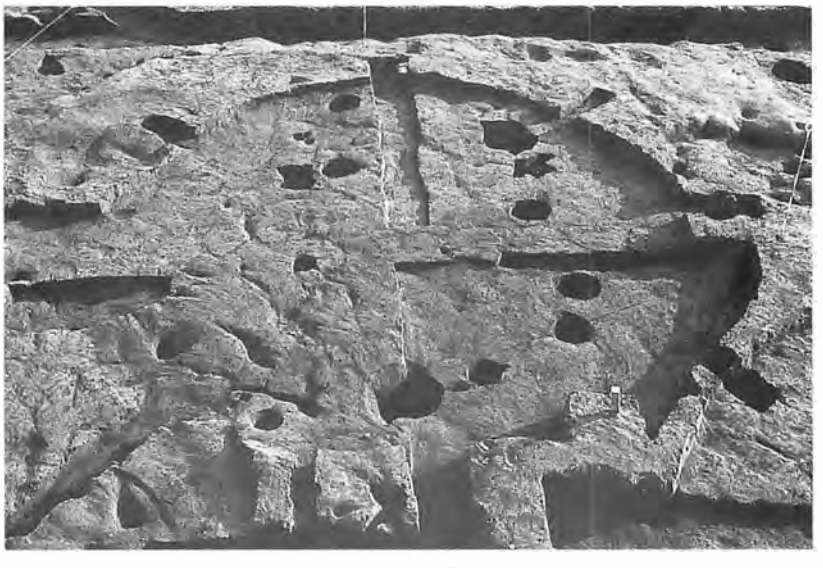
図版54　42－27号住居址（北から）

図版55　42－28号住居址（南から）

図版56　42－30・35号住居址（東から）

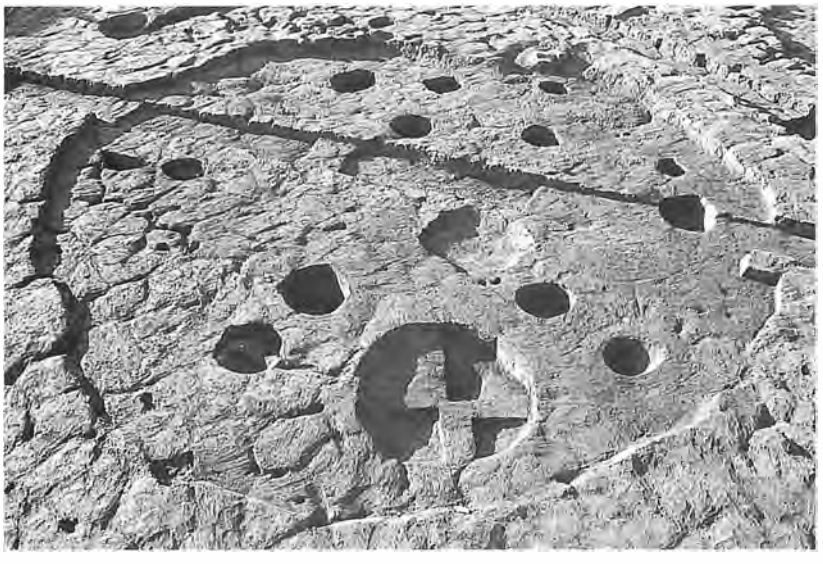
図版57　42－31号住居址（東から）

図版58　42－32号住居址（北から）

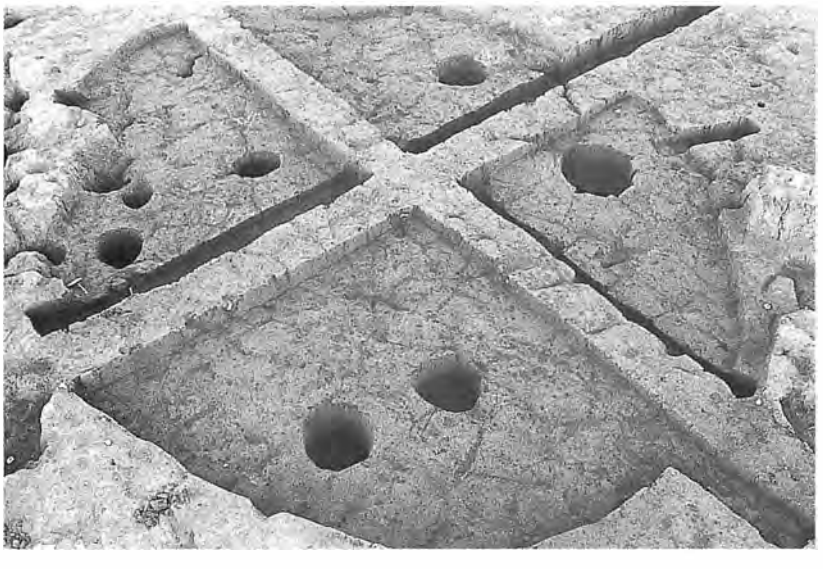


図版59　42－38号住居址（北から）

図版60　42－42号住居址（東から）



図版61　42－51号住居址（東から）

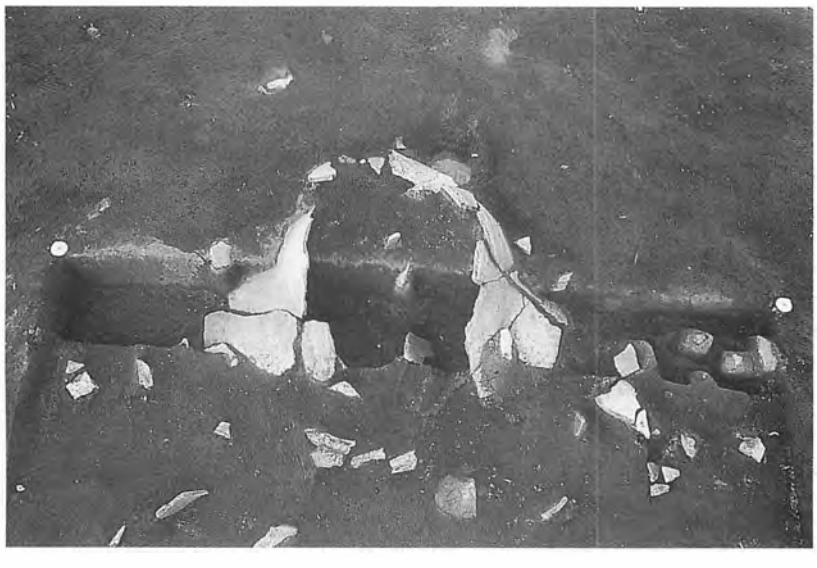


図版62　42－54号住居址（西から）

図版63　42－01号埋設土器（南から）

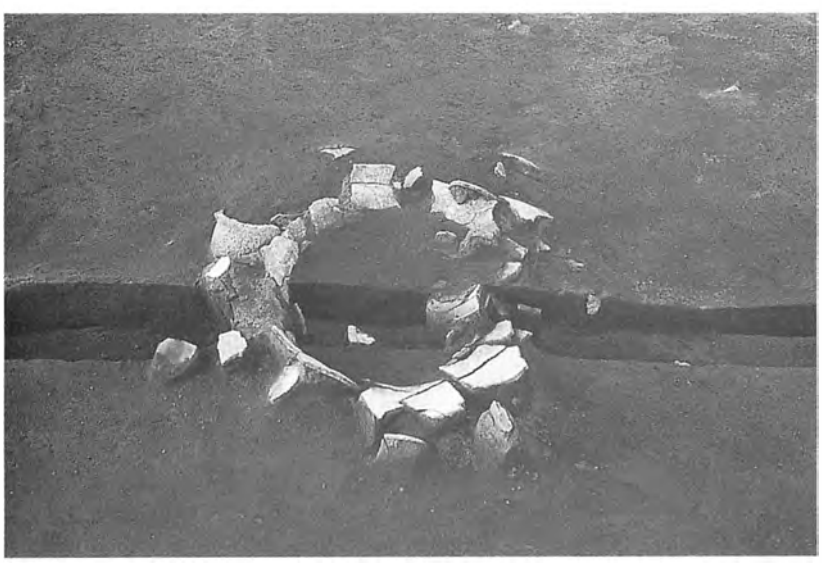
図版64　42－02号埋設土器（北から）

図版65　42－03号埋設土器（東から）

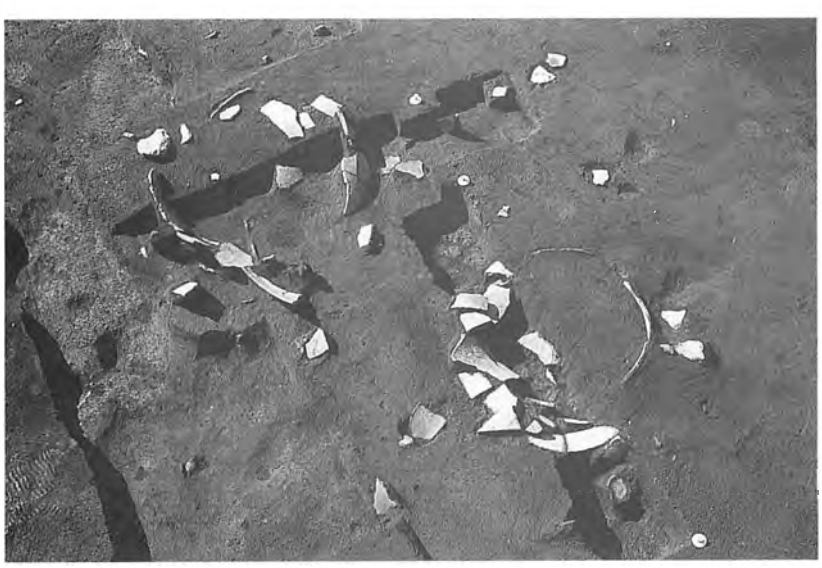


図版66　42－04号埋設土器（南から）

図版67　42－16号埋設土器掘り方（南から）



図版68　42－17号埋設土器（南から）

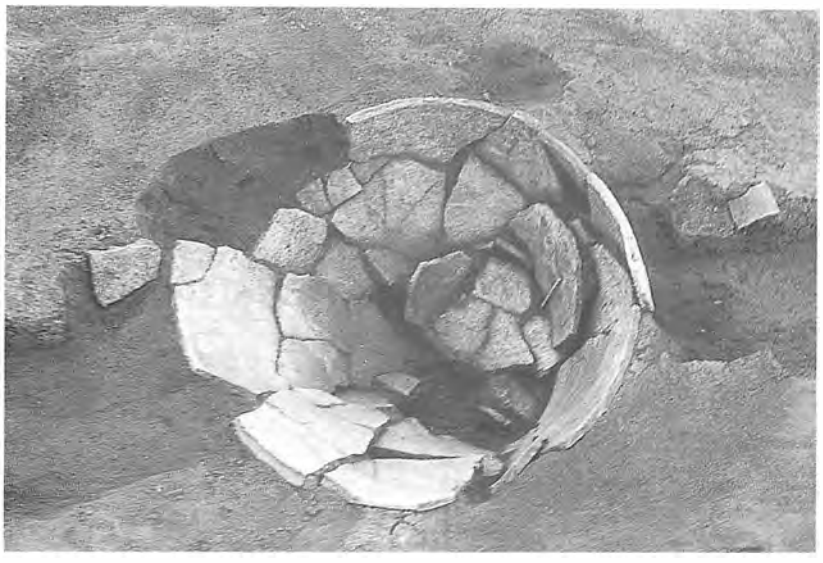


図版69　42－18・19号埋設土器（東から）

図版70　42－20号埋設土器（西から）

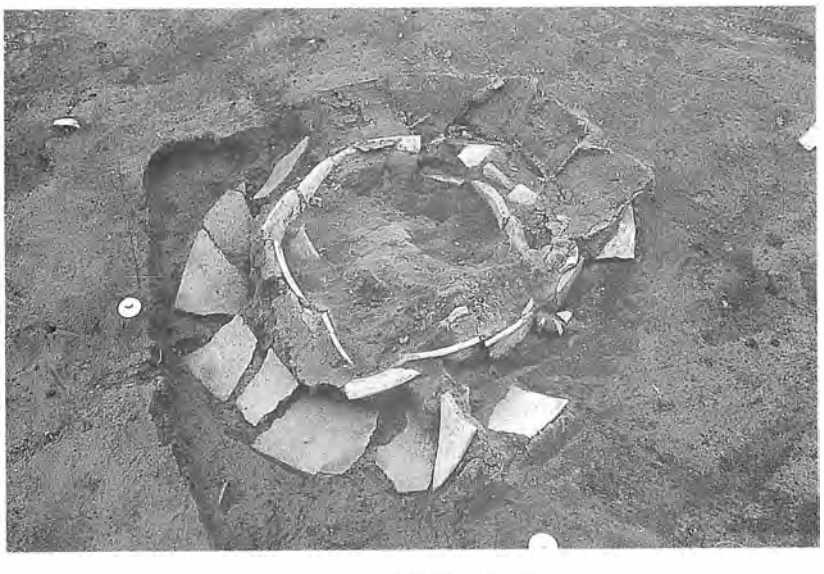
図版71　42－21号埋設土器（西から）

図版72　42－22号埋設土器（西から）



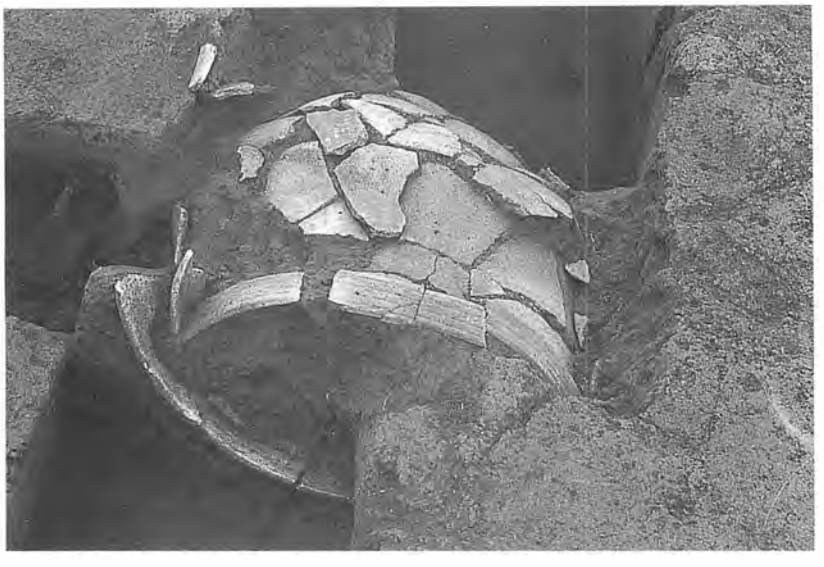
図版73　42－26号埋設土器（西から）

図版74　42－29号埋設土器（南から）



図版75　42－33号埋設土器（北から）

図版76　42－34号埋設土器（南から）



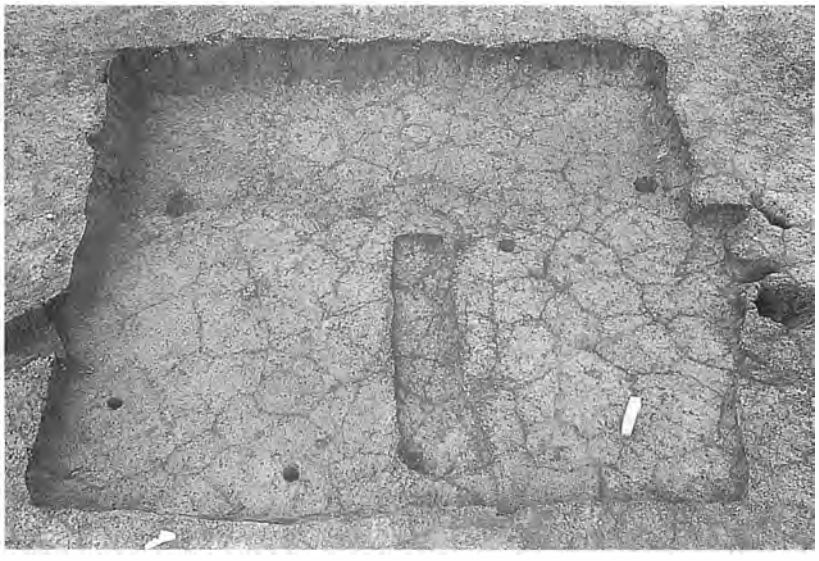
図版77　42－43号埋設土器（東から）

図版78　42－57号埋設土器（東から）

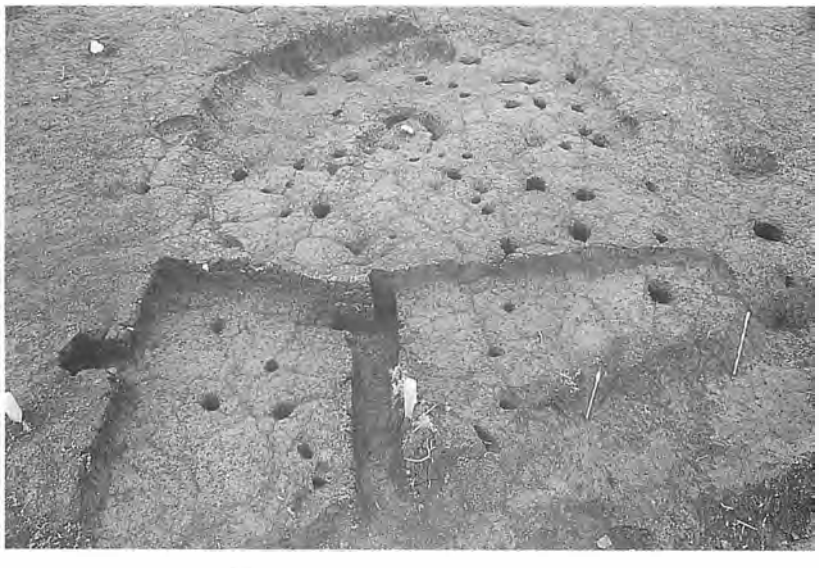
図版79　42－07号土壙（南から）

図版80　42－47号円形周溝（南から）

図版81　45－05号住居址（南から）



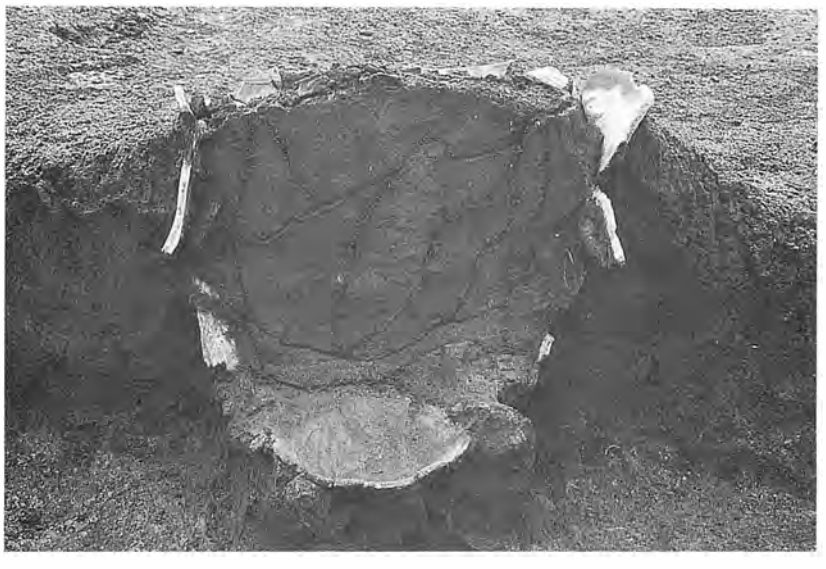
図版82　45－07号住居址（南から）



図版83　45－09・10号住居址（南から）

図版84　45－13号住居址（南から）

図版85　45－13号埋設土器（西から）



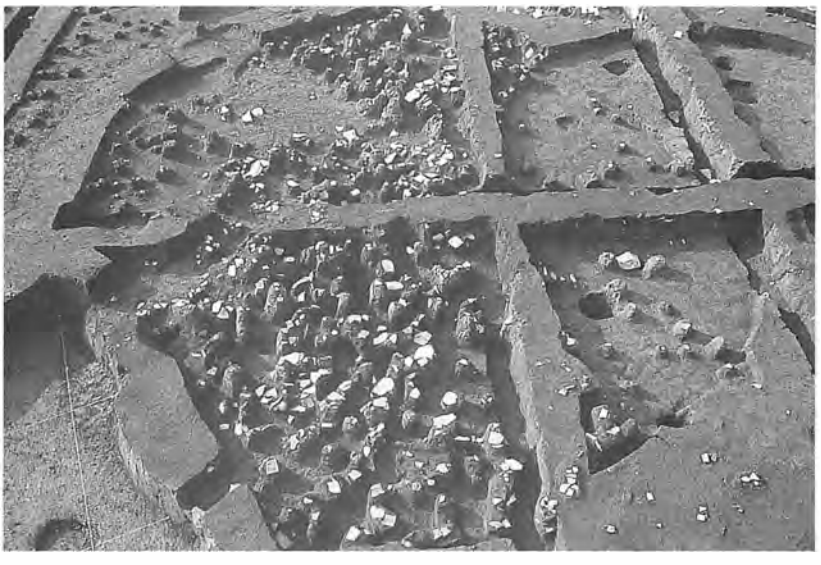
図版86　45－14号埋設土器（西から）

図版87　46－02・03号住居址（東から）

図版88　46－04号住居址（東から）

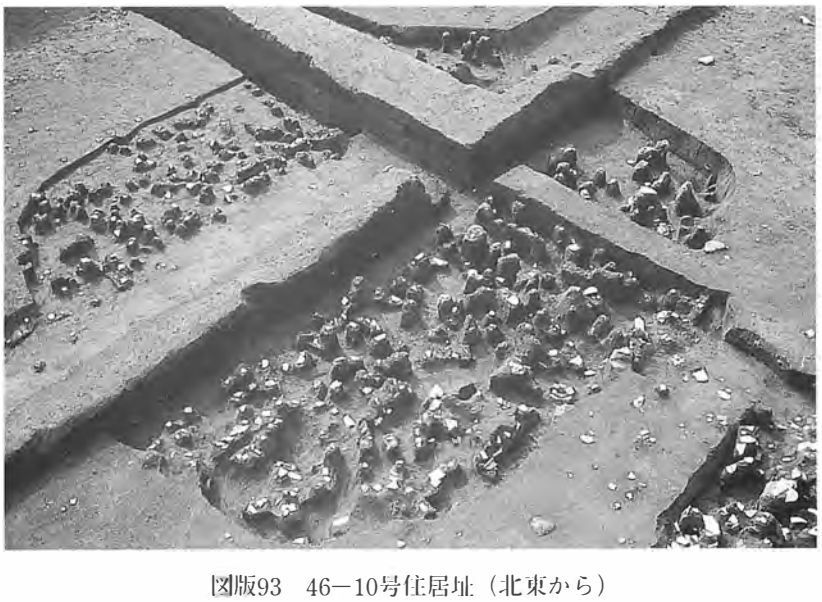
図版89　46－06号住居址（南から）

図版90　46－07号住居址（南東から）



図版91　46－08号住居址（東から）

図版92　46－09号住居址（北から）



図版93　46－10号住居址（北東から）

図版94　46－11～13号住居址（南から）

図版95　46－18号住居址（南から）

図版96　46－19号住居址（南東から）

図版97　46－20号住居址（南から）

図版98　46－04号埋設土器（上から）

図版99　46－05号埋設土器（上から）

図版100　46－06号埋設土器（東から）

図版101　46－01号円形周溝（西から）

図版102　47－01・02号住居址（南西から）

図版103　49－05号住居址（南から）

図版104　49－67号住居址（南から）

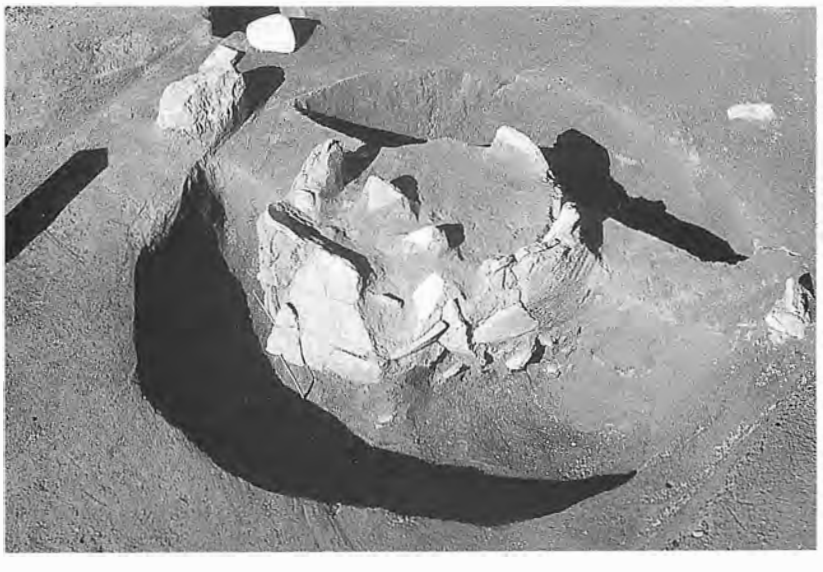
図版105　49－68・69号住居址（南から）

図版106　49－81号住居址（南から）

図版107　49－77・82・83号住居址（南から）

図版108　49－99号住居址（南から）

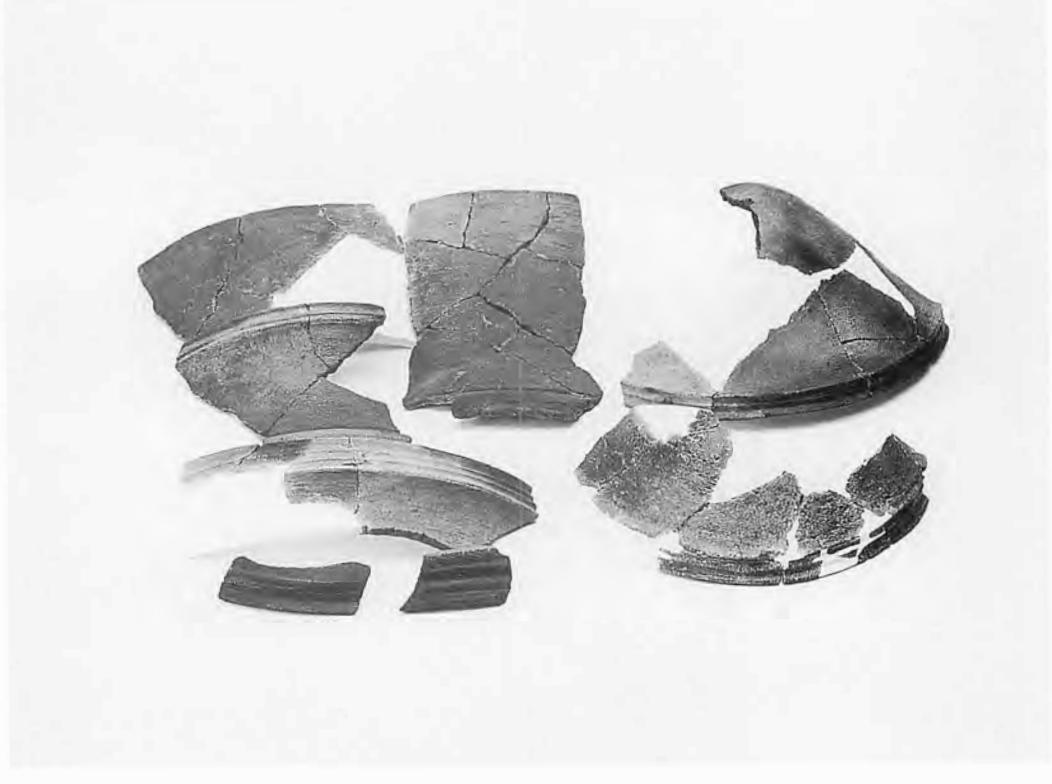
図版109　49－52号埋設土器（東から）



図版110　49－84号埋設土器（南西から）

図版111　49－66号円形周溝（南東から）

図版112　15－04号住居址出土遺物 1



図版113　15－04号住居址出土遺物 2

図版114　30－03号住居址出土遺物１

図版115　30－03号住居址出土遺物２

図版116　36－05号住居址出土遺物１

図版117　36－05号住居址出土遺物２

図版118　36－05号住居址出土遺物３

図版119　38－02号住居址出土遺物

図版120　38－16号住居址出土遺物

図版121　39－01号住居址出土遺物１

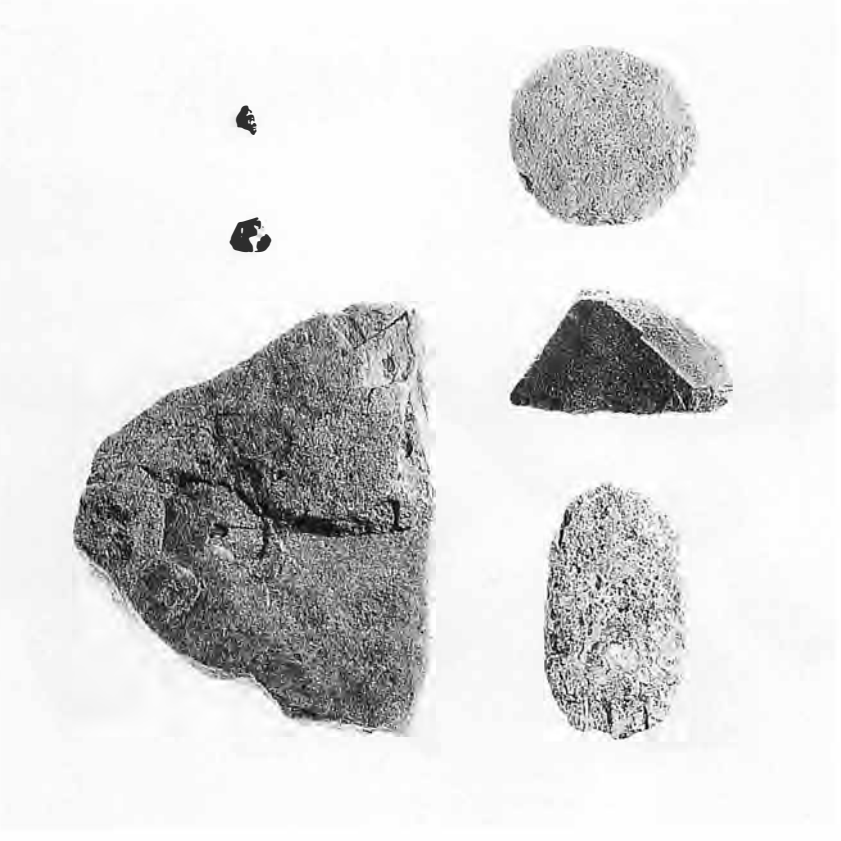
図版122　39－01号住居址出土遺物２

図版123　39－01号住居址出土遺物３

図版124　41－03号住居址出土遺物 1

図版125　41－03号住居址出土遺物 2

図版126　41－03号住居址出土遺物３

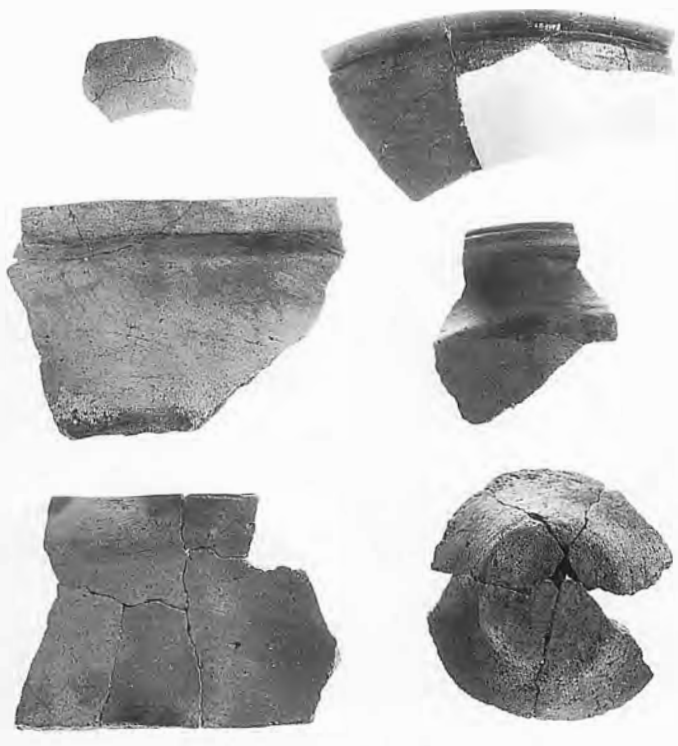


図版127　41－03号住居址出土遺物４

図版128　42－08号住居址出土遺物 1

図版129　42－08号住居址出土遺物 2

図版130　42－32号住居址出土遺物



図版131　45－13号住居址出土遺物 1

図版132　45－13号住居址出土遺物２

図版133　46－12号住居址出土遺物

図版134　46－19号住居址出土遺物 1

図版135　46－19号住居址出土遺物 2

図版136　46－19号住居址出土遺物３

図版137　49－67号住居址出土遺物

図版138　10－01号埋設土器出土遺物

図版139　39－09号埋設土器出土遺物

図版140　39－12号埋設土器出土遺物

図版141　40－03号埋設土器出土遺物

図版142　41－02号埋設土器出土遺物

図版143　41－05号埋設土器出土遺物

図版144　41－06号埋設土器出土遺物

図版145　42－01号埋設土器出土遺物

図版146　42－02号埋設土器出土遺物

図版147　42－03号埋設土器出土遺物

図版148　42－04号埋設土器出土遺物

図版149　42－16号埋設土器出土遺物

図版150　42－17号埋設土器出土遺物

図版151　42－18号埋設土器出土遺物

図版152　42－19号埋設土器出土遺物

図版153　42－20号埋設土器出土遺物

図版154　42－21号埋設土器出土遺物

図版155　42－22号埋設土器出土遺物

図版156　42－26号埋設土器出土遺物

図版157　42－29号埋設土器出土遺物

図版158　42－33号埋設土器出土遺物

図版159　42－34号埋設土器出土遺物

図版160　42－43号埋設土器出土遺物

図版161　45－13号埋設土器出土遺物

図版162　45－14号埋設土器出土遺物

図版163　46－04号埋設土器出土遺物

図版164　46－05号埋設土器出土遺物

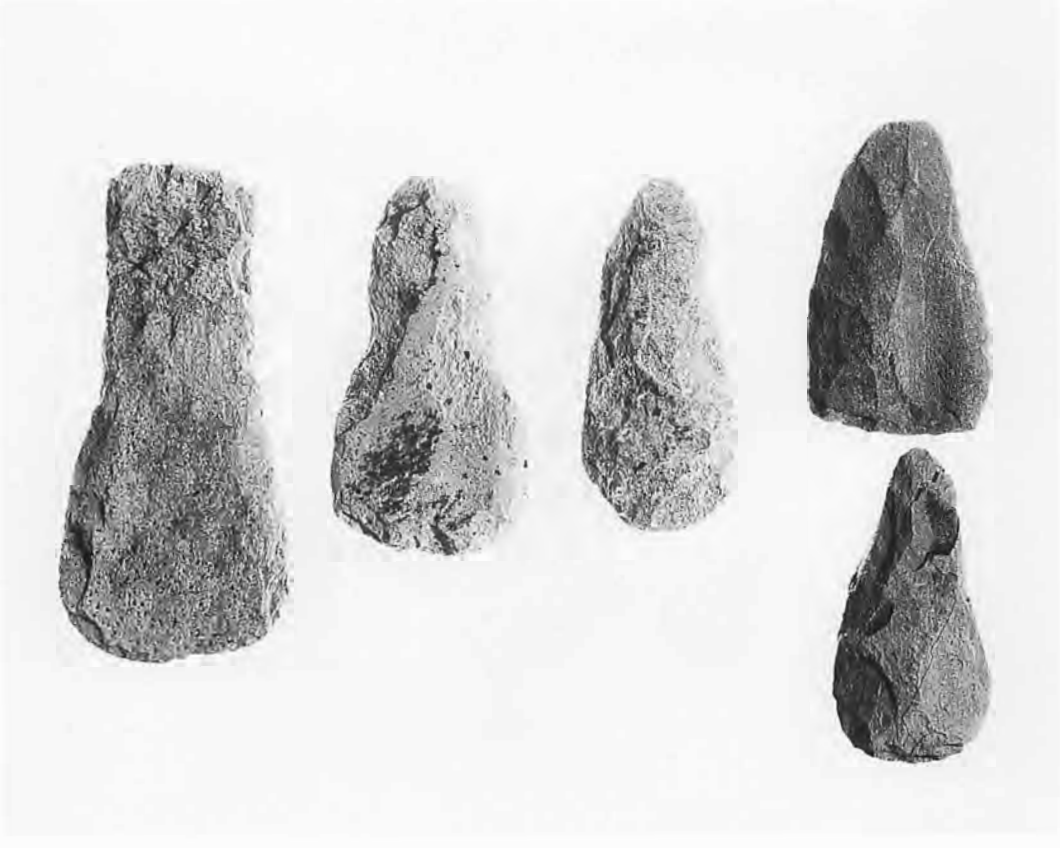
図版165　46－06号埋設土器出土遺物

図版166　49－52号埋設土器出土遺物

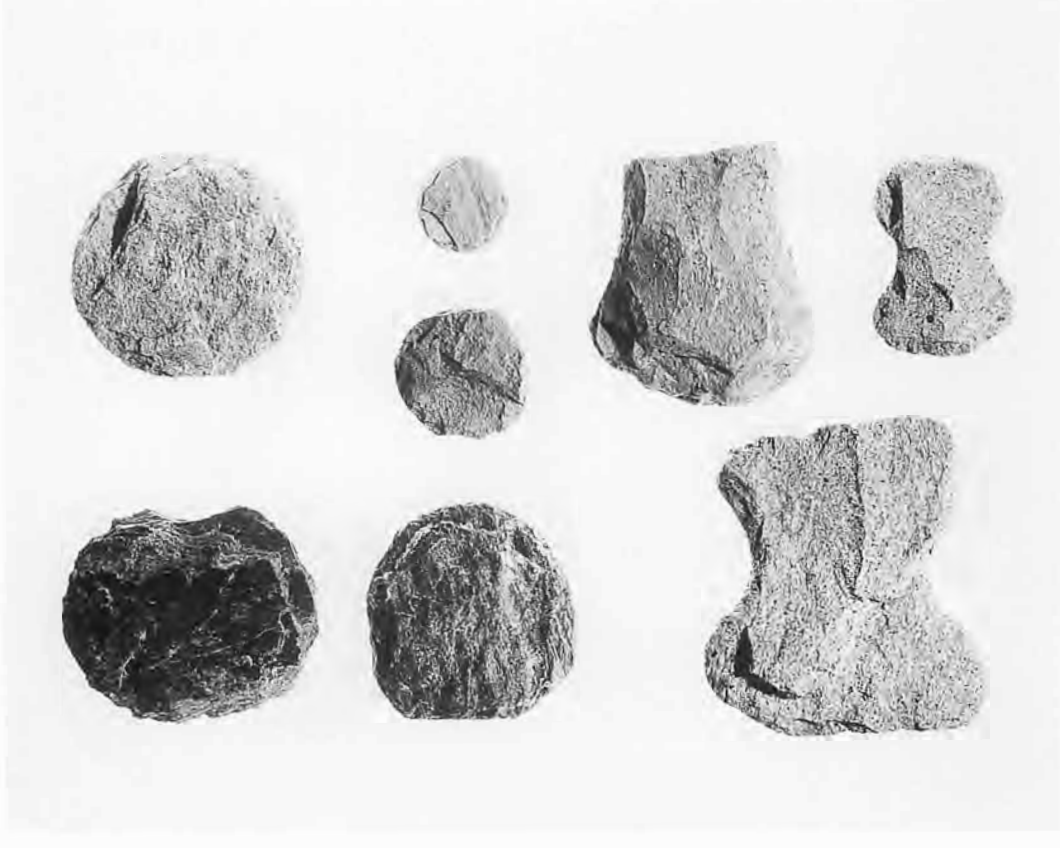
図版167　49－84号埋設土器出土遺物

図版168　包含層出土遺物（注口土器）

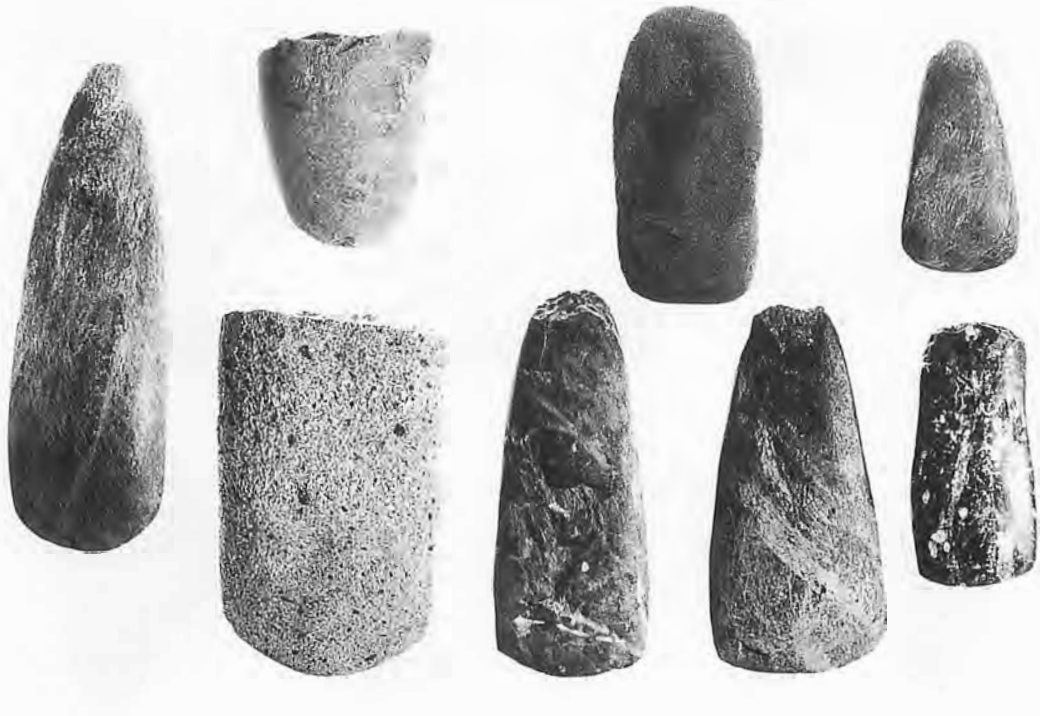
図版169　包含層出土遺物（打製石斧１）



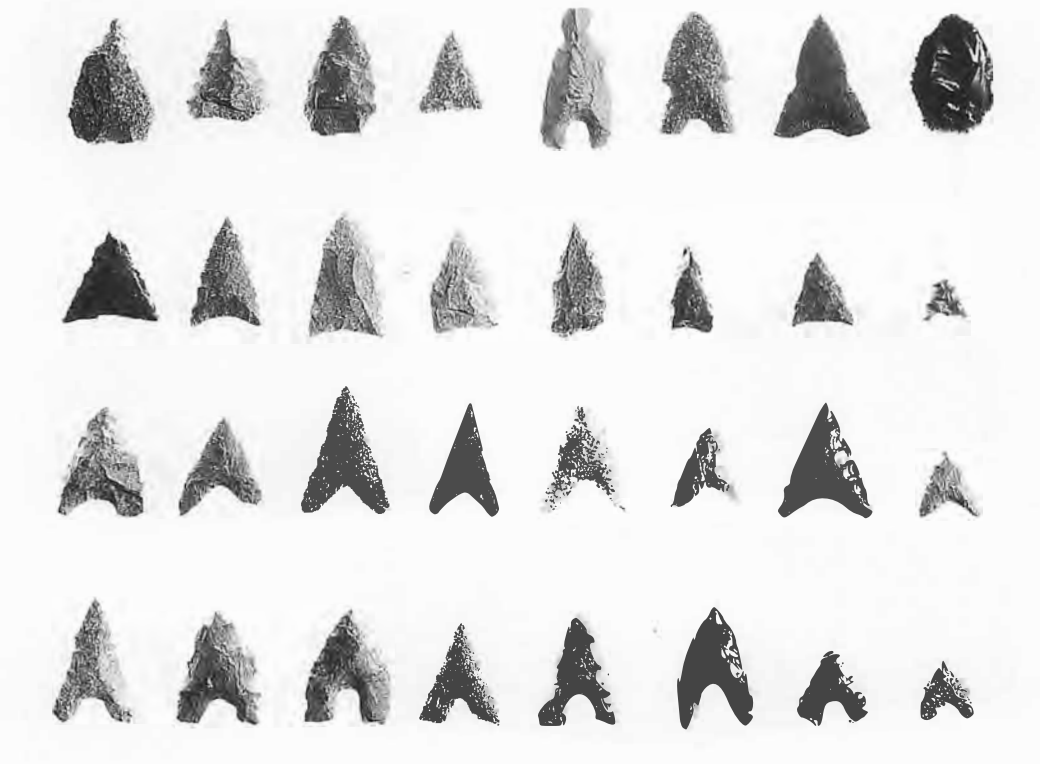
図版170　包含層出土遺物（打製石斧２）



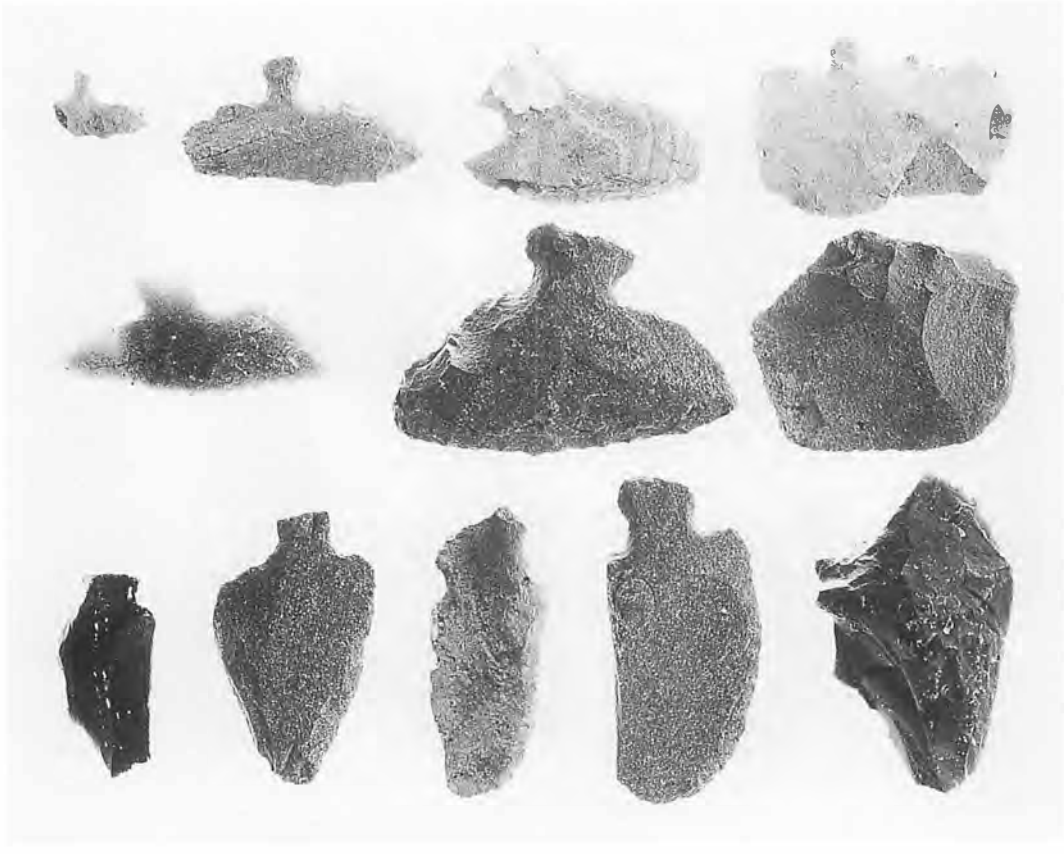
図版171　包含層出土遺物（打製石斧３）



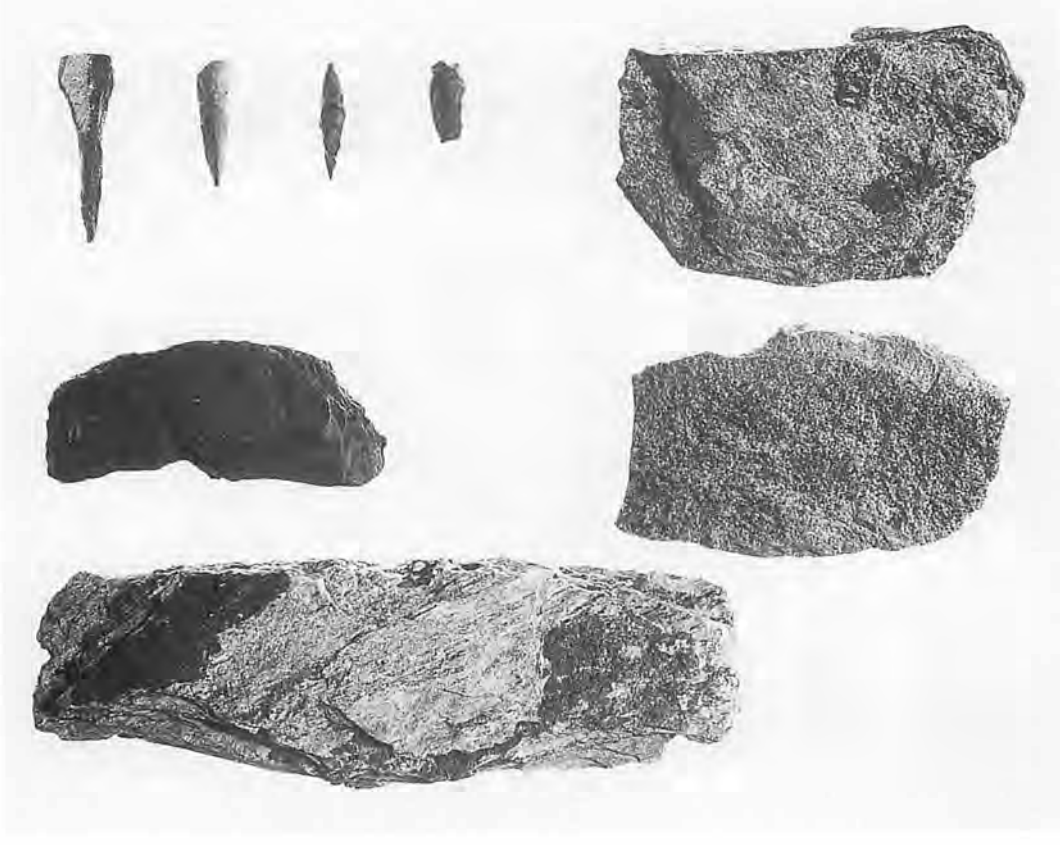
図版172　包含層出土遺物（磨製石斧）



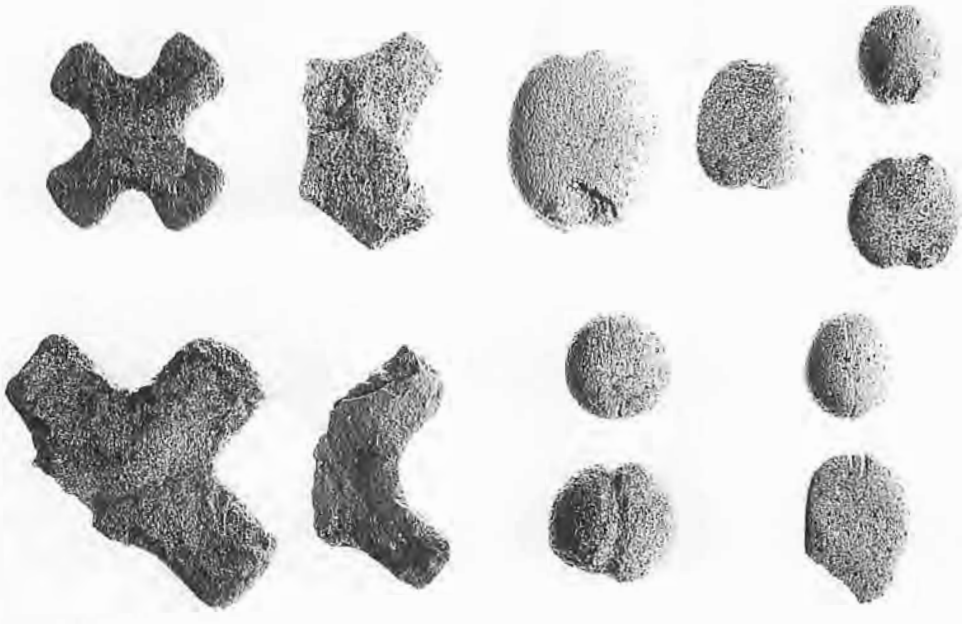
図版173　包含層出土遺物（石鏃）



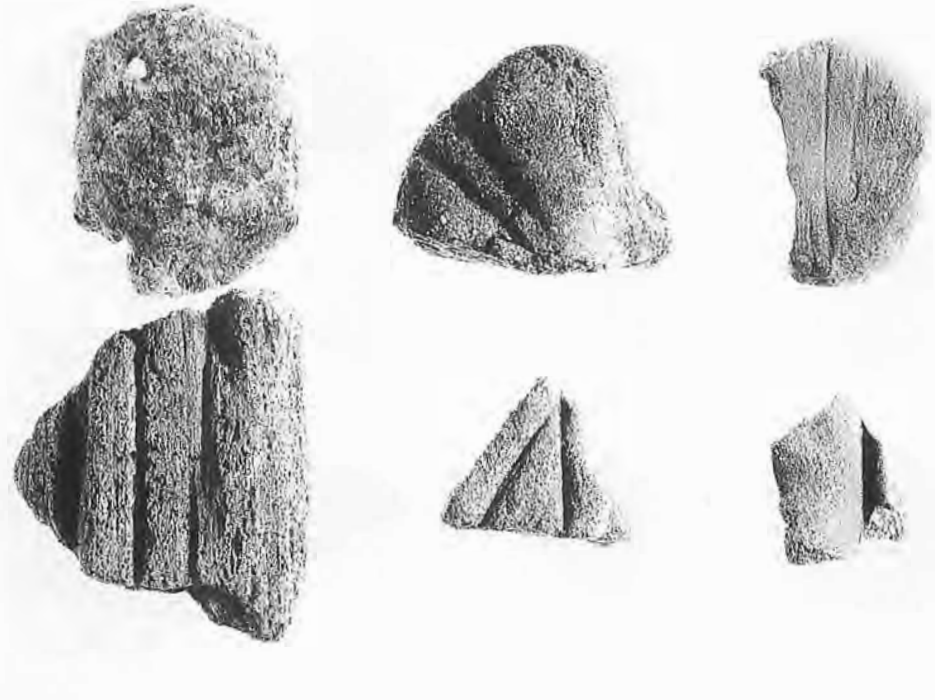
図版174　包含層出土遺物（石匙・スクレイパー）



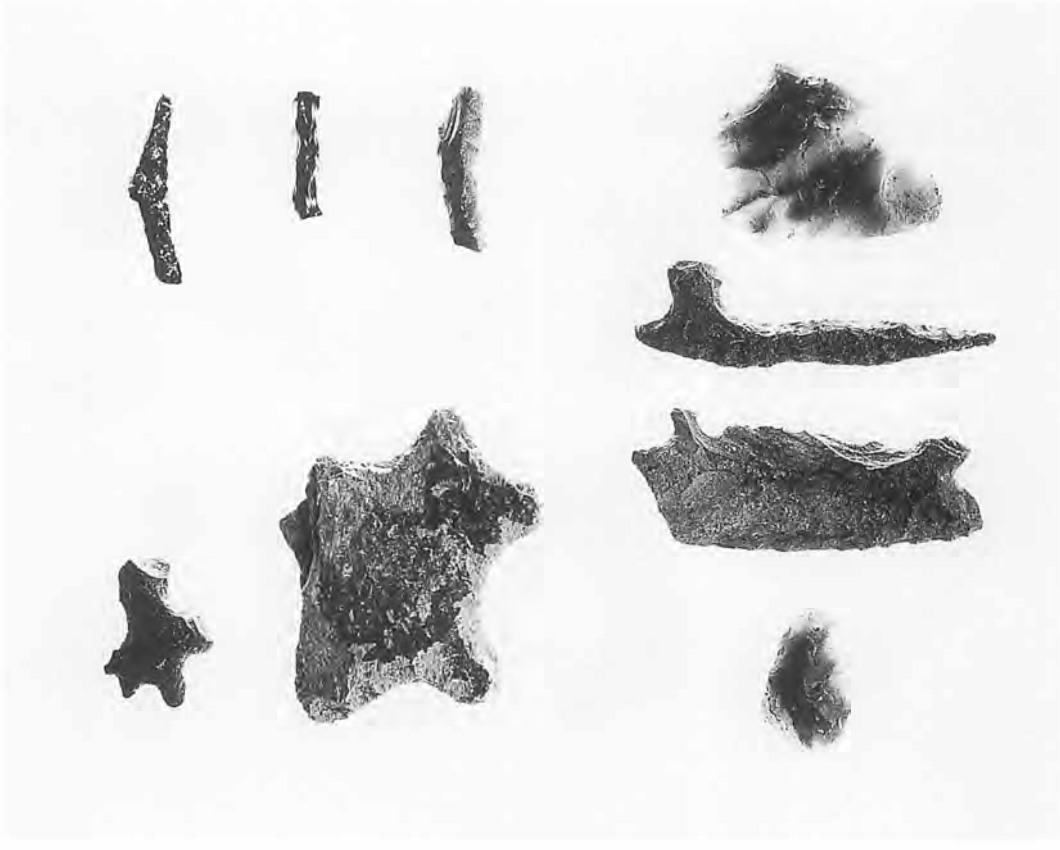
図版175　包含層出土遺物（石錐・穂摘具・石鎌）



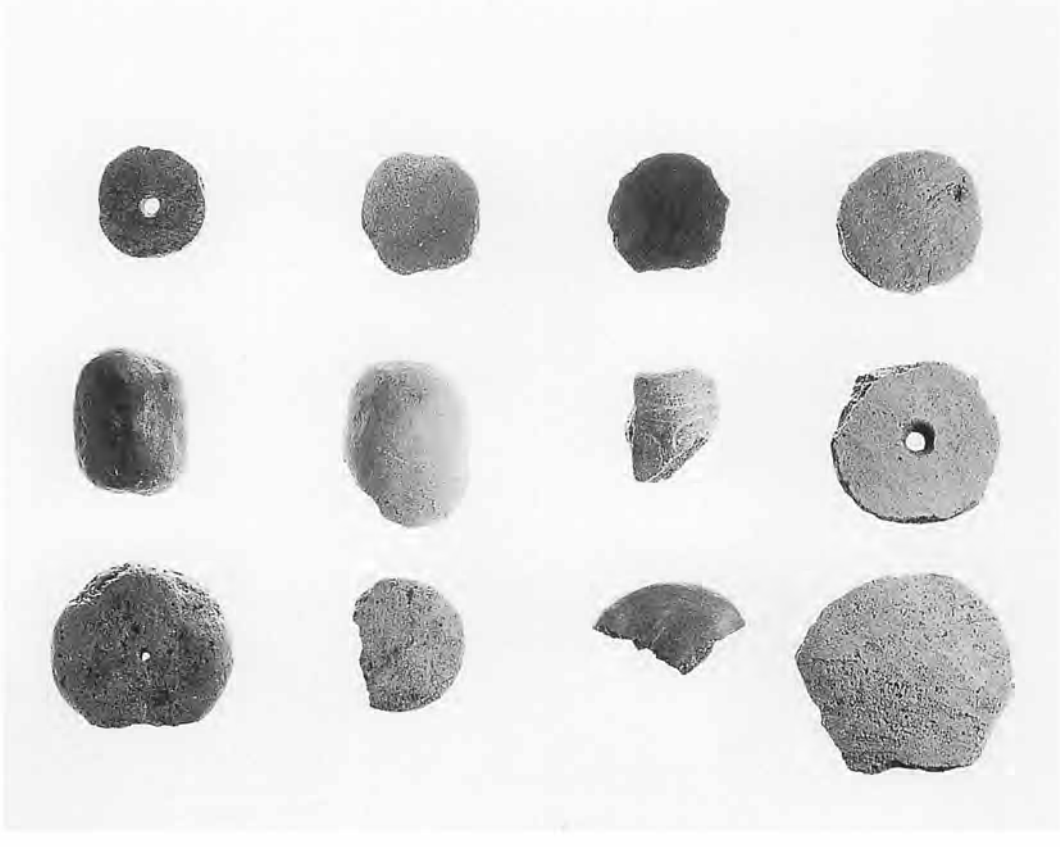
図版176　包含層出土遺物（十字形石器・石錘）



図版177　包含層出土遺物（砥石・軽石）

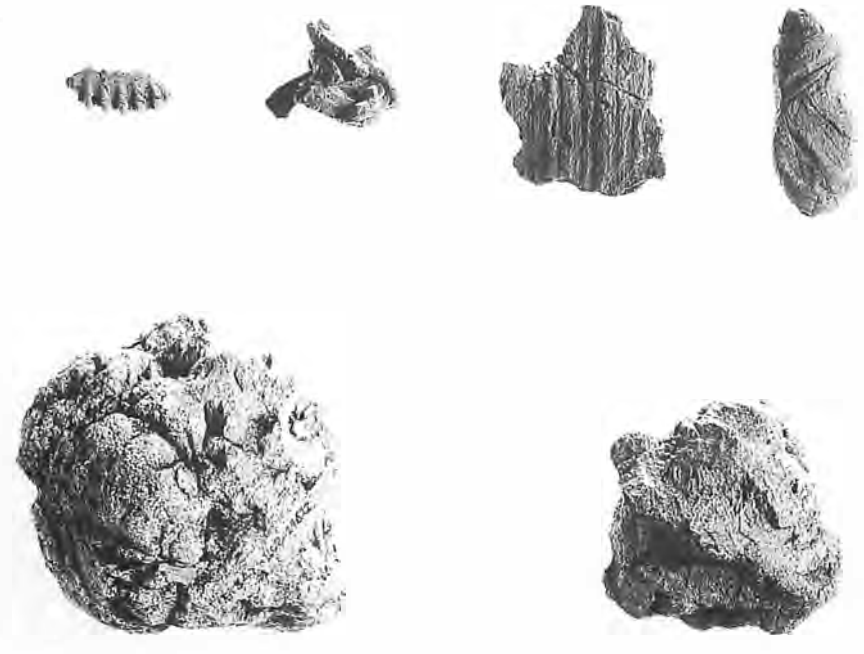


図版178　包含層出土遺物（異形石器）



図版179　包含層出土遺物（土製品１）

図版180　包含層出土遺物（土製品２）



図版181　包含層出土遺物（焼成粘土塊）

あとがき

平成 6 年度に調査が始まってはや 7 年が過ぎ、ようやく最後の報告書刊行を迎えることができました。思い起こせば日々苦難の連続でした。最大15人の調査員を擁したこともありましたが、結局残ったのはわずか 1 人であり、14人分の責任を背負っての整理作業となりました。各担当者の調査方法や認識の相違から、整理作業は思うようにはかどらず、時には衝突することもありました。しかし意見の違いはあれど、同じ遺跡を調査した者同士、最後は報告書刊行に向け、協力して取り組んでいきました。そしてついに整理作業を完結させることができました。これもひとえに、今まで石の本遺跡群に関わった調査員の方々のご協力があればこそです。不勉強な点も多々あり、皆様のご期待に必ずしも沿ったものではないかもしれませんが、刊行したことをもってご容赦いただければ幸いです。またこの場を借りて厚く御礼申し上げます。

毎年、新聞やテレビを賑わす考古学的な発見が相次いで報じられていますが、その一方で多くの遺跡が現場の露と消えています。調査数が増えればそれだけ類例も増え、調査・研究にとってプラスとなることもあります。しかし一つの発見は、一つの遺跡が破壊されていることでもあり、文化財保護の立場に立つ者として手放しで喜んでばかりはいられません。また発掘調査が終了しても、十分な整理作業が行なわれないことも多く、掘りっぱなしで終わることも問題です。見栄えの良い「お宝」ばかりが重宝され、それ以外の文化財がなおざりにされるようなことは、文化財保護の精神に反すると言えます。破壊された遺跡は二度と元に戻りません。発掘調査は整理作業の完了を持って初めて完結したものになる、ということを念頭に置き、日々の文化財保護行政に携わっていくことが大切であり、それが消えゆく遺跡（文化財）に対するせめてもの償いだと考えています。

石の本遺跡群の報告書は、整理作業の都合上、計 5 冊に分かれています。それぞれの報告書は、1冊毎で一応完結していますが、 5 冊揃って初めて石の本遺跡群全体の様相が明らかになります。基本的にその遺跡の様相を有機的に記録し、報告しているのは発掘調査報告書のみだと考えています。 5 冊揃えて石の本遺跡群を正しく理解していただくことを願ってやみません。

最後になりましたが、調査時から多くの作業員の皆様に大変お世話になりました。既刊の「石の本遺跡群Ⅰ～Ⅳ」にそのお名前を記しているので、本書では敢えて掲載しませんが改めて御礼申し上げます。そして、今後も発掘調査や整理作業を通して、埋蔵文化財の保護にご協力頂きますようお願いします。

熊本県文化財調査報告　第２０５集

石の本遺跡群Ⅴ

第54回国民体育大会秋季主会場整備事業に伴う

埋蔵文化財発掘調査報告書

発行年月日　平成14年３月31日

発　行　熊本県教育委員会

〒862－0950 熊本市水前寺６丁目18番１号

印　刷　中央印刷紙工株式会社

〒860－0053 熊本市田崎２丁目５番38号

13 教 教文
② 001

この電子書籍は、熊本県文化財調査報告第 205 集を底本として作成しました。閲覧を目的としていますので、精確な図版などが必要な場合には底本から引用してください。

底本は、熊本県内の市町村教育委員会と図書館、都道府県の教育委員会と図書館、考古学を教える大学、国立国会図書館などにあります。所蔵状況や利用方法は、直接、各施設にお問い合わせください。

書名：石の本遺跡群
発行：熊本県教育委員会
〒862-8609　熊本市中央区水前寺 6 丁目 18 番 1 号
電話：　096-383-1111
URL：http://www.pref.kumamoto.jp/
電子書籍制作日：2015 年 12 月 24 日

なお、熊本県文化財保護協会が底本を頒布している場合があります。詳しくは熊本県文化財保護協会にお問い合わせください。

熊本県文化財保護協会
URL：http://www.kumamoto-bunho.jp/